



第550話 カミカゼ

イラクで既成事実をこしらえた日本は、調子に乗ってそれからの国際紛争に堂々と自衛隊を出兵させることにした。

初めのうちは、アメリカの後方援助とか、治安維持とか云っていたものが、大統領にチキン扱いの侮辱を受けると、発奮してとうとう戦車や自走砲などの火器をも持ち込むようになっていた。いまや、英国と並んで、アメリカの手下になりきって、戦争行為に加担することになった。かつての太平洋戦争を知っている相手国の軍隊の幹部たちは、アメリカよりも日本を恐れていた。ヨーロッパ戦線で昔、スイスの傭兵が恐れられていたのと同じで、いまは自衛隊も金で雇われたアメリカの傭兵と同じだった。

装備については、戦車の戦闘能力も、自動車を見れば判る通り、かなり高度の能力を備えているのは、みんな知っていた。コンピュータで操作するハイテク技術も、列国に比べても大変なものがあり、いままで、他国が経験したことのない兵器の数々に、その性能を研究していない相手国は戦々恐々としていた。

アメリカの指導を受けて、物資や武器の供与を受けてきた国が、いまはアメリカと闘っている。それは、すでに武器を使いこなし、相手と同じ武器でやってくることになんら怖さはないが、日本製というのは初めてだった。

日本政府も、よしんば、その武器の性能が実戦で世界に認められれば、新たな産業として輸出ができる。政界も財界もいまや、戦争をひとつの売り込みのためのショーにしようとしていた。武器弾薬が一番いい金になるのは、昔からそうになっている。戦場を死の商人としてデモンストラーションの場にしようとしていた。それが、日本の不況を脱却し、財政建て直しにもっとも最短距離になるだろうと政府は試算していた。

昔の兵器のように、数撃ちゃ当たるという無駄なことは、21世紀ではない。一発で相手を倒せるかなり命中精度の高いハイテク武器が次々と開発されていった。

それだけではなかった。相手国の兵隊たちは、アメリカには勇猛果敢に対峙し、攻撃してゆくのに、日本の自衛隊が来ると、すごすごと逃げ出すのだった。カミカゼが吹くというのだろうか。何か、もっと恐ろしい神かがった何かが、人々を恐れさせていた。

アメリカの軍事関係者も、日本の侵攻には目を見張った。実戦経験の全くない自衛隊が、無血で次々に村や町を陥落してゆき、相手国の反撃がまるでない。

不思議に思って、アメリカ軍の幹部たちが、自衛隊の戦略と、その精鋭の部隊を表敬訪問することにした。

アメリカ軍の大型ヘリコプターが、砂漠の中の自衛隊の前線基地へと降り立った。アメリカ軍の司令官や将校たちが、レンジャー部隊と共に、ぞろぞろと本部の大きなテントに入っていった。普通なら、アメリカ軍の頭が訪問するのだ、ささげ銃で、迎えなければならないのに、自衛隊は実に非礼だった。将軍が、テントの中に入ったとき、自衛隊の幹部たちは、昼から暑いのでビールを呑みながら、花札、麻雀、将棋、碁をしていた。

「な、なんということだ。この余裕。まるで戦時体制とは思えない」

将軍は怒りを忘れて呆れていた。

「ああ、将軍、こんなむさくるしいところにおいでですか。まあ、ビールでもやりませんか。

ああ、綺麗どころを呼んできなさい」

ポンポンと手を叩くと、こうしたときのためにゲイシャを連れてきているのだ。

「あーら、ショウさん。待っていたのよ」

「ショウさんとは？」不謹慎にもほどがある。わなわなと震えていた。

将軍は、馬鹿な幹部はいるが、戦争に勝つためには強い兵隊がいればいいということかと、今度は、隊員たちのテントを訪問した。そこでも、考えられない光景を目にしていた。全員、ノートパソコンでメールを打っていたり、ゲームボーイで遊んでいたり、マンガを読んでゲタゲタと笑っていたり、エロ本を見て寝ているやつもいた。

「こ、これは、なんということだ。ここは戦場なんだ。いまは戦争をしているのだ。それなのに、この兵隊の質の悪さはなんだ」

見るからに、強い、切れるやつはいそうもなかった。えへらえへら笑っているシマリのない顔、鼻くそをほじくっているやつもいて、なんら緊張感がない。どうして、こんなやつらが敵を殲滅できるのだ。とても考えられないことだった。将軍は、それでも何か隠している強い秘密があるに違いないと、ひとりひとりの隊員に訊いてみた。

なんと、精鋭部隊と思っていたが、英語もろくに話せない。仕方なく、通訳をつけて話していた。

「君は、ジュウドウ何段なのだ」

将軍が訊いた。

「柔道なんかあんな野蛮なことやったことないわ。お茶とお花なら少しね。お裏ですけど」

と、シナを作って女言葉だ。こんな気持ちの悪い男をよくも連れてきたものだ。

「君は、いままで敵を何人殺したことがあるか」

ゲームボーイしているやつに訊いた。

「数えたことないなあ。一面をクリアするのに、インベーダーをすべて倒さなければ、次に進めないからなあ」

訊けば、銃の使い方も知らない。どちらかという、臨時のアルバイトみたいな隊員ばかりだった。真剣さがまるでない。遊びに砂漠に来ているのだ。軍人魂を持っているやつは上も下もひとりもない。それなのに、敵はどうしてこんなアホな連中を恐れるのだ。将軍も幹部もその理由が判らなかつた。将軍は、こんなくだらない連中なら、百人でも、うちのレンジャー部隊なら一人で相手をしてもらっても負けないだろうと思った。

「さあ、そろそろ、侵攻しようかい」

自衛隊の司令官が、みんなに伝達した。将軍は、その侵攻の様子を窺うことにした。確かに、武器は日本製で最高のものだろうが、アメリカも性能では負けていない。敵が恐れるのは、何か別にあるのだろう。将軍は自衛隊の後ろから付いていった。

相手国の機関銃部隊がちらちらと見えたが、日の丸を見ると、みんな悲鳴を上げて逃げてゆく

。それが不思議だった。彼らはアメリカと思えば撃ってくるのに、日本には手も出せない。

将軍は、戦車の前方や後方にやたらベタベタと付いているあるマークを見つけた。そのマークは装甲車にも付いている。見たことのないマークだった。

「あれは、何を意味するマークなのかね」将軍は司令官に訊いた。

「あれですか、日本では若葉マークといって、まあ初心者マークですな。なにせ、実戦経験がまるでない。大砲も撃ったことがない。弾だって、あなた、どこへ飛んでゆくか判らないときている」

「……」

第551話 行先のない切符

HIROSHIMA38℃

何も、こんな真夏に研修旅行なんかしなくても、と、わたしは参加したことに後悔しはじめていた。

新幹線が広島駅のホームに滑り込む。八月の広島を訪れるのは初めてであった。よりによって、その日は三十八度の猛暑。

駅前に降り立つと、照り返しでとても眩しく、サングラスが必要なくらいだった。何か、大阪の雑踏のようなごちゃごちゃとした店がひしめきあって、野菜や果物、お土産などを売っている。人も車も多く、ここはすでに都会だった。人口も百万になるだろう。

黙って立っていても、汗がどくどくとパッキンの壊れた水道のように流れた。こんなときに、背広とネクタイだ。狂気のさたに思えてくる。

わたしは、一泊の予定で業界の研修に参加していた。さっそく、親しいNさんのスーパーマーケットを訪ねる。スーパーの他に、レストランや洋菓子店をやっている経営者だった。逢うのは一年、いや二年ぶりか。

繁華街のいい場所にスーパーはあった。東京の紀伊国屋のような、輸入食品を主に扱う高級店だ。Nさんの母が奥の事務室から出てきた。

「あら、お母さんに似ていやはるわ」と、わたしの顔を見るなり、その人は云った。いろんな人に同じように云われるが、母に似ていると云われるのがわたしは一番嫌だった。Nさんの母とうちの母は商売仲間ということで、交友があった。毎年、中元、歳暮は欠かさない。

「ええ、母がよろしくと云っていました」

六十過ぎくらいの現役で、スーパーを切りまわしている。息子は外出しているという。Nさんとは似ていない母親だ。それはそうだ、本当の親子ではない。

会場のホテルに直行するにはまだ時間がある。わたしは、洒落た店を見ては勉強のつもりで覗いて歩いた。常に、頭の中には広島という知名が、透き通るようなカタカナでヒロシマと意識させられるか、HIROSHIMAと標本のように横文字で書かれた街が脳裡にこびりついていた。

どこを歩いても、死の同心円が意識させられる。歩いている商店街が、爆心地から何キロ離れ

ているのかと、どこかで計算していた。

暑くてたまらないから、カフェレストランに入り、アイスコーヒーを頼んだ。

「レイコー」で通った。ここも関西なのか。大阪に長く住んだわたしは、アイスコーヒーを冷珈と呼ぶ癖がとれない。

わたしは、Nさんのことを思った。Nさんは、原爆孤児だった。ピカドンで、両親、姉妹のすべてを一瞬にして失って、幼少の彼は、いまの叔父に養子として引き取られ、育てられた。それにしても暗さがない。明るく、いい青年に育っていた。わたしとは、気が合う。なんでも云えるのだ。最近は手紙だけだが。

わたしは、ホテルに向う道を間違えて、いつか広場に出ていた。都会の中にだだっ広い空間がある。不思議な感じがした。そこは平和公園だった。わたしはいつか公園の端に立たされていた。遠く、見覚えのあるドームが見えている。それは、嘘のように建っていた。ゆらゆら揺れて見えた。蜃気楼のようだった。あまりの暑さにすべてが陽炎のように形が屈折して見えた。

火が燃えている。わたしは、街の中の空虚な焼け野原と錯覚していた。そのまま、ここだけは時間が止まっている。

Nさんと抱き合って、再会を喜んだ。研修の後の懇親会、そして、二次会へと、親しい仲間十人くらいでNさんのボトルの入っている店だと連れてゆかれた。店には、Nさん専用のカープスのユニフォームが飾ってあった。

「こう見えても、わしはカープスの応援団じゃい」

ここでは絶対にカープスの悪口は云えない。

Nさんは、クラブの中で、法被を着て、鉢巻をすると、広島カープスの応援歌をがなり声で歌いだした。大酒呑みで、ストレートな性格だったが、人のことはよく見ていた。

「こいつは、惚けの木村って申しまして」と、わたしのことをみんなに紹介していた。

わたしは、つくづく考えさせられた。過去を重く引きずる人もいるが、一家全滅して辛うじて生き残った彼には、暗い影は微塵もない。この広島街にしても、夏の光にしても、四十年経ったら新しい世代と、復興した近代的なビルの眩しさの中に悲惨な歴史は薄れてゆくようだ。

Nさんはお道化てみせて、よく騒いだ。彼らが新しい街を作ってゆくのだ。大きな体と、メガネの下のぎょろりと愛嬌のある眼が、マイクを向けて、

「歌えよ、いつもの、ほら、原曲とかいう津軽弁で歌う『津軽海峡冬景色』をさ」

一度、わたしが披露するといたく気に入ったようだ。

「惚けの木村、もう一軒行こう」と、肩を抱いて、真夜中になっても帰さない。

そんな豪快なNさんが亡くなったのは数年前だ。原爆手帖を持っていることは隠していたが、それが死因であったとは聞いていない。

第552話 ラップ

サザン・オールスターズがラップを出した。サザンラップだなんて、という親父ギャグを云っ

ていたのは十年前のことだ。いまはすっかりと若者たちに定着してしまった。トニー谷が、そばん片手に「あんたのお名前なんてえの」と歌っていた四十年前にもラップはあった。何もそれは若者の専売特許なわけでもない。

だが、これから、十年も五十年も残り続けてゆく歌であろうかと、ラップを一時的現象として音楽評論家の吉田は考えていた。ただの言葉の羅列で、呪文のようでもあり、リズムに乗ってはいるが、メロディがない。みんな同じように聞こえる。それを若者たちは、分別して歌えるのだろうか。一過性の歌はなにか時代を反映しているような気がする。

そこで、吉田は仕事柄、若者文化のひとつであるラップについて本を書こうと、調査を開始した。ラップの歌をすべて集めて、リストを作る。そして、歌詞の意味を分析する。次に、若者たちのアンケート、インタビューで、本音を聞く。ただ、格好がいいからと聞いたり歌ったりしているのではないだろう。そこに何かがあるのだ。その何かを探し求めるのがこの本のテーマなのだ。

若者が選ぶオリコンチャートのベストテンに何曲もラップが入っている。リップスライム、キック・ザ・カンクルー、ドラゴンアッシュ…。吉田は、どちらかというところとカントリーや、ジャズが好みなのだが、今回は社会現象としてのラップを追求するために、とことんつきあうつもりで、CDというCDを買いまくった。

男と女のすれちがいを歌うものもあるが、どちらかというところ、世の中を批判している頹廢的な歌が多い。かつて、安保世代の若き吉田が聞いてきたアングラフォークは、放送禁止歌というのもあって、政治家を実名入りで批判したり、ベトナム戦争反対を歌う、反戦歌というのが、若者の主流であった。

それが、どうだろう。いまの若者たちは、イラクの問題でも、法律改正の問題でも、それに反対する歌を歌うわけでもない。学生たちがデモをしたり騒ぐわけでもない。どうしてしまったのだ。

それで、行動で出ないから歌に出た。それがラップだった。

若者たちのラップの多くが、社会に対する愚痴であった。行動で示すほど勇気のない彼らは、ただ、ぐちゃぐちゃと不平を述べていた。

どんなに働いても 給与天引で持ってゆかれて
デイトする金もない ない
だから 貧乏 みんな貧乏 彼女もつukれない
つukれない どうしてくれる おれたちの青春
年金もらえない もらえない
お先真っ暗 真っ暗くらくら
夢も希望もおれたちの辞書にない ない
だから 彼女 旅に行こう
みんなで こんな国捨ててやる
さあ 行こうよ 永住のビザ持って
税金の安い国で 暮らそうよ

吉田がこの歌を聞いたとき、何か嫌な予感がしていた。安保では、政府と真っ向から立ち向かった若者の正義感はいまはない。みんな、どこかで逃げたがっている。

確かに、仕事もない。あっても若者の使い捨て。安い給与でこき使い、ちょっと文句を云えば、「明日から来なくていい。おまえの代わりはいくらでもいる」と来る。

老人たちの食い逃げ国家と云われている。自分たちの老後のツケがすべて若者にかぶさっていた。これからも税金はどんどんと高くなってゆくだろう。そんな目に見えている国にいたところで、これから先は、彼女もつくれない、結婚もできない、マイホームなんか持てない、一生フリーターで時給いくらで下働き、こんな国にいたら殺される。

彼らの歌はそう訴えていた。吉田は、かつて明治維新の頃の事情と似ていることに気がついた。内憂外患に右往左往していた幕府を転覆させたのは若者たちだった。だが、無力な民衆は何をしていたか。ヒステリックになり、ええじゃないかを歌い踊り、ぬけ参りと、突然、奉公中の若者が、店の前で掃除をしていた箒を捨てて、すたすたと伊勢神宮を目指して歩き出す。空からお札が降ってくる。

まだ余力のあるものたちは一揆だ、打ち壊しだ。異常な精神状態にみんなとり憑かれていた。いまの若者たちも、あの当時の民衆と同じで、無常観と、諦観と、ダダと、アナーキーと、そういった放心状態で歌っているのではないか。

吉田の予感は当たった。ある日、コンビニでバイトをしていた若者が、制服を脱いで、突然、ラップを歌い、ステップを踏みながら、ある方角へと歩いてゆく。道路工事をしている若者も、交通整理の旗振りしている若者も、工場で縫製していた女の子も、ハローワークで仕事を探していた若者も、自宅に引き籠もっていた若者も、何かの合図があったように、耳をそばだてると、パスポートを手に、旅行鞆にいろいろ詰めて、親には何も告げないで、ぞろぞろと国道を歩いてゆく若者たちの列に加わった。その若者たちの列は数十キロにも及び、各地から長い列が成田空港を目指して歩いているのだ。

泣きながら、止めようとする親を振り切って、何かに呼び出されでもしたように、一様に歌い踊りながら、何千、何万という若者たちが、日本を捨てて、出国するために国際空港に向かっていくのだ。

もう 誰にも止められない 止められない

おれたちの 逃避行

ここでないどこかへ どこでも ここよりはましさ ましさ

ここにいたら殺される むしり取られて 貯金もできない

ここでないどこかへ さあ行こう

ひとりひとりと飛行機のタラップを踏んでゆく。

第553話 そのようなものである

政治家があまりにも失言が多いから、小島首相はとうとう、政治家のための国語講習会を開催

することにした。講師としては、日本を代表する国語学の権威が名前を並べていた。

議員会館の一室が、講義会場として当てられていた。普通の小学校の授業と変わらない。国語の教科書を配り、プリントを渡し、一から日本語のお勉強である。

「さあ、この字は何と読みますか。はい、橋本君」

黒板に漢字の書いた紙が貼られている。「公約」と書いてあった。

「それは、そのばしのぎと読みます」

すると、土田君が手を挙げた。

「違います。サンプルと読みます」

「おや、英語できましたか。どうしてですか」

「レストランのメニューのサンプルです。実物よりおいしそうで、大きい」

教室から拍手が沸き起こった。先生は頭を抱えていた。（みんな、東大出たりしているが頭がいいんだかどうか）

「じゃ、これは何と読みますか」黒板には「自衛隊」と、書かれている貼り紙。砂田君が挙手した。

「はい、ぐんたいと読みます」

もう、すっかりと開き直っている。

「マニフェストとは何でしょうか」

講師がみんなに質問していた。ざわざわと教室が騒がしくなった。

「フェミニストだって、それはわしのことだな」

ある議員が云った。

「あんたは、愛妻家だからな、いや、美人には親切なんだ。鼻の下が長くなる」

別の議員が茶化した。どうも、横文字に弱い。政策がない人たちに聞くだけ無駄というものだ。

「じゃ、四文字熟語でゆきましようか。これはなんと読みますか」

黒板には、「清廉潔白」という紙が貼られた。政治家の間では、その言葉はすでに死語になっていた。教室ではまたざわざわと声が聞こえた。

「それでは、亀井さん、如何ですか」

「うーん、難しいな。ああ、判った。『そらぞらしい』と読みますかな」

それには先生も苦笑い。当たっているだけ、何も云えない。

「それじゃ、これはどうです」

『賄賂』これは全員、声を揃えて、「わいろ」と得意げに答えた。『遺憾』も『合祀』、『今上天皇』もすらすら云える。どうも、都合の悪い言葉は忘れる傾向にあるようだ。

一般に小学生から国語力が落ちていた。国語が悪いと、算数の応用問題も、理科も社会も悪い。問題の意味が判らない。問題が文章で書かれているから、読解力がなければ、質問の意味が判らない。そんな子どもが増えたという。本を読まなくなったからだ。ちなみに、戦前の尋常小学校の国語の教科書を今の中学生だけでなく、その親に読ませても読めないのだ。学力は戦前よりは進んで、個々の学科では幅広く、かなり科学的に教えられているのだろうが、こと、国語力に関しては、戦前の子どもより落ちる。

子どもたちだけでなく、それは国会議員もかなり落ちていた。本を読まない、読めない国会議員が増えていた。すべて秘書がやってくれるから、だんだんと語学力も落ちてくる。手紙も書けない。昔の政治家のように、歌のひとつでも詠む文才のあるものがいなくなった。その反対に算術には秀でているものが増えた。それも、国家規模での計算は弱い、懐に入る金額なら計算高いときている。

首相も、それには困り果て、失言が失言では済まなくなってきた。そのような大臣を選んだ責任も問われる。それでも、次々によくも失言してくれる。問題の大臣には、なんとかしなくてはと、首相と党の幹事長などが集まって相談していた。

幹事長は、頑固な老人たちにいまさら教育を施しても無駄だということが判った。

「わたしにいい考えがあります。これ以上問題発言をしない方法があります。これからも失言するであろう要注意人物をリストアップしておきました」

首相がリストを見ると、党の半数以上の議員が該当者だ。

「で、どんな方法をやるつもりなんですか」

「実は……」

国会が始まった。そろそろと議員たちが議事堂に入場する。野党の議員たちは、驚いて保守系議員の面々を見ていた。議長も声が出ない。なんということか、問題議員の全員がさるぐつわをはめられていたのだった。

第554話 思い出せないなにかを

いままで、気に留めていた重要なことをすと一んと忘れることがないだろうか。相澤秀生も五十を過ぎたら、忘れっぽくなってきていた。年のせいばかりではなく、いろんな考えなければならぬことが周りに多すぎることと、注意力散漫、気が多いことが、余計に助長する。

その朝も、その重要なことを頭の半分も支配していながら、テレビで臨時ニュースを見てから、すとんと抜けたように忘れてしまっていた。

一臨時ニュースをお報せいたします。フセイン元大統領が、ホワイトハウスの裏庭を清掃している作業員になりすましているところを発見、CIAに逮捕拘留されました。

秀生は、歯ブラシを咥えながら、朝刊を手にしていたところだった。その大きなニュースが飛びこんできたおかげで、テレビに釘付けになっていた。

「す、すごい。とうとう、みつけられたか。灯台もと暗しとは云うがな」

その大きなニュースで、テレビも新聞も、会社へ行っても、一日中、騒いでいるだろう。秀生は、トーストを齧りながらも、テレビから目を離さない。スーツを着て、ネクタイをしめても、頭の中の九十パーセントはニュースのことでいっぱいだった。

地下鉄に乗ったときから、はたと、大事なことをすっかりと忘れていたことに気がついた。だが、思い出したわけではない。何かもっと重大なことを忘れていたのを思い出したのだ。それは、彼の人生にとっても大変重要で、下手をすれば死ぬこともあるような重要な事柄らしか

った。そんな気がすればするほど、秀生は、いてもたってもいられない。なんとか思いだそうと努めた。

会社までの歩道を歩いているときも、会社のビルのエレベーターに乗っているときも、みんな、おはようと声をかけるのに、無視して、そのことばかり考えていた。今日は、とても仕事にはならないような気がした。気にかかると、しつこく思い出すまで何も手につかなくなる性分なのだ。今日中に思い出さなければ、きっと夜中も気になって眠れなくなる。前もそんなことがあって、三日も徹夜したことがある。 デスクに向って、パソコンで注文書を見ている、電話に出て、取引先と話している、相手が、またにしましょうかと、云うほど、ぼんやりしている。

少し頭を冷やしてこいと、上司に云われ、階下の喫茶にゆき、アイスコーヒーを飲んでいても、そのことばかり考えていた。いいところまでゆくのだが、喉から出そうになって、すぐに引っ込んでしまう。あと少しだった。それが何なのか、出てきそうでも出てこない。

いつも、秀生はそんなときは、自分の検索エンジンを使う。頭の中に隠れたデータファイルの文字を探すのに、「あ」から始めてゆく。まるで、辞書のように、あいうえおかきくけことそらんじるように、いろんな単語を出してくる。すると、不思議に、そのうち、どこかの文字列で引っかかってくるのだ。

「き、危機管理、菊の花、棄権、機構……」

秀生の背中をぽんと叩くものがいた。

「よう、どうしたい」

それで、またいいところまで出かかったものが、ごくりと飲み込んでしまった。

「何をするんだよ、ここまで出かかっていたのが、引っ込んだじゃないか」

「すまん、すまん。何か、いいアイデアかい」

違う部署だが、仲のいい同期入社の子が前に座った。こんなとき、人が傍にいと、気が散ってどうにもならない。ただ、話の最中にでも、ひょんなことに出てくるきっかけがあるかもしれない。

「おれは、今朝方、とんでもない大変なことを忘れたんだ。そいつが何か、おまえに判るか」秀生は同僚の子に訊いた。

「これは、難問だな。人の忘れたものを覚えているというのかよ。そうさな、宝くじの番号を調べるとか」

「違うんだよなあ」

「それじゃ、彼女に返信メールを出す」「借金の返済期限」「デイトの約束」「友人の結婚式」「歯医者予約」池田がずらずらと適当に並べたが該当はない。まるで、雲を掴むようなヒントなしのクイズだった。

「違う、みんな違う、外れだ」

「じゃ、なんだよ、仕事のことか。プライベートなことか」

「それも判らないんだ」

「せめて、その範囲でも判ればなあ」

友人も一緒になって考えてくれた。

「こんなときは、現場に戻るんだよ。刑事はいつもそうしている。推理小説では、いつも、判ら

なくなると現場に帰れっていうが」

池田の云うのも道理がある。秀生は、もう一度、家に帰って、朝起きたところから現場検証をすれば、何か思い出すのだろうと思った。

その大事なことのために、池田も秀生の彼女もつきあうことにした。三人で、秀生の自宅まで退社後に向った。たまたま、帰る方角は一緒だった。三人とも名探偵になったような気分だった。

「さあ、バジャマも着てもらいましょうよ」彼女も面白がって、はしゃいでいた。「思い出すためには、同じシチュエーションである必要があるからな」

何事が始まったかと、秀生の両親に妹まで、秀生の部屋に集まっていた。

「どうした、どうした」

「何か、人生にかかわるような大変なことを忘れたらしいから、いま、思い出させようとしているんです」池田が家族に説明した。

「朝は、六時半にいつものように起きた」「それから？」「そして、洗面所に行って、歯ブラシで歯を磨きながら」と、秀生は歯ブラシを取った。「新聞受に取りにゆき」「ふむふむ、それから」いちいち、全員が秀生の後を付いて歩く。

「おお、ここまで、喉のところまで出かかったぞ」「よし、頑張れ、もうすぐだぞ」

「お兄ちゃん、頑張って」応援も真剣だ。

「そして、テレビのスイッチを入れる」「そして？」「そうだ、臨時ニュースをやっていて、すっかりと忘れていたんだ。それに気を取られていた。思い出した。思い出したぞ」秀生はようやく、つかえたものが取れたように飛びあがった。みんなもほっとして喜んでいた。

「それで、何なのだ。その、大事なことって」

「実は」秀生は顔を赤らめていた。「おれ、うんこするの忘れていた」

第555話 行く夏

夏だけが何故か惜しまれて「行く」のだった。春は「来る」と云う。秋は「なる」のだ。

「どうしても、行ってしまふのね」女は泣いて背中を向けていた。

夏は、何か、悪いことをしたように俯いていたが、いつまでも滞在するわけには行かない。

「行かせてくれ。おれを待っている人がいる」

女は恨みがましい目を夏に向けた。

「そうでしょう。あなたを待っているビキニの女の人がね」

「仕方ないだろう。これがおれの仕事なんだから。季節労働者としては、契約が切れたら、次の国に行くだけなんだ」

「これから、どこへ行くの？」

「太陽の雇い主について、南下してゆくのだ。赤道を越えて、南半球に向かう」

「いいわね、あなただけ。オーストラリアにいい子がいるんでしょう」

「ふむ、ニュージーランドもよかったな。肌が白くて、すらりと手も足も細く」

「わたしのことなんか、忘れるんでしょう」

「世界がおれを待っているんだ。一年経ったらまた必ず帰ってくるから」

「そうなのよね、そうして、あなたはいろんな女を渡り歩くのよね」

夏は、いい思い出も、悲しい思い出も強い陰影で、強烈に焼き付けて去ってゆく。ドンファンだが、憎めないやつだった。

特に、北国ではより短い夏が惜しまれる。お盆過ぎたら秋風というから、実際はひと月あるかないかの、短期間のうちに、一年の思い出作りに遊んでしまう。

海で泳ぎ、高原のコテージに泊まり、バカンスで旅行し、お祭りに帰省し、打ち上げ花火を見たり、子どもたちは虫を捕まえ、西瓜を切り、真っ黒く日焼けしていた。ひと夏の恋もある。ゆっくりとデートもしてられない。すべて急ぎ足で過ぎてゆくから、燃えるのも早いと醒めるのも早い。ぐずぐずとしてられないのだ。

北国では、長く辛い冬がある分、夏がいとおしくてたまらない。お祭りで、一年のエネルギーを使い果たしてしまうほど、人々は燃焼するのだった。

だが、女はいつまでも未練があるから、夏をいろんな口実で引きとめようとしていた。

「お願い、あと三日だけ待って。このまま別れるなんてイヤ。それまで、わたし、気持ちの整理をしておくから」

そう云って、女は夏を引き止めていた。

「でも、ぐずぐずしていたら、九月になってしまうから」

「なによ、あなた、卑怯じゃないこと。ちゃんと、仕事はしたっていうわけ。サボっていたの、わたし知っているのよ。日照時間は少ないし、冷夏で、気温は低い。おかげで、今年は海で一回しか泳いでいないのよ。そんな、ズルして、帰るというわけ。とても許せないわ」

「おいおい、人聞きの悪い。おれだって、そうそういつも最高に燃えていたら、過労で倒れてしまうだろう。労災の認定は誰がしてくれるというんだ」

「だったら、わたしの肌がこんがり焼けるまでいて頂戴。あなたのことを肌の印画紙に残しておきたいのよ。お願い」

夏はしぶしぶ承諾した。確かに、女の云うとおり、今年はどうも働く気がしなかった。手抜きをしているのが、みえみえだった。同僚の梅雨のやつが夏の仕事の邪魔をして、いつまでも立ち退かなかったせいもある。何も、夏のせいばかりではなかった。いつも、夏ばかりがもてるから、梅雨のやつが嫉妬して、陰湿に居座り続け、毎日雨ばかり降らせた。

夏は、からりとした性格だったので、あの梅雨のような内向的で、はっきりとしない腐ったようなやつは嫌いだった。女にはまるで人気なかった。そうすると、ますます妬み、嫌がらせをする。

女は、せっせと、日焼け止めクリームを肌に塗って、海辺のテラスに横たわっていた。夏は日焼けサロンの助手のように、女の肌を焼くようにじっくりと太陽を照らしていたが、いくら日差しを向けても女の肌は白いままだった。

夏は女との約束を果たさなければ、南へ帰ることができない。どんなにプレイボーイと云われても、女に人気があるのは決して裏切らないことだった。

作物はようやく、平年作まで持ち直していた。海水浴場にも人が戻ってきていた。もう夏休みは少し足りない。いままでが、あまりにも天候不順で涼しすぎたのを挽回するように、太陽は照りつけ、気温は上がっていた。

「どうしたのよ、まだ、こんなにも白いのよ。もう少し本腰入れなさい。それとも、それぐらいの力しかないの」

「なんだと」

夏は女にバカにされるのが一番頭にくるのであった。そこのところは女の方がツボを心得ている。うまく、夏は女に操縦されていた。

九月になっても、気温は三十度以上あった。気象台は九月の予報を出した。
—今年に残暑が厳しいでしょう。

第556話 盆の十三日

車で弘前から青森まで国道七号線を走る。玄関前で家ごとに迎え火を焚いているのが、何か懐かしいもののようにちろちろと見えた。ところが、その火も浪岡の手前からなくなる。弘前でもやらない家もあるだろう。青森ではあまり見かけない。他県から転勤してきた家族なら迎え火、送り火をする家もあるだろう。土地によって風習が違うのを車で走って判る。

風習そのものがだんだんと時代にそぐわなくなり、潰えてしまうものが沢山あるだろう。我が家では頑固にご先祖様からの風習を守り通している。赤飯も作るが、煮しめと、枝豆を擂鉢ですって、それに大根おろしと茗荷を入れて作る豆膾が伝統料理だ。それと、茄子に調理味噌を塗って、紫蘇で巻き、焼いたもの。それが出ると毎年、お盆だと思うのだ。年に一度しか作らない料理だからこそ、味で夏を知る。

ところが、最近になって異変が起きた。赤飯作りが失敗もするが、面倒なので、パックした出来合いのものを買ってくる。そのうち、年越しと同じで、お節料理は食べなくなったからと洋風でゆくように、すべてががらりと変わるかもしれない。

十三日は墓参りだ。市民の墓が一箇所に集まっている大きな霊園がある。三内霊園だ。うちの墓は戦前からそこにある。すぐ近くに三内丸山遺跡があるのだ。

ぐすぐすして昼頃に出かければ車が渋滞して、墓まで辿りつくのに何時間もかかるので、夜遅く行くか、朝、早く行くことにしていた。五時に起きて、前の日からこしらえておいた料理を折に詰める。そして、花と果物、お菓子なども持ってゆく。

隣の家ではいやにのんびりとしていた。たまたま起きてきた旦那に訊いてみた。

「お宅では墓参りは行かないんですか」

すると、半ズボンにタンクトップの若い旦那は、

「いやあ、もう墓参りなんか行きません。家族でインターネット墓参りです」と、なんと新しい言葉を使った。よく訊いてみると、それはこうだ。家族で墓を映したビデオ映像をパソコンに出して、その前に集まり座る。やはり、ネットで呼んだ坊さんに読経してもらう。線香や供物はパソコンの前に上げる。支払いはクレジットカードか、ネットバンキングでの振込みとなる。

「はあ、そうですか」

それを聞いて、何かやるせない複雑な思いになった。

いつもの年なら、混んでいる道路もがらがらだった。おかしいなと思った。

「今日は十三日だよな」わたしは、じいさん、ばあさんに訊いたが、間違いはない。子供たちは遊んでいたほうがいいとか、朝早く起きるのが辛いとか、いろんな理由で墓参りもしない。行くのは年寄りばかりだ。そのうち、車は普段、見たこともないような原生林を走り抜けていた。おかしい。道を間違えたかな。

霊園に着いたらやはりがらんとしていた。変だぞ、そんなはずがない。車はすいすいと墓の近くまで来てしまった。時計は七時だ。もう、かなりの人が来てもいいはずだ。それに、いつもなら、警察官が交通整理で立っていたり、坊主が走り回っているのに、その人影もない。墓には花も上がってなければ供物もない。それどころか、どの墓も崩れかかっていた。

「何か様子がおかしくないか」

わたしは両親に話した。車の後部座席に座っているはずの両親からも何の返答もない。わたしは、車を止めて、後ろを振り向いた。そこにあるのは、骸骨が二体とドライフラワーだった。

わたしは悲鳴を上げて、車から転がり落ちていた。そして、這うように我が家の墓まで逃げてゆく。どこの墓も風化が厳しく、文字もかすれて見えなくなっていたし、蜘蛛の巣まで張っていた。雑草も伸び放題で、道路も長く人が歩いていないように雑草に占領されていた。何よりも驚くのは墓石の古さだった。去年来たときは、まだ真新しい墓石もあったのに、一様に苔むして、磨耗している。すでに何百年も経過しているようだ。

わたしは、気が狂ったようにやみくもに走った。どこをどう走ったのか、墓地の北口が見えていた。そこに人影が見えた。ようやく人間らしいものに出会えた。

「あのう、すみません、ここはどうなってしまったんですか」

恐れ戦いてわたしがその人にすがっていた。その人は奇妙な服装をしていた。スエットスーツに宇宙服のようなフードをつけていた。

「あなたこそ、いつの時代の人ですか。どこからここに来ましたか」

その人はわたしの服装を見て首を傾げた。

「どこからって、同じ市内からです。今日は、お盆の十三日で、墓参りをする日じゃないですか」

「墓参り……ですか。古い言葉ですな。二百年前にはありました。確かにここにあるような墓が各地に。でも、いまは二十三世紀の世の中です。墓なんか必要ないんです。すべて宇宙葬で死ねばみんな宇宙に返すんです。骨を取っておく意味がなくなりました。まして、信心もなくなり、宗教が沈滞してからは、先祖を敬うという儀式もなくなりました。だから、ここは遺跡です。いまは訪れる人もありません。で、あなたは、どこからここへ迷いこんできたのですか」

「嘘だ。そんなことがあってたまるか」

わたしはかなり動揺して、車に戻ったが、車はすでに錆付いて、見る影もない。空高く、銀色に輝く空飛ぶ円盤がいくつも飛んでいた。

第557話 高校野球

土田舎高校は、全校生徒が百人もいない、分校のような僻地の高校だった。そんな少ない生徒数でも、野球好きの校長が赴任してくると、少しは野球を知っている先生にコーチを頼み、野球部を作ろうということになった。それには、先生たちから異論が出た。

「校長、おらほの生徒は野球どころかルールも知らねえ、小学校も中学校も人数が少なえから、野球ができねえで育ってきたものばかりです。そつたらだグローブもはめたことのねえ生徒さ呼びかけても、全然野球にならねえと思っただけんど」

「いいんだ。甲子園さ、行くなんとだいそれだごと考えなくとも。みんなして応援さ行く。村を挙げて一致団結して盛り上がる、それが大事なんだ」

ということで、土田舎高校開設以来、初めての野球部を作ることになった。だが、生徒に呼びかけても、一向に集まってこない。他に、陸上やバドミントン、卓球などがあるから、ぶらぶらしている生徒を集めるよりない。

先生は、半ば強引に嫌がる生徒を野球部に引っ張った。なんとか十人は集めた。それも、並べてみると、大小さまざま、相撲のほうに似合いそうな生徒から、どこにいるのか判らないチビの生徒から、涙を垂らしているのまでいる。とても、勝つとか負けるという以前の問題で、野球が成立するかどうかといった雰囲気は漂っていた。

父兄が協力して、ユニフォームを作った。グローブやバットは学校で買うことにした。グラウンドがないから、みんなで原っぱの雑草を刈り取り、なんとか、野球ができるスペースは確保していた。

生まれてこの方、キャッチボールもやったことのない運動神経の鈍そうな生徒ばかりだから、バットの振り方、ミートの仕方から教えなくてはならなかった。甲子園の夏の大会の県の予選まではあと三ヶ月だ。三ヶ月で、本式の試合に望めるのか、みんなにそんな心配はあった。

「いいんだ。参加することさ意義っちゅうもんがあるんだべ」

校長の云うとおり、ともかくやってみることだとコーチの先生も思っていた。ボールは打てない、投げれない、掴めない。それが、練習で、へなちょこ球でもとにかく、球を送ることだけはできるようになった。

県の予選の組合せが決まった。初戦から、なんと甲子園で準決勝まで行った名門校だった。ワールドゲームは確実だが、これでは幼稚園の園児とプロ野球との試合ほどの差があるだろう。

コーチはある考えがあった。どうせ、一点も入れられないんだから、記録を作ろう。かつて県内のF校が作った記録を破って、百五十対ゼロくらいに持ち込めば、ギネスブックに載るかもしれないし、全国的に自分も有名になる。マスコミが殺到して、この村の宣伝にもなろうというものだ。校長もそれには賛成した。何事も一番というのはビリでもいい。

いよいよ試合当日となった。選手には緊張感がまるでない。もう、端から諦めムードが漂いながら、生まれて初めての公式の試合に臨むこととなった。

「いいか、点数はいれられないから、入れると思うなよ。相手にたっぷりとサービスしてやる

んだ」

コーチもどうせやるなら徹底的に負けることを選手に申し渡した。先攻は土田舎高校だった。一番バッターが入る。

「いいか、球は見なくていいから、目を瞑って打つんだぞ」

派手に空振りすることを叫んだ。相手チームはゲタゲタ笑った。

第一球だ。相手校は、余裕で、最初から直球のストライクゾーン。バッターは目を瞑って、とにかくでたらめにバットを振った。それが、ジャストミート。球はぐんぐん伸びて、初球からホームランだ。

これには校長以下、村の応援団も驚いた。コーチは罵倒する。

「ほんつけなし。なんてことするんだ。これで、記録は達成できないべき」

相手校は油断していたと、次のバッターから変化球できた。それもまぐれ当たりで、三塁打。ところが、バッターは三塁の方に走ろうとする。

「バカ、逆だ。こっちだ」

と、とてもまともなチームではないのに、無死三塁だ。強豪と云われた高校のプロ野球からもトレードにきているエースは、こんな田舎のシロウト野球にバカにされてすっかりと自信を失っていた。

一回だけで三点も入れられた。さて、一回の裏になり、今度は土田舎高校が守備に回る。ピッチャーは、選手の中でも比較的、投げられるものを選んだ。

第一球が投げられた。すると、投げたはずの球が視界から消えた。バッターは焦った。

「み、見えない。消える魔球だ」

と、いきなり、目の前に球が現れた。バッターはやみくもに振って空振り。実は、球は空高く上がっていた。太陽が反射して見えない。放物線を描きながら落ちていったのだ。まっすぐに投げられるものがない悲しさ。そうかと思うと、ものすごいスローボールだ。三十キロの超豪遅球。ひよろひよろと飛んでくるが。その時間の長いこと。苛々したバッターは振りが早すぎる。全員、すでに調子が狂わされていた。相手選手の全員が、頭にきて、平常心を失い、まともな判断ができないでいた。中には、バットを地面に叩きつけて、ベンチでふて腐るものもいた。

結果は、六対〇でなんと土田舎高校が勝った。それは、全国ニュースになっていた。

あれよあれよと決勝も勝ち、甲子園に行くこととなってしまった。

今年の甲子園は余計に暑くなる。勝つための野球よりしてこないチームに、負けるための野球をする初出場のチームに完全に掻き回されるからだ。常識に非常識が勝つ。

あまりのバカらしさに野球解説者も閉口していた。

「勝手にやらせておきましょう」と。

毎年、暑い夏の頂点がやってくる。それが八月十五日だった。

敗戦記念日を終戦記念日として、「みんな終わったことなんだ」と、本当は、破産事件なのに、国家的整理でかたづけた当時の政治家たちが、そこに完全な封印をしなかった。戦争の妖怪の息の根は止めてはいなかったのだ。そいつは、棺桶の中で出番を待っている。中には戦争でひと儲けした甘い汁を吸ってきたものや、戦争に懲りない老人たちが、いまだに虎視眈々と機会を狙っていた。

「あのう、すみません、八月十五日ですよ。今日は何の日か知っていますか」

毎年、この日になると、テレビ局ができるだけ出来の悪そうな若者たちを選んでインタビューする。

「キムタクの誕生日ではないよな」「キンキの新譜の発売日だったかな？ わかんない」

「こんな調子です。戦争を知らない子供たちが八割を占めるようになって、すでに戦争は風化しつつあります」

全国の若者はこの日に侮辱されるのだ。若者たちよ、怒らねばならない。そんなことは常識で、小学校でも教えている。ただ、一部の勉強嫌いなアホな若者がいるだけで、彼らの無知が、そのままの若者と云われたくないではないか。

ところが、今年からは少し様子が変わってきた。街頭で、いつもの通りのインタビューが行われていた。

「今日は何の日か知っていますか」

「さあ、天皇誕生日ではないよな」若者たちは知っているのに、わざと番組のウケを狙って、そう云ったのだが、アナウンサーとスタッフは急に態度を硬化した。

「オソレオオクモ、天皇陛下の誕生日も知らない非国民がここにいる。これは、教化するために二年間の兵役だ」

すると、テレビ局の陰からぞろぞろと軍服の男たちが現れて、若者を連れていった。

テレビ局は、湘南海岸にも来ていた。ビキニのピチピチギャルにインタビューしていた。

「今日は、何の日か知っていますか」

「当たったら何かくれるの？ ええとね、サマージャンボの抽選」「ヤダー、それはおとついただったじゃーん」

アナウンサーは急に真剣な表情になった。

「終戦記念日で、アメリカや連合軍との戦争が終結した日ですぞ」

「ええ？ 日本って、いつアメリカと戦争したの？ 信じらんない」

「き、きさまらには、あの屈辱の日が判らんのか」

アナウンサーは、わなわたと震えている。また、ばらばらと軍服の男たちが現れて、彼女たちをどこかへ連行する。

「ど、どこへ連れて行くのよ」

「国防婦人隊のもとで勤労奉仕をしてもらおう。さあ、ここにあるモンペをはくんだ」

てっとり早く、街頭のクイズ形式で、特に問題のある若者たちを鍛え直すために、強制的に兵

役や奉仕隊に連れてゆくことにした。政府による若者狩は続けられた。自衛隊だけではいざというときに兵力が不足するので、予備兵として、民間の若者たちを訓練して使えるようにしておくのだ。

歴史は繰り返す。人間の愚かさは、歴史の失敗を学習しないのだ。どんなに悲惨な目に遭っても、語り継がれるうちはいいが、だんだん行き詰まり、外圧が高まってくると、右傾化してくる。

小鼠内閣は、とうとう、タブーであった第九条に手を付けた。「戦争の放棄」を「戦争の蜂起」と、憲法改正を行った。それからは、すでに用意されていたように、次々に悪法が立案成立してゆく。若い人の仕事がないことをいいことに、徴兵制を施行した。自衛隊の名前を変えて、陸軍、海軍、空軍と、軍隊であると、開き直ると、各大臣までポストを作り、すっかりと戦前に逆戻りした。

学校では軍事教練を必修として復活させ、竹槍突撃の訓練を小学生から行っていた。修身の時間も復活。教育勅語もすべて必修となった。

軍事費はGNPを基準としない。他国を参考にしながら、国家予算の三割を上限に軍事力は増強されていった。

靖国神社に、小鼠首相以下、各閣僚が、こそこそと私人でと言い訳することなく、むしろ堂々と、軍服まで来て、この十五日に参拝していた。各国もそれに対する反発はもうない。日本は軍国主義であり、日帝が復活したとみんな思っているからだ。

小鼠首相は、マスコミのインタビューで今後の軍事政策についてコメントを述べていた。「これからの戦争は負けません。同盟を結ぶ相手国が英国と米国であれば、負けませんて」かつての鬼畜米英が、寄恥貢米英になっていた。

第559話 犠牲者

結婚して十年近くなるうとしていた北村元子は、相手を選ぶのを完全に間違っていたことに気が付いていた。結婚は人生の墓場どころか、人生の地獄であった。

子供たちは云うことをきかない。姑とはうまくゆかない。亭主はさらに悪く、我関せずで、自分の趣味ごとばかりしていた。結婚する前は、やさしくて、なんでもしてくれ、甘えられる人だと思っていた。年齢も一回り以上上だから、余計、どんな我儘も聞いてくれていた。

ところがである、文学趣味の夫は、日がな本ばかり読んでいるのだった。それか、パソコンでへたくそな小説ばかり打っている。元子は本を読まない。小説というものにも興味がない。趣味らしい趣味がない。それどころか、今までは子育てに、家事にと忙しかったのだ。そんな時間なんかあるわけがない。

「今日は、ペンクラブの会合で遅くなるから、晩御飯はいらないから」

「今夜は、同人誌の合評会で、飲んでくるから」

「今日は、句会があって、ひょっとすれば、古川君の家に泊まるかも知れん」

「今日は……」

「いい加減にしてよ。あなただけ、あちこちで飲み歩いて、わたしなんか、家に縛られて、出て歩くこともできないのよ」

ついに、元子は爆発した。それでも、夫の北村拓也は、飄々として応える。

「君も何か趣味を持ったらい。NHK文化ホールで募集しているよ」

子供たちも大きくなって、部活で忙しく、もう母親とは一緒にいない。みんな友達との行き来で、子供たちにも相手にされない母親は孤独感に襲われていた。それなのに、夫ときたら、自分のことばかりして、仕事から帰ると、書斎に閉じこもり、顔も合わせない。

「なによ、あなたは自分の好きなことばかりして。夫婦の会話もないじゃない」

すると、拓也は、

「これは使えるぞ」と、メモしだした。

「元子は、夫婦の会話がないじゃないと叫んだ、と」

すべて小説のネタにしようとしていた。

急激に夫婦仲が悪くなっていた。拓也はマイペースで生活は独身時代から変えていないのに、元子がそんな生活パターンを嫌悪して、拓也を避けるようになっていた。すでに、家庭内別居中。寢床は別々だ。夫婦の会話がないと云うから、多少、ヒステリー気味になっていた元子が可哀想だと、拓也は、書斎に閉じこもるのを止めることにした。元子とできるだけ一緒にいてやり、夫婦の会話に努めることにした。

拓也は帰ってくると、夜はテレビを見ながら、美容の雑誌を読んでいる元子の傍にべったりとくっつくようにして座っていた。

「これでいいだろ」と、拓也は云う。

「何よ、その本は。ただ、傍にいるというだけで、本はしっかりと読んでいて、人の話なんか聞いていないじゃないの」

そうかと思うと、ノートパソコンを持ってきて、傍にべったりと座ると、小説を打つ手を休めることなく、ふむふむといい加減な返事をしている。ますます、元子は怒り出す。

「あなたは、同じ小説を書く人と一緒になればいいのよ」

「そのフレーズも使えるぞ。元子は、同じ小説を書く人と一緒になればいいのよと叫んだ、と」

あまりのばかばかしさに元子はもう何も云わないことにした。この人は病気ののだ。いい人だろうけど、のめりこんだら、周りがすべてその色に染まるのだ。

元子は、急に胃が痛くなった。胃薬を飲んで我慢していたが、食事をすればきりきりと痛むので、食べられなくなっていた。水を飲んでも痛む。どうしたのだろう。いままで経験をしたことのない痛みだった。

「まさか、胃癌」

元子もパートタイマーで仕事をしていていたが、八月は忙しくてなかなか休めない。吞まず、食わずで仕事をしていて、ふらふらになってきていた。

夜中も痛みで眠れない。睡眠不足まで加わった。精神的にも参っているのに、体力も落ちて

きた。このまま死ぬかもしれないと悲観的に考えていた。姑はいつも敵愾心を燃やして不仲だったし、子供たちは好き勝手な我侭ばかり云う。夫はまるで相手にならない。

この家にいてもいつもひとりだ。きっと、ばらばらな家庭にいて、誰にも同情されず、口をきくこともなく寂しく死んでゆくんだ。そう思うと、急に怖くなってきた。

お盆の十三日で、家も仕事も休めずに忙しいときについに元子は倒れた。夫の書斎に転がりこんできた。そんな夫でも、最後は頼るしかない。

「おい、大丈夫か、と、夫は抱きかかえるのであった」

妻が死にそんなときでも、いつも拓也は小説の世界にいた。

「病院へは行ったか」「ううん、売薬で我慢していて」「バカ、治るわけがないじゃないか、と、夫は妻を抱きかかえる」

十三日で、どこの病院も五日間も盆休みだ。午後だったが、県立病院に連れてゆく。そこなら、救急患者もいつでも診てもらえる。そんなときは、頼りない感じの拓也もテキパキと頼りになるのだ。

元子を車に乗せて、病院に向かう。

「少し休め。これから飯支度はおれがやってやるから。一日三冊読む本を二冊にすればいいことだから」

痛くて、文句も云えない元子が、この期に及んで、夫のその態度、情けなくなる。きっと、この人は、自分が危篤になっても枕元で死にそうな妻の小説を書き続けるのだ。

「たぶん、それは、胃潰瘍だな。ストレスからくるんだ。おれも若いときに十二指腸潰瘍をやったことがある。薬を貰えばぴたりと治るから」

ようやく、無神経な拓也も、その原因が自分にあることで、元子にはすまないという気持ちを持ち始めた。

がらんとした病院の中で、医師が特別に急患として診てくれた。検査をしたが、胃カメラは予約で混んでいるから来月まで待たされる。医師も潰瘍ではないかと疑っていた。

それで、薬を出してくれたが、やはりそれを呑んだらケロリと治ったという。拓也はがっかりした。もし、入院ということになれば、ヒステリーで叫ぶ妻の傍についていながら、「死の棘」ばりの病妻ものを書こうと構想をまとめているところだった。

元子は元通りの元気な体で、叫んでいた。

「あなた、本ばかり読んでないで、金魚の水取り替えてよ。それが終わったら、風呂の掃除よ」

拓也は思った。少し病気していたほうが可愛いかなと。

第560話 乾燥洗濯機

前から買おう買おうと思っていた乾燥洗濯機がわが家にやってきた。長引く梅雨で、雨ばかりの毎日、洗濯物が乾かないで、洗濯物を干す係のじいさんが困っていたからだ。

少しボケが入った八十六歳のじいさんに新しい機械の説明をしてもピンと来ない。
「だから、干す必要がないんだ。ここのボタンを押す。全自動で、洗濯、脱水、乾燥まですべて機械がやってくれるんだ」

「なんで、乾くのだ。おれには判らん」

何度説明しても信じようとしなない。

以前、デジカメを誕生日にプレゼントしたときも、頑固でとうとう使わなかった。

「フィルムがないカメラは信用ができない。それにシャッターの音がしない」

「シャッター音が出るように設定したから、今度は大丈夫だよ。写した写真は、コンパクトフラッシュという、ほら、この小さな中に百枚は保存できるんだ。それをリーダーでパソコンに取り込む。それをCDにアルバムとして保存するんだ。どうしても写真でプリントして見たいときは、このまま、プリンタに挿し込んで、ほら、家庭でプリントできるようになっているんだ」

「じゃ、カメラ屋に行く必要がないのか。カメラ屋が潰れるだろうが」

もう、長年、カメラをやってきたじいさんにとって、ファイルで保存、それをパソコンのモニターだけでなく、DVDレコーダーでテレビの画面でも見ることができるというのがとても許せないのだった。そんな、悪魔の機械は、人間の使うものではないと、デジカメを手にすることもなく、昔ながらのニコンで、行き着けのカメラ屋にわざわざバスに乗って、フィルムを持ってゆき、また翌日にバスに乗って、カメラ屋にできた写真を取にゆく。そして、焼きまわしがあると、またその翌日にカメラ屋に行き、そのできた写真をまたその翌日に取りにゆく。四回も行くことになっても、絶対にデジカメは使わなかった。

そのじいさんが、乾燥洗濯機も同じように、自分の理解の許容範囲を超えているので許せないのだった。

じいさんの洗濯は、昔、軍隊で鍛えられたように、パンパンと伸ばして、洗濯バサミで、丁寧に一枚ずつ、庭に干すということではなければ納得していない。洗濯とはそういうものだと思い込んでいる。

わたしは好きにさせることにした。せっかく買ってやったのに、全自動にはしないで、脱水だけすると、またパンパンと干しているのだ。雨の日なら、万国旗よろしく居間の天井にずらりと干す。それが生甲斐だった。わたしは、じいさんの仕事を奪ったことに何か悪い気がしたものだ。

じいさんは頑固なのだが、機械を極端に嫌う性癖があった。

「便利になって、なんでも機械だ。人間どもを自堕落にしている」と、口癖のように云うのだ。

洗濯物は太陽の光をいっぱい吸って、あたたかく、ふわふわになるのがいいといつも云っていた。どちらかという、自然志向だった。自然に反することはダメだと、これも口癖だった。

「何が、乾燥機能だ」と、一人で怒っている。まるで、じいさんが大変だから、とじいさんのために買ってきたわたしを睨むように云っていた。

少し前は明治の人間は古いと云っていたが、いまは大正の人間はと、やり玉に挙げられる。世の中の進歩にはとてもついてゆけない。

ところが、その頑固じいもとうとう、乾燥機能を使うこととなった。こう毎日まいにち雨ばかりで湿気が多いと、いろいろと生活にも支障が出てくる。

食べ物を粗末にするのが嫌いなじいさんが、ある日、焼き海苔が湿っているのに気が付いた。ばあさんが、

「それは、煮て、海苔の佃煮にしますよ」と、云うが、

「バカ、勿体無い。乾かして海苔として使ったほうがいい。それより、誰だ、口を閉じないで、そのままにしておいたのは」

わが家はこと無駄にすることで怒るのがじいさんだ。電灯も点けっぱなしでは、二三日は機嫌が悪い。

わたしが、洗濯をしようと、洗濯機を開けると、何故か、中に海苔が入っていた。それが、じいさんが、バカにしていた乾燥洗濯機を使った最初だった。だが、本人は絶対に使わないと云いはる。使ったことがバレると癪なのだ。

それから、しばらくして、我が家の猫を子供たちが洗ってやったことがある。子供たちもやりっぱなしだから、暴れる猫をそのまま体を拭きもしないで、部屋の中を歩かせた。猫の濡れた足跡がつく。じいさんの逆鱗に触れた。

「やりっぱなしだ。洗ったらちゃんと拭いて乾かしてやらなきゃ、いけないだろうが。乾かすーそうだ、あれだ」

それから猫の姿が見えなくなった。

「洗った猫が外に出ていったかな。また余計に真っ黒になって戻ってくるだろう」

わたしは、子供たちに訊いた。知らないという。新聞を読んでいたじいさんが、ケロリとした顔で云った。

「猫なら乾燥洗濯機の中だ」

「ええ、バカな死んでしまうだろうが」

わたしは慌てて洗面所に走った。後ろからじいさんの声が追いかける。

「大丈夫だよ。ちゃんと、毛皮というボタンを押しておいたから」

第561話 遠い視線

ずっと、ぼくは考えていることがあった。人間の記憶というものは実にあやふやなもので、ひとつの場面が、どこか思い出せないことがある。

くだらないことなのだが、それは朝であったか、昼であったものか、ぼくは、どこか遠い町に旅行に来ていたようだ。そして、家族がいて、みんなは買い物か、ぼくの傍にはいなかった。ぼくは、長椅子に腰掛けて、ひとつの電飾看板を見ていた。その看板には、エビフライや牛丼がいくらとか、値段が次々に出てくるのだ。食堂の店頭でよく見るあれだ。電飾で、いろんなメニューのイラストも浮き出では消える。ボリューム満点という文字も出では消えた。

そんな本当にくだらないことでも、ぼくにとっては何故か大変重大なことのように思えた。何故なら、そのときは確かに空腹だった。朝起きたままのようなぼんやりとした視線が、おいしそ

うなメニューを見ていて、それで、子供たちに昼飯を食わせるのに、懐具合と相談していたのだろうか、まさか一杯の掛蕎麦というわけにはゆかないだろうと、あれこれと思案していた疲れきったぼくがいるようだった。それも推測なのだが、そこにいる理由がどうしても判らない。ぼくの妻がいなくなったことと何か結びつきがあるのだろうか。妻は、十年前に忽然と消えて、ぼくは家出人捜索願を出していた。

その時刻も定かではなく、季節も不明、寒くはないから冬ではなかったろう。判っているのはそれぐらいで、場所も何処か判らないのだった。一度、気になり出せば、なんとしてでもその場所を特定したいと、ぼくは、それが何処で、いつなのか、それを知りたいと、記憶リサーチセンターを訪ねたのだった。

記憶リサーチセンターは、そんな曖昧な記憶を脳細胞の書庫から、探し出して、映像化してくれる新しい商売だった。夢も映像にできるし、人間の創造する画像もデータとしてファイル化し、モニターで見ることができるようになっていった。

それは、犯罪捜査にも役立っていた。目撃証人の頭に、機械を装着して、脳波が描き出す画像により、犯人像を特定できるというすごいマシンだった。

自分で見る夢というものも、素晴らしい映画になる。ただ、ストーリーはめちゃくちゃで、あらすじでは追えない。いつか見た場面がクロスしてありえない街とありえない人物が登場したりしている。

料金は高いが、中には、戦争未亡人が、在りし日の夫の姿を思い出しながら、思い出のワンシーンをDVDに残すこともできるわけで、霊能力者が念写という実験をやるが、あれを科学的に画像にしてしまうのだ。

ぼくは、まるで病院のベッドのようなところに寝かされた。ここは予約制なので、予め時間指定があるが、この日は空いていたようで、夜、仕事が終わってからの時間帯がとれた。

注意書きを読まされる。いろんなことを一度に考えたりしないことだ。そうしなければ、画像が絞り込めずに、いろんな場面が錯綜して、見づらくなるのだという。ぼくの頭の四方に心電図をとるときのようなケーブルがクリップや吸盤ですえつけられた。それが、巨大なコンピュータに接続され、モニターに映し出される。

モニターを見ている医師のようなオペレーターたちは、目を瞑っているぼくの傍らで、記憶の迷路をものすごいスピードで走るカメラで深層心理の奥の奥まで入りこむ。まるで、ぼくの現在から過去へとカメラが逆走するように、人も車も風景もすべてが逆に動いている。五年、十年と日付も遡り、記憶の中をタイムマシンが突き進むようで目まぐるしい。もっとも、それを後で、再生したときに見せてもらって判ったのだが、十年の記憶を十分で見るようなもので、あまりにも早くてその思い出す場面に辿りつくには、CPUの処理能力はかなり高くなければならぬだろう。人間の頭脳は偉大だった。何千人という人の顔や名前、読んだ本や見た映画、事件や家族との思い出、ありとあらゆる映像が保存されているのだ。何ギガという単位でも計ることはできないかもしれない。

写真にすれば何百万枚か判らないほどの画像が保存されているのだ。その中から、たった一枚の画像を言葉でも検索できるようになっていた。たとえば、ねぶた祭というと、記憶の中の子供のときから大人になるまでの体験したねぶた祭の画像が抽出され、さらに絞込み検索で、女の子

と手を繋いだというと、二十歳のときに彼女と跳ねたシーンが出てくる。

ぼくの思い出そうとしている画面は、何故か、そのメニューの場面だけが一枚きり、覚えているので、あとの前後の記憶がまるでないのもおかしいことだった。どうして、消えてしまったのだろうか。

しかも、強烈な印象で残る必要のない看板など、どうしてぼくの人生で重要なキーワードにならなければいけないのだろう。それを知りたかった。そうすれば、意外に、ぼくが何者であるか、どこから来て、どこへ行こうとしているのかが、判然りとわかるかも知れないのだ。

実は、ぼくにはある時期の記憶がまるでなかった。それに気づいたのは、だいぶ後になってからだ。それは、平成四年から五年にかけてのある一定期間であることに、様々な家族の証言からも辿ってゆくと、その辺りに行き着くのだった。消えた記憶を取り戻すに重要な鍵を握るのが、あのワンシーンだった。ぼくは記憶喪失になったのかもしれない。よくあるのが、ものすごい恐怖体験をしたら、そのときの記憶だけが真っ白になっていたというそれである。

ぼくは、まだ、オペレーターがいいというまで、寝ていた。ようやく、機械もぼくもあのワンシーンに辿りついたようだ。オペレーターたちは、なにやら、こそこそと話しているのが聞こえていた。恐らく、いま、記憶の画像をDVDに取り込んでいるのだろう。ぼくは、その画像を見ると、その背景や、前後の画像から、そこがどこであるのか、ぼくが何をしてそこに座っていたのかが、判るのだ。これで、ようやくぼくの空白が埋められる。

「いいですよ。アイマスクを取りますから」

もう、何時間も寝ていたように、眩しかった。ベッドに起き上がると、ぼくの両脇にはいつものまにか警官が二人と刑事らしき男が二人、立っていた。

「ちょっと、署までご同行願います。詳しく聞きたいことがありますからな」

ぼくの前の大きなモニターには、ベンチに座っている確かに、あのワンシーンが映し出されていた。ぼくの視線は、食堂の電飾看板に向けられていた。カツ丼六百円と出ていた。ぼくは、あっと声を出しそうになった。そのぼくの放心したように座っている片手には血でべつとりと濡れているナイフが映っていた。そして、ぼくの足元には行方不明になっている妻が倒れていた。

第562話 民営化と国営化

古本屋の北村は、いつも隣の銀行に売上金を預けにゆく。普通預金だから、いまは利息なんてつかない。申し訳なさそうに、年に二回、利息ですと一円が振り込んである。そのくせ、自分の金を土曜日にキャッシュカードで下ろそうとしたら、手数料をばっちり取る。

頭にきた北村はATMの機械を叩いた。

「てめえ、泥棒。自分の金を下ろすのに、手数料取りやがって」

考えてみると、何のために預金しているのか。いちいち、手数料を取られるくらいなら、預金

しないで、ポケットに入れておいたほうがいい。

北村の女房は、少し考え方が違った。

「あんなねえ、ものは考えようだよ。金なんてポケットに入れていけば、すぐに使ってしまうじゃないのさ。預けておけば使わないし、まして、土日下ろすたびに逆に金を取られると思うと、下ろすのが億劫になる。それで、溜まるというわけだよ」

「そうかなあ」

北村は何か解せない。ATMとは名ばかりで、きっとあの機械の中に人が隠れているのだ。その人件費かもしれない。北村はそう思うようにしていた。

その隣の銀行で、ばったりと大塚さんと出合った。

「よう、珍しいな。銀行に何用だよ」

すると、大塚さんはにこにここと笑って、

「うん、いま運転資金を借りてきたところだ」

と、札束を見せた。北村は驚いた。

「何？ 銀行って金も貸すのか」

「当たり前だろ。預金ばかりするところじゃないんだ。その金を貸して、利息で食ってんだからさ」

「へえ、おれは、てっきりもう貸さないのかと思ったよ」

北村だけではなく、零細企業の親父たちは、忘れるほど借りていない。というより、貸してもらえない。

「どうやって、借りたのだ」北村は、いまにも潰れそうな大塚さんが借りられた方法を知りたがった。

「簡単だよ。われわれ庶民に貸さないと、国営化にするよう署名を集めるぞって、脅かしたのさ」

「国営化って、いいじゃないか。親方日の丸だろう。食いつぱぐれがないし、第一、リストラされることはない。銀行員もみんな国家公務員になるんだろ」

「そこだよ、そこ。国家公務員と銀行員じゃ、どっちが給料が高いと思うんだよ。銀行員に決まっているだろ。それに、別の部門へ転勤はさせられるは、ボーナスも下がるは、昔から云うだろ、すまじきものは宮仕えってな」

「ふーん。じゃ、国営化になったら、民間のときはできなかった配置転換もやり、給与も下がり、メスを入れられるってわけだ」

「そうでなけりゃ、周りとの釣り合いがとれねえだろ」

「それじゃ、郵便局のようにだんだんと公社から完全に民営化されるってのは」

「そりゃ、将来を見越して、だんだんとお荷物になるところは切り捨てよ。あの莫大な資金も誰かが有用しようって魂胆だ」

「民営化すると、今度は倒産も破産もするってことだよな」

「そりゃそうよ。いままでとはガラリと変わる。競争原理がまともに働くってわけだ。焼肉定食の世界よ」

「それを云うなら、弱肉強食だろ」

実は、北村の古本屋も本が売れないで、資金繰りに詰まっていた。なんとか、隣の銀行で借りようと思っていた。でも、大塚さんと同じ手はもう使えないだろうな。北村はあれこれと思案していた。

「そうだ、こうなったら、同じ脅かしでも、この手で行こう」

隣の銀行は午後三時。閉店の時間だった。そこをわざと北村は狙って入った。サングラスをかけて、大きな袋を持ち、顔にはマスク、目だし帽までかぶって、全身黒づくめのスタイル。融資係のカウンターに走ってゆくと、全員、行員たちは青ざめて総立ちとなった。客の多くは悲鳴を上げて、出口へと走った。

北村は大声を上げた。

「おい、金を貸してくれないか。隣の古本屋だが」と、サングラスを取ったが時すでに遅し。非常ベルは鳴り、警察へ通報が入った。

「ばかやろう。なんて格好して、融資の申込みにくるんだ。銀行強盗と誰でも間違うだろうが」

駆けつけた警官にこってりと絞られた。北村はびっくりして、おろおろしていた。

「だって、普通のやり方では貸してくれないと思ったから」

銀行の支店長以下みんな大笑いしていた。

「この銀行ももうすぐ国営になるんだろ。いいなあ、うまいことやって。一体、どうやったら国営にしてくれるんだ」

支店長に北村は訊いていた。

「それはだな、とても返せないような額をだな、国民の税金を使って、健全化のために使うんですよ」

「そうか、そんな悪いことをしていたのか」

北村は、小さい会社は潰れるに任せて、大きな会社なら潰さないという理屈が判らなかった。

「よし、おれも何とかうまくやってみよう」

それから数ヶ月。税務署や市役所から、税金滞納で、北村の古本屋に徴収しに係がやってきた

。「金はない。みんな健全化のために使ってしまった」

北村は開き直っていた。

「健全化って、お宅のこの汚い古本屋の建て直しのためですか」

係は呆れていた。

「で、うちの古本屋もなんとか国営化してくれないでしょうか」

北村は小声で訊いていた。

第563話 恐怖症

小枝子は、交際しているときは、何も話さなかったが、誰にも知られないある秘密を持って

いた。ぼくは、それを知ったからと云って、別段、嫌いになるわけでもない。そんなことは、昔の人ならいざ知らず、最近の夫婦間ではどうってことはない。

ぼくたちは、社内結婚だった。別の課にいた小枝子と、社員研修で一緒になった。短大を出て、三年。まだどこかにあどけなさが残っているキュートな感じの女子社員だった。

ぼくは、六年選手になる。小枝子より五つ上だ。まだ、平だが、どうもポストは上がつかえているという感じだ。いつまでも営業の第一線から移動はなかった。

小枝子とは交際一年で、結婚へとかなり躊躇いもなく進んでいった。互いの趣味や考え方、家族関係、過去の経歴など、その辺は隠し立てすることなく、話していたが、小枝子にはある恐怖症があったのだ。

それは、結婚して、新しいマンションに新居を構えたときから気がついた。一週間、毎日、晩御飯はコンビニの弁当だった。昼は、社員食堂で食べるからいい。朝は大概はパン食だ。肝心の楽しみな夕食が弁当では新婚生活も味気ないと、小枝子に共稼ぎで大変だろうが、手料理を食べさせてくれるよう頼んだ。

小枝子は、だんまりしたまま俯いて、ただ、泣くのだった。

「どうした。ぼくが何か悪いことでも云ったのか」

「ううん」と、首を横に振りながら、小枝子は何も語ろうとしない。

「もし、料理が不得意なら、それでもいいんだ。でも、何かそれなりに作れるだろう。一度でいいから、君の作った手料理というものを味わってみたいんだ。夫婦になって家庭を持ったという感じがするだろう」

小枝子は、じっと床の一点を凝視めていた。そして、ぽつりと口を開いた。

「わたしね、あなたに内緒にしていたけど、包丁やナイフが嫌なの。尖端恐怖症ってあるでしょう。尖ったもので眩暈がするというの。あれと同じで、刃を見ていると、眩暈がするのよ」

ぼくは、ようやく何もかもを納得していた。交際していたときでも、そんな兆候があって、変だと思っていた。

「そうか、いいんだよ、そんなこと、気にするなよ。料理なら、ぼくが作ってあげるから。こう見えても、料理は割りと得意なんだ」

「いいの？ 本当に？ 台所を任せてしまって」

小枝子は嬉しそうに抱きついてきた。そう云えば、わが家には包丁もナイフもないことに気が付いた。まあ、誰にでも怖いもののひとつやふたつはあるだろう。夫婦共稼ぎなんだ。女だから料理を作らねばならないなんて古い考えかもしれない。明日から、包丁を買ってきて、ぼくが会社の帰りにスーパーへ寄って、材料も買ってくることにした。

それから、毎日、料理当番はぼくがすることとなった。

小枝子と一緒にあって、ひと月が経った。部屋は散らかる一方だ。おかしいなと思っていた。小枝子が掃除をしたところをぼくは見たことがなかった。小言は云いたくはないが、あまりだらしなすぎから、つい一言、小枝子に文句を云ってしまった。

「ねえ、どうして、掃除をしないんだ。見ろ、この埃とゴミは」

すると、また小枝子はしくしくと泣き始めた。何か、悪いことを云ったかなとまたぼくは尻込みしてしまう。

「ごめんね。ダスト・アレルギーって知っている？ わたし、埃が苦手なの。ジンマシンが出たり、咳が止まらなくなるの」

「そうか、そんな体質ってあるよな。この前もテレビでやっていた。ごめんな、きついこと云って。掃除なら、ぼくがやるから、その間は君は外に出ていればいい」

「いいの？ 本当に？ お掃除も任せてしまって」

「うん、だから、男だから女だからってのは古いと思うんだ。いまは夫婦もジェンダーフリーの時代なんだから。気にしなくていいよ」

ぼくはなんて優しい夫なんだろう。

こっちも仕事で疲れて帰ってきている。それから、炊事だ。それが終わると、皿洗いから掃除もする。

「あなた、トイレが汚れていてよ。それと、お風呂もね。洗面所も綺麗にしておいてね。わたし、少し友達のところに行っているから」

「はい、はい」と、実にいい夫だと自分でも感心していた。

そこへ、クリーニング屋が配達にくる。ワイシャツやズボンが判るが、下着までクリーニングに出していた。驚いた。小枝子は何を考えているんだ。無駄なことをしている。ぼくは非常識もはなはだしいと、小枝子が来るのを苛々して待っていた。

「ただいま、ああ、よくお喋りしたわ」と、小枝子のご帰宅だ。時計はもう十二時近い。ぼくは可愛らしい花柄のエプロンをして、食卓に座って、バーボンストレートで飲んでいた。

「まあ、ここへ座れよ。今日、クリーニング屋が来た。どうして、下着までクリーニングに出すんだよ」

すると、小枝子は、急に顔色を変えた。顔をくしゃくしゃにして、うっうっうっといまにも泣き出しそうだ。

「今度は何だよ」

「あのね、渦巻き恐怖症って知っている？ わたしね、洗濯物が回るのを見ているだけで、吐き気がして、目が回り、失神しそうになるのよ」

「見なきゃいいだろう。それに蓋してんだろうが」

「違うの。回っていると意識するだけで、もうダメなのよ。ねえ、わたしと結婚したことで後悔していない？ わたしが病気だから」

ぼくはぎくりとした。考えてみれば、精神的な病気なんだから、ぼくがフォローしてやらねばならないことなんだ。小枝子は可哀想な女なんだ。

「判ったよ。ぼくが洗濯をしてあげるから、クリーニングにはよそ行きの服だけ出すんだ。勿体無いし、恥ずかしいから、いいね」

小枝子はまたぼくに抱きついてきた。ぼくは、とんでもなく優しい、いい夫を演じていた。

毎日、炊事、洗濯、掃除と忙しい。その間、小枝子はテレビを見ながら、ポテチなんか食べて、ケラケラと笑っている。ところで、何か、おかしくないか？

何をしてもうまくゆかなかった。ぼくほど、ついていない人間はいないのではないか。ヨブのように、神が与えたこれが試練としても、あまり酷いものだった。三十年生きてきて、すべてが失敗の連続だった。

思えば、大学受験で失敗してから、転落の一途を辿ることになった。目指す大学は諦めて、一浪して、2ランク下の三流大学にどうでも入ってしまった。浪人中はろくに勉強もせず、ただ、予備校へ高い授業料を支払っていた親に申し訳ないと思う。

父は、無駄なことは何ひとつないと云うけど、大学時代も、ただ、いろんな女の尻を追いかけて、失恋ばかりしていた。それが原因で、勉強も投げ出して、講義にも顔を出さず、単位もぎりぎりお情けでとれたというより、卒業させられたといった方がぴったりする。

就職試験でも失敗した。名前の通った上場会社は、狭き門で、試験問題もちんぷんかんぷんだった。常識問題にしても、ぼくの知らない社会時事の用語が頻繁に出ていたし、商業英語を訳せという問題では、判らない単語ばかりで文章にならない。

面接試験に於ては顔から火が出るように恥ずかしかった。

「君は何が得意なんですか」と、訊かれて、思い当たるものがない。「特技」も「趣味」も、「資格」もすべて空欄だった。

「最近、何か面白い本を読みましたか」と、いう質問には、まさか、漫画週刊誌とは云えない。アダルト雑誌とも云えない。考えてみれば、一年でどれほどの本を読んだらうか。テレビゲームばかりやってきた。そのゲームの攻略本なら、熱心に読んだが。

「将来は、どんなポストにつきたいですか」と、いう質問にも言葉が出ない。やりたい仕事が見つからない。社保完備で、週休二日制、給与と賞与が世間並で、将来性のある安定した会社ということで、選んだのだが、自分のやりたいことが判らない。

それで、就職浪人を一年してしまった。ただ、ぶらぶらと遊んでいた。ようやく、腰掛のつもりで入社したのが、明日にでも潰れるかもしれない中小企業の営業だった。何ができるかとたたき上げの社長に訊かれて、言葉に詰まっていると、

「君は、体が丈夫そうだから、外周りだな。足で稼ぐのがいい」と、頭の悪いところを体力でカバーしろとばかり云われた。何も云えなかった。どうせ、こんな同族の小さい会社は、そのうち、いい口があったら乗り換えだと、そう思って、いい加減な仕事をしていた。

スーパーやデパートを周り、商品サンプルをアタッシュケースに入れて新商品の売り込みだ。商談室の待合椅子には、ぼくのような若いセールスマンたちが、順番を待って並んでいた。アポをとって、訪問しても二時間は待たされる。時間通りには行かないのだ。

散々待たされて、いざ商談となる。ぼくは口べただから、うまく商品の説明ができないでいた。

「おたくのセールスポイントは何ですか。一体、何を売りこみに来たんですか」

仕舞いにはバイヤーは怒り出す。どこでもそうだから、取引先から苦情も出ていた。

「もっとまじな担当を回してください」と。それで、ぼくはまた配置転換になった。年寄り社員ばかりいる、倉庫業務だ。商品管理というが、裏方だ。

同期入社の仲間はみんな、主任になったり、上へと行っているのに、ぼくだけが若くして窓際族扱いだった。みんな、彼女も作って、結婚し、マイホームも持って、子供までできているというのに、ぼくだけがいまだに、彼女もできない。女の人にうまく言葉がけもできないし、ぼく自身に魅力がないからだ。

そんなある日、ぼくが出社すると、みんなじろじろとぼくを見る。

「あれ、また戻ってきたのか。さっき、来て、持ち場に行ったじゃないか。いやに、活発で人が変わったようだ」とみんな話していたけど、何かいいことがあったか」

と、上司に云われた。何を云っているのか。

「ぼくは、たったいま、会社に来たところですけど」

「そんな、馬鹿な。じゃ、さっきの君にうりふたつの人間は、偽者というわけか」

そう事務所では大笑いしていた。

それが、一度だけではなかった。あちこちで、ぼくの偽者が出没していた。ドッペルゲンガー。ぼくは、そんな霊的な不思議なことは信じないが、その、ぼくのぼでないぼくを見たら、死ぬという云い伝えだけは知っている。ぼくがぼくと出会う。それはぞっとする話だ。ぼくを見たら、ぼくは死ぬ。

家に帰ると、母が玄関に出て、素っ頓狂な声を出した。

「あれま、たったいま、あんた、帰ってきて、二階の自分の部屋に上がっていったところでしょう。上にいるのは誰なのよ」

ついに現れた。ぼくは、見ると死ぬというのも忘れて、二階に駆けあがっていた。そして、自分の部屋のドアを思いっきり開けた。そこには、なんと、ぼく自身がいた。服装もすっかりと同じだ。

「やあ、とうとう、出くわしたね」

と、ぼくの偽者は余裕綽々の声で云う。

「き、君は何者なんだ」

「ぼくか、ぼくは君だ。君の交代要員だよ」

「交代要員？」

「そうだ、君は人生に失敗した。失敗したら、スペアと交換するんだ」

「な、なんだって？」

「ほら、君の手足を見てごらん。だんだんと薄れてゆくだろう」

ぼくは、自分の指が消えてゆくのが見えた。足もすでに半分消えかかっていた。

「今度は、ぼくの出番だ。積極的で、明るく、口八丁手八丁のぼくが来たから、人生はがらりと変わるよ。君の役目は終わったんだ。さようなら」

ぼくは、だんだんと意識も消えていった。

第565話 人員整理

北村工業では、五期の赤字が続き、すでに累積債務が年商を越えていた。このままでは債務超過に陥る。すでに銀行は相手にしていない。

「社長さん、合理化計画はどうになりました。やる気があるんですか。うちとしても、これ以上返済猶予はできませんからね」

と、どこも厳しい。社長の北村は、緊急役員会を開いた。

「ということで、何とか本腰を入れて、わが社も合理化を進めなければ、銀行の支援打ち切り、手形貸付のジャンプにはこれ以上応じないと云ってきたのだ。こうなったら、自助努力で、経常利益を出さねばならん。経費節減はどうなっているんだ」

全員、頭を抱えて、財務諸表を見ていた。

「公租公課というのをなんとか半分に削れないものか」

「そんな、税金は削れません」経理部長は憮然として云った。

「だったら、この交通費はどうだ。こんなに誰が使っているのだ」

みんなしらーとした顔をあらぬ方向に向けていた

「それは、大方、社長が出張に次ぐまた出張で使っているのです。月のうち会社にいるのは一週間」

（そうか、それは、わしが東京の愛人に逢いにゆくときの旅費だな、それは削れない）

「そうか、それは業務であるからして、削れないな」

「接待交際費をもっと削ればいいんです」と、専務が提言した。

「誰だ、こんなに使っているのは」

社長が全員を睨み渡した。

「それは、社長だけですよ、使っているのは。ゴルフだ、あの会だ、この会だと、少し自重してもらわないと」と、常務もこの際はっきりと云った。

「それはだな、銀行の頭取とか、支払いで助けてもらっている取引先の社長とかのな、つきあいというのも大切だからじゃ」

それだけではない。愛人への付け届けまで、経費で落としている。何でも、自家消費の分まで領収書を出しているとか。社長が一番、経費を使っているのだ。それは、聖域として誰も立ち入ることはできない。会社が大変なときでも、売上が半分になっても、いままで通りの費用を計上するのが、社長が使う分だった。

ここまで零落してきたのには、社長の判断の甘さがあった。バブルの絶頂期に、余剰資金で土地を買った。それも最高に高いときにだ。そして、株にも手を広げだ。日経平均株価が四万に達するというときに手を出した。すべて、ワンマン社長の号令のもとに、財テクだと、大企業の真似ごとをして、いい気になっていたのが十数年前。世の中の先を見ている企業の財務担当が、そろそろヤバイと手を引いてきたときに、参入してきたから、あとはただ下り坂。財テクの失敗は社長の責任だった。それが、北村工業の命

取りになろうとしている。あれから十数年、よく持ちこたえていると思う。

自分の失策を棚にあげて、社長は幹部や役員たちを叱責する。

「こうなったのも、おまえたちの管理能力のなさが原因だ。いいか、なんとしても経費節減をするのだ。光熱費も削減しろ。目標、三十パーセント」

早速、会議室の電灯が消された。

「エアコンも停止するから、明日からみんなに団扇を持ってこさせるように」

とは云っても、いまのビルは窓が開かない。太陽光線だけは入ってくるから、温室のように温度が上がるだろう。

「消耗品もカットしよう。コピー用紙は使えるものなら裏も使え。トイレの紙はひとり三十センチまで」

社長の大号令がかかった。北村工業には後がない。

「さあ、あとは削るところはないか。そうだ、賞与はカットだ」

すると、人事部長が冷たく云った。

「お言葉ですが、賞与というものはここ三年、出しておりません」

「よし、そうか、それなら、リストラだ」

全員がごくりと喉を鳴らした。ついに来るべきものがきた。

「いいか、この船は小型に換えるのだ。定員が少なくなる。全員を乗せていけば沈没するのだ。まず、一人、首にしよう。一番能力のないやつを生贄にしろ。いいな。それから順を追ってやるのだ。社員は姿勢を正し、一生懸命に働くだろうな」

すると、人事部長が云いにくそうに問うた。

「まず、誰を血祭りに上げるんですか」

「それは、君が決めることだ。会社のためにならない人間だ。いてもいなくてもいい人間だ。判るだろう。そいつを呼んで、依願退職を話せ。それでも嫌だと断ったら、一月分の給与と退職金を支払って、解雇予告だ。それでも、ごねたら、南京袋にぶちこんで、紐で縛り上げ、川へ捨ててきて構わん」

社長はそこまで云い切った。もともと従業員の扱いには冷たく、突き放したものの云い方をしていた。

どこの会社もそうだが、最終的には、経費の三分の一を占める人件費に手っ取り早く手をつける。どこかの自動車会社のように、何万人も首切りして利益を上げて、ご満悦の社長もいるくらいだ。まさに一将校成って万骨枯る。会社の繁栄は多くの社員の犠牲の上に立っているのだ。

緊急役員会が終わって、いよいよ、みんなが目標数値に向けて動き出した。

その日から社長の姿が見えない。みんなはまた出張か、ゴルフかと気にもしないていた。それにしても、今回は長すぎた。女子社員のひとりが噂していた。

「わたしね、この前の夜ね、ひとりで残業していたでしょう。それでね、見たのよ。専務と人事部長が、上の階から大きな麻の袋に蠢くものを入れてね、密かに外に運び出し

ているところを」

「それにしても、社長はどこへ雲隠れしたんだろうな、こんな大事なときに」
社員の噂だけで、会社はトップがいてもいなくても動いていた。

第566話 時効

藤島俊三、三十九歳、配管工。昭和六十三年八月十三日、お盆の十三日に、帰省のため、手薄になった深夜スーパーに押し入り、店長を殺害、売上金三百万を強奪した。殺人の時効の十五年を平成十五年八月十三日で迎える。当時は、殺害の仕方が残酷であったため、大きなニュースになり、容疑者七千人、延捜査員三千人という大掛かりな捜査にもかかわらず、ついに時効まであと二日と迫った。捜査本部はとっくに解散していたが、数名の刑事が、いまだに捜査を継続していた。

犯人の藤島は、東京を離れ、青森市内に住みついていた。いまは、地元の女性と結婚して、小学生の娘が二人いた。仕事ぶりも真面目で、いい夫でありいい父親でもあり、隣近所の評判もいい。犯行現場には遺留品も証拠も殆どなく、捜査は難航していた。流しの犯行に近い。計画性もあったとは思えない。目撃情報も少ないのは、お盆で都心はがらがらになるため、街はとくに灯の消えたようになっていた。その前日までは帰省客がお土産を買ったりするので混んでいた。十三日ともなると、辺りの商店街は店休のところが多くなり、深夜スーパーでも従業員の多くが、お盆休暇で帰省した。店長ひとりだけが、真夜中のスーパーのレジに立っていた。

防犯ビデオには覆面をしている若い男の姿が映っている。判っているのは、体型と、仕草、歩き方の特徴などであった。少し、右足を引きずる。それは、何かの病歴か。捜査班は、整形外科を回って、カルテを調べ歩いたりした。

そして、とうとうお蔵入りとなるか。新聞にも、時効が近づくと、忘れていた人々に喚起するように小さく記事が載っていた。

「よう、お盆はどうすんだ。帰るんか」

アパートの隣の部屋に住む藤島とは息の合う成瀬が、廊下で訊いた。今日から仕事はお盆休みだった。藤島の家内は子供を連れて、昨日から実家に帰っていた。あとで、藤島も隣町の嫁の実家に行くつもりであった。

「嫁の実家にはあさって帰るが」

「そう云えば、藤島の家は東京だったな。東京には帰らないのか」

「向こうはお盆は七月ですよ。あれ？ 成瀬も確か東京じゃなかったのかい」

成瀬はぎくりとした。言葉が違うから、この田舎にいれば出何処が判る。

「どうだい、これから呑むか。いつものスナックに新しい若い子が入ったんだよ。どうせ、今夜はちゃんがなんだろ」

成瀬は藤島を酒に誘った。暑いから、生ビールもいと、喉が鳴った。

二人で、深夜まで呑み歩いた。いつもこうだった。どちらも帰ろうと云わないで、次ぎだ、次だとしつこい酒だった。

「成瀬なあ、おれなあ、実は…。おっと、こいつは云えねえ。あと一日だ」

何度も、藤島は云いたくなかったときがある。自分が重大事件の犯人であると、いままでもどんなに云いたかったか。犯罪者の心境にはそんな罪の意識から告白して楽になりたいとする懺悔の気持ちが働いていた。だが、あさってになれば、時効成立、無罪放免だ。藤島は、そのときになれば、みんな話して、胸のつかえを取りたかった。

「なんだよ、云いかけて、サマージャンボでも当たったか」

成瀬の目が光っていた。

ぐでぐでに酔って、二人ともアパートに帰ってきた。藤島は、前後不覚になるほど酔っていた。成瀬に抱きかかえられてタクシーでご帰還だ。部屋の中まで連れて行ってもらうほどの泥酔だ。

藤島が目覚めたとき、すっかり明るくなっていた。仕事は休みだからいつまでも寝ていていいのだが、よく寝たと思った。腕時計は十時だった。新聞を取ってくる。八月十四日木曜日となっている。

「あれ、おかしいな。今日は十三日でなかったか。」

テレビを点けてみると、ザラザラと映りが悪い。いつものようにラジオをつけてみた。木曜日にやっている懐かしのポップスを流していた。たまに聞く番組だった。車の中で聞いていた。

「間違いない。今日は、十四日なんだ。ということは、おれは丸一日以上も酔っ払って寝ていたことになる。昨日、十三日でおれの時効は成立した。ということは、おれは、晴れて無罪放免だ。やった。やったぞ。とうとう、十五年経ってしまった。と、ドアを叩く音がする。」

「おい、藤島、おれだよ。死んでいるんじゃないだろうな」

成瀬の声だ。ドアを開ける。

「どうしたい、昨日は一日寝ていたのか。あのまま死んだのかと思ったぜ。かなり浴びたからな」

藤島は確かめるように成瀬に訊いた。

「今日は、十四日なのか？」

「そうだよ、何、寝ぼけているんだ。さあ、これから約束の釣りに行こうぜ。船を頼んでいる」

藤島は釣り気遣いで、成瀬とはよく釣りにゆく。そういえば、呑みの席で約束したのを思い出していた。女房の実家には今晚行く予定でいた。どうも、向こうの親戚は苦手だった。

藤島は、安堵の色で、いつもより快活に振舞っていた。

「なんだよ、いいことあったのか」成瀬はちらりと見て笑った。

「うん、まあな」

船には仲間が他に三人待っていた。湾内の穴場へ、小型のクルーザーが向った。いい天気、何か、藤島の気持ちを象徴しているようであった。

釣りが終われば、みんなで生ビールを飲みながら、釣り談義に花を咲かせる。みんなと別れてから、成瀬は藤島に、もう一軒だけつきあえと、知り合いの寿司屋へ行く。お盆だから、やっている店は少ない。がらんとしていた。何か、うきうきしている藤島は、成瀬に何かを話したがっていた。

「おまえが、隣の部屋に越してきたのは四年前だったな。いまだにかあちゃんを貰う気はないのか」藤島が云った。

「よせよ、女は遊んでいたほうが楽しいぜ」

「実はな、おれな」と、藤島は辺りを見た。寿司屋のおやじもタバコ啜えて奥で新聞を見ていた。成瀬に改まって話すのは始めてだった。

「なんだよ、例のいいことか」「いいことでもないんだが、おれ、昔、若気の至りってやつで、人をあやめたことがあるんだ。昨日がその時効でな。苦しかった。おまえなら、親友だから、話してもいいと思った。過ぎたことだけど、最初に調べられたときはぞっとしたが、いまは、馬鹿なことをしたなっていう気持ちだ」

すると、成瀬はいままでと態度を変えて、話し出した。

「おれも、ある男を十五年追っていた。長かった。それが今日、ようやくおれの仕事が終わる。おれは、この日をずっと待っていた」と、徐に、成瀬は手錠を出して、藤島の手にかけた。藤島は一瞬、冗談かと思った。

「いまの話はすべてボイスレコーダーに録音しておいた。新聞は小細工しておいたんだ。ラジオは、再放送だ。おまえの習慣はすべて知り尽くしていた。今日は、まだ十三日なんだ。これから署に連行する」

そう云って、成瀬刑事は警察手帖を提示していた。

第567話 予知夢

とにかく、わたしの夢は当たるのよ。それも、ずっと未来の予知ではなくて、明日のことを夢に見るのよ。朝、起きて夜寝るまでの一日の夢がそっくりそのままなのよ。そりゃ、わたしも初めは信じなかったわ。でもね、すべて、現実で体験したこと、見聞きしたことが、復習するようにやってくる。あまりに怖いよ。自分の死ぬのも見てしまうようですね。

一日二日じゃないのよ。十日もひと月もそんな夢を見てごらんない。誰かに本当のこととして教えたくなるから、わたし、歯医者の中先生が競輪好きだと聞いたので、新聞で見た結果を朝起きてすぐに先生に電話したわ。

「先生、騙されたと思って、3-6を買って」

すると先生は馬鹿にして笑ったのよ。

「それは、一番来そうもない組み合わせだよ。まず、考えられないね。でも、君はうちのお客だし、君のために千円だけ買ってみよう。それが当たったら、半分あげるから」って、先生ったらゲタゲタ笑うのよ。

ところがね、その夕方に、先生から慌てて電話があったの。

「き、君の云ったのが大穴だった。万車券になった。いっ一千万になったよ。どうする」

約束通り、先生から半分貰いました。それから競輪のあるたびに、先生から電話がかかってきて、先生ったらものすごい御殿まで建ててしまってた。

わたしは、試しに自分でやったことのない株も買ってみたわ。金がいくらでもあったけど、それを自分でも増やしてみたかったのね。やはり、新聞で、株価の急激な値上げしたものを買ったのよ。それを続けていたら、一億が二億とだんだんと膨れ上がってゆくじゃない。もう、お金なんかたくさんという感じになってね。

それで、今度は人助けをしようと思ったの。でも、歴史や運命をわたしの手で勝手に変えていいのかしらと思ったわ。でも、ちょっとしたことで不幸になる人たちを見ていられなかったの。

テレビで見た航空機墜落の事故のときも、たまたま友人一家が海外旅行を今日するという事になっていたから、わたし、朝一番で電話をしたの。飛行機が落ちる夢を見たから次ぎの飛行機に変えてと。友人にそう云われて、気持ちが悪くなった友人は、飛行機を無理して次ぎの便にしたのね。すると、あの惨事よ。友人は海外から泣きながらお礼の電話をしてきてね。

台風で橋が流されて、ワゴン車の一家が行方不明になった事故をニュースで見たときもよ。あのときも、わたしは、わざわざ名前を覚えていて、その家族に連絡したのよ。別の橋を通るようにと。すると、その家族からは、どこの誰だか判らないけど、予言する女の人があると、テレビ局に情報を流したのよね。出身地と名前だけ電話で云ったものだから、たちまちわたしだということがバレてね。それから大変よ。民放各局から出演依頼はくる。もう、預言者先生よね。株屋からヤクザまで毎日訪ねてくるのよ。どこかに姿をくらまそうって、この別荘に逃げてきたの。わたしひとりでは何をされるか判らないから、ガードマンも何人か雇ったのよ。いまは、テレビ電話だけでテレビ出演していて、誰もわたしがどこに住んでいるか判らないようにはしているけどね。

ずっと先のことは判らないけど、明日のことも判るということは、便利なようで、わたしは、気象庁に入る事になったのね。いままで、当たらないと不評だった。天気予報も、ずばりの中。それだけではなく、地震の予知もできるから、地震注意報も発令できるようになったのよ。事前に被害を最小限に食い止めることができるので、大変重宝されているわ。

でもね、一部の人には批判もあってね、未来が見えると生甲斐がないというのよ。何が起こるか判らないから生きているのが面白いというのよ。それが、すべて判ってしまうと、楽しみも驚きもなにもなくて、すべて筋書き通りの人生を歩くことになるよ、そ

れは、わたしでもつまらないわ。

わたしは、そんなことがあってから、夫と不和になり、離婚したのよ。財産でもめたのね。人間、貧乏しているうちが、家族というつつましい関係を保てるのだと思った。金が絡めば、無機質な関係になるんだわ。

でもね、金ではなんでも買えた。いい寄って来る男も沢山いてね、こんな三十も後半のおばさんでしょう。誰も女として見ていないのに、いまは若い健康的な二十四才の人と再婚したんだけど、年下の男もいいわね。毎日、有り余るお金と、素敵な男性と、おいしい料理、贅沢な別荘暮らし。何の不自由もないはずなんだけど、何か足りないのよね。それは、やはり、未来が見える不幸なんだわ。結末が判っている推理小説をだらだらと読んでいるようなものよ。

もう、夢なんか見たくない。お金もご馳走も、若い男も何もいらぬから、わたしに希望というものを頂戴。本当の夢を見せて。

「なんだよ、こいつは、毎日毎朝、ごちゃごちゃと寝言ばかり云いやがって。何が、別荘だよ。若い男だよ、有り余る金だと。いい夢ばかり見ていやがる。あんまり貧乏させたから、せめて夢だけでもいい夢をみたいか。羨ましいよ。おい、かあちゃん、いい加減に起きなよ。飯仕度したら、また内職を頼むよ」

ぼろ家の部屋の中は内職の箱でいっぱいだった。そこの狭い空間に夫婦で寝ていた。女房はいい夢から現実に目覚めた。

「なんだい、人がいい夢を見ていたってのに」

毎朝、寝覚めは不機嫌だった。

第568話 こだわり

わたしの納豆好きは有名だった。いまでも毎日朝晩は納豆がなければ生きてゆけない。というのも、納豆に対する思いが人一倍多いのだ。

わたしの亡き祖父が納豆菌の培養実験に成功して、その権利を無償で納豆屋に渡したということがあった。昭和初期の話だ。それ以来、納豆はツトではなくいまのような清潔な容器に入るようになったとか。何か、納豆に因縁めいたものを感じるのは、そのこともあってか。

わたしが、産まれたときは、両親は商売に忙しく、赤ん坊の面倒も見てもらえないので、子守を頼んだ。東北ではそれをアダコと云った。まだ、中学くらいの娘だったアダコは、一歳くらいのわたしに、毎日、離乳食がわりに納豆ばかり食べさせていたという。後でおふくろがそれを知って、アダコをやめさせたが、すでに手遅れであった。乳児のときに一番口に馴染んだ食べ物がその人の味覚嗜好になってしまう。わたしは、納豆

なしでは生きてゆけない体になってしまっていた。

大阪に就職した若いときにも、アパートに三合炊きの電気釜があり、納豆を買ってくると、たまにひとりで食べていたりした。関西以南はあまり納豆を食べない。それで、社員食堂で毎日、昼、夕食と食べていたが、納豆が出たことはただの一度だった。その一度で、食堂のおばさんたちは、納豆をメニューからはずした。というのも、人気がなく、社員のほぼ全員が嫌いだといって拒否したのだった。おばさんたちは困っていた。大きなステンレスのボールにどっさり納豆を醤油まで入れてといてしまったのだ。何十人分か、すごい量だったが、わたしは好物が捨てられるのは忍びないので、ボールごともらった。それをひとりで抱えるようにして食べ始めると、みんな、何か異国の見たこともない珍獣でも見るように不気味な顔で覗いていた。

大阪は、四国、九州から就職で来る人が多かった。その職場では青森からというより、東北からはわたしひとりだった。

嫁を長崎からもらったので、年に一度は里帰りに同行した。大阪もそうだが、どうも九州の味にも馴染めない。何にでも砂糖を入れて甘くしたり、味噌汁も赤だしだとか、おしんこも干乾びて硬かったりした。

長崎に行くと、一週間は嫁の実家に泊まるので、食事に閉口していた。一週間も納豆を食べないと、禁断症状が出てくる。手が震えてきて、道端に倒れ、喉をかきむしるような格好をする。嫁は可哀想に思ったのか、二人で市内のスーパーや食品店を覗いて歩いたが、なかなか当時はみつからない。ようやく大きなスーパーで、少しだけ申し訳程度に並べてある納豆を発見した。子供がおやつを手にしたときのように、大の大人が嬉しそうに家に戻る。だが、その納豆の不味かったことはいまも忘れない。

納豆に関しては、何よりもうるさい。誰かが親切に納豆をといてあげるのは、固く断る。たいていの人は、納豆を掻き混ぜないで、なんと、最初に醤油をかけてしまうのだ。それは、とても許しがたい行為だった。納豆菌が死んでしまう。納豆道というのがあるといえるが、わたしは五段ぐらいか。

納豆はできるだけ掻き混ぜて、ネバネバが強くなり、ひっくり返しても落ちてこないくらいがいい。それに入れる薬味もいろいろ。一番好きなのは、おしんこを刻んで混ぜるのだ。刻みネギもいいし、粗め昆布もいい、紫蘇の実もまたいい。大根おろしに、納豆汁。食欲がないときは、納豆をかけたご飯の上から味噌汁をぶっかける。納豆汁ぶっかけご飯というのは、それこそ、わたしが幼児のときに毎日食べさせられた、原体験の味覚だ。この世でそれに勝る味のものはない。どんな刺し身でもステーキでも、わたしの中では納豆汁ぶっかけご飯に勝てるものなどこの世にないのだ。たまに、どこかの犬か猫がそんなご飯を与えられていると、なんと犬ごときにご馳走をと、いたく発奮するのだった。

ご飯と納豆の合わせる分量にも、納豆に入れる醤油の分量にもいちいち煩い。昔の人はおかずが少なかったから、納豆が醤油の上で泳いでいるのをご飯にかけて食べたという。いまでは、そんな不健康なことをと思うほど、納豆も食べられなかった時代もあった。

た。いまは、少なめだ。ご飯が四とすれば納豆が一の正確な割合で、箸でぐるぐると混ぜる。これは、いい運動になる。汗をかき、息切れして、食べる頃になればへとへとに疲れてしまう。そうすることにより、腹が減り、余計においしく感ずるのだった。納豆を掻き混ぜるときは、全身を使っての体操だった。

わたしは、バツイチだった。一度離婚している。その離婚の原因が実は納豆だった。前の女房は、何も知らないから、ある日、引き割り納豆を買ってきた。わたしは怒って、すぐに取り替えてこいと命じた。すると、今度は大粒の納豆を買ってきたのだ。それもすぐに取り替えてこいと命じた。そのことで口論になった。

「なによ、納豆ぐらいで、バカじゃないのよ」

「な、なんと。納豆ぐらい、おまえ、納豆をバカにしているな。おれの大好きな納豆を」

やはり、九州の嫁とは食生活が合わない。

「し、しかも、水戸納豆だと？ おれは太子納豆より食べないんだ。判るか、何年夫婦をやっているんだよ。青森は三戸の太子納豆だ、これよりないんだ」

「もう、わたし、とてもあなたについてゆけません。実家に帰らせていただきます」

女房はそれっきり帰ってこなかった。

女房が出ていったことでむしゃくしゃしていたこともあった。わたしは、またチョンガになって、家でひとりで食べるのも気が向かないから、近くの定食屋に夜は飯を食いにいった。そこでも納豆は必ず定番で食べる。

「おやじ、この納豆は水戸ではないだろうな」

おやじはまた煩いやつが来たという目をして睨んだ。

「太子納豆だよ。それにあなたのご要望でいつも小粒の新鮮なものを選んで買ってあるから安心しな」

みんな客はくすくすと笑う。食べ物にこだわって何が悪い。わたしは不機嫌になった。すると、おやじは、サービスのつもりで、わたしの納豆にうずらの生卵を割って入れた。わたしは、ついカッとなつた。

「な、なんてことするんだ。卵と納豆は合わないんだよ。とんでもないことをしてくれる。取り替えてくれ」

さすがのおやじもそれにはぷっつんと切れた。

「なんだとお、黙って聞いていりゃ、ぐちゃぐちゃと煩いことばかりまくしたてやがって、おう、表へ出ろい」

おやじの手には包丁が握られていた。卵を納豆に混ぜるのは邪道だった。とても許せるものではない。わたしも、カッカッして、表へ出た。とっくみあいの喧嘩になったが、おやじの手にあった包丁の取り合いで、わたしはつい、おやじを刺してしまった。

そう、たいした傷ではないが、通報した警察官がパトカーでかけつけ、救急車もやってきた。わたしは、興奮して、いつのまにか手には納豆がネバネバとついていて、おやじの頭にも納豆。

「それで、納豆が喧嘩の原因だというのだな。たかだか納豆ぐらいで」

「な、いまなんと云った。納豆をバカにすると許さんぞ」

わたしは取調室で立ち上がっていた。そして、堪えていたものがどっと吐き出されるように号泣していた。

警官たちは頭を抱えていた。

第569話 本 塚

二〇三五年、北村拓也は、飛行機で三十年ぶりの故国の土を踏んでいた。古本屋を廃業して、単身、南国の島国に移住してから実にそれだけの時間が経過していた。

三十年前の日本もひどいものがあった。税金は高くなり、物価も上がり、治安も悪くなり、犯罪が増加して手のつけられないほどになっていた。知的レベルも極端に落ちて、馬鹿げたことがあたりまえに通用する世の中に見切りをつけて、北村は、こんな国に住んでいても、将来の望みも老後の安心もないと、当時の多くの人々と一緒に物価の安い、治安のいい他国へと移住して行ったのだった。

年金だけでは暮らせない世の中になっていたのに、子供たちも大変で、親の面倒どころか自分たちの生活も維持できないでいたし、若い人たちの仕事もないときに、老人の仕事は皆無だった。年金はどんどんと減額されて、とても、老人一人の食費にもならない。それで、介護だ、福祉税だと、その年金からも取り立てようとする政府の異常な政策から、悲鳴を上げてみんな出国していった。

北村は、残った財産を処分すると、南洋の島に小さな土地を買って、そこで自給自足の生活に近い生き方を求めている。電気やガス、車なんかはなくてもいい。金のかからない生活をするところが、この地上のどこかにはまだあった。畑を耕し、海からは海草を取り、文明に汚染されていないエコロジーの生活を過ごしていたおかげで、すっかりと健康な老人になっていた。

空港に降り立った北村は八十五歳の老人だったが、まだ六十くらいに見えるほどしゃんとしていた。しかも、肌が日焼けして目と歯だけが白く、見た目には誰だか判らない。手紙を出していたから、空港には、息子夫婦と孫たちが迎えに出ていた。

「お父さん、元気そうで」と、三十年ぶりに息子たちに逢う。みんな色白で、異様に痩せていた。

「どうした、みんな、病気じゃないのか。随分と痩せているじゃないか」

かつてのアフリカの飢餓の難民のように腹だけが膨れて見えた。

「一日、一食より食べられないんだ」

聞けば、収入の大方が税金で持ってゆかれて、生活費も取れないという。空港からおぼろのバスで東京駅へと向かう。車窓から見る風景は異常だった。道路のあちこちに廃車の車が捨ててある。電化製品も不法投棄で、まるで国全体が巨大なゴミ捨て場だ。空港のロビーでも腐敗臭がしていたが、窓を開けると、どこでもゴミの匂いが鼻をつい

た。すでに、行政はゴミの処理ができないでいた。街のあちこちにゴミの山だらけ。それに蠅が異常に発生していた。

街の看板には文字というものが見えない。すべてマークだけだった。

「どうしたんだ。どこにも日本語が書いていないじゃないか」

北村が息子に訊くと、

「いまは、文字が読める人が国民の半分もいないんだ。すでに教育は荒廃して、学校で勉強している子供は少なくなっている。学校自体も廃校になっているんだ」

というから、北村は衝撃を覚えていた。

「じゃ、孫たちはどうしている」

「みんな、学校に行かせる余裕もないから、小学校を卒業したら働かせているんだ」

東京も変わった。どこも荒れていた。恐慌が進んで、もう、民間にも政府にも建物や道路の補修をする財力もない。壊れたものはそのまま放置されていた。文明の行き着くところはこんな墓場なのだ。

駅から蒸気機関車で、郷里の町まで向かった。息子たちとはそこで別れた。郷里には下の息子がいるという。またSLに逆戻りしていた。それも、デッキまでぶらさがるほどの乗客でいっぱいだ。戦後買出し部隊のような大きな荷物を背負う人もいた。列車の中で話す、若い人たちの言葉は理解できなかった。これは日本語なのかと北村は耳を澄まして聞いていた。乱れた日本語は全く別の言語になっているようであった。それが若い人からその下へと伝播して、従来の日本語は破壊され、通じなくなっている。

北村の持っていた鞆がちょっと目を離した隙に盗まれた。そのことで騒ぐと、みんなから白い目で見られた。年寄りたちに聞くと、盗られる方が悪いのだという。財布とパスポートだけは身につけていて助かったが、酷い国に成り下がっていた。

汽車は、丸一日かかって、ようやく懐かしい北村の郷里へと到着していた。荒れているのはどこも同じで、駅前広場からしてゴミの山だ。そのゴミを漁っている子供たちもいる。使えるものを使い、売れるものは売るといふのだという。

息子夫婦が手に北村拓也と書いた紙を掲げていた。そうでなくては、互いが判らない。息子ももう五十だ。

「お父さん、何を食べてそう健康なんだ」と、息子は疑うくらい、みんなここでも痩せていた。そればかりか、体が垢で真っ黒だ。臭いにおいが漂っていた。

「だって、もう何年も風呂に入っていないもの」と、国民の大半が乞食生活まで落ちていた。

「これは酷い」

かつて繁盛していた駅前の商店街は廃墟だ。大きなビルだけが、シャッターも壊されて焼け焦げたように建っていた。

「ここは、昔、図書館だった建物だろう」と、北村が云うと、

「もう二十五年前に閉鎖したよ。誰も本なんか読まないもの」と、息子はツラーっと答えた。

「かすかに書店の看板が見えるな。ここは昔本屋であつたろう」

中はがらんとして本の姿もいまは見えない。そんなものより、食うほうが大事だった。食料以外は無用のものらしかった。

「お父さんのやっていた古本屋なあ、ここだよ」

北村は息子の指差す屋根のない傾いた廃屋に、ぎっしりと本の山が、三十年経ったいまも風雨に曝されてあつたことに驚いた。

「街の人はここを本塚と呼んでいるんだ」

林語堂という看板の文字がかすかに見えていた。

第570話 反復

時間には正確でなければならない。健一は体内時計でも仕組まれているかのように六時きっかりに起きる。朝のニュースと新聞二紙には必ず目を通す。朝食は生卵と味噌汁でなければいけない。妻の由紀子は昼のパートだから少し後に出勤する。毎日、乗るバスも同じ時間。役所には二十一分で到着する。

八時十五分というタイムカードの時刻の印字は一分の狂いもなく整然と並んでいた。自分の机に向かう。パソコンのメインスイッチを入れて、書類をできるだけゆっくりと机から出して、仕事の準備にとりかかる。これだけで毎日九時までかかる。電話も来ない。来客もない。毎日、決められた書類に数字を入れて、プリントアウトすると、それを上司に回す。

昼は地階の食堂でザル蕎麦だ。一年中、そればかり食べていた。午後になってもやることは午前の延長。何も考えることはない。規則正しい作業だ。健一はちらりと時計を見る。四時だ。そろそろ机の上をかたづけ始める。そして、四時四十五分きっかりに終業の音楽が放送されると、待っていたように二十年も使った鞆を小脇に抱えて帰る。途中は寄り道もしない。そういう習慣はない。直行直帰だ。

家では浴衣に着替え、風呂のあとはビールだ。子供がいない家は静かだった。無口な妻と向き合っただけの夕食。テレビだけが笑っている。本を少し読んで、十一時には床に就く。一度寝てしまえば夢も見ない。健康であり、何の不自由もなく。

翌朝、健一は六時きっかりに起きる。朝のニュースと新聞二紙には必ず目を通す。朝食は生卵と味噌汁でなければいけない。妻の由紀子は昼のパートだから少し後に出勤する。毎日、乗るバスも同じ時間。役所には二十一分で到着する。

八時十五分というタイムカードの時刻の印字は一分の狂いもなく整然と並んでいた。自分の机に向かう。パソコンのメインスイッチを入れて、書類をできるだけゆっくりと机から出して、仕事の準備にとりかかる。これだけで毎日九時までかかる。電話も来ない。来客もない。毎日、決められた書類に数字を入れて、プリントアウトすると、それ

を上司に回す。

昼は地階の食堂でザル蕎麦だ。一年中、そればかり食べていた。午後になってもやることは午前の延長。何も考えることはない。規則正しい作業だ。健一はちらりと時計を見る。四時だ。そろそろ机の上をかたづけ始める。そして、四時四十五分きっかりに終業の音楽が放送されると、待っていたように二十年も使った鞆を小脇に抱えて帰る。途中は寄り道もしない。そういう習慣はない。直行直帰だ。

家では浴衣に着替え、風呂のあとはビールだ。子供がいない家は静かだった。無口な妻と向き合っただけの夕食。テレビだけが笑っている。本を少し読んで、十一時には床に就く。一度寝てしまえば夢も見ない。健康であり、何の不自由もなく。

翌朝、健一は六時きっかりに起きる。朝のニュースと新聞二紙には必ず目を通す。朝食は生卵と味噌汁でなければいけない。妻の由紀子は昼のパートだから少し後に出勤する。毎日、乗るバスも同じ時間。役所には二十一分で到着する。

八時十五分というタイムカードの時刻の印字は一分の狂いもなく整然と並んでいた。自分の机に向かう。パソコンのメインスイッチを入れて、書類をできるだけゆっくと机から出して、仕事の準備にとりかかる。これだけで毎日九時までかかる。電話も来ない。来客もない。毎日、決められた書類に数字を入れて、プリントアウトすると、それを上司に回す。

昼は地階の食堂でザル蕎麦だ。一年中、そればかり食べていた。午後になってもやることは午前の延長。何も考えることはない。規則正しい作業だ。健一はちらりと時計を見る。四時だ。そろそろ机の上をかたづけ始める。そして、四時四十五分きっかりに終業の音楽が放送されると、待っていたように二十年も使った鞆を小脇に抱えて帰る。途中は寄り道もしない。そういう習慣はない。直行直帰だ。

家では浴衣に着替え、風呂のあとはビールだ。子供がいない家は静かだった。無口な妻と向き合っただけの夕食。テレビだけが笑っている。本を少し読んで、十一時には床に就く。一度寝てしまえば夢も見ない。健康であり、何の不自由もなく。

翌朝、健一は六時きっかりに起きる。朝のニュースと新聞二紙には必ず目を通す。朝食は生卵と味噌汁でなければいけない。妻の由紀子は昼のパートだから少し後に出勤する。毎日、乗るバスも同じ時間。役所には二十一分で到着する。

八時十五分というタイムカードの時刻の印字は一分の狂いもなく整然と並んでいた。自分の机に向かう。パソコンのメインスイッチを入れて、書類をできるだけゆっくと机から出して、仕事の準備にとりかかる。これだけで毎日九時までかかる。電話も来ない。来客もない。毎日、決められた書類に数字を入れて、プリントアウトすると、それを上司に回す。

昼は地階の食堂でザル蕎麦だ。一年中、そればかり食べていた。午後になってもやることは午前の延長。何も考えることはない。規則正しい作業だ。健一はちらりと時計を見る。四時だ。そろそろ机の上をかたづけ始める。そして、四時四十五分きっかりに終業の音楽が放送されると、待っていたように二十年も使った鞆を小脇に抱えて帰る。途中は寄り道もしない。そういう習慣はない。直行直帰だ。

家では浴衣に着替え、風呂のあとはビールだ。子供がいない家は静かだった。無口な妻と向き合っただけの夕食。テレビだけが笑っている。本を少し読んで、十一時には床に就く。一度寝てしまえば夢も見ない。健康であり、何の不自由もなく。

毎日がただコピーされただけの退屈な人生もある。ここまできちんと律儀に読んだ人はもっと退屈なのだ。

第571話 等身大

最近、よく耳にする等身大の自分という言い方が、ぼくは大嫌いであった。ぼくは、かといって、自分を過大評価することも過小評価することもないのだが、自然体というよく使う言葉も嫌いで使いたくはないのだ。

こうなってからは、特に等身大の自分が嫌で嫌でたまらない。なんとかしてほしいのである。でも、人間、明日にはどうなるか判らない。ぼくのように願望が成就されたからといって、それがたまらない不幸になったりすることだってあるのだ。

男は特に、女性の前では大きく見せたがるようだ。男の自慢話は聞いているほうが赤くなるくらい恥ずかしいものだ。明らかにホラだと判る大風呂敷ならまだ可愛げがあるというものだが、なんでも桁をひとつ増やして自分を大きく見せたがる。それは、中身がない人間ほど強いのだろう。

ぼく自身も、背が低いから、高く見せたいと、そんなかかとの上げ底の靴を履いたり、足が長く見えるようなズボンを履いたりしていた。果ては、ぶら下がり健康機まで買って、毎日十分づつぶらさがっていた。ただ、もう、二十五にもなって、これ以上、成長するわけがないのに、虚しい努力を続けていた。

最近の芸能人を見ても、小柄なタレントがもてるようだった。それは、女性の方が、すらりとモデルのように背丈が高い人も増えたせいとか、男性が逆に女性のマスコットかペット化しているのではないだろうか。男を見て、女の子たちが、「可愛い」と、云う。昔なら、男子は可愛いという形容詞では呼ばれなかった。凛々しいとか、逞しいとか、男らしかったはずだ。

それが、どうだ。テレビを見れば、言葉使いが女のようなおかま流行で、逆に女の方が、男のような言葉を使っている。ぼくは、可愛いと云われるのが嫌いだった。そう云われないように、背が伸びるあらゆることをしてきた。

怪しげな通販で、漢方薬のようなものも購入してやってみたし、いろんな本を買ってきては研究していた。でも、やはり自分には自分の大きさというものがあり、それ以上でも以下でもないということが、いまになって判然りと判った。もう遅すぎるのだが、そんな馬鹿げたことに走り回っていた自分がとんでもない愚かなものに思えてきた。

一時、3Kが男性のもてる条件だった。高学歴、高収入、そして、背が高いことだ。ほとんどの場合は、そのどれもない。ものの見事に外れている。それで、彼女ができないことに焦っていた。みんなは、いろんな可愛い人を従えて、ぼくの前を過ぎてゆくのに、ぼくだけは、まだ特定の相手どころか、周りの女の子たちは振り向きもしない。

なんとか、振り向かせ、ぼくという存在をどうやったら知らしめることができるだろうかと、悩みはそこだった。ただ、表面だけで、人間の価値を決めるという浅薄な女の子たちが多いから、男たちも、いまはエステに通い、化粧品も揃える。着る服やアクセサリー、髪形や色にも凝るのだ。

ぼくの友人たちは、みんな香水はいくつも持っていたし、それはいまはエチケットの常識らしい。ぼくだけが、みんなの流行から遅れて、外れている。言葉だって、誰もこんな普通の言葉は使っていない。ただ、若者言葉には抵抗があり、使っていないだけなんだが、ぼくも次第に、溶け込んでゆくために、くだらないと思う方角に流されてゆくのだろう。それもこれも、すべて後の祭りには違いない。

ぼくは、ただ、自分を大きく見せるために見栄を張ることでなく、実際に中身を伴った人間の大きさを勝負がしたかった。みんなが見上げるようなすごい人間になるにはどうしたらいいだろうと、あれこれと考えていたときだった。

街頭でキャッチセールスに捕まった。大抵は、若い男か女が、怪しげなホルモン剤だと、さも、病院から横流してきたように、薬を売っている。バイアグラもそうだった。薬事法なんか、夜の巷の世界にはないのだ。みんな、東南アジアか、アフリカからという嘘っぽい薬を高値で売りつけるのだった。

ぼくは、その中で、ひとり、うらぶれた服装をしている婆さんに捕まった。どこか違う。日本人ではないから余計に怪しい。たどたどしい日本語で、「お兄さん、この薬、買わないか。体、大きく、なるだよ」

どこにでもありそうな丸薬ではなく、何でできているか判らないエメラルド色に光っている干した葉っぱだった。見たこともないから、何か効き目がありそうだと、ぼくは、その婆さんから、千円で、騙されたと思って、漢方薬のような葉を買った。

そうだ、その葉を煎じて呑んだときから、ぼくの人生はがらりと変わったんだ。ぼくは、呑んだ後にとても後悔した。いままでの自分のままでよかったんだと、涙さえ流した。ぼくの流した涙で、少なくとも二十人くらいは溺れて死んだろう。

それにしても息苦しい。ここは八千メートルくらいはあるだろうから、酸素が足りないのだ。まるで、エベレストの山頂にいるのと同じだった。足元は真夏で暑いのに、頭は寒い。髪の毛は凍っているし、雪まで積もっているんだ。つい、ぼくはくしゃみをしてしまった。悪いとは思いながらも、くしゃみだけは止めることはできなかった。地上では、瞬間最大風速を秒速千メートルという、いままで、誰も体験したことのない突風で、少なくとも二千軒の家屋が住人と共に吹き飛ばされた。

ぼくが何をしても、犠牲者は増える一方だ。ぼくが悪いことをしているわけでもないのに、蠅か蚊のようにぶんぶんと煩いジェット戦闘機がぼくをミサイル攻撃してくる。やめてくれ、こそばゆい。ぼくは、キングコングでもゴジラでもないんだ。あの薬を飲

んでから、背丈が異常に伸びて、八千メートルになっただけなんだ。

ぼくは、元通りになりたいんだ。このままじゃ、飯も食えないし、彼女もできやしない。誰か助けてくれ。

第572話 宿題

夏休み最後の日。その日が、どこの家庭でも親はてんてこまいをする日だった。夏休みはよく遊んだ。海だ山だ、お祭りだ、お盆の帰省だと、親も忙しいが、子供たちも忙しい。親戚もやってくる。客も多く、それに振りまわされて、子供のことも構ってやれない。

いよいよ、明日で夏休みも終わりだ。池田家でも、ようやく長い夏休みが終わり、ほっとしていた。毎日、家にいるだけで、母親の智子も何を作って昼を食べさせたらいいかと、考えるのも増える。子供たちがいるだけで、部屋もちらかる。友達が次々に遊びにきては、飲みもの、食べ物だ。お小遣いも使う。夏休みなんてないほうがいいと、智子は思う。中学の娘は部活でも夏休み返上で毎日学校へ行っていた。それはそれで、バス代だ、ジュース代だとかかる。問題は、下の小学五年の息子だった。

「圭ちゃん、ママ、忘れていたけど、明日、始業式よね。ところで、夏休みの宿題、やった？」

と、智子は恐る恐る息子の圭一に訊いた。

「ううん、全然やっていないよ」

圭一はけろりと応える。

「えええ？ 大変だわ、ねえ、あなた、圭ちゃんが、宿題、全然やっていないって」

「何だと？」

父親の圭介も、この夏休み最後の日曜日をゴルフのクラブの手入れをしながら、家で過ごしていた。バタバタと圭一の部屋にかけつける。

「どうも、悪い予感がしていたのよ」

「こら、圭一、去年も、その前の年も、その前もだ。どうして、おまえは、いま頃になって、云うんだよ」

両親とも慌てふためいている。息子だけがのんびりとしていた。

「ぼく、云ってないよ。ママが聞いたから」

「何よ、ママが聞かなかっただら、やらないで学校へ行くつもりだったの？」

「とにかく、もめている場合ではない。さあ、手分けして、宿題をやろう」

「この子ったら、毎年毎年。どうしてこうものんびりした子ができたんでしょうね」

圭一から宿題のプリントとドリルを出させた。どこの家庭でも夏休み最後の日曜日は、悪戦苦闘の修羅場になる。

「どれ、おまえは社会をやれ、おれは算数をやるから」

夫婦で手分けして息子の宿題をやる。息子といえば、テレビゲームに夢中だ。

「こら、圭一、おまえもやることがあるのじゃないのか」

不機嫌な声で圭介は怒鳴る。

「そうだ、作文と図工があったんだ」

「今ごろ云って。何を作るんだ。材料はあるのか」

わが息子ながらのんびりしているのに圭介は苛ついた。

「うーん、何を作ろうかなあ」「何、今から考えるのか」

大丈夫かと思う。これから中学、高校とこうものんびりとやられたら、将来は競争激化する受験にも就職にも負けるのではないか。親はいまさらながら、息子の性格を案ずる。

算数の問題と向き合って、たかだか小学五年とバカにしていた圭介は次ぎの一問であれ？ と首を傾げた。

$$1/2 + 1/3 = \quad 1/2 \times 1/3 = \quad 1/2 \div 1/3 =$$

実に簡単な問題なのだが、圭介は分数の計算など、社会に出てから一度も使ったことはない。すっかりと忘れていた。いまさら、女房にも訊けないし、まして息子に訊くと、父親の頭の程度がバレそうで、うーん、困った。

智子も五年生の社会ぐらいとプリントを前にして、ふんふんと鼻歌混じりが、急におとなしくなった。

一問 奈良の大仏を建立した天皇の名前を書きなさい。

二問 大和絵はいつの時代のものでしょうか。

最初の問題から青くなった。そして、割り箸をボンドでくっつけて怪獣を作っている息子の横顔を見て、何か息子がとても偉いもののように思えた。智子だって、大学は出ていたし、高校まで歴史は得意な教科だった。それなのに、このショック。

理科の光合成の問題。電池の繋ぎ方。国語の熟語。次々に出てくる問題にすべてお手上げだった。小学校では通信簿はいいほうだった。中学でも高校でも成績は上のほうだった。圭介は、三十年近く経ったら、基礎的な学力がなくなっていたのに、衝撃を覚えていた。何も判らない。どうしたのだ。相手は小学生ではないのか。智子も呆然と宿題を眺めていて、一問も解けないでいた。

圭一が、工作を完成させ、作文も書いて、先に寝てしまったというのに、夜中の二時までかかっても、夫婦揃ってねじり鉢巻、まだ括弧の中を埋められないでいた。もう目は真っ赤だった。

翌朝、二人は会社に電話をして休むことにした。寝不足でとても仕事はできそうもない。それより、なにより、このままではいけないという気がしてきた。

二学期が始まった。五年二組の教室の後ろに机と椅子が二つ、増えていた。転校生が来るのだろうか。クラスの子供たちは噂していた。

「困りますねえ。父兄の方の入学は認められていないんです」

「そこをなんとか、もう一度、勉強しないと、とても社会でやってゆく自信がなくて」

職員室で先生と池田夫妻の押し問答があった。

いつからだろうか。わたしは、とうとう口がきけなくなっていた。もともと、お喋りなほうではない。それどころか寡黙でさえあった。それが、口がきけなくなっただけからは、伝染病の疑いで、この病院に強制収容させられていた。最近では、新種のウイルスや、原因不明の奇病が増えて、それで各国政府も頭を悩ましていた。

この病院にはわたしと同じ症状の患者たちが、大勢収容されていた。社会から隔離されることを嫌って、収容を拒絶する患者が多いので、政府は法定伝染病の一つとして新たに加えることで、法的に隔離することとした。

それでも入院拒否し、病院を脱走するものが後を絶たないために、とうとう囚人や精神病患者と同じ病棟、鉄格子と鉄扉で閉ざされた病棟に容れられることとなった。この病気が、蔓延しているのには、誰でも彼でも感染するというものではなかった。ウイルスかどうかとも判らない。よって、その治療方法も判らない。いまだかつて、人類が味わったことのない病気に恐れ慄いていた。

この病気に感染する人間の共通点がいくつかあった。それは、もの書きであるということだ。少なくとも、趣味でも、毎日一時間以上は、机に向って、何か書きものをしている人。それは、小説や俳句やそんな文芸に限らない。学術的な研究で、四六時中ノートをつけている者も該当した。

いわゆる、言葉を発することの少ない、書くという所作が一日のうちでも多い人が罹る病気だった。

この病棟には、わたしの知り合いの顔ぶれが見られた。みんな、独房のように、ひとり一室で、互いに行き来することはできないが、出入りするときに、ちらりと入院患者の顔を見ることがある。そこに自分と同様に変わり果てた姿になった、友人の笹田、田村、日土の姿を見た。みんな、文学の雑誌仲間で、互いに新人賞を狙って書きものをしている。

今日も、新しい患者が入院させられてきた。金澤先生だった。われわれの同人の先生まで強制入院させられる。わたしは、衝撃を受けていた。どうしてこんなことになってしまったのか。

午後に、国立大学の付属病院から、医師団と研究者たちが、患者の面談に来た。わたしが真っ先に研究材料にさせられそうだった。十人ほどの白衣の医師たちが、わたしの独房の前に立って、写真撮影をしたり、メモをとったりしていたが、全員、手袋にビニールのスーツを着て、マスクで顔を覆っている。酸素ボンベまで背負っている。ここは、完全に隔離されている二重三重に遮蔽された世界なのだ。家族との面会も許されていない。

わたしは、質問に答えることはできないので、原稿用紙が渡された。それに質問の答えを書くだけでよかった。

質問の内容は、家族構成から、生い立ち、性格テストまで及んだ。

「君は、小さいときから口数が少なかったのかね」

わたしは原稿用紙に書いた。

一わたしの母親が饒舌な人で、子供のわたしに話をする機会を与えないほどお喋りな人でした。わたしが、何か食べたいと云おうとすると、「あら、おなかが空いたでしょう。何が食べたいか、ママが当ててあげましょうか。オートミルでしょ。ズバリね。ママったらあなたの食べたいものはすぐに判るのよ。いますぐに作ってあげますからね。お砂糖は少なめね。云わなくてもちゃんと判るのよ」と、わたしの出る幕はありませんでした。うるさい母親に育てられた子供というのはみんなそうではありませんか。言葉を忘れてしまうんですね。過保護に育てられて、自発的に何もできなくなった子供と一緒にです。わたしは、中学まで、いや、高校に入っても、人前で話をすることもできませんでした。赤面恐怖症といいますか、人前で話するのが苦手で、それで友達にも用事があると、まめにハガキを書いて出していました。口ベタな分、それを補うように筆マメになったんですね。

そこまで書くと、医師たちは納得したように頷きあっていた。

「内向的な性格で、人一倍恥ずかしがりやと診断テストには出ています。それと文学青年になった関連はありますか」

一わたしは口べたでした。言葉ではうまく意思を伝達することができません。有村先生という推理小説作家がわたしの恩師でありましたが、いつも『北村君はもの静かがいい。おれは喋りすぎるからな』とおっしゃっていました。もの書きはあまり、喋らないほうがいいようです。そんなわけではありませんが、わたしは小さいときから日記をつける習慣がありました。自分の思いはいつも言葉ではなく、文字で表現する癖が養われていたんです。わたしは、サウスポーであります。それを親が矯正させるために習字教室に通わせましたが、左利きを無理やり矯正すると、どもりになると云われていますが、わたしの場合も一時どもりました。それが、子供たちの間では面白がってからかうものですから、だんだんと羞恥心から口を開くことが少なくなってきたのですね。すでに小学生の頃からそんな兆候はありました。コミュニケーションの道具としての言葉を破棄したときから、わたしは、本の世界にのめりこむこととなりました。いまでも電子メールや手紙でしか、相手に伝えることはできません。

「で、君の口がいまのように変形しはじめたのは、いつからだね」

一わたしの口がこのように先が尖りはじめ、舌も尖ってきて、その先端が毛筆のようになってゆき、唾液が墨のように黒くなったのは、つい去年からです。わたしは、不便を感じてはおりません。むしろ、自分の体の一部が筆ペンになったようで、実に快適であります。

医師団は様々な角度から写真を撮っていた。あちこちの独房の鉄格子から、ひゅるひゅると筆が突き出しては引っ込んでいた。

第574話 　　ただひたすら増殖する本

本は生き物だった。本は本を産み、二十日鼠のように、短時間のうちに成人して鼠算式に二条で増えるかのようだった。

蔵書家として古本屋には有名だが、隣の住人は知らないという横尾国男は、普段は病院に勤める職員だ。これといって趣味はありませんといった顔をしている。本を読まない人が周囲に多いので、話をしてもそれがどうしたという顔だ。こと、蔵書家は孤独な趣味をひとりで抱えることになる。

最初、新婚時代は、少ない月給で本を買うのを女房に咎められ、それから隠れて本を買うこととなった。国男の女房は本を読まない。同じ趣味の人を奥さんにすれば理解があるのだろうが、本を読まない、嫌いな奥さんは、ただ場所塞ぎの本が部屋に溜まってくるのを苛々して見ていた。

「こんなに本を買ってきて。あなたの趣味のせいで、家計は厳しいのよ」と、イヤミまで云われるようになる。そのうち、女房は、亭主の蔵書を棚卸するように、暇なときに数えるようになっていた。

そんな女房の怒る顔が見たくないのに、国男は、密かに家の中に買ってきた本を入れる工夫をしなければならなくなった。

この前も、コートの下に隠して家に入ると、迂闊にもぼとりと本を落としてしまった。

「あなた、また本を買ってきて、賞与も減額されたっていうのに、何を考えているの」と、さっそくキンキンとした小言が飛ぶ。

如何に家の中に本を持ちこむかということは、すっかりと密輸の手口を見習っていた。女房という税関をくぐるには、手ぶらであること、文庫本などは、ポケットというポケットにつっこみ、内ポケットからパンツの中にまで忍ばせて、何気ない顔で、

「ただいま」と、そそくさと寝室へ入る。

「あなた、最近、少し肥ったのかしら」「ぎくり」と、国男は顔色を変える。

別の手口では、上げ底を使う。ダンボールの箱の底に古本屋で買った全集ものをびっしりに入れておき、上には病院事務の書類を乗せておく。

「この箱には触るなよ。病院の重要書類が入っているんだ。家で残業だよ、まったく」と、わざとボヤいてみせる演技力。

さらに、大型本などは、玄関の外に隠しておき、女房が寝たあとに、戸締りをするふりをして、中にそっと持ちこむ。その方法は一度バレた。みつかると二度と同じ手は使えない。

一番バレない方法は、隠さないで堂々と本を抱えて入るのだ。あまり堂々と女房の前を平然と通るので、いま、外から持ちこんだとは思えないのだ。それはかなり成功率が高かった。

女房が買物に出る時間帯を狙って、白昼堂々と留守を狙っての犯行もある。

「わたし、今日は友達とデパートのバーゲンにゆくの」と、女房が云っていたのをしめしめと聞いていた国男。病院を抜け出して、病院にも置いてある本をこの際、どっさりと持ちこもうと、車で運んだ。

「よしよし、いないな。いまのうちだ」と、まるで空き巣のように忍び足。自分の書斎に本を静かに運び入れる。と、いきなり後ろから、「わっ」と驚かす女房。「あわわわわ」と、本を持ったまま、国男はうろうろ。女房は云った。

「まあ、可愛い」と。

まんまと、策略に乗ってしまった。敵もさるもの。ただ、どんなに女房が咎めようが、本読みというひとつの病気はなかなか治るものではない。そのうち女房は諦める。そうなったらしめたもの。後はどんどんと買い捲る。どんな嫌なものでも毎日毎日見せられれば、免疫というものができる。気にするものが気にならなくなる。そこまで持ってゆくまでには、涙ぐましい努力があった。

女房がすっかりと諦めたとき、本の本当の恐ろしさがやってくる。初めのうちは、おとなしく、書斎に収まっていた本だが、すぐに部屋はいっぱいになり、廊下にざーっと雪崩うつ。廊下の壁を占領したら、階段もようやく人ひとり通れるほどのスペースを残し、占拠。二階がいっぱいになると、今度は一階だ。居間だ、トイレだ、物置だ、車庫も車一台がやっと、あとはびっしりと本の山。

女房が下駄箱から靴を出そうとしたら、その奥にまで本がびっしり。とうとう女房、切れた。

「あなた、いい加減にして頂戴。自分の本は自分の部屋に置いたらどうなのよ」

「部屋にはもう置けないんだ」

「蒲団を敷くスペースぐらいあったら、そこに置けばいいでしょう」

国男は女房を自分の部屋に連れて行く。まさしく、ドアを開けたら本の壁。蒲団は本の上に敷いている。

「ほらな、本がベッド代わりだ」

国男は本が入る場所さえあれば、どこにでも本を置いた。玄関もやがて本で埋まっていった。

突如、台所から女房の悲鳴。国男が駆けつけると、女房は泣いていた。

「何よ、なんなのよ。もう、いや、こんな生活。冷蔵庫の中にまで本を入れなくたっていいじゃないのよ」

翌日、女房は国男の前に真剣な顔で、離婚届を差し出した。

「さあ、本を処分するか、あなたがこの家を出てゆくか、どちらかを選びなさい」

すると、国男は少し考えていたが、こう云った。

「おれが出てゆくよ。おれは雨に当たっても平気だが、本が可哀想だもの。で、おまえは、本と再婚するのか？」

十年後の自分の姿をちらりとでも見るのができたら。そう思ったことはないだろうか。

現代のように明日でさえまったく見えない五里霧中の世の中では、一年後のぼくが、生きているのか死んでいるのかも判らない。会社も大きいから安泰だと思っても、それは表向きの顔で、明日にでも倒産するかもしれない。女房と子供二人とつつましい生活をしているが、それもこのまま幸せである保証が何もない。ある日突然に不幸がやってくるかもしれないし、交通事故とか、火事とか地震とか犯罪とか、この世には躓きの石はいくらでも転がっている。

多くの人々をいま包んでいるのは「不安」という目に見えないものだった。それを知りたいと思うから、占いブームになる。ぼくはあまりそういった予言なども信じはしないほうだが、あまり仕事が滞ったり、賞与が減らされたり、周りの友人の病死、自殺が相次げば、今度はぼくの番だろうかと考えるようになる。

退社後に同僚と一杯やって帰ることは珍しくもない。その日もぼくは、ガード下の一杯飲み屋の暖簾を潜った。酔って、小路に迷い込むと、そこに奇妙な店があった。占いの館のような、紫色の蛍光灯が点いていて、看板に十年後の自分の姿を覗いてみませんかと書かれてある。どうもイカサマくさいが、酔った勢いで、からかい半分に入った。

中は赤いランプが点いていて、現像の暗室のようだ。国籍不明の婆さんがひとり座っていた。

「いらっしゃいませ」

「十年後を覗けるって本当かよ」

「はい、十年後の今月今夜、同時刻の自分に一瞬ですがなることができますです。はい」

見料が安いから、面白半分に見ることにした。婆さんは催眠術のような暗示の呪文を唱えると、ぼくは不思議にも睡魔に突然襲われて、椅子に深く身を鎮めながら、未来へともものすごい早さで空間移動を続けていた。

次ぎにぼくが意識を回復したところは、ただ、真っ暗な何も見えないところだった。音もしない。手で触れるものもない。ぼくはとてつもない恐怖で全身が硬直した。そこはまさに冥界のようであったからだ。ぼくは、死んでいるんだ。十年後にはぼくはこの世のものでなくなっている。

すると、自分でも驚くような叫び声を上げていた。と、赤いランプが目にはぼんやりと入ってきて、ぼくは占いの部屋に目覚めていた。

「どうじゃったかな。あなたの未来は」

ぼくは、あまりの恐ろしさに代金だけ置くと、走るように逃げ帰った。すっかりと酔いも醒めていた。

ぼくはまだ三十になったばかりだ。四十の年には死んでいないということは、その前に病気か事故か何かあるのだ。そう思うと、いまのうちに楽しむことはしておきたい。将来のことなんかどうでもいい。短い自分の時間をばあっと生きてやる。そう思うようになった。

ぼくは、自暴自棄になって遊びまくった。それまでの生活も性格も一変した。もう、ぼくのいない世の中なんかどうでもいい。毎日、昼から酒を飲んでた。それで職場を首になると、女房に働かせると、自分では一攫千金を狙って、競馬場通い。それがないときはパチンコだ。いままで、模範的ないい父親であり、夫であったぼくは、女房に愛想をつかさされるほど墮落していた。

「あなた、どうしちゃったのよ。まるで別人。何があったのよ」

「うるさい」

ぼくは、子供も殴った。女房に手を挙げたこともなかったのに、いまじゃ、ドメスティックバイオレンスだ。遊興費のために生活費をむしりとってゆく。

ある日、家に飲んで帰ると、女房子供はいなかった。食卓の上に離婚届に判を押して置いてあった。

ぼくは荒れて、家の中をめちゃくちゃにしてやった。幸福な家庭が地獄になり、そして、ぼくはひとりになった。

すっかりとアル中になり、いつか覚えたドラッグにも手を出した。友人や親戚から金を借りまくった。それでも足らずに、家を担保にして借り、闇金融にまで手を出した。借金は総額でいくらになったか判らない。

それで、あっというまに九年が経っていた。後半年であの未来を覗いたときから十年目を迎えようとしていた。ぼくは、人生に退屈した。あとは自分がどのようにして死ぬのか、それを見届けることより楽しみはなかった。果たして事故死か、病死か、自殺はしないだろう。

闇金融の取りたては凄まじいものがあった。真夜中でもやってくる。ぼくには支払う源泉がない。働いていないからだ。すでに電気もガスも止められ、税金も滞納、銀行からは差し押さえ、窓ガラスが割れてもそのままに放置しているほど生活は荒廃していた。

そんなとき、家に土足で入ってきた取り立て屋ともみ合いになり、ぼくは台所から持ち出した包丁でチンピラを刺し殺してしまった。こんなやつは、死んでも世の中のためだ。と、ぼくは自分の犯した罪を正当化しようとしていた。近所が騒ぎを聞いて警察に通報したから、ぼくは殺人で逮捕され、拘留された。もうどうでもよかった。どうせ死ぬんだ。何をしても後はないのだから。

ただ、刑務所にいれば、少なくとも事故死はないかもしれない。病気になっても、ただで病院で診てもらえるし、飯もただで食える。取り立てはうるさくない。ここはまさしく天国だ。

独房は消灯後は真っ暗になった。冷たい空気だけが漂っていた。自分の手足も見えな

いほどの闇にぼくは鬼のように座っていた。ふと、今日の日付を思っていた。それは、まさしく十年前のあの占いのときと同月同日同時刻であった。

第576話 歓び組と悲しみ組

遥産業は、総合輸入商社でもあり、建築土木、光学機械の下請け工場を海外にも持つ、一大コンツェルンをなしている企業体だった。

社長は常に優秀な人材が役員会で抜擢されるのだが、会長職だけは、その産業の株を三割以上も保持している天野一族が代々襲名するという形で、古いお家相続のように企業を私物化してきたという陰の批判もあったが、そんなことが聞こえたら、会社にはいられなくなるのだ。

現会長の天野惹は、大奥のような秘書室を持っていた。執務に必要以上の美女を多数囲っていた。社内では、秘書課のことを密かに「歓び組」と呼んでいた。女子社員の採用面接はすべて社長が行う。自分の好みのタイプというのがあって、それは社長の奥様を見れば判る。奥様は短ふんとしている。かなり肥って、ひねくれものであった。それと正反対の、色白でモデルのように背が高く、従順な美人ばかりを社長は採用すると、秘書課にはべらしていた。

一応、ちゃんとした会社だから、入社試験もペーパーで行うのだが、美女たちの成績は小学生以下であった。

「わかんない」と、白紙回答や、あちこちにマンガなんか書いている。それでも美人であるという第一要件ですべてが許される。

その反対に、試験でははずば抜けて成績はよかった才女だが、とても表に出せない容姿の女子社員たちは、その優秀ゆえに現場配属となり、彼女たちはそれなりに社内でインフォーマルグループを作っていた。そんなシコメの集団を社内の男性たちは密かに「悲しみ組」と呼んでいた。

悲しみ組の烙印を押された人は、とても彼氏なんかできそうにない。顔の皮一枚のことなのだが、どこでも美人は得なのだ。

秘書課は、社長の私物のようなところから、特別待遇、ハーレムというよりアルカディアに近かった。本社ビルの最上階の特別室で、豪華で広々としている、窓も広く、ふかふかの絨毯が敷かれている部屋を与えられていた。

それに比べて、営業事務は窓もない、湿気が多い、薄暗い部屋に閉じ込められているようなものだ。社長にはできるだけ廊下に出てうろつかないようにと、そこまで云われていた。

男子社員たちは、一度でもいいから秘書課の女子を誘って呑みに行きたいと思っているものが多かった。その機会を誰しも狙っていたが、やがてそのときがやってきた。社

員研修の後に、現地解散となったのだ。それに出席していた男子数名が、秘書数名に誘いをかけた。秘書たちは、プライドが高く、どこかつんとすましているところがあった。社内でも特権階級のように威張っているばかりか、男子社員には鼻もかけないと思っていたが、実はそうではなかった。どんな高値の花でも、所詮女の子なのだ。デートもしたいだろう。

三人対三人。どちらも独身。ビストロで食事したあと、パブへと流れた。

「いやあ、同じ屋根の下にいて、こうしてプライベートな口を交わすのは初めてだなんて、新鮮でいいですね」

と、営業の男子が云った。秘書たちは、とにかく真面目で乱れない。おとなしくきちんとした姿勢で上品に呑んでいる。はいとかいいえとかしか云わない。あとは、ただ、男子のバカ話を聞きながら微笑しているだけだった。

「そんな綺麗な人ばかりが籠の鳥だなんて可哀想だな。あんなじいさんの傍に世話役として拘束されてね」

じいさんと社長のことを云った途端、秘書たちは急に目を剥いた。

「あなたたち、オソレオオクもなんということを云うのよ。社長様のことを。あああ、きっとバチが当たるわ」

秘書にとっては、天野惹は神様と同じだった。そのように教育され洗脳されていた。彼女たちは、話をしても会社の業績向上の話や、明るい未来のことなど、仕事の話ばかりで、全くつまらない。いまどきの若い子のようにケイタイで遊んだり、映画やタレントの話も出てこない。ただ、綺麗だというだけで、狂信的で硬い。色気もなにもなく、つきあっても面白くもなかった。

男子たちはただ疲れていた。どうしたら乗ってくるか、いろいろと話題を持ちかけて自分たちのペースに巻きこもうとしたが、全然乗ってこない。仕事の話なら乗ってくる。

「わたしたち、九時ですから帰らせていただきます」

門限でもあるのか、秘書たちは毅然とした態度で一礼すると帰っていった。

「なんだよ、秘書課って、人形じゃねえか。あれじゃ、彼氏もできないぜ」

そこへ、かの悲しみ組の営業事務の女の子が三人入ってきた。

「あら、よかった。みんな来ていたの。わたしたち、いい男いないかって探しにきたんだけど、まあ、あんたたちで我慢してあげるわよ」

「我慢？ なんて口だ。まあ、いいか、あんたらのほうが人間らしいから」

「なんのこと？」

「まあ、いいじゃねえか、これからみんなでクラブへ踊りにゆこうか」

「わあ、うれしい。エスコートしてくれるの？」

「ばかやろう。割り勘だぜ、割り勘」

営業部のハンサムボーイが、秘書課の美人と結婚した。結婚した途端、毎日直行直帰、つきあいも悪くなり、彼の営業成績はがた落ち。哀れ、降格されて飛ばされた。

一方、悲しみ組のシコメを嫁にもらった営業マンは、やる気マンマン、成績は上がり

出世していた。

「昔の人はよく云ったよな。美人を奥さんに貰えば、出世の妨げってな。貰うならシコメに限る」

その営業マンは、家に帰りたくないから、できるだけ残業はする、夜遅くまでつきあいはする、会社で女房のことはひと言も口に出さない。

「どうだ。おまえんこの内助の功は」

出世したやつにみんなして訊いていた。

「いいよ、ひかえめで、そのくせしっかりしているし、料理はうまいし、気はきくし、上司へのお伺いはマメだし、小遣いはおれに一万円づつ上げるし」

「はあ、やっぱりなあ。それこそ上げマンだ」

第577話 i モードな関係

15平方センチメートルの窓。

いまの少年少女たちの仮想現実の窓である。ケイタイという懼るべき通信玩具が後の世に作り出す愚者たちの群れを想像したくはない。一番いい時代を全く生産性もない加乗もない世界に浸りきっているのを誘惑している会社が悪い。ゲームも含めて、若者たちを愚昧に育てると、どうなってゆくか。これから大変なツケが将来に回ってくるのだ。その責任を感じないメーカーはただ膨大な利益の勘定に忙しい。

夏海は高校一年だ。いまが一番面白い。急に開けた少し大人の世界を背伸びしながら、勉強にも、部活にもバイトにも精を出している。ただ、勉強は適当にかたづけ、本を読むこともなく、テレビを見ているか、そうでなければケイタイを開いて、何かいつも指だけがせわしく動いているのだ。

「サマシーだよん。カレシ、そろそろあきたから交換しようよ。」

と、夏海はケイタイで友達にメールを打っていた。サマシーとは夏海のハンドルネームだ。みんな本当の名前ではやりとりしていない。

「いいよ。うちの元カレのひとりをおあげるわ。こっちもあきたしー。」

彼氏の交換会をやっているのだ。彼女たちは、顔も名前も知らないメールアドレスだけの相手を勝手に交換しあっている。それは恐ろしい人身売買だった。いや、人身売買のほうが、まだ金を支払ってくれるからいいが、ただであげるのだ。しかも本を貸し借りするように相手の了解もなく。相手の男たちはそんなことは全く知らない。

「こんち。サマシーと呼んでね。カレシにしてあげるから。でさあ、さっそくなんだけど、あんた血液型何型？ それと生まれ月の星座教えてね。やっぱ、最初がカンジンでしょ。相性っていうかあ。はじめから合わない人っているでしょ。どうしても嫌いな人っ

て。

一オス。おれはムッチだぜ。ムチムチマンのムッチだ。血液型なんて知らねえよ。確か、献血したときに、A型とかいていたな。星座はバッチリと双子座だ。おまえのも教えるよな。

一イヤだー。あんた、男のくせにセンサイなAなんだ。それに何考えているかわかんない双子座だつてー。このウワキものめが。

だいだいにして、漢字を知らなさすぎる。ポキャブラリィも貧弱。意味のない会話が多いのだ。相手が本当に男かどうかも判らない。だいたい遊びなんだから、誰も本当の自分ではない。五十過ぎの中年の淋しいおじさんが、高校生になった気分で、自分の娘より若いメル友と交信しているかもしれない。性別、年齢、履歴すべて詐称しても許される世界なのだ。誰も本気でつきあっていない、すべてが架空の世界なのだ。面白ければそれでいい。

多くの人たちが、自分でない自分になりすまして別の人格になり、空想の世界のヒロインになれるのだ。

夏海はムッチと一週間くらいはメールのやりとりはしていた。だけど、次第に飽きてくる。

夏海は友達の冬美にメールをする。

一サマシーよ。十五人目の彼氏だけどあげるから、代わりにいい男ひとりちょうだい。
一いいけど、この前なんか、なによ、あのおかま、やめてよね。あまりしつこいから、メルアド変えてやったよ。

電話番号や住所、学校名、本名はいっさい告げないから、すべてメールアドレスだけが彼氏と彼女を繋げる合鍵なのだ。それを嫌いになると、ぷつりと切るには、いまは簡単に、しかも即座にアドレスは変えられる。それで、関係をすみやかに絶ち切ることができる。

一あんた、ヨッシーとはどうなったの？

冬美が訊いてくる。元カレだ。

一あんなやつ、別れてやった。わたしを別の女の子の名前でメールしてきたから。もう、頭にきた。

ひとりで数人の彼氏とダブルブッキングどころかトリプルなんか普通だった。ただ、彼女ら女子高校生のメール上の交際は、相手の顔も見ることがない、従って、手を握ったこともキスなんかするはずもない。それで、恋人にしているし、別れたと云っているのだ。すべてが非現実、架空の物語だった。

夏海のケイタイのアドレス帖には、元カレというグループ名フォルダがあり、そこにかつてつきあっていた彼氏のメルアドがずらりと並んでいる。それが夏海の戦歴だった。どれほど多くの彼氏とつきあったかが、彼女らの誇りだった。

たまに、顔を見たいから写メールで撮った写真を添付して送ってくることもあるが、それだって、本人かどうか怪しい。すべてが嘘の関係なのだから。

ただ、嘘でないのは、そのときどきの悩みなどの話し相手にはなれる。コミュニケー

ションに枯渇している現代の若者の孤立感をそれで解消しているから、嘘の中にも真実があった。

ある日、ケイタイの会社で事故があった。突然、ケイタイが全国的に使えなくなったのだ。その空白の時間は三時間ぐらいであったが、大変なことが起こっていた。いままで歩きながらメールを打っていた学生もOLも、急にその場にうずくまった。電車の中では泣き出すものまで出てきた。職場でも学校でもあちこちで、パニックが起こっていた。

夏海もどうしようもない不安に襲われていた。ケイタイという唯一の生きるための常備薬が切れた。がたがたと震えがきて、立ってもいられない。すぎるものがないのだ。誰かと常に繋がっているから生きていられた。ケイタイは現代の若者の酸素だった。

現実の世界があまりに汚れて馬鹿げて酷いから、みんな顔を背けてケイタイという窓にしがみついているのだった。

第578話 あわてる乞食

乞食というと、ひと昔前の話のように、現代社会は人々が裕福になり、福祉も行き届き、街から乞食が姿を消したかに見えた。昔はどんな街にも、家もない、仕事もない人たちが乞食に落ちて、街角でおもらいをしていた。家々を回る乞食もいて、珍しくはなかったのが、外国人が多く訪れるようになると、政府は、対外的に恥ずかしいということで、乞食狩りをしたり、バラックを壊して、市営住宅を建設して、そこに収容したりした。部落という言葉もいまだにどこかに根強くあるが、表向きは崩壊したように交じり合ってしまった。

ところが、世の中、長引く不況で、ホームレスも乞食もだんだんと増えてきたのだ。政府が低所得者の保護をやめ、福祉の切捨てをしてからは、社会に棄てられた棄民と称する層が溢れていた。

リストラ、家庭崩壊、犯罪、不法入国、破産者、いろんな理由で仕事がない人が目に見えて増えていった。年金が減らされて、雀の涙の年金では暮らしてゆけない老人も、仕事からあぶれた若者も、街をうろついていた。健常者でも仕事がないときに、体の少し不自由な人たちにも職はなかった。公共工事がどこも中断してからは、失業対策もない。救済するすべはなかった。大変な時代になってきていた。

古本屋を閉店した北村も、五十過ぎていたからどこも雇ってくれない。何ができるかと云っても、とりわけ技術があるわけではない。趣味で小説をと面接のときに云っても、そんなくだらない趣味がなんになる。

女房子どもはこんな食えない父親と心中するつもりはないと、とっくに出ていった。

老父母は住む家が差し押さえになったので、老人ホームへ身を寄せた。とり残された北村は、仕事もない、住むところもない。とにかく腹が減った。何か食べなくては、体が冷える。

北村はもう何日も風呂に入っていなかったから臭くて、コビもたかってきていた。蚤がいるのか背中が痒い。洗濯なんかしていないから服もぼろぼろになり、見るからに汚らしい。髭も髪も伸ばし放題。靴の先から足の指がこんにちはをしている。ショーウインドウのガラスに映った自分の姿はもう立派な乞食だった。

「よう、北村君。生きていたかい」と、振り返ると、大きな袋を背負った大塚だった。かつての文学仲間で、映画館の社長をしていた。身なりは北村より年季が入っているようにぼろぼろだ。毛布を巻いて背負い、ヤカンや鍋などを賑やかに腰からぶらさげている。

「大塚さん。どうしたんですか、その格好。『どですかでん』にでも出演するんですか」

大塚の格好を見て北村は驚いた。

「映画館は倒産したし、おれはいまじゃ真面目に乞食やってるよ。そう云う君も乞食に落ちたか。いいだろう、気楽で、三日やったら止められないのは判るよな。人の苦も金の苦も、家庭のごたごたもないんだ。税金も納めなくていいし。仕事をしなくていいというのは幸せなことだよな」

乞食に不真面目なやつもいるのか。乞食の初心者の北村にとって、乞食がそんな素敵な生き方にはどうしても思えない。だが、かつて、資金繰りで青くなっていた大塚の顔を見ていた北村は、まるでこの世がバラ色のような笑顔の大塚を見て呆然としていた。

「こんなところでのんびりしていたら、食べなくなるぞ。ぼやぼやしていたら、先にみんなにやられるんだ」

何のことか北村には判らない。

「腹が減って、ふらふらなんですよ」北村は立っているのがやっとだ。

「そうだろう。おれについてきな。乞食のA to Zを教えてやるから。うーん、その格好では貰いが少ないぞ。もっと哀れみを誘うような格好でなければな。それにそんな太った乞食というのもあるな」

確かに大塚は痩せていた。メガネもレンズが片一方なかったし、髪に蠅までたかっている。見るからに汚くなければ乞食とは見てくれない。

「それに、君は乞食の三種の神器を持っているか」

「それって、何だい」

「ムシロに薦に空き缶だよ。さあ、時間がない。急いでコンビニに行こう。乞食の世界では縄張りもあるんだ。おれの行き着けの店に連れて行ってやる」

大塚は北村をコンビニの裏口に連れていった。そこで、賞味期限の過ぎた弁当やパンを貰うのだ。

「今日は、シケてる。おにぎり二個とアンパンか」

そいつを二人で半分にして食べた。北村は涙が出てきた。少し乾いて硬いおにぎりでも美味しく感じられた。

「さあ、次は、晩酌だ」

「酒も飲めるのか」

「ああ、酒屋の裏に行くんだ」

そこには箱に入ったり、ケースに入った酒瓶が積まれていた。大塚は手際よく、一本のポケット瓶に、底に少しだけ残っている酒を集めていた。銘柄まで拘らない。呑めればいい。

「さあ、君も集めるんだ」

それが終わると、今度はゴミ箱を漁る。やはり賞味期限の過ぎたスルメなんかが棄てられていた。そいつをつまみに一杯やれるのだ。

ゆっくりと呑んでいると、大塚からこづかれた。

「ぼやぼやしていたら、場所を取られてしまう。今度は、夕方の勤め帰りの客を狙って商店街に繰り出そうぜ」

二人が商店街に来たときは、すでにデパートの周りや、人通りの多い歩道にはびっしりと乞食たちが座っていた。

「あああ、先を越された。いい場所は取られたよ。しょうがない、駅前に行こう」

駅前も乞食たちがずらりと座っていた。北村は目を丸くしていた。いままで気がつかなかったが、こんなにもしのぎを削っているのだ。みんな、ムシ口に座り体に薦を巻き、空き缶を前に置いている、何故か古典的なスタイルだった。その中に、以前文学の同人であった、県庁を首になつた天野がいた。その隣には女房に逃げられた笹田がいた。北村はしみじみとみんなの顔を見ていた。

「そうか、みんな落ちるところまで落ちたんだ」

中には家族で、子どもまで連れてきて、余計哀れを誘っている橋本もいた。

「あんな人まで乞食に…」

北村は絶句した。ともかくも人通りの多いところに座ったが、通行人より乞食のほうがかひしめきあって多いから、実入りが少ない。

七時を過ぎると、一様にみんなはムシ口を巻いて立ち上がると、一斉にどどどと走りだした。北村は次に何が起こるのかと、うろうろしていると、大塚が怒鳴った。

「もっとあわてろよ。生存競争が激しいんだから。今度は、酔っ払いが多い、飲み屋街へ行って座るんだ。みんなに負けるな」

北村も走った。いい場所はすぐに取りられる。あわてないと貰いが少ないのだった。

第579話 待合室

ぼくは、もう何年もそうしていたようにただひたすらに待っていた。待つということ

が、こんなにも根気がいるものだということが判りすぎるほど判った。苦痛を通り越して、泰然自若としてくるまでには、長い時間がかかった。

長椅子には順番を待っているぼくのような人々が、あるは哀れみを顔に浮かべ、あるは感覚もないように飄然として待ち続けていた。そこは、人生の病院か、駅か、いずれにしてもそこに座っているものたちは、何か来るべきものを待っていた。

長い椅子は、果てが見えない。何十キロあるのだろうか。それが、やはり、後ろにも前にも数えきれないほどの列をなしていて、びっしりと空気がないほど座っている。どこか病気の人々だ。老若男女問わず、待合室に他人同士が隣合わせになっても口も利かずにただ黙々と座り続けている。

ようやく、誰かが呼ばれた。

一伊藤さん。娘さんの式の日取りが決まりましたよ。どうぞ、中へ。

あのご婦人は娘の結婚式を待ち望んでいたのだ。心配して、憂鬱そうな顔をしていたご婦人は急に晴れやかな顔になり、立ちあがった。

また、別の人が呼ばれた。

一工藤さん。おめでとうございます。昇進が決まりました。

その中年の男性は、勤め先で課長に昇進した。同期入社では一番早い。やったという笑顔を噛み潰して緊張した面持ちで中に入っていった。

一橋本さん。おられますか。おめでとうございます。新人賞を獲得いたしましたよ。どうぞ、中へ。

小説を趣味で書いている奥さんが、とうとう出版社の新人賞を射止めた。信じられないといった顔で首を横に振り続けていた。

一日高さん。お待たせいたしました。あなたと結婚してもいいっていう綺麗な人がいましたよ。待った甲斐がありましたわね。青森では最後のねぶたは大きいっていいですから、一番素敵な人を奥さんにできましてよ。

日高という中年男性は、見合いに行くようなスーツで決めて、ない髪を直しながらも、颯爽と中へ入っていった。

ぼくは、みんなの幸せそうな後姿を見送っているながら、いまだに自分がここにいる理由が判らないでいた。どうしてぼくはここに座っていなければならないんだ。一体、何を待ち続けているんだ。

だんだんと待合室は人が減ってゆく。ここは地球という病院で、すべての人間は病人だった。それぞれ、生きていて、何かが不足していた。それをひたすらに待ち続ける場所がこの待合室だった。

ぼくは、隣に座っている老人に声をかけた。

一あのう。あなたは何を待っているんですか。

すると、老人は照れながら、小声で話した。

一わたしは、お迎えを待っているんです。いつ死んでもおかしくない歳だ。平均寿命を過ぎたら、あとはお釣りみたいなもんで、ばあさんも亡くなったし、兄弟から竹馬の友から、みんなあの世へ行ってしまった。残されると淋しくてな。

すると、まもなくその老人も呼ばれた。

—よかったですね。ようやく奥様や家族の方のところに行けますね。癌で余命幾ばくもないそうですから。

ある歳になると、生き続けることが辛くなるのか、老人は満腔の笑みを浮かべていた。老人は早く旅立ちたいと、よろけながらも、嬉々として中へ入っていった。

ぼくの周りに次第に患者たちがいなくなる。ひとりでぽつんと離れて座っていると、淋しいから、近くにいた青年に声をかけた。

—あなたも、随分と長く待たされていますね。何をそう待ってらっしゃるんですか？

青年は、厳しい顔になり、真っ直ぐに前を見ながら云った。

—ぼくは、世界の破滅を待っているんです。

—そんな、あなたも死ぬんでしょ。

—いいんです。ぼくのちっぽけな命なんか。もしも、自爆テロで、世界を破壊できるなら、ぼくはやりますね。こんなくだらない地球なんて、ぼくには要りません。生きているのが恥ずかしいくらいだ。

—そうですか。でも、それは待っていても長くかかるでしょうね。いずれ、この地球は太陽の膨張する死に巻きこまれて太陽系の終焉とともに終わるのですが、それまでは五十億年もここで待っていなくてはなりませんね。

哲学的な青年は落ち込んだように項垂れてじっと考えこんでしまった。

ぼくのような、自分の求めるものが見えない人も大変だが、途方もない夢や、とても実現しそうな希望を持っている人は、いつまでもここに残り続けているようだ。

宝くじが当たったと大歓びしている人もいた。夫ととうとう離婚できたとほっとしている夫人もいた。善きにつけ悪しきにつけみんなどこか病んでいる。満たされている人はこんな病院の待合室になんか座っていないのだ。

広い待合室もとうとうぼくとテロリストの青年の二人だけになった。みんな、願望が叶い、大きすぎる夢は次第に手の届きそうな小さな夢に換えて、自分の器に合ったサイズの理想を手にして帰っていった。

結局、病名も判らない、何かが足りないのだけど、その形もなく色彩すらない何かを考えこみながら、ぼくは一生ここに座っているのか。

と、青年の名前が呼ばれた。ぼくは、どきりとした。まさか、ありえないことだ。青年が立ちあがる。ぼくは、その次ぎに何が起こるのか身構えた。青年がにやりと笑って振り返ったそのとき、この世のものと思われない光が窓を溶かして、建物をスケルトンにした。一瞬の光。ソドムの劫火が地表を覆っていた。

第580話 もし世界が二人の村だったら

第三次世界大戦は起こるべくして起こった。歴史に平和な空白の時などない。地上ではいつもどこかで戦争が行われていた。

一触即発の状態、人間たちはびくびくして暮らしていたが、とうとうやってしまった。愚かな人間どもは、きっと歴史の轍を踏む。いまだ戦争を経験したことのない世代が、多数を占めたとき、危険な状態はピークを迎えていた。

ただ、第一次大戦のときは、至近距離からの銃弾での戦いが、第二次大戦では、空からの攻撃が加わり、第三次大戦では、核兵器と細菌と化学兵器が使用された。被害面積も一国を飲み込んでも足りないほどの広範囲になり、勝敗の時間も瞬時で決まるといった、まさに逃げる余裕もなければ、人道上の問題などおかまいなしに、ありとあらゆる可能性をもった新兵器が使われたのだ。

戦争は終結した。国家という国家は消滅し、小さな国は全国民が即死するという事態にまでなり、地上の緑も焼き尽くされ、魚は海面に浮かび、飛ぶ鳥の姿どころか、昆虫の姿もない。生きているものの影がまるでない。当然、人間はひとりとして生きていないと思わせた。地形が変わるほどの核爆発と放射能と、細菌、ガスによって地上は汚染されていた。砂漠のような赤茶けた地面は、火星の表面のように木も草も生えていない。生き残ったものもいても、放射能が半減するためには五十年もかかる。

ビルの瓦礫や、戦車の破片がごろごろしている街の跡があった。すべてが廃墟になって、砂に埋もれている。

戦争が終って、人類が絶滅してから何年が経過しただろうか。ようやく、地中で生き延びた草花や木が緑の芽を吹き出し、遅くそれでも根をはり、地上をまた緑の星に戻そうとしていた。

ビルとビルの倒壊した隙間に、かつて古本屋であった林語堂の店が押し潰されるようになっていた。そこからごそごそと、なにものかが蠢いている。隣のビルの地階が陥没して、その中に店ごと落ちた形になっていた。ビルは食品問屋の倉庫であったのが幸いして、瓶詰め、缶詰が函でいくらでもあった。店主の北村が、その地下で生き延びられてきたのは、うまく密閉された状態で、堅牢な地下で食料も何年分もあったからだ。

ただ、閉じ込められて外に出ることはできない。分厚い壁をこつこつと何年もかけていろんな道具で削りにかかり、ようやく地上に這い出ることができた。その街は核爆発の直撃は避けられたが、毒ガスと細菌で市民の大半はやられていた。

北村は、暗い地下牢からようやく娑婆に出られたので、眩しい太陽に目を暫くは開けていられなかった。服はボロキレのように辛うじて体にくっついていて、髭も髪も長く垂れている。

北村は海まで行ってみた。店の裏が海だった。そこで海水で体を洗った。塩辛い味が懐かしい。暑さから季は夏なのだろう。地上に出ているのはビルの残骸と、赤い地肌に薄っすらとステップのように緑がかかった山だけだった。

北村は、「おい、誰か生きてるか」と、叫びながら瓦礫の中を歩いた。すると、かつて商店街だった通りの向こうから、やはりボロをまとった男が歩いてくる。北村は小躍りして、手を振った。向こうも走ってきた。二人は顔を合わせて驚いた。

「笹田じゃないか」「北村、生きていたか」

二人は涙を流して抱きしめあった。かつての文学仲間の笹田はげっそりと痩せていた。

「随分と痩せたな。百キロはあった巨漢が、半分になったようだな」

「そうなんだ、伊達に太ってはいなかった。こんな戦争のときのために体に備蓄しておいたのが助かった」

「ところで、生き残ったのはおれたち二人だけか」

「どうもそうらしい。地下室に残っていたバッテリーとパソコン、通信機、ラジオなどがあったから、やってみたが、電波を発信してくるところはなかった」

世界で奇跡的に生き残ったのが中年の男二人。どうしようもない。これが、若くピチピチした女の子であれば、人類の絶滅だけは防げたかもしれない。それを真っ先に北村は心配して、笹田に尋ねた。

「君は、赤ちゃんが産めるかい」

北村の怪しい目が光る。

「な、なんだよ。産めるわけねえだろ。全く、不気味な目線を送るな」

「これからどうする？」

今後のことを二人で話し合った。

「世界はたった二人なのだが、やはり、ちゃんとした村として役割分担してやろうや」

政治に首をつっこんでいた笹田の提案で、二人だけでも村としての機能を維持するよう努めるべきだということになった。

「とりあえず、おれが年上だから、おれが村長になる」

笹田が宣言した。北村は反発する。

「それはないよ、いまは知事でも若いほうがいい。これは選挙で決めようや」

「二人しかいないのに、決まるわけないだろう」「それもそうだ。それじゃ、一期は君がやれ、それで、おれは何をすればいいの？」

「おれが村長と村議会と役場を兼務してやるから、北村は一般市民をやるんだ」

「一般市民って、何をやるんだ？」

「それは、働いて、税金を納める」

「ええ？おれが働いて君を食わせるというのか」

「誰かがやらなければいけないんだ。もしも、世界が二人の村だったらと考えようじゃないか」

北村は以前のベストセラー本を思い出した。

「あれは、解りやすいように喩え話だろう。比率の問題なんだ。公務員が半分もいる世界なんかあるわけがない」北村は抗議した。

「それはそうだが、二人しかいないから、すべて四捨五入する」

「なんで、おれだけが損な役なんだよ」

「適材適所というだろう。君はもともと商売人だから、働くことには秀でていよう。古本屋なんかなくていいから、ひとりでデパートもやり、コンビニもやり、そうだ、売るだけじゃなく、生産から販売まですべて任せるよ。海で漁をして、畑を耕し、それを加工して、味噌を作り、食堂をオープンさせて、おれに味噌汁を飲ませるんだ」

「なななな、なんでおれが、第一次産業から第三次産業まで何から何までひとりでやらなけりゃならんのだ。それは、独占禁止法で捕まるだろう。で、君は警察から自衛隊までひとりでやるんだろう？」

二人でごちゃごちゃと考えていたら、面倒くさくなった。

「どうだい、二人で一緒に仕事しよう。稼ぎは公平に二等分」

ようやく互いに納得した。

初め、人間は原始共産制の社会で生まれた。いつから、多いの少ないのと喧嘩するようになったのか。

第581話 入院患者

普段、強健で、とても病気と縁のなかったわたしが、三十二の歳に入院することとなった。咳が止まらなかった。以前、気管支炎をやったことがあるので、自分は呼吸器が弱いとは思っていた。それに加えて熱が出てきた。体温計は三十九度以上ある。

町医者に仕事の合間に寄ってみた。風邪でしょうと風邪薬が出た。注射を一本打ったが、それが全然効かない。

その当時、わたしは札幌に店を出して、責任者で家族ごと引越ししていた。車で市内の店に商品を卸して歩く仕事だ。どんなに熱があっても相手があるから休むわけにはゆかなかった。わたしの下にいた店長は夏季休暇をとって田舎へ帰っていたから尚更休むわけにはゆかない。

だんだんと酷くなり、顔は真っ赤で、ふらふらだ。運転もようやくといった具合で、我慢しきれずに通信病院という大きな病院に車を入れた。配達途中であった。

医師はわたしの様子を見て、レントゲンを撮り、いろんな検査を行ったが、

「即刻入院です」と、レントゲンを見せてくれたが、解らない。

「両方の肺が完全にやられています。重い肺炎です」

「仕事で休めないものですから、通院ということでは…」と、云うと、医師は怒った。

「死ぬこともあるんですよ。まあ、あなたのような若い人ならそう心配はいらないと思いますが、入院しないと命の保障はしません」

たかが肺炎と思っていた。風邪をこじらせたぐらいにしか思っていなかった。いま、配達途中だから、家に引き返して、入院に必要なものを持ってきたいと云うと、逃げると思ったものか、奥さんがいらっしゃるから持ってきてもらいなさいと信用がない。

わたしは、病室から店の二階にある自宅に電話した。入院することになったから、本を持って

きてくれと。読んでいない本がある場所を教えていた。着替えやタオルなどといったものは頭になかった。何日いるか解らないが、一日中、ベッドに横になっていることは考えられなかった。

それまで、わたしは、年中無休で働いていた。休みがなく、疲れが溜まって病人になってしまった。わたしは、いままで健康だけには自信があったのに、すっかりとしよげていた。生身の体ということまで忘れていた。

ちょうど、休み明けの店長が、女房と子供三人を連れて病院にやってきた。歯ブラシ、バスタオル、洗面器といった入院セットを持ってきた。

「うつるの?」と、女房は口を押さえていた。

「結核じゃないんだから」と、わたし。上が幼稚園、四歳と二歳の男の子三人が、きょとんとした顔で、お父さんを見上げていた。

生まれて初めて、点滴なるものをした。同じ姿勢で、腕が動かせないということがこんなにも辛いものかと思った。朝昼晩と三回の抗生物質の注射をやる。治療はそれだけだ。あとはただ、おとなしく寝ていればいいが、退屈だった。一日中寝ていたことはかつてなかった。窓際のベッドだったが、空に浮かぶ雲ばかり見ていた。雲がいろんな形をしていることに子供のときのように想像していた。雲なんか意識的に眺めたことはこのところない。

それから、中庭を挟んで、向いの病室にいる女の人を見ていたりした。ベッドの上に座って髪を梳いていた。どんな病気なのだろうか。四階から見下ろすと、いろんな病室が見えた。そこにはそれぞれの事情や、物語があるのだろう。

会社の連中が見舞いに花を持ってきた。点滴をして明日にでも死にそうな格好をしているわたしを見て、女子社員は涙ぐんでいた。病人はだんだんと病人になってゆく。

病室は六人部屋で、わたしより若い男もいた。彼は、ラジカセをガチャガチャといじって、音楽をテープに録音しては編集していた。一日それをしていた。あとは、五十過ぎの主のように長くいる患者たちだ。話を聞くと、密かにタバコをやったり、酒をやったりしているらしい。

朝、六時になると、まだ寝ているのに、むんずと看護婦に腕をとられ、ぶっとい注射をさせられた。半分寝ぼけていたので、何事かと思った。検温、薬と続く。二日目から食事が出た。ラジオもテレビも雑誌もないから、持ってきた本なんかすぐに読んでしまう。

何もしないで、考えることもなく、黙って寝ていることに罪悪感すら感じていた。そして苦痛そのものであった。却って病気になりそうだ。家にある本はすべて読んでしまった。急に不安になる。ただ、何もしなくていい真っ白な時間だけが刑罰のように先にある。どうしたらいい。便所に立って、表通りを覗くと、市電の広い通り沿になんと古本屋があるではないか。しめた。いそいそと、そっちのほうの病気がまた再発して、でかけようとしたら、看護婦が、

「どこへ行くんですか」と、靴を手に持ったわたしを睨んでいた。まだふらふらする体で、安静にしていなければならないときに、この患者はなんだという顔をしていた。

同室の音楽マニアに訊くと、外出するなら裏口だと教えてくれた。みんな結構出ているらしい。非常階段という手があった。鉄の扉を開けて一階まで降りてゆく。パジャマのまま、スリッパをはいて、わたしは向かいの古本屋にそれから常連客となって入り浸ることになった。

ただ、そんなに小遣いはないから、五冊百円のゾッキ本ばかりどっさりと買い込んだ。どちらかということ、わたしは速読のほうで、一日中、本を読むことしかないので、二十冊づつ読んで

いた。毎日古本屋に通わねば、未読の在庫はすぐになくなる。すると、また空白の恐ろしい時間がやってくるので、わたしは脅迫されているかのように、今度はサンダルを患者から借りて、看護婦詰所を通らないようにして、着替えまで持ち、一階の便所で着替えた。そうして、まだふらつく体で、市電に乗り、薄野まで出かけた。まだ入院して四日だが、娑婆が実に新鮮に見えるのだった。

薄野、大通り公園と抜ける辺りに、何軒かの古本屋を知っていた。そこを一渡りして、両手に持てないくらいの古本を買ってきた。さすが、いつもの体ではないからこたえた。

病院に戻ると、また便所でパジャマに着替えて、何気ない顔で、非常階段を上がり、鉄扉を開けた。すると、そこに女房と息子三人があんぐりと口を開けて整列していた。同室の音楽マニアが、傍にいて、

「ほらね、ここから出てくると云った通りでしょう」と、説明していた。まるで手品の種明かしをするようであった。

「何やっていたのよ。病気のくせに外出していいの？」

と、女房は声が大きい。

「しかも、また本ばかり買ってきて」

わたしは、入院が次第に楽しくなってきた。一日中本が読める。ノートに詩のようなものを書いたり、エッセイ風に綴ったりできる。美しい看護婦が、風呂に入れないので体を拭いてくれる。「前だけは自分で拭いてください」と、温かいおしぼりをよこした。そこを拭いてくれるほどのサービスはしていないようだ。

入院一週間目で、ベッドやその周りが本でいっぱいになった。積み上げるだけ積んでいた。すっかり書斎のつもりだった。

看護婦が検温に来る。

「どうですか、具合のほうは。どこか痛いところない？」と、訊くから、

「ええ、目が痛くて」と、云うと、看護婦は本の山を見て、「そうでしょうねえ」と笑った。

午後は担当医師の回診だ。看護婦やインターンまでぞろぞろと大名行列のように付いて歩く。

医師は音楽マニアのところに行くと、そこはカセットテープの山だった。すごいなあ、どんな音楽を聴いているんだいと、驚いている。わたしのところに来ると、

「ここもまた凄いなあ。みんな凄いや」と、変なところで感心しているのだった。

二週間いて、ようやく医師から退院してもいいと云われた。そのころには入院が好きになってしまい、出たくなかった。こんな居心地のいいところはない。

「先生、今度はいつ入院できるんですか」と、わたしは冗談で訊いた。

「もう来なくていいよ」と、冷たい。病気は嫌だが、一年に一度ぐらいは休暇入院してもいいと思った。腕が青く腫れるほど、注射の跡がついていた。

社員たちが、車で荷物を取りにきた。ただの退院なら、着替えだけだからタクシーでもいいのだが、本の山がある。ちょっとした引越しだった。

知事公館の庭がすぐに見えた。北一条通りのナナカマドの並木は赤い実をつけている。ちょっ

と肌寒かった。夏の終わりに入院して、もう秋になっていた。

第582話 化粧

鏡の前に座り、化粧をしている女の後ろ姿ほど恐ろしいものはない。振り向いたその顔が、真っ白だったりする。思わずわたしは叫んでいた。真っ黒のときもある。泥パックというやつだ。

いまだに男には何に使うのか不可解な化粧品がずらりとドレッサーの上に並んでいる。それらが、綺麗になりたい女の願望を騙そうとしているインチキ商品に思えてくる。

我が家では、高校の娘から化粧道具を持っている。

「何も化粧しなくても十分可愛いのに」と、思うが、

「あなたは古いのよ。いまは、すっぴんで学校へ行く子は少ないのよ」

それが常識だという。皺を隠すための化粧だったら、十六歳にはいらぬはずだ。お肌に潤いもありすぎる。若いというだけで一番美しいときに、何も化粧しなくともと思う。化学製品だから、逆に肌にはよくないだろう。いまからつけていると、これから大人になると、ぼろぼろになりはしまいかと父親として危惧するのだ。

八十三歳になる婆さんまで、乳液を切らした。ファンデーションがどうのと、化粧品をいまだに駆使して、若さというより老化を目立たないようにしているのには驚かされる。

「もう、化粧するのやめたら？ 隣の婆さんはおふくろより年下だけど、化粧していないし、腰は曲がって、髪も団子。もう婆あを自認しなよ」

「いやだね。女はいくつになっても女なんだよ。死んだときでも死化粧をしてあの世へ行くんだから」

はあ、恐れ入りました。女としての敗北宣言は死ぬまで出さない。どこかで、いまだに男に誘われると待っている気持ちがあるのだろうか。単なる身だしなみではないだろう。

女が化粧するのは動物がするところの異性へのディスプレイという誘惑行為に違いない。夫がいても、どこかでは余所の男によく見られたいという本能があるのだ。それは男にしても同じことだ。

元子は（また出てくる）一日に三時間は顔をいじくっている。別にタイムを計ったわけではないが、朝も時間がないと云いながらも、鏡の前に座って顔に何かを塗ったくっている時間が三十分はある。夜は時間があるから、テレビを見たり、コスメの雑誌を開いたりして、悠々と顔をいじくっている。

「そんなに顔にいろんなものを塗って、逆に皮膚を虐めているんじゃないのか。おれを見ろ、毎朝、髭剃り後のアロエクリームだけで、いつも肌はつるつるだ」

すると元子はケラケラと思い出したように笑うのだ。

「そうね、あなたったら、ハンドクリームを顔につけているのね」

「うるさい」

一壇三百円の生協のアロエクリームで二年はもつのだ。

元子だけではないだろうが、女は全般に化粧をするところを見られたくはないようだ。女の舞台裏は恥なのか、覗くと嫌がるのだ。それはまるで秘密の作業のように、化粧するときは男子立入禁止となる。それが結婚のときからの約束であった。

妻の素顔を見たことがないという夫もいるだろう。見たら、詐欺ではないかと驚くほどの顔であったりするのだ。誰も知らない素顔の八代亜紀と嘉門は歌った。女にはまさに見せてはならない本当の顔がある。それを見てしまったとき、男は……。夕鶴はそんな女の化粧落しの現場を見た恐ろしい話の比喩なのではないだろうか。

「見たら離婚だからね」と、いつも口癖のように云っていた元子だが、そう云われると見たくなるのが人情というものだ。いつも、化粧のときになれば、部屋からドドドドという奇妙な音が聞こえるのだった。ますます気になる。一体、何をしているのか。

わたしは、ある朝、ドアが少し開いているので、その隙間から元子の化粧する現場をそっと盗み見た。後ろ姿だから、顔は見えないが、どうも、いつもよりほっそりとして見えた。顔に肉がないようにも見えた。そこへ、左官屋が使う壁塗りとパレットにどっさりとしつこいようなファンデーションを盛り上げて、ペタペタと顔に塗っているというよりか盛り上げていた。それだけで厚さは一センチはあろうか。わたしは息を呑んだ。す、凄い。元子の顔は石膏マスクのように、まったく造られたものだということが、そのとき初めて判った。女は化けるというが、そこまでしていたのだ。

夜も、やはり同じように、そっとドアの隙間から覗いてみた。ドドドドという音の正体がようやく判った。超小型の削岩機の音であった。元子はその電動削岩機で、分厚く塗った壁を壊していたのだ。まさにそこは女の工事現場であった。ときには、しつこい顔の壁を鑿とハンマーで叩き割っている。それ恐ろしい光景であった。わたしはもう少しで小便をちびるところであった。がたがたと震えもきた。と、元子が物音に気づき、わたしの見たことのない素顔で振り返った。

「見たなあ」

第583話 危険な生物

未確認飛行物体が確認されると、戦闘機のスクランブルで、七機が発進した。レーダーにはくっきりと国籍不明の機影が確認されていた。領空を侵犯していたので、国際信号を相手の機に送信していたが、なんの応答もなかった。非常の場合は、急速冷凍波か、バリアー発射装置で捕縛せよとの命令が下ったが、コンピュータでデータ解析を急ぐと、その飛行物体は、危害を加えるような武器は搭載していないという結論が出た。

それではと、誘導装置で、その機を基地まで捕獲することとなった。誘導装置とは、故障した機や、敵機を捕捉するために、相手のコントロールをすべて機械で操作できるというものだ。大気圏内に突入してからは、キラキラと輝きながら、その機は、推進装置を止めて、ゆるやかに滑

空するよう翼を広げてきた。地上では見たこともない機体だった。どこの国のものでもない。ジュラルミン色の機体は、肉眼でも見えるようになった。かなりの損傷が見られた。恐らく、宇宙船の脱出用救命ボートと思われた。

どこの国でも、事故の報告はない。その機の形もあらゆる情報に照合して存在しないものと、コンピュータが結論を出した。すなわち、異星人のものであるという。

かなり精度の高い乗り物らしかった。そのニュースは全世界に広まった。基地には多くの報道陣が詰め掛けていた。飛行物体は、滑走路に滑るように着陸した。消防隊と救急車、化学班の特殊車両が駆けつける。機の半径二キロは立ち入り禁止となった。他の星からの侵入者に対しては、防疫という措置も行われる。この地上にないウイルスを持ちこんだら、ひとたまりもなく絶滅してしまうことだってあるのだ。

放射能を測定し、菌などの汚染がないかを調べる。機は着陸用の車輪も出している。小型のスペースシャトルのような形をしていた。安全が確認されると、ベータ波透視機で、危険な武器、放射性物質がないかを確認する。すべてが安全だと知ると、ようやく、完全な防護服を着た捜査班が、機の底にある入口をこじあけて中に入った。

マスクミのカメラがいままで、誰も見たことのない宇宙人が現れるのをいまかいまかと待っていた。やがて、ぐったりとして、失神しているような宇宙服を着た生物が、内部から抱きかかえるようにして運び出されてきた。背丈や格好は同じくらいだった。二メートルもない。体重も七十キロくらいか。

さっそく、その生物は宇宙科学研究所に搬送された。そこでは、慎重に、無菌室の中で、宇宙服から生物を出した。数人の生物学、医学の権威者が立ち会っていた。宇宙服に残留していた空気の成分を調べると、窒素が多い。酸素はこの地上と同じ、二十パーセントだ。どうやら、この生物も酸素で生きているようだった。容姿は不気味なものだった。とりあえず、酸素吸入がなされ、血液成分も調べられ、それに似たリンゲルを腕から注入することにした。

なんとかして、生かして保護したい。殺しては、情報を得ることはできない。こんな高等生物が銀河系のどこかにいるという感動が、研究チームの間で沸き起こっていた。みんな、自分たちは孤独ではなかったという安堵で、涙ぐむ者もいた。

その生物はようやく意識を回復していた。うううと声も出した。そして、目を開くと、覗きこんだ医師の顔に驚き、突然暴れはじめた。機具はひっくり返し、看護婦を殴りつけ、みんなで抑えるのにやっとだった。

医師の一人には精神分析医もいて、カルテに「凶暴」と書かれた。ベッドにベルトで拘束しなければならなかった。そして、鎮痛剤が打たれた。生物の性質を見るために脳波を調べ、過去の記憶からどんな生活と思想を持っているかが、機械で分析される。脳の中の記憶まで引っ張り出すことができる機械があった。

記憶の中の映像をモニターに映しだしながら、科学者たちは驚いた。

「な、なんだ。このきのこ雲のような爆発物は。破壊力もすごいが、かなりの熱と放射能を出す新型の爆弾と見た。彼らはこんな殺傷する武器を持っているのだ」

また別の記憶の場面では、ボクシングの試合がやられていた。

「なんという野蛮な生物なのだ。互いに殴り合っているのに、観客は手を叩いて喜んでいるとは」

「実に、好戦的な生物なんですか。こんな生物を敵に回すと大変なことになりますし、われわれのような武器を持たない平和な星と違い、友好的にやってゆくことはできませんまい」

次の場面では、カジノが出てきたり、株の情報が流れたり、強盗が銀行を襲う事件が断片的に流れた。それがどんな意味のシーンなのか、即座に解析されると、科学者たちは青ざめてきた。

「これは、ひどい生物だ。すべてが金儲けのために動いている。人を殺すのも騙すのも、利用するのも、すべて利益のためなのだ。政治家までが醜く自分たちの利得だけで動いているとは」

「世の中にこんなにも醜悪な星があったのですか。ところで、その星の位置は確定できましたか」

「はい、記憶の画像をもとに、衛星を持つ惑星で、恒星からの距離や、天体の形から計算しましたら、太陽系の第三惑星から来た生物と思われます」

「そうか、実に危険な生物だ。見る、手も二本しかないし、目も二つしかない。前より見えないのは不便だろうな。われわれのように後ろにも目がついていたら、世界がもっと見えてくるんだが」

「そうですね。われわれのように手が八本あれば、もっと沢山のひとと握手ができるというものです」

「戦争という言葉はわれわれにはないが、彼らにはあるのだ。恐ろしい星があるものだ」

そうして、科学者たちは、遠く一等星として光り輝いている太陽を見上げていた。

第584話 縄文人が来た

おれは、小さいときから寝相が悪かった。あまりごろごろ転がるので、ドアから廊下に出たこともある。夏ならまだいいが、真冬の氷点下ともなると、蒲団に入っていないので、風邪気味になる。夜中に体が冷えて、目が覚める。

子供のときは、それでいつも微熱状態だったのを心配して、おふくろが蒲団ごとおれを紐で縛った。もし、火事になったらどうやって逃げようかと子供ながらに真剣に考えた。やはり、蒲団を体に巻いたまま、ぴよこぴよこと跳ねて逃げるしかないなと思った。

それは可哀想だと、今度はベッドの四隅に蒲団の端を紐で吊るした。でも、それは蒲団がずれないだけのことで、中身のおれは、ごろごろとやはりどこへでも転がってゆくのだ。

その寝相の悪さは大人になっても直らない。あまり夜中から朝までドタンバタンと運動しているので、何か朝起きるとすでに疲れていた。

その朝は、日曜日だったが、町内で早朝からゴミ拾いのクリーン作戦があった。おれは、町内の役員もしていたので、目が覚めた途端に思い出して時計を見た。大変だ。七時集合なのにあと五分もない。髪も寝癖がついてボサボサと立っているのも知らないで、顔も洗わず、歯も磨かず、寝ぼけてその辺のものを頭からかぶるようにして着ると、草履をひっかけてバタバタと集合場

所の公園まで走った。

ところが、異変がすでに起こっていた。おれの姿を見るなり、通行人たちは、真っ青な顔になり道を開けた。子供たちは泣き出すものもいた。

「怖いよう」

母親たちは、自分の子供がとって食われるのではないかと、母性本能からひしと抱きしめて目を瞑っていた。おれは、振り返って後ろを見た。別に誰も他にいない。ということは、みんなしておれを恐れているのか。

誰かが、叫んだ。

「わあ、縄文人がやってきた」

はて、縄文人？ と。誰のことか判らない。自分のことなら、思い当たるふしもないわけではない。おれは、人一倍えらが張っている。スマップのクサナギのように顎のラインが角張っているのが、縄文人だと云われる。古代人は硬いものでも食べなければならなかったので、顎が発達していた。それが現代人に至ると、顎が退化したように硬いものが噛めなくなっている。

それに、おれは、野良仕事に向いているように足腰が丈夫だ。どちらかという下半身がどっしりとしている。重いものでも担いだり、持ち上げたりするのが人より強い。背筋力は並の男よりは随分とあるのだ。そのおれが、ドドドと蟹股で走ってゆく格好は確かに縄文人の体型には違いないだろうが、そんなに怖がるほどのものか。

まだ、どこかで寝ているようにぼんやりしていたが、次第に自分が着てきたセーターと思っただのは、麻で編んだ民芸調のタペストリーだったことに気づいた。それをポンチョのように着てきたから、見るからに縄文人といえ、そう見えるか。

おれが生まれ育った青森は、三内丸山遺跡から、是川遺跡、亀ヶ岡と、縄文遺跡の宝庫だった。おれには縄文人の血が濃く入っているのだ。髪も黒く硬い。寝癖もなかなかとれない。きっとものすごい形相で走っているのだ。

「わあああ、縄文人だ」

みんな怖がるから、からかってやろうと、おれは、歯を剥いて噛みつく格好をしたり、唸ったり、吼えたりして、野生の人間のように振舞っていた。みんな、どこかおかしいのではないかと、何を恐れているのだ。弥生人が縄文人を恐れ、滅ぼしたように、きっと現代人には遺伝子に組み込まれた縄文人の怨念を恐れる情報が仕込まれているに違いない。

だんだんと人間は本能も自然も忘れて、動物としては特殊な、人工の世界に生まれて生活するようになってからは、野生を受け入れないようになってしまったのか。

「キャー、キャー」と人々は逃げ惑う。あちこちで、車が追突したり、パトカーや消防車、救急車がやたら町を走り、大変な騒動にまで発展していた。

それがおれのせいだとは、全く気がつかないでいた。おれは、清掃のためにただ、公園まで走っているだけのことなのだ。寝坊して遅刻してはいけないと。

それが、何故か、パトカーに包囲され、警官隊に取り囲まれていた。スピーカーで、抵抗はやめて、おとなしくしろとまで云われた。

「お、おれが、何をしたっていうんだよ」と、近づこうとすると、警官もあまりの恐ろしさに拳銃を向けながら後退りするのだった。マスコミの車からヘリコプターまで上空を旋回している。

何が起こったのか、おれが一番判らない。

「一体、おれのどこが怖いんだよ。どうして指先物語はお終いにはいつもこうなるんだよ」

近寄るとキャーキャーとみんな逃げる。そのとき、おれは、自分の服装に気づいた。そうか、慌てて起きてきたから、変なものをかぶっていたが、ズボンをはいてくるのを忘れていた。どうもそれだけではないらしい。

そこへ、同じ町内の親しい奥さんが、おれだと判ると、くすくすと笑いながら、警官が制するのもしかないでおれのところにやってきた。

「何よ、その顔。それじゃ、みんな縄文人だって怖がるわよ」

奥さんは腹を抱えて笑って、手鏡を出して、おれに差し出した。

「いいから、鏡を覗いて、自分の顔を見てみなさい」

おれは、鏡を受け取ると、自分の顔を見て声も出なかった。顔一面に寝ていたときついた畳の跡が土器の模様のようについていたので。

第585話 白 情

薄情とは、薄くてもまだ情があることだ。最近の風潮は薄いのもなく、ただ白いのだ。

北村家で飼っている金魚には小泉とか高村とかいう名前がついていたが、七年前に、八幡様の縁日の金魚掬いでとってきた三匹のうち、亀井と高村が相次いで死んだ。金魚も七年経つと立派なもので、生姜と生醤油で煮魚にして食べられそうな大きさまで成長する。そのたびに水槽も大きなものに換えてきていた。

亀井と高村は政権争いで負けたのではなく、病気で亡くなった。それを可愛がり、面倒みてきた元子はかなりのショックで、

「わたしの大好きな亀井が死んだ。もう生きている意味がなくなった」と、嘆いて、食事も摂らないのだ。亭主の拓也は、それみよがしに、

「だから、おれは生き物は嫌いなんだ。もう二度と生き物は買ってきてはならないぞ」

と、冷たく云うと、元子は泣き声で、

「なによ、あなたは薄情な人」と、生き物の嫌いな拓也を罵った。

「あら、そんなこと云って、お母さんだって、水槽に浮かんでいる金魚を盛んにケイタイのカメラで撮っていたくせに」

と、高校の娘が元子を指摘した。拓也は、そのことで、ある話を思い出していた。この町に昔いた俳人で、有名な老人が、自分の妻が死んで、火葬場で泣きながら金歯を拾うという俳句があった。どんなに愛したものでもどこかでは他人なのだ。

女はとくに泣くだけ泣くと翌日はケロリとしていて、どっちが薄情なのか判らない。ときに、

精神構造がどうなっているのか調べてみたくなる。

翌日、やはり元子はにこにここと機嫌がいい。仕事から帰った拓也に、ケイタイで撮った写真を見せて、

「あなた、どこか変わったところがな—い？」

と、水槽の金魚を撮っている写真を見せた。大きな金魚が写っている。とうとう一匹になった小泉だ。小泉とはいつも孤独なやつだった。

「別に、ただの小泉じゃないか」「よく見てよ」

すると、小泉の脇に小さな金魚が数匹いるではないか。拓也は玄関へと出てみた。やはり、性懲りもなくまた小さな金魚を三匹も買ってきていた。訊くと、名前はまた同じ。追加の一匹は藤井だという。総裁選挙じゃないんだから。

死んだことなど忘れて、また新しいペットを買ってくる神経が判らないと、拓也は首を傾げる。娘もそうだった。ハムスターが死ぬとその日はご飯も食べないで、自分の部屋に閉じこもって口も利かないのだが、翌日、嬉々として学校から戻ってくると、小さなハムスターを友達から貰ってきたと、手の上で遊ばせている。拓也なら、ペットが死ぬと暫くは思い出したくもないから、飼うことはないだろう。

ペットは人間の慰みものだから、何でもいいのだろう。何か命のある玩具といった感じがしていた。ペットは必ず死ぬから商品として消耗され、短命ほど回転率が高いよいペットとなるのだ。売る方も買う方もそんな目でしか見ていないような気がする。人間がだんだんと生命の尊さを忘れ、冷血になってゆくような気が拓也はしていた。

人はいつも死と背中合わせに暮らしている。それは突然ドアを叩くのだ。北村家にも突然の電話が夜、あった。

—ご主人の拓也さんが、大型トレーラーと衝突して……。

—ええ？ 怪我をしたんですか？

—いいえ、実は……即死でした。

元子はあまりの衝撃に倒れそうになった。

拓也は毎日十五キロの通勤ルートを車で往復していた。国道だから交通量も多い。いままでも、前の車が事故ったのを何回も見ているほど、事故に遭遇するのはただの運不運でしかなかった。

元子は病院にかけつけた。拓也はすでに霊安室に寝かせられていた。金魚が死に、ハムスターが死んだのは、何かの予兆だったのだ。元子は涙が枯れるほど泣いた。

遺体にすがって泣きながら、これから未亡人として子供二人をどうやって育ててゆけばいいのかということをちらちらと考えていた。夫はまだ現役だから、通夜葬式は沢山の人があるだろう。会社の間が半分来たとして、その取引先と、友人関係、親戚はきっと包みが大きいから、いくらいくらと、いつのまにか、悲しみは、香典の計算になっていた。一人当たりの香典の相場に掛けるところの集客予想はと、ケイタイが電卓にもなるので、ピッピッと押して計算していた。

そのうち、確か、生命保険と損保にも入っていたわね、と保険金の計算。事故の様子からして、夫には非がないから、過失割合は百パーセント相手方にあるとして、自動車保険から出る保険料はどれぐらいかしら、と予想をすると、もう宝くじに当たったような夢のような事態になって

いた。それと遺族年金と一時金と、眩暈がしそうだった。もう、すっかりと拓也が死んだことなど忘れていたほどだった。

それでも、じっと通夜、葬式が終わり、親戚が帰る初七日まで行くと、どっと疲れが出て、元子はようやく事の重大さにまたはらはらと泣くのであった。葬儀は遺族にとって忙しすぎて、何も考えさせなくする意図もあるのか、みんな帰って、すべてが終わったときに、どっと悲しみが押し寄せてきた。

子供たち二人は、そんな母親の傍についていて、励ましていた。

「お母さん、わたし、明日から高校やめて働くから、心配しないで」

元子はその娘の言葉ではっと我にかえった。

「そうよ、いつまでも泣いていても仕方がないわ。あんたたちにこの先も苦勞させないからね。余計なことを考えないで、いままで通りちゃんと勉強してね。お父さんがいなくても、大丈夫だからね」

元子は一番肝心なことを忘れていた。落ち込んでいたときに、急にあの人のことを思い出した。さっそくケイタイで連絡していた。

翌日、子供たちが学校から帰ると、玄関に男ものの靴がある。誰かお客さんかなと思っていると、居間でビールを飲みながら、知らないおじさんが母親と談笑している。

「あらあら、あんたたち、おじさんにちゃんと挨拶しなさいよ。お父さんによく似ているでしょう。新しいお父さんになるかもしれないからね」

以前の不倫相手だった。

第586話 景気回復

ようやく景気は上向いてきた。人々の財布の中は札束でびっしりだったし、子供でもポケットの中には一万円札が何枚か入っていた。

遥書房の売上は、去年が五千万しかなかったのに、今年は一挙に二千億の売上だ。気をよくした社長は、総務の前田部長に相談した。

「どうだろう、今年の冬のボーナスだが、平均五千万づづやろうじゃないか」

実に気前のいい話なのに、社員は小耳に挟んで浮かない顔だ。

遥書房は出版社だ。出版不況と云われていたが、ここにきて底入れするとあとは上向き。それもいまままで硬派の出版社と自認していた遥書房が官能小説からポルノ雑誌まで出すこととなり、それが却って世間の注目を浴びることとなった。創刊号から売れに売れた。起用したモデルはいずれも硬派で絶対に脱がないという女優を遥さんならと次々に脱ぐこととなった。写真家は、やはり芸術的にも名高い金浜茂明に依頼した。

倍倍で毎月、売上は伸びていった。曾呂利新左衛門の豆ではないが、倍の倍が倍そのまた倍

の倍、すなわち、2.4.8.16.32.64.128.256.512.1024.2048.4096.....ダメだ、暗算できなくなった。一年後にはなんと四千倍の売上になっていた。

それは遥書房だけではなく、全国的にそうなのだ。いままでの沈滞ムードを引っくり返すような事態になっていた。政府の経済政策が功をなし、いままでの流れと反対の方向へと、進んできていた。

遥書房の本社にも直接、本を買いにくる客がいる。トラックがビルの前に横付けにされ、女の人が入ってきた。

「あのう、北村拓也の写真集が欲しいんですけど」

「一冊でよろしいでしょうか。八百万円ですが」

「細かくてもいいですか」

「ええ、構いませんが」

すると、トラックの運転手に女の人は声をかけていた。

「細かくてもいいんですって」

事務員は急に嫌な予感がした。

「ひょっとして、十円とか百円とかの硬貨ですか」

運転手がトラックの荷台から台車に重いものに乗せて、事務所に入ってきた。

「数えてみてください。ちょうど八百万円ありますから」

じゃらじゃらと最近は使われなくなった硬貨がカウンターの上にぶちまけられた。事務員たちはそれを数えなければならなかった。

「部長、どうしましょう。こんなに沢山の硬貨」

「バカだなあ、ありがたく受け取っておけ。それは、闇で、鉄屑屋に売るのが。いまはすごい金になるんだぞ」

硬貨も実際は、その額面以上の値になるのだ。

遥商事でボーナスが出た。いつもなら銀行振込なのだが、現ナマを見せることで、社員に貰ったという実感を味わってもらおうと、今回だけは現金支給となった。平均五千万円。中には一億円を貰ったものもいる。札束がばたばたと積まれた。万札百枚の束が百束だ。大きなトランクにようやく入る。それを家まで持って帰るのが大変だ。

ボーナスが出たから、社員たちはちょっと寄ってゆこうと、ピンサロに繰り出した。

「あらら、いいわね。ボーナスが出たのね。わたしにもソーダ一杯奢ってよ。フルーツも食べたいわ」

そうして、いつもはもてない男たちは、その日だけはホステスに囲まれて、ご満悦だった。

帰りがけ、お勘定を見て驚いた。ひとり八千万とある。ボーナスだけでも足りない。ひとりの社員が文句を云った。

「暴利じゃないか。ビール一本しか飲んでいないのに」

すると、強面のお兄さんが出てきて、

「なんですかい、ビール一本が二千万が高いと因縁つけるのですかい」

社員たちはすっかりと裸になった。

真面目な社員は大きな袋を抱えて家にまっすぐ帰った。

「おう、ボーナスが出たから、明日は奮発して刺身にしてくれ」

奥さんは、金額を聞いて慥然となった。

「何よ、一億円くらいで威張るんじゃないよ。たったそれだけなの？ それで何が買えるっての？ 刺身ですって？ とんでもない。いまはね、マグロの刺身一棹で二千万もするんですからね。それっぽっちじゃ、あなたの背広も買えないし、家族で一泊の旅行にもゆけやしない」

夫婦、険悪な雰囲気になっていたときに、息子が入ってきた。

「ママ、明日、塾のお金持ってゆかなくちゃならないんだ。六千万円だってさ」

「ほらね、いまは超インフレで、ゼロが三つも多い時代なの。スーパーに買物に行くのに、ジュラルミンのケースに札束詰めて行くのに、雀の涙の一億円ですって、バカにしないでよ」

道端に一万円札が紙くずのように落ちていた。それでも拾おうとしないのだ。

まあ、でもデフレよりはましかな。借金も減ったことだし。

第587話 死刑囚

物音ひとつしなかった。冷たいコンクリートの壁に、時折、咳払いが響いた。ここは、死刑執行を待つ囚人の独房だ。わたしは、その中にいて、誰とも話すことなく、本以外の読むものは与えられず、テレビやラジオもない生活を長くしてきた。

ひとりだけの六畳くらいの部屋に閉じ込められて、日がな本ばかり読んで過ごしてきた。幽閉されている現実を考えまいとして、チビた鉛筆で、ノートに毎日、短編小説のようなものを書いてきた。その内容は、五十年少し生きてきたわたしの思い出が多かった。ノートは何十冊にもなったが、それは長い長い遺書のような感じがしてきた。そのノートの表紙には、指先物語と題を書いてきた。ちっぽけな取るにたえない話という意味だった。

この死刑囚のための独房に入ってから、わたしは人と接する時間がなくなり、邪魔されることなく自分と向き合い、自分と語り合う時間が持てた。それは、ここに収監されている囚人の多くがそうだった。毎日、壁ばかり見ている。高いところにある鉄格子の窓からようやく小さな空が見えるのだ。そこに雲が浮かび、鳥が飛び、枯葉が散るのを見ることで季節を識った。

みんな孤独だった。今か今かと死刑執行の日を待つのだ。あと幾日生きられるか。おどおどして生きていた。見回りの看守の足音は、コツコツとひとりだけだから時間も定刻で、安心して聞いていられたが、数人の足音が歩調を合わせ、遠くからやってきて、ある独房の前で止まる。

「野口呉服店、出なさい」

その声が響き渡る。いよいよ、来るものが来た。囚人の野口が今日、執行なのだ。ガチャリと鍵を開ける音がする。野口はすでに観念したかのように、

「よろしく願いいたします」と、係官に両腕を抱きかかえるようにして、独房から出ていった。

われわれが、ここから出られる日は、死ぬときだった。いつ死んでもおかしくないものが多かったし、すでに死んでいるようなものもいた。いずれ、全員が死ぬのだ。どんなに健全経営をしていても、人は過ちを繰り返す。見通しが甘かったり、過大投資をしたり、誤算というものはあるものだ。どんな人もここにやってくるのだ。

また、足音がした。今度は自分か、それとも隣かと、みんなびくびくしていた。

「藪蕎麦、出なさい」

わたしは衝撃を覚えた。三軒隣の蕎麦屋だった。そこの女将さんは、よくうちに話に来た。代々続いた老舗だった。

「うちも経費のほうが売上より多くてね、もう商売はやめたくなったよ」

つい二週間前もそうぼやいていたのだ。そこの蕎麦は美味かった。ただ、一度集団食中毒をしてから、客足が途絶えていた。食べ物商売は口コミで繁盛もするがすぐにダメになる。恐ろしい気がした。

コツコツと床に響く死刑執行の足音。今度は誰か。みんなの心中はどこが死ぬか、そんな推測でいっぱいだ。

「小田電器店、出なさい」

小田もか。彼は、わたしの中学のときの同級生で、何度もわたしの店に顔を出しては、資金繰りのことや、銀行の貸し渋りについて相談していたのだ。とうとう、息切れしたか。

「嫌だよ、死にたくないよお」泣き叫ぶ小田の悲鳴がした。暴れてもがいたようだ。そうなると、拘束衣で、体の自由を奪わねばならない。差し押さえと強制執行。小田が泣く声は聞いていられなかった。わたしは耳を塞いだ。それはそうだ。すべてを剥奪されるのだ。名誉も財産も、仕事も。住む家もなくなる。信用もなくなり、多くの友人、親戚までそっぽを向く。子供たちは学校をやめて働かなければならなくなる。前科一犯となる。

民事再生法というの最近はあるが、あれもおかしい。一度、破産状態までいったものに、世間は温かい手を差し伸べるものか。いままでの借金は支払い猶予しても、新たな借り入れはできない。これまでも赤字で、元金も払えないものが、支払い猶予して、自助努力で立ち直れるものか。結果は潰されてしまうのだ。

わたしのいる商店街もだんだんとシャッターを下ろし、売店舗の看板が目立つようになった。新聞に倒産と載るのは負債総額一千万以上というが、実際は一億でも二億でも、そう有名なところでなければ記事として出ない。水面下では毎日、実に多くの零細商店や町工場が潰れているのだ。それらは目につかないし、噂にも上らない。

政府は無策と、嘆くことはない。何も政府のせいではない。世の中の商店が支店を出してどの商売も増えすぎた。もう、いらないとげっぷが出て、次々に出店する。互いが互いの首を絞めあっている。しかるに、共倒れということになってしまうのだ。客足は分散する。人口が減っている街で、なおさらだ。

コツコツとまた足音だ。

「林語堂だな、出なさい」

わたしはぎくりとした。来たか。とうとう、わたしの出番だ。本も読まなくなったが、古本屋もやたら増えた。いつかは、この日が来ると思っていた。

教誨師が云った。

「最後に何か云い残すことはありませんか？」

わたしは、遺言のようにひと言云った。

「誰が総理になってもいいが、零細企業のことも考えてくれよな」

第588話 立つか立たないか

還暦を迎えると赤い座布団に帽子をかぶり、ちゃんちゃんこを着る爺さんという印象は昔のもので、最近の六十歳は若い。まだ、昨日までディスコで踊っていた人たちが、若いときの面影を

残したまま、気がついたら六十になっていたというだけのことだ。

服装も若い。ジーンズにボタンダウンのシャツ。スニーカーといたいでたちで、いまだにエレキギターを鳴らしたり、改造車に乗っていたりするのだ。若大将が同じくらいの年齢だから、まさにエレキブーム、ロックンロール世代がそのまま還暦を迎えることとなった。孫もいるのがあたりまえ。だけど、おじいさんと呼ぶにはまだ可哀想なくらい現役バリバリだ。男は年をとると、目と歯とナニにくるといふ。いずれも老眼、総入れ歯、そして話題はバイアグラ。

和菓子屋の親父と本屋の親父、そして、蕎麦屋の親父は高校の同期だ。今年、仲良く還暦を迎える。いつも、暇さえあれば、行き逢っていた。

今日も、暇な午後の蕎麦屋のテーブルを囲んで、三人、仕事を投げ出して、ある問題について話し合っていた。

「ようするに、立つか立たないかなんだな」

和菓子屋が云った。

「どうしたら立たせられるか。塩を使うって手もあったな」

蕎麦屋が昔読んだ本にそんなカラクリが書かれていたのを思い出した。

「塩で立たせるのか。それはズルだよ。種も仕掛もなく立たせる方法だよ」

「そうそう、この前、週刊誌に出ていた女の人な。彼女の手にかかったら、立たないことはないんだってさ。まるで手品みたいにみんな立派に立つんだよ。しかも、一瞬ではないんだ。いつまでも立っているんだ」

「す、すごいなあ。一体どんなテクニシャンなんだ」

「そうなんだ。問題は持続力とテクニックだな」

「おまえは、一瞬でも立たせることができるんだろう。いいなあ、おれなんか一瞬でも立たないから」

「それをずっと立たせておく方法なあ」

「ああ、いいことあるよ。立ったら、すぐにハードタイプのヘアスプレーを拭きつけて固めてしまおうってのはどうだ」

「ダメだよ。それもズルだよ。そんな道具を使うことなく立たせないと」

「そこなんだよなあ。みんなどうして立たせているんだろうか。念力ってのはどうだ」

「超能力なんか信じているのか。もっと科学的に考えたらどうなんだ」

「ということは、物理学的にか」

「工学、建築の技術を応用してか」

「そこまでやるのかよ。こんなくだらないことに」

蕎麦屋が笑った。

「くだらない？」すると、真面目に考えていた和菓子屋がきつとなった。

「この命題は恐らく古来から我々人類に提言されているんだぞ。それをくだらないとはなんだよ。もっと真面目に考えようよ」

「そうだな。若いときはこんなことも遊びだからと真剣に考えなかったが、だんだんと年とってくると問題に執着するよな」

「それだけ頑固になってきたということかな」

「でも、場所と相手が変わればできるかもしれない。ちょっとした雰囲気や気分の問題だったりしてな」

「そうだな。立たせよう、立たせようとすればするほど、神経がそこに集中して、却ってできないだよ。別のことを考えるとか。全く、無の境地になるとか」

「だんだんと哲学的、仏教的になってきたな。でも、無心ということはいいかもしれん。雑念があると立つものも立たない」

ふと、気づいたように本屋が問題を前に投げ出していた。

「やめようや、もう六十になったいいおじいさんたちが、こんなことを真剣に考えるなんて。若いときならいざ知らず、もう、普通なら定年退職、年金もらって盆栽いじりのご隠居さんだ」

和菓子屋は反論した。

「それだからこそ、こうしてみんなで考えているんじゃないのか。ボケ防止にもなるし、頭をフレキシブルにすることで若さも保てるというものだ。われわれの年齢というものが、老人を否定するギリギリの攻防ラインなんだ。ここで負けたら、すぐに老人の仲間入りだな。年とともにいるんなことに興味がなくなる。面倒になってくる。精力も減退してくる。枯れてくると、どんな美人にも目がゆかなくなる。そうになったらお終いだ」

三人とも、再び奮起して、問題に取りかかった。テーブルの上にはさっきから、一個の卵が転がっている。それを立たせようとやっきになっていた。

「コロンブスの卵か。こいつはなかなか立たないぞ」

第589話 マンネリ

人は同じことを続けていると、必ずマンネリズムに陥る。北村拓也がいい例だった。

北村は、毎日、飽きもせずショートショートを書いて、友人知人にメールで送っているのだが、その題材がだんだんと陳腐になってきていた。毎日、図書館から借りてきた新刊本を読んで、何かないかとネタを探していた。新聞やテレビでは時事ネタを、飲み屋に行って、ママと話していたり、友人と話しているときでも、いつもアンテナはピンと張っていた。

それでも出てこないときは、女房に訊く。

「おい、何か面白い話はないか」

高校の娘にも訊く。

「なんか、笑えるような話ないかな」

すると、娘は思い出し笑いして、

「あるある。うちのツレでイカツクつつうか、ウザいけどイケメンがいるのお。でさ、マジ、うちとしてはアウトオブ眼中なんだけどね、それがさ、キャハハハハ」

と、何語を話しているのかさっぱりと判らない。

あちこちから、もう退屈したから書くのやめたらとまで云われる。完全にスランプだ。いや、

スランプというのは、それで飯を食っているプロの云う弁だ。シロウトが趣味で書いている分にはスランプもへったくれもない。そんなの一流になってから云ってもらいたい。

北村は亡き恩師の先生が、云い残した言葉をいつもどこかで復唱していた。

「いいか、なんだっていい。毎日書くんだ。書いて書いて書きまくれ。泣き言は云うな。」

厳しい叱咤であった。本が読めない、書けないという理由も理屈も云わせない厳しい先生であった。

最近、北村は仲間うちで、メーリングリストにも参加して、交信していた。それも最初のうちは面白いからみんなメールを出しあっていたが、どこのメーリングリストもそうなのだが、ジリ貧になつてくる。主催者というか管理人は、それではいけないと、いろんな手でマンネリ打破をねらった。

メーリングリストには発信した番号が付くので、五百番をゲットした人には砂糖一キロプレゼントとか、千番目にメールを出した人には卵プレゼントとやった。もう少し金目のものがよかったか、みんなの反応は冷たい。

北村だけではない。仕事でも家庭でも同じ日常の繰り返しの中で、みんなはマンネリに陥っていた。北村は女房の元子の顔をつくづく眺めて、

「おれたち夫婦もマンネリだな。互いに相手を変えてみようじゃないか」

とまで云う。十年、二十年と同じ顔を眺めていると飽きるのはお互いさまだ。仕事だって、だんだんと熟練してくると、決まったリズムの中に作業も手順も格納してしまおうとするから、能率はいいが、習慣というリフレインの陥穽にすっぽりと嵌ってしまう恐ろしさがある。

そんなとき、北村は街角ウォッチングをする。むやみやたらに徘徊して、何かをみつけようとする。机上の空論で、原稿用紙の上を睨んでいても何も出てこない。

街中でばったりと詩人のじいさんと逢う。

「どうして이었습니다か。最近は何も書いていますか」

商売人なら「儲かってまっか」だが、もの書きは「書いてますか」が挨拶だ。七十を過ぎた老詩人は、いまだに図書館で新しい発見をするという。

「そうですか。マンネリですか」

二人でサロンでコーヒーを飲みながら、突然襲われたアパシーな現状について話し合っていた。

「思いきって、自分を変えてみたらどうです。違う視点から世の中を見るぐらいに変えてしまうんです。そうしたら面白いほどいろんなものが見えてくるかもしれませんね」

北村拓也は考えた。自分を変える。五十過ぎて、いまさら仕事を変えることもできないし、女房と離婚しても後はない。そろそろ老後のためにあとは、余生の設計を考えるだけでいいのじゃないか。これからどう変わったところで、何ができるというんだ。北村はそうも考えた。

ただ、このままでもいけない。大きな壁にぶちあたって、先に進めないでいたから、この際、思いきった自己改造が必要だ。よし、百八十度、自分を転換させて、新しい視点で書けるかもしれない。北村はすぐに実行に移した。

文学仲間の合評会がいつもの小料理屋の二階であった。料理と酒を前にして、みんなは何か落

ち着かない。同人仲間に見なれないおばさんが入ってきていた。ちらちらとみんなの視線がひとりのご婦人に集まっていた。中には笑いを堪えている人もいた。新入りに間違いはない。後で、主催者から紹介があるだろうと、みんなそう思っていた。それにしても随分とど派手な服装に厚化粧だ。しかもがっちりとした肥った体型に、無理やり着てきたワンピースがはちきれそうだ。網タイツも、ボンレスハムのようだ。

みんなの視線が入口にもいっていた。いつも来るはずの北村が来ていない。腕時計を見ながら、遅いなあとぼやいていた。

「まあ、時間も過ぎたようですから、そろそろ始めましょう。北村君も来ると云っていましたが、きっと遅れているんだと思います。ところで、こちらの女性の方は、どなたのご紹介ですか」すると、おばさんは、その場にもったりと立って自己紹介をし始めた。

「あら、皆さんお久しぶり。わたし、北村よ。今度、名前も拓子にしましたからよろしくね。ほほほほ」

みんなその場で引っくり返った。

第590話 時間よ止まれ

時間はいくらでもあるのに、若いときの時間はどうしてこうも駆け足なんだ。それだけ、無我夢中で充実しているってことなんだな。

ぼくは、二十三だった。大学を卒業して、その年、大手チェーンストアに就職した。その女子社員で短大を卒業して、同期入社の子とぼくが付きあいたしたのは、夏のグループ旅行で、できたからだった。

麻衣子はどちらかというと、大正美人だろうか。夢二の絵に出てくるような細面で、切れ長の細い目が、なんとも憂いを秘めているのだ。いまはそんな女の子は流行らない。目が大きく、口も大きい造りが外人のような派手な顔だろう。古風な日本的美人というのに憧れたのは、あまりに最近の女の子たちはがさつで、羞恥心もないからだ。その反対にいる麻衣子をぼくはたまらなく好きになった。

ぼくは東北の田舎から出てきていたが、麻衣子は北陸から東京に就職しにきた。言葉は違うが、互いに「雪」という共通話題で話が合うことになり、それから親密な仲になってきた。

東京へ初めて出てきた地方出の若者たちは、都会の中で疎外されて人を求める。ぼくは遊びでは女の子とつきあったことはあるが、結婚を前提につきあった人は初めてだった。

その年の夏、ぼくは麻衣子を両親に紹介するつもりで田舎へ連れていった。おとなしく地味だが、清楚で控えめな麻衣子を両親は気に入ったようだ。

その次ぎの夏の休暇に、ぼくらは休みを合わせて能登半島の輪島にある麻衣子の実家を訪ねた。

夏の能登は眩しすぎた。恋路海岸を二人で寄り添いながら歩き、これからの身のふりかたを話

し合った。輪島の朝市では、明るく振り向く君がいた。なにもかもがぼくたち二人のために演出されていた。

民宿を営んでいる麻衣子の両親もまたぼくを気に入り、ご馳走で歓待してくれた。

すべてが順調だった。これでいいのかという気さえした。何かが起こらないかと時折怖くてたまらなくなるのだ。ぼくと麻衣子は人生の中の幸福の絶頂にいた。

秋にぼくらは婚約した。式は来年の六月に挙げることで、ぼくは麻衣子という素晴らしい女性を完全にぼくのものにできるのだ。

その頃から麻衣子にも変化が現れてきた。化粧やヘアスタイルを変えたこともあったが、女として最高に光って見えた。会社の男性に振り向かせ、溜息をつかせるような、女としての魅力に溢れていた。

ぼくは、いまという時間が一分も一秒も惜しい気がした。若さは枯れてゆくし、美しさも醜くなってゆく。いまが一番いいときなのだ。

麻衣子はぼくのアパートに夜、よく泊まりにきていた。二人で夕食の材料を買いにゆき、狭い六畳の部屋で、小さなテーブルに向いあわせてワインで乾杯する。

そんな小さな仕合せもいまだけなのだという思いがよくした。ぼくらは熱い体を交わし、そして、愛に満ちた朝を迎えた。

朝食のときもぼくは麻衣子をみつめたままだった。長い綺麗な髪だ。肌もはりがあり、笑顔もそのまま保存しておきたい。ぼくは、いまという時間が過ぎてゆくのが許せなかった。いっそ時間なんか止まってしまえばいい。そう、念じたのだ。

いきなりテレビの音声が止まった。画面はついているが、画面もストップした状態だった。テーブルの上にはハムエッグとサラダ、クロワッサンがあり、この火曜日は休みだから、どこかヘッドライブに行こうとたったいま麻衣子と話していた。ぼくはおかしいなと立ちあがり、テレビが故障したのかといじくってみた。どうやらテレビ局のほうがおかしいようだ。チャンネルを変えても、すべての画面が止まっていた。

「いやあ、おかしいな。まだ買って半年しか経っていないのに」

と、麻衣子のほうを振り向くと、麻衣子の様子もおかしい。笑ったまま、椅子に座っていた。

「おい、麻衣子。どうした」

麻衣子は瞬きひとつしないで止まっていた。ぼくは悪い冗談だろうと、麻衣子の体を揺すったが、なんの反応もない。それより、外から音がしないことに気がついた。ここは、東京の下町でも車の騒音の激しいところだ。朝の九時というとき騒がしいはずだ。二階だから窓を開けると高速道路も見えた。

なんということだ。車という車が止まっていた。

「嘘だろう」と、ぼくはあわててアパートから外へと飛び出した。通行人も、バスもタクシーも自転車もすべてが止まっている。空を見上げると、鴉が飛んでいる格好で静止している。

ぼくは発狂しそうになった。時間なんか止まってしまえばいいと念じたら、その通りになってしまった。信号が青だった。交叉点で渡る人たちと車も止まっていた。ぼくは、地下鉄の駅に降りていった。誰か動いている人がいないかと探しに出たのだ。改札を乗り越えようと、階段で止まっている乗降客を掻き分けるようにしてホームに出た。着いたばかりの地下鉄がドアを開けて、

乗り降りする客が交叉しているところだ。まったく音のしない世界だった。すべての時計が九時三分を指して止まったままだ。

ぼくは適当なオフィスビルに駆けこんだ。エレベータも途中で止まっている。事務室ではパソコンがずらりと並んで、OLたちが立ったり座ったりしながら、また、電話に出たまま止まっていた。

ぼくは、電話を借りた。会社へ電話してみた。うんともすんともいわない。パソコンをいじってみた。カーソルが動かない。全世界が止まったことを確認していた。ぼくはたまらない不安に頭を抱え、大声で叫びながら、東京の雑踏の中を走っていた。

そうなのだ。まさにあのときから五十年は経っていた。五十年をどうやって生きてきたと思う？ それは実に孤独だった。それは、食べ物はいくらでもあった。高級レストランから、デパートの地下のデリカから、好きなだけ食べられた。銀行にはうなるほどの金もあり、宝石店では手にすることもできない高価なダイヤも触ることができた。だが、金も宝石もなにもいらなかった。それらは交換価値がまるでないものだった。

ぼくは、平成十五年の九月十七日の朝、九時三分に五十年も生き続けたのだよ。

全く、信じられないだろう。ぼくが、時間が動いたのを知ったのは、旅に出ていて、君と歩いた能登半島の恋路海岸を訪ねていたときだった。ふと、見上げると、海鳥が飛んでいるのだ。音という音が蘇生したように、波の打ち寄せる音がしたのだ。ああ、その感激はどうだ。漁師が浜に出ていた。ぼくは駆け寄って声をかけた。漁師はきょとんとしていたが、ぼくにとっては実に五十年ぶりで聞く人間の声なのだ。

それから、ぼくはこの東京に帰ってきた。ぼくのこのアパートへと。麻衣子はただ、おろおろしながら、べらべらと喋り続ける七十三歳の老人を異様なものを見るような恐怖で顔をひきつらせて後退りしていた。

「麻衣子、ぼくなんだよ。帰ってきたんだよ」

「近寄らないで、警察を呼ぶわよ。どうして、この部屋の鍵を持っているのよ」

手には果物ナイフを持っている麻衣子にそれ以上近づけない。それよりなにより、ぼくはすっかり年寄りだ。孫のような麻衣子と一緒にになれるわけがない。なんて、ぼくはバカな願いをかけたのだ。ぼくは、ふらっとまた平成十五年九月の東京に出た。そして、気がふれた人のように笑った。いっせいに動き出した世界。ぼくは一番いい時間にひとりで足踏みしていた。

昔読んだ本にこんなことが書かれていた。それをいまぼくは思い出していた。

時が過ぎ去るのではない

われわれが過ぎ去るのだ

小説家志望のものが全国に予備軍も入れれば二百万人はいるといったのはつい何年前だった。若い人は徒党を組まない。一匹狼でかなりの長編のファンタジー・ノベルスを書いたりしている。ありもしない幻想小説なのだが、ロマンはありそうだ。彼らの多くは、ソーセキとかオーガイとかは読まない。というより読めない。文学全集に名を連ねている作家の本など興味がない。そんな文豪の名作を下敷きにしてはいないのだ。

北村は古本屋を営みながら、せっせと机に向かっては、コントを書いていた。夢は落語を書いてみることだ。脚本ばりの落語スタイルでは書けないから、原作としての小噺を書いていた。こんな暗く面白くもない世の中だ。少しは笑わせる話を書いてみたいと、できるだけばかばかしい話を創作していた。

ある日、店に同じサークルで小説を書いている女の人から電話が長々とあった。
—小学館って、新人賞募集しているけど、どうかしら。

そして、いろんな若い人を相手にしている出版社の新人賞の締切と賞金を云うのだ。
—どんなもの書いたんですか。

訊くと、自伝的私小説二百七十枚。三年かがりの労作とか。私小説と聞いただけで北村は身震いする。よほど人生そのものが破廉恥か、型破りか、感動するものがなければ、平凡な人の人生なんか読んでみたいと思う人はいない。ましてや無名のおばさんの書いたものである。

—いま並べ立てた出版社は若い人向けの小説を出しているところだから、もっと過去の受賞作と審査員の顔ぶれを見て応募したらいいですよ。

—どうしたら、新人賞を取れるのかしら。

—さあ、宝くじを買うようなものだから。よく云われるのは、最初の書き出しで決まるとか、梗概のまとめかたで、粗選ではじかれるとか云いますね。わたしなんか、十回以上落ちたんだから、あなた、まだ一回でしょう。数撃ちや当たるってなもんですから。

北村はまったく新人賞どころかそんな公募に出すという野心を捨ててしまっていた。すでに五十は過ぎて、いま芽が出なければ終わりだろうと思っていた。みんな、逢えば口々に、どここの新人賞は何枚で、締切がいつで、賞金はいくらでと、そんな話ばかりだ。げっぶが出る。聞く気もない。

彼らはいつになったら諦めるのだろうか。六十過ぎてもまだ応募している人もいた。七十過ぎたら、八十過ぎたら諦めるのだろうか。それとも、史上最高齢の新人賞を取って、ギネスブックへでも載せるのだろうか。新人と呼ぶにはあまりにも年取りすぎてきた。

北村の古本屋に、お客で七十過ぎた人が、原稿用紙の束を持ってきた。北村に読んで意見してもらいたいというのだ。四百枚以上の大作だった。初めて書いたというわりには、よくぞ長編をと感心した。ところが読んでみると、これまた自伝的私小説。

「これを本にしたいのだが、どこかの出版社で本にしてくれないものかね」

と、老人は云う。北村は冷たく云った。

「商業ベースに載ればやるでしょう。売れるものなら、なんでも本にします。でも、失礼ですが、一年に六万点も本が出版され、そのうちの四割が返本になって潰される時代にですよ、これを店頭で買う人がいるのでしょうか。せめて、自費出版で、周囲の親しい人に本にして差し上げるのがいいですよ。それでも本当に最後まで読んでくれる人はそのうちの何人いるのでしょうかね」

老人は現実を知らないので、愕然として帰っていった。可哀想な気もしたが、いずれ北村の店にそうした自費出版の本は流れてくるのだ。

また電話だ。

—おお、とうとう、書き上げたぞ。百枚だ。太宰治賞に出そうと思う。おまえも出さないか。

—おれはいいよ。才能ないし、もう諦めているから。

北村の友人からうきうきと電話の声。そして、毎度落選したら死ぬような声で電話がくるのだ。その繰り返し。いままで何十年もそうしてきた。

北村の古本屋にダンボール箱でどっさり小説が持ち込まれた。

「これ、買ってもらいたいんだけど。どこでも買えないって断られて」

見ると、純文学小説ばかり。

「あいにくうちでも純文学は売れないからすべてゴミに出します」

「たとえばどんな本ですか？」

「夏目漱石、森鷗外、石川達三、石坂洋次郎、北杜夫、遠藤周作、島崎藤村、山本有三、丹羽文雄、伊藤整、曾野綾子…」と、北村は文学者の名前を列挙した。

「それなら買ってくれるんですか」

客は目を輝かせた。箱にはびっしりといま並べた作家の文庫本が詰まっていたからだ。

「全部、ゴミです」

中には怒りだす客もいる。

「なんだと、ものを知らない古本屋だ。こんな名作をゴミだと？」

北村はツラッとして答える。

「そうです。売れば本ですが、売れなかったら紙屑です。夏目漱石もゴミです。芥川龍之介もゴミです」

すごい時代が来たものだ。天下の文豪が生きていて、いまの言葉を聞くと卒倒するだろう。

それでも、店には毎日のように処分してくれと本が持ち込まれる。断っても、断っても、みんな始末してくれと置いて逃げる。

「うちはゴミ捨て場じゃねえや」北村は憤慨していた。それにしても本が読まれなくなった。文豪といえどもすでに古典的になってしまい、いまの若い人たちは読まないのだ。毎日、立派な装丁の自費出版の本も持ちこまれる。中にはダンボール箱に自分で出した句集や歌集の同じ本ばかりごっそりと新品同様で入っている。書店からの返本もある。買えないと断ると、おたくで配ってください。と、ただで置いてゆく。

そんな本の墓場になると、店も狭くなる。北村は週に一度は建場といって、本を再生紙にする古紙回収業者に潰しに持ってゆく。たまたま土砂降りの雨が降っていた日、本が露地に山積みされてずぶ濡れだった。その山に店から持ってきた売れない文学全集や、推理小説の文庫本などを惜しげもなくどっと捨てる。詩集も、写真集も、遺稿集も、同人誌もいろんな人の思いがこめられている本が無残にも雨に打たれる。

その本の山をブルドーザーが寄せては詰め、機械で圧縮すると、本の束も真四角のブロックになり、詰まれてゆく。

その後の本の運命は知らない。トイレットペーパーになるか、ダンボール箱になるか。

北村はもう本の顔も見たくないのだ。それなのに、また友人から電話が来る。
—おう、五百枚書いたんだが、読んでくれないか。ミステリー大賞に出そうと思う。

第592話 ミスマッチ

わたしは、家族を持たないほうがよかった。生涯独りでよかった。身勝手な作家商売をしていて、一番被害を蒙るのは家族だった。すべて自分のペースで生きてきたから、家族のために何かをしたということもない。ただ、暇さえあれば本を読み、着物を着て、着流しで散歩に出ることはあるが、時間を惜しむように座卓に向い、原稿用紙の罫目を太いモンブランの万年筆で埋めてゆく。小説家として、いつも自分と向き合っているのだけだった。

妻はそんなわたしのために、外に働きに出て、娘、息子は高校に上がったが、もう口を利くこともない。家庭の中はいつも静かだ。あまりに静かすぎて、それぞれがそれぞれの部屋に閉じこもり、ただの塹になっているのだ。巣箱とすれば、それぞれの入口が別々についているようなものだった。顔を合わせないようにすれば、何ヶ月も見なくてすむ。殺伐とした現代の家族関係がそっくりそのままここにあった。

今日、久しぶりに読みきりを雑誌社に頼まれて脱稿した。百枚少しの中編だ。それを読んだ編集者がこう云っていた。

「先生のお書きになるホームドラマはいつも温かみがありますね。現代人の置き忘れてきたものの郷愁みたいな匂いがある、わたしは好きですね。先生の永遠のテーマは『家族』ですか。美しい奥様と、父親を尊敬するご子息と、登場人物がみんな生き生きとしていますね」

わたしは、私小説作家と烙印を押されていた。破滅型とも評論家は云う。いつも最後に死が用意されていた。不幸を家族という強い絆が克服してゆこうとするプロットが、わたしの過去の暗さをフラッシュバックさせながら、救いの曙光を明日に置いた。自虐だけでは読者は満足しないのだ。どうしようもないところまで墮ちて行って、そこから立ち上がろうとする人間を描くことが、わたしの追い求める命題であった。そこに人間とはなにか、血縁とは何かという、いつも反復するテーマが通奏低音のように作品の背景に流れているのだ。

雑誌社の人と、事務所で打ち合わせをした後、わたしはまた入ってくる原稿料をあてにして、書店にふらりと立ち寄った。金さえ入れば、それはなべて本と交換された。明日、食う米があるなら、いや、なかったとしても、わたしは懐の金を惜しげも泣く本のために費やすのだ。そこに家族の顔は見えていなかった。

書店で出たばかりの話題作を数冊買い求めた。ページを開くと、まだ真新しい印刷インクの匂いが立ちこめる。わたしは昔から、晩飯を抜いてでも一冊の本のために食を捧げた。その代わり胃の中には活字が詰め込まれるのである。

そして、いつも、本を小脇に抱えながら、下駄履で行きつけの茶店で本を読む。週に三回はこのジャズが低く流れる白と黒を基調色にしたモノトーンの店に来た。来ると決まって、窓際の隅の席に座る。ウエイトレスはわたしの飲み物をすでに判っていて、黙ってコロンビアのストレートコーヒーを持ってくる。

わたしは、処女を犯すように新刊の本をそっと開いた。いつも口にはピース。火をつけるのはマッチだ。わたしの中には、でなければならぬとするこだわりがあり、髪型も長いオールバックというスタイルを通してきたし、眼鏡も丸い縁の細く黒いものでなければならなかった。

茶店で、女子大生か、一冊の本を手になわたしの席の前に立っていた。

「失礼します。北村先生でいらっしゃいますね。わたし、先生のファンで、いつも先生をこの店でお見受けしていました。サインをくださいますか。お願いします」

と、差し出したのは、わたしの去年出した「瓦礫の中の家族」というあまり売れなかった小説だった。ちらりと若い女を見た。健康そうな初々しさに溢れている。わたしは快く万年筆で扉にサインした。

「ありがとうございました。余計なことですけど、北村先生の奥様は合わせでしょうね」

と、女子大生は深く頭を下げてご満悦だった。わたしは返答に窮した。

自分のファンがいるということで、わたしは安心して、また執筆活動に専心できる。たった一人の読者のためだけでもわたしは書くだらう。いや、書かねばならない。書く行為そのものがわたしの人生なのだ。それを抜いたら、わたしはただのぐうたらな男になってしまう。

いい本を読んだ後の爽快感は、わたしのエナジーとなる。ふつふつと、また物語の断章が湧き起こってくる。それが底流するテーマと繋がりながら、パズルのように、ひとつの長い話の輪郭がなんとなく現れてくる。次の小説のテーマは決まっていた。貞淑な上流家庭出の妻、そして、一流大学を目指す優等生の息子、父親に寄り添い甘えてくる素直な娘か。わたしは、いつものように、考えごとをするときの、片手を顎に乗せ、はすに構えて窓の外をぼんやりと眺めるポーズをしていた。人生の最深部を抉るようにして見つめるのだった。

また、ふらりと茶店を出ると、着流しで家までゆっくりと歩いた。今日は、土曜日だからみんな家族はいるはずだった。

玄関を開けると、目の前に鬼のようなかあちゃんが立っていた。

「あんたあー、また本ばかり買ってきやがって、このくその役にも立たないぐうたらが。便所の掃除をするんだよ。それが終わったら、庭の燃えないゴミをまとめておきな。そんな、本を買う金があったら、うまいもんでも食わせろよな。うちは、明日電気止められるか判らないんだからね。まったく」

「は、はい」と、わたしは、血相変えて、着物の裾をはしよると、汚れきった便所にしゃがんだ。

「とうちゃん、スーパーに買物にもゆくんだ。それからあんたのももひきと腹巻、いつまでつけてんない。いい加減に臭いよ。洗濯しときな」

「なんでえ、おやじ、掃除かよ。早くしなよ、出たいんだから」と、息子。

「邪魔よ。どいてよ」と、粗大ゴミのように父親を蹴る娘。

ああ、こんな劣悪な環境からこそあの美しい家族愛の小説が生まれるなんて、誰も知らない。

第593話 老いの小文

年とってくると、保守的になるものか。新しいことが面倒になり、冒険もしなくなる。着る服も定まってくるし、食べるものもだ。

うちのじいさん八十七。朝はご飯に梅干一個だけ。

「そんなに、梅干ばかりじゃ、いいわけないよ」と、わたしが注意する。「梅干じじいになっちゃう」

どこのじいさんもそんなものか。年とともに食が細くなり、定まったものにしか手を出さない。うちのじいさん、最初は蟹味噌。誰にも見られないように隠して一人でこっそりと食べていた。孫たちがそれをみつけて何だろう。

「ダメだよ。それは毒なんだ。人間年とってくると、みんな毒を舐めって死んでゆくんだ」

さしづめ、わたしの毒はアイスクリームだ。ちゃんと隠してある。

好きな食べ物は次に蟹蒲鉾。たいして美味しくないのに、本人はそれでなければいけないと、晩酌にはいつも出す。本物の蟹と思っている。誰も真実を話さない。あんなにそっくりに作られているとは思ってはいないのだ。いいか、そっとしておこう。それが仕合せなのだ。家族で話しあった。そのほうが家計も助かるというものだ。

次に好きな食べ物は竹輪。ひとつが飽きれば、また次と、交代するがみな海産物。

「こんなに美味しい食べ物はいままで食べたことはない。これは何という食べ物なんだ？」

みんな笑うが、いいじゃないか。いたくお気に入りの竹輪で一杯。それもまた安上がり。それにしてもボケもまた楽し。

いろいろと食べ物は代わったが、いま行きついた究極の味は、なんとイカ燻。子供が粗末に食べ残したものを何気なく口にしたじいさん。

「おお、おお、これは、何という食べ物か」

まるで王様が庶民の食べ物を初めて口にするときのよう。いまは、それだけをおかずにして飯を食う。娘曰く、

「あれって、おかずじゃないのよね」

「静かに」とわたし。「いいじゃないの仕合せならば」

耳が遠くなってきた。

「じいちゃん、今日はいい天気だね。山に栗拾いにでも行こうかね」

「そうだね、北の湖は最近出ないね。栃錦はどうしたんだ」

「それは相撲の話だ。しかもみんな昔の力士ばかり」

「なんだって？ 小泉が解散だということか」

「じいちゃん、おれが誰だか判るかい」

「ばかにするな、隣の息子だろう」

とも、隣の息子になっていた。頭のほうも遠くなってきた。

耳が遠いと電話番ができない。いつ電話しても留守だ。セールスが玄関から入ってきて、じいさんと顔を合わせる。近頃は年寄りを騙す詐欺まがいのセールスが多い。

「おじいちゃん、あのよう、羽根蒲団だがね。五十万のやつを三十万に負けるだよ」

じいさんはにこにこことただ笑って対応している。ちんぴら風のセールスがひと通り説明し終わったところで、じいさん、

「耳が遠いんでな。よく聞こえんかった。で、用事は何かい」

セールスはまったくとくどと話出すが、今度は大声だ。

「うんうん、それで、用事はなんだい」

すっかり疲れてしまったセールスは、「こりゃダメだ」

年取るとやたら寝る。昼になっても起きてこないから、家人が心配して、娘に、

「おじいちゃん、息しているかみてきてごらん」

「いやよ、そんな生きているか死んでいるか確かめるなんて」

とみんな怖がる。息子が確かめに行ったら、いままで鼾をかいていたのにぴたりと止まり、呼吸していないという。それは大変だ。無呼吸症候群とは知らない。救急車だ、葬儀屋だと右往左往しているところへじいさん慌てて起きてきて、一緒にうろうろ。

「何だって、わしが死んだって、それは大変だ」

じいさん、耳の検査に耳鼻科に行った。いよいよ補聴器をつける気になった。

「わたしの声が聞こえますか」

「いや、聞こえません」

「本当に聞こえていないんですね」

「本当に全然聞こえません」

「……？」

年取ると、最近のことを忘れる。さっき食べたご飯だとか、昨日のこととか。それでも、七十年、八十年前のことは鮮明に覚えているようで、突然夜に何を思いたったか、家人にのたもうた。

「提灯はないか、これから忠兵衛じいさんを蕎麦屋まで迎えに行かないと」

大酒呑みの曾祖父を少年の頃に迎えにゆかせられた思い出が、ショートしていた。

第594話 少年の日

夢は大きいほうがいい。大きすぎるのも考えものだが。

わたしの少年の頃は変っていた。テレビ番組の外国のドラマで、「空想科学劇場」というのが入っていた。それが好きで、いつも欠かさず見ていた。そして、親戚が集まっていたりすると、その中に入り、その番組の影響で、自分で作ったSFのような話を交えてお喋りをした。途方もないことを云って、みんなを笑わせたものらしい。

そして、わたしが何か突拍子もないことを云うたびに、家人は「またまた、空想科学劇場が始まったぞ」と、茶化するのだ。

発明コンクールにもよく応募した。友人と当時、出回ってきた自動販売機をボール紙で作り、お菓子が出てくるようにする設計を真面目にやっていた。なんでも作ることが好きで、勉強は苦手でも図工だけは得意だった。

家の裏は寺になっていて、塀を乗り越えて、よく遊びに侵入した。鬱蒼とした庭になっていたが、小さな池もあった。街のど真中であって、そこだけは自然がそのまま残されているようなサンクチュアリだ。近所のガキたちと一緒に、その池に板を並べただけの筏をこしらえて乗って遊んだ。

池という小さな水の世界だが、浮かんで進むという快感を覚えた。すると少年の夢は大きく膨らんだ。これが海だったらー。

六歳のわたしは、それから遠大な計画を持ち始めていた。大きな筏を作って、太平洋を横断するのだ。それは誰にも知らせないで、ひとりで実行するつもりだった。

わたしはひたすら、町内や寺の隔地から板きれを拾い集めてきていた。りんごの木箱もいくつかもらってきた。着々と準備は進んでいた。

科学的なことがたまらなく好きだったから、どんなくだらないことも一応はやってみる。模型店が近くにあって、いつも入り浸っていたが、そこからゲルマニウムとイヤホンだけを買ってきた。トランプを入れる透明なプラスチックの箱に、銅線で長い釘と繋いで、イヤホンを耳にあてると、微かに電波を拾って、声や歌が聞こえる。それが不思議でならなかった。まだ、トランジスタラジオは出回っていないときだ。

それから、どれほど風船が空高く上がるものかと、水素の入った風船に糸をつけて、どんどん高く上げたことがある。風船は小さな点となり、やがて見えなくなった。糸は途中で切れたとみえて、屋根に引っかかったままだ。それが成功したら、日光写真を載せて、空中撮影に挑むつもりだった。

集めた板を六畳間に広げて、わたしは大工仕事にとりかかった。自分一人が乗るだけだから、そう大きくなくてもいいが、筏が沈まないようにするには、六畳間いっぱいにはなくてはならない。りんご箱は前後につけて、食糧や水を積むのだ。一体、太平洋を横断するにはどれほどの日数とどれほどの食糧と水がいるのか。潮流や、手漕ぎで果たしてアメリカの西海岸まで行き着くことができるのか。そんな緻密な計画はあるわけがない。

ただ、夢だけがやたら大きかった。

祖父から、金槌と釘を借りた。板を組み合わせて、筏を組むようにして釘を打っていった。筏はだんだんと大きな形になってゆく。部屋いっぱいになってゆく。隣の部屋は襖を開けたままの居間だったが、家族はただ、にやにや笑いながら、わたしの作業をもの珍しそうに眺めながら、

卓袱台を囲みながら昼ご飯を食べていた。

「お昼を食べてから、またやったらいいよ」

と、云う祖母の声も聞こえないほど夢中だった。よく仕事をしたと、ご飯もおいしかったし、だんだんと完成に近づく筏が見ていてわくわくしてくる。

「で、一体、何を作ろうとしているんだい」

父が代表で訊いてきた。みんな遠慮してなるべく訊かないようにしているらしかった。

「うん、筏。これに乗って太平洋を横断して、アメリカに行くの」

「そうか、それは、立派だが」

後は、云いたくてもみんなただにやにや笑って誰も何も云わない。少年の夢を壊してはならないと思っていたか。

筏でも船だから、舳先に波を切る部分がないと、三角にしたし、舳綱もなければならぬと、どこからか拾ってきたロープの切れ端も筏にくくりつけた。模型の船には乗れないが、これなら本物の乗れる船になる。オールは棒を削って作った。マストも作ったほうが格好がつくかと、棒をセンターに打ちつけて、メインセールに古いシーツを切って紐で穴をあけて縛りつけた。いよいよ船らしくなってきた。

わたしの作業は夜まで続いた。休むこともなく、おやつも食べないで、もう、周囲が目に入らない。みんなは黙って見ているだけだ。上の姉が、何かを云おうとすると、祖母に黙るように云われたのを考えてみれば、そのことが後で判るのだ。

とうとう、筏は一日がかりで完成した。

そこへ、仕事が終わって、晩御飯に上がってきた母が、みんなの制するのもしかずに云ってしまった。

「あれま、こんなに大きな船だかなんだか、どうして外に出せるのかね」

わたしは子供心にもみんなの笑いの意味が判った。

「どうして、初めからみんな教えてくれなかったの」と、わたしは大声で泣いた。夢はあまりにばからしい正体を見せられてがらがらと壊れた。

わたしは大人になっても、大きすぎる夢を持っていて、いまだに、自分の部屋から出せないでいた。

第595話 ひきこもり革命

達彦は子供のときから、卑屈な態度をとっていた。親父が酒のみで、何かあると、一人息子の達彦を「馬鹿」呼ばわりして罵倒した。それですっかりいじけた性格で育っていた。

目つきが違っていた。人を見るとき上目づかいにする。視線が定まりなく動き、頭はいつも項垂れていた。男のくせに女の子のようにいじいじして、よく周囲からも虐められていたのだ。

ただ、龍彦が育った頃は、まだ虐めということもいまのように陰湿なものではなく、虐めっ子というガキ大将がいて、みんなの見ている前で堂々と虐めていた。

達彦の親はそれを見ると、ますます息子に腹が立つ。「あの馬鹿が」と、そうして育てた子供が大きくなったらどうなるか。

達彦は五十になっていた。両親は八十近い。年金は少し貰っていたが、いまだに汚い借家住まいで、病気がちだから通院していた。二階に一間だけ部屋があるが、そこにいまだに結婚もしない、仕事もしない達彦が棲んでいた。両親と顔を合わせることはない。食事はお盆に載せて、二階の廊下に置いておく。すると、何かの動物を飼っているように、綺麗に食べた空の食器が廊下に出されている。

達彦は一日、部屋に閉じ籠ってパソコンばかりやっていた。ネットでメールやチャットをしたりして、情報交換をしていた。もともと頭脳は優秀だった。達彦を受け入れない社会のほうに問題があった。

若い頃といっても二十代には達彦も東京に出て働いたことがあった。上司と合わないで職を転々としたり、失恋したりで、逃げるように帰ってきたのが二十五年前だ。以来、仕事はしない、外にもあまり出ない、四半世紀もの間、ひきこもっているのだ。そんな息子を親父は何度殴り、外に引きずり出したかしのれない。いまは何をしても無駄だと判った。両親ともに、精神的な病気と思っていた。

ただ、生い先短い身だから、五十といっても息子ひとり残して死ぬこともできない。それだけが気がかりだ。

達彦は、夜通し起きている。そして、日中は寝ている。すっかりと夜行性になっていた。真夜中になれば、外に出たりしているらしかった。シャワーも滅多に浴びたのを見たことがない。まして風呂に入る格好も見たことがない。洗濯ものもあまり出さない。母親は二階から臭い匂いが降りてくるのをいつも気にしていた。

達彦は、夜になるともぞもぞと行動を開始する。そんな達彦を両親は居候のごきぶり扱いしている。

「まったくなあ、何を考えているんだか、食って寝て、ぶくぶく肥るだけ肥ってなあ。友達も女もない、頭だけよくても何の役にも立たない。あんな若者が増えたっていう

じゃねえか」

「なんでも、新聞では三人に一人がひきこもりだそうよ。全国に四千万人もいるから、かつてのひきこもり世代が中年になって、若い人は仕事がないし、メールのしすぎで人との付き合い方が判らないって。若者の半分以上がひきこもりの世の中になったからねえ。国のほうも大変だそうよ。わたしたちの年金もだいぶ減らされましたもの。働く人が少ないし、年金を納めない人が半分以上でしょう」

いままでは、ひきこもりは世間の恥と内緒にしていたのが、軒並みひきこもりだから、いまや風潮にすらなっていた。若者だけではない。大人たちもひきこもっていた。

「外に出れば金を使うから、出ないようにすればいいんだ」

「婆さんの年金だけで一家が食っているから、一日一食だ。起きていれば腹が減る。できるだけ、寝ていて、カロリーの消費を抑えないと」

「世の中、物騒になってきたから、外に出れば恐喝、強盗、誘拐だ。家の中が安全だ」

いろんな理由があって、国民はひとりひとりとひきこもり生活に入ってゆく。商売はやるだけ赤字、何もしないほうが損害がない。サラリーマンは社員が極端に減ったから、残った少ない社員で仕事をこなさなければならない。その負担は大変なものがあった。鬱病から過労からのしかかる重圧に耐えていたが、とうとうひきこもりになってしまう社員もいた。

「社長はどうした。最近、顔を見せないが」

「ええ、なんでも資金繰りで頭がおかしくなってひきこもっているそうです」

学校の先生もひきこもり、その責任を問われて校長もひきこもり。

達彦の家では、じいさん、ばあさんも生きてゆくのが面倒くさくなりひきこもった。いまやひきこもり一家というのも珍しくなくなった。

街から人が消えた。どこもひっそりとなっていた。当然、商店、スーパー、デパート、コンビニも商売にならないから店を閉めた。すると、問屋も運送屋も工場も、仕事がなくなりみんな閉めた。

どうして暮らしているかという食糧を備蓄したのをちびりちびりと食べながら、死んだように暮らしているのだった。

政府は国民が働かなくなり、外に出なくなったので、税収も減り、財政難にますます陥ることとなり、頭を抱えた総理は、突然世間に顔を出さなくなった。大臣たちもなべてひきこもった。事実上、無政府状態になっていた。

達彦は部屋に閉じこもって、一日中、インターネットをしていたが、全国の仲間から総理大臣と呼ばれていた。実は、四千万人のひきこもりの人達がネットで連絡をとりあって、影の政府を作っていた。全国を七つの州に分けて、州知事やそれを運営する議会や官僚、すべての人事システムはすでに構築され行動していた。

彼らのNHKといわれるサイトのホームページに大きな見出しでこんな文字が浮かんだ。

一無血革命成立する。かつての腐敗した政府は倒れた。さあ、ひきこもっていた私たち

の出番が来た。

第596話 放し飼い

去年、ウサギをお客のところから貰ってきた。子供たちに訊くと、欲しいと目を輝かせた。

「絶対に世話をすると約束したら飼ってやってもいいが」

「うん、ちゃんとするする」と、確かに云った。でも、子供は嘘つきだ。信じた親が馬鹿だった。

一年もしないうちに、飽きてしまう。最初は小さいからいつも抱っこしてぬいぐるみのようにして遊んでいたが、上の学校にゆき、娘も息子もそれぞれ彼氏、彼女ができるようになると、動物には興味を示さなくなった。そのウサギはお父さんが世話係になったのだ。何か騙されたような気がしてならない。みんな、好きな相手とデートしているのに、どうしておれだけがウサギなんだ？ とお父さんは淋しい。

そのウサギは、丸々とお父さんのように肥ってきていた。そろそろ鍋にしてもいいくらいだ。皮は襟巻きだろう。たまたまお父さんはウサギ年であったから、なにか他人のような気がしない。いつも、ウサギ小屋を掃除しながら、「ウサギ追いしかの山あー」と口ずさんでいた。ますます哀れである。

ウサギは、英国産のミニライオンとかいう白と黒のブチだ。どうも、ジェントルマンの国のものらしく高貴な顔をしている。英語で話しかけてみる。日本語では通じなかった。英語も同じだ。どうも頭が悪そうだ。

本当は、ペットを飼うということに根本的に反対のお父さんであった。動物は基本的には人間のなぐさみものであってはいけない。動物本来の姿で野山を駆け回るべきものである。いつも檻に閉じ込められているウサギが可哀想で、ある日、お父さんは首輪と鎖を買ってきた。長い鎖で自由に庭の中を遊ばせようとしたのだ。鎖でなければ齧ってしまうのだ。

ところが、翌日、鎖はするすると抜けてきた。草むらの中にも探したがウサ公はいない。逃げやがったか。と、お父さんが四つんばいになって探している後ろに、面白そうにびよこびよこことついてくるものがいた。いた。捕まえようとすれば逃げる。知らん顔をして、口笛なんか吹いて、相手が油断していた際に捕まえた。

やはり放し飼いは無理か。

お父さんは基本的には妻も放し飼いである。理解のある旦那として、定評があった。やきもちなんかやいたことはない。若い後妻はあまり縛り付けておくと逃げられるので、適当に解放してやらねばならない。家で家事ばかりしていると発散できない。PTA

の集まりだ、呑み会だ、習い事だ、どうぞどうぞと出してやる。

娘も高校生だが、門限は別に設けていない。とはいっても、郊外に家があるから十時の終電で帰らねばならない。夜中まで遊び回るといってもゆかない。アルバイトをしたり、部活で合宿、遠征と、なかなか忙しい。休みには彼氏とデート。年頃の娘を持つとお父さんとしては心配なのだが、うちは逆で、相手の男に乱暴して怪我をさせはしまいかと、そればかりが心配だ。男だか、女だか判らない娘で、友達からも恐れられていた。

中学の息子も晩ご飯も食べないで、友達の家に行って、晩くなって自転車で帰ってくる。いまは男の子でもいたずらされたり誘拐されるからと心配する親もいるが、うちは全然。家族全員放し飼いだ。首に紐つけて、長さを決めておけばその範囲しか動けないということは自由を束縛していることだ。心に紐を付けておけばという人もいるが、それが一番怪しい。心の紐をたぐりよせたら、するすると抜けてくる。心ここにあらずといった顔で、知らない男にメールを打っているかもしれない。夫婦、互いに知らない顔があるというのも面白いが。

というお父さんが一番外に出ている。どこに行っているか判らないときもある。それで、家人から早くからケイタイを持たせられた。信用がおけない人間ほど紐付きとなる。お父さんが女とモーテルへ行っていたとき、ケイタイが鳴る。ドキリとしたお父さんは、電話に出ると、なんと妻ではないか。驚いて、開き直ったお父さん、「なんで、おれがここにいるのが判った？」とかいう小喃がある。これはよく考えないと笑えない。

夜、晩くまで帰らないお父さんに何度電話しても、電源を切っていればいたで、妻は怪しむ。

「どうして、切る必要があるのよ」

まして、

「この電話はただいま電波の届かないところにあります」とか、

「ただいま電話に出ることができません」というメッセージが出ても、妻は怪しむ。

お父さんは家に帰ってからとっちめられるのだ。

「あなた、今日、どこに行っていました？ 正直に答えなさい」

お父さんだけは放し飼いでないのだった。

第597話 旅行屋時代

—

辞令 富山出張所所長を命ずる

ぼくはいきなり、支店長からそんな紙切を貰った。

「はあ、うちの会社に富山に窓口があったんですか」

ぼくは聞いたことがない。

「あるわけがないだろう。これからおまえが行って作るんじゃ。さっそく行ってもらう。用意もあるだろうから、明日ここから出発しろ。軍資金は小口現金と、会社のクレジットカードを渡す。飲んでしまうなよ。それから、ライトバンは一台持って行け。そうだな、営業から三人選んで連れてゆけ。人選はおまえに任せる」

「は、はい」と、ぼくは敬礼していた。

とんでもないことになった。支店長も冷たい。ぼくが結婚してまだ一年の新婚さんだということを知っているくせに。

ぼくは、この会社に去年、中途採用された。東都トラベル。北海道から九州まで支店がある、業界五位の旅行会社だ。二十五歳にして、係長待遇で迎えられた。まだ若い会社らしく、ぼくより年下の営業マンばかりだ。名古屋駅前のビルの一室から、セールスの鞆を下げて、四方八方に飛ぶ。中部、北陸が管轄だったので、愛知、岐阜、三重、北陸三県がテリトリーだ。ぼくは三重を攻略していた。市町村の役場が相手だから、隅から隅まで車で走った。仕事を中断して、富山へ遠征するのも気が乗らなかった。絹子へどうやって話したらいい。泣くだろうな。単身赴任だから。しかも期限もなにもない、いつ戻れるか判らない。

ぼくは、みんな独身のよく動くやつを三人選んだ。鼠みたいにちょろちょろするが愛嬌のある杉本、不良っぽい人なつっこい高村、そして長距離トラックの運ちゃんをやってきたというプロレスラーのような永田だ。

その夜、重い足取りで岡崎のアパートまで帰った。絹子は、病院の事務をしていた。きっちりと時間で終わるから帰ればいつも遅いぼくを食べないで待っている。

「あのな、明日から、実は…」なかなか切り出せない。

「どうしたのよ。また出張？　じゃないな。今度は長いんでしょ」

旅行屋の女房ともなるとよく判っている。月のうち半分はいない。泊まりでの出張も多い。日帰りで行ける範囲ならいいが、伊勢志摩の方のセールスは泊まりだ。月に一度の東京本社の会議も、添乗員としてツアーについてゆくときもないのだ。それでも今度のは、帰ってこられるかどうか判らない。

「わたしはいいよ、仕事で行くんだから」

絹子は割合けろりとしていた。大きな鞆に着替えや本を詰めた。まるで引越した。ちらりと出掛けに絹子の顔を見た。絹子は子供のように手を振っていた。ぼくのほうが未練があるらしい。

ライトバンに荷物を乗せ、名古屋支店の前を出発する。事務員たちも総出で見送りだ。まるで出征する兵士を見送るような。

車は岐阜の山中を走る。飛騨川に沿って国道四十一号線を下呂温泉、高山、古川と走ること六時間で、山越えして富山へと入った。高速道路で琵琶湖を回るよりは安くて早い。

富山市へ着く。前に支店長と一度挨拶に県庁を訪れた以来だ。西も東も判らない。ぼ

くは、まず最初に来た街は、地図を頭に入れることにしている。幾何学的に点と線で位置と方角を形として頭に焼き付ける。ランドマークがあれば、それを中心にして動き回れば間違ふことは少ない。

ぼくらは、最初に不動産会社を訪ねた。今日来て、今日入居できるところを探す。無茶な話だった。それも、寝泊まりができる事務所がいい。そこは営業の拠点になり、埒ともなる。しかも、作業がしやすいように広いところがいい。そんな条件の賃貸物件を不動産屋は二、三案内した。

静かな住宅街だった。事務所に倉庫がついている。風呂はない。倉庫は密閉されているが、広いからそこで寝られるだろう。どうせ、むさい男四人がごろ寝するだけのことだ。どこだって構いやしないといった気持ちだった。さっそく、そこで契約した。事務所だが看板までは手が回らないから、マジックで大きな摸造紙に東都トラベル富山出張所とみすぼらしくへたな字で書いた。カウンターや事務机、椅子などは、前の使用者がそのまま置いていったものを使うことにした。足りない備品は予算以内なら購入する。不動産屋から中古の電話と債権も買った。会社契約だから、少し時間がかかる。

みんなで、車で街にくりだした。デパートなら全部揃いそうだから、まとめて買い求めよう。ぼくは思いついたまま、事務所と埒に必要なものをカートに載せた。蒲団から毛布。六月だからまだ涼しい。トイレタリー、清掃用具、湯沸しに茶碗、客用の茶葉まで。

「北村さんは、女の人のように生活用具が判るんですね」と、わたしのことを部下が云った。

「それはそうよ、独身時代は、アパートで自炊していたから。これでも料理は得意なんだ。台所で使うものなら判るよ」

しかし、事務所には台所はない。お茶を沸かすだけの流しくらいだ。仕事もバラバラなら夜遅くなることもある。飯は各自外食ということだ。

みんなで、できるだけ、汚く安そうな食堂を探した。外のメニュー看板を見て、晩飯の適当な店を探しておく必要がある。月給はみんな安い。毎日外食なら安くて美味くてボリュームがあるほうがいいに決まっている。そんな三拍子揃った店なんかあるのか。

「ここがいいですよ」と、杉本が手招く。見ると、オムライスとカレーとチャーハンが同じ値段だ。二百円だった。一食三百円では抑えたい。これから、ここで毎晩食べるのか。味もまあまあだ。テレビを見て、新聞に目を通し、週刊誌とマンガ本。買わなくても、ここでみんな読んでしまおう。テレビがひどく懐かしい気がした。名古屋と同じ番組をやっていた。

飯を食ったら銭湯だ。探したら事務所の近くにある。これから当分は銭湯の世話にもなるだろう。見知らぬ街に月が出る。絹子、とわたしは名前を呼んでいた。

六月が一番蟹気楼が出やすい。わたしは、能登半島の付け根にある氷見市の市役所を訪れていた。福祉課の窓口の男性職員と話す。なんとかして、老人クラブの名簿を入手して、全市を挙げての秋の旅行にうちを指名してもらうようセールスするのだ。

天皇即位五十周年記念、皇居新宮殿参拝と草津・鬼怒川温泉三泊四日のバス旅行だった。参加者には菊の御紋入りの金杯を記念品でプレゼントするという企画だった。それは業者が単に企画しただけのパック旅行にすぎないのだが、役所の人間も老人たちも、菊の御紋には弱いのだ。まるで宮内庁から来た人間のように話しは聞いてくれた。

セールスはみんな一人ずつ県内の市町村を回る。名簿を入手すると、DMを会長あてに出す。そして、われわれが自宅を訪れて、老人クラブの会合の席で説明をできるようにお願いするというものだった。

わたしは、できるだけ生活は質素にするつもりで、喉が乾いても自動販売機からジュースなど買わない。昼は小さなスーパーから買ったパンを海辺の堤防に座って食べていた。

わたしには夢があった。いつか金を貯めて自分の店を持つこと。親父も商売人だから、わたしも商売人としてやってゆくのに何の疑問もなかった。

わたしは、目を凝らして沖合いを眺めていた。名物の蟹気楼が見えやしまいかと。水平線の彼方にぼうっと工場の煙突や、船影が見えるというのだ。だが、何日もこの市を訪れても、ついに見ることはなかった。

木綿のハンカチーフという歌が流行っていた。君は、九州から大阪に出てきていて、その歌の気持ちがよく判ると云った。

あの夏、わたしたちは、手を取り合って駆け落ちした。

岡崎。

八月の熱い日差しが城跡の公園に照り返していた。わたしは、ベンチに横になり、君の膝枕で寝ていた。大変なことをしでかしたという気持ちと、これからの生活の不安と、この人をすべてと引き換えに娶る覚悟とで、わたしはいつまでも答を出せないでいた。

あの夏に、わたしは結婚相手に選んだ君を両親に紹介するために青森の実家へと連れていった。同じ会社で、二人同時に五日も休暇をもらうのが何か気が引けた。東京の姉の家、横浜の昔暮らした下宿、そして青森へ。

ねぶた祭、十和田湖と、わたしは古里のいいところだけ見せて歩いた。両親は初めてそんな女の人を連れてきたことで、厳しい目で見ていた。

「お父さんは何をしているの？」

と訊く、両親の問いに君は困惑した視線を迷わせていた。

君の父はマルタン（炭坑離職者）。病気で失職、いまは日雇いをして、閉山した山の宿舎に居座って、アル中になっていた。すでに母とは離婚して、どうして暮らしているのか子供たちも寄りつかない。

何故、わたしたちが岡崎へと逃げてきたのか。それは、おまえが中学を出て、集団就

職で紡績工場の女工として、十五の春に来た町だったからにすぎない。そこには、おまえの友人がまだ働いていたからだ。名前を偽り、入籍もしていないのに、夫婦となって、六畳二間の間借をわたしはみつけておいた。夫婦にしてはおかしいと引越し屋の兄さんは思ったろう。花嫁の荷物が何ひとつとしてない。

多分、両親が連れ戻すために探しにくるだろう。それで、わたしは、電話帳で調べた名古屋の適当なアパートに住民票を移していた。名を隠し、素性を隠し、これからわたしたちの隠れの生活が始まろうとしていた。

「どないねん、妹を遊んで捨てる、見え見えや。身分が違いすぎるやろ」

義兄は、ちんぴらを連れて、わたしのアパートに乗り込んだ。ナイフをちらつかせて、ものすごい剣幕だった。

会社にもばれて、わたしたちは一日、誰かに監視されているようになった。何かしでかすか判らない。ことは警察沙汰になろうとしていた。もう、大阪にはいられない。

八月十三日。お盆で帰省する渋滞に紛れて、わたしたちは引越し荷物の中にいた。

大事な蔵書を売った。幾ばくかの金にはなった。それで、ひと月は食えるだろう。甘かった。住民票も嘘なら、保証人もないものをどこも雇ってはくれなかった。ともかく、仕事を探さねばならない。暑い夏空の下、わたしたちは互いにアルバイトでもいいからと、求人募集の張り紙を探して歩いた。

ろくな仕事はなかった。過去や経歴を調べないセールスの会社に潜り込んだ。その翌日から、ぼくは百科辞典のセールスマンになっていた。君は、デパートのパートで働いた。いまいまの金が欲しい。明日どう食べてゆくか。切れてどこへ飛んでゆくか判らない風は、風の吹くままだ。

会社では、みんな、突然の失踪に驚いているだろう。両親は訪ねまわり、偽りの住民票を頼りに、アパートをひとつずつ調べてゆくに違いない。義兄も追いかけてくるだろう。

矢作川の土手に坐って、わたしたちは涼を求めている。おどおどし、いつも周辺を警戒し、時折思い出したように泪ぐんで、精神的にもどこかおかしかった。

突然、花火が夜空に開いた。岡崎は花火工場があちこちにあって、夏の花火大会は豪華だという。花火の音にもびくびくして、わたしは絹子の手をとった。ここは、ふるさとから最も遠い街に思えた。

いつまでも同棲してはいられない。というのも、いつか探しにきてみつかるかしれない。互いに引き裂かれぬように、入籍だけはしておこうと、わたしは郷里の市役所に手紙を出した。やがてきた婚姻届に署名すると、五十円切手を貼って投函した。誰にも祝福されない婚姻郵便が、郷里へと返送されていった。

絹子は旧友に誘われて、もっと給与のいい病院の事務についた。わたしは、情報誌を見た、旅行会社の採用試験を受けに行った。もう、大丈夫だろうと、戸籍謄本も取り寄せ、住民票も移した。アパートの表札に名前も出した。もう誰も別れさせることはでき

ない。

何もかもがこの一年、蜃気楼であったように思った。愛というのは幻想なのだろうか。その先に見たものは、生活という冷たい現実だった。ただ、親に反対され、両方の家から逃げた後の答えは、これから出そうと思う。

絹子と逢わないで二週間が過ぎていた。明日の日曜日は帰ろう。今夜、暗い夜中の飛騨路を走れば未明には岡崎へと着くだろう。そして、また夜中走って帰ってこればいいだけのことじゃないか。二日ぐらい寝なくてもいい。

若いということは、わたしに何でもさせた。その先に何かがあるか恐れもしないで、やみくもに走らせた。逃亡からやがてふたつ目の夏が来ようとしていた。

第599話 旅行屋時代

三

富山を毎日、電車で行ったり来たりする。車は一台よりないから、交通の不便な平村や宇奈月に行くものに与えられた。後の者はひたすら足で歩くのだ。

平野に流れる川は、大きな石がごろごろしており、常願寺川にしても黒部川にしても、荒削りな川原を見れば、何か日本海が近くても山の中の上流のような雰囲気だ。三千メートル級の立山連峰から真っ直ぐに流れ落ちてくる川は、男性的でさえあった。

七月で、海開きもあり、プラットホームは海水浴に向う子供たちが、浮き袋を手にしてわいわいやっている。その隣では、若者たちがスキーを担いでいた。夏スキーがいまだにできるのだ。そこに冬と夏が同席する奇妙な光景が見られた。

セールスをするときは、真夏でも背広だ。どんなに暑くともネクタイだ。汗かきのわたしは、ハンカチは何枚も持っていなければならない。老人クラブの名簿を頼りに、地区の会長宅を訪れる。

その日は、魚津市を攻める。広い市内をバスに乗り、町外れの農家まで足を向ける。点々と飛ぶから、如何に効率よく回るかが、セールスの基本だ。一日に何本もバスが来ない村では、田圃の真中のバス停に腰をおろし、何時間も待つこともたびたびあった。

潮の匂いがする漁港だった。その町で古くから豆腐の製造をしているじいさんが会長をしていた。

「こんにちは。東都トラベルですが」

「おう、旅行屋さんかい。手紙が来とっぜえ」

いまだに昔ながら天然にがりで頑固にへそのある豆腐を作っていた。仕事の手を休めて、キセルに短くなったタバコを差しこんだ。

「会長さんはお元気ですね。まだ現役で仕事しているんですか」

「ああ、息子たちは誰も後を継がんでな。これでも九十四だで」

驚くほど若い。肌も張りがあり背筋もぴんとしている。電話では話したが、ボケてもないし、しっかりしている。何か豆腐と、すぐ裏の海で捕れる魚を食べているせいか

。潮風も健康的なじいさんの顔を撫でた。

「これからすぐ、公民館で役員会があっから、あんた、説明してくれっちゃ」

相手がうちの祖父のような人ばかりだから、セールスは抵抗がない。こっちも孫のような年だ。

「ということで、皆さん、なかなか日頃、個人で申請しても見ることのできない新宮殿をご覧になることができます。東京でのお泊まりは帝国ホテルの由緒ある旧館であります」

最後に桐の箱から金杯をもったいぶって出す。菊のご紋。まるで水戸黄門である。

「わしは、いいと思うぜ、どうじゃろな、帝国ホテルの飯でもたまには食ってみるのもいいねか」

会長さんのひと言で決まった。一斉に拍手が起こった。わたしは、涙が出そうになり、畳に頭をつけてお礼した。これでうまくゆくと、バスが五台は堅い。いままでの老人クラブの旅行参加者の人数は聞いていた。この企画で、わが富山出張所の目標は五千人だった。

わたしは、すっかりと喉が乾き、緊張感も解れて疲れがどっと出ていた。バスを待つ間が三十分くらいある。その間に晚い昼食を食品雑貨店から買った。銭湯で飲むような瓶入のコーヒー牛乳にアンパンだ。裏の堤防に腰掛けて汗を拭きふき食べた。海を見ていると背広のまま飛びこみたくなる。海水浴もいいな。看板に、埋没林と書かれていた。この辺の海底には、何万年も昔の森がそのまま沈んでいる。観光名所だが、こうして海辺を歩いているだけでは見えない。

わたしは、スキューバが好きで、ウエットスーツも持っていた。岡崎のアパートに置いてきたが、この海には潜ってみたいと思った。海の底に木が立っているのを想像していた。わたしは、そのあわいを小魚たちと一緒にぬうようにして泳ぐのだ。どんなに神秘的なんだろう。古代の森がそっくり眠っていると思っていた。

この海がふるさとの海に繋がっていることを不思議に思っていた。この世に唯一、帰れない町がある。一年間、音信不通。わたしは女ばかりの姉妹の中で男ひとりだった。家業の後継ぎであり、親の面倒も将来はみなければならないのに、女と駆け落ちして、どこへ行っているか判らない。半分さっぱりしたようでもあり、すべてと取引したことの懼れでいまも大変なことをしてしまったという罪の意識にさい悩んだ。

絹子は長崎が実家だった。わたしに内緒でこっそりと電話をしたらしい。どこにおるの？ と母親に訊かれても、居場所だけは教えなかったという。

—おまえ、遊んどるのやろ。妹を玩具にして、最後は捨てるんや。判ってる。みんなそうなんや。

—お兄ちゃん、この人は違う。

—何云うてんや。おまえかて、病気やろ。

病気？ いまだになんのことか判らない。絹子の母親は被曝者だ。そのことを云っているのだろうか。被曝二世ということか。それだから結婚はできない。兄はそう叫んでいるようであった。

あの日、絹子の母は長崎の大学付属病院の地階にいて、被曝した。爆心地から〇・五という。死の同心円でたった五百メートルより離れていなかった。同僚の看護婦も医師も患者たちも殆ど即死だった。絹子の母は堅牢な壁に囲まれた地階にいて、奇跡的に助かったが、いまだに原爆手帖を持って病院通いだ。

いずれ絹子の口から訊くことではあったが、貧しい家庭に育ち、戦争の爪あとを背負いながら生きて行く母をいつも心配している絹子に結婚を考えたのは、絹子がすべてを話したあとに、

一嫌いになったでしょう。みんな、父と母のことを話すと、うちから離れてゆくっちゃ。

そう云って泣く人のために、逃げることを考えていた。

わたしは魚津駅から電車に乗った。ブルートレインがすれ違う。特急日本海だ。青森行と書かれていた。とすれば、この線路もどこまでも辿ってゆけばふるさとへと続くのだ。

わたしの心はいまだ揺れ動いていた。とても神秘的な運命の森へと迷いこんだ魚のように。引き返すことはできない中途半端な町にいて。ここは、ふるさとより遠く、絹子より遠く、わたしでないわたしが歩いている町。

第600話 旅行屋時代

四

橋の上に立つということは、人にどんな思いを募らせるのだろうか。

わたしは、町から町へと渡り歩くセールスマンだった。鞆に旅を詰め込んでいる。夏の盛りに蝉が鳴く。暑さに参っていた。汗がワイシャツを透けるほどに流れ、歩き疲れて橋のまんなかで立ち尽くす。すると、わたしは、この橋の下を流れる川と、ごろごろした石の光景に、ある映画の場面を思い出した。

母さん、僕のあの帽子、どうしたんでせうね？

そうだ。思い出した。この橋の上から麦藁帽子が飛んでいったのだ。遠くから、夏祭りの練習が聞こえてくる。胡弓の哀しげな音色だ。もうじき、この町の名物、風の盆が始まるのだという。

わたしは、越中八尾の駅に着き、川に沿った細長い古びた街道の宿場のような町を通り、かんかん照りの中を井田川にかかる橋の上まで辿りついたのだ。駅までは来たが、バスの便の悪いところはあとは歩きだ。次の村まで十キロあっても歩くのだ。二時間あれば着く。わたしは歩くことになんら抵抗はなかった。ただ、暑さには参った。農家で

井戸水を貰ったり、綺麗な沢では頭から水をかぶった。

「ごめんください。東都トラベルの北村ですが」

野良仕事から戻ったばかりの老人クラブの会長が、庭先で上半身裸になっていた。

「おお、来たか。待った。今回の旅行は人数がまとまらんでな、名簿はできちよる。さあさ、上がらんか」

わたしは、縁側から開けっぱなしの部屋に靴を脱いだ。

「歩いてきたんけ。昼飯はまだじゃろ。いまからばあさんと食べるそこじゃから、一緒に食べとかれ」

わたしは、客の家に上がりこんで飯をご馳走になることは滅多になかったが、田舎の年寄りたちは、それがあたりまえのように食べてけと云う。遠慮しているわたしに、ばあさんも、用意していたとみえて、わたしの分も飯台に並べていた。わたしは、ひどく恐縮して、飯台についた。

「夏の暑いときゃ、こうした水漬けがうまい」と、ゆうべの残った飯を水で洗って、お茶漬けならぬ水漬けに、鮭の身をほぐして載せ、しゃわしゃわと食べるのだ。おしんこもうまい。わたしは、久しぶりに家庭の味を堪能して感激で胸が詰まった。

「こん地区からは、百五十人だ。バス三台だな」

会長さんは、名簿と申込書を取りまとめて、集金までしてくれていた。

「北村くんは、確か東北の生まれだったけ」

西瓜を食いながら、会長さんは訊いた。

「はい、青森です」

「そうだったな。ここいらも雪が深いが、青森ほどじゃないっちゃ」

じいさんとばあさんは、にこにこわたしを見ていた。わたしたちが回る家は多くが年寄りだけの淋しい家が多かった。子供たちはみんな都会に出て所帯を持っている。農家や漁師の後継はだんだんと減っているのがその当時でも顕著だった。

「おわらを見に来たらいい。夜通しやっとするが」

わたしは、もの哀しい夜中にふらっと歩く風の盆を何かの本で読み、いつか見たいと思っていた。

一盆踊りまでに浴衣を作ってあげるね。

上の姉は、わたしが高校生のとときに、そう約束したまま、浴衣を作ることなく北海道に嫁に行ってしまった。

「ねえ、自分、浴衣持ってないんやろ。うち、作ってやるわ。盆踊りに行きたいわあ。」

以前、付き合っていた人も、そう云い残したまま、鹿児島島の田舎へ失意のうちに帰っていった。

絹子とも浴衣を着て、一緒に盆踊りに行く約束をしていた。それも、去年の逃避行で実現しなかった。

何か、わたしには浴衣が縁がないような気がした。いまだに浴衣は持っていない。盆踊りと浴衣は別れのサインなのだ。

わたしは、ふっとそんなことを思い出した。きっと、会長さんと約束したが、この八

尾の風の盆にも来れないような気がした。

「これから、どっへ行くんけ」

「はい、砺波市へ行ます」

「そうか、今度は泊まってゆかれませ。なーん、つかえんちゃ」

老夫婦はいつまでも名残惜しそうに玄関に立っていた。

富山は温かい。わたしはどこへ行っても年寄りたちに可愛がられた。みんなよくしてくれた。会社はそれが狙い目だった。老人マーケットがこれからの日本にはなりわいとして定着するだろう。飯を食うこともセールスなのだ。何か味気ないが、セールスとは滞留時間が長いほど成立するという原則もあった。みんなちゃんと計算して動いている。でも、旅行に連れて行くのもわたしたちだった。そこで満足のゆくサービスをして、いい思い出を作ることで返してゆけばいい。

バスと電車を乗り継いで、わたしは次の町、砺波まで向かう。欄間職人のじいさんが、会長だった。前にセールスした高岡は仏像を作るじいさんだった。この辺りは、工芸の職人の町だった。かつて、棟方志功が来ていた。

いまは夏だから、紫陽花か。あまり花は目につかないが、砺波はチューリップの町であった。川のある町、水郷とチューリップ。オランダのようなのどかな農村地帯を靴を持って歩いていた。今度は、一面に咲くチューリップを見に春に来よう。わたしは仕事を忘れて、田園の中で休んでいた。

旅を売る仕事なのだが、これ自体が旅のような気がした。地図を片手に見知らぬ町や村を歩き、全く新しい道を作るのだ。後輩たちがセールスしやすいように道をつけることが、われわれの役目だった。わたしの通ったあとの草が踏みしだかれて色新しこの道を行きし人ありと歌にあるような、驚きと安心感を次の人に与えること。そのための旅でもあった。

第601話 旅行屋時代

五

全員で、とはいっても四人だが、会議があって名古屋まで帰ることとなった。そのついでに、最後に富山の一番僻地である上平村にみんなでセールスしようということになった。そこから岐阜のほうに降りてゆけるのだ。

車一台に四人が乗って、運転は永田がした。彼は図体が大きいので普通車が軽自動車のように見える。ようやく運転席に収まっているという感じだ。

元暴走族だったという高村は、無口なやつで、悲哀をこめた目を横に向けていた。あまり個人的なことは聞かないが、両親に捨てられ、親戚の家をたらいまわしにされたという。いまは免許取消し中で、たまに無免許で運転してわたしに咎められた。

車内で一番のお喋りは鼠のような杉本だ。一番若い。十九で入社したばかりだった。彼の運転も無謀で、一緒に乗っていると、手に汗を握っている。みんな若いのだが、カーブの坂道も百キロくらいで平気に曲がりきる。対向車が来たらどうするんだと、いつもわたしははらはらさせられていた。

車はこれが国道かと思う未舗装の砂利道を走った。道の片側は切り立つ崖で、その反対側は急斜面の崖だった。いわば、岩山の斜面に無理に道をつけたという感じだ。しかも、ガードレールも何もない。ハンドル操作を誤ったら、転落は必至だ。そんな登りの山道でも彼らは平気でスピードを上げる。小心者のわたしは、冷や汗ものだ。

「おい、もう少しスピードを落せよ」

「所長は眠っててください。着いたら起こしますから」と、永田。

「そうです。万が一事故っても、寝ていたら安楽死ですから」と、高村。

「よせよ」わたしは、ますます緊張して前方から目が離せない。

車は古い萱葺き屋根の農家が並ぶ五箇山集落を通った。異質な空間にだんだん入ってゆくようで、タイムマシンに乗っている気分だ。

上平村は人口が千人もない。海拔五百メートルの山中の鄙びた村だ。農家が点在するほかは周囲はすべて山。そこの小さな役場を訪れた。職員も何人もいない。

「福祉課はどちらですか」

と、訊くと、みんなの視線が一斉に集まった。来客も珍しいらしく、門前払いの多い役所で、ここだけは親切に対応してくれた。

「旅行ですか。どうですか。マイクロバスでなければならんほど、人数が少ないですから。商売にはなりませんでしょう」と、笑う。言葉が富山弁ではない。訊くと、東京の大学を出て、銀行に就職していたが、親が病気で戻されたという。若い人の職場は農協か役場よりない。年寄りが多いが、貧農ばかりで旅行どころではないという。

「まあ、隣の平村と一緒にいうなら、人数が少ないと思いますが、まとめてみましょう」

農家の人の唯一の楽しみは年に一度の温泉旅行だ。

その村の会長さんに挨拶に行った。顔の皺が深く、土色が染みていた。永い人生を土と共に暮らしてきた凄みがあった。

「な一んつかえんちゃ、パンフレットあったんけ」

何を云っているのか判らないときもあった。みんないい人だ。婆さんたちはよく冗談を云って笑っていた。人情に触れて、どこにいてもふるさとを感じていた。

この仕事をして、山の奥のそのまた奥の部落を訪ねて、そこにも人が住んでいるのだという驚きもあった。どんな田舎に行っても、電話はあり、テレビはある。文明に慣らされたわたしたち若者は、それだけで安心したものだ。

昼飯を食おうということになったが、食堂なんかはない。食品店はあった。わたしたちは、いつのものが判らないパンとソーセージを買った。車の中で食べながら走った。

「所長も大変ですね。綺麗な奥さんを一人残して、心配じゃないですか」

杉本は、前に岡崎のアパートに泊まりにきたことがあった。

「大丈夫だよ。虫がつかないように防虫剤を仕掛けてきたから」

「所長はどこで奥さんと知り合ったんですか」高村も訊いてくる。みんな独身だ。「大阪だよ。同じ職場でな。いいじゃねえか、そんなこと。それよか、杉本も高村も彼女はどうした？」

「いいじゃないすか、そんなこと」二人とも顔を見合わせて黙った。

毎日が旅の中にいるということは、不安定な日常に寝起するということだ。その中でも、思う人がいるということは、どこか心強い。これから出会いのある彼らは、霧の中に突然現れる人をいつでも迎えられる。まだ長いエピローグから小説は書かれたばかりだ。

峠を越えたらそこは岐阜県だった。雲が出てきて、周囲の景色がまるで見えない。車は昼下がりでヘッドライトを点けて走った。国道とは云っても、対向車もない淋しい山道だった。

「ここから、名古屋まで、どれぐらいだ」

わたしたちはラリーのように通過地点までの時間を計算していた。

「信号もない山道ですから、飛ばせるでしょう。白川村を通過して、郡上八幡、美濃、関と走ります」

トラックの運ちゃんをしていた永田だから、その辺は確かで、道も知っている。わたしたちのライトバンは、飛行機のように雲の中を走っていたが、やがて雲が切れてくる。旅というのは、その次のページが何が書かれているのか判らないところがいい。

霧が晴れて、わたしたちの目の前に、幻のような部落が浮かびあがった。巨大な合掌造りの萱葺屋根の家々が、ぬうっと出現していた。そこは白川郷であった。

観光バスが海岸線を並んで走っていた。親不知海岸に差し掛かる。昔は難所といわれただけあって、崖が切り立つ。海岸美が迫力で迫ってくる。

わたしは、カーブで曲がる時、後ろを振り返って後続車を見た。十一台のバスがのんのんと走ってくるのが見えた。わたしは先頭車にいて、この企画旅行の初めての添乗員をしていた。出張所の社員だけでは間に合わず、アルバイトを募集して掻き集めた。全員、腕章をして旗を持つ。

わたしがセールスして集めた客がずらりと並ぶバスに乗っていると思うと気分がよかった。バスガイド嬢は嬢と呼ぶほど若くはない。制服もバス会社のものと違う。

「よろしくね。あなたと組むの初めてね」と、打ち合わせをした。訊くと、フリーのガイドで、協会から依頼されて回ってくる。ガイドはフリーのほうが金になるという。その代わり、北陸だけでなく、中部、関東、時には東北一帯のガイドを頼まれるから、ありとあらゆるコースを熟知していなくてはならない。経験と知識が必要だから、若い人には勤まらない。

「旦那さんは大変ですね」と、わたしは余計なことを訊いた。

「もうお互いに割り切っているから」と、三十半ばのガイドは鼻で笑った。月のうち、大半は家を空ける。子供さんはいないようだからいいとしても、大変な仕事だった。

バスは国道八号線を直江津から一八号線を山に向う。妙高、小布施、志賀高原と南下する。途中の野尻湖でトイレ休憩が入る。それは、われわれ旅行会社が決める場合もあるが、大概はバスの運転手とガイドが、時間と場所を頭で組み立てて、かなり多くのバスが駐車できるスペースのあるドライブインを選ぶ。

ドライブインには、わたしたち旅行会社のための特別室がある。そこの社長がにこにこ出てきて、わたしたちにご祝儀袋をくれる。何だろうと初めは思った。客を大量に連れてきてくれるから、ガイドも運転手も大事なお客なのだ。タバコまでくれる。ガイドは慣れた様子で冷蔵庫から勝手に飲み物を取って飲んでいて。

「いいんですか、勝手に取って」と、わたしが云うと、

「あんた、新米ね。いいのよ、好きにして。勝手知ったる他人の家ね」

ドライブインの従業員も気を使って、蕎麦を出す、お土産の菓子はくれる。バスが出発するときも、老人クラブの会長から、お世話になりますと、金一封を貰ったばかりだった。何か、小遣いが溜まり、会社からは出張手当も出るし、得した気分になっていた。

わたしが驚いたのは、休憩の間でも、ガイドたちはガイドブックを見ていつも勉強していることだった。ちらりと覗き見すると、秋田の観光ガイドだった。来週は秋田に行くらしい。一生懸命に暗記していた。山の標高、川の長さ、名所旧跡、産物から歴史、そして、その町の民謡まで歌えなくてはならない。さすが、プロだった。

次の休憩までわたしは二番目のバスと添乗を代わった。疲れてきたので、先頭車を高村に任

せた。先頭車両が一番気を使う。後続はついてゆけばいいのだ。わたしは、やれやれと、一番前の席に座り、ついうとうとと転寝をしていた。これだけの団体を引率するに緊張感のため精神的疲労が大きい。添乗員が十二人いるといっても、総責任者はわたしのなのだ。事故も怪我もなく無事に旅行を済ませる義務がある。そして、楽しい旅行であたりまえ。阻喪があってはならない。いまのうちに寝ておくと、わたしはじっと目を閉じていた。ガイド嬢は、年寄りたちを相手にクイズやゲームをして笑わせていた。

次の休憩で、わたしは再び先頭車に戻った。すると、例の年増のガイドにぴしゃりとやられた。

「あんた、寝ていたでしょ。信じられないわ」

わたしは、言葉の平手打ちをやられていた。ガイドからは後続のバスの最前列の席で寝ているわたしがよく見えたらう。運転手が寝ていれば、大変な事故になる。いつ、何があるか判らないのが旅行だ。それを全身で常に受け止めていなければならないのがツアコンだ。仕事中に寝るなんてもってのほか。そのひと言で、わたしは目が覚めた。

以来、添乗員で任務しているときは寝たことはない。客が寝ているときは起きて、客が飯を食い始めたのを確認してから、飯を食い、客が食い終わる前に食べてしまわねばならない。つまり、如何に早食いであるかが、ツアコンの要件だ。

夕方、草津温泉に到着する。団体といっても、三地区の寄せ集めだから、地区ごとにホテルは分宿だ。年寄りあまりぎりぎり到着すると、評判がよくない。余裕をもってチェックインしなければならないが、今回の旅程は結構ハードで、バスに乗っている時間が長い。

ぞろぞろと部屋割通りに入る。そこは、旅慣れている年寄りたちだ。部屋が判らなくなったり、多少呆けた人がいても、しっかりした年寄りが傍についていた。風呂に入り、浴衣に着替えて、大広間で二百人の宴会となる。司会はわたしが担当する。会社から、参加記念品ということで、最高齢の九十五歳の老人に贈呈された。そんな木目細かい演出も大事だった。

宴会ムードを盛り上げるために、わたしから歌を披露することもあった。カラオケといっても8トラックのテープだ。津軽山唄を歌ったり、簡単な手品をしてみせたりしてやんやの拍手喝采をもらう。旅行会社も大変だ。そこまで客にサービスして、次回の旅行もまたうちに決めてもらうよう、気の使い方が普通ではない。

「まあ、座って、呑みなせえ」と、酒を勧められても丁重にお断りする。いまは仕事なのだ。われわれ添乗員は、客の宴会が終わってから、旅館で用意した特別な部屋に客より豪勢なお膳でいただく。そこでも酒は呑まない。夜中でも何があるか判らない。仲居さんたちが、ひとりづつ付いて、ご飯をよそおってくれる。全くの特別待遇だった。

それも気分がいいのは初めのうちだけだった。これから、この同じコースを七回も八回も回るので。同じ旅館で毎日豪華なお膳料理も飽きてくる。ただの納豆飯が食いたくなる。

夜中になって、初めてわれわれは風呂に入る。露店風呂もついている。もう、山は夜気は少し寒いくらいだ。紅葉は十月だ。まだ色づいている木々はない。いまはシーズンオフで安いのだ。

わたしひとり、ゆっくりと風呂につかっているとところへ、バスガイドたちがぞろぞろと風呂

に入ってきた。一瞬、わたしは、ここは混浴なのかと思った。

「あら、男の人……。添乗員さんじゃないの」

みんなは恥ずかしげもなく、前も隠さない。わたしのほうが取り囲まれて立場がない。

「あんた、わたしたちが来るの、ここで待ってたんでしょ」と、からかう。

「そんな、ぼくは、困ったなあ、出るに出られないし。ここは混浴なんですか」

と、云うと、どっと彼女たちは笑った。

「入口に張り紙していたの見なかったの？ 十二時から、男女入れ替わるって書いてあったでしょ。知っていたんじゃないの？」

わたしは顔を赤らめて、お湯に沈みたかった。

「冗談よ。北村さんって、いい人ね」

フリーのガイドがわたしの傍にいて、まじまじと顔を見ながらそう云った。いい人と云われたのは初めてだった。わたしは、何を云われるよりもその「いい人」と、云われたのが嬉しかった。何十年経ったいまでも、そのことを思い出すと嬉しくなる。いつまでも忘れないのは、わたしは本当にいい人なのかもしれない。

それから、わたしがどうやって、女風呂から脱出できたのか、覚えていないのだ。

第603話 旅行屋時代

七

わたしたち添乗員は旅人ではないから、手荷物はできるだけ少ないほうがいい。

いつも、セールスに使うアタッシュケースひとつだ。その中に小口現金から、車の酔い止め薬、傷バンソウコ、クーポン券や行程表などが入っている。着替えはそう持ってゆけないので、せいぜいひと組づつ。わたしの場合は、旅館に着くと、洗面所で洗濯した。洗剤も小袋に入れて持ってゆく。靴下やパンツを洗濯して窓辺で乾かす。

旅館でサービスで出る使い捨ての歯ブラシなんかは、歯を磨いたあとは、髪を整えるヘアブラシになり、そのあとは背広の埃を取る洋服ブラシに、最後は靴磨きにして捨てるのだ。二十四時間体制であり、いつ何があるか判らないので、ふらふらと勝手な個人行動はできない。ホテルでは部屋番号をみんなに教えて、そこで待機することになるから酒なんか呑んでいられないのだ。

朝食後に、東京へ向けて出発となる。浅間山では鬼押出岩で記念写真。バスごとに並び、わたしは苦虫を潰したような顔で東都トラベルの旗を広げて、端に立つ。いい加減疲れてきていた。神経草臥れなのだ。毎日、ガイドと運転手と腕時計を正確に合わせておく。すべてが時間通りにきちんと運ばねば、すべてのスケジュールがずれ込むことになる。観光地でも団体の入場時間を届けてあるから、いつも時計ばかり見る癖がつく。

老人たちはおいしそうに缶ビールを飲んでいた。わたしの喉が鳴る。溶岩も照り返しがあって、九月といっても暑い。やたら水ばかり飲み、運転手とタバコを吸ってこれからの予定の確認をしたり、休む暇もない。

バスは軽井沢を通り、高崎からようやく高速道路に入る。一路東京へ。ガイドはいつも進行方向に背を向けて立っているのに、後方に流れてゆく景色だけで、

「皆様、左前方に見えてきました山は…」と、まるで前を見ているような云い方をしている。よく暗記していると感心した。ただ、いい加減なところもあって笑ってしまったことがある。

「右に見えますのが妙義山で、ございます。標高は一千二百四メートル、（あれっ、百四メートルだったかな、いいや、どうせ判りゃしないから）」と、小声で云うのが聞こえた。

バスは首都高速に入る。東京。つい三年前まで大学に通っていた街。こんな形で東京に入るのも初めてだった。仕事なのだが、どこかに旅行気分が残っており、まるで実家にお客として訪問するようによそよそしい。ここには姉夫婦がいるし、従妹、叔母などもいる。みつかるわけではないのだが、どこかでばったりと逢わないかと、逃亡者の心境になっていた。

皇居新宮殿参拝は、事前に名簿を提出して認可を受けておかなければならない。入口に四列で整列したとき、いままで騒いでいた年寄りたちは、緊張した面持ちで、無言になった。ものものしい警備の中、わたしも硬くなっていた。皇居なんか、確か修学旅行以来だ。四年もここに住んでいて、一度も中に入ったことはない。

都内は混んでいた。歩いたほうが早いようなものだ。夕食は銀座のコンコルドでバイキングだった。プログラムは田舎向けに設定されていた。銀座のレストランまでわざわざ連れてゆく。

「食べ放題ですが、あらかじめ救急車を手配したい方はお申し出ください」と、わたしがやると、どっと笑いが起こった。

わたしはだんだんと食傷気味になってきた。こうも毎日ご馳走責めに合うと、普通の食事がしたくなる。わたしたちは、客と同じテーブルでは食べない。これも別室で特別な料理だ。ガイド嬢なんかはいつも美食ばかりして成人病にならないのだろうか、わたしはいらぬ心配をしたりした。

帝国ホテルに入るとほっとする。とにかく、宿に入れてしまえば、やれやれだ。だが、旅館と違いホテルはそうは容易くない。年寄りだから、いろいろなことが起こる。様々なハプニングがあちこちの部屋から起こって、わたしたちが呼び出される。

「ド、ドアが開かない」と、裸足で禪一丁のじいさんが廊下をうろうろしている。どうして、そんな格好で部屋を出たのか。自動ロックということは何度も注意したのに。そうかと思うと、

「すぐに来てくれ、大変だ」と、電話で呼び出される。床が水浸しだった。すぐにボーイを呼んでモップで拭かせた。風呂が溢れている。

「あのねえ、困ったんだよ。恥ずかしいんだがね」と、口籠もる婆さんの部屋に行くと、

「何度も水を流そうと思ったんだがね、おかしい便所だよ」と、俯く。見ると、ビデにうんちをしていた。

今夜はどうも眠れそうにない。いろいろなことが次々に起こる。内線電話がくるとドキリとした。次は何だ。

帝国ホテルで暮らしている先輩がいた。名古屋支店から去年、東京本社に栄転した三十半ばで独身の課長だった。帝国ホテルでも、旧館は、アパートのように長期滞在の人のために、開放している部屋がある。月極めで家賃のように室料を払っているのだ。日割りにすると安くなる。都心の高級マンションを借りるよりは安い。しかも、部屋の掃除はしてくれるし、水道光熱費はいらないし、テレビ、電話も付いている。交換手の秘書まで付いているようなものだ。

部屋番号で探しにゆくと、ちゃんと表札までついているので驚いた。高村たち三人も挨拶しに連れて行った。

「おう、久しぶりだな。六百人だって。田舎の方が集めやすいんだな。首都圏は競争が激しいからな。老人クラブも纏まらない」

先輩の部屋は、十二畳もある大きさが二部屋もついている。一人では広すぎる。何故かベッドもツインだ。もっぱら遊んでいるという噂だった。

「北村君も仕事でなければ銀座に呑みに連れてゆくんだがな。今度、会議で本社に来たときでも、電話しろよ」

わたしたちは、ひとりを部屋に残し、最上階のラウンジでコーヒーを飲みながら、夜景を見ていた。ここは確かに東京なのだ。何か違う街に見えていた。いままで、黒部の山奥や、飛騨の村を訪問していたところから、いきなりやってきた。そのわたしは誰なんだ。わたしは窓ガラスに顔を映して、不安定な時間に改めて自分を問うてみた。何故、ここにいるんだ。ふと、近くの電話に目が行く。つい、東京の姉に電話したくなる衝動にかられた。わたしの心配は、父母がどうしているかということだった。祖父も年だから、病気をしてはいまいか。断絶した向こうの世界が、見えない不安はたまらない。思い直して絹子に電話を入れた。

「いま、どこにいるの？ そう、東京ね。別に、変わったことはないわ。今度、いつ、帰ってくるの？」

短い会話だったが、声を聞いて安心した。いつ、何があるか判らない。わたしたちは罪を犯した人間だった。その後ろめたさのためにわたしたちは十字架を背負って生きてゆかねばならない。

東京。それが哀しい街に見えてくる。

第604話 旅行屋時代

八

バスは中央高速道路を西に向かって走っていた。バスの中では、わたしは、今回の旅行の業務日誌をつけていた。問題点はなかったか。あるとすれば、改善策はないか。それが次回のツアーのときに役に立つ。

ガイドは観光案内だけでなく、ゲームに歌に、マイクを回してお客に歌わせと、忙しい。老人たちは実に明るい。よく笑いよく喋った。それが、わたしの郷里青森でもそうなのだが、雪国の人は長い冬で鬱屈した分だけ、騒げるときは騒ぐのかもしれない。暗いイメージは何もない。

「皆さん、ほら、お隣の中央線を走っている特急はあずさ2号ですよ。いま、流行歌では人気がありますが、知りませんか」と、ガイドが話しても、老人たちは何の反応を示さない。

「ああん、行ってしまう。お孫さんなら、食いつくように見るんだけどなあ」と、じれったそうに云ったので、わたしは笑いを堪えていた。

バスは高速を降りて一般国道を走った。後は一路富山へと帰るだけだった。ここまで来ると、もう旅の九割はうまくいったも同然で、わたしは安心感から気がほぐれてきた。そうになると、バスがどこをどう走っていても構わない。小口現金や領収書の計算をしたりしていた。

ところが、後部座席から、唸り声が聞こえた。

「ああ、ヨネさん、大丈夫か」「ヨネさん」後ろから悲鳴に近い声が聞こえた。

わたしは、何事が起こったかと振り向いた。老婆が胸を押さえて苦しそうに目を剥いて仰け反っているのではないか。バスは路肩に寄って、停車した。後続車両も続いて止まった。

「救急車」と、乗客は叫んでいる。心臓の持病がある人のようだ。発作が起こったのだ。わたしは、血相を変えて、バスから降りると、そこは田圃しかない盆地のようなところだったが、とにかく、公衆電話を探さねばならないと焦った。農家が一軒あったので、飛びこんだ。電話を借りると一一九を回す。指先も震えていた。この位置を農家の人に聞いて教えた。国道脇に観光バスが止まっているからすぐ判ると、わたしの声も荒い。

それから、後続のバスに先に行くよう指示した。どうせ、あとは帰るだけだから、難しいことはない。トップを高村に頼んだ。

まもなく救急車が来た。担架で乗せられた。わたしもバスを降りて、救急車に乗りこんだ。

「後はよろしくお願いします」

「ええ、ちゃんと皆さんを送ってゆくから心配しないで」ガイドはそう云うと、バスに乗りこんだ。添乗員のいないバスは発車した。救急車は逆の方向に走った。ヨネ婆さんの意識はなかった。昏睡状態で非常に危険だった。救急車はサイレンを高くしてスピードをあげた。

どこかの町らしかった。個人病院だが、入院設備もある結構大きな病院の廊下の長椅子にわたしは座っていた。看護婦が、身元を訊いてきた。わたしは、旅行の参加者名簿から、住所、電話番号を教えた。

「富山県魚津市ですね。危篤ですから家族の方を呼ばないといけません」

わたしは青くなった。さっきまで元気にバスの中で手を叩いて笑っていた人だ。

看護婦が電話で家族に連絡していた。外は薄暗く、もう夕暮れだった。わたしの不安はもうひとつあった。ここがどこなのか、自分のいる位置が判らないことだった。まさか、ここはどこですかと看護婦に訊くわけにもゆかない。腹が減っていたので、ふらりと飯を食いに外に出た。街灯がぼつぼつと点き始めた町のいろんな看板を見て、ここが茅野市であることが判った。だが、茅野市とはどこにあるのか。長野県であることも判らない。甲府を過ぎたのは知っていた。トイレ休憩を諏訪湖でするとガイドが云っていた。その手前なのだ。

わたしは、初めて来た町の喫茶店に入り、カレーとコーヒーを頼んだ。地元の面白くもない新聞に目を通していたが、活字が追えないでいた。どうも、婆さんの容態が気にかかる。晩飯を食ってから、また病院に引き返した。病室は慌しく看護婦や医師が出たり入ったりしていたが、処置はできるだけしたようだ。

「あなた、旅行会社の添乗員さんね。ここまで、富山からどれぐらいかかるかしら」

わたしは、地図を持っていたので、広げて現在地を確認すると、距離を暗算してだいだいの走

行時間を出してみた。六時間はかかると思います。

「と、すれば家族の方が到着するのは真夜中ね。だったら、お願いがあるのよ。誰か見てあげなければならないの。非常に危険な状態ですから。あなたにお願いできるかしら」

わたしがかぶりを振ると、看護婦はわたしを病室に入れた。ヨネ婆さんは痛々しく、点滴に酸素吸入といろんな管を体に装着されていた。

「ここに座って、ご迷惑でも、手首をとって、脈拍を診ていてもらいたいの」

「ええ？」と、わたしはたじろいだ。いまにも死にそうな老婆の脈をとってくれというのだ。だが、家族が来るまで放っておくわけにはゆかない。責任の一端があるような気がして、わたしは快諾した。

「何かあったら、ベッドの上にあるボタンを押してね」

わたしは、機械がピッピッと鳴る薄暗い病室に閉じ込められた気分でした。しかも、わたしの左手はいまぴくぴくとかろうじて生きている老婆の脈を感じている。一時間、二時間と経った。腕も痛くなる。同じ姿勢をずっとしていることが苦痛だった。早く、家族が来ないかと、腕時計ばかり気にして見ていた。時間は気にすればするほど長く感じられるものらしい。時計の秒針を刻む音もやけに大きく聞こえてくる。それと、老婆の息をする音が不気味に病室に響いた。わたしはいまにも死にそうな人を前にして、実に不謹慎なことを思っていた。この前、ひと月ぶりで岡崎に帰ったときのことだ。

富山を夜、会社のライトバンで出た。。真夜中だから、車も多くない飛騨路を百キロ近い猛スピードで走ってきた。岡崎へは六時間で着いた。疲れて、眠たく、自分の顔を殴り、股を抓り、やたらとタバコばかり吸って運転してきた。未明に岡崎のアパートに着く。

わたしは、寝ている絹子を起こさないようにこっそりとダブルベッドに入ったつもりが、絹子は起きていた。寝ないで待っていたと、泣きながら抱きついてくる。わたしたちは、逢わなかった分を取り返すように、何度も執拗に抱擁しあった。それは、わたしが帰るその夜も続けられた。二晩一睡もしないで、抱き合うために帰ってきたようなものだった。わたしが、時計を気にして、富山に戻ろうとすると、絹子はいじわるそうに「帰らないで」ときつく命令するのだった。わたしは振りきるように夜中、アパートを出てくる。芯から疲れていた。これから三百キロ以上を走らねばならない。ハンドルは重たかった。

三時間が経過した頃だったか、静かになったと思った。呼吸する小さな音がやんだ。指に脈のぴくりぴくりとゆっくり伝わるリズムが途絶えた。わたしは、回想シーンから突然、現実の闇に投げられたように戸惑った。ボタンを急いで押した。廊下に一斉に電灯が点り、看護婦たちが走ってくる足音が聞こえた。

「どうしました」

「脈がないんです。呼吸も止まったみたいで」

医師も駆けつけてきた。

「たった今ですね」

医師は瞳孔を見て、心音、すべてを確認した。そして、自分の腕時計を見て、一時三十七分と死亡時刻を告げた。

わたしは、生まれて初めて人間の死ぬ瞬間に立ち会った。身内が死んだときは、病院に駆けつ

けたらすでに死んでいたから、死を指で確認したことはなかった。命とはこんなにも他愛ないものだったとは、わたしは衝撃を受けていた。

病院は、人間が死ぬと後は役目が済んだように事務的に事を進めてゆく。すべての機具を仏さんから外すと、白い布を顔にかぶせた。わたしはようやく役目から解放されて、廊下の長椅子で痛む腕を揉み解しながらタバコばかり吸っていた。

三時過ぎて、玄関が騒々しい。ようやく富山から家族が車を飛ばして来たようだ。息子さん夫婦と姉妹が乗ってきた。わたしは叱られるのを覚悟で真っ先に謝った。

「すみません。旅行が少しきつかったようです」

家族はそれどころではない。もう、目を赤く脹れさせていた。わたしは、ただ、おろおろして傍に立っていた。

「おばあちゃん」と、みんな遺体にとりすがって泣いていた。そこに医師がやってきて、説明をした。

「心筋梗塞だったようすな。手は尽くしましたが、一時三十七分でした。こちらの若い方が夜通しついていてくださって、普通、旅行社の方は患者を置いて、後は頼みますと行ってしまうものなんだが、この方は責任感があるんでしょな」

わたしは、怒鳴られると思っていたところにそう云われた。遺族はわたしに向き直って頭を下げた。

「母をみとっていただきましてありがとうございます。お世話になりました」

と、わたしに財布から万札を七、八枚ばかり出して、

「これはお礼ですから。裸ですみませんが」と、握らせるので、ひどく恐縮して受け取らなかった。

こんなところに一時でもいたくはなかった。

「すみません、国鉄の駅はどっちですか？」

と、看護婦に訊いた。それで、荷物を持つと逃げるように病院を出た。ぐすぐすしてられない。始発の電車で東京へ行き、そこから名古屋まで新幹線だ。急いで会社に帰って報告しなければならない。

わたしは、人も車も通らない薄暗い通りを駅へと歩いた。途中、公衆電話があったので、一応、支店長には報告しておかないと、後で大変なことになると、電話を入れた。寝ていた支店長が何事かと電話に出た。

一乗客がひとりバスの中で心臓発作で倒れまして、先ほど茅野市の病院で亡くなりました。

一なんだと？ おまえ、他の乗客をほっておいて、バスを降りたのか。ばかやろう。責任者がいないでどうする。それに、乗客が死んだのはおまえの責任だ。判ったか。判ったら、すぐに帰ってこい。

支店長はもの凄い剣幕で怒鳴った。自分ではいいことをしたのか悪いことをしたのか判断がつかなかった。ただ、判っていることは、会社でもかなり叱られるということだった。

茅野市の駅にはまだ誰もいなかった。ようやく窓口が開いて、職員が顔を出したところで名古屋までの切符を買った。ポケットにはぎりぎりの金しかなかった。お釣りを受け取るとたったの

二百円。これじゃ飯も食えない。

朝焼けのプラットホームに立っていると、特急あずさ号がやってきた。わたしは、いま流行っている歌を口ずさんでいたが、急に足に震えがきた。生きているものと、死にゆくものと、どちらが大事なんだろうか。めまぐるしい旅の光景とか、いろんな思いが交錯していた。電車に乗りこむ。わたしの指先にはまだあの生きていたときの脈拍の感触が微かに残っていた。

第605話 旅行屋時代

九

新しい企画がスタートした。今度のは会社の総力をあげて大々的にマスコミでも広告を流す。そのことで本社で戦略会議があるというので、名古屋支店から支店長とわたしと、中部担当の係長と三人が出席した。

銀座のビルの2フロアを本社で借りていた。会長室の隣に顧問室というのがあった。わたしたちは支店長に連れられて、誰もいないことをいいことに見学に入った。 だだっ広い部屋にぶかぶかの絨毯、でんと両袖の机があるだけ。そして、ゴルフのパターの練習ができるようになっていた。顧問は、代議士の大野晃だ。父親は運輸大臣をした大野万樹。すべて政界財界は繋がっている。

支店長は普段はいない代議士先生の席に座り、勝手に葉巻を取って火をつけた。

「こんな身分になってみたいもんだよな、まったく」

ただ、噂では会社は大変な赤字で、今度の企画は会社の命運がかかっているということだ。われわれ下っぱは内情までは判らない。

広い会議室に、各支店から集まった支店長、所長がテーブルについていた。坊主頭の会長が冒頭挨拶し、今度の企画の説明に入った。

「老人福祉助成会という財団法人をうちの会社が事実上、運営しているのは知っているね。これは、老人福祉の一環で、これからいろんな食品や老人関連商品にベルマークのように点数をつけたマークを印刷して、各企業から助成金を売上のパーセンテージで貰うというものだが、それをうまく利用して、旅館、バス会社、観光施設から利用のたびにバックを貰うというものだ。それで、今回は、芸能プロダクションとタイアップして、各地区の大きな温泉旅館を貸し切り、老人慰安の助成会の活動としてだな、ショーを組み込んだ宴会を企画するというものだ。いまから、その趣旨に賛同してくれた歌手の方々を紹介する。これから先は、皆さんは、うちの社員ではない。助成会のボランティア職員なのだ。くれぐれもそのつもりで」

会社は表向きは助成会、裏では旅行会社という、二重構造でこれからやってゆくというのだ。

何か危ない匂いがした。

ぞろぞろと会議室に歌手たちが並んだ。雪村いずみ、研ナオコ、にしきのあきら、黒木健などがひとりずつ挨拶する。

「わたしたちは全国のおじいちゃん、おばあちゃんたちのために頑張って歌いますから、よろしく願いいたします」

汚い。わたしは、まだ若いから、世の中のカラクリというものが見えていない。表看板は社会のためと銘打っているが、裏ではただの利益獲得集団なのだ。

それから、近くのホテルの宴会場で、歌手たちを交えて、わたしたち似非ボランティア職員たちとの交歓パーティが行われた。わたしはにしきのあきらと一緒に写真を撮った。

「そうですか、青森から、大変ですね」と歌手に云われる。何も知らない善意の歌手たちに嘘を云うのも辛かった。それはまさに会社ぐるみの犯罪に近かった。ただ、税法上では、助成会が指名した旅行業者が利益を上げるのは違法ではない。

何か、その夜のしらじらしい酒は酔えなかった。

名古屋支店で、今度は、各県別に分かれて、旅行プランとタイトルを決めるのだ。一どじょう掬いの里・三朝温泉と出雲二泊の旅、芸能大会で豪華ショー。

というプランを北陸から提案した。原価計算まで出して、設定した価格帯で行けるかどうか。企画からセールス、添乗まですべてを行うのだ。

「ダメだ。企画が陳腐すぎる。もっと画期的なアイデアがないか。芸能大会はないだろう。ドサ回りの三流歌手じゃないんだから」

支店長は決して妥協しない。わたしたちを夜中まで事務所に缶詰にしておくほど仕事の鬼だった。

コースは、山陰と伊豆、淡路島に決定した。行程表を作成し、チラシも印刷した。客動員を確実にするために市町村の会長たちを招待旅行に連れてゆくことにした。事前下見旅行も兼ねて、支店から総出でアタックすることにした。ただというと参加者も多い。

招待旅行は北陸の山中温泉と決まった。主催はあくまで老人福祉助成会だ。

当日、バス二台に各地区の会長だけが乗りこんでの旅行となった。山中温泉で一番大きいホテルの宴会場に駆けつけてきたのは、まだ十七歳の芦川いずみだった。こんなアイドル歌手なんかよりは演歌歌手のほうがいいのにとわたしは思ったが、会社としての思惑があるのだろう。芦川はマネージャーと二人だけで車でやってきた。歌手の接待は若手社員たちがした。年が近い杉本なんかは、仕事を忘れてただのファンになっていた。

「どうも、音響設備は悪いみたいなんで」と、マネージャーがいい顔をしていない。それはそうだ。ここはただの温泉ホテルなのだ。せいぜいカラオケに使うマイクやスピーカーぐらいしかない。かといって、ライブのようなバンドを連れてくるほど予算もない。

わたしがマイクミキシングを担当した。部下たちはライティングや、幕引きの係と、みんな結構楽しんでいたが、これは旅行屋のやることじゃない。まるで舞台の小道具係じゃないか。興業と旅行を一緒にしたのはいいが、何か違う。旅行屋が旅を売らなくなったらお終いだ。わたしは、舞台の裾に隠れていて、可愛い芦川いずみがアイドル歌手としてデビューしたときからの歌を次々に歌うのを臍気に聞いて、怒りのようなものを感じていた。

自分の孫のような小娘が超ミニのステージ衣装で、踊ったり歌ったりしているのを大広間で啞然として聞いていた老人たちは、あまり楽しそうではなかった。

「わたしの祖父はいまも元気で、わたしに手紙を書いたりしてくれています。わたしは、おばあちゃん子だったので、いまでもとてもおじいちゃんやおばあちゃんが好きです」と、芦川いずみの挨拶は多分、マネージャーに教えられた通りの文句なのだろう。芸能界は挨拶だけはちゃんとしている。そう教えられ、躡られてきたように、しっかりした口調だった。

ステージが終わると宴会だった。わたしたち社員は全員男芸者になり、会長さんたちにお酌に回る。この日だけは、一緒に呑んでいいというので、みんな勧められるまま浴びるほど呑んでいた。

「会長さん、この旅行よろしく頼みます。正月は韓国旅行も企画していますから、格安でご招待いたしますよ」

個別に部屋まで押しかけて行って、また酒を呑ませながら、まるめこもうとするセールスだった。ただ、今回の旅行の反応はいまひとつはっきりとしないところがあった。

年寄りたちは寝るのが早い。わたしたち若手は、酔った勢いで、温泉街でまた呑みなおそうということになった。浴衣では寒いくらいだ。いつのまにか十月になっていた。雪が来る前に名古屋に戻れそうにない。次々に旅行の企画はあった。三河の七福神巡り、ぽっくり寺ツアー、冬は湯治だ。目白押しの企画で、休む暇もないだろう。

川の下を黒い川が流れている。また、わたしは自分に問い掛ける。わたしは、どこにいるんだ。何をしているのだ。偽善的な旅程のタイムテーブルの上で、わたしだけはいつまでも浮ついた旅人であった。

第606話 旅行屋時代

十

だんだん会社の雲行きが怪しくなっていた。わたしは、倒産という言葉に辿りついた。給与の支給日が一週間ずれていた。いきなり、本社から、今後、月末支給にするという。しかも、いままでは銀行振込みだったのが、支店から現金で出ることとなった。何かおかしい。

興業とタイアップした企画はもの見事に外れた。集客予定が一割にも満たない。支店長は連日、みんなに檄を飛ばす。

「おまえたちのやる気はどこへ行ったんだ。バス一台も取れなくてどうする。今日は、契約を取ってくるまで帰るな」と、いつになく口角泡を飛ばして話す。

富山にいるわたしたちには電話で怒鳴る。受話器を耳から離していないと、鼓膜に響くほどだ。

一どうなんだと聞いているんだ。おまえの目標と数字はどれだけの差があるんだ。やれるというから、本社に上げたんだ。努力目標じゃダメなんだぞ。もっと現実的でなければな。判ってんだ

ろうな。

毎週、土曜日には名古屋に帰れることになった。全体会議をして、支店長はみんなに焼きを入れるつもりだ。何か、必死な様子が会社の窮乏を予感させた。

あるとき、緊急に支店への召集がかかった。支店長のいつもの声と違う。何かあるなどわたしたちは勘繰っていた。支店に月曜日に全員が集まった。仕事が終わって夕方だ。ドアのノブや金庫に白い型がついている。見知らぬ男たちが数人たむろしていた。わたしが事務所に入ると、みんな神妙な顔つきで、机に向かっていた。

「おい、北村、おまえも指紋をとってもらえ」

紺色の制服は警察の鑑識だった。刑事が支店長と話して帰っていった。

女子事務員たちは寄り添うようにして不安そうに立っていた。

「何があったんだ」と、訊くと、

「金庫から二百万の現金がなくなっていたんです。土曜日の夜か、日曜の早朝に誰か侵入したらしいの。警備員のおじさんが、それ以外の時間帯はずっと玄関にいたというから。金庫の番号と合鍵の場所を知っているのは社員だけだから...」

「すると、この中に泥棒がいるってことか」

金庫に触るのは、事務員と支店長のほかには、わたしと係長くらいのものだ。後の社員は番号は知らないはずだ。ただ、いつも開けているのを見ていれば、番号や回す回数なんかすぐに覚えてしまう。

わたしたちは全員、個別に支店長室に呼ばれて、アリバイを報告させられた。ただ、日曜は全員休日だから、独身のものでアパートにいたというものもいて、証人はいない。嫌な気分全員包まれていた。わたしの番になった。ドアを開けておくと、

「ちゃんと閉めろよな。これから大事なことを訊くから」

支店長は声を低めた。

「みんなの身元調査を警察でやったんだが、おまえ、家出人搜索願が出されているそうじゃないか」

わたしは頭が白くなった。こんなときに蕪蛇だ。

「ちゃんと説明してくれ。今回のことと関係ないかもしれないが、何があったんだ」

わたしは、しどろもどろで、それから駆け落ちしたことなどの一切を話した。

「そうか、北村は案外ロマンチストなんだな。ただ、嘘でないことを証明してくれ」

わたしは、咄嗟に、

「電話を借ります」と、東京の姉に電話をした。結婚して子供がひとりいた。

一ああ、おれ、拓也だ。

一ええ？ いま、どこにいるの？ 幽霊じゃないよね。生きているのかい。みんな心配していたよ。

一いま、名古屋で仕事してんだ。それより、おれの搜索願が出されているって？ ちょっとした事件があって、警察に調べられた。

一ああ、去年ね、おまえが失踪したから、殺されてどこかへ埋められたか、大阪港におもしつけられてドボンと.....。

—それは、推理ドラマの見すぎだよ。元気でやっているから、親父、おふくろにも連絡しておいて。

—電話番号ぐらい教えておきな。じいさんだって、もう九十なんだから、いつ死ぬか判らないだろう。連絡がつかないと困るよ。

わたしは、岡崎の電話番号を教えた。支店長は電話のやりとりを聞いて、信用したようだ。

「まあな、おまえもいろいろあるなあ。親にだけは心配かけるなよ」

とうとう、居場所が判ってしまった。これから、いつ両親が乗りこんでくるか。連れ戻されるか、それでびくびくと生活をしなければならなくなった。

その盗難事件はそれっきりになってしまった。誰が犯人なのか判らないまま、うやむやになったのか。

わたしたちは、また富山に戻って、売れない企画の旅行をセールスしていた。どこも首を縦に振らない。苦しい戦いが続いていた。この企画で、計画が狂って、本社も大変なようだった。

—とにかく、申込金じゃなく、全額、なんとかお願いしてもらってこい。

支店長からそんな電話が頻繁にかかってくるようになった。まだ先の旅行なのに、代金を全額いただきたいと、頭を下げて回ると、おかしく思うだろう。よほど苦しいのかと、不信感も相手に与えかねない。それでも、わたしは、云われた通り、参加者名簿を手に、一軒づつ、農家を歩いて回った。最後の家に着く頃には夜の十時だ。もう、農家の人は九時前には寝るから、こんなに晩く訪問するのは尋常じゃない。

しかも、街灯もなにもない田圃の畦道を手探りで歩いていた。足を畔に落したときもあった。わたしは泣きべそをかいていた。

(こんなにしてまでなんで金を掻き集めなきゃならないんだ)

だんだんとやる気がなくなってくるのが判る。どうでもよくなってきていた。所長のわたしでさえそうなのだから、営業社員たちは、どこで何をしていることか。サボっているかもしれない。営業の数字が上げられないのは、まともなセールスをしていない証拠だ。

わたしは、宇奈月温泉のある町へと歩いて帰ってきた。もうひとりが車で待っていた。旅行客たちが、浴衣でふらふらと歩いている。黒部峡谷鉄道が、止まっていた。なんとなく寂しい。十月も末になると、山には雪が降る。たまらなく寒かった。何時になっても電話しろ、事務所にいるからと、支店長は云っていた。わたしは、ぽつんと電灯の点いている公衆電話から名古屋に電話を入れた。

—北村です。なんとか二百万集金してきました。明日の朝一番で指定の口座に振込みます。まだ、集金先を残していますが、真っ暗で足元も見えないもので、今日はこのまま出張所へと戻ります。

—そうか、ご苦労さん。大変だったな。とにかく助かるよ。

いつにない支店長の優しい声が不気味だった。

後で仲間から聞いた話だが、わたしの電話を待っていたのは名古屋の全員だった。わたしが、こうして金を掻き集めているのに、なんとも思わないのかと、みんなに支店長は怒鳴っていたそうだ。

わたしの中にまた「倒産」の二文字が浮かんだ。一緒に集金で回った杉本と、交代で運転した

。黒い海が見える。ちろちろと漁火が瞬いていた。

「腹減ったな。ラーメンでも食って行こうか。どうせ、市内はもうどこも閉っているいるだろうからな」

ドライブインだけはやっていた。長距離トラックの運ちゃんたちが、やはり晚い晩飯を食べていた。テレビがけたたましく笑っている。

「好きなもの頼みな。たまに奢ってやるから」

と、わたしが云うと、

「本当っすか。なら、大盛りに餃子も付けて」

体が小さいくせによく食べる。いや、腹が減るといのは、若い証拠だ。いつも、どこでもわたしたちはとにかく飢えていた。

窓の外を何気なく見ていると、白いものが落ちてきていた。雪だった。やけに冷えると思った。平野にも雪が降る。

「大丈夫すかね」

「積もりはしないだろう」

この北陸に来て、春から夏、秋から冬になろうとしていた。

第607話 旅行屋時代

十一

わたしは日曜日のたびに会社の車を黙って拝借して、岡崎へと帰っていたが、絹子が病院の慰安旅行で長島温泉へ泊まりで行っていたので、こっちも仲間とドライブすることにした。

たまに、隣の石川県担当の太田たちと合流して遊ぼうということになった。金沢の香林坊で待ち合わせた。富山市までは北陸自動車道が開通していたから、隣県とは行っても、ほんの隣り町のような感覚で遊びにゆける。

わたしたち、富山出張所からは四人、金沢出張所からも四人が来て、内灘まで走った。

「おれよう、前っから、車で砂浜の上を走ってみたかったんだよな」と、高村は云った。

「砂浜の上を走るには、ジープか四輪駆動の車でなかったら、車輪が埋まるだろう」

わたしは、何も知らないでそう云い返した。

「あれ、所長、知らなかったんすか。内灘の砂浜は、車で走っても埋まらないって、人気があるんですよ」永田もそれは知っていた。カーキチの間では伝説の浜になっているらしかった。わざわざ遠くから、この砂浜をサーキットにするため暴走族たちが集まってくるのだという。

車二台で、両端が見えないほどの長い海岸線に出た。北は能登半島の羽咋まで続き、南は東尋坊まで見える長い砂浜だった。日曜でも、十一月となると、寒いせいか、車が数台乗り入れているの見えるだけで、歩いている人影はない。夏だったら、かなりの人で賑わうのだろう。

高村が運転させてくれと、永田と代わった。

「いいのかよ。無免許じゃねえのか」

みんなして咎めたが、

「ここは道路じゃないし、マッポもないし」と、強引に高村が運転席に座った。マッポと警官のことを云う。前に暴走族だった高村らしい。

高村は半クラッチとアクセルを同時に踏むといったダブルクラッチをこなし、カーレーサーのテクニックで、ジクザクに乱暴な運転を試みさせた。みんなは、ただ、しがみついていた。わたしは青くなっていた。砂浜を走り、波を蹴散らして走った。海水が車にいいわけがないが、会社の車だから構うことはないといった風に、映画のロケでもやっているようなカーチェイスを二台でやってのけた。

ところが、調子に乗りすぎて、車は砂浜の窪みに落ちた。かなり深くタイヤをめりこませて動かなくなった。

全員が降りて、押したり、持ち上げたりしたが、なかなか脱出できない。

「ほら見ろ。砂浜をバカにした罰だ。四駆でなければならぬって云ったろう」

わたしは勝ち誇ったように云った。

たまたま、同じ若者たちが、ジープで来ていたので、ロープで引っ張り上げてもらった。

「いやあ、すっきりした。いままでのうっぷんが晴れたぜ」と、清々しいのは高村だけのようだ。あとは、みんな砂まみれだ。

砂まみれになったところで、みんなで、砂遊びをした。誰かが作ったものが、あちこちへ残っていた。夏になれば、この海岸では、砂で作るコンテストも行われるという。富山は城を作った。砂が重いから、かなり高く積み上げても崩れない。金沢の連中は女の横たわる裸体を作った。

「あいつら、女に飢えているんだろうか」

「ガキみたいな城なんか作って」

と、互いが互いを腐しあう。なにか、砂遊びという小さな頃に還って、夢中になっていた。いい男たちが、いつか少年に戻っていた。

風が寒いから、温かい缶コーヒーを買ってきて、コンクリートの防空壕跡のようなところに入ってみんなして呑んだ。震える手でタバコも吸った。仕事でも仲間がいるというのは嬉しい。しかもみんな同世代だ。わたしが一番の上になる。

風化しつつあるコンクリートにペンキで、反対とか闘争という赤い文字が大きく書かれているのが断片的に見えた。

「なんだろうな。この全学連の書いたような文字はよ」

みんな、反米という言葉を手でなぞっていた。と、わたしはだいぶ前に見た記録映画のシーンを思い出していた。

「ああ、あれは、ここだったのか。そうか、長い間、気にかかっていたんだ。そう云えば、この風景だったよな。コンクリートと砂浜と、旗とシュプレヒコールだ」

みんなは、突然、わたしが立ちあがってエウレカと叫んだので驚いていた。

「どうしたんすか、所長」

「この光景がどこかで見たことがあるって、ずっと考えていたんだ。ここはな、朝鮮戦争の後に、米軍の試射場になったことがあるんだ。それを住民たちが、反対運動を起こしてな、米軍を撤退させた。戦後、安保が調印されてから、初めて住民運動がアメリカに勝った場所なんだ。そ

れが、この赤いペンキの跡として残っているんだ」

わたしは、歴史の授業でも講義するように一挙にまくしたてた。わたしの中で、記憶と知識が結びついた。

あれは、わたしが子供の頃に、よく祖父に連れられて映画を見に行ったときのことだ。子供心に、大人たちが旗を振り、何を怒っているのか判らなかった。激しい闘争の場面で、もみ合っているのが、海であり、砂浜であり、このコンクリートの避難小屋であった。不思議と、ドキュメンタリー映画の真迫の場面をいつまでも覚えていた。

わたしたちは、旅をしていつか、デジャヴのような感覚に囚われる場所に行きつくときがある。貝合わせのように、記憶と同じ絵を探して歩くのが旅なのだ。二枚貝の片われは、わたしをどこかで待っている。

「これからどうなるんだろうな」

金沢担当の太田が先の見えない会社に、おどおどして視線を振り返らせて云った。

「なるようにしかならない。支店長は何も云わないし、どうやらこのままでは賞与も出そうにもないし」

つい、いましがたまで童心に帰って遊んでいた連中も、急に現実に戻されていた。車のエンジンが入り、ヒーターが入れられた。すっかりと冷え切っていた体で乗りこんだ。

「どうも、年の瀬が近くなって景気が悪いと、気が沈むよな」

一人、高村だけは機嫌がいい。運転は杉本に代わった。

「安全運転で帰ろうぜ。おまえも点数がいくらかないだろう」

みんな免停すれすれのところだ。車は砂を蹴散らして発進した。わたしたちの作った砂のオブリジェは、崩れそうでなかなか崩れない。それは、わたしたちの仕事であり、会社であり、生活であるような気がした。

どこからかシュブレヒコールのような叫びが聞こえたと思った。みんなも空耳かと海を振り返っていた。風の吹く声に驚いて振り返る。弱っている人間たちの幻聴だった。

第608話 旅行屋時代

十二

朝、目が覚めたら、やけに冷えるのでカーテンを引いた。外が真っ白になっている。昨日まで、晩秋の風情があった街も、一夜にして冬となる。

「所長、タイヤ交換しなければ動けませんよ。スノータイヤはないんですか」と、高村が云うが、果たしてそんなものがあつたかどうか。名古屋は雪の降らないところだ。一応、支店に電話を入れてみた。

「ええ、十センチは積もりましたか。冬タイヤがそちらにあつたかと思ひまして。

すると、支店長の怒鳴り声がした。

「いちいち、そんなことで電話をするな。タイヤを買う金はない。安いチェーンを買ってきて、巻いて走ったらいいだろう。」

「そうか、いよいよ資金が底をついたか。」

十二月になると、世間は年末年始の慌しさの中で、とても旅行どころではなくなる。わたしたちは、それでも正月の湯治ツアーのパンフレットを持って、各会長宅を回っていた。

「湯治なんかは、団体で行くものはおらん。みんな個人的に婆さんと行くんじゃ」

それでも、団体のほうが安くつくと、つっこんでみるが、どうも気乗りがしない。それは、こちらにも熱意に欠けているから尚更だ。

普段は、ひとりづつセールスするのだが、やる気がないから、杉本と二人で歩いた。あちこちで断られると、どうも萎縮してしまう。外回りはコート一枚だから手もかじかんだ。

「コーヒータイムにしようか」

と、昼にランチでコーヒー付を呑んだばかりなのに、また三時過ぎて、喫茶店に入る。最近では、そうして、一日三回も暖をとるためにしけこむのだ。それでは商売にはならない。杉本は、週刊誌のマンガばかり見ていた。わたしは、中京地区のスポーツ新聞があつたから、その求人欄ばかり見ていた。目は自然と、求人コーナーに行ってしまう。いまも、給与は悪くない。ただ、その給与も出るのか。また一週間伸びていた。支給がずれこみ、不安になった社員が冬のボーナスも出ないので、見切りをつけて次々と辞めて行った。かなりの危険信号だった。

給与は次の職がみつかったとしても下がるのは覚悟しなければならない。それでも安定した会社を捜していた。できれば出張のないところがいい。毎日、きちんきちんと家から出勤したいものだ。営業。固定給いくら、あとは歩合。こんな会社が多い。それでも社保完備であればいい。

わたしは、もう別の会社に移ることを考えていた。多分、残った社員たちもいい職があれば、いつでも辞める腹なんだろう。ただ、不景気で、いい仕事はなかなかない。

出張所に帰れば、毎日のように決まって支店長から、金を掻き集めて送金しろと焦って電話がくる。

「全額、回収してあります。と、云おうものなら、

一ばかやろう。セールスして金を作れ。とまた檄が飛ぶ。だから、なるべく、事務所にいないようにして、みんな出ていた。

大口があてはないから、小口で稼ごうと、それでも湯治の宿の手配から、列車の手配までしてやる。忙しいだけで売上にもならないが、ないよりはましだと、あちこちから頼まれた個人旅行も手配してやった。その集金してきた金が五十万くらい鞆に入っていた。少しでも送金すれば、支店長は何も云わない。精神的にも参っていた。

雪は、夕方にはやんだ。そして、暖気がきて少しづつ解けてゆく。

これからは、日曜のたびに岡崎へは帰れないだろう。飛騨の山越えはチェーンをつけて走行すれば、スピードは出せない。倍以上の時間がかかるだろう。かといって、列車で帰る金もない。生活が二分するというのは、生活費がそれだけ多くかかるということだ。

いつもより早く、出張所に戻ると、高村と永田はもう戻っていた。みんな、ぼんやりと雑誌を見て、ごろごろと転がっていた。

銭湯に行こうということになった。それから、帰りに定食屋に寄って晩飯だ。おかずを選べるから、金のないときは、それなりに食えるのだ。みんなで金を出しあって、ビールや焼酎を買って帰る。呑むのは部屋で車座になって、愚痴を云いあいながらだ。

「先に行ってください。あとで追いつくから」と、高村だけ残った。何か着替えの準備があるらしい。わたしたちが風呂に着くと、後ろから高村が走ってきた。

雪はシャーベット状になってきていた。いつも、銭湯に行くときはこの同じコースだった。

出張所に戻ると、わたしは、呑む前に売上金だけは合わせて、明日の送金に備えようと、アタッシュケースを鍵で開けた。そこで三十万が消えていたことに気づいた。

「ない、おかしいな、確かにあったはずだが」

「所長、どうしたんですか」高村が訊いてきた。

「いや、なんでもない。さあ、呑もうや」

わたしはわざと隠した。いま、大騒ぎすれば、誰かに嫌疑がかかるのだ。折角うまくいっていた人間関係にもヒビが入る。わたしは、ちょっと散歩してくると、外に出ると、事務所からは電話ができないので、公衆電話に走った。そこから、支店長に電話を入れた。叱られることも頭を過ぎったが、それよりもなくなったことを黙っているわけにはゆかない。

一何だと？ 売上がなくなっている？ 勘違いではないんだな。そうか、ところで、おまえが鞆から離れたのはいつだ。

一はい、銭湯にみんなで行ったんですが、そのときぐらいです。

一全員で行ったのか、誰かいなかったか。

一そう云えば、高村が忘れ物をとってからと後で来ましたが。

一そうか、高村なんだな。

わたしは、高村が疑われると思い、彼を弁護するように云った。

一でも、鍵はかけてありましたし。

一鍵なんか、すぐに開けられるんだよ。まあいい、残金は明日送金しろ。それから、今週いっぱい、出張所は閉鎖する。いいか、土曜日までに事務所をたたむんだ。判ったな。

大変なことになった。まだ一年もいないのに、これからというときに、業務縮小だ。これからは、また何かセールスというとな古屋から走り、日帰りになるのかもしれない。

わたしは、部屋に戻り、金のことも閉鎖のことも口にしなかった。明日、みんなに話そう。ただ、水のような酒を無言で飲み続けていた。

不動産屋に申し入れし、電話は預かりとした。電気、水道と連絡し、市役所と県庁には挨拶に行った。突然いなくなるのではなく、体勢立て直してくる旨を説明してきた。

たたむときは早い。ものは創るときは時間がかかるが、壊すのは早いものだ。事務所の備品はそうなかった。もともとここにあったものだ。消耗品だけを箱に入れた。みんな黙々と作業をしていた。誰も驚かない。とうとう来るべき日が来たかという感じで、これで家に戻れるやつは、うまい飯にありつける。

殆どがゴミになった。使えるものだけを車に詰めるだけ詰めて、雪のすっかり解けた週末に、わたしたちは富山を撤退した。雪は高山にも降ったのか、残雪が道端に見えていた。わたしたちは雪の中を敗走する兵士の心境だった。

いい思い出は何ひとつとしてなかった。これからも、多分、ずっと後になっても、この北陸には来ることはないだろう。暗いイメージだけがいつまでも残り続けるだろう。

わたしは、ポケットに責任をとってやめるために、辞表を忍ばせていた。

第609話 旅行屋時代

十三

クリスマスも年越しも、ただ時間の経過だけで、無意識に見送っていた。何もしなければ何も起こらないまま一日は無駄に過ぎてゆく。

わたしは、行き先を見失った旅客だった。

一日、わたしは本を読んだり、書きものをしたりしていたが、どれも遅々として進まない。絹子は仕事だった。帰ってきてから、家事をするというのも大変だ。わたしが主夫をしてあいつの代わりをしなくてはならない。なにせ、失業者なんだから、大きな顔はできない。

わたしは、市場まで歩いて買物にも行った。料理は得意だった。絹子はわたしにこう殊勝にも云った。

「拓也、休みなさい。ずっと働いてきたんだから。いいんだよ。拓也のひとりやふたり、わたしが養ってあげる」

とは云うが、そう給与も貰っていないのに、二人分は出ない。少し休んだら、また仕事を探しにゆこう。いまは、すべてを放擲したくなる。何も意欲が湧かなかった。

わたしが辞表を出すまでもなく、富山から引き揚げて、一週間後に会社は倒産した。二回目の不渡りを出して、銀行取引停止処分になっていた。そんなことも、わたしたちの耳には聞こえてこない。

女子事務員たちはその前に解雇されていて、社員も半分に減っていた。コピー機や、車はリースだからさっさと引き下げにきた。残務整理もない。

高村は、支店長に呼ばれて、その前に依願退職扱いで会社を出されていた。警察沙汰だけは勘弁してやるということだった。あいつも可哀相な境涯で、肩を持つわけではないが、盗癖もあいつの貧しさからきていることだろうと、わたしは憎めなかった。

失業中に迎える正月は嬉しくともなんともない。絹子は、着物を着て、豊川稲荷に初詣に行こうと云い出し、沈むわたしをできるだけ外に連れ出そうとしていた。

豊川は名鉄で隣の市だからそう遠くない。着付け教室にも行ったという絹子はわたしも手伝ったが、着物を着るとまた違った雰囲気になった。もともと痩せているので、貧相に見える部分にはタオルを入れていたりした。

「ばってん、成人式のときに着たきりっちゃ」と、ところどころに長崎の言葉が見え隠れする。天気が頗るよく、日差しが温かい。こんな元旦もあるのだ。

わたしたちは、境内でおみくじを買い、甘酒を縁台に座って啜った。達磨売りの声が飛ぶ。のんびりとしている。すべてが眩しく明るかった。こうしてみると、平穩無事、何事もなかったかのようにだった。

病院も三が日は休みだ。久しぶりで夫婦ゆっくりとした時間が持てるのだ。と、思っていたら、元旦の夜にいきなり電話がくる。東京の姉からだった。

一急で悪いんだけど、明日、おまえたち休みだろう。家にいるんだろう。突然、お邪魔してもいいかな。

姉弟で一番、わたしは仲がいい。何でも話せる相手だ。
一いきなりって、明日来るのかい。いいよ。こっちは何も予定がないから。義兄と佳樹も一緒かい。

佳樹はまだ三歳になったばかりの甥だった。家族で一泊で来るらしい。このアパートは部屋がひとつ余分にあるからいくらでも泊まれる。名古屋駅に新幹線で到着するというから、明日はレンタカーを借りて迎えに出ようと、絹子と思わぬ来客を歓待する話しをしていた。

午前中の新幹線で姉一家はやってきた。

義兄は、何か顔を合わせるのに不都合な様子でそわそわしていた。気を使いすぎだ。こっこのほうが指名手配の犯人なのだから、本当は非難されるべきなのだ。

「元気そうで」と、義兄はぼそりと云った。

「なんだ、もっと零落れて、乞食でもしていると思ったら、裕福そうじゃないかい」と、姉もわざと明るく振舞う。

レンタカーで、折角名古屋に来た姉一家を犬山の明治村に連れて行くことにした。明治村は、各地の明治時代の建物を移設した公園になっている。正月二日でも、観光客はかなり訪れていた。三が日はどこも休みで閉まっているので、実際、行くところがない。

姉夫婦も、できるだけ平生を装って、失踪のことには触れないようにしているらしかった。話

題が常に明治の歴史に飛んだ。三歳の佳樹は、馬車に乗りたいというので、乗せてやった。茶店でお汁粉を食べたり、昔風のラムネを飲んだりする間も、今回、どうして訪ねてきたのか、急いでいた訪問の理由は出てこなかった。

高台から池が見下ろせた。その柵にもたれかかっていたとき、姉は話し出した。

「おまえ、青森に帰りなよ。家業が大変なんだ。店も閉めて、赤字らしいしさ」

わたしは、聞いていないふうにあらぬ方角を向いていた。

「みんな、もう何も思っていやしないよ。過ぎたことだし、もう籍も入っているんだし……。許すも許さないもないだろ。既成事実ってやつだ。おふくろなんか、毎日、おまえのことを心配してさ、墓参りを一日も欠かさなかったっていうんだ」

わたしは、見えないところでみんながわたしの安否を気遣ってくれたことに、判っているも衝撃を覚えていた。いまさらになって、大変な親不孝をしたという自責の念が蘇ってきた。

「二月にさ、親父の還暦のお祝いをやることになったんだ。それで、親戚がみんな集まるから、長男がいないとおかしく思うだろう。いい機会だから、帰りな。みんな喜ぶよ」

姉は、もう時効だとも云った。駆け落ちの時効は一年半か。こんな放蕩息子の帰還でも手放しで喜んでくれるというのか。わたしは、突然の展開に戸惑い、躊躇っていた。

明治村はすっかりと正月の雰囲気には飾りつけられていた。わたしたちは、そこの古風な食堂で、少し早い昼食にお節をいただいた。義兄だけが地酒をいただいた。

「いいのかな、何か悪いな、ぼくだけ」

姉は絹子に向いて、

「ねえ、これからも弟のことよろしく頼むね。これでも気が弱いから」

とまた姉弟でなければ知らない過去のことをべらべらと暴露する。みんな笑った。笑ったところで。絹子にも切り出した。

「青森に来ないかい。いいところだよ」

「ええ、多分、そうだと思っていました。わたしはただついて行くだけ。青森にはわたしの本家があるんです。母の兄が暮らしています」

姉は意外な顔をしていた。長崎から、網元だった家の長男は、漁船で立ち寄った青森で、知り合った地元の娘と駆け落ちをして、住みついてしまったという。長崎から墓も持ってきていた。それで何か、当初からわたしも縁を感じていた。

「決まりだよ」と、姉は勝手に帰るという方向に話しを進めていた。

「心配しないで、わたしが、何かあったら間に立つから」

そうもめることはないだろう。戻ることには誰も反対はしない。それは判っているのだが。

姉夫婦は、わたしたちのアパートに泊まった。

「なんだ、いい暮らししているね。わたしは、もっと悲惨な貧乏っぽい生活をしていると思っただよ」

家財道具はすべてこの二年でこつこつと買い揃えていった。蓄えもできた。近い将来に、この名古屋で、店を出すつもりであった。

姉たちは、家族会議でわたしを連れ戻すために使命を帯びてやってきたことは初めから判って

いた。

翌日、姉たちを名古屋駅に見送りに行った。

「二月に来るんだよ。青森へ。大丈夫かな？ また別の町に逃げるんじゃないだろうね」

姉は半分、信用していない云い方をした。新幹線が入線してきた。

「それじゃ、本当に、帰るんだよ」と、ダメ押しまでする。

「判ったよ。帰るから、親父にもそう云っておいて」

何か、まだ未練があるように、閉じたドアから顔をくっつけて見ていた姉。肉親のありがたさをしみじみと思った。

新幹線が走り去ってから、絹子は云った。

「帰りましょう。あなたの故郷へね」

いまだ答を出せないでいたわたしの気持ちがその一言で動いていた。

第610話 旅行屋時代

終章

わたしたちの車は、東名高速道を東京に向かって走っていた。車は中古のブルーボードを買った。岡崎のアパートは引き払い、荷物は今朝、運送屋のトラックに積んだ。

絹子の友人たちや、病院の看護婦たちが、昼に出発するわたしたちを外に出て見送った。

「手紙書いてね」「いつでも遊びに来てね」と、名残惜しそうに車の窓から握手するので、いつまでも車は出せなかった。

二月の末に、わたしたちは青森へと向かった。名古屋、岡崎、二年住んだ町だ。これからは、なかなか来ることもないだろう。

名古屋。そこは奇縁のある街であった。親父が若い頃、松坂屋デパートで働いていたことがある。洋菓子売っていたのだが、そのときの客と交際することになった。洋菓子を戦前に買う客はブルジョアだった。その娘もどこかの令嬢で、後で、交際がバレると、二人は生木を裂かれるようにして別れさせられたという。

北村家は貧しい田舎の煎餅屋だったし、食えないから、口減らしのために小学校より出ていない親父を丁稚奉公に出したのだ。身分が違いすぎた。駆け落ち寸前で捉まったという。そのことが後に親父の仕事へのバネになっていた。

親父は失敗したが、わたしはうまくやった。ただ、戦前といまでは恋愛に対する世間の考えが違う。本人同士より家が大事だった。

若い頃にそんな事件を起こした親父だから、今回のことは判ってくれると思った。

空は嘘のように晴れていた。わたしのような雪国育ちにとっては、二月が一番雪深く厳寒の暗い真冬だった。それが、毎日、雲ひとつない快晴で日差しも春のそれだった。

東京には夕方に着いた。その日は姉のマンションに泊まるつもりだった。板橋の常盤台。わたしたち姉弟が学生時代に住んでいたマンションにそのまま夫婦で暮らしていた。二人とも美大を

終わっていたから、フリーのデザイナーとして、自宅で仕事をしている。

義兄はわだかまりもなく、いつもの態度で迎えた。

「青森の義母さんから頼まれて、作戦をねった甲斐があった」と、手の内をバラしていた。家業が大変だというのは嘘であった。わたしたちを呼び戻すための方便なのだ。蕩児の帰宅を親はどう向かえるかという話になった。きっと泣いて喜ぶよ。親とはそんなものだ。と、姉は云う。おまえも早く子供でも作れば判るから。子供。一度、去年、わたしたちの間にいた薄幸の子は流産していた。そのことは、誰も知らないことだ。

姉夫婦は、親父の還暦祝のため、来週、青森に行くという。四十人くらいが集まり、ホテルを予約していた。その夜は、今後のことも含めて、酒をやりながら語らうことになる。

車は、東北自動車道を北へと走っていた。千キロを走っての帰郷だった。青森が近づくに従って、絹子は緊張して無口になっていった。やはり、両親と一緒に住むということは覚悟があることだ。それに、八十過ぎた祖母とその妹と婆さんが二人いる家に、妹まで小姑でいるところへ嫁に行くのだ。いままでのように二人きりというわけには行かない。

カーラジオからCMが流れていた。

一ふるさとに帰るのは旅とは云わない。

そのフレーズが気に入って、何度も反復していた。そうだろうか。行くだけが旅なのだろうか。

だんだんと北上するにつれて寒くなってゆく。まだ二月だ。どんよりと曇った天気、辺りを見渡せば、畑や山に雪も見えた。一応チェーンは持ってきたが、タイヤは夏タイヤだ。大丈夫か。予定では、夕方には青森の家に着くはずが、やがてもの凄い吹雪になってきた。車は時速四十キロののろのろ運転で、数珠繋ぎの渋滞だ。

そのうち、猛吹雪で、タイヤ交換していない車が高速にも積もり始めた雪に立ち往生していた。前方に黄色いランプが回転している。高速道路は封鎖された。全車両が一般国道にインターチェンジで下ろされた。

国道も渋滞していた。みんなそろそろと二十キロ以下で走っている。これでは真夜中どころか、朝になってしまう。まだ仙台を過ぎたばかりだった。あちこちで、接触、追突事故をやっている。視界がまるでできない吹雪に、路面は凍ってつるつるだった。わたしの車もハンドルはきかない。危ないから、路肩に寄って、チェーンを着けた。前途多難な予感がした。青森は遠い。帰るのを拒んでいるように遠い。

「あまり無理しないで、ね、ゆっくりと行こうよ」

絹子は、初めての雪の恐ろしさに怯えるような目を前方に向けていた。一瞬、前が真っ白になる。対向車のヘッドライトも見えない。

ラジオからジョーン・バエズの懐かしい歌が流れていた。DJの解説によると、バイロンの詩を歌にした、「もう放浪の旅はお終い」。いい歌だ。

ここまで来たら引き返せない。絹子はあの、手を取り合って、逃げた夏のときのように、わたしの手を握ってきた。

不老不死は古今東西、人間の求める究極の願望であるらしい。

中国の秦の始皇帝が、その妙薬を探させ、使いの徐福が日本まで来たという伝説がある。ようやく辿りついたのが和歌山県の南端熊野。そこでみつけたのが蜜柑だった。やがて、蜜柑は中国に渡り、果実のことを果子、つまり菓子としてそれが菓子の祖となる。棗などのドライフルーツが菓子の元祖なのだ。いまでも、和歌山にはその徐福を奉る神社があり、全国の菓子屋の親父たちが詣でるのだ。

平安時代の帝は、不老不死の妙薬を醍醐というチーズの一種に求めた。それが醍醐味となる。養老の滝も、いろんな伝説も、永遠の命ということを題材にしているものが多い。

実は、その研究は現代でもだいぶ進んでいて、もう少しで完成するところまで行っている。死なない人間を作ることでは、ロシアとアメリカが先行しているが、この日本でも密かに戦前から研究が進められて、ついに完成したのだった。

細胞が老化して、死滅するように遺伝子に情報が組み込まれているのだが、それを誤作動させる電子的処置により、細胞はいつまでも老化することなく、永遠にそのままの形で生き続けることが可能になった。

いままでは、なんらかの薬品ということでの生薬の研究が進められてきたが、科学者たちは、人間の若さには、個人差があることに着目していた。

気の持ちようで、若くなったり老けこんだりするのは何故かという心理学的研究が戦後、わが国でも盛んになり、それにゲノム解析が進むことにより、いよいよその老化のメカニズムが解明されることとなった。

日本のその道の権威であった藤堂教授は、当初から提唱してきた理論があまりにもSF的だと、学会から排斥され、彼は大学の研究室を追われるように去った。

その藤堂教授が、実は、密かな研究を自宅ですべてしていたのだった。六十近い教授の家族は、妻と息子夫婦と一歳になったばかりの孫と、九十になる母親と六人暮らした。自宅の庭を潰して、プレハブを建てると、そこに一日中閉じこもって実験が行われていた。

二十日鼠では成功していた。短命の鼠も、長生きしているし、ある時点で成長を止めて、いつまでも子鼠のまま生きていた。あとは、なんとか人間で実証したい。いつの時代の科学者、医学者も、人体実験はしたいが、そんな大変な実験だから他人ではできない。やはり、と、藤堂教授は夕食のときに、家族全員の顔を眺め回しながら、目が光っていた。

(家族をモルモットにしなければなるまいな)

まず、婆さんで験すことにした。

「ばあちゃんよ、不老長寿の療法が見つかったんだが。やってみないかい」と、教授が云うと、婆さんはケタケタと笑った。

「バカをお云いでないよ。何が不老だ。もう、老けているわいな。それに、これ以上長生きしてどうなる」と、まったくその気がないが、この先、寝たきりになられたら、家族は介護で大変だ

。いまの元気なうちに止めてしまったほうがいいだろうと、教授は婆さんを騙して、プレハブの中に連れこんだ。

そこには、巨大なコンピュータと、棺桶のような黒い箱がでんと置かれていた。箱には無数のコードが機械に結ばれていた。

「さあさ、この中に入るんだよ。きっと美しくなるから。じいさんたちにもてるぞ」

「嫌だよ、いまさらもてたところで、何もできないじゃないか」と、ばあさんはまだ何かをしようとする気はあるのか。ただ、この機械は、若返りではなかった。現時点で成長と老化を止めるだけなので、年はとらないが、人生を戻すことはできない。

機械にスイッチが入れられた。電流がながれ、ランプが点灯した。棺桶の中に入れられた婆さんは、最初にごちゃごちゃと騒いでいたが、静かになっていた。

そして、実験が終わると、婆さんの細胞を取って、検査してみた。実験はほぼ成功していた。「やったぞ、やはり人間でもできるのだ。ばあちゃんよ、これで、何百年も病気や事故で死なない限り、長生きできるぞ」

すると、婆さんは大変なショックを受けていた。

「おまえ、なんてことしてくれたんだい。わたしゃ、九十歳の老人のまま、これから何百年も生きなきゃならないんかい」

それはまさに地獄、この世という牢獄に無期懲役の刑を言い渡されたに等しい。ずっと年寄りのままでは、人生面白くもなんともない。

今度は、嫁が留守で、孫のお守りを頼まれたときに、赤ん坊で実験することにした。それも成功だった。後で、帰ってきた嫁にそのことを話すと、半狂乱になって泣き叫んだ。

「お義父さん、なんということをしたのよ。一生、わたしは赤ん坊の面倒を見なきゃいけないじゃない。子供の成長の楽しみもないし、子育てから解放されることもないなんて。それに、わたしだけがどんどん年とってゆくと、誰がこの子の面倒を見るのよ」

それもそうだと、教授は思った。

「それなら、あんたもこの機械に入りなさい。一生、いまの美貌と若さを保てるから」

それは、女心をなびかせた。女性の最大の希求はそれなのだから。嫁も納得して機械に入った。二十三歳で年齢が停止した。

それでは不公平だということで、会社から帰った息子も機械に入れた。最初は信じていない息子も、箱から出てきたら大変なことをしたという感じがした。

「ぼくも二十六歳で止まってしまおうだろう。ということは、これから何百年も働かなければならないなんて、タンタロスと一緒にじゃないか。それに、仲間はずれで出世してゆくのには、ぼくだけ取り残されていつまでも平じゃ仕様がな。これから大変な時代になるっていうじゃないか。ますます重税にあえぎ、戦争の危険にさらされ、住みにくい世の中になってゆくというのに、長生きはしたくないよ」

みんなは、教授の顔をぎろりとみつめた。

「そういう、おとうさんは、機械に入らないんですか」

みんな口を揃えて云った。

「そんな、それだけは勘弁してくれ。人生なんて八十年もあれば十分だ。五百年も千年も生きて

、退屈し、誰も知り合いも親戚もいなくなり、取り残されて淋しい時間を延々と過ごすなんて、生き地獄じゃないか」

教授は頭を下げて懇願した。

「ひ、酷い。そこまで判っていて、なんでこんな機械を発明したんだ。元に戻してくれよ」

「判った。リセットをするとまた元に戻るから」

そうして、全員がまた死ぬ体になった。長生きはしたくない。いまはそんな過酷な時代なのだ。

第612話 サランラップ

セロテープも商標だが、サランラップも商標だ。安く売っているラップは実に紛らわしい名前をつけている。それで、よく間違えて売り出しの目玉に使われたラップを買ってくる。

ところが、使ってみると、これがいつものようにすんなりと引っ張って出てこない。うまく切れない。途中で切れて、ぐちゃぐちゃになり、終いにはぺたりと巻ロールのほうにくっついて、どこが端っこか判らなくなる。

たかが、ラップと思っても、その端を探すのに、何分もかかり、電灯にかざして、ようやく見つけた端を爪で引っかくようにして出そうとすると、なんと、今度は縦に切れて、細長い切れ端がくるくると何回転もしてしまう。だんだんと頭に血が上ってくる。意地でもラップを使っていると、また端を探す。爪ではだけるようにして、ようやく見つけた端っこだ。今度は失敗しないぞと、そっと引っ張り出すのだが、なんと安物、素材が弱いのだ。途中で切れてしまうではないか。

「こんちくしょう」と、短気なわたしは歯軋りする。ラップにバカにされてたまるか。

今度は、包丁を出して、切れ目を入れてやる。ところが、深く切りすぎたようで、短く、使いものにならないラップが次々に出てくる。

「このやろう、人を馬鹿にしゃがって」と、ただ、同じことを繰り返すのは下等動物のするところだ。人間様はちゃんと頭を使う。セロテープを出してきて、それをくっつけて端を引っ張り出した。成功、成功とにんまり笑うのも最初だけ。ラップは、伸びて出てきたが、ジグザグの刃では切れない。普通なら、すっぱりと気持ちよく切れるはずが、伸びるだけで切れないのだ。手で切ろうとしてもダメ、いちいち鋏で切るほどのものでもない。ずるずるとただ長く伸びて、収集がつかなくなった。

「すっかり頭にきた。なんだ、こいつは、こうしてやる」と、わたしは、ついに切れて、出刃包丁でザクザクと穴を空けて、切り刻んでやった。はあはあ、と息だけが荒い。そして、まだ開けたばかりのラップをゴミ箱にぶつけるように捨ててやった。

「ざまあみろ」

わたしは、勝ち誇ったように云った。

「ラップの分際で生意気なんだよ。人間様をなめやがって、どうなるか判ったか」

わたしは、よく安いものを買って失敗をした。均一ショップに行くと、聞いたこともない怪しげなメーカーの事務用品なんか売っている。そこで買ってきたスティック糊。くっつけた端からはがれてくる。それは、なんとくっつかない糊だった。そうかと思うと、さっきのラップと同じで、セロテープも安いのはテープカッター一台で使っても、切れない。スルメのようにずるずるとただ伸びてくるだけ。ボールペンは先のボールがすぐ潰れて、書けない。ホッチキスの針なんかは、薄い紙を数枚重ねて綴じようとする、針の方が負けて曲がるのだ。

「てめえら、バカにするなよ。おれを誰だと思ってやがんでえ、古本屋の親父だぞ」

と、全然怖くない。

少し高くても、やはりメーカー品に限ると、粗製濫造、安かろう悪かろうには最近では手が伸びない。本来の役目を果たしていないものは、それこそ役立たずでどうしようもない。

ところで、わたしとラップの戦争は続いていた。またも、値段に騙されて買って来たなんとかラップのやろう、素直でなかった。育ちが悪い。絶対に駄目になっていない。どうしてすんなりと出てこないのだ。

わたしは、とうとう、メーカーに電話をしていた。

一あのなあ、おまえんとこのなあ、ラップがよう、おれのいうことを聞かないんだよな。ことごとく反抗しやがる。おれは客だよ。そんな客のいうことを聞かないようなラップを売りやがって、一体、おたくではどんな教育しているんだ。

これでも、わたしは声を押さえ、冷静に電話をしているようだが、どこかで言葉の端を噛み殺していた。

一はい、申し訳ございません。そのような場合にはですね、冷凍庫にお入れになり、少し冷やしますと端のほうめくれてきますが。

一なんだ、冷凍しろというのか、それならそうと、要冷凍とどうして書かないんだ。どこにも冷やしてお召し上がりくださいともなんとも書いていないぞ。

相手はただの事務の女の人だ。多分、その会社はどこか他国に作らせているのを輸入しているだけなのかもしれない。一番悪いやつは作っている工場の総責任者だ。そいつの顔をラップでぐるぐる巻きにしてやりたい。

わたしは、云われた通り、途中で切れたラップを冷凍庫で冷やした。確かに、冷えた頃に取り出すと、なんとなく端がみつきやすい。だが、だが、だが、引っ張り出したラップは肝心なところですっぱりと切れない。

「どぼじでば、ぎれだい。どぼじでぐでようが」

わたしは、食いしばった歯の間から、日本語とも思われぬ怒りを半殺しにした声を出した。

それでも、何をやってもラップのやつは、使いものにならないのだ。わたしは、とうとう爆発した。思いっきり、床に叩きつけた。足で踏みつけた。それでも怒りは収まらない。ブレンバスターをして八の字ガタメをし、包丁で切りつけ、それでもまだ足りなかった。

わたしは、ロープでラップを縛りつけると、表に出た。どこかの空き地に行くと、柵にロープの端をゆわえて、逃げられないようにし、

「いいか、待ってろよ、逃げようなんて考えるな。ぶっ殺してやるからな」

そうラップを脅かすと、走るように玩具店に行った。ありったけの花火を買い集め、そいつを空き地に運んだ。花火から火薬だけを取り出して、ラップが火薬で見えなくなるまで埋めると、わたしの殺意は高まってきた。もう誰にも止められない。ライターで直接火をつけた。

ドッカーン。

それから何時間、いや何日が経ったろうか。わたしは病院のベッドで意識を取り戻した。「それで、君は、その憎きラップを爆殺しようとして、火をつけたというんだね」わたしのベッドの傍で、警官と医師がわたしの話を聞いていた。

第613話 林語堂のお客たち

レモン

わたしが、林語堂の古本屋を開業したのが、平成元年の三月だった。それまでは、まるめろ文庫という名前で古本屋を三年くらいやっていた。浅虫温泉に居を構えていた根市さんの蔵書二万冊を買い入れて、林語堂を開店させた。

十五坪の書庫には「魚良文庫」と名づけられ、戦後すぐに肺病で亡くなった、版画家で、小説も書き残した根市良三さんが、戦前より集めに集めた良書がぎっしりとあったのだ。ただ、その目録を見ても、とてもわたしには買えない本ばかりだった。蔵書の管理は船水公明さんの息子さんやっていた。それは、彼から説明を受けて引き渡された。

根市さんとは親戚にあたる家が筋向いにあるというので、その家にも挨拶に行ってきた。たまたま当主が不在だった。その人も本が好きな人と聞いていた。

わたしは、書庫の半分の本を買った。多くの貴重な本は、すべて東京の老舗の古書店がさらっていった。わたしの財力ではとても買えない本ばかりがあった。それでも残りものにも福がある。

わたしは、なんという名前を店につけようかと思案していたが、まるめろの次はりんごだと決めていた。りんご堂では、果物屋と間違われるかなと、中国の作家でリベラリストの林語堂（リン・ユータン）から名前を取った。たまたま、林語堂の翻訳をしていたのが、弘前出身で翻訳家協会の会長も務めた佐藤亮一さんだった。何か、青森に縁があるような気がした。

開店してまもなく、背の高い、独特な目をした老人が、店を訪れた。わたしの名前を知っているように呼んだ。それから、老人は自分の姓を名乗った。わたしは、わざわざ浅虫からおいでいただいたと、お茶を勧めて、本の話をしていった。

その人は、本に囲まれているだけで、とても合わせな気分になるらしく、いつも少年のようなきらきらと光る視線で、遠慮もなく眺め回しているのだ。そんな顔を拝見していると、何かの本で、太宰治と並んで写真を撮っていた若いときのお顔が想像できた。太宰の本にもたびたび登場する人である。

少なくとも、太宰よりは美男子であった。女に関しては、太宰は負けていた。どこかエキゾチ

ックな外人のような風貌が、その人の才能と重なって、人間的魅力を光らせていたのだろう。

「たまに、うちに遊びにいらっしやい」と、云うので、

「はい、わたしも、そのうちに浅虫に家を建てるとつもりでいますので、土地を探しに行ったりしてきますから」

と、お伺いする約束をした。本の話が古本屋とするとということが、読書家にとっては憩いのひとときなのだ。

わたしが浅虫に住んでみたいと思うきっかけは、その温泉街に、知り合いも多く、本を売ったり買ったりすることで、貧しいときに助けられた人が多くいたということだ。

精神病院の石田先生、三国家さん、東奥館の平田さん、皆さんに世話になって、いままでなんとかやってこれた。浅虫は不思議なところで、文化人が住んでいるのが、どこか鎌倉に似ていた

。

海と山と谷戸のある浅虫に住みたいという夢は膨らむ一方だった。

わたしが、浅虫に家を建てて、引っ越してきたときから、その人の家まで歩いてゆける距離になった。うちの子供たちが通う小学校のすぐ手前に家があった。何かと店に電話もきた。年に一度は蔵書をうちに売り払った。

その人の家の中は、ゴミひとつ落ちていない綺麗な部屋だが、本も大切に綺麗に仕舞っていた。奥さんの入れる紅茶を飲みながら、わたしは時の経つのも忘れて本の話に夢中になった。何か、その人の前では太宰の太の字も出せない。それがなんなのか判らない。話してはいけないような気がしていた。

ただ、アトリエには決して入れない。何度もお邪魔しても、そこは聖域のような気がして、覗きたいとも何故か云えないでいた。その人は年も年だから、病気がちで、入退院を繰り返していた。

家や病院から出られないので、通販をしていたうちの古書目録が楽しみだと、いつも送っていた。

一いま、県病に入院しているのだが、本が読みたくなって。注文したいのだが。

と、病院からも電話が来たりした。

老人二人きりの家は淋しいのに違いない。たまにお邪魔すると長くなった。

それから、同じサークルに入り、文学の仲間と共に、寄り合いをするようになってからは、外でもお逢いするようになったが、それもここ二年は、外出もままならないのか。温泉街でたまに拝見する程度になってしまった。

わたしの店にはその人の描いた油絵のレモンがあったが、売れてしまった。以前、画廊をしていたので、売るのが商売だ。ただ、気に入った一枚の油絵だけは、売らずに、いまも我が家の玄関に飾ってある。

レモンの画伯として、文もたつ。絵描きは、味のある字を書き、味のある文章も書く。それがセンスとして文にも出てくるのだろうか。それにしてもよく本を読んだ方だった。

たまにどうしているかなと、気にはなっていた。今日、北の街の斎藤から電話があった。小館善四郎さんが亡くなったと。

爽やかな絵が一枚、レモンが転がっている静物が、視界のどこかに残っていた。

第614話 どこか自信のない若者たち

久野未知は、何につけてもおどおどして、言動がはっきりしない。二十一歳で専門学校生だが、コンプレックスの塊みたいな女の子だった。縁なしの細いメガネの奥から、小動物のような視線を辺りに這わせる。綺麗な顔をしているのだが、自分では男とは縁がない、もてないと思っているらしかった。

ストレートヘアで、前髪も垂らし、顔の半分を髪で隠している。髪とはベールの役目もする。自信のない人は額を隠すというが、未知も、髪をアップにする勇氣はない。

友達も少ない。誰とでも合わせるわけではないから、本当に気心の知れた人は数人よりいない。ただ、ケイタイのメールでは友達と称する見えない相手は何人かいたが、まさにパソコン、ケイタイが普及してからの申し子が未知だった。未知のような若者たちはいま増殖している。面と向かって話したり交際したりは苦手だが、文字なら相手に伝えられる。

それは、まさに、平安時代に逆戻りだった。顔を隠して見せない人に恋焦がれて、相聞歌をやりとりした実に奥ゆかしい時代と似ているのだ。

未知は控えめで、決してでしゃばることはない。ただ、自信のなさが言葉に出る。

そんな未知にも友達の紹介で、彼氏ができた。というより、見るに見かねて、友達が策を巡らして、無理やり学生でスポーツ万能な桜田健一郎をくっつけてしまった。彼の方は未知のそうした古風なくらいもの静かな性格が好きであった。未知も、積極的で明るい、自分とは性格が反対の健一郎を気に入っていた。二人は、どちらかということ、健一郎がリードする形での交際が始まっていた。

「いいね、君のその清楚な服装は。いまどきの子にしては珍しい」と、健一郎が未知とデートをしているときに、白い少し長めのスカートに無地の色もののブラウスを着ている未知を、どこかのお嬢様というふうに眩しそうに眺めていた。

「すみません」

未知の口癖で、すぐに謝る。

「どうして、もっと自信を持っていいのに」

「すみません」

「またすみませんだ」

「すみません」

何を云ってもすみませんだ。まあ、そんなところが健一郎は好きなのだが、この人はいい素材をしているのに勿体無い。きっと、いま流行りに髪をカールしたり、コンタクトにして服装も流行りでばっちり決めたら、男たちは振り向くだろう。ただ、そんな女の子は健一郎は嫌いだ

った。

いまの女の子だけではないが、全体に、自分の考えに自信のないのが、言葉として出ることがある。相手に同意を求めるような語尾上げ言葉も、頻繁に使われてどうしても気になる「そうじゃないですか」という言葉の陰にも、少しつつこんで返したら、どきりとして何も云えなくなるような自信のなさが窺えた。

未知と健一郎は週に一度、土曜日だけはどんなことがあっても優先して逢う約束をしていた。この週末も、二人でどこへ行こうかということになったが、未知は、「人のあまりいない静かなところがいい」と、云う。

「君は普通の女の子たちのように、渋谷とか行きたいとは思わないんだね」

「すみません」

「ウインドー・ショッピングも楽しいと思わないし、どこそこの店が美味しいと、グルメ志向でもないし」

「すみません」

「あのね、その『すみません』って使わないようにしようよ。これから会社に入っても、なんとなくイヤミだよ」

「すみません」

「ほら、また。いいかい、こうしようよ。今日は、絶対に何があってもいまから、そのすみませんは使わないこと。いいね、絶対だよ。使ったら、罰則で、君は今夜、ぼくと一夜を共にしなけりゃならない。約束だよ」

「す……、じゃなかった」

二人は笑いあった。

未知は自分の癖は気にしていた。なんとか直したいと思っていた。意識的に直してゆかないと、口癖というのは直らない。前の友達も、「あんたといるとイライラしてくるわ。そのすみませんってやめてくれる」と、未知から離れていった。あまり慇懃でも下手に出ても、嫌がる人は嫌がるのだ。もっと自分をストレートに表現したいのに、どうしても言葉がメールになってしまう。

健一郎との約束で、何か返事しようと思っても、言葉が詰まる。失語症のように会話ができなくなっていた。

「未知、肩からチカラを抜いて、もっと自然体でゆこうよ」

「す……」未知はぐっと言葉を飲みこんだ。まったく会話は成立していない。健一郎は面白がって内心にやにや笑っていた。

二人で公園の片隅にある静かなカフェテリアで、ランチを食べていた。健一郎のバイト代が入ったから、今日は映画も見ると、大盤振る舞いだった。いろんなカップルが、テーブルについて、土曜の午後の会話を楽しんでいた。そこにいる女の子の多くがタバコをくゆらしている。最近、男性の禁煙が増えたが、女性の喫煙者が増えたという。

健一郎は未知に訊いた。

「君はタバコはやらないの？」

すると、未知は答えた。

「すみません」

第615話 要 求

北都出版は地方の出版社では、中堅どころだった。出版不況といわれながらも堅実な経営をしてきた。それも西東隆之の経営手腕に負うところが大きい。

以前なら、本も売っていたから、県内の小説家でも、出せばそれなりに売れたから、二つ返事で引きうけた。初版も最低五百はさばけた。ところがここに来て、本が売れなくなると、すべて自費出版に切り換え、安請負をしなくなった。

毎日のように、いろんな人から、本を出したいと電話がくる。原稿用紙の束を事務所に持ち込む人が後を立たない。

「どうです。千二百枚あります。三年かけて書いた純文学です。わたしの半生を私小説にしたものです。単行本にしていただきたいのですが。いやいや、印税なんかありません。利益はすべて、おたくに差し上げますから、ただ、出版していただくだけでいいのです。どうです、いい話でしょう」

どこの誰だか判らないじいさんが、原稿用紙を風呂敷から出して、どっさりと西東の前に置いた。それだけで見る気もしない。ちらりと見ると、一行目からすでに誤字脱字。原稿用紙の書き方も知らない。

「失礼ですが、いまは小説は売れない時代です。うちとしては、よほどの方でない、こちらから出版依頼はしない方針になっています。まして、出版となると、採算がとれるのは、この街でも何人もおりません。すべて赤字で、持ち出しです。申し訳ございませんが、うちではできませんので」と、断ると、大概是怒り出す。

「読みもしないで、売れるか売れないかが、よく判るものだ。無礼ではないか」

「そんなに自信のある作品でしたら、新人賞にでも出してみたらいかがですか」

西東もやり返す。

実際、本にして書店に流しても、半分以上は返本だ。中には一割も売れないで戻ってくるものもある。どこの誰だか判らない人の半生の記録など、誰も読まないのだ。

同人仲間で、昔から文学を論じあってきた中船から電話がきた。

「おれよう、原稿用紙で八百枚の長編ミステリーを書いたんだ。おまえんところで、本にしてもらおうと思ってよ。」

中船の小説は毎度読んでいるから、だいたいの中身は判る。友達だからズバリと云ってやる。

「おまえが、印刷代全額出すというなら、話に乗ってもいいよ。」

「それじゃ、自費出版じゃねえか。おれがお金ないの知っているくせに。」

「とにかく、おまえのは全然売れないから。誰も読まないから。無駄なことはやめるんだな。」

西東は本当のことを直言した。

「冷たいやつだな。頼むよ。おれは、自分の書いた小説をできるだけ多くの人に読んでもらいたいんだよ。」

「いまは、大先生が出した本でも、義理で買ってゆく人が多いんだ。本当に最後まで読んでくれ」

ている人は何人もいないのが実情だ。中央から出した、作家先生の小説でも売れなくて余している時代にだよ、どうして無名のおまえの本を買うのか。友達として云っておく。やめなさい。一頼むよ。どうしたら読んでくれるか。

一だったら、いまは、この手よりないんだ。おまえだけに教えてやる。いいか、そこまでやらねば、本を読まない。活字離れで、本を読まなくなった人達が増えているからな。

西東は、どうしたら読んでもらえるか、中船にそっと教えた。

里村真理子は、人通りのない団地を夜更けて家路についていた。商店でもあればいいのだが、住宅街というのは実に静かで淋しい。真理子の靴音だけが響いている。その靴音に交じり合うように、別の靴音がぴたりとついてくる。男ものの靴音だった。真理子は少し小走りに急いだ。すると、後ろからつけてくる靴音も早くなった、真理子は駆けた。最近痴漢だけでなく、無意味にナイフで切りつけたり、引ったくりも増えたという。真理子が公園の角を曲がって、そっと、塀の陰から様子を窺うと、いきなり男の腕がむんずと真理子を捉まえた。

「声を出すな。これが何か判るか」

真理子は包丁をつきつけられて、その場に硬直した。

「ちょっと、そこの公園のベンチまで来てもらおうか」

男に命じられるままに真理子は抵抗することなく歩いた。

「おまえは、読書をするのか」と、男が訊いた。

「ええ、本は好きです」

「だったら、命が惜しかったら、いま、ここに座って、この原稿用紙の小説を読むんだ。判ったな」

「は、はい」

真理子は何がなんだか判らないけれど、金品や体が目的ではないことが判ってほっとした。でも、どこかおかしい男の要求が、逆に怖いと思った。へたをして殺されるよりはと、真剣に小説を読んだ。それは、ミステリーの好きな真理子にとって、いままで一番面白くない内容だった。あくびが出てくるが、かみ殺していた。我慢して読むことにした。

と、そこへ、パトロール中の警察官が二人、懐中電灯で照らして、叫んだ。

「おまえだな、最近ここいらに出没している原稿犯は」

真理子は男の手から逃れて警察官に保護された。男は警官にその場で逮捕された。

「おまえを読書強要罪で逮捕する」

哀れ、中船は、手錠をかけられて連行された。

「おれは、おれは、ただ、自分の小説を読んでもらいたかったんだよ。こうでもしないと、誰も読んでくれないから」

とうとう、泣き出していた。警官がパトカーに中船を乗せようとしたときだ。中船は手錠をかけている手で警官のピストルを奪った。そして、そのまま逃走した、手錠をかけているからと安心した隙をつかれた。

中船は、そのまま大きな家に飛びこんだ。騒ぎで玄関に出てきたその家の母親を拳銃で脅か

して、人質にした。追かけてきた警官は手も足も出せない状態になった。ケイタイで、本部に応援を要請した。中船は家の中に入ったまま、家族を人質に籠城するつもりなのだ。

まもなく、パトカーが数十台到着し、機動隊のバスもきた。救急車から、投光機を積んだ特殊車両まで家を包囲していた。上空ではヘリコプターが旋廻している。マスコミ各社が実況中継するために、中継車を並べていた。刑事がマイクで犯人に呼びかける。

「人質を解放しなさい。君の要求は何だ。できるだけことはする」

スパイナールたちが、いつでも狙撃できるように四方八方に配置されていた。二階の一室に家族が集められているようで、中船は、ベランダのガラスを割ると、カーテンの陰から、警官隊に向かって叫んだ。

「おれの原稿はパトカーの中にある。それを明日の新聞から連載しろ。勿論、全国版でだ。でなければ、住人がひとりずつ死ぬことになる。それから、大手出版社で、大至急、それを出版して売り出せ。テレビ各社は、本の宣伝をしろ。おれの要求は以上だ」

それをテレビの臨時ニュースで見ていた西東はおったまげた。

「あ、あいつ、おれの云った冗談をマジに受け止めやがって」

「いまはなあ、脅迫しかないんだ。本を読んでもらうにはよ。立て籠もり事件でも起こして、マスコミに小説を発表させるのよ。そうなったら、みんな読んでみるかと思うよ。」

第616話 情報断絶

新聞もテレビのニュースも見ない若者たちが増えた。新聞は見ても、芸能欄とテレビ番組表だけだ。政治、経済なんかはどうでもいい。最近では、暗いニュースばかりだから、三面記事も見ない。

選挙があるのも知らない若者が増えた。二十歳過ぎて、一度も選挙に行ったこともない。無関心で、世の中、どうなっても知ったことではない。

耳にはMDプレイヤーのヘッドホンをあてがい、一日中、アイドル歌手の歌を聞いているから、外の雑音いっさいが入らない。

本も読まない。勉強もしない。見るのはマンガ本にアダルト雑誌だけ。そして、自室に閉じ籠る時間が長い。部屋では、テレビゲームをしたり、パソコンでエロサイトを見たり、外ではケイタイでメールをやりとりしたりしていた。

彼らの耳は、歌より聞いていない。彼らの目は、モニターの画面より見ていない。内にいても外にいても、すべてが自分だけの世界に浸っていて、現実逃避をみんなしていた。それは良く思うと、現実を受け入れない抵抗にも見えるし、悪く思えば、諦観から無気力、無感覚まで亢進している病気だった。

一戸幸義も、仕事にあぶれ、就職浪人二年生だった。大学は出たが、二十四になって、浪人のだらけた生活に慣れてしまえば、もう働く意欲もなくなる。家にいれば、只飯が食えるし、親も小遣いはくれるので、学生気分の延長で、養ってもらえばいいと、ぐうたらな生活をしていた。

バイトをするわけでもないし、就職活動はとっくに諦めていた。

その日も、仲間の多くは社会人だから、つきあって遊ぶ相手もなく、彼女もいないので、ただ、街中をぶらぶらしていた。いつものように、耳にはヘッドホン、歩きながらもケイタイでメールを打っていた。幸義に日曜も平日もない。もう、曜日も日にちも関係のない生活をしていた。月も四季の移り変わりさえ、無縁のような連続した日々の中身は、ただ退屈と倦怠であった。

幸義は、ケイタイから目を初めて、通りに移すと、車がやたら渋滞していた。朝でも夕方でもない、昼間から、渋滞するなんて珍しいな、くらいにしか考えていなかった。

道路の混雑に比べて、歩道はまるで人通りがない。いつも寄る、書店に入ろうとした。店内はがらがらだ。客がこんなにもいない書店もはじめてだ。幸義が、店内を覗いているところへ、シャッター棒を持った店員が血相を変えて、やってきた。

「もう、閉店です」

と、云っているのも、音楽ががんがん鳴っているので聞こえない。がらがらとシャッターを下ろし始めたので、しぶしぶ外へ出た。

(なんだ、また棚卸しかなんかな。昼間から閉めるなんて)

どうせ、幸義は本を買うわけではない。金がないから、立ち読みで新刊のマンガ本をすべて読んでしまおうと思っていたに過ぎない。いつも、ここに来ると、二時間は経ってしまう。

それじゃ、と、古本屋のチェーン店に行くことにした。新刊がダメなら、古本の立ち読みで我慢しよう。それもいつものコースで、別に買うわけでもない。ところが、その店もシャッターを半分、下ろして、店員がなにやら、慌てて帰り支度を始めていた。

(なんだ、なんだ、ここもかよ。今日はついていないな。テレビで占いを見てこなかったが、今日の運勢はサイテーじゃないのか)

それでも、まだ、行くところはある。ファーストフード店だ。そこで、一番安いドリンクを頼み、マンガの週刊誌を見ることができると、商店街の横にあるハンバーガーショップに寄ると、すでに店は閉っていた。

おかしいなと、辺りを見まわすと、商店は軒並み閉っている。今日は何の日なのかなあ、と、ケイタイのカレンダーを見ても、別に特別の行事のある日でもなさそうだ。人気はまるでない。さっきまで渋滞していた道路も、いまは車がたまに、猛スピードで走り去るだけで、あれだけの車はどこに行ってしまったものか。街はいつのまにか、無人の街になっていたようだ。

幸義は、それでも、どこか自分の暇つぶしのための店があるはずだと、捜し歩いていた。

(そうだ、コンビニなら、年中無休で二十四時間営業だ。休むわけがない)

と、そこでマンガの只見をしようと、向かっていた。

ところが、そこも閉店だ。デパートもスーパーも、郊外型のレストランも、ガソリンスタンドもすべてが閉っている。

頭にきた幸義は、これじゃ、家に帰って、ゲームでもやっていた方がいいと、今日のところは帰ることにした。

家の玄関も鍵がかかっている。誰もいないようだ。幸義は、鍵を空けて、中に入った。何か、泥棒でも入ったように、廊下にいろんなものが散らばっている。両親の部屋もドアが開けっぱな

しで、タンスの引出しも開けてある。物色した跡がある。

「こ、これは空き巣に違いない。大変だ」と、幸義は、ケイタイから百十番した。ところが、おかしいことに通じない。ケイタイが壊れているのか、調子が悪いのかと、家の電話で、警察に連絡してみた。やはり通じない。家の中から洋服や、貴重品を持ち出した痕跡がある。それもかなり慌てていた感じだが、どうして鍵がかかっているのだろうか。窓ガラスも勝手口も、きっちりと閉じてあり開いてはいなかった。

（ということは、泥棒ではなく、親父とおふくろが何か持ち出したのかな。いや、おかしい、何かあったのだ）

幸義は、初めて、周りの異常に気づいた。ケイタイで、友人たちにかたっぱしに電話をしてみたが、ケイタイは、混んでいるので使えないようだった。二階の窓から外を見る。空に、かなり沢山のヘリコプターや飛行機が飛んでいる。そのくせ、地上には人もいなければ、車も走っていないなんて。

幸義は急に不安になってきた。

（何があったんだよ、何が）

いままで、あまりにも世間に無関心であった幸義も青くなって、ヘッドホンを耳から外した。すると、上空を旋回しているヘリコプターから、スピーカーで呼びかけている声が聞こえた。一まだ、残っている人がいますか。

幸義は、異変が起こったことに身震いした。焦って、テレビのスイッチを入れた。テレビだけは点いた。いきなり、ブラウン管に、原子力発電所が燃えている映像が入った。それを上空からジェット戦闘機が、消火弾を落として消そうとしていた。

テレビでは中継をしていた。アナウンサーが上ずった声で、何度も同じことを繰り返していた。

一今日、午前中に東北市の東にあります、原発がテロによって破壊されました。かなり強い放射性物質が飛散しております。東北三県の住民には避難勧告が出され、東北市はすでに退去は終了して、住民は残っていない模様です。もし、残っている方がおられましたら、すでに被曝していると思われます。国道四号線は、大渋滞しておりましたが、陸と海、空での人員輸送も夕方までには終わると思います。

（嘘だろう）

幸義は、窓を思いっきり開けて、立ち去るヘリコプターに、手を振って叫んだ。

「助けてくれ。ここに一人いるんだ。行かないでくれー」

と、急に幸義は眩暈と吐き気がしてきた。

（何なんだ。これは、何なんだ）

一半径、四百キロの避難勧告は発令されましたが、これからその難民を受け入れるところはあるのでしょうか。生活のための家屋と、食糧、寝具がかなり不足するものと思われます。五百万人の大移動は夜になっても続いており……

幸義の倒れた部屋でテレビだけがいつまでも喋っていた。

第617話 林語堂のお客たち

文学への覚醒

わたしが、詩を書くようになったのは、中学二年のときに、国語の先生をしていた、故長谷川太先生に授業で書かせられた詩と俳句が一席に選ばれたからだった。一席といってもクラス四十五人の中の話である。

それまでは、体育会系で、バスケットボール部のキャプテンもやっていて、朝晩の部活に忙しく、本も読む習慣はなかった。長谷川先生が、選んだ詩は忘れたが、俳句は覚えている。桜門の下森林鉄道曲がり入る

という野木和公園の観桜会のときにトロッコ鉄道を見て書いたものだった。先生は、情景が浮かび、堂々としたものだと言ったが、生徒たちは口々に不満を述べた。

「先生、五・七・五にはなっていないよ」

わたしは、クラスの中で大きくなったり小さくなったり身の置き所がなかった。

自分の性格は、誉められればすぐに乗るほうで、それから毎日、ノートに詩のようなものを書いていった。四十年近くも書いているのにいまだにウダツがあがらないのは、才能が乏しいためだが、それでもヘタの横好きでやめられないでいる。

父が洋菓子と喫茶をやっていて、店が文学者たちの溜まり場となっていた。秋田雨雀も来た。淡谷悠蔵さんは毎日のようにおいでになっていた。

父は社員教育をやるんだと、そのお客たちに先生を頼み、社員を集めて学校と呼び、講義をさせていた。当時は、中卒で来る人が多かったが、高校ぐらい出ていないと、と夜学にみんなを通わせた。それに加えて、社内の学校だ。当時を振り返って、OB社員たちは、眠かったことを笑って述懐する。

講師の先生たちは、宮川翠雨先生、吹田孤蓬先生、小野正文先生と、なんとも贅沢な学校であった。子供だったわたしは、その中をちょこまかと走り回ってよく叱られた。

小野先生は父の会社の社是・社訓を作った。三上強二先生の紹介であったと思う。その先生たちに赤ん坊のときに抱かれた写真まである。

わたしより、一番上の姉が、先生たちの感化を受けた。文学少女となり、本ばかり読んでいた。青森高校から國學院に進み、国文学を専攻していた。卒論は太宰治を取り上げ、小野先生にもだいぶご教授をいただいた。

この姉が間接的にわたしに文学の面白さを教えたのである。部屋が姉と一緒にあったので、いつもずらりと棚に並ぶ本をところどころ読んでいた。ところどころというのは、ガリバーにしても千夜一夜にしても、それが一流のポルノ文学であると思うほど、そんな個所がちらほらあったのだ。マセガキだったわたしは、そんなシーンばかり拾い読みして、ドキドキしていた。丹羽文雄、高見順などの小説からもそんなシーンだけを探して読んでいた。それが純文学であったと

は知るよしもない。思春期に入りかけた少年から見た大人の世界が文学の入口だった。

小野先生はなにかと口煩い方で、さすが先生だなと子供心にも思った。わたしの前歯が欠けていたのをじっと凝視して、どうも気にかかるらしく、

「君、その歯は治しなさい」と、わたしの顔を見るたびに忠告するのだった。

親父の永い友人だった小野先生が、わたしが後に古本屋をやることになったとき、息子が今度は何をしたのかと、店に覗きにきた。それが、先生がうちの店に来た最初であった。いつも、おいでになれば郷土出版物のところをご覧になる。先生にはベレー帽がよく似合った。

「君、安いのは結構だが、この本は安すぎるよ」

と、本がこれじゃ可哀相すぎると忠告もしてくださった。わたしは、それまで全本半額の店をやっていたので、戦前の古書など扱ったことはなかった。一般的なマンガ本や小説をただ、考えることなく半額で売ればよかったのである。その頃から全国的に流行った、いわゆるシロウトでもすぐに開店できる二分の一屋と呼ばれた店だった。

ところが、林語堂になってからは本格的な値段のつけかたで行くこととなったから、毎日が他店の古書目録を眺めながら、相場というものを勉強してゆく。古本はセリで落札され、市場というものもあり、需要と供給によって値段が決まる。上がることも下がることもあるわけで、その膨大な値ごろというものを覚えてゆくのは気が遠くなる。

本を仕分け分類するのも、大変な経験が必要だった。図書館の分類に則って、手にした本が東洋史に入るものか哲学思想に入るものか、本のタイトルを見ただけで、中に何が書かれているかズバリと判らなければならない。そして、著者は何者なのか、作家だけでなく、自然科学の学者から政治学者、主だった、各界の知識人、文化人の名前ぐらいは把握しておかなければならない。

先生に注意されて、はいはいと本の値段を吊り上げる。とんでもない世界に入ったものと、わたしは毎日が緊張の連続だった。にんまりと、嬉しそうにそそくさと買って行く客がいれば、きっとすごく安く売ったのだらうと、後悔やみしたりした。

小野正文先生がおいでになると、先生の著書、太宰治関係の本をわたしは密かに高くつけた。本人が見ると、自分の本が安くつけていたと、きっと機嫌が悪くなると、わたしは気を回した。

当時、わたしは詩の同人誌に参加していた。その同人誌を先生に差し上げようと、「先生、われわれの書いた同人誌ですが、読んでください」と、先生に云うと、意外な返事が返ってきた。

「誰か、読みたい人に上げてください。ぼくは読まないかもしれないから」

と、受け取らないのだ。先生は、その理由を述べた。毎日のように、郵便受けにあちこちから同人誌だけでなく、自費出版した本が送られてくる。それらの本で書斎だけでなく、書庫も溢れかえっているという。

「君に、本当はそれらの贈呈本を差し上げたいのだが、みんな献呈署名入りで、ぼくの名前が書いてあるから、出したとなると出何処が判ってしまうから、処分もできないんだ」

先生は、ご自分の研究や仕事のための本も読まなければならない。他に読みたい本が山とあるのに、読みたくもない本が送られてくる。忙しい人にとっては有難迷惑な話だ。だから、最初からきっぱりと冷たいようだが、断ったほうがいい。

理由を聞いて、わたしは納得した。以来、先生には送ることはしなかった。先生の学究と仕事の邪魔をすることになる。それは、立場が逆なら、同じことを思うだろう。

古本屋はいい商売だと思った。普段、話すことができない人達がふらりと入ってきて、お客という名の友人になったりする。獏さん、高木保さんもよくおいでになった。古書がびっしりと詰まった店、そこはわたしの書斎であり、教室であった。いろんな先生たちが無料で講義をして帰られる。

第618話 林語堂のお客たち

末路

その人は、いつも同じ格好をしていた。年のころは七十前のようなのだが、老人であること、乞食のような生活をしていること、その他に何も、その老人を表す言葉はなかった。

初めて見る人なら、振り向いて笑っただろうが、毎日見ている住民なら、もう気にする者はいない。老人は、どこかで拾った赤いバイク用のヘルメットをかぶり、真夏で暑いときでもアノラックを来て、何故かジーンズをはいて、スキーのストックを杖代わりにして歩いているのだ。遠くからでも、その老人であることが一目で判るほど、奇態な格好をしていた。しかも、ジーンズの前のファスナーはいつも開いていた。シャツの裾ははみ出て、服は穴だらけで垢で黒ずんでいた。眼鏡をしているときもあったが、レンズが片一方なかった。それに、フレームが壊れていて、輪ゴムで耳にあてがっていた。

歩くときは、十センチずつ小股で歩く。脳梗塞をやったことがあるのか。下半身が不自由そうであった。不精髭の顔は、いつも泣き出しそうな哀れみをいっぱい湛えていた。

肩から、いつもポロポロのショルダーバッグを下げていた。少しづつ、少しづつ歩いてくるのだが、毎日、外でみかけるから、歩けるだけ元気だったのだ。

その格好で、毎日のようにわたしの経営する古本屋にやってくる。赤ヘルじいさんが来るとすぐに判る。入口からもの凄い異臭が漂ってくるのだ。古本も嫌いな人には埃とカビ臭い匂いがするのだが、じいさんののは、長年、風呂に入っていない匂いだった。じいさんが入ってくるのを匂いで察すると、わたしは黙って窓を開けた。他の客は嫌がって店から出てゆくほどだった。わたしは、店内にスプレーまで撒いた。どんな人でも本を買ってくれるのは立派なお客だ。わたしは、慣れたから嫌な顔はしない。余計なことだが、一度、そのじいさんの服を全部脱がせて、体を洗ってやりたい。そして、新しい服を着せてやりたいものだと、肉親でもない人のことを思っていた。

そのじいさんのことが、新聞の投書欄に出ていた。ある高校生の投書だ。図書館で、自習をしていると、そのじいさんが隣に座ったら、とても臭くて勉強ができない。図書館は誰でも利用できる公共施設だが、あんな人は排除すべきだと、女の子は書いていた。わたしはすぐにあのじいさんだと判った。その投書に対して、あるおばさんからの反論が載っていた。図書館はあなた方高校生だけのものではない。それに、どんな貧しい人でも単に匂うというだけで、排除せよ

とは、なんという思いやりのない思いあがった人でしょうと。

わたしは、笑った。そのおばさんは匂いを嗅いだことがないからそう云えるのだ。でも、わたしは、その赤ヘルじいさんのことを密かに尊敬していた。何故なら、買ってゆく本の質の高さにある。ただものではないという感じがしていた。

この商売をやるようになってから、売る本、買う本でその人間の人生観や、これまでどんな生活をし、何を考えてきたのか、本のタイトルで判るようになってきた。ただ、じいさんは、少ない年金暮らしなのか、そう小遣いもないから、店頭に出してある、五十円均一の特価本ばかり漁って買ってゆくのだ。毎日、午後になれば、じいさんは小股で歩いてくる。そして、一冊の本を手レジまでやってくる。財布を広げて、中から代金を取れという。口もあたってせいか、うまく云えないようだった。わたしは、小銭を五十円取ると、財布には何円も残っていなかった。その本をバッグに入れろと、「ううう」と、言葉にならない声を発して、わたしに伝えようとする。わたしは、いつものことだから、はいはいとバッグに本を入れた。空っぽのバッグだったが、酒の一合壺だけはいつも決まって入っていた。

じいさんの買ってゆく本は、戯曲や文学論、哲学などの難しい本から、政治思想、江戸軽文学と、多岐に渡っているが、本を選ぶセンスはよかった。

一体、あのじいさんは何者なのだろうか。わたしは、いつも気にかかっていた。他のお客が知っていて、わたしにそっと告げた。うちの店の近くの東北本線の線路際に家があるという。毎日、自宅から散歩に出るようにあちこちの古本屋を回っているのがじいさんの日課らしかった。そう言えば、わたしも仕入れで市内を車で走っていると、よくじいさんを見かけた。家から一里以上も離れたところを歩いていた。ゆっくりと進むから、普通の人よりは時間がかかるのだ。

何を食べて生きているのか判らないが、毎日よく歩き、いい本を一合の酒をちびりちびりとやりながら読んでいるじいさんの姿を思い浮かべた。

そのじいさんがある日からふつりと来なくなった。毎日来る人が来なくなると、どこか体の調子が悪いのだろうか。いろいろと心配までしてくる。

ひと月くらいしてから、親戚の小父が、ひょっこりと顔を出した。たまに店を手伝ってもらったりしていた。定年退職してからは、好きな演劇をやっていた。ドラマグループ青を主催している人だ。

「K Tが死んだそうだ」と、いきなり云いだした。小父に、

「そのK Tって誰でしたっけ」と、訊くと、

「ほら、いつも赤いヘルメットかぶってこの店にも来るだろう。昔のわれわれの仲間だったんだ。この前、街で行き逢って、昼から食堂に連れて行って、飯を食わせ、酒を飲ませてやったら、おいおいと泣いてなあ。あいつも、あそこまで零落れたからなあ。可哀相なやつさ」

そのとき、ようやく謎のじいさんの正体が判った。

戦後まもなく、空襲で焼け野原になった青森の街も復興してきた頃、映画館は夜やっていたが、昼間は空いているのを利用してチェーホフなどの演劇をやっていた。娯楽のない市民は、映画にも演劇にも詰め掛けた。テレビもない時代だった。

そのとき、松村慎三さんや、島三平さんらと劇団を運営し、創作の戯曲をK Tが書いて、かなりの評価を得たという。いまは世に出ない幻の名作をK Tは次々と書いていった。当時の売れっ

子の劇作家であった。本も出していた。

人間、どこでどう人生が狂うかしのれない。惜しまれる才能を自ら潰してしまった。あまりに純粹に自分の生き方と、芸を重ね過ぎた結果だった。

「いい本がずらりとあったよ。かなりの蔵書家だった。あの本は図書館が持ってゆくだろうし、身内も誰もいなかったから、家も土地も市役所で処分するんだろう」

生涯独身で身寄りがないじいさんは、天賦の才能を持っていたにもかかわらず、零落していた。東京に出て、もっと広い土俵で、自分を験していれば、いまごろは文学史上に名が残る劇作家になっていたに違いないと小父は云った。

「人は淋しき、か」

小父は、本棚の本のタイトルを読んでそう投げやりに云った。

第619話 図書室

どこの学校にも図書室はある。それが、最近は、子供たちが本を読まないから、どんどん利用率が減っているのが実情だ。

遥高校でも空いた教室を一室、図書室にしていた。どこの高校でも教室は年々空いてくる。子供の数が減ってきているので、二十年前は一学年八クラスあった高校も半分の四クラスだ。

その頃は、まだテレビゲームもパソコンもケイタイもないから、本を読むということがひとつの娯楽でありえた。図書室は休み時間にはいつも満員で、図書係というのもいて、貸出しも多かった。それが、ここにきて、全く誰も借りないし、利用しなくなったので、図書係も自然となくなり、図書室は閉鎖状態になっていた。

学校の先生も最近は本を読まない。先生が読まないから生徒が読むわけがない。学校側としても、文部科学省の指導で、図書室はないといけないので、そのままにしておいたが、誰も入らないまま何年も経過していた。

遥高校に新生が入ってきた。先輩たちが、学校の中を案内していた。

「この、なんとなく陰気臭い部屋は何ですか？」と、新生が訊いた。

「ここはね、以前、図書室だったのよ」

「トショシツ？ それは何をするとところなの？」

先輩も利用したことがないから、その上の先輩から聞いた話を伝えた。」

「なんでも、本を読む部屋らしいの」

新生のひとりが、ドアを開けようとした。みんなは、やめた方がいいよと止めていた。なんとなく薄気味悪い。ドアは開かなかった。レールは車が錆付いているらしかった。

「開かないでしょう。たまにしか開けないもの。開かずの部屋って呼んでいるわ」

本はすでに封印されていた。

新生の明菜と五郎は、中学も一緒に仲がいい。二人とも、大のミステリーファンで、アニメのコナンから始まって、コナン・ドルイ、ポー、乱歩と少年少女向けから、やや大人の読み物に

入り始めていた。

この高校では、毎年、神隠しに遭う生徒がいるという噂を先輩から聞いた。

「去年は二人、今年に入ってから一人でしょう。ある日突然、この学校から消えてしまうのね。まあ、親たちは、最近流行りの友達欲しさの誘拐ではないかとか、拉致ではないかとか搜索願は出しているようだけど、みんなおかしいのよ。学生鞆や外履きは残して、忽然と消えているのね」

何かの犯罪絡みではないかと、警察も捜査しているが、全く足取りが掴めない。それで、いろいろと思い当たる節もあり、家出でかたづけられているという。

二人は放課後や、休み時間を利用して、行方不明になった人達の何か共通した特徴を列記してみようと、その同じクラスの先輩たちにあたってみた。

それで、得られた結論は、みんな好奇心の塊であったこと、ホラーものやサスペンスの本キチであったことだ。この学校の生徒は読書と無縁な人が圧倒的に多い。その中でマイノリティにあたる読書家たちが、毎年不思議と行方不明になっている。明菜と五郎もそうなる確率が高いことになる。

「みんな、どこに行ったと思う」明菜がノートに関係図を描いて、校舎の図面の上に重ね合わせていた。

「それは、本のあるところに決まっているだろ」

「本のあるところ？」二人同時に口を揃えて云った。

「よし、図書室だ」

ただ、訊くと封鎖されてはいるが、行方不明者が出たときだけは、警察も先生も一応、図書室も調べたという。ものすごい埃と蜘蛛の巣だらけで、とても人が隠れるという場所ではないという。

「考えてみれば、窓も本棚で塞がれている図書室は、真っ暗なわけでしょ。それに、あるとすれば本棚と閲覧のための机と椅子ぐらいでしょ。探すのもそうたいした時間はかからないし、第一、広さは普通の教室とおんなじなんだから」

「おまえ、懐中電灯は持ってきたか。よし、それじゃ、いまから行ってみようよ。ドアを開けるのにバリは用意してきたから」

二人は、放課後に、あまり生徒が近寄らない旧の校舎の二階の端にある図書室まで、行ってみた。十月も末になると、五時過ぎれば昏くなる。

五郎が、ドアを押し開ける。明菜が力任せに押した。すると、ギシギシと音が鳴り、ドアは人ひとりが通れるくらいに開いた。

「よし、おれから先に入る。懐中電灯を貸せ」

五郎は言うようにして図書室の中に入った。明菜もそれに続いた。中は真っ暗で、懐中電灯の光が吸い込まれるように届かない。

「おい、床は埃だらけと思ったら、砂じゃないのか」

「そうね、ざらざらしている。砂だわ」

尚もライトで何かが映るかと照らしてみたが、本棚も何もなさそうだ。砂の上をゆっくりとし

やがんで、二人は進んだ。明菜が怖くなって、後ろを振り向いた。

「ええ？ 嘘一。ドアがないわ。後ろも闇よ」

「そんなバカな」

五郎は今度は引き返した。まだ、図書室に入って、十メートルも進んでいないのに、引き返しても、一面の砂ばかり。空が群青に明けてゆく。二人とも、見えるはずのない空を見ていた。そして、白々と夜が明けてゆくと、周囲の情景がぼんやりと見えてくる。そこは起伏のある砂漠だった。

「どうしよう。わたしたち、悪い夢を見ているんだわ」

「ありえない。異空間にスリップするなんて。小説の世界だろう」

二人は砂の高くなった丘陵まで歩いていった。突然、地平線から太陽が昇る。辺りがはっきりとその姿を見せた。どこまでも続く砂漠の上に点々と墓石のようなものが砂から頭を出している。ひとつ目の石に五郎は手を触れて驚いた。

「こ、これはみんな本の形をしているぞ。何か書いてある。ロゼッタストーンのような。ナ、夏目漱石集だって？ 次の石は、モーパッサン集と彫られている」

二人とも、呆然と立ち尽していた。ここは本の墓場だったのだ。明菜は、足に何かが当たって、ぴくりと跳ねた。それは、白い人間の骨だった。行方不明の生徒のものかもしれない。

二人は寄り添うようにして砂漠の墓を進んだ。

「行ってみよう。何かの本で読んだよ。きっと、この先には知恵の川が流れているんだ」

「また、新入生が、今度は二人同時に行方不明だっていうじゃない」

「学校では、旧校舎を来月から取り壊すそうよ」

「わたし、本って陰気くさくて嫌い。あの図書室もなくなればさっぱりするわ」

生徒たちがひそひそと話している机の上にはすべてパソコンの端末モニターが組み込まれていた。

第620話 林語堂のお客たち

画家と読書

先の小館善四郎さんもそうだったが、絵描きで読書家は多い。何か不思議な感じがした。絵画は感性の部分で、脳の半分が関与するものだし、読書はまた別の半分が関与するもので、相容れないような気がしていた。

佐藤継雄さんも、高谷幹郎さんも大変な読書家だ。高谷さんは、たまに店においでになり、画集の半端のものを買ってゆく。教え子たちに上げてもいいし、切り取って、教材に使ってもいいと。

前は、青森にいたが、すっかりと八戸の人になってしまった、版画家の藤田健次さんも、いまでもうちの目録を送っているので必ず注文をくれる。青森から引っ越すときは、どっさりと貴重

な蔵書をくれていった。

牧良介さんが生きていたとき、わたしは彼と同じ小説の同人仲間だったが、その同人誌の挿絵を担当していたのが藤田健次さんだった。青森の職安にもいた。わたしが、昔の木造の古い職安に藤田さんを訪ねたとき、ちょうどニコヨンの仕事をしていた。その年でニコヨンが法律改正で長い歴史に幕をおろす。

「わたしもう定年だ。最後の仕事になったよ」と、感慨深げに話していた。いまの時代こそ、逆に失業対策としての日雇い業務は必要なのに、バブルの全盛期に、過去の遺物として処理されてしまった。

藤田健次さんの版画の個展をうちのギャラリーでやったことがある。津軽の方言シリーズ、民話、童画がいい味を出している。漫画も書く人で、児童文学研究会にも所属して、版画を通して青森の文化を発信していた。

ついこの前まで南部のミニコミ誌に発表していた自伝の連載を毎号、わたしに送ってきた。大変な筆力の方で、やはり本を読まれている方だなという気がした。

だいぶ前に、「看護婦の親父がんばる」が十万部のベストセラーになり、その原作に基づいて映画化もされて全国的に反響を呼んだ。いまでも、全国組織の看護婦の親父の会があるほどだ。奥さんが看護婦ということは、その本を読めば大変な苦労がある。赤ん坊を父親が育てなければならない。奥さんは夜勤に継ぐ夜勤で、ご飯支度から子供の世話まで旦那さんがしなければならない。

その看護婦の親父シリーズは何冊か中央で出版された。イラスト、マンガも藤田さん自身の作で、文も立つ、絵も立つと、器用な人であった。

青森で個展をやるというので、何か、奥さんともめたらしい。奥さんが、ギャラリーのオーナーが美人で、それに肩入れしているのではないかと、疑ったらしい。それで、わざわざ古本屋に奥さんを連れてきて、わたしに紹介をした。

「来週から、個展をやりますので、お世話になります」と、本人に云われた通りに挨拶すると、奥さんは安心して帰っていった。その間、僅か一分くらいであったろうか。わたしは内情が判らないのできょとんとしていたが、後で、ご本人から白状してもらって、笑った。看護婦さんは強いというのは、友人たちも結婚したのが二組いるから知っていた。気丈夫でなければ看護婦は務まらない。藤田さんは別の意味で大変だった。看護婦の親父さん、がんばってください。

「やあ」と、林語堂に入ってくるなり、手を挙げて気軽に挨拶するのが浜田正二先生。先生もかなりの読書家だ。浜田三兄弟といえば青森では知らない人はいない。芸術家兄弟だ。正二先生は油絵を描く。わたしは、チビのときから知っていた。というのも、いまもアトリエのある三内霊園の北口の自宅の隣が、わたしの祖父の畑だった。祖父は毎日、自転車で畑に通っていた。わたしら孫は、その収穫やら草取りやらを手伝わされた。四十数年前の頃の話だ。

畑仕事はいよいよやっていた。それで、ちょこちょこと逃げて、浜田先生のアトリエにお邪魔する。お菓子が貰えるのだ。そこに、若き浜田正二先生がいた。アトリエというオイルの匂いと、独特な空間を子供ながらに不思議な世界と思って見ていた。

いまでもこそ、住宅が貼りついて、すっかりと街中になってしまったが、その頃は、北口は、そんなに家が建っていなかった。じいさんの畑から八甲田山がすっきりと見え、辺りは葡萄畑と林

檜畑であった。その景観のいい畑の中に先生のアトリエが建っていた。三十代のまだ若かりし頃の先生をいまも思い出す。あれから四十数年、先生はいまもそこに住んで絵を描いておられる。

わたしが工芸ギャラリーを以前やっていたとき、浜田先生を訪ね、個展をうちでやってくれないかと頼んで断られたことがあった。後で、おふくろと先生が逢ったときに十年早いと話していたそうだ。焼物の展示している壁面で絵の個展というのは確かに失礼な話だと、後で思った。もっと画廊を発展させて、十年後には先生をまた訪ねようと思っていたが、三年でギャラリーの方は潰してしまった。かろうじて残った古本屋でわたしは、もう余計なことに手は出すまいと、ひとりでやっているが、浜田先生は、それから客としてうちの店に来ることになった。

知事の秘書をした福島常作さんも、かつてはご常連のお客さんであった。絵の方がお休みになると、歌を詠んだ。その本を求めにやってくる。そして、夥しい蔵書もたまに処分しなければ、だんだんと整理がつかなくなるようで、林語堂をご指名してくる。いい本がかなりあった。棟方志功、関野準一郎との交友もあったから、ひょっとして、その署名本がないかとワクワクして出かけた。八甲田山の未完成の絵が沢山自室に飾ってあったが、絵描きというのは、自分の描いたものが手元に残らないそうで、考えてみれば、淋しい稼業だ。そうしたエスキースやデッサンだけが残っている。

画家と作家は、本の装丁や挿絵で、交際し、互いに影響されることはあるだろう。林武も、東山魁夷も、司修も、安野光雅もみんないい随筆を書く。彫刻家の高田博厚は著作集まで出ていて、作家も舌を巻くほど本を読み、よく書いた。ペンと絵筆と両刀使い。

今日も、ひとり画家が店に来た。何かを探している。古本の中にモチーフを探しにくるのかも知れない。

第621話 コモンセンス

思春期の子供を取り扱うときは、危険物取扱の免許を持っていても危ない。恐る恐る触るのもいけない。かといって、むんずと掴まえて、暴力もどうか。

横山家でも、気難しい高校の娘と中学の息子を抱えていた。父親はもの分かりがいい優しいパパを演じていたが、母親はいつもヒス状態で叫んでいるという、どこにでもありそうな家庭だった。娘、息子二人はいままでも、虐めや登校拒否などいろいろとあった。喧嘩もして、父兄同士話し合ったこともあった。

学校から電話がくると、また何かやったなど、はらはらする場面はいくらでもあった。ただ、今度は違う。いきなり、夜に刑事がパトカーでやってきたから、何事かと家族全員が玄関に出てきた。

「お宅に、中学一年の昇一君がおりますか」

「はい、この子ですが、なにか」

「実は、今日、仲間とよその学校に集団で忍び込んで、遊んでいたわけですが、警備保障会社

から、侵入者ありと通報がありまして、別に盗難とかの被害はないのですが、ガラスが割られましたので、器物破損、家宅侵入とまあ、こんなふうになるわけでした」

優しいパパが青くなって、昇一に問い詰めた。

「おい、いまの本当か」

「うん、みんなで野球をやっていて、ボールが学校に飛び込んで、それを取ろうと、みんなして入ったんだけど、探検してみたくなかったから……」

と、ゆっくりと風呂に入り、いままさにビールを呑もうとしていた日曜日が、暗転した。

「とにかく、署までお子さんとお両親ともおいでいただけますか」

大変なことになった。とうとう警察沙汰になった。訊けば、七人くらいで入ったという。大家族が先に学校に集まり、校長先生から叱られるというより単に報告を受けた。だが、いつもPTAで見ている両親たちは、別に悪びれた様子もない。子供たちも、「それがどうかしたの?」という顔をしていた。みんな悪いことをするような子には見えない。昨日までランドセルを背負っていた可愛い顔をしている。ひとりひとはみんないい子なのだが、集団になると悪いことをする。警備会社のパトロール車が駆けつけたので、みんな蜘蛛の子を散らすようにして逃げたのはいいが、そこが子供のことだ。みんな、自転車からルックサックまでその辺に投げて逃げたから、自転車の登録番号から、全員の名前が判明した。

「逃げたから、悪いことをしているという気持ちはあったのだね」と、刑事が独り言のように云った。

警察署で、全員が事情聴取され、調書を書かれた。その間、母親たちは、ベンチでお喋りをする、ケイタイで遊んでいる。横山夫婦だけが、しゅんとなって項垂れていた。

「あら、奥さん、気にすることないわよ。うちは、兄貴のときもここへ来たし、いまの子はこれぐらいは普通なんだから。何よ、たかだか、ガラス壊して、学校で遊んだぐらいで、ばっかみたい」

そう、兄弟で警察の世話になった父兄がツラっと云うから、横山夫妻は啞然とした。

「所持品を検査しましたら、タバコとライターが出てきました。みんなで回し呑みしていたようです」

婦警さんの言葉にも、誰も動揺していない。中学生の喫煙は親公認なのか。やはり、ショックを受けているのは横山夫妻だけだった。

「奥さん、平気だって。そう深刻に考えなくとも。いまは、クラスの子で喫煙経験のない子のほうが少ないんだからさ」

警察署の取調室には、他校の生徒と親と、ずらりと列を作っていた。警察も毎日、いろんな少年犯罪があって、混みあっていた。何時間も待たされて、夜中になってしまう。

「あなた、どうして、昇一がこんなになってしまったのかしら。わたしの何がいけないの?」

「いや、おれが甘やかせすぎた。もっと、ビシビシとやっておけばよかったのだ」

また婦警さんから云いにくる。

「所持品の中から、テレクラのカードとコンドームが出てきました。皆さん、ケイタイは持っているようですね。それで連絡しあっていたようで」

それにも、父兄たちは平然としていた。横山夫婦だけが、かなり打ちのめされていた。

「奥さん、気にすることないのよ。いまは、それぐらい常識なんだから。隣のクラスじゃ、墮ろしたって噂もあるし、いまや性経験は中学からなのよ。コンドームだけはちゃんと持たせたほうがいいわね。うちの子には使い方はちゃんと教えてあるわよ」

その話に関いた口が塞がらない。子どもなら親も親だ。こんな、異常な事態をあたりまえという。横山夫妻は、世の中が狂ったのか、自分たちがおかしいのか、解らなくなっていた。

次々に警察署には少年少女たちが補導されてくる。

「るっせえーな。背中を押すんじゃねえや。このくそ婆あ」と、可愛い顔している女子中学生が、派手な服装で、ばっちり化粧して、婦警さんに連れてゆかれた。

明らかに、年齢を偽っての少女売春で摘発されたのだった。カツアゲ、無免許運転、ドラッグと、非行はいまや中学生が花盛りだ。学校側はすでに手に負えなくなっている。親からしてそうだから、家庭の躰、教育以前の問題だ。完全に少年たちの世界は荒廃していた。

集団万引で十人くらいが補導されてきた。

「まあ、可哀想に、万引くらい大目に見てあげればいいのに」「お店の人も、いまは警察に通報するんですってよ」「たかだか、万引ぐらいでねえ」と、奥さんたちが話している。その親たちも、実は万引非行世代なのだ。ただ、親の格好をしているだけで、昔は暴走族をしたとか、番を張っていたとかいうお姉さんたちだったのだ。

刑事たちも事務的で、てきぱきと調書を書いてゆく。「はい、次。はい、次」と、ずらりと並んだ取調室の前。ここだけは夜中まで繁盛していた。

横山夫妻は、学校に謝罪に訪れた。校長先生が笑いながら対応していた。

「いやあ、今度のこともそうですが、いままでもいろいろとありましてね。ご夫婦揃って謝りにおいでになったのは初めてです。顔も出さない親御さんが多いんですよ。はははは」

と、もう日常茶飯事になっていて、こんな小さな事件は笑い事なのだ。

すると、警報機が鳴った。廊下を先生たちがバタバタと走る足音がした。教頭先生が、顔を出す。

「校長、また放火ですわ。うちの生徒らしいんですが、逃げられました」

その騒動が治まる前に、今度は、校長室のガラス窓が割られ、大きな石が飛び込んできた。横山夫妻は驚いて、身をかがめた。校長だけが泰然自若としている。

「気にしないでくださいな。いつものことですから。はははは」

なんと、寛容な校長であろうかと、横山夫妻は感動していた。そこへ、今度は、背中にナイフの突き刺さった先生が、よろよろと校長室に入ってきた。

「生徒にやられたのか。おーい、教頭先生、救急車を呼んでくれ。まあ、毎日がこんな調子でして。気にしないでくださいな。さあさ、お茶が冷めますから、どうぞ、どうぞ」

横山夫妻はあまりの酷さにわなわなと震え始めた。怒りがこみ上げてきた。

「校長先生、こんなことが許されるんですか」

すると、校長、少しも慌てず、

「こんなことは常識ですよ、常識」

第622話 林語堂のお客たち

古本屋の恋

タイトルを見て、驚く人がいる。「鯉」の誤植ではないのかと。それほど、「恋」は古本屋には無縁というより似合わない。かつて、ドラマでも小説でも魚屋さんや古本屋が恋愛ものの主役抜擢されたことは皆無に等しいだろう。

だいたい、古本屋というのは、年寄りで、丸い黒縁の眼鏡越しに、万引していないかギロギロと見ているのが相場で、絵にならないのだ。わたしもそれを知るべきであった。

。

わたしには何年かブランクがあった。離婚してからひとりで子育てと店を切りまわしていた。友人たちは、みんなに紹介するとき、女房に逃げられたと必ず名前の前に定型句を置いた。わたしは、必ずその後否定して云ったものだ。

「いいえ、逃がしてやったんですよ」

負け惜しみだけでは気が済まないから、夜毎、子供たちが寝たあと、呑みにでかけて、遊んでやろうと思った時期もあった。

そんなときに、店にふらりとスタイルのいい、年のころは三十前か、少し憂いを秘めたような目をした美人が店に入ってきた。だいたい、古本屋というものは、美人に疎遠なもので、お客の九割は男性だ。残りの一割は婆さんと決まっている。女性は骨董品や古本の趣味を持つということが稀で、何故か古いもの、人の使ったものを嫌うのか。

それだから、掃き溜めに鶴のような絶世の美女が古本屋に入ってくると、ハレーションを起こし、一瞬幻惑される。とても、場違いで、古書と美女は、相容れないような気がした。まして、美女と古本屋の親父は、美女と野獣以下の感じがする。

恋というものは、何も、言葉で受け取るものでもない。一瞬で落ちることもある。美女が百人いても、そのどれにも感じるというわけではない。たった一人なのだ。好みというものもある。

「あのう、何か面白そうな本を読みたいんですが、お勧めってあるかしら」

なんと、その人はわたしに口を利いた。わたしの目はハートになっていたかどうか。

「は、はい。ど、どんな本がご希望ですか。小説でよろしいですか」

わたしの声は震えていた。

「ええ、最近、ちょっと考えることがありまして、生き方っていうと恥ずかしいんですが……」

そういう若い方が来るときもある。悩み、行き詰まり、何かにすぎるように本を開く。人に訊けないことは本に訊けである。

「でも、男と女じゃ、好みも違いますから。それに世代もありましてね。井上靖の初期短編『愛』というのも、じーんときますし、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』なんかは傑作ですね。それと、アポリネールの『一万一千本の鞭』とか」（あっ、いけね

え。SMものを勧めてしまった) わたしは、笑ってごまかした。

「それ、みんな戴きます」

わたしは、震える手で本を包んだ。代金を貰うときに、白く細い指に触れた。ドキリとする。

「ありがとう。面白かったら、また来ますから」

そう云って、意味ありげに首を傾げてわたしに微笑みかけて、その人はむさくるしい店から出ていった。

わたしは、その日一日、何かもやもやしたもののの中に浮かんでいた。女性に対してそんな淫らな、いや、胸のときめきを覚えたのは、結婚してからは初めてであった。わたしは、仕事が手につかなくなった。別のことをいろいろと想像して、ひとりにんまりと笑ったりしていた。

(あのう、今度、わたしと一日つきあっていただけませんか?)

(あなたのような年上の方が好きなんです。バツイチって格好いいんですよ。知らなかったんですか?)

うふふふ、とわたしはバカな思いを廻らしていた。「おじさん、このマンガくださいって、さっきから云っているのに」と、お客に叫ばれるまで。

二三日してから、またその名前の知らない彼女が店にやってきた。

「この前のアポリネールは面白かったわ。他に何かありませんか」

「それなら、団鬼六なんか、いけねえ……。どんな本がよろしいですか」

「そうねえ」その人の考える仕草がどこかいとけなく可愛らしかった。わたしはうっとり眺めていた。「愛についての本でお勧めがあれば……」と、羞恥むところがまたいい。

「それなら、モロワの『愛について』とか、少し古いですが、石川達三の『結婚の生態』とかは名著ですよ」

そんな恋愛について、結婚についての本を読むには少し年がっているようだが、その人はいま真剣にそういったことについて考えているのだ。時折、わたしを凝視める視線が何か云いたそうで、わたしはどぎまぎした。ひょっとして、わたしに対して何か特別の感情があるのではないか。あの、わたしを見る視線は普通ではない。

彼女は、週に二回はわたしの古本屋に立ち寄って、お喋りをして文庫本などを買い求めてゆくのだ。わたしは、いつも、抽斗にメモのように書いたラブレターを忍ばせていた。

一いつもあなたが来るのを楽しみにしていました。今度、食事でもいかがですか。

そんな短文だが、買ってゆく、本の中にそっと挟んで渡そうと思っていた。それがなかなかできないでいた。いつも未遂で終わるのだった。

その人は、初めて来たときより、だんだんと明るくなっていくようだった。わたしも仕事に張り合いができて、いつか、名前を訊こうと思っていたが、今日こそは口頭でデイトを申し込もうと、台詞まで考え、口の中で練習をしたりして待っていた。

彼女が夜になってやってきた。わたしは、はっとした。男性と一緒にだったのだ。彼女はいつにない笑顔で、わたしに男性を紹介した。

「うちの旦那です。こちら、いつも相談に乗っていただいた古本屋のおじさん」

わたしは、頭が真っ白になりながら挨拶していた。彼女はわたしに耳打ちした。

「おじさんの勧めてくれた本で、わたしたち夫婦、もう一度やり直すことにしたんです。ありがとう」

それで暗い顔して何か思い悩んでいたのだ。夫婦で仲良く本を選んでいた。わたしは、その横顔を忌々しそうに眺めながら、離婚についてとか、別れについての本を勧めるのだったと悔やんでいた。

やはり、古本屋のおじさんにハーレークイーンは似合わない。

第623話 林語堂のお客たち

少しは役に立っていると思いたい

日陰の商売の古本屋だが、これでも世の中の役に立っていることもある。そのひとつは、新聞記者の方々が資料を探しにやってくることだった。

記者たちは、どこに行けば、情報を得られるか、判っているのだ。中央紙の支局に転勤してきた記者は、その町のことはいっさい判らない。それで、早速、古本屋を捜して顔を出す。その郷土出版の本をあさるのだ。郷土の歴史から人物誌を知り、文化人などの関連も調べる。

朝日新聞社の記者は、まだ若い人が多く、林語堂の近くに支局があったから、夜にふらりとやってくる。

「何か、いい話はないですか」

以前、この店を取材した記者だ。どこそこの画家が個展をやっているとか、窯を開いたとかという情報を教えてやる。

デーリー東北の記者は、電話であれこれと資料を探してくれと云ってくる。連載に使うのだ。インターネットの古書検索で調べてあげるのも商売ではないが、サービスだ。インターネットをやるようになってからは、新聞社だけでなく、出版社からも頻繁に電話やメールが来るようになった。

そんな中で、Sさんは、八戸時代から、うちの店に顔を出していた。パイプとタバコの本を蒐集しているという。それは、新聞に関係なく、自分の趣味であったが、ほかに民芸、工芸関係の本も蒐集しているようで、おいでになると、その話に花が咲いた。Sさんは、文化部長までした人だ。

「本を処分したいから、今度、うちにいらっしやい」と、呼ばれることとなった。Sさんは青森にまた転勤で戻ってきていた。何か偉くなっていたようだ。

林語堂の店もようやく軌道に乗ってきた頃だった。わたしは、Sさんのお宅にお邪魔し

た。庭は綺麗に手入れしているが、簡素なものだった。Sさんもまた、本の話ができる相手 came ことで、蔵書の説明をいただいた。壁面には銅版画がかけられ、絵の方の趣味もよかった。広い家には誰もいないようであった。独り暮らしでも、趣味があるから気楽でいいのだろう。互いにバツイチでなんとなく話が合った。

ただ、Sさんの前の奥様はわたしの知人の近い親戚で、そちらの方からも話は聞いていたので、なんとなく合わせてみて、ひとり納得していた。

Sさんは中国に凝っていて、シルクロードには何回も行ってた。わたしに、大きな刺繍の入った織物を見せてくれた。

「これは、敦煌の先で求めたものだが、何か、思い当たりませんか？」

よく見るとそれは、津軽のこぎん刺そっくりの柄であった。

「そうですね。恐らく、向こうがルーツでしょう。実は、この布は、街道端で、婆さんがこの布の上に野菜を山ほど載せて売っていたんだ。野菜はどうでもよかったが、この布が欲しかった。そこで、婆さんに、その野菜を全部買うよと云ったんだ。ついては、何も包むものを持ってこなかった。その下に敷いてある布で包んでもらってゆきたいが、と交渉したら、喜んでいたので、代金を支払うと、野菜は重くて持てそうにないから、婆さんにみんなやるよと、この布だけを持ってきたんだ」

という話を、わたしはまるで中国奥地の民話でも聞いているように目を輝かせてきいた。

「今ね、津軽の文化と、中国の内モンゴルとの関連を調べているんだ。何か、とんでもない歴史の流れが判るかもしれない」

Sさんの持論はこうだ。もともとの土着した文化というものは、必ず伝播してきたもので、こぎん刺もオリジナルではないということ。日本独自の文化、生粋の文化は勿論あることはあるが、その原型は大陸にある。

本棚にもそんな本や図録、画集などがぎっしりと収まっている。文化部にいたときの、作家からの書簡や短冊、色紙の類もかなり所有していて、わたしは生唾を呑んだ。

「本は、黙っていれば、どんどん増えて行くんだね。どこかで整理をしなければならない」

そう云って、文学関係はもういいだろうと、惜しみなくどんどんと出した。澁澤龍彦の初版本はだいたいすべて揃っていた。その本の山を見ていて、わたしは支払い額を心配するほどだった。センスのいい本を持っていた。

「これは、ぼくの若いときに書いた詩集だ」と、古い本を見せてくれた。わたしが詩のサークルで書いているのを知っていて、それを見せたのだが、Sさんの意外な面を見た思いがした。通りで、文化欄に詩のページを割いてくれたと思った。自分で若いときに書いてきたから、理解があるのだ。

小説はもう読まない。それより面白いのは歴史だ。Sさんは思いを熱く語り、これから自分のやろうとしていることを話していた。

「君に、シルクロードに行ったときに持ってきた種をやろう。ルバーブというんだ。知っているだろう。ケーキにはアンゼリカって、緑の蔞の砂糖漬のようなのが付くだろう

。あれは、落じゃなく、ルバーブの砂糖漬がおいしいよ」

そう云って、庭に下りて、落のようだが、葉の形の違う、茎の赤い草を見せてくれた。「これは、ジャムにするとビタミンAもあって美味しいし、健康にもいい。茎を煮るんだ。葉も食べられるらしいが」

わたしは、その夢とロマンの種を貰い、貴重な蔵書を車に積んだ。

「そうそう、この前、東京の大市の目録で、弘前の明治の新聞、『茶太郎新聞』が出ていたから、会社を買わせたよ」

「わたしも電話したんですが、もう出たときいてがっかりしたんです。Sさんでしたか」
高い買い物だったらしいが、珍しい掘り出し物だった。陸羯南が中央で活躍していた頃、郷里弘前では、宮武外骨ばりの奇人がいて、かなり異色な新聞を出していた。それがごっそりとまとめて出たのに、目ざといSさんはわたしより先に新聞社に買わせていた。

その後、わが家の庭にはルバーブは生えてこなかった。シベリアの痩せ地でも成ると聞いたが、どうしたわけか、夢とロマンのおすそ分けは、わたしの庭ではついに成らなかった。

Sさんは偉くなりすぎたら、店に来なくなった。忙しいのだろう。わたしも、何か気がひけた。ただ、新聞紙面を賑わしている中国奥地の発掘調査は、団長がSさんであり、地元新聞社として、使命に燃えて取り組んでいるのに、陰ながら拍手を送っている。

第624話 アンケート

宮内さんは毎度、新聞やテレビの調査にはイライラしていた。

一全国の千七百世帯に電話でアンケートを取った結果、内閣支持率が若干上がりました。六十五パーセントが支持をすると答えています。その内訳ですが、支持すると答えた人のうち、四十一パーセントの人が、この内閣がなんとなくよさそうだから、二十七パーセントの人が、期待が持てそうだから……。

「おい、テレビを消せ。聞きたくもない、くそ。いつもいつも同じ質問ばかりしやがって」

宮内さんは、晩御飯を食べながら、奥さんにテレビを消させた。

「だって、あなた、質問の内容がいつも同じだから、そこから選ぶしかないでしょう」

「まさに愚問だっていうの。他の質問がないのか。おれなら、こう質問するね。」

支持する理由

- 一、財界と癒着して日本経済を裏で支えているから。
- 二、難しい言葉でぬらりくらりと頭が回るから。

三、辞めろといってもしぶとくてなかなか辞めない根性があるから。

四、もうどうでもいいからヤケクソで。

なんてな」

奥さんは呆れて、

「じゃ、支持しない理由はどういう質問をするのよ」

「それは、こうだ。

一、アホばかりいるから。

二、バカばかりいるから。

三、アホでもバカでもないが、お利口でもないから」

「あのね、アホとバカって同じじゃないのさ」

「アホとバカは違うんだぞ。おまえ、知らなかったのか。関東で、バカって云うと、愛嬌があるが、関西でバカって云ってみろ。大抵の人は怒るよ。逆に、関西ではアホちゃうかという、愛嬌があるんだが、関東でアホという、本当のアホのことなんだ」

「でも、それって、差別用語にならないかしら。公的機関では使えない言葉よ」

「それなら、アホはやめて、おつむがあまりよろしくないと思ってもいいが」

選挙の前になれば、マスコミも支持率調査にやっきとなって、デカデカと新聞に載せる。あれは、選挙違反なのではないか。人間の心理というのは、いや、日本人の心理というものは、流行を追ったり、声の大きいものに従ったり、流れに流されやすいものだから、実際は気分ですりすりするだけのことで、本当に信念を持って支持するという理由を適格に述べられる人は少ないのだ。宮内さんは、そのところが癪に障る。単純なアンケートだけで日本の政治が動いているのを嘆かわしく思っていた。

中学の娘が学校からアンケートを持ってきた。

「お母さん、これ、明日提出しなければならないから、書いてー」

「書くのはお母さんは苦手だから、みんなお父さんに書いてもらいなさいって云っているでしょう」

「じゃ、お父さんで我慢してあげる」

「なんだと、お父さんは我が家の論説委員なんだ。家説は全部お父さんが書くことになっているんだぞ」と、宮内さんは威張っていた。

「どれどれ、お子さんを進学させるとすれば、どこの高校に入れたいですか。将来は何になってもらいたいですか、だと？ バカにするな。子供の進路は子供が決めろだ。親なんか口挟むことはない。将来の夢も、子供自身が持つべきで、こんな質問を親にするなー」

と、宮内さんは、また怒った。よく怒る人で、世の中のおかしいことには目を瞑らない人だった。おかしいことはおかしいと云う。

アンケートはすべて○×式が多く、よい、ふつう、悪いの三段階方式が多い。性格でどちらともいえないとか、普通というのに○をつけたがる人もいる。決断力のない人だ。なんでも調子よく、はいに○をつけたがる人もいる。さらに五段階となっても、どうせ、よい、と普通の間、ややよいが入るだけだ。余計、曖昧な日本のわたしを作るだ

けなのだ。そういう質問を考えるやつらにアンケートをとってやらねばと、宮内さんは日頃から思っていた。

ということで、宮内さんは大のアンケート嫌いで、街頭でも断る、家庭訪問でも断る。何の意味があるんだと、いつもぷりぷりと怒っていた。なんとなれば、アンケートほど信用のおけないものはないからだ。内閣支持率が一番いい例だ。わずか、数日で、こころ結果が変わる。あっちへ行ったり、こっちへ着いたり、ふらふらしているやつらの実に多いこと。そんな人達は初めから思想も何もないのだ。ただ、雰囲気だけで動くだけのデラシネだ。

宮内さんの家に、年越しに紅白歌合戦をテレビで見ているところへ、視聴率調査の電話がかかってきた。全国の電話帳からランダムに抽出した中に、宮内さんの電話番号が入っていた。入ったからといって、別に何も当たるわけでもない。めでたくもなんともないのだが、アンケート嫌いな宮内さんの家にかかってきたから大変だ。

一突然で申し訳ございません。テレビの視聴率調査でございます。ただいま、どこのチャンネルをご覧になっておりますでしょうか。

電話に出たのが宮内さんだ。かちんときたが、このまま、切っても面白くない。受話器を手で覆って、奥さんにそっと云った。

「おい、教育テレビにチャンネルを変えろ」

せっかくみんなして、紅白を見ていたのに、娘が教育テレビに変えた。向こうでは静かに白鳥の湖のバレエが入っていた。

一はい、ただいま白鳥の湖を見えています。

すると、相手の女性はかなり動揺して、また聞き直した。

一ええ？ いま何とおっしゃいましたか。

一ですから、白鳥の湖を見ているんです。

一はあ、教育テレビですね。

相手の女性は驚きと失望で、声のトーンがダウンしていた。

「やった、やったぞ。これで、年越しのテレビ視聴率を〇・五パーセントは狂わせてやった」

と、どうでもいいことに宮内さんは小躍りするのだった。

第625話 買物戦争

「問題はよ、あなたの月給が下がったってことなの。いいこと、いままでは、ベアもあったし、手当も増えた。それは、昔は公務員っていったら、安月給の見本みたいなものだったでしょ。わたしたちの新婚当時は爪に火をとぼして頑張って、マイホームもローンで買ったし、子供たちもようやく高校まで上げるまでいったわ。きちんきちんと決

まった額で毎月生活しなければならなかったからよ。それが、ここにきて、財政赤字で、民間との差がついたから給与を減らすですって？ 昔はどうなのよ。あなたの同期はみんな銀行や証券会社、生保に行った友達は、高級取りで、うちが一番質素儉約の暮らしだったじゃない。公務員はいまこそ安定しているかもしれないけど、かつては一番貧しかった。わたしが、あなたと結婚するときも、うちの親戚の叔母は云ったわ、なんだ、公務員の方って。それが、いまは、月給泥棒みたいに云われて。だいたい、政府にしても知事にしても、みんな政策の失敗でこうなったのを、どうして、わたしたちの生活を犠牲にして償還しなければならないのよ。わたしはね、毎日、どんな思いで儉約生活していると思う？ あなたの月給が月に五万も減額されるのよ。その分をどこかでやりくりしなければならないから、専業主婦といたしましては、一円でも安いものと、毎日、あっちのスーパー、こっちのスーパーと走り回って、家計を浮かせるための戦争をしているの。女はただ家において、あなただけ働いているわけじゃないのよ。月々いただく生活費を堅実に使うための努力よね。今日だって、先着五十名様のお砂糖一キロ五十円を狙って、朝からスーパードラッグへ並んだの。それから、日曜日はスーパー藤原じゃ、卵が十個入が三十八円でしょ。お一人様一パックだから、わたしはね、レジの周りでうろろしている他人の子供に馴れ馴れしく話しかけて、さも、自分の子供のようにみだてて、二パックも買ってきたのよ。日曜は、そのスーパーは野菜が半額なの。モノは悪いけどね、その日のうちにやっつけてしまえば、あんな安い買物はないわ。天候不順で野菜は全般に高いんだけど、カボチャは中玉で五十円でしょ。レタスが六十円、キャベツはお一人様三個までひとつ三十円よ。台風で落ちたリンゴも少しキズがあるけどジョナゴールドで三十円。多分、市場でセリ落すのに、そこのバイヤーさんは、二級品を狙うのね。どこのスーパーも手を出さない、曲がった胡瓜だとか、へたった野菜を安く落して、安く売る。それも商法なのよね。こっちだって、トマトが高いから、安いときにまとめて買って、冷凍しておくの。ほうれん草でも三束で百円よ。それも、帰ってからすぐにゆがいて、冷凍しておくの。何か、藤原の宣伝しているみたいだけど、わたしは、別にそこからお金貰っているわけではないのよ。でもね、そのスーパーは、生鮮食品は安いよ。アメリカ産の牛ロースがグラム八十円とか、生のマグロのお刺身もグラム二百円しないの。秋刀魚なんか活きのいいのが三匹たったの百円よ。それに大根一本九十円でしょう。家族四人で大根おろしで秋刀魚食べても二百円からお釣りがくる。だけど、そのスーパーはインスタント食品や調味料、洋風のものが高いのね。そこで、今度はベニーマートへ走るのよ。日配ものはそこは安い。納豆なんか三段で六十八円でしょ。牛乳は二本で三百円しないの。お米もササニシキって書いているけど、怪しいけど十キロニクウパでしょ。お弁当に入れる冷凍食品なんか、あなた、全品四割引よ。嬉しいじゃない。津軽三年白こし味噌が一キロニクウパでしょ。トイレトペーパーは一八ロールで三百円以下なのよ。でもね、その近くのジャスコも負けていないわ。タイムサービスがあるのよ。二時から、食パン焼きたて一斤七十円。四時から鰻の大きがなんと二百五十円。もう、日曜日はどこも乱戦模様ね。チラシとチラシで喧嘩して、

みんなあっちこっちと走り回る。忙しくて目が回りそうよ。お客の取り合いなのね。みんな賢い主婦は、決してついで買いはしないのよ。目玉商品、特価品だけを買おうと、さっさと次のスーパーへと移ってゆく。安いときに安いものを買って溜めておいて、我が家の食費の原価をコストダウンすることが、これからの厳しい時代に求められる知恵ね。今日だって、わたしの買って来た戦利品見てくれる。あなたのズボン下でしょ。そろそろ寒くなったから、これが五百円。靴下冬物百円均一。ナフキンが超特価二百円、まあこれはいいか。絹ごし豆腐一丁五十円これは安いわ。なめこ五十円、お醤油一リットル百円、子持ちししゃも百円、竹輪二パック百円、マーガリンお徳用百五十円、ティッシュ五箱でイチクッパ、サロンラップは五十円、ジャムーポンド百四十八円、生揚げ八十円、豚バラグラム七十八円、アイスクリームはどれでも五個でサンクッパ、カップラーメンどれでも六十八円と、もう広告の品という札めがけて突進するのよ。後はわき目もふらずに、スーパーへ白兵突撃ね。とくに、先着何名様には負けられないわ。タイムサービスも勝負よ。あなたは、仕事で役所に行っているから、日頃のわたしの苦勞が見えないのよ。毎日、一円、二円を浮かすために、どれほどの苦勞をしていると思っているのよ。あなたも職場では戦争でしょうけど、主婦もスーパーで毎日戦争なのよ。生き残りをかけているのよ。それなのに、家計が赤字だと、あなたは責める。経済観念のない女だとわたしを責める。わたし、こんなに一生懸命やっているのに」

「判った、判った。それで、おまえは、毎日、一円を浮かすために、タクシーでスーパーを回っているんだね」

第626話 先生

池田先生は、大学を卒業して、教職の資格を取ると、採用試験の狭き門も通った。小さい頃から先生になるのが夢であった。ようやくその夢が実現することになった。昔は、テレビドラマで金八先生ばかり見てきて、熱血教師に憧れてきた。

「よし、ぼくも生徒たちと砂浜を走る青春をするんだ」と、勇んで、新任の中学の校門を潜った。

池田先生は新学期から担任をすることになった。二年生を受け持つ。教頭先生から紹介されて、初めて壇上に立った。学生時代には研修で立ったことはあるが、今度は本物の先生だ。

「ぼくが、今度から君たちの担任を務めることになった池田信念です。名前の通り、信念を持って、新しい世紀の教育に取り組んでゆきたいと思います。運動は学生時代からやってきた陸上の長距離を指導することになりました。何かあったら、友達のように気軽に話してほしい」

すっきりとしたスポーツマンタイプの精悍なマスクに長身で、頼れる感じがした。先

生は燃えていた。その割りに生徒たちはしらけていた。

池田先生は国語の先生だ。あるクラスが最初の授業になった。

「さあ、伝記について今日から始めよう。みんな、福沢諭吉って知っているよな」

「はい、お札の人で一す」

だいたい、一番前の席があてやすいからいつも犠牲になる。ぽかんとしている男子に先生はあてた。

「さあ、福沢諭吉はどんな本を著したか。一番前の相澤、答えてみろ」

「フクザワユキチって誰ですか」ぽかんと口を開けて相澤君は訊いた。

「バカ、あんな有名な人も知らないのか」

「バカ？」「いま、確かにバカって云ったぞ」「うん、聞いた。バカと云ったね」「云った、云った」生徒たちがざわざわとうるさくなくなった。生徒のひとりが新聞社にケイタイで連絡していた。

「はい、いま、確かに生徒のことをバカって先生が云ったんです」

先生は何事があったのか判らない。ざわめく一人の女子の肩をぽんと軽く叩いて、

「みんな静かにしないか。一体、何があったというんだ」

すると、

「キヤー」と、たったいま肩に触れた女子生徒が悲鳴を上げた。

「H！」

「先生、触ったぞ。真美の肩に触った」「見たぞ」「見た、見た。セクハラ先生だ」

また別の生徒がケイタイでテレビ局に連絡していた。

すると、十分もしないうちに、テレビ局から新聞社各社が車で中学校に駆けつけた。教室にカメラが集まっていた。騒ぎで校長から他のクラスの先生、生徒たちでごった返していた。

「あなたですね。生徒をバカ呼ばわりした先生は」

「着任草々、女子生徒の体に触れたそうで」

ストロボがたかれ、テレビ局はクラスの生徒に事情まで聞いていた。

「な、何があったんですか。ぼくは、ただ、授業をしていただけなんです」

周りが、急に騒々しくなったので池田先生はおたおたしていた。自分が何をしたのか判らない。何も悪いことなんかしていない。

「ぼくが、何をしたっていうんだ」

池田先生は大声で叫んだ。すると、テレビ局のアナが、マイクを手に中継を始めた。

「自分が何をしたか判らない実に無神経な先生が増えました。これが驚くべき教育の現場の実態であります」

校長と教頭が頭を下げて、報道陣にお引取りを願った。

「池田先生も頭を下げて」と、頭を手で押さえるから、先生は頭にきた。

「どうして、ぼくが頭を下げなきゃなんのですか。何も悪いことはしていない。生徒にもそうぺこぺこしているから、なめられてしまうんだ」

先生たちが、ぞろぞろと何かを持ってきて、池田先生を取り囲んだ。

「何をするんですか」

池田先生は、他の先生方に上から下までいろんなものをつけられた。

「池田先生、慣れるまで、その格好で我慢してください。あなたも、慣れたら、そんなものだと思うようになります。それまでは、何があってもいけない。今の、バカというもの、生徒には云ってはならないんです。全国ニュースになり、停職処分になりますぞ」

池田先生は、目にはアイマスク、口にはさるぐつわ、手には分厚いスキー手袋、さらにその手を使えないように、ギブスをして首から吊る。女子生徒がストッキングを直すところを見ただけでエロ教師と週刊誌で叩かれた。だから、新米の先生には、暫く視界の狭くなるアイマスクをつけてもらう。余計なことを口走ることのないようにさるぐつわ。やたら叩いたり、触ったりしないように、両手も使えないようにする。

「ふおれじゃ、ぐうぎょうえにはらないじゃらいか」

池田先生の言葉を現代語訳すれば、

「これじゃ、授業にならないじゃないか」ということになる。

哀れ、池田先生は新任早々、自宅待機となった。池田先生は、いまだに何が起こったのか判らないでいた。教師という理想の職業が、がらがらと脆くも崩れてゆく音がしていた。

「先生と呼ばれるほどのバカでなして、このことだったのか」

池田先生はとんでもない仕事に就いたと後悔しはじめていた。先生も地に落ちた。ここまで酷いとは思わなかった。生徒が威張り、先生が小さくなっている。きっと、夕日をバックに砂浜を走るときは、先生の後ろを生徒たちがいっせいにナイフを持って走ってくるのだ。それが青春だった。

第627話 壁

男ひとり、大きな壁を背中に背負っていた。ロープで体に縛りつけていたが、持ち歩きやすいように、壁の下にはキャストがついている。それでも重たそうだった。

ヒッチハイクをして日本を無銭旅行しようとしていた大学院生のテッドは、初めて見たその男の奇天烈な格好に驚いて、つい声をかけてしまった。

「重そうですね。手伝いましょうか」

テッドの流暢な日本語が口から出た。すると、男は軽蔑したような目でテッドを見た。

「なんだ、あんたは。余計なお節介はやめてくれ。どうも、この町が初めてらしいな」男は無然と云う。背中にまるで自分自身を磔にする十字架を背負い、ビダドロローサの道をゴルゴダの丘まで歩かせられたキリストのように哀れな格好であったから、テッド

はつい手を貸してあげたくなる。男は周りを見ろと、視線をぐるりに送った。

見ると、道行く人たちが皆、背中に壁を背負って歩いているではないか。壁を持っていないのは、幼児だけだった。

「ど、どうして、こんなものをみんなは持ち歩いているんだ。一体、何に使うんだ。それとも、お祭りでもあるのか」

町を歩いて、その壁がどういうふうな使い方をしているか、次第にテッドには判ってきた。ある者は、壁にしきりと頭を打ち付けていた。

「おれは、バカだ。なんてことをしたんだ」と、男は、がんがんと頭を壁に打って後悔していた。

そうかと思うと、壁に向かってすすり泣いている若い女性がいた。それは嘆きの壁だった。壁に向かって、思念している男もいた。面壁九日目だそうだ。

家の中では、夫婦が口も利かないで間に壁を置いている。家と家との間に壁を置いたりしていた。いろんな使い方がある。

テッドは、その壁はどうして作ったのかと、通行人に訊いた。

「自分で作るやつもいるが、デパートでも売っている。とにかく、あまり話しかけないでくれ。おれは人とかかわりたくないんだ」と、その人もテッドとの間に持っていた壁を置いた。壁は、まさに亀の甲羅、ヤドカリの家と同じで、人間の携帯用防御壁なのだ。

テッドが、高校の前を過ぎようとする、校庭で、生徒たちが壁の製作に取り組んでいるところだった。それを指導している先生のところに行くとテッドは何気なく訊いた。

「高校生から壁を作るんですか？」

「いや、早い子は小学生からですね。ジュニア用も売っていますから。体に合わせて、だんだんと大きくしてゆかなければなりません」

「どうして、壁を作る必要があるんですか」

「それは、使った者でなければ判りません。いまは物騒な時代です。いつ車に跳ねられるか、ナイフで刺されるかもね。そんなときに役に立ちます。楯を持って歩いているようなものだから、非常な安心感があります。それが家の一部分ということで、家の中にある落ちつきもありますしね。何よりも、人間関係がぎくしゃくしている時代ですから、夫婦仲も虐めもシカトも上司とのトラブルも、いろんな場面でこれは役に立ちます。あなたも持ったほうがいいですよ」

テッドは、そう云われても、元より明るく社交的な性格だから、そんな壁なんか必要はないと思った。この町の人々はみんな内向的なんだろうかと思った。それにしても異常に病的になってきたのは、この町の人だけではなさそうだ。

テッドは、嘘か本当か、町の小さなデパートに行ってみた。確かに壁は衣料品コーナーで売っていた。それが、家具でもないし、建築材料、アウトドア用品でもない、衣料品の一部であったということが意外であった。

「壁って、洋服のひとつなんだ」

若い人たちはファッション性も重視して、柄ものやアイドルの写真プリントものなどが人気があると、売り場の販売員は云う。体力に応じて、厚いものから薄いものまで各種取り揃えている。テッドは、ひとつぼくも使ってみようかなと悪戯心から思った。

「あのう、ぼくにぴったりするものが欲しいんですが」

「あなたなら、力もありそうだし、背丈もありますから、若者向にこんなのはいかがですか」

と、見せてくれたのは、壁の端が崩れかけ、ビンテージ風に、まるでベルリンから古いものを壊して持ってきたような雰囲気、ペンキのスプレーで、フリーダムと横文字で書かれたりしている。

「外人さんが喜んで買ってゆくのに、こんなものもございますよ」

それは、和風のしっくい壁だった。周りがこげ茶色の木で組まれ、壁の一部が剥がれ落ち、そこから竹が見えていた。

「どうぞ、お似合いになるか、試着してみてください」

テッドはフィッティングルームに壁を背負って入り、鏡の前に立った。

「うん、なかなかイカスかもしれない」

テッドは不思議な安堵の気持ちに包まれた。そうか、人間は自己の殻だけでは自分自身を保身することができなくなってしまったんだ。それほど弱くなった自分を相手や世間から遮蔽するのに洋服感覚で持って歩ける壁は実に便利なのだ。

テッドは一着、壁を購入した。それはハイテクの壁だった。壁に穴が空いていて、そこから望遠鏡で覗けるようになっていた。そして、集音機がついていて、壁に耳をあけると、いろんな話し声も聞こえてくる。壁に目も耳もある便利なものだった。

テッドが町をそいつを背負いながら歩いていると、多くの人々がずるずると壁を背負って歩いている光景を目の当たりにした。それが異常と思える良識がまだテッドにはあった。

「これは、間違っている。絶対におかしい。それなのに、みんなは当たり前といったふうに疑問を感じないで生活している」

テッドは急に恥ずかしくなって、みんなのしている前で壁を壊した。踏みつけた壁は大きく割れた。そして、テッドは叫んでいた。

「ぼくには判らない。人間の気持ちが判らなくなってきた」

すると、そこに壁を背負った警官がやってきた。

「壁を壊してしまって。ほら、何も判らなくなっただろう。そんなときのために公共施設の壁があるから、そこに行きなさい」と、警官は頭が混乱しているテッドを壁のところ連れて行った。そこには、商売で首が回らなくなった経営者や、スランプに陥った画家、人生に失望した若者が壁にぶつかっていた。

「さあ、あんたも、この壁にぶつかっていなさい」

警官はテッドを壁に向かわせた。

人はもっとも愛するものを殺した。

笹本は今度発表した短編小説の最初の一行で母を殺していた。

それは、大きな反響を巻き起こしていた。まず、最初に小説の校正をやっていた北村が、騙された。仲間のそんな大事な不幸を見過ごした驚きで、失態を感じていた。毎朝、新聞の死亡広告欄は必ず見ているのに、見落としたかと。だが、その次の行から、それは、単なる小説の手法であるということを知ると、急にムラムラと怒りがこみ上げてきた。

騙されたのは北村だけではなく、その同人誌が印刷され、みんなに配布されてからも北村と同じく、その一行に目が釘付けになった仲間が多かった。

笹本は、親孝行な息子だった。世間でも評判の親思いで、寺山修司と同様の反意を芸術にまで高めようとするあまり、自らが最も望まないことを筆でやってのけること、それが実は、彼のもっと恐ろしい思い込みという精神状態にまで発展していたのを、彼自身が知らないでいた。

時に、小説家は自分を書きすぎる。書きすぎて、自分を追い詰める。書くように歩くのだ。

ある朝、笹本は寝覚めが悪かった。いい夢を見る日はなかったが、その日に限って、喪服の夢を見てしまった。それは、夢占いではいい夢と書かれていたが、そんな本は笹本は信じない。彼は、自分を責めていた。このままではいけない。行くところへ行かねば。

いつものことだった。彼は仕事場に赴くと、身辺整理をし始めていた。後のことは部下に頼んでいた。部下たちは、にやにやと笑いながら、

「了解しました。ゆっくりとおでかけください。お帰りは夕方ですか」

と、間の抜けた応答をしていた。みんな判っていることだった。笹本は実に悲しげな目をみんなに送っていた。おれが、帰るって？ どうして判るんだよ。これが見納めじゃないと誰が云いきるんだ。

車は、港の傍にある市の警察署に向かっていった。彼は、緊張して、動きがぎこちない。躊躇うようにして車を降りると、ゆっくりとした足取りで、警察署の二階に上がっていった。そこには、何人か笹本をよく知る刑事たちがいた。

笹本は、ドアのところに立ったまま、足がその先に進まない。知り合いの刑事や、婦警たちが、そんな笹本の様子を見て、声をかけた。

「なんだ、連絡くれたらよかったのに、飯ぐらい一緒に食べたのに」

時計は午後二時だった。刑事は応接室へと笹本を手招きした。お茶が運ばれた。

「で、今度は何だ」と、刑事はちらりと上目遣いで笹本を見た。

「じ、実は、おれ、おふくろを殺したんだ」

刑事はジッポでタバコに火をつけながら、目を細めて笹本を見た。

「そうか、それで自首してきたというわけか。どうせ、また小説だろう。まだ送ってこないからまだ読んでいない」

「いや、多分、本当なんだ」

笹本は真剣だった。刑事は鼻で笑っていた。

「確か、二ヶ月前も、ここに座って、奥さんを殺していた。四ヶ月前は古本屋のオヤジを絞め殺していた」

「……」

「現実と虚構の区別がつかなくなる。そうだな。それは、おまえの願望ではないことは知っているさ。おまえの駄タイズムだ」

文学部で同期だった刑事はそう解釈した。知事も文学部というこの地方は、文学部を卒業しても就職の先がない。教師か、マスコミの就職にあぶれたものは、畑違いの警官か知事にでもなるよりなかった。

「まあな、おまえは疲れているんだ。介護も大変だろう。もの書きの非情さというのは、冷徹なまでに活字にして、凝視めてゆかなくてはならんということか。だが、それが完結したときには、今度は、原稿用紙の上でのた打ち回るのは、おまえ自身だということをお忘れな。そのときは、もっと視点を変えるんだな」

刑事は茶を啜りながら、紫煙を目で追った。

「おれ、ノートパソコンを抱いて、先月、八丈島に行ってきたよ」

ようやく茶のぬくもりで我を取り戻した笹本は照れながらそう云った。

「違うだろう。おまえの行きたかったところは、その先じゃないのか」

さすが、刑事だった。人間の考える先も奥も読んでいる。

「その、先、か」

「そうだ。その先だよ。小笠原諸島のずっと南下した島だよ」

笹本は、読まれていたことに恥じらいを覚えていた。

だが、その島までは飛行機では行けなかった。飛行場がないのだ。定期便の船も週に一便よりなかった。だから、スケジュールが合わずに、仕方なく八丈島にした。

「それで、収穫はあったのか」

笹本は急に項垂れて、悪夢を掻き消そうと、頭を振り続けた。

「その島で、おれは、母をコロシタ」

「判った。判った。泣くな。後で読後感を電話してやるから。それで、用事はそれだけかい」

「いや、そうだ……」と、笹本は思い出したようにバックからお土産を取り出した。

「お土産を買ってきた」

刑事はほうと云った顔をした。

「珍しいな。おまえがお土産だとは」

笹本は、袋からそれを取り出すと、ビニールを破って中身まで出した。すると、どうだろう。警察署の建物全体に、大変な異臭が漂い始めた。

「バカ、おまえ、それはクサヤだろうが。こんなところで開けやがって」

誰かが、非情ベルまで押した。署員たちが、建物から退避する騒ぎとなった。いつのまにか防毒マスクをみんな着用していた。消防署の火事と同じ騒ぎで、パトカーが警察署を包囲した。

何か、特殊なガスを撒かれたと思っていた。知り合いの刑事は、ハンカチで口を覆いながら、窓を開けた。なんでもないというふうに手を振ってみせていた。

刑事はむせながら云った。

「だから、おまえは、八丈島で止まらずに、その先まで行けばよかったんだ。そうすればこんなお土産は買わずに済んだ」

笹本は、瞼の中にエメラルドの海の地図を置いていた。その航路の先にある母島に行き着けなかった自分を悔やみながら。

第629話 老 醜

老害という言葉も出てきた。長生きは公害と同じように使われるようになってきた。

人間、長生きするようになったら、昔は四十で隠居したものが、いまは九十でも現役だ。それは、人生五十年の昔とは違い、八十、九十まで寿命が延びたから、昔の倍近い歳相応の見方をしなければならない。昔の四十、今の七十というふうにある。定年も延長して、五十五歳から六十になり、やがて六十五になろうとしている。

周りを見れば、六十過ぎても、老人と呼べない人が沢山いる。ある人は還暦過ぎて、なおもギターを弾いてカントリーウエスタンをやっていたし、ある人はカラオケに行けば、おじいちゃんなのに、孫から聞いたMIMIや浜崎の歌を一生懸命覚えたのだろうか、アイドルの歌を歌っているのに驚かされる。ただ、ハマザキと云うところがよかったりする。

ケイタイも年寄りたちはかなり持っているし、八十過ぎてパソコンをやる人も珍しくはない。ひ孫みたいな中学生と八十過ぎのじいさんがメル友になっていると新聞に出ていた。

年寄りたちの恋愛も盛んで、ラブホテルは年寄りたちでいっぱいだとか。それはそうかもしれない。昔、カミナリ族と称する暴走族の草わけが、いまは六十過ぎているのだ。戦後初めての第一次ロックンロール世代も、すでに還暦は過ぎている。いまはない髪に、若い頃はポマードを塗ったくり、リーゼントにしたり、つぶっていた若者たちがおじいちゃんになるから、若いわけである。

それはそれでいいとしても、困った問題が起こっていた。

「わたしを辞めさせるだと？ 非礼ではないか。わたしは断乎辞めない」と、大正七年生まれの御年八十六歳におなりになろうとされていていせられる政治家たちが、政治家の定年制にいやいやをしているのだ。

「このままでは、大正議員は絶滅してしまう。なんとしてでもみんなで頑張っしてしがみつこうではないか」

と、とうとう大正生まれの議員たちで老人を大事にする会を作った。

若手議員たちは、頭を抱えていたが、ある議員から提案があった。

「国会の中にも絶滅寸前の年寄り議員のための特別保護地区を設けたらいかがでしょうか。堅牢な檻を作りまして、その中に隔離してしまうのです」

「そうですね。老いても影響力のある方たちばかりだ。まだ昔とった杵柄で、吼えたり、噛みついたりしますから」

ひとつの例外を認めると、「わたしも総理経験者だ」と、次々に出てくるから、国会の中にそんな年寄り議員たちがだんだんと増えてきた。

世の中が四人に一人の割合で老人を抱えるのが、国会では、もともと高齢化が進んでいるところだから、長寿化とともに議員の半分以上が七十を過ぎた年寄りで占められることとなった。定年制は失策で形骸化し、もう誰も守らない。

となれば、いろんな支障が出てくることになる。国会開催中に、居眠りする年寄りたち。徹夜国会ともなれば、体力も気力も使うのだ。寝ているのはまだいい。寝たきり国会議員が出発していた。議場にベッドが持ち込まれ、介護士たちが付き添い、点滴や尿の管をぶら下げた中風であたった議員たちが、腕を振り振り、「あうあう」と、言葉にならない発言をしていた。声が出るものはまだいい。すっかりと寝たきりで、ただ、ベッドに横たわり、国会に出席しているというだけで、時折、ごほごほと咳き込むだけ。咳が出るから出咳はしている。

「中曾根く一ん」と、議長が発言を求める。

中曾根君は知らん顔。隣の議員が手でこづいて教えてやるが、何分耳が遠い。

「はあ？ 何か」

「あのですね。議長から、経緯の説明をとご指名ですが」

「判らんね。何を云っているのか。さっぱりと」

「だから、今回の癒着疑惑でですね。説明をと」

「はあ？ 何着かって、天皇賞の結果かな。わたしは、だいぶ注ぎこんだがね」

「てめえ、耳くそほじくって、ちゃんと聞きやがれ」

とうとう、隣の若手議員が切れた。

耳の遠いのはまだいい。頭の遠いのはもっと始末が悪い。

「小淵く一ん」

「……」

「小淵く一ん」

「……」

みんなの視線が小淵代議士のところに集まっていた。呼ばれているのに、返事もない。口をあぐりと開けて、涎まで垂らしていた。隣の若手議員が、掌を目の前で振って、反応を確かめていた。反応がない。生きているのか、死んでいるのか。

すると、突如、小淵代議士はすくりと立ちあがった。

「わたしは、鬼畜米英を討つことには賛成だ。わが大日本帝国のアジアにおける主権を守るべく、八紘一宇の……」

「おいおい、誰か止めろ」「止めさせろ」「自民の恥だ」

みんなざわついていて、何人かの議員に抱きかかえられるように退席していった。それでも、まだ小淵代議士は喋り続けていた。

「国体護持のためには、一億一心となり……」

「内閣総理大臣ー」

新しい総理も今年で白寿を迎える。車椅子で登壇すると、付き添いに支えられながら、ようやくマイクの前に立った。

「ふが、ふがふがふが、ふがふがふがで、ふがふがふが」

秘書が慌てて走り寄ってきた。

「すみません。入れ歯を忘れたものですから。ほほほほ」

議会開催中に失禁する者、徘徊して自分が誰だか判らない者、奇声を発する者。ああ、これからどうなる、日本。

第630話 パンとサーカス

どうしたのだろうか。最近は、生きているという実感がなかった。すべてに満たされ過ぎたものか。テレビのCFを見ても、新聞広告、チラシを見ても、全く欲しいものがない。物欲がなくなっていた。

いま、何が欲しいかと訊かれても、別に何もいらぬのだ。貰ってもきつと嬉しくはない。金はどうだと、札束を突きつけられても、一応、貰っておくが、使うというわけでもない。

困った。意欲がないのは、この消費欲がなくなったからだろうか。人間、何か欲しいものを買うために働くのだろうか。目的が金であり、それで欲しいものがあるから、仕事にも精が出る。

家には、生活に困らない電化製品は古いが一応は揃っている。冷蔵庫を開ければ、食糧も溢れるほどだ。食器は使っていないセットもの、貰ってまだ箱から出してないものなど、売るほどあるのだ。みんな貰い物が多い。

宣伝している新しいパソコンを買おうかとも思わない。キリがないからだが、いまでも充分だ。車も中古だが、ハンドルとタイヤがついていればいいわけで、どうせ仕事でモノを運ぶので、ニューモデルはいらぬ。走ればいいと思っている。

モノはいらぬとすれば、服はどうだ。それも、息子たちのお下がりで充分。背広も滅多に着ないから、親父から貰ったので足りている。靴下に穴が開いていようが気にしない。穴の開いたところを足の裏に回して履けばいいのだ。

食べものはどうだろう。美味しいものを食べに、どこそこのレストランに行く。それも、あまり考えたことはない。美食志向ではないから、却って、質素なものを好む。好きな食べものは蕎麦と、納豆、海苔と、そう贅沢なものではない。それも、別になければあるものを黙って食べる。食欲もなくなっていた。

そんな、金のいらぬ毎日だから、財布に入っていないなくても苦にもならない。

日曜日には家族で行くところがないので、買物に付き合う。荷物の運び役だ。家族はそれぞれ何か欲しいものがあるのだろう。婦人服売場や食品売場へと勇んで向かう。入口で時間を待ち合わせ、わたしは、デパートの中を見ることもせず、ベンチに座って、本を読んでいたりする。いつかは、ごろんと横になり、みんながじろじろと見ているのに、大きな鼾をかいて寝ていたという。

欲しいものがないというのも困ったものだ。内需拡大、景気回復に全然貢献していないことになる。

でも、何か欲しいものがあるだろう。と、人に訊かれたりする。それは、誕生日だったり、何かのお礼だったりするが、よくよく考えてみても、出てこない。欲しいと云っても、贈り物には高額すぎるが、しいて云えば、無人島ひとつ。そんなものは誰もくれない。

モノではないが、時間は欲しい。ゆっくりとした休日。それか、旅行ならモノではないが欲しい。それぐらいしかみつからない。

人間、物欲がなくなると終わりだという気がしてくる。もう、すっかりと枯れて、生臭くなく

なり、そろそろ成仏するのではないか。

性欲もなくなりつつある。それは困ったものだ。一番困るのは女房か。いや、困っていないらしい？ まだまだ枯れるには早い。もっと、生臭く、食欲に生きていたいのに、生活はモノで溢れ、飽和状態になっているところに、この無神経な満腹感は何なんだ。

それは、どうもわたしだけではないようだ。そんな気分を感じているのは、実に多くなっているのだ。満ち足りすぎて、げっぷが出ているから、いまは民衆にパンはいらないのだ。

享楽ということはどうだろう。話題の映画を見に行く。それも、気が進まない。だいたい想像できる。多分、どんなアクション映画でも、スペクタクルでも驚かないだろう。見たあとにきつと後悔するのだ。時間の無駄だったと。

テレビ番組も無意識に見ていたりするが、どうでもいい。煩いから消したほうがさっぱりとする。

友人からノーカット版のアダルトのDVDを借りて、ひとり夜、鑑賞してみたが、感じない。そういうものにも感覚は麻痺して、斬新さも欲情も感じなくなっていた。無気力かということでもない。毎日の仕事は惰性でもせいっぱいやっているのだ。何かが足りない。その何かが何なのか判らないから、毎日が退屈していたし、やる気が起こってこない。

以前はニュースが一番過激でハプニングを感じずるものであったが、最近は、殺人も戦争もテロも詐欺も強盗も、何が起きても驚かないし、無感覚になっていた。

それはきつと恐ろしいことだった。新鮮な感覚を忘れ、生きている感触もなく、ぼんやりと毎日を経過するという、実に退廃的な日々を送っていた。

文明が行き詰まると、民衆はサーカスを求める。何か激しい殺戮でも、ネロのように街がひとつ燃えるような凄いことを求めるようになる。

だが、いまのわたしはそんなことも期待しないし、世界の破滅が訪れようがきつと驚かないのだ。これは、病気に違いない。わたしは、自分自身の顔をつねってみた。痛い。ということは、神経があるのだ。ということは生きているに違いない。

わたしの舌はあまりにも美味しいものばかり食べてきて、もう、新しい天体を期待しなくなっていた。わたしの体は中年になると、もう着飾る服を求めない。わたしの目は、バイオレンスもエロスもホラーも見飽きた。

五感はすべて、過激なものに慣らされて、すっかりと無感動になってしまったらしい。

ある朝、いままで経験したことのない激震で目が覚めた。一時、気を失っていたが、意識を取り戻すと、わたしは倒壊した家の瓦礫の下で奇跡的に無傷で助かっていた。家族は声もしない。きつと、みんな死んだのだろう。トタン屋根の隙間から顔を出すと、まともに建っている家はなかった。マンションも商店もすべてが倒壊して、あちこちから火の手があがり、街は燃えていた。生きている市民は少ないようで、怪我をした人たちが、よろけながら、通りを逃げていた。

。

わたしは、それでも驚かなかった。来るべきときが来たという感じで、いつかこんな破滅がわれわれを襲うということを予感していたので、別に、予定通りのことだと、平常心で辺りを眺めていられた。

自分の潰れた部屋から衣服をみつけると、着替えをした。水道管が破裂して、水が噴出しているので、そこで顔を洗い、口をすすいだ。玄関のあったところに靴もみつけたので、靴を履くと、わたしは、会社に出勤した。道路は死体と燃える車で歩きにくかったが、なんとか歩いて会社には行けるだろう。時計はきっちりと出勤時間の八時二十分。

パンとサーカスのいらぬわれわれは、これから何を生甲斐にして生き延びていったらいいのか。退屈だけは破壊されることなく、わたしの胸の空洞を占領したままだった。

第631話 宇宙の最後

宇宙はどこまであるのかという遠くを見る研究があると思えば、顕微鏡でどれほど小さなものを見るかという研究もある。電子顕微鏡よりもさらに細密なところまで見ることができる顕微鏡を作った学者がアメリカにいた。

ラインハルム教授がその人であった。教授は、人間の未知の領域にまで到達することにより、物質の組成が解明できるばかりか、この宇宙の創造の仕組みまで類推できると確信して研究を進めてきていた。

教授が開発した特殊な光子顕微鏡は、いままで電子顕微鏡でも覗くことができなかった原子核や電子まで確認できるほどの性能を示すことができると、理論上の計算ではそう出ている。

いまだかつて、人類が肉眼で確かめたことのない元素も、この顕微鏡では手に取るように見ることができるといふ。

ようやく、待望の顕微鏡が完成した。顕微鏡といっても、卓上の小さなものではない。体育館ほどの広さの実験室に、天体望遠鏡よりも大きな装置が、高い天井まで伸びていた。光子を発生させる磁場を作るための巨大なガラスのドームには、紫色の人工的に作られた稲妻が光っていた。白衣を着た何十人という助手や、研究チームの各国の博士たちが、慌しく動き回っていた。

「教授、電圧も、コントロールボックスも、コンピュータも正常です。スタンバイOKです」

最初に見るのは、やはり、この研究に生涯を捧げたラインハルム教授にしてもらう。人類が初めて見る宇宙や月世界と同じほどの偉大な瞬間であった。各国のマスコミも中継体制に入り、その瞬間の映像を茶の間に届けようとしている。

原子核の回りを電子が回る。理論上の図式を実際に肉眼で見れるということは、宇宙の果てを見届けるような偉業だった。

いよいよその瞬間がやってきた。すべての電源がオンになり、ウイーンとモーターが回転する音とともに、計器のランプがすべて点滅しはじめた。教授の座っている椅子と、接眼レンズがエレベーターに乗っているように、徐々に天井近くまで上がってくる。レンズにはテレビカメラもついていて、それが研究室のモニターに映し出される。多くの関係者たちは、固唾を飲んで、その成功の瞬間を待ち望んでいた。

ぼんやりと映っていた映像が、実は、物凄いスピードで、縮小してゆく世界へと分け入る、いわばミクロの探査ロケットに乗って、物質の内部に入ってゆく。やがて、くっきりとその映像が捉えられ、われわれ人類の前に現れた。

と、教授だけではない、全員が驚きの声を挙げた。

「おお、こいつはなんだ。われわれは、何を見たのだ。神よ。あなたの存在を決して否定はしません。われわれは思い上がっておりました」

その映像を見た科学者たちは、みなひざまづき、お祈りをはじめた。

そこに映し出されたものは、宇宙だった。漆黒の闇に色とりどりの星雲が渦巻いていた。ブラックホールの回りを多くの小宇宙が回り、その渦巻きが銀河系宇宙のように、闇を救うかのように構成していた。ということは、われわれの体も、植物の細胞のさらに小さな分子から原子に至ると、そこは宇宙になっているのだ。

われわれは神の手の中にある、どんなに小さな生き物であったかしのれない。すべては宇宙創造のうちに騙されていたのだ。科学というバベルの塔は、ついに神の造られた世界のカラクリを覗いてしまった。

顕微鏡の旅はさらに小さな世界へと猛スピードで突き進んでいった。それは光速よりも速いものであった。時間は、大きな世界と小さな世界では全く進み方が違う。光の速度がわれわれの現在の時間なのだが、その超ミクロの世界ではわれわれの指先を曲げるだけのスピードですでに数千億年を数えるのだ。

銀河系宇宙らしき渦巻きの中に太陽系によく似た小宇宙がある。恒星の回りを惑星が回っていた。きっと、その中には生物が棲んでいる可能性もある。われわれのこの宇宙にしても、五十億の地球があり、その高等生物の生息する可能性があるという。ということは、あらゆる物質を組成するものは宇宙そのものであり、その中にも人間がいる星があり、様々な歴史を創っているのだ。

教授は叫んだ。

「これは、大変な発見だ。われわれは、この小さな宇宙をくしゃみで吹き飛ばすこともできるし、つまようじの先で消滅させることもできるわけだ」

すべての科学者たちは、現実を否定するかのように首を横に振りながら教授の弁を聞いていた。

「ということは、われわれのいまいる宇宙も、さらに大きな世界の細胞の一部を形成している原子に過ぎないということにもなる。われわれの世界は構造がすべて宇宙でできているのだ。この世界が無数に集まって、別の巨大な宇宙を造っているのであり、さらにその宇宙も、またさらに巨大な宇宙の一部分でしかない……」

そこまで教授が話した途端、天地が引っくり返るほどの異変が起こった。巨大地震でもない。方角も磁場もすべてが急激に移動していた。その衝撃は、かつて人類が経験したことのないものであった。西も東もない、上も下もない。地上に立つものはすべて宇宙に吹き飛ばされていた。

その頃、われわれの宇宙は、大通りを歩くご婦人の帽子に付いた綿ゴミの一部を形成していた。一緒に歩いていた紳士が、親切にも綿ゴミをとってあげていた。

「ほら、折角のいい帽子にどこからついたのでしょうかな」

その綿ゴミは飛んで、車道へと舞ってゆく。道路に落ちると、自動車が轢いていった。それっきりであった。われわれの大宇宙は瞬間にして自動車事故で消滅したのだった。

第632話 サイト

最近、パソコンにもケータイにもやたら怪しげなメールが来る。女房に云わせれば、「あんた、またいやらしいサイトにアクセスしているんでしょう」とくる。

「そんな、たまには見るが、アドレスなんか教えたことはない。しかも、それは、人類学的立場から研究の一環としてだ」と、威張って答えているが、ケータイなんかは、仕事の連絡だけで、ネットを見るようなことはしていない。

夜中に頻繁にメールが来るから寝不足になる。頭にきて、アドレスを複雑に変えてみた。アルファベットと数字の組合せだけでもダメだったので、それにアンダーバーとか記号を混ぜて、やたら長いメルアドにしてみた。それでも、知らない女から、ワタシの写真を見てと、真夜中に着信だ。

「このやろう」と、今度はジュゲムジュゲムゴコウノスリキレみたいな長くてとても覚えきれないアドレスにしたが、それも字数制限があるからギリギリのところまでやって登録したが、やつらはそれでもやってくる。やつらというのはヤクザなのだろうか。

ドメイン受信拒否とか、指定受信とかいろいろとやってみたが、巧妙な手口で侵入してくる。相手は、大容量のパソコンから、無数の組合せのアドレスに一斉に何百万ものメールを送信しているのだ。

おじさんたちは、ひっかからないが、これが若い連中ならひっかかってしまう。中学生からケータイ、パソコンをやっているから心配だ。

この前も息子が友達に貸したケータイで数秒間サイトを見ただけで、一万四千元支払えと云ってきたという。どうしたらいいと、本人から焦って連絡があったので、アドレスと電話番号を変えろと、ドコモに行って変えさせた。相手は取り立てるまでしつこいらしい。甥は、もっと高額だ。十四万払えと脅かされていた。消費者センターに泣きこんだりしていたが、どうやら手口は合法的であるらしい。息子も警察に相談したが、あまりに多いので、警察は取り合わない。

わたしは、この通信文化が、ここにきて、いよいよ曲がり角に差し掛かっていると思った。グレシャムの法則で「悪貨が良貨を駆逐する」というやつである。これが、ますます酷くなると、怖がって通信をしなくなる。ウイルスもそうだ。ケータイもネットも衰退してゆくのだ。頭のいいやつは世の中にいくらでもいて、ガードはすぐに破られる。イタチごっこで、きりが無い。

相手の顔も名前も見えないから、余計に不気味で恐ろしい。エロサイトから売春、メル友、闇金、簡単に金がケータイのサイトで借りられる。物品の通販も怪しげなものがある。毎日、いろんなメールがくる。善良な通販業者が大変だ。すべてが灰色に見えてくる。

家庭で、お年寄りでもできる電話機についてのLモードというもの、手軽で、キーボード操作もな

しに、タッチペンだけでネットを見ることができるといものだが、それも使い方を誤れば危ない。

子供たちも何も知らないから興味本位で触って、大変なことになるが、老人たちもまた、何気なくタッチしていたら、後で取り返しのつかないことになる。

ある日、家から電話がかかってきた。今年八十過ぎたおふくろからだ。

—大変なんだよ。おまえ、何か通信販売で、生き物を頼まなかったかい。

—いや、ペットを飼うのはおふくろが嫌いなの判っているから、子供たちも頼まないだろう。ミドリ亀かなんかかい？

—いや、それが、もっと大きいものでね、とにかく、気味悪いから早く帰ってきておくれ。

わたしは、嫌な予感がした。

急いで仕事場から戻ると、玄関に棺桶のような大きな細長い木箱が置いてあった。

「ほら、これなんだけど、どうも生き物らしいんだ。小さな窓から覗いてごらん」

家族が全員、心配そうに荷物を取り囲んでいた。わたしは、小窓から中を覗いた。ぎろりと人相の悪そうな顔というか、なんというか、目と目が合った。ドキリとした。

「こ、こいつは、わ、鰐だ。誰だ、こんなものを注文したやつは」

家族は誰も知らない。納品書には、鰐一匹とある。しかも、ちゃんとクレジット口座から引き落とすようになっていた。

すったもんだして、相手の通販業者に話して、引き取ってもらうことにした。

数日して、またおふくろから悲鳴に近い電話が職場にかかってきた。

—今度は何だ。象か、キリンか。

—どうもこうもないよ。とにかく来てごらんよ。

帰ってみると、玄関の前に大きな箱が何箱も積んである。今度は、生き物ではない。北海道からじゃがいもだ。しかも、家族で五年は食べられる異常な量だ。飲食店ならともかく、一般家庭で消費する量ではない。

頭にきて、今度は子供たちを問い詰めた。

「誰か、電話機のLモードをいたずらしなかったか」

息子が少し考えていたが、

「あっ、隣のミチロウ君が、ちょくちょく遊びにきて、なんかいじくっていたぞ」

いまは、子供の方がメカに強く、学校でも教えているから、すぐに覚えてしまうのだ。クレジット番号はキャッシュから自動的に呼び出される。住所や名前なども自動的に一度入力すれば出てくるほど親切だが、それが怖い。何も知らない子供が、ペンタッチで、今度は、一戸建住宅を注文するかもしれないのだ。

それからは、家族以外のものが触れないようにパスワードを設けた。

だが、その後遺症で、おふくろはすっかりと触れなくなってしまった。孫たちがサイトにアクセスして被害を蒙ったのに心を痛めて、

「斉藤は怖いよ。もう二度と斉藤となんか遊ぶんでないよ」

と、うちの子供たちに云いきかせていた。

二三日して、ガス会社がメーターを調べにきた。その係りの人が、胸にネームプレイトを付け

ていた。斉藤さんだった。おふくろは怒った。
「あんだね、うちの孫を詐欺みたいにはめて」
ぽかんとしていた係りの人は、
「いや、わたしは青ガスの斉藤ですが」
おふくろは向きになってドアを閉めた。
「だから、斉藤は怖いんだよ。帰っておくれ」

第633話 林語堂のお客たち 見送り見送られ

しばらく店にお見えにならないなと思っていると、新聞の死亡広告欄にお客さんの名前が出ていたりする。

堀江さんがその一人だった。すらりと長身で、年齢を感じさせない若さがあった。とても老人とは思えない。林語堂が古川にあったときは、家が歩いてこられる距離だったので、時折、店においでになられた。

「岩波の本が入ったら、何でも買うから、持ってきてくれ」と、いつも口癖のように云っていた。岩波で出す本なら間違いはないだろうと絶大な信頼を寄せていた。家には万を越える本があると聞いた。蔵書は売らない。すべて図書館に寄贈してしまった。左翼系の本だけではなく、文学書もいいものを揃えておいでだった。それらは、数回に分けて、県立図書館に寄付した。図書館では、堀江さんの寄贈図書を「労働文庫」と名づけて、コーナーを設けていた。貴重な文献も多かった。日本共産党の本部でも赤旗の揃いはないと聞くが、堀江さんはちゃんと保管していた。

戦前にそんな新聞でも持ちつづけていたら、憲兵が煩かったに違いないが、東京よりも却って地方のほうが隠しやすかったのだろう。

図書館ではその蔵書をきちんと分類整理して目録まで印刷製本するほどの内容であった。

堀江さんは、いつも店の本棚によりかかりながら、その古本屋の雰囲気浸っているだけで満足のような様子だった。

「戦前からの本がよく、空襲で焼けませんでしたね」

と、わたしが訊くと、市内三箇所疎開されてあったという。昭和二十年七月の空襲でほぼ全市が焼失した。いまでも、わたしは、仕入で古い本を買ってくるころは、市内ではなく、爆撃に遭わなかった周辺部からである。

その堀江さんもぱたりと店においでにならなくなると、入院していたり、そしてついに帰らぬ人となっていた。

左翼系の政治家でも文学者でも長生きする人は多い。質素な生活と確固たる信念が長生きの素なのだろう。堀江さんの生き方からそう思った。

林語堂の支店をまるめろ文庫といった。その店の近くに北さんの家があった。歩いて三分くらいの近さだ。わたしは、二つの店を行ったり来たりしていたが、北さんは、たびたび店においでになり、古いマンガ本を買い求めていった。

「手塚のマンガを集めているんだ。その他に戦後すぐのマンガがあったら、置き置きして欲しい」と頼まれた。始めは名前を知らなかったのだから、ヤマダさんというだけで、北彰介さんとは存じ上げなかった。ベレー帽をかぶっていたりしたから、てっきりと漫画家とばかり思っていた。

何度か、蔵書をうちに処分してくれた。だが、いい本はあったが、研究本が多く、その中にはマンガや童話、絵本は見当たらない。後で、ご本人から聞いたのだが、古いマンガと絵本、童話のコレクターであり、ちょっとした図書館ができるほどお持ちだとか。

その北さんと、ペンクラブで一緒になったり、秋元良治先生を囲む秋元学級のメンバーとして入ったら、その会にも北さんがいらした。いままでは、お客と店主の関係であったのが、共に酒を飲むようになった。

北さんは若い頃は詩も書き、詩集も出していた。戯曲も書き、オペラまで手がけた。多才な人であった。青森県の児童文学研究会を育て、青森の昔話を何冊もの絵本にした。ちゃんちゃんこを着て、子供たちに昔話を聞かせる会の語り部もやった。

晩年は、病気がちになり、いろいろな会に顔を出さなくなった。何か連絡することがあれば、わたしは電話にしたが、それでも頼み事は引き受けてくれなかった。それが病気からきているものとは思わなかった。有村先生の遺稿集の発起人をお願いして、打ち合わせやなにやで、いろいろとお世話になった。遺稿集の評を新聞に書いてほしいと、わたしからお願いしたが、最近はずべてが面倒になったようで、他に適任の方がいると、断られた。それが、北さんとの最後の会話になった。

秋元学級というのは、平均年齢は六十いくつか。わたしが出席しているメンバーの中では一番若い。いつか冗談で、遺影の話になったとき、一番いい顔で写った写真を誰かメンバーに預けようということになった。

「それなら、このわたしに決まっているでしょう」と、最後までみんなを見送る立場であることを強調した。会のメンバーの花田さんが亡くなり、北さんが亡くなり、だんだんと冗談が本当になってきた。

この数年でも、わたしの周りからお客という名の友達が次々に逝去されている。見送って、見送られて、いつかその日が来ると判っていても、何か淋しくせつない。

ところで、みんな逝ってしまうのはいいが、最後に若いわたしだけが取り残されたら、一体、誰がわたしを見送ってくれるのだろうか。それだけが心配だ。

古書目録を自家製で出して十五年になる。すべて手作りだ。最初の頃は、ワープロで打って、版下を作成すると、デュプロも店にあったから、それで印刷をする。店の中で丁合もし、ホッチキスで中綴じ、封筒に入れて封をするまで一人でやっていた。だいたい三千冊の新たに仕入れた本をジャンル別に分類して掲載、五十ページくらいの冊子を全国千人の通販のお客に発送している。最近は隔月で、最新号は六十五号だ。毎回特集を設ける。国文学特集とか、初版本特集とかである。

通販のお客にはさまざまな方がいらっしゃる。横田順弥氏、山下武氏、紀田順一郎氏などは古くからのお客さんだ。

その中で変わっている方に草薙実さんがいる。いつも手紙を頂戴し、たまに電話で長々と話しかまれる。若い頃に徳川夢声のテレビ結婚式で挙式した。嫁さんは戦前の第一書房の編集長をした方の娘さんだった。奥さんは心臓病の持病があり、子供は産めない体だったが、どうしてもということで、男の子を二人もうけて、まもなく亡くなられた。写真で見ると綺麗な人だった。草薙さんは、その実体験を悲しみを乗り越えて、一冊の本にした。三十数年前にベストセラーになり、映画化もした。いまは、大学の講師をしたり、専門書を執筆したりして、学問に打ちこんでおられるようだが、一度だけ、うちに泊まりにきたことがあった。

あれは七年前の十一月だった。草薙さんから突然、午前中に店に電話があった。いつものように、いろいろと本の話になる。

—どうだい。そっちは晴れているかい。

—ええ、天気はいいですが、少し寒いですよ。

—雪は降ったのかい。

—いいえ、八甲田は白くなっていますが、平地はまだです。

—そうか、これから行こうかな。行きたくなかったな。よし、これから新幹線で行くから。後でまた電話をする。

急に、何を思いついたのか、草薙さんは午後になって、新幹線の中から電話してきた。

—七時には着くぞ。青森駅前まで待っていてくれ。

と云われても、互いに顔は知らない。草薙さんの若い頃のお顔は、著書に写真入りで載っているが、二十代の顔だ。いまは六十くらいだろう。横浜からわたしに逢いたくなって飛んでくる。

駅前で待っていたが、それとなく判ったのは不思議だった。若いときの面影はまるでなく、髪の毛が衰退していたし、あの劇的なロマンスを書いた人とは思われないくらいかなり老けこんでいた。若いときの写真は男優のようにりりしい顔だった。

「どうして、判ったんですかね」

「そりゃ、心だな。君は思ったより若いな」

津軽三味線が聴きたいというので、その店に連れていった。いつも、電話と手紙をやりとりしていたので初対面でも他人のような気がしない。

わたしは、車で来ていたので、酒は遠慮していた。どうしても浅虫の家に泊まるというので、家で一緒に呑み直すということになった。酒さえあればご機嫌な人だった。

その頃は、まだひとりだったので、家には老父母と息子三人がいるだけであった。奥さんがい

ないと知ると、大概の客は二度と来ない。迷惑と思って遠慮するのだ。

「そうか、君はわたしと一緒に来たんだな」

草薙さんは急にしんみりとしてくる。

「でも、近く再婚するんです。いま、支店の手伝いをしてもらっていて、店の二階で暮らしている人がいるんです。明日、よかったら、一緒に連れてゆきます」

草薙さんは、太宰の津軽の中にある、鶏小屋のどんづまりの家を見たいという。それは、竜飛崎の手前で行き止まりになる国道付近にある家々のことであつた。それを見せに車で案内することにした。

翌日も快晴だった。わたしは、草薙さんを店に案内した。本を見るときの草薙さんはがらり人格が変わるようだ。家でも朝からビールを飲んでいたので、ただの呑ん兵衛だと思っていたら、顔は笑っていても眼は鋭い。何か見られているような怖さがあつた。やはりただものではないなという気がしてくる。

連れ子のチビ二人も連れてゆく。昼に、ドライブインで焼き魚定食を食べさせた。

「なかなか、こんなうまい飯は向こうじゃ食えないぞ」と、感心したりしている。そこでもまたビールだ。酒がないと不機嫌になる人だから、缶ビールを車に積んだ。

竜飛崎はシーズンオフで観光客は来ていない。貸し切り状態だった。吉田松陰の話になるとさすが草薙さんは詳しい。

「いまは、二つの家庭を行ったり来たりしているのかね。人間、そんな経験はなかなかできるものじゃない」と、その頃のわたしの二重生活を羨んでいた。わたしたちが自然と手を繋いで灯台までの道程を歩いている後姿を見て、

「いいなあ。わしも再婚しよう。いま、考えている相手がいるんだが、よし、決まった。君らを見ていて決心がついたぞ」

というようなことを云ったりした。

草薙さんはわたしに秘密を打ち明けるようにぼそりと云った。

「わたしは、ただの先生ではないんだ。君だけに正体を教えよう。別の顔はだな、F」

と、今売れっ子の推理小説作家の名前を出した。まさか。ゴーストライターだという。売れっ子作家になると、陰にいくらでもいると聞いたが、そう云えば、わたしの店に古書目録で草薙さんが、アイヌに関する本を注文したときは、Fという作家はアイヌの歴史ミステリーを書いたし、古代史ブームをテーマにしたときも、その史料をうちから取り寄せていた。何か繋がりはあるのだろう。

北海道を見晴らせる岬に立って、茫漠とした津軽海峡を眺めていると、草薙さんが何者なのか判らなくなる。電話や手紙だけでは人は判らない。人はやはり逢うものだ。

どんづまりの国道は岬の上まで全国的に珍しい階段国道として続いているが、車はそこで行き止まりだ。行き止まりの先に何があるのか、草薙さんは確かめに来たようだ。

「そうか、階段だったのか。創作意欲が湧いてきたぞ。来てよかった」

草薙さんは、最近、スランプ気味だと云った。どんづまりになった自分を、同じ地形に置くことで、何か抜け道がないかと考える旅らしかった。

「こうしてられない。早く帰りたくなった。君、青森駅まで頼む。いまから帰ると今日中には

着くな」

来るときも思いつきだが、帰るときもそうだ。言動が突然やってくる人だった。やはり作家なのだろう。

駅で見送った。

「ありがとう。ようやく脱出できそうだ。来てよかった」

また云った。そして、何か云いたそうににやりと笑った。

わたしは時々Fの新刊を読みながら、会話文の中にわたしたちの会話がそのまま出てくるところを発見して、ああ、やはり草薙さんなのかなと、どこかで信じられない気持ちも動き、いまだ確信には至っていない。

第635話 似た者同士

馬が合うという悪くはないが、合いすぎるというのも滑稽だ。

わたしと北の街の斎藤とは誕生日もそう離れていない同い年である。同人仲間としてもう四半世紀一緒にやってきた。

その彼から昨日、店に電話が来て、北彰介さんが亡くなったので、明日の通夜にペンクラブから花を上げたものかどうかと、有村先生のときはどうであったかと訊いてきた。その「明日」というのが、わたしにすでにインプットされていた。

通夜がある日はいちいち着替えする時間がないので、車の中に上着を残して、中は黒のネクタイのままセーターなど着て仕事をする。仕事をしながらも、生前の北さんの顔ばかり思い出された。店の棚に眼をやると、そこに立って話していた姿も思い浮かべてしまう。

北さんと仲がよかった詩人の須藤保さんも、よく店に来たが、彼も帰らぬ人となった。須藤さんの倒れる数日前にも店に来て、わたしに本棚の陰からこんなことを云っていた。

「人間って不思議なもんだよ。いままでいた人が突然いなくなるんだから」と感慨深げにぽつりと云った。須藤さんの周りでも年配者が多いから毎月のように通夜がある。仲間が突然いなくなる。そう、話していた本人も突然いなくなった。いつまでも店にいた残像だけがそこかしこに焼きついていた。

そんなことを思っていると、女房が店番をしにやってきたから、バトンタッチして、わたしは深刻な顔をして通夜に出かけた。

夕方車は渋滞していて、なかなか前に進まない。ちらちらと時計を気にしてみていた。イライラしても仕方がない。カーラジオでも聴いて、タバコに火をつけた。夕方のラッシュ情報が入る。ますますイライラしてくるから消した。

ようやくのことで、郊外のセレモニーホールへと着くと、駐車場はがらんとしていた。わたし

は意外な感じがした。あれほどの人だから、駐車場は満杯で、知事から市長まで来ているだろうと想像してきたのに、何か間が抜けている。おかしいかと、車から降りて、入口に立つ。普通なら、誰その通夜の儀と立て看板ぐらいあるはずだ。それに駐車場の誘導する係がいてもいい。ホールの入口は閉っていた。

大変だ。場所を間違えたか。もし、新城のセレモニーホールとかだったら、これから走っても間に合わないかもしれない。わたしとしたことが、ちゃんと場所を確認しないでと、同人仲間の笹田さんに電話をしてみた。

「北さんの通夜だけど、場所は何処なんですか。」

すると、笹田さんは笑いながら、
「明日じゃないですか。」

「がーん。このがーんは一回きりではない。がーんがーんがーんと三回くらい頭を叩かれた気分だ。わたしとしたことが。いままで五十二年生きてきて、こんなことは一度もなかった。ボケてきたものか。がっかりして店に戻った。」

この話はここで終わらない。たまたま、わたしが出かけた直後に、北の街の斎藤が店にやってきた。来月号を配って歩くのと、広告の集金等で、月末は最高に忙しい一日なのだ。

「木村君はいないの？」

と、店番の女房に訊いた。

「北さんのお通夜に行きましたけど」と、答えたものだから、斎藤も慌てた。

「そうだった。今夜だったのか。すっかり忘れていた。これは大変だぞ。明日だとばかり思っていた」

すかさず女房、

「確かめたほうがいいですよ。うちの人もあわてものですから。よく早とちりしますから」

「いや、木村に限ってそんなことはない。大変だ。香典袋はどこかで売っていないかな」

女房は隣がコンビニだからあると思うと教えて、斎藤はすっとなで行った。また店に戻ってくると、電話を借りた。家に電話していたようだ。私服で歩いていたから、この格好では通夜にも行けない。

「いいかな、仕方ない。この格好で行こう」と、かなり慌てて店を飛び出した。

斎藤がセレモニーホールへ直行した後、わたしはこそこそと店に戻ってきた。

「実は……。そのお……。明日だった」

「あら、大変。たったさっき、斎藤さんが来て、かくかくしかじか」

似た者同士で走り回るのも面白い。だが、どちらもバカなら仕方ない。コンビニなら、片一方ぐらいしっかりしていないと。

ボクハトテモショウセツニアキテイタトイウノモショウセツノセカイガゲンジツヲコエナイカラダガタンニアリキタリノコトバヲツカッテヒョウゲンスルムスウノクミアワセヲヨミトルコトニツカレテイタイツソイシカワタクボクノローマジニッキノヨウニツマニヨマレタクナイナイヨウデモロコツナヒョウゲンデイクラデモカケルコトガデキタラトコトバヲコネクリマワスコトヨリゲンゴハカイガナニカソウカイナヨウナキガシテナラナイトオモウホドボクハトテモツカレテイルツカレキッテカンジヲワスレルホドダカラシバラクハガマンシテツキアッテモライタイトクトウテンモナイメチャクチャナブンショウナノダガメイジノショウセツニハメズラシクモナントモナイマシテカタカナデカクノモカンジハハイルガユウメイナマンジトイウフウフセイカツノノゾキショウセツヲタニザキジュンイチロウガカイトイルシセンゼンノヘイタイサンガカクコキョウニダスハガキハスベテカタカナヒョウキダッタノハドウシタモノカイマデコソカタカナモジガオオイトイウガソレハヨコモジヤガイライゴヲカタカナデカクナライガアルカラデソレニトシヨリタチハテイコウヲシメシテイルノダガカタカナデカクノハセンゼンノホウガオオクッタヨウナキガスルソノショウコニジンジョウショウガッコウノキョウカショハズイショデカタカナデカレテイルダカラカタカナガアタラシイナンテウソナノダカタカナホドフルイモジハナイノダトイウコトヲダラダラトカクコトデジカンカセギヲシヨウトイウノデハナイナニガユウツカッテボクノマイニチハハイシンニミチテイタカラダガダレカニムショウニコウシタコクハクショウセツミタイナモノヲテガミトシテヨンデモライタカッタダケドソレハアマリニモセキララスギテハズカシクトテモカツジニデキルモノデハナイカラアングウノヨウニカイドクシナケレバナラナイヨウナヨミニクイブンショウデソレヲシメスヒツヨウガアッタコトダオオクノヒトハコレヲミタダケデヨムノヲヤメルダロウコレガボクノサクリャクダッタトイウノモコノパソコンデマイニチアテサキニンフメイノヒトニダステガミヲマヨナカニヒソカニウッテイルノダガドウモツマガミテイルケイセキガアッタドウシテソナケイセキヲシルノカトイウトパソコンデハイチバンサイゴニヒライタファイルガリレキトシテイチバンウエニデテクルカラデボクガソノヨルニカイトモノハテガミデハナカッタカラコノイエデパソコンヲヒラケルモノハホカニツマヨリイナイトイウコトデボクガシゴトニデカケテイルトキニショサイニハイッテミテイルコトガハンメイシタノダダカラドコデドウキッテイイカワカラナイブンショウノナカニヒミツヲカクスコトデヒビヲツツツテユキタイソレハボクガキンミライヲイツモショウセツニシテイルヨウニジツハボクノチカイショウライヲシナリオトシテカキアゲテイルフシギトソノヨソクガアタッテキテイルノダシャカイデモソウナノダガプライベートナコトデモボクハボクジシンヲシナリオドオリニアユマセルシショウセツサッカハキライダガヨクカレラハジブンヲショウセツノナカデオイツメテドウシヨウモナクナシテシマイサイゴニハクビヲククッテジコカンケツサセルノダボクハソナコトハシナイボクノテグチハモットカンペキデナルシズムニオボレハシナイタトエバマエノカイシャガトウサンシタトキモソレハアルイミデハケイカクテキナモノデアリボクハチチノカイシャヲシヌヨウニシムケタチョウホンニンデアアルソシテマエノツマトリコンシタトキモソノヨウニシムケタノハコノボクナノダミツヒツノコイトイウノガアルソノヨウナコトヲスレバソノヨウナケツカヲウムトヨソクデキテヤルコトダイッシュノハンザイノヨウナジンセイヲカキアゲテイルソレモボクジシンガノゾンデイルコトデハナクボクノペンガヒトリデニボクノシュウヘンノウンメイヲカイトユ

クノヲボクハトメラレナイデイタナニモノカガコトバヲドコカノヒキダシカラテキトウニダシテ
ハクミタテテボクノマエニヒトリノストーリーヲオイタソシテイママタツギニキタツマヲドウニ
カシテワカレサセヨウトスルジブンガイルコトニオドロイテイルイヤボクハシゴトモカテイモナ
カマモスベテガイラナイノダヒトリデドコカトオイシマニイッテジキュウジソクノセイカツヲシ
テミルコトガキュウキョクノモクテキナノダガチチハハモナガイキシテイルシコドモモイルカラ
アトジュウネンハミウゴキトレナイソウナレバボクモカンレキハスギテモウロウジンノナカマイ
リダソレカラナニヲスルトイッテモテオクレダロウボクハシゴトニモシツボウシカゾクニモシャ
カイニモシツボウシテイタサイゴハシゴモフクメテハメツシテシマウタイプナノカモシレナイシ
ョウバイヲシテイレバドウシテモセイジテキナハタイロヲミセラレナイガコトニセンキョトナル
トダレヲオウエンズルノカトイウシツモンガキテボクハボクヲロテイスルコノマエモユウジンガ
ボクノコトヲキョウサントウデスネットイウカラアエテヒテイハシナイガシンパニハチガイナイセ
イサクハイマヒトツガッテンガユカナイソレデゲンシキョウサントウデストコタエテヤッタガボ
クノリソウトスルクウソウシャカイシュギノセカイハミンナバカニスルガソレハトテモスバラシ
イヒゲンジツテキナリソウキョウナノダボクハチカイショウライソノセカイニウツリスムヨテイ
ナノダガソノタメニハスベテヲキリストナケレバナラナイコノパソコンモイエヤシゴトカゾクユ
ウジンショウセツナガイアイダアンドウショウエキノケンキュウシャデハナクジッセンシャトシ
テカネットデンキノナイブンメイヲヒテイシタセカイノコウチクトイウトホウモナイユメヲイダイ
テキタガコノニホンデハソレハジツゲンフカノウダボクハコノニホンニイルトコロサレルトマデ
オモウヨウニナッテイタガンニシテモコウツウカニシテモストレスカラクルアラユルセイシンピ
ョウニインガカンケイノアルビョウキソシテリガイカンケイデギクシャクシタセカイハイママサ
ニハッキョウスンゼンデキレテシマイソウダココニイルトヒガイシャニモカガイシャニモナルダ
カラジッコウデキズニトラワレテイルボクハユウウツナノダ

第637話 ネタ切れ

毎日ショートショートを書いているとそのうち必ずネタ切れになって、行き詰まるときがくる。趣味で書いているのだから、そう追い詰めなくてもいいだろうと思うのだが、千編まで書くと決めているから意地もある。

何かいいネタはないものか。大概是夜中にかけて書く。それを翌朝みんなにメールで送信する。ところが、出てこないときは、翌朝になって、仕事ででかけなければならない直前までも悶々として書けないでいた。ぎりぎりになって、バタバタとどうでも書く。駄文も駄文。それでもやめるわけにはゆかない。

そうだ、このネタ切れの話を書けばひとつ書ける。だが、その手は一回より使えない。

「どこかにネタが転がっていないかな」と、友人に訊くと、

「ああ、それなら、公園のベンチでさっき見た」と云うから行ってみた。

晩秋というのに小春日和で温かい。公園のベンチにはセールスマンらしい人がごろんと横になって寝ていた。わたしがベンチの周りにネタが落ちているのかと、きよろきよろと探していると、サラリーマン氏は急に起き出して伸びをした。

「ああ、よくネタ」

あまりにもバカらしいので、昼に寿司屋に入った。だいたい、町の情報屋といえば、タクシーの運転手、寿司屋、床屋と相場が決まっている。昼から寿司とは豪勢なようだが、案外、ランチタイムは安いのを知らない人がいる。最近是不景気で、寿司屋も夜の酔客目当てで開いていても客はさっぱりだ。それで、二毛作をと、昼もやっていたりする。サラリーマン相手にコーヒー付というが、どうも寿司の後にコーヒーでは後味が悪い。

「おやじ、何かいいネタはないか」

「ネタがよくなければ寿司屋はやれません。今朝、仕入たのはびんちょう、平目にホッキ貝だ」

すると、隣に座って寿司をつまんでいたサラリーマンでもちょっと人相の悪い暗い男が口を挟んだ。

「ネタって、話の種のことだろう。それなら、この裏通りに露店があるから、そこで売っているよ。ちょっと、怪しいやつだが」

なんと、ネタを売っている。買ってまで書くほど金はない。まして、営利目的の小説ではない。経費をかけてどうなる。それでもその情報屋みたいな、ネタを売るといふ商売も面白そうだから行ってみることにした。

裏通りは人も車も通らない。そんなビルの裏に折りたたみのテーブルに真紅のピロードをかぶせ、なにやら得体の知れない小さなものを並べて売っているものがある。不法入国か、インドかパキスタン人のようにも思えた。

「ネタを売っていると聞いたんだが」

すると、男は目を輝かせて、

「ソウレス、ココ、沢山アリマス。ドレデモ一個百円ヨ」

見ると、それはただの植物の種のようにであった。

「どこが話の種なんだ？」

「ハイ、コレ、植エレバ、話成ル」

本当かどうか、百円だから騙されてもいいからと買って見た。いろんな種類があって、哀しい話から笑える話、艶話から摩訶不思議な話まで古今東西の話題が成るという。わたしは、そのなかで、笑える種を買い求めた。

さっそく、家に戻って、鉢に種を蒔いた。すぐにもものになりそうもないが、根気よく待つことにした。

ところが、その不思議な種は翌日には発芽した。早い。成長が早いのだ。によきによきと伸びてくる。数日もしないうちに、三十センチは伸びて、葉をしならせ、花の蕾まで出てきた。こいつは面白いと、わたしは、家に仲間を何人も呼んだ。みんなに是非、その植物を見せてやりたかった。文学仲間は自宅に酒を持って夜集まってきた。

わたしが不思議な種の話をして誰も信じようとしない。その、わたしが怪しい外人に騙された話でもちきりだった。テーブルの上にはいまにも咲きそうな草があり、みんな愉快地に笑いながら話に花が咲いた。

すると、突然、蕾が開いて、花となり、唇の形をした紅い花は大口を開けて、けたたましく笑った。

第638話 透明人間

ぼくは見えない。自分自身が見えなくなったから犯罪を犯す少年。誰からも認めてもらえないのは、透明人間。

クラスにひとりふたりはいるものだ。ほら、教室の隅に小さくなって、誰とも口をきかない忘れ去られたクラスメイトが。

ぼくは滝口ミチロウ。名前なんてどうだっていい。名前は呼ばれるためについているんだろうけど、ぼくはあまり呼ばれたことはないし、無口で、いるかいないか判らないほどおとなしい。中学二年の十四歳。もう誕生日を迎えたから、少年法にひっかかるってみんな云っているよ。

ぼくの存在を確認するのは一日一回の朝の出席のときだけ。でも、それは返事をする声も蚊の鳴くようなものだから、ぼくが学校に来ていても来ていなくても先生も関係がないんだ。

みんなは仲良しのグループで塊り話しているのも、ケイタイというネットで繋がっているんだ。ぼくは、お母さんがうるさいから持っていない。それで外されているんだ。ぼくは、休み時間でも自習時間でも、いつもぽつんと一番後ろの隅の席で、無色透明になっているんだ。色がないから、みんなには見えない。

先生も名簿を見て、たまにぼくに当てるんだが、そのときは、ぼくはどぎまぎして赤くなるから、ようやく色がついて、みんなは振り返った。

「なんだ、ミチロウはいるんじゃないか」

そのときだけぼくを発見してみんなで口々にぼくの悪口を云っているようだ。すると、ぼくはまた自分を消してしまい、空気に隠れるんだ。

いつか、うちのお母さんが担任の先生に呼ばれたことがあった。ぼくのことだ。こんな相談をしていたらしい。

「お宅のミチロウ君ですが、どうも影が薄いというか、ときたま見えなくなるんです。どこか病気ではないんですか。色素が危険を感じると、周囲の保護色になる動物と同じでね。都合が悪くなると消えるんで、始末が悪くて」

「本当に申し訳ございません。医者にも見せたんですが、一億人に一人の奇病らしいんです。精神的なものが作用しているので、薬では治らないと云うものですから」

そんな会話を交わしたという。いいんだ。ぼくは、見えなくなつて。どうせ、誰も遊んでくれないし、うちの中学のようにマンモスで、全校生徒が千五百人もいれば、ひとりくらい見えなくなつて問題ではないんだ。まして、名門高校への進学率を競い合う、進学校だから、先生たちも上ばかり見ていて、ぼくのような落ちこぼれは切り捨てだ。始めから眼中にもない。

それでも、学校のレベルをぼくが下げていることが問題なので、また親が呼ばれて懇々と説教される。それで、普段は、ぼくのことなんか気にもしないお父さんが、家でぼくの帰りを待っていた。

「ミチロウ、話がある。ここに座りなさい」

ぼくは、まずいと思ったらさあっと色が消えた。

「消えるんじゃない。どうして、おまえはいつもそうして逃げるんだ。おまえももう十四だ。自分のカラーというものを持ったらどうなんだ」

お父さんはぼくにそんなことを話したことはなかった。いつも仕事で晚くなるし、出張で留守が多い。ぼくの顔を見るのも久しぶりなら、こうして話をするのもいままであったろうか。子供なんかどうでもいいのだ。仕事優先で、家庭を顧みない親の見本みたいなものだったから。

「カラーって？」

ぼくは恐る恐るお父さんに訊いた。

「個性だよ。いまの若者たちはみんな流行を追って、着るもの、食べるもの、聞くものすべて一緒だ。みんな同じように見えるんだ。区別もつかない。それにおまえのように見えなくなるんだ。人と違うことをしろ。同一化を望むな」

「ドウイツカ？」

ぼくは、だんだんと頭に血が上ってきていた。親らしいことを日頃していないのに、先生に云われたからって出てくる。それも、ぼくたちの気持ちをまるで考えていない大人の論理でたたみかけてくる。

「るっせえんだよ。普段はぼくが何をしているか聞こうともしないくせに、こんなときだけ親の面しやがって」

「なんだと」

それは、とてもぼくの口から出た言葉とは思えなかった。ぼくの手は勝手に動いて、食器を投げつけていた。棚のガラス戸が大きい音で割れた。手当たり次第にものを投げていた。居間も食堂も凄まじい状態になっていた。お母さんが泣きながら止めに入る。血が吹き出していた。ガラスで手を切ったのか。ぼんやりと考えていながら、ぼくの別の少年は激怒して、とても手のつけられない不良になって半狂乱で叫んでいた。

「あなた、ミチロウに色が戻っているわ」

「本当だ。ミチロウが怒ったのは初めて見たが、怒った途端、見えてきた」

ぼくは、急にその声でまた自分に戻った。すると消え始めていた。

学校でも同じことが起こった。

「ミチロウはどうせいないだろう。こんな机はかたづけてしまえ」と、いじわるなクラスメイトが何人もかかって、ぼくの座っていた机を教室の後ろに下げ始めた。

「何をするんだ」

ぼくは、また切れかかっていた。ぼくでないぼくがまた入れ替わる。同級生の胸倉を掴んで殴りかかっていた。

「あっ、ミチロウが現れた」「見えたぞ」「ミチロウって喧嘩、強かったんだ」

ぼくは、数人を殴り飛ばしていた。鼻血を出して泣いて教室を飛び出した生徒もいた。騒ぎを聞きつけて、担任が飛び込んできた。ぼくを押さえこもうとしていた。

「てめえ、何すんだよ。邪魔立てすると殺すぞ」

またぼくのセリフではない。ぼくは人が変わったように烈しく先生にも殴りかかっていた。

先生も怪我をしてうずくまった。別の先生が警察に連絡した。いまの先生は生徒を殴れないから、なんでも警察だ。やがて、パトカーが校庭に入ってくる音がした。ぼくは、その音を聞くと、急に冷静に戻れた。

警官が二人、バタバタと校長に誘導されて、教室に入ってきた。

「どこにいるんですか、暴れている生徒は」

「あっ、また消えている」

みんな口を揃えて云った。

「消えたって、透明人間でもあるまいし。まったく人騒がせな」

警官たちは怒って帰った。

ぼくは、本当の自分を隠している。普通の少年でいる限り、いつまでも見えないんだ。

第639話 由希子の場合

わたしは一度破産した人間だから、人伝によく話を聞いて、相談に訪れる人がいた。誰にも話せない借金地獄のことを経験者なら、どうやって切り抜けたかと聞きにくるのだ。

いままでも電器店、クリーニング店、酒屋といろいろと相談にきた。ある程度勉強はしたとい

っても、弁護士ではないからいい加減な返事はできない。ただ、みんな、もう来るところまできてからやってくる。すべてが手遅れだった。

友達の紹介だからと、ある日、店に綺麗な女の人が入ってきた。まだ三十過ぎたばかりだろうか。由希子といった。

彼女の両親は飲食店を長く経営していたが、二年ほど前に支店を出して失敗した。その借金が赤字の補填で借り入れした運転資金と合わせて三千万を抱えた。なんとでもなりそうな金額だったが、毎日の店の売上を聞いて、一万二万じゃとても返せる額ではない。わたしも何度か食べに行ったことのある店だ。

「味はいいじゃないですか。いまの店の立地が悪いのかな。それから、随分と外食の店が周りに増えましたからね」

わたしは事情を聞いて、もっと内容を聞いてから判断したいと思った。どこかで見たことのある人だと思った。

「わたし、十年前に、あなたと呑んだことがありました。わたし、青海屋で働いていたんです」

思い出した。青海屋といえば、わたしの友人が経営する喫茶店だが、そこに二十歳過ぎた可愛い子が入った。つきあってくれませんか？ と誘われて、その子と夜明けまで何軒もはしごして飲んだことを思い出していた。

「ああ、あのときのユキちゃん…」わたしは都合の悪い顔をしたかもしれない。酔った勢いもあった。

「暫くぶりです」

由希子はまだ独身でいた。支店のほうを切りまわしていたが、経営が難しくなって、父の借金返済が窮地に立たされているのを見るに見かねてついサラ金から借りて、父に渡したという、それが積もり積もって三百万。もう、借りて返してといった自転車操業もできなくなっていた。いまは利息を返すだけでもせいっぱいだ。自分の生活ですらまならない。

由希子はあのときの若さはなくなっていたが、こそこそと店に倒れそうに入ってきたときの苦渋に満ちた顔は、悩んだ拳句に訪れたように見えた。

六十半ばの父親は職人気質で、いまさら止められるかと、どんどん借金を増やして行って、とうとう友人二人に保証人をお願いして借りてしまった。その二人に迷惑をかけるから止められないと、穴を大きくしていった。

「とにかく、お父さんと一度逢って、話してみましよう」

面倒なことを引き受けた。人のごたごたに首をつっこむほどこちらも暇ではない。でも、由希子の顔を見ていたら、なんとかしてやりたくなる。わたしも随分と人がいい。

店にそのうち由希子の父も挨拶にきた。これから、店を移転していい場所でもう一度やり直し、借金を返したいと。その資金の捻出ができないと嘆いていた。わたしは冷たく云い返した。

「新しい店も成功するとは限りません。それに、普通なら定年退職するお年で、これから新たに何かやろうとする意気込みは判りますが、いかがなものでしょうか」

利益償還しようと思えば、これから二十年以上かかるかもしれない。そこまでしてただ借金返済のためだけに働かなくとも、とわたしは思う。それに利益が出るかどうかとも判らない。いまま

でのやり方で赤字だったから。

後日、店にお邪魔して、台所の内情を見せてもらった。家を売っても完済できない債務超過だった。土地もいまはなかなか売れない。場所が悪いから余計売りにくい物件だ。破産の方向に持って行くことになった。が、問題が残る。保証人二人がいる。友人というから、すべてが終わってから、夫婦で住み込みで働いて、少しずつ返すんですね。家族で力を合わせて返せば、十年もかからない。本当は返さなくていいのだが、裏切ることになるのが辛いという。

親子三人が裁判所に赴いた。初雪がくる頃だった。

由希子に、シルバー人材センターを教えたと、東京で社員寮の住み込みがあったのをみつけた。料理の腕はプロなので、向こうの社長にいたく気に入られてと、春から老夫婦で行くこととなった。

問題は由希子の再就職だった。まだ若いからいくらでもあるだろう。四十までは募集はある。四十過ぎれば急に少なくなる。人生やり直しするなら、三十代までだ。でも、例外もあるけどね。マクドナルドの創業者は五十過ぎてから始めたハンバーガー屋で成功している。わたしは、由希子に云った。それより結婚したらどうだい。わたしはひとり独身で頑張っている由希子の知り合いの名を挙げた。女は結婚に逃げるといのが嫌いなようだった。

それから、サラ金から電話が来たとか、預金通帳が押さえられたとか、そのたびに怯えたように電話がくる。

—もう少しだ。頑張れ。春まで。そうしたらすべて終わるから。すごく楽になるから。

由希子は、コンパニオンをしたりパートをしたりしてなんとか生活していた。家もなにもかも失って、裸で社会に出されたとき、由希子は初めて自分のしたいことは何かということに気がついた。今度は、自分の生き方についての相談だ。

—わたし、いままでチャラチャラして生きてきたようで、いま、就職で走り回って、面接で訊かれて初めて判った。あなたは何ができますかって、みんなに訊かれるのね。考えてみれば、いままでのほほんと暮らしてきて、運転免許もない、パソコンもやれない、資格は何も持っていない。何もできない自分があるんです。

—気がついただけでも、今度の破産は無駄ではなかったね。販売やセールスもいいが、やればやるほど自分の身になる仕事がいいね。ほら、ゆきちゃんはモノ作りが好きだと云っていたじゃないか。

—いままでも、厨房には入っていたから、作るのは好きです。いま、パン屋さんの口があるんです。手作りパンの店がどうかって、勧められているけど、それにしようか、生保にしようか迷っていたの。でも、どんなに条件がよくても、ただお金のためには働きたくないのよ。自分のやりたいことを、この年になって初めてみつけようとするのって、おかしいよね。

—一生、みつけないまま終わる人もいるし、気がつかないで、ただ儲けることばかり考えている人もいる。まだ遅くないよ。おれも君と同じ年で転職した。みんな、前よりは生き生きと仕事しているって云うよ。目標ができれば、計画立てて、五年後、十年後の自分を想像して、進むんだね。

由希子は明るくなった。親孝行が裏目に出たが、これからはきちんと計算して生きてゆくだろう。

それより、問題は、わたしの借金だ。さて、年末をどう乗り切るか。人ごとではない。

第640話 ハスカップの町

昭和四十三年。上の姉の和子は、苦小牧に嫁いだ。あれは、十月に入って、かなり冷えた晴天の日であった。

わたしたち嫁側の親族は、青函連絡線の夜の便に乗って、早朝函館に着いた。わたしは高校二年で、学生服に帽子と、別に結婚式だからといって、学生の服装は変わらない。わたしたちは、特急で苦小牧に向かう。三時間の汽車の旅だった。叔父がわたしを食堂車に連れていった。朝の広大な原野を車窓より眺めながら、わたしは曲名の判らない歌を口づさんでいた。そのころ、深夜ラジオ放送でたまたま耳にした歌で、気に入っていた。後に、それが「夜明けのスキヤット」とレコードになった。

苦小牧に来るのは二度目だ。その年の夏、わたしはサイクリングで単身苦小牧の小林家に一泊していた。姉はすでに見合いし、婚約していて、わたしは姉に云わせるとよくも図々しく泊まりにいったものだということになる。サイクリングは大沼公園と洞爺湖にそれぞれ野宿し、苦小牧、札幌、倶知安に泊まる予定でいた。

初めて訪れた苦小牧の町は、開拓の村という感じがして、同じような平屋で、煙突だけが大きい家々がずらりと建ち並び、王子製紙の巨大な工場が町を占拠していた。

小林家は町の繁華街の一等地で大きなパン屋をやっていた。店の裏に住宅があった。庭に何か黒いものがふたつ、ごそごと動いているので、何だろうと近寄ると、それが二頭の子熊であったのに驚いた。熊の子を飼っているのだ。

わたしは、北海道の村々を自転車で回り、殺伐とした雰囲気から人間の住むところではないような感じを受けた。

和子姉は昭和十九年に満州で生まれた。戦火の中を潜って、引揚船で奇蹟的に故国の地を踏んだのは二歳のときだった。栄養失調で、二歳でもまだ歩けない。三歳でも言葉も云えない。どうなるのだろうと試してみんな心配していたが、なんとか育つものだ。

和子というのは戦時中に多い名前で、確か女子の名前の一位だった。平和を願って、みんな産まれた子にそんな名前を付けた。名前が語るように、誰も戦争は望んでいなかった。

総領の甚六というのがあれば、甚子というのものもあるのか、長女和子はどこかのんびりしていて、他の姉妹とは違う。妹二人とわたしがいたが、みんなすばしっこい。おやつはいつも下にかっさられて、泣きを見るのは和子姉だった。

上は下より厳しく育てられるのは、親がまだ若い血気盛んなときで、下に行くほど甘くなるのは、親も年取り丸くなるからだろうか。和子姉はいつも損な役目をしてきた。

和子姉は天真爛漫で、自分のことを吉永小百合に似ていると公表していた。

「どこが」と、わたしはまじまじと見る。

「交通事故に遭った吉永小百合か」と、いつもからかった。

和子姉が嫁いだ家には姑の他に小姑がいた。まだ結婚していない兄弟が五人もいたのだ。八人

家族で、いつも賑やかな家であった。ひとりひとりと嫁に行ったりして、家を出てゆくが、代わりに和子に子供ができる。五人の子ができたから、ひとり減って、ひとり増えと数は変わらない。

大家だから、何かあると親戚が集まる。北海道の人はよく酒を呑む。わたしは、姉のところによく泊まりにいったが、毎日のご馳走責めで、朝、義兄が、差し出した牛乳をぐいと呑むと、ウイスキーが入っていた。昼からビールが出てくる。一日中、酔いが覚めなかったことがある。

そんな中で、和子姉は専業主婦だから、家から出ることはなかった。化粧もせず、所帯じみていった。

わたしが学生の頃に北海道に旅行にゆき、その行き帰りに姉を訪ねた。和子姉は、弟が来たから、町を案内してきます。と、家を出る口実にしていた。二人で喫茶店でコーヒーを飲む。喫茶店なんか普段入ることのない姉は楽しそうだった。

苫小牧の駅に見送りに来る。赤ん坊をおんぶして、頬が赤かった。木造の古い駅舎は何か寒々としていた。

「いいなあ。お姉ちゃんも帰りたい」と、いつも見送る人でいた。里帰りも十年はない。

その姉にも思わぬ不幸が訪れる。まだ四十半ばの義兄が喀血して急死した。上が中学、下がまだ赤ん坊であった五人の子供を抱えて、四十にして未亡人になっていた。不幸は続くもので、それからまもなく姑さんも亡くなった。義兄の遺産で子供たちを育てた。

子供たちも、ひとりひとりと東京の大学に進み、長女は嫁に行った。あれほど賑やかで、来客も多く、毎日のように酒盛りをしていた家から、すべての子供たちが巣立つと、気がついたら、姉は広い家にたったひとりになっていた。本家の仏壇と遺品を守りながら、嫁だけが残る。まさかひとりになるとはゆめゆめ思わなかった。

姉は、淋しさを紛らわせるために、子犬を飼ったり、若い頃、趣味でやっていた油絵をまたやりはじめた。パッチワークをやったり、陶芸教室に通ったり。

親戚はいても、親がいなくてももう寄りつかない。友人もそういない。子供たちは関東へ行っている。ここは自分のふるさとではない。肉親もいない町だった。それでも家は守らねばならない。毎晩、怖い思いをして過ごしていた。裏庭には毎晩、キタキツネがやってくる。その物音にも風の音にもびくびくして暮らしていた。

いつか、死ぬほどの大病を患い、ひとりで入院して手術までしたが、みんなには知らせていなかった。心配すると悪いからと。

いろんなことがあって、和子姉は東京に住むことにした。小さな部屋を借りて、娘や息子たちのアパートに近いところ、自分の妹も近くに住んでいるところに移ってきた。苫小牧の家はそのまま近所の人に頼んできて、空家になった。

それでも心配性なので、家のことが気になる。泥棒が入ってしまいか。手紙や電話はどうしよう。親戚もどこへ行ったかと探してしまいか。子供たちもそれぞれの生活やつきあいがあり、母親が頻繁に顔を出すと嫌がるようで、東京も落ちつかない街だった。

青森の実家に何週間も滞在しても、居候には違いない。ふるさととも帰るところではなかった。結局、あちこちとうろついて、和子姉は決心した。やはり、帰ろう。あのハスカップの町へ。

東京へ脱出して一年も経っていない。

千歳まで飛行機で、それから列車で苫小牧へ。帰ってきた。以前のような淋しさはない。何か
がすっきりと取れていた。懐かしい我が家。そこが唯一、帰れる家だった。

ところが、家の鍵がない。どこをどう探しても出てこない。しまった。東京のアパートを引き
払うときに、荷物の中に入れたままか。まったく、長女はドジであった。

仕方なく、安いホテルを予約して泊まった。

翌日、引越しのトラックが荷物を持ってきた。何かと、ご近所が顔を出す。

「あら、和子さん。お帰りなさい」

近所も温かく声をかけてくれる。和子姉は、荷物をすべて、玄関前から路上に置いてもらつた
。それから、すべてのダンボール箱や衣装ケースを路上に引っくり返す勢いで、探し始めた。ご
近所のお年寄りたち、奥さん方が、そろそろと集まってきていた。

「何を始める気かしら」「さあ」「ガレージセールで売るのはかしら」

みんな、不思議そうに和子姉の必死の作業を見守っていた。

やがて、和子姉は、大声を上げた。

「あった。こんなところに仕舞ってあったわ、家の鍵」

近所はどっと笑った。人騒がせな。ドアが開いた。誰もいない家だった。表札は亭主の名前
になっていた。もう二十年近くなるというのに、女ひとりで無用心だからと玄関にも亭主の靴を
わざと並べておいた。

「ただいま」

返事のない家だが、ここは自分がこれからも一生住む家なのだと、和子姉は思った。

第641話 林語堂のお客たち

山 女

その人が店にひょっこりと顔を出したとき、わたしはすぐにどんな人なのか判った。小柄だが
、髪を短くカットして、とてもボーイッシュな女の人だった。色が浅黒いから、きっと、登山で
もしている人なのだろう。と、推測していたら、

「あのう、山の本はどこいらにあるんですか」

と、その人は訊いてきた。

「山岳関係の本は少ないんで、紀行文学と一緒にしています」と、棚に案内した。

われわれ業界では山岳の本は特別に高い。あまり入ってこないということもあるが、一種独特
な本の世界を持っている。また、唸るほどいい装丁の本が多い。個人的にはアルプという月刊雑
誌も好きだ。別に山に登ったことがなくても、その雑誌の執筆群は、著名な文学者、画家が多か
った。

わたしと同じぐらいか。四十前だろうか。

「これ、ください」と、買い求めた本は串田孫一の山のエッセイだった。

それから、何度かその人は店に顔を出し、常連になってゆく。

「目録を出されているんでしたら、わたしにも送ってください」

と、住所と名前を書いてゆく。この町に住んでいる。銀行勤めで、いつも帰り道に店に寄ってゆくのだ。よほど本が好きなようだった。幸子さんと云った。

何度かおいでになるうちに、山の話で盛り上がったことがある。

「あら、あなたも登山をしていたんですか？」

わたしは、頭をかきながら、

「ワンダーフォーゲルです。クライミングじゃなくて。それも学生時代のことで、もう二十年前だ。まだ、アイゼンなんか持っていますよ。とっくに錆付いたと思いますが」

「どちらへ登ったんですか」

わたしは、あちこちの山の話をする、彼女も目を輝かせていつまでも話しこんだ。

「いいですよ、山って」

「山から帰ったあとも、何日かは余韻でドキドキしているんだ。あの感覚って不思議だな。まるで、恋人に逢いに行った後のようだね」

「そうそう」幸子さんは何度も頷いた。

山男というのがあれば山女というのもあっていい。山男に惚れてはいけないというのも、山女も同じようで、山と結婚してしまったからか、幸子さんはいつまでも独身でいた。わたしの知る限りでは、晩婚もしくはシングルでいる人に登山愛好者が多いというのは、どうしたわけだろう。

「今度、うちに来てください。本を少し処分しようと思って。どれがいいのか、あなたに選んでもらおうと思います」

さっぱりとした気性が好きだった。男まさりなのか、それでいて、どこかにワンポイントで女の子を残していた。

彼女の家に行くと、山と渓谷社の雑誌がそれこそ山とあった。処分したいのは雑誌だけで、随想や画帳などの単行本は手放さない。

「今度、呑みに行きましょう」と、幸子さんの友達の名前を挙げた。仲間というのが実はわたしの知り合いで、友達の友達という関係だった。互いの共通の友達も混ぜて、それからよく呑みにも行った。

今年の正月のことだった。松の内も開けない頃に、テレビと新聞で大きく、北アルプスで遭難した県人の女性二名のことを報じていた。何気なくその女性の写真と名前を見て、わたしの目は釘付けになっていた。幸子さんだった。三十年のベテランが、自分の庭のように歩いていた山で遭難したと。

幸子さんの遺体は、シュラフに包まれ、ヘリコプターで麓の村まで運ばれていた。

暗い正月になった。わたしは、毎日、パソコンで通販の本を送る仕事をしていた。パソコンは、オートコレクトという便利な機能がついていて、田沢と打つと、幸子と出てきた。田沢というお客は他に二十人くらいはいたが、いつもトップで出てくるのだ。

わたしは、もう注文の来ない名前だから、頻繁と出てくると思い出すからと、顧客名簿から削

除しようとした。すると、パソコンのソフトは次の表示を出してくる。

—この名前は他に使用しておりますので削除することはできません。

と、何度やっても彼女の名前は名簿から消せないのだった。

また、今年も冬がやってくる。山は初冠雪で白くなっていた。

店に仕入の電話がかかってきた。

—田沢といいますか。

おばあちゃんの声だ。本を処分したいという。住所を聞くと、なんと彼女の家ではないか。幸子さんの母親は、わたしの店のお客であったことは全く知らないで、電話帳から見つけて、たまたまうちに電話をよこしたのだ。

「もう、一年が来ますね」

と、わたしが玄関で云うと、思い出したようにおばあちゃんは泣いた。

「皆さんに迷惑かけて」というので、

「うちから、よく本を買っていってくださって」と、逆に恐縮した。

幸子さんの蔵書はやはり山の本が多い。その中に、あの最初にうちに来たとき買い求めた串田孫一のエッセイが一冊あった。

わたしは、本を店に運んでから、懐かしそうにその一冊を手にとって、ページをめくった。すると、押花が貼りつけてある葉が落ちてきた。どこからか記念に買ってきたのだろう。ミヤマウスユキソウと説明が書かれてあった。別名はエーデルワイス。その葉の裏には彼女の字になる詩のようなフレーズが書かれていた。

わたしは、急に何もかも思い出した。

山は人を詩人にする。そして、死人にもする。

第642話 パニックな日々

—

そいつが来るのは、だいたい朝から判る。妙に、仕事が忙しく、疲れていたり、仕事に追われていたり、溜まっていたり、それで苛々していたときに、そいつはむくりと頭をもたげる。

どちらからかという、わたしは朝型の人間で、朝は元気がいい。だが、そいつが来そうなときは、ぐったりとして眠かったり、何か起きあがれないでいることが多かった。ストレスが溜まってきているのが判る。そいつの兆候は、首筋が凝っていたり、後頭部が、ぴんと張り詰めたように神経が硬直したように感ずるときだ。

それでも仕事は一日も休んだことはない。元来、病気らしい病気はしたことがないので、健康保険証は真っ白だったが、そいつが来るようになってからは、あちこちの病院にかかるようになってしまった。わたしは、健康には自信があったものが、そいつのせいで、すっかりと自信をな

くしていた。

少し、ソファで横になってから、わたしは車に乗りこんだ。家から仕事場まで三十分だ。エンジンをかける。暫くはゆっくりと海岸線の国道を走っているが、妙に息苦しくなってくる。つい、いつもの癖で、窓を開ける。雨が降っていても、雪が降っていても、そいつが来るのを待ち構えて、わたしは、外の風に額を当てた。それに、新鮮な空気がほしい。車の中が密閉されているという恐怖感はない。

息がだいぶん荒くなってきた。意識的呼吸に切り替わっていた。それがいけない。呼吸というのは無意識にするものだ。だが、そいつが、横隔膜を占領して、呼吸中枢を全自動からマニュアルに切り替えやがった。マラソン選手のように、スーハースーハーと一定のリズムで手動で意識的に呼吸をしなければならない。それは辛いものがあった。

そうすると、そいつの思うつぼだ。わたしは、運転しながら、ベルトを緩めた。ズボンのベルトがきつい。そして、ワイシャツの上のボタンも外す。できるだけ、着衣を緩めることで呼吸がしやすいようにするのだ。手足が冷たくなってくるのが判る。感覚はある。盛んに手とつま先を動かしている。じっとりと汗が出てきている。

頭の中がぴーんと張っているの、手で頭を何度も叩いた。そこにそいつが潜んで、命令をくだしているのだ。わたしは、外部からそいつを攻撃しようと叩いたが、あまり効果はないようだ。

ラジオの音楽に耳をそばだたせようと意識を別の方角に向かわせようとすればするほど、実はそいつを意識していることになる。

一死ぬことはないんだ。医者も太鼓判を押していた。

そう自分に云いきかせているが、じわじわと死の恐怖感が襲ってくる。もし、こんな運転中に発作で急死するようなことがあったら、他の車を巻き添えにするだろう。わたしは、三車線の一番左端を走るようにしていた。その車線なら、いつでも路肩に停車できるし、どこか脇道に入ることもできる。

息苦しさはだんだんと酷くなってきていた。胃がぱんぱんに張っているようだ。何か、内臓に空気が溜まり、膨張してきているように腹が膨れる。苦しい。いやいや、それもそいつの仕業なのだ。わたしは知っている。すべてがまやかしののだ。騙されてはいけない。負けてはいけない。

医者に教わった運動を試してみる。ハンドルを片手で持ち、残りの手を結んだり開いたりする掌の運動だ。

それも効き目がないと判ると、車のサイドポケットにいつも入れてあるビニール袋を取り出した。それを口にあてがって、大きく何度も深呼吸を繰り返した。ビニールの中は息で曇る。その中の酸素はすぐになくなり、わたしは二酸化炭素だけを吸うことで、軽い眩暈を感ずる。頭の中をぼうっとさせるのだ。叩いても駄目だから、今度は酸素の供給を減らして、そいつを酸素不足にさせて逆に苦しませてやる。

わたしは、そいつとの戦いを一時間はする。そいつが去るまでにはもっと長い時間がかかるのだ。

なんとか、車は店の駐車場に着いた。わたしはよろけながら、急ぎ足で店に入った。薬だ。店

の中にはいつも常備薬を置いている。一早く、そいつを口にしなければと焦っていた。

以前は車の中や鞆の中にもポケット壺のウイスキーを忍ばせて持ち歩いていた。ただ、最近は飲酒運転が厳しいので、持って歩かないことにした。

わたしは、店の机の下に隠していたブランデーを震える手で急いで開けると、ぐいとストレートでラッパ呑みした。強い酒が喉から胃の腑に染み渡る。すると、まもなく、わたしは酔い心地から、頭がぼろっとなってきた。そいつは、わたしの体からようやく離れたようだ。やった。ざまあみろ。酒は百薬の長というが、まさに酒が一番いい薬だった。

一でも、それはいけませんよ。アルコール依存症になってしまいますよ。

医者の話したきつい警告がちらりと過った。

ああ、いつまでこんなことを続けているんだろう。わたしは、得体の知れないやつに一生つきまとわれているのかと思うとうんざりしてきた。

第643話 パニックな日々

二

「パニック障害」。そうした病名が命名されたのはつい最近だった。それまで、わたしは、病名のない病気に悩まされ、実に二十六年もつきあってきた。

体調に異常があるのに、原因不明で病名のない病気というのは恐ろしいものだった。いまでこそ、いろんな本が出版され、全国組織のその病気を持つ患者たちの会もいくつかあり、病院でも病気として認めてくれる。

わたしが、初めて発病した頃は、忘れもしない。六月の暑い日の夕方だった。

わたしは青森に帰ってきて、父親の事業を手伝っていた。放蕩の旅から戻ってきたばかりで、何かと慣れない。大阪で大手チェーンストアにいた経験を活かして、営業で企画を立てたりしていた。

わたしは、どちらかという完璧主義者で、何事も一分の隙もあってはならず、四方八方に神経を配る。そんな性格だから、自分だけでなく周りも疲れてしまう。いまでこそ、ズボラで怠惰な生活を平気でしているが、完璧主義者というのは、百かゼロかなのだ。百パーセントできないとなると、八十パーセントで我慢するというのをしない。すべて放擲してしまう。貞淑な女が突然、娼婦になるようなものだった。

それで、仕事を他人に任せたくないの、自分で全部抱え込んでしまうことになる。

たまたま、パリ祭の企画を立てていた。映写機とフィルムを借りてきて、三市の会場を予約して、ポスターも作った。入場無料の整理券も店で配ったりした。それと、モデル撮影会。これは昔からやっていたことで、カメラ気違いの父親が昭和三十年頃から行事としてやっていた。東京からわざわざモデルを呼んできて、店頭で撮影会をやり、賞も出した。

歩道にはテラスも出した。パリのカフェと同じ雰囲気を出そうとした。喫茶店からレストランまでそんな企画で、チラシを作ったり、ハンドビル、チケットと、みんなひとりでやっていた。頭の中がすでにキャパシティを越えて、数字やスケジュール、時間などで混乱をきたしていた。

その日の夕方、わたしはひどく疲れを感じていた。まだ二十六だから、バイタリティはある。そうそうへこたれないと自分でも確信していた。学生時代はスポーツをよくしたので、体力には自信があった。風邪もひいたことはないのを自慢していた。

でも、この日だけは今までとは違う。何か、とても疲れて、体の変調を覚えたのだ。全身の重く、圧縮した何かが、胸の中心に向かってぎゅっと押し寄せているような感覚。千メートルを全速力で走った後のように、わたしは椅子にぐったりと座っていた。

「北村さん、顔色が悪いですよ」

と、課長が傍で注意を促す声も遠い。

「今日は、早く帰るわ。疲れた」

そう云って、背広を取り、事務所を出て、エレベータに乗ったときだ。心臓が止まるような痛みとも圧迫感ともつかない不安を感じた。わたしは、そのまま蹲ってしまった。眩暈もして立てられない。

母親は心臓病ということになっていた。祖母も心臓の持病がある。わたしの脳裡には、一瞬、その病気の家系図が縦に走った。劣性の遺伝形質は男の子に遺伝する。そんなことも過った。

「大丈夫ですか」

と、社員たちが駆け寄って、わたしを支えてくれた。歩道にしゃがんだまま、歩けなくなっていた。自分では心臓の発作だと思っていた。

「き、救急車を……」

と、声にならない声を出していた。同僚がタクシーを拾ってくれた。

「早く帰って、寝たほうがいいですよ。寝不足なんだ」

と、励ましてはいるが、わたしは暑さからではなく、全身汗まみれだった。それは冷や汗にも似ていた。じっとりと汗ばむ。ふらふらして、心臓を押さえながら、呼吸も乱れていた。

「お客さん、大丈夫ですか。病院に行きましょうか」

とタクシーの運転手が心配して云う。わたしはそんなときでも、保険証を持ってゆかなければならないと、律儀に考える。それで歩いても十分の自宅まで行ってもらった。

家に着くなり、母親に話して、心臓の薬のニトロの舌下錠を貰って、まるで麻薬患者のように周章てて薬を舌の裏に乗せた。そうして、ソファで横になっていたが、家人は普段、そんな態度を見せたことがないので、盛んにわたしの顔を覗きこんでいた。

わたしを初めて襲った、得体のしれない病気だった。健康な人ほど病気や痛みには弱い。普段からあちこち悪い人は病気慣れしているものだ。わたしは、相当なショックを受けていた。体がいつまでも震えていた。いまにも心臓が止まるような恐怖感でいっぱいになる。一向に直らない。家人も心配して、またタクシーを呼んで、わたしを市民病院に連れて行った。八時を過ぎて、どこも閉っている。夜間救急のある大きな病院にタクシーは走った。哀れにも、すっかりと急病人になって、後部座席に倒れている自分がいた。つい、四時間前まではそんな自分の姿さえも予想もつかなかった。悪寒がした。何か、とんでもない深い谷底へとこれから落ちてゆく自分を朦朧とした意識の中で見ていた。

心電図の機械がカタカタと鳴っていた。検尿、採血、問診と一様の検査を当直の担当医師がしてくれた。わたしは、だらしなく、すっかりと気弱になって、女房に抱きかかえられるようにして診察室に入った。

病院というところは日頃は年寄り子供が大方利用するところで、わたしのような若い男が来ると、医師も慌てた様子で診察してくれる。男が病院に担ぎこまれるのは余程のことがないかない。普段からあまりどこの病院でも働き盛りの男を待合室では見かけない。多少悪くても、仕事が忙しいので、病院なんか行ってられないのだ。

だから、よく、担ぎこまれたときは手遅れだったり、大変な重病だったりする。わたしの、今にも死にそうな様子を見て、医師は早急に患部を探す必要があった。特に痛みというものがなく、わたしの訴えていることは、体の変調だった。不定愁訴という特定の痛む部位のない病気で、どう説明していいか本人も判らない。汗、悪寒、吐き気、眩暈、手足が特に冷たくなり、息苦しく、今にも心臓が止まりそうだ。

医師があらゆる可能性を探り、検査したが首を傾げていた。異常なところはひとつも見つからない。ただ、血圧だけが、少し低い。上が百を切り、下が七十と、最高血圧と最低血圧の間が少ない。

「血圧は低いほうなんですか？」と医師は訊いた。

「いいえ、普段は上が百二十で下が七十くらいです」

わたしは途切れ途切れにそう応えた。

「まあ、血圧が下がると気分は悪くなります。ただ、いまのところは異常がみつからないんです。心電図も正常ですし、脈拍も正常、心臓は実に力強く打っています」

見るからに健康そのものだと言った。

その夜はそのまま返された。別に注射を打つわけでもない。薬を処方するわけでもない。どこも悪くないから治療ができないのだ。

翌日まで、わたしのショック状態は続いていた。いままでは日曜も祭日もなく、休みなく朝は八時から夜は九時過ぎまで働いていた。それが、初めて会社を休んだ。たまたま雨の日で、わたしはベッドに横になりながら、自分の体の内部で起こっていることに畏怖を感じながら、窓の外ばかり見ている。女房は心配して傍についていて、いろいろと食べ物を持って来るが食欲もない。

わたしは、あることに恐れ戦いている自分があることに気がついた。それは、「あいつ」と呼ぶ、なにものかが、わたしの中に侵入して、またあの発作を引き起こすのではないかという不安が常駐したことだった。

外に出れば、立って歩けば、またあの発作が来るのではないかと、ベッドから起きあがれない

でいた。

三月に青森にすでに入籍していた女房と許されて帰ってきた。四月には挙式をして、父母と一緒に暮らしている。それから三ヶ月余り。仕事は自分で忙しくさせているが、別に苦悩とてあるわけがない。新婚所帯のようなもので、うまく行っている。

一日、完全に休むと、わたしは詰まっている仕事があるので、恐る恐る起きだして、注意深く会社へと行った。わたしが見た街は、がらりと変わっていた。二日前と今では世界が変わるほど、自分の意識が萎縮していたのだ。自分の背には常に「死」の一文字が貼られている。毎日、死を意識しながら、それからはどこへでも歩いてゆかねばならない。いままで考えもしなかったことだ。

「おはようございます。大丈夫ですか」

とみんな訊いてくる。「うん」と返事をする気弱な自分は、いままでの大言壮語を口にする思い上がった自分ではなく、メメントモリをなにものかに付きつけられ、人間の小ささを暴露され、実に謙虚な人間に生まれ変わっていた。人間は死ぬものだ。それを思ったこともないほど若かったのに、常にその恐怖と対峙する自分の人格も、原因不明の病気が変えてしまっていた。

それからだ。わたしは、自分と向き合える自分になったのは。

第645話 パニックな日々

四

大きな発作が、わたしに与えた衝撃は凄い効果があった。日頃から強健なスポーツマンほど、病気になるとしなしなとなってしまう。怪我をしたことがないものは痛みに弱い。女性が痛みに強いのは出産した経験を持つからだとか、またそれに耐えうる強さを生まれつき持っているのだとか云われる。そして、血を見てうろたえるのは男で、女性は普段から出血には慣れている。わたしの場合は眩暈というのが不慣れで、それだけで怖くなる。呼吸困難という症状にも耐えがたい不安がある。痛みには強い方だったが、全身が重く、具合が悪くなるということに恐怖が走った。

それで、たった一回の発作で完全に萎縮してしまった。それが、外科であれば切ったり、患部の治療方法がある。内科でも病気の原因が判れば、処方がある。ところが、こっちが苦しんでいるのに、病名がつかない。よって薬もない。治療を全くしてくれないから、わたしは、得体のしれないものに感染しているようで、解決のない白紙の回答用紙の上でおどおどしていたのだ。

そいつのことばかり考えるからいけないのだと、また仕事に打ち込むことにした。レストランで出す新メニューを提案し、試作しようと、厨房に入っていたときだった。「おい、地震じゃないのか」と、わたしは天井から吊り下げられた蛍光灯が動いているかどうか、咄嗟に凝視していた。ところが、動いていない。

「気のせいですよ」と、シェフが云うのと同時に、また、そいつが突然襲いかかった。最初の発作から一週間も経っていなかった。

原価計算を電卓を叩いてやっていたとき、ぐらりときた。手足が冷えてくる。汗がじわりと出てきた。眩暈が酷くなって、立ってられない。心臓のあたりが絞めつけられるような感じがした。息が苦しい。大きく深呼吸した。

「大丈夫ですか。顔が真っ青ですよ。少し、横になったほうがいい」

シェフはわたしの倒れそうになったのを抱えるようにして、椅子まで運んだ。椅子を並べて横になれるようにしてくれた。

「タクシーを呼んでくれ。病院に行きたい」

わたしは、また重病人になっていた。人目を憚ることなく、ズボンのベルトを外した。ネクタイを緩めて、胸を押さえたまま、苦しみ悶えた。

やがてタクシーが来る。どこでもいからと、近くの内科医院に行ってもらった。随分とだらしない格好で医院の玄関に入り、待合室の長椅子に倒れこんだ。看護婦たちが慌てて寄ってきた。

「どうしました？」

と、何事かと先生を呼んでくる。わたしは、症状を述べた。早速、診療が始まった。やることは同じだ。血圧は低くなっていたが、それも一時的なものだった。ひと通りのことを調べたが、医者はまた首を傾げるのだ。

「いまのところ、急を要することはないと思います。精密検査をしてみないと判りませんが、心臓の発作ではありませんし、死ぬようなことはありませんよ。血圧が低いのはなかなか治りにくいんですが、大丈夫、長生きしますから」

と医者は笑うのだ、安心させるためのことか。二人の医者に同じ診断を貰った。だが、わたしは信用していない。現にこうして苦しんでいる。なのに、どこも悪くないという。ヤブ医者なんだろうかと、笑う顔が悪魔にも見えた。

医者は、疲れているんでしょうと、アリナミンの注射を打ってくれた。心の中では、そんなビタミン剤なんかいらぬから、ちゃんと処置してくれよと叫んでいた。

少し、ベッドで横になってから、またタクシーを呼んでもらい、わたしは家に帰ってきた。家でぐったりとして寝ていると、親父が仕事から帰って、怒鳴り始めた。

「なんだ、心臓病だと？ おまえがいつもそう騒ぐから、息子まで騒ぐんだ」と、おふくろを詰った。そして、

「おれがいまから病院に連れて行く。入院させて、きちんと調べてもらう」

と、わたしをタクシーで、近くの共産党系の大きな病院へと連れて行った。親父はワンマンだ。人の意見なんか聞かない。病院でも、医師に一方的に命令していた。

「息子を置いてゆくから、ちゃんと精密検査をしてください。いいですか」

わたしの方に怒った顔を向けて、

「いいか、治るまで入院している。仕事はしなくていい。ぐちゃぐちゃとうるさいから、いいか、完治するまでいるんだぞ。いいな」

と、医師の意見も求めないで、わたしは即刻検査入院ということになった。

生まれて初めての入院だった。

わたしの病室は六人部屋だった。後で、女房とおふくろが、入院に必要な洗面器やタオル、着替え、パジャマなどを持ってきてくれた。わたしは、ショック症状から立ちあがっていないので、点滴をやっていた。それも初めての経験だった。もう、それだけですっかり重病人になりきっていた。

翌日から検査が始まった。レントゲンやエコーを使つての甲状腺を調べる検査をした。甲状腺ホルモンの異常で、そんな症状も出ると医者は云う。

点滴は初日だけで、翌日からは三度のご飯が出た。同室の患者たちはみんな、外科のようで、包帯が痛々しい。それでも、食べるものはなんでも食べられるので、よくわたしにおすそ分けと、桜桃やメロンが回ってきた。

午後に仲のいい会社の課長が見舞に来た。

「なんだ、生きていたのか」と、口が悪い。「顔色がいいし、どこも悪くないですよ」と、こっちがグロッキーになっているのに、それが楽しそうに見えた。

「人の不幸を喜びやがって」

「まあ、早くよくなって復帰してくださいよ。これ、退屈だろうからと思って、お見舞」と、文庫本を五冊持ってきてくれた。推理小説だった。

課長は、会社のイベントの進行情況を報告すると、帰っていった。

わたしは、ずっと、不安感がつきまとい、具合が悪いのは治っていない。ただ、発作の起きているときに比べたら、ずっといい。病院にいるというのが、ひとつの安定剤なのだ。ここにいれば、何かあってもすぐに処置をしてくれるだろう。医師も、その発作のときに診断してみたいと云っていた。わたしは、発作になれば、原因が判るんだらうと、次の発作が、そいつがやってくるのをベッドで横になって待っていた。

持ってきた小説を読んでいた。それが面白い推理小説で、ぐいぐいと話の中に引き込まれていた。それまで、わたしはあまり本は読まないほうだった。課長は読書家だ。いつも、わたしに本の話をしていた。あつというまに、本は五冊読んでしまった。そこで、わたしはあることに気が付いた。本を夢中になって読んでいる間は、病気を忘れて、気分が優れていたということ。不思議なことだった。それからのわたしに、本が麻薬のように不安を除去し、一番の良薬であることになった。

第646話 パニックな日々

五

入院して三日目だった。検査はすべて終わっていた。わたしは、検査結果が医師より聞かされていないことに何か不安を感じていた。ひょっとして、ものすごい病気なのかもしれない。

午前中に廊下をカツカツと足早に歩いてくる靴音がした。医師だった。医師は顔色を変えていた。何か、もの凄い剣幕で、わたしの前に立って怒鳴ったのだ。

「君、恥ずかしいと思わないか。君の職場の仲間はみんな一生懸命にいまも働いているんだらう。それなのに、病気でもないのに、こんなところに寝ていていいのか」

その声で、わたしは呆然とした。何を云っているのか理解するのに、数秒かかった。

「じゃ、退院していいんですか」

「あたりまえだ」

医師はわたしが仮病で入院していると思って怒っているのだ。わたしは、赤面してこそこそと退院してきた。そして、その後にはムラムラと怒りが込み上げてきた。どこも悪いところがないところか、ここでは仮病扱いだ。そのとき以来、わたしの中に医者不信が首をもだげてきていた。

わたしは、原因不明だが、カルテに書ける病名もないままに、病院を出されていた。親父はそのことで喜んでくれるどころか、

「ばかやろう。おまえが気が弱いからだ。もっと、ガリッと気を持つんだ。へなへなしているからだ」

と、家族にも叱咤される。精神的なもの、ということは気のせいとしてかたづけられた。家族にも誰にも理解されない病気でない病気に悩まされながらも、わたしは、病院の門を叩き続けた。あちこちの病院を転々とする、いわゆるドクター・ショッピングを繰り返していた。

どこに行けばいいか判らなかつた。始めは内科だった。それから循環器へ行き、心臓外科へ。どこでも同じことを云われる。どこも悪くない。あなたは病人ではない。

ちょうどその頃、羽田空港の海に旅客機が墜落して、操縦士の精神的異常が認められる、「心身症」という言葉が浮上してきた。何か、症状を聞くと、似ている点もあり、わたしは、様々な専門書を図書館で探したりした。わたしの病気は精神的なものとするれば、その方面からの治療法がないものかと、自分自身でみつけようとしていた。自律神経失調症、神経心臓、似た症状の病名はいくらかあった。

札幌の大学病院で癌専門の医師をしている高校のときの同級生がいたので、電話でいろいろと訊いてみた。すると、彼はにべもない返事だった。

一心臓が痛たって？ 心臓そのものには痛みを感じることはないんだよ。

友達がどこの医者より冷たかった。みんな、相手にしないで突き放す。

とうとう、わたしは意を決して県病の精神神経科を訪れていた。恥ずかしいが、認めたくなくとも、認めなくてはいけない。わたしは、狂っているのだと。

待合室の長椅子で待っている患者たちは、みんなどこかおかしいのだろうか。多分、互いにそんな目で見ていたのだ。

みんな虚ろな目をして座っていた。わたしもそんな目をしていたかもしれない。わたしの名が呼ばれた。診察室に入ると、わたしは愕然とした。女医さんであったが、その医師は、以前、祖父がアルツハイマーになって入院させたときの精神病院の担当医師だった。同じ県立の病院なので、今度はこちらへ回されたのかと思ったが、精神病院の先生と思うと気分が暗くなってきた。これが精神病の一種なのだろうか。

「どうされましたか」

と、いろいろと質問に答えた。ここでは、がらりと質問の内容が違っていった。検診は行わない。一通り聞いてから、女医さんはこんなことを云った。

「まず、仕事は週に一回は必ず休んでください。それから、当分は残業なしで一日八時間勤務で終わること。いいですか。何か発散できるような趣味はありますか？」

「クラシック音楽を聴いたり、詩を書いたり、文学のほうをやっていますが……」

すると、女医さんは手を横に振って、

「駄目ですよ、そんな閉じ籠ってするような趣味は。スポーツをやりなさい。一人でやるのもいいですが、みんなでやる遊びのようなものでもいいですが」

仕事にも没頭しているが、その頃のわたしは内向的な趣味で、家に帰るとレコードを聴きながら、原稿用紙に向かっていた。

すると、わたしは前の職場でも同じようなことを云われたことを思い出した。大阪のチェーンストアで働いていたときに、みんなはゴルフか麻雀を盛んにやっていた。わたしはどちらも知らないで、仲間から云われた。

—自分、麻雀でけへんから、上ともつきあえんのや。

どちらも遊びに違いないが、社内のコミュニケにもなっていた。そこからわたしは異質なものとして外されていたのだ。つきあいが悪いということになる。そういう体質を心の中では批判して自分だけの趣味に浸っていた。

ようやく、精神神経科で薬を処方してくれた。ゴルフと麻雀という薬を。わたしは、早速、会社に戻り、課長に相談した。課長はそのどちらもよくやっているのだから、教えてもらおうというわ

けど。普通なら、学生時代に覚えるところが、この年になるまで興味もなかった。

「二代目は、やはりこれからもつきあいが出てきますから、覚えなといけませんね、ようやくその気になってくれましたか。早速、セッティングしましょう」

と、仲間を集め、場所と時間を決めていた。ただ、ルールも判らないので、わたしは書店から麻雀の入門書を買ってきて、いまさらながらこっそりと開いて読んでいた。役の作り方、点数の数え方。ややっこしく、読んでいると却ってストレスが溜まりそうであった。

当日の夜、気心の知れた商売仲間が集まった。

「うちの二代目は、今日が打ち始めで、まだ牌を積んだこともないんだから、手を抜いてくださいよ」と、課長は他の面子にそう云っていた。

「おお、鴨がネギを背負って飛んできたというわけだな。今日はごっそりとゆきましょう」

わたしは、賭け事をしない。金を賭けてするというので緊張していた。ただ、課長がわたしの真後ろにいて指南してくれるので安心して打っていた。

「いいですよ。いまのところ切り方は間違っていないよ。ちゃんと理牌してください。ほら、それは危ない。トイメンの捨て牌をよく見てください。捨てていない牌があるでしょう。それは、握って死ぬんですよ」

みんなくすくすと笑っていた。字牌がアニコで入ってくる。風牌をないた。タンキ待ちになった。指南役は後ろで沈黙していた。

「いいですよ。親だから強気でゆきましょう」と、口数が少なくなる。わたしは、何がこれから起こるのか皆目見当がつかなかった。たまたま持ってきたのが待ちの風牌だった。

「ほら、来た。ツモですよ」

牌を倒したら、一同青くなった。東南西北がすべて揃う大四喜という縁起のいいダブル役満をしかも親でした。みんなは、ふざけて、

「いまは練習だよな」「チョンボじゃないのか」と云い合っていた。

その夜はついていて、大三元も上がり、鴨ネギにされたのは相手の三人だった。

「すっかり騙された」と、ふて腐る仲間を見て、課長はにたにた笑っていた。

夢中で遊ぶということをいままで知らなかった。それがまたひとつ良薬となった。

第647話 パニツクな日々

六

大の大人が夢中になる麻雀もそう毎晩あるわけではない。わたしは、初心者がよくのめりこむように、それからかなり投資することとなった。

課長は、ゴルフも教えてくれるという。クラブも握ったことがないので、また、書店からルールブックを買ってきて、ゴルフのイロハから覚えなくてはならない。わたしは、猫も杓子もやるというのが嫌いで、いままでは、人のやらないことをやりたがった。絶対にゴルフと麻雀だけはやるものかと思っていたのが、世間に負け、自分の病気のためと、課長と打ちっぱなしに出かけ

ることになった。

スイングしてもなんら爽快感はない。どうもスポーツは苦手で、面白さが判らない。会社に行く前の早朝に、よく練習場に通った。

「だんだんと飛ぶようになりましたね。日曜に会社の好きなやつを集めて、パブリックへでも行ってみますか」

パブリックは練習のコースで、キャディもない。クラブハウスは掘建て小屋で、管理人が一人いるだけ。レストランなどというものもない。昼は持参するか、管理人に弁当を注文しておく。会員制のコースの三分の一の料金で使える。

わたしは、ゴルフ気遣いの親父からクラブを借りてきた。シューズだけは買った。パブリック・コースはその名の通り、大衆向けであり、ブッシュも多く、そう手入れもされていない。アップダウンのきついコースが多く、同僚四人と回っていたが、歩くだけで汗もかいた。ゴルフなんか運動ではないと思っていたが、そこの十八ホールは運動になる。できるだけ身軽で回るため、ゴルフバッグも置いて、クラブも四本くらいを抱えてゆくのだ。カートもないからフルセットを背負って歩くのはきつい。

わたしは、あまりプレイには身が入らず、フェアウェイに生えている茸を採ったりしていた。「何をやっているんですか」と、課長に怒られる。

わたしは運動神経がまるで駄目なので、練習しても上達はしない。打ってはポテポテ、手で投げたほうが早い。苛々してくる。これではストレス解消のためにやっているのがますますストレスが溜まってくる。どうも、自分には合わないスポーツのようだ。ただ、これはリハビリなのだと自分に云いきかせて、コースを回っていた。

かつては結核が贅沢病と云われた。栄養のあるものをいっぱい食べて、抵抗力をつけなければならぬから、食えない時代に食べなければならなかった。

わたしの病気は現代の贅沢病だ。仕事をそうするな、もっと遊べと云われる。遊ぶのが治療なのだ。パニック障害の酷い患者は、すっかりと恐怖心が植え付けられ、自室から一步も出られなくなってしまう。引き籠もり、自閉病のようになってしまうのだ。そんな人のためにこうしたスポーツは社会復帰のためのリハビリとなる。

つい、先日のニュースでは、そうした人々の治療のため、小型飛行機に乗せてパラシュートをつけて、空の上から突き落とすといった荒療治もしている。

久々に仕事以外で汗をかいた。シャワーを浴びて、弁当を食べながら、缶ビールを飲むと、気持ちのユトリが出てくる。いままで、こうした余暇を楽しんだことはなかった。ゴルフは嫌いだが、グリーンの中を歩くだけでもいい。

課長は、それから本コースへとわたしを誘った。サラリーマンの安月給では月に一度でも贅沢だが、課長は毎月、県内のあちこちのコースへとわたしを連れて行った。半年やっても少しもうまくならない。一ホールでOBも入れて最高二八も叩いたことがある。キャディも仲間もみんな呆れて先に行ってしまう。振り返ると、後続のプレーヤーがうんざりして待っていた。わたしは、汗をびっしょりとかいて、ふうふう云いながらジグザグに走り回っていた。どうして真っ直ぐに飛んでくれないのだ。

「二八回ねえ、よく数えられたな」

と仲間から賞賛を浴びた。

わたしの友人は鬱病が亢進して分裂気味になったが、新興宗教をやっていた父親は、自分の息子の病を治すためと祈禱を繰り返していた。治療を疎かにしたため、初期のうちなら治る精神病も未だに治っていない。

最近になってようやくいろんな本も出て、心理クリニックやカウンセラーなどの資格もあって、われわれのような患者を治癒するための方法も出てきたが、それもまだ半世紀にも満たないことだ。戦前なら、田舎では、まだ狐憑きと、患者をみんなで袋叩きにしたり、西洋では魔女裁判まで行われ、火炙りにした歴史もあるくらい精神病が病気として認められていなかった。

わたしの発病した二十六年前ですら、治療法は確立されていなかった。いまは、漢方薬まで出て、いろんな治療法が開発されている。

わたしは、少ない専門書の中から森田療法の本を買ってきて読んだりしていた。人間の精神が肉体に及ぼす影響というものに真剣に取り組んでみたかった。誰も治してくれないのは今も昔も同じで、自分でやるしかなかった。自分との戦いなのだ。

発作は週に一度は襲いかかってきた。

あるとき、腹が膨張して苦しいのと、呼吸が苦しく、胃薬を吞んでも、風邪のときに呼吸が楽になる塗り薬を使用したりしても効果がなかった。頭にきて、昼から家に帰ってブランデーをラッパ呑みした。酔えば少しは楽になるのではないかと思った。すると、どうだろう。一分もしないうちにあの症状が全くなっているではないか。

「そうか、酒というものがあつたんだ」

アルコールは、張り詰めた神経を麻痺させ、極度のストレスから解放してくれた。わたしは、まるでアル中のようにそれからポケット壘を鞆に常備薬のように忍ばせて歩くことになった。酒という良薬がひとつ見つかった。

第648話 パニックな日々

七

わたしが自分の病気を書籍で調べてゆくうちに、この地方都市にも最近、心理クリニックの看板を掲げて開業しているところがあると知った。あらゆる手を尽くして自分の病気を治したい一心で、わたしはそのクリニックを訪ねた。

団地の中に、普通の住宅のようにそのクリニックは建っていた。医院らしくはない。看護婦もないし、待合室と受付の窓口だけはあった。完全予約制とあったので、前もって電話して時間を予約して行った。予約だから、患者同士顔を合わせることはない。このクリニックにかかることがすでに公言できないことになっているようにプライバシーが守られているようだった。

白衣を着て出てきたのは、ちょび髭を生やした、やさしそうなカウンセラーだった。こんな診療所はこの県にたったひとつよりなかった。しかも、ようやく出来たという感じで、県立や赤

十字、大学付属病院のような大きな総合病院にもいまだそんな診療科はなかった。

診察室といっても、がらんとしていて、机に椅子が二つ、ベッドがあるだけの部屋だった。

「お一人で、歩いて来られましたか」

と、先生は訊いた。

「それなら、安心だ。あなたはまだ軽いほうです。もっと酷い人は付き添いがいて、車で来なければ外にも出れない人もいるくらいです」

先生は、いままでの経過を一通り訊くと、テスト用紙を持ってきた。

「これから、簡単な性格診断を行います。この用紙の質問に答えて、書いてください」

わたしは、三十分の時間で、いろんな質問に○をつけていった。ここは、外科や内科の病院ではない。注射もなければ、薬もない。不思議な診察室だった。

先生は、テストペーパーを別室に持ってゆくと、採点して、結果を教えてくれた。

「あなたは、人一倍強迫観念が強いんですね。完璧に物事をしなければ気が済まないタイプですね。まず、お酒に逃げるのは止めることです。アルコール依存症になった人が沢山います。それから、病気を嫌わないで、好きになってください。嫌だ嫌だと思わないことです。これからずっとつきあってゆくのに、逃げてばかりでは辛いでしょ。これから、週に二回通ってください。一緒に克服してゆきましょう。今日は、その症状が出てきたときの対処の仕方を教えます」

先生は、椅子を使ったり、ベッドの上などでリラックスする方法を教えた。鼻で息を深く吸って、口からゆっくりと吐き出す。腹の底まですっきりと吐き出してしまふ。膝は立てて、目を閉じて、と、呼吸法から軽い体操へと入った。

週に二回の治療はいつも同じだった。テープで先生の暗示をかけるような声を聞きながら、気分を沈静化させる。まるで催眠術のように、気持ちが軽くなる。と、云われても、わたしはそんな気にはならなかった。

以前にも催眠術の大家にかけてもらったことがあるが、かからなかった。何度通っても、雑念ばかりで、どこかで仕事のことを考えたり、自分を空にすることができないでいた。

イメージ法というのもやった。心の中で、いろいろと想像するのだ。そのポジティブな自分をイメージしながら、マイナスをプラスにしてゆく。理屈では判っていても、単純に、わたしの意思はそうはならなかった。素直ではない自分がいて、どこかで覚めている。いつもそうだった。その治療は医学的には最新の治療で、問題はないのだろうが、わたしには不向きのような気がした。一向に快方に向かわないので、わたしは、いつのまにか心理クリニックには足が遠くなっていた。

やることはすべてやった。精神医学の最先端も、わたしには効かない。もう、病院を回るのはやめよう。どうにもならないことだった。自分で受けとめ、なんとかしてゆくよりないのだ。そいつと自分といつも戦うのに、誰の助けもない。

わたしは、いつも鞆の中に、ブランデーの小壺と、文庫本と、ビニール袋と、リラックスできる仁丹やガムなどを入れていた。それがわたしの武器だった。

わたしのこの症状は姉妹では、一番上の姉に出ていた。遺伝もあるのだろうか。おふくろが、我が家では元祖であった。実に四十年以上も、そのパニック障害と戦っていた。いや、本人は戦

ってはいない。そのために周りが犠牲になっていた。

すべての源はおふくろだった。今年、八十一になる老母が、いまだに自分の本当の病名を信じようとはせず、滑稽にも騒々しいパニックな日々を送っているのだった。

第649話 パニックな日々

八

おふくろは、若いときから親父の浮気に悩まされていた。おふくろを病気にさせたのは、すべてそれが原因だった。

自分は心臓病だと長い間信じこんでいて、ことに年取ってからは頑固で、それを否定するものを許さない。

「今朝も心臓発作が起きてね」と、誰も耳を貸さないのだが、日常会話の「いい天気ですね」ぐらいにしか聞いていない。普通なら心臓発作というと、救急車だ。何回もやれば死に至る危険がある。ところが、おふくろの場合は精神的な思いこみだから、三日に一回発作がくる。年に百回以上。十年で千回、四十年で四千回以上の発作だ。これはギネスブックに載るに違いない。

ありえないことも、ありえるのが病気だった。

症状はわたしと似ている。心臓が止まりそうになり、息苦しく、汗が出てくる。手足が冷たくなり、極度の不安に襲われる。それで、いつも行きつけの病院に通うのだが、医者は、心臓は悪くないという。それがおかしいとくっつかかる。医者は相手にしないように、「うるさい」と背を向けてしまったという。

「もう、あそこの病院には二度と行くものか」と、おふくろはまた病院を変えた。おふくろにとって、いい病院、いい医師というのは、なんでもおふくろの云うことをはいはいと聞いて、病名を付けてくれるところだ。

「わたしは狭心症ですよ、先生」と、おふくろが訊いて、それなりの薬を出してくれる医師がいいのだが、果たしてその薬はただのビタミン剤であったものかどうか。最近疑って、医者からもらう薬の判る本というものを買ってきて、照合したりしていた。

親父は毎日毎日、恨みごとのように、かつての復讐のように傍に座って、心臓のことばかり聞かされる。まあ、自分が引き起こしたことだから当然の報いなのだが、それにしても無期懲役に近いくらい、死ぬまで病気で責められる執拗な刑は耐えがたいものがある。それは本人だけでなく周りの家族もだ。

親父の右側にいつもおふくろが座っていたが、ぐちゃぐちゃと喋るので、親父の右耳は拒絶反応を起こしたのか、聞こえなくなっていた。それで耳鼻科に通っていたが、どうしても補聴器を付けたがらない。付けばうるさいから、付けないほうが静かでいい。馬耳東風だから、今度は嫁に病気の話責めにする。ボケもあって、同じ話を何千回と聞かされると、誰でもどうでもよくなる。終いには聞く耳持たない。その話になると、嫁はさっさと逃げる。

「酷い嫁だよ。思いやりがこれっぽっちもない」と、嫁姑の仲がそこから険悪になってきた。

「わたしが発作で苦しんでいるというのに」

いつかの夜は、みんなが心配どころか相手にしないので、ひとり居間で自棄酒を呑んでいた。もともと酒には強いおふくろだ。一升の半分空けてもけろりとしている。

「心臓病患者が酒豪だって聞いたことないわ」と、嫁は云う。

「それが精神的な病気なんだから、我慢しろよ」と、わたしが宥めすかせる。パニック障害が半世紀にも渡れば、どんなことになるかという凄い見本がおふくろだった。自分では絶対に精神的な病気ではないと、確信している。そんな本を渡しても却って怒って読みもしない。

いまは、商売熱心な病院にかかり、適当になんにも効かない薬を処方してもらい、たまに入院したりしている。そうした患者は暇な病院なら、いいお客さんだ。ただ、迷惑なのは同室の入院患者だった。おふくろが入院して、もともとお喋りなおふくろが、機関銃のように相手に云わせないで、一方的に話をするのだから、周りの患者の容態は悪化した。次々に犠牲者が続出した。わたしたち家族はあまりに煩いので、入院するとほっとしたものだ。おふくろのいない家はこんなにも静かで安らぐのかと思うほどだ。

いっそ、医師にお願いして、当分出さないでおいてくださいと頼みに行こうと思ったくらいだ。ついでに住民票も移そうかと。

家には、おふくろは毎日三度は検温、血圧測定をしている。

「熱があるよ。三十六度五分もある」と、ひとり騒いでいた。自分の平熱が三十五度五分だから一度も高いと、まるで日本脳炎とチフスとコレラにかかったような騒ぎ方である。

いろんな薬を普段から飲んでいたおふくろは、健康オタクでもあった。いろんな人に勧められたり、雑誌で見たりすると、すぐに栄養食品や健康茶を購入するのだ。家の中はすっかりと病院ムードになってしまう。椎茸茶、酢豆、黒豆茶、なた豆茶、青汁、ローヤルゼリーとまだまだ長生きするつもりなのだ。

このパニック障害は、生に対する執着心の強いものなるのだと思う。死ぬことを極端に恐れているものが、反応するのだ。その弱さはわたしが引き継いでいた。多分、臨終のときは人一倍苦しみ、泣きわめき、往生際が悪いと云われるのだろう。一生、病気とつきあってゆき、あちこち痛い、悪いと、まるで病気が趣味のようなおふくろは可哀相な人だ。親父もぼつりとそう云った。

「みんな、見ておくれ。今日は三十七度も熱があるんだ。これで立派な風邪だよ」 妙に誇らしげで、威張っている風邪ひきは、自分が病気であることで、家族の同情を引き、何もしなくてもいい免罪符を手に入れて喜んでいるのだ。

そんな母親の姿を見て、わたしは、反面教師として、自分は絶対に克服してやると、これからも無様な姿を曝さないよう、たとえ発作が起きようが、微塵もうろたえたりしないよう務めた。いままで人にこの病気のことを話したことはなかった。

どうせ、話しても理解できない病だからと。ところが、あれから二十五年経つと、マスコミも取り上げ、芸能人もテレビで、自分もパニック障害であると告白し、いろんな本も書店で売られている。如何に現代が病んでいるかということであり、精神的にストレスからおかしくなる患者が増えているのだろう。

隠れキリシタンのように、世間に虐待を受けてきた患者たちは、ようやくその病気の信仰を世に認められることとなり、みんな暗い世界から顔を出してきた。

第650話 パニックな日々

九

どんな病気でもそうだろうが、精神病でも、このような体に変調をきたすものは、思考のほうはしっかりしているので、常人と変わるところはない。

この病気に罹った人には三通りのタイプがあると思う。一つは、おふくろのように、自分が心臓病であると思ひこみ、精神的なものとは信じないタイプ。医者をおちこち変える人である。二つ目は、病気に負けて、引き籠もり、外出もできないタイプ。三つ目は、病気と戦い、積極的に向かってゆくタイプである。癌患者にそのパターンを適用して調査したら、病気に負けた人の十年後の生存率はゼロであった。逆に克服してゆくタイプの生存率は九割と高い。それで、病は気からという科学が研究されている。

病気の多くは気からきているのではないか。その典型的なものがパニック障害だった。気の弱い隙間をそいつが狙っているのだ。わたしは、自分が臆病なのは小さいときからで、精神的に弱い人間だった。それを叩き直す必要があった。

わたしたち夫婦に長男が生まれた。これから父親となり、一家を支えてゆくのに、そんな訳の判らない精神的な病でぐたぐたしてられない。そんな気がしていた。

そんなときに、我が家にアメリカから交換留学生がホームステイすることとなった。親父が世話好きで、これで外人を滞在させるのは四回目だった。今度も長く、この街の三家庭を二年で回るというから、半年以上はいるわけだ。マークという高校二年生で、日本語は来る前に勉強してきたようで、ある程度、話せるし書けた。将来は国際弁護士になるという。デカプリオのような甘いマスクをしていて、頭もよかった。

彼が、日本にいる間に合気道を習いたいというので、わたしもつきあうこととなった。毎朝、六時に起きて、彼とジョギングして道場へと向かう。早朝稽古は、四段の先生が来ていて、二人にだけ教えた。あとの会員は夜の稽古だから、顔を合わせることはない。

毎朝一時間近く、関節の体操と、呼吸法、受身の練習に木刀の素振り、そして技に入る。わたしはただ精神的に強くなりたかった。投げられ、投げることで、自分を痛めつけ、気迫を自分につけたかった。腹の底から気合を入れて、木刀を振る。それを受けて交わす。気を出す訓練も毎日していた。気というものが狂ったのであれば、それを自分でコントロールすることができたなら、逆に支配することができたら、こんな正体のない病気も、手なずけることができるかもしれないと考えた。

これはうまくいった。合気道の道場に通ううちに、あの発作が全くなかったのだ。椎間板ヘルニアをやったときも、整形外科に通い、機械で腰を引っ張ってもらってもなかなか治らなかった。針灸にも通ったが駄目であった。それで何ヶ月か合気道を休んでいたが、治らないので諦めて、また道場に通り、バタンドタンと投げてもらったら、これが不思議とけろりと治っていた。

自分の体を神経質すぎるほど労わるよりは、荒療治に限る。毎日、汗をかいて、快い運動と精神鍛錬で、自分のひび割れ、どこか歪んだ精神にデフラグをかける。またきちんと整理されれば、空きが出てくる。そうすればフリーズを起こすこともない。

自分なりにいい治療薬をみつけたのはいいが、それ以上にストレスが溜まるのだ。この病気の元凶はストレスだから、それを取り除かねば、いつまでもいたちごっこになる。

ところが、丁度、折悪く、会社の業績が落ちて、だんだんと資金繰りも大変になってきていた。従業員の給与も遅れることになり、支払いも伸び伸びになった。そんな危ない会社にはいたくないと、経理も辞めたので、わたしが現場も見て、経理もみなければならなくなった。一挙に営業の幹部社員もやめたので、四人の仕事をひとりでやらねばならなくなった。当然、きちんとはできるわけがない。完璧主義で几帳面だったわたしは、そこで手を抜くことをひとりでに覚えた。しなくていいものは極力省くことにした。

どうして経理が逃げ出したか、机に座ってみて初めて判る。銀行から催促が来る。取引先から代金の督促。社員の家族から給与の遅延で文句がくる。一手に苦情窓口と、綱渡り経営のスリルを毎日、三時という銀行が閉る時間まで味わうことになる。それは、もの凄い重圧であった。

手形が落ちないと、走り回る。売るものはなんでも売った。株券、ゴルフの会員権、書画骨董。銀行には呼ばれ、取引先にはイヤミを云われ、四方八方に頭を下げて回る。

例の発作は毎日来るようになった。わたしは、昼から会社の机に向かって、ブランデーをラッパ呑みしていた。顔が赤く、ふらふらと倒れそうになり、社員の休憩室で寝ていたりした。若い社員たちは、そんなわたしの姿を見て、戦慄を感じたという。

いつも、耳の奥で金属を叩くような音がしていた。キンキンと、緊張して張り詰めた頭皮は、熱く、凝り固まっていて、中身はいまにも爆発しそうであった。そうなれば、もう酒も効かない。瞑想をするような状態でもない。休みどころか夜遅くまで仕事に追われた。山ほど溜まっていたのをかたずけるため、前よりも酷い超過勤務になつていた。遊ぶ暇もない。合気道もずっと休んでいた。

(死ぬことはないんだ)と、自分に云いきかせながら、発作に耐えていた。どこにも逃げ場はなかった。すでに会社が倒産する秒読みにはいつていた。その前にこっちが倒れるのではないか。それとも、精神がまっふたつに割れそうな気もする。

わたしは、会社の葬儀の日取りを決めた。大きな手形が飛ばし飛ばして溜まりに溜まり、もう避けて通ることはできなくなっていた。いつか詰まるとは思ったが、とうとう、捕まってしまった。

親父と相談した。Xデーをいつにするか。最後まで難色を示していた社長も、とうとう諦めた。意思決定はなされた。すると、どうしたことだろうか。すっーとわたしの中で病気の緊張感が抜けていった。

第651話 パニックな日々

終章

パニック障害を発病して二十六年が経っていた。ストレスを溜めないよういくら注意しても、だんだんと環境は悪化してくる。ますます病気は酷くなる一方だった。

会社が破産して、すべてを失い、女房が家を出て行ったりで、神経の休まるときはなかった。その後、転職して、自営業となり、再婚もした。子供たちはみんな社会に出て、親の役目も終わろうとしていた。気がついたら五十も越えていた。

だんだんといい方角に向かっているのに、ストレスはついて回る。連れてきた嫁と姑の戦争が始まる。老父母はあちこち病気だとそろそろ介護も始まろうとしていた。商売のほうも世の中の不況に関係なく楽ではない。

いまは、そのパニック障害の研究も進んで、メカニズムも判りかけてきていた。いい薬も開発されて、直る病気になるようとしていた。ただ、問題はそれを信じない病気の狂信者たちをどうするかだ。おふくろは、毎日のようにうるさい。わたしもだんだんと親に似てきて、血圧を測るようになってきた。その病気は伝染するようで、嫁も最近、似た症状を示すようになっていた。一家で、同じ症状でドタバタとうるさければ、まあ、同病相憐れむでいいが、寝たり起きたり、誰かが毎日酒盛りしていたり、実に賑やかな家庭になる。

わたしも大きくはこなくなったが、小さな発作はしょっちゅうある。土曜の午後恐怖症というのがある。だいたい、土曜日の午後になれば、何か家人に病人が出る。病院はどこも閉っていた。明日は日曜だ。月曜日まで診察はできない。そういうときに限って病気になる。パニック障害も、土曜の午後が多い。一週間の疲れがどっと出て、明日は休みだという安心感から、緊張感が解れると、その隙間に発作がやってくる。

わたしは、自然志向だから、おふくろや嫁のような健康オタクではなかった。それが、最近健康には留意するようになっていた。

畏友の戯曲作家が、つい先日脳梗塞で入院した。左手が痺れてタバコをぽろりと落したという。そろそろ五十を過ぎたら、あちこちガタがくる。これから十年以上もまだまだ働かなければならない。しかも、子供たちが順番に結婚してゆく、これからは金がかかる。倒れていられないのだ。

それで、新聞広告で見た通販の栄養剤を取り寄せて飲んでいたりした。カルシウム、ビタミンC、D、E、B各種、レシチンにローヤルゼリー、黒酢にノコギリなんかエキスといろいろ、ザクザクと食べるように飲んでいる。それだけで腹がいっぱいになるようである。

以前はこうではなかった。日本人というより現代人の不思議さを嘲笑っていた。こんなに食糧が豊富で、栄養不足だと、笑わせるな。飢えと栄養失調で苦しんでいる人々でもあるまいに。断乎としてそんなものは口にはしない。と宣言していたのに、だんだんと人間が弱ってきたのか、マスコミの口車に乗せられたか、わたしも健康宗教の信者になってしまった。

いまも、女房と市内のドラッグストアへ出向き、あれこれと健康茶や、ダイエットフーズを眺めては買ってくるようになった。これからも飽食の時代、成人病大流行りで、この商売は笑いが止まらないだろう。自然の食物から摂取するのが一番いいに決まっていると知ってはいても。

これには防腐剤が入っている。人工着色料だ、農薬漬けの野菜だと、神経質になっている人々を軽蔑していた自分も中年になってくると、次第に同じことをしていた。

ストレスのない世界に住みたいというのがわたしの希望だった。この日本にいては殺される。後、十年頑張ったら、南の無人島で暮らそうと計画を立てていた。それもひとつの病気で、無人島で暮らしたい症候群というのがあるそうだ。

今日も、朝から何かぱっとしない。具合が悪いのは起きがけで判る。きっと、発作が来るだろうというのが、朝から判るのだ。そんなときに限って仕事が忙しい。休めない。いや、どんなに熱があっても、具合が悪くても店を休んだことはない。自営業だから、好きなときに休んでもというわけにはゆかない。日銭で稼いでいるから、今日の上がりか明日の米代だったりする。

そんなときに血圧は高くなっていた。後頭部がぴんと張っている。友人のように中るのかなと、頭皮を揉んだりして緊張しているところが、大抵は痛いので、そこを重点的にマッサージしたり、首の付け根を叩いたりしていた。

店で仕事でパソコンを叩いていると、来るな、来るなと予感が働く。手にじっとりと汗が出てくる。おや、地震かな。また揺れている。毎日、自分だけ震度3だ。もし、本当の大地震でも、発作だと思って、逃げなかつたりしたらどうしようか。神経質な人間は杞憂ということもあれこれと考える。臆病だから細かいのだ。考えても仕方のないことをあれこれと考え過ぎる。それが病気を作る。

ふらっとなってきた。心臓が止まりそうだ。ほら、来た、来た。立ち上がる。体を左右に振る体操を試みる。机の下からブランデーを出してぐいと飲んだ。効かない。ビニール袋を出して、息を吸う、腹式呼吸で吸って、腹の底まで吐き出す。イメージ法だ。楽しい思い出を出そうとするが、女房に逃げられたときだとか、借金に追われているときが、走馬灯のように、いや、いまはそんなものはないのだ、スライドショーのように画像を回す。推理小説の文庫本を読む。その世界に没頭すればいいと、読むうちに、破産した暗い主人公が出てくる。これは駄目だと本を閉じる。合気道の関節運動。一度にすべてのことをやっていた。夕方になっていた。どうしよう、このままぽっくりと心臓発作で死んだら、仲間はみんな遺稿集ぐらい出してくれるだろうか。それとも、毎日のくだらない小説から解放されてせいせいするだろうか。残された妻は、保険金が入って、別の若い男と、いやいや、いろんな不安がこみ上げてきて、いても立ってもいられない。わたしは、心臓を押さえたまま、すぐ店の裏にある病院に行こうかどうしようかと、焦っていた。駄目だ。ここで、誰にもみとられずにぽっくり死んで、明日の朝、死体で発見される。それも嫌だ。動悸が激しくなる。もう限界だ。やはり行こう。嫌、死ぬことはないんだ。これはただの精神的なものなのだ。でも、本当に死んだら。ああ、苦しい。よし、行こう。病院へ。わたしは、シャッターを下ろして、サンダルをひっかけたまま、裏の病院に走った。六時だった。病院の電灯は消えて、ドアにカーテンが引かれ、閉っていた。

第652話 セメンダイン臭い女

洋輔に新しい彼女ができた。街で拾ってきた。まるで落ちていたように、本当にその辺にいた美女を拾ってきた。

ゴミの集積場の横の階段に腰掛けていた若い澆刺とした女の子だった。年のころは二十歳前というところか。洋輔よりは少し下だ。肌が光っていた。ミニのワンピースが、未来の服装のようにジュラルミン色に輝いていた。髪の色は本当の金色で、染めているようでもない。まるで、CGIで描いたような、アニメのキャラのような顔をしていた。普通の人よりは目がやたらに大きい。どうも、日本人離れしている。

「よう、可愛い子が、ゴミと一緒にだなんて、似合わないよ」

深刻な顔をして、俯いている女の子に洋輔は声をかけた。どこから来た子なのだろうか。この辺ではみかけない。すると、女の子はぽろりと涙を流した。

「わたし、行くところがないんです。棄てられたんです」

酷い。と、洋輔は思った。こんな美人を棄てるやつが世の中にいるのか。きっと、もてて困っているプレイボーイだろう。それに引き替え、おれのようなしががないバイト学生には、彼女もできない。と、洋輔はボヤいていたところだ。

「行くところがないって、それじゃ、うちに来るかい。狭いアパートの部屋だけど」

洋輔はドキドキしていた。冷静を保つのがやっとだった。女の子をナンパしたことなどなかった。自分でも思いきった言葉だとひやりとした。

「ええ、わたし、あなたについてゆく」

(嘘だろう?) 内心、洋輔は驚いていた。こんなにも綺麗な子がすんなりと誘いに応じるとは、自分もまんざら捨てたものでもないなと、少しは自信が持てた。ただ、あまりにも素直で、知らない男にのこのこと付いてくる女の子も怖いものがあった。

(何か理由があるのだろうか。バックにちんぴらがいたりして、最近はデイト商法というものもあるし、すんなりとおれのようなブ男にこんな美人が靡くはずがない。きっと、後で、高い買物をさせるのだ)

「やっぱりやめとこう。何か魂胆があるんだろう。ええ? 目的はなんだよ。金なら、ぼくは貧乏学生だから、学費もようやく払っているんだ。親からの仕送りはないしな。君とつきあうほどの余裕がないかもしれない」

洋輔ははっきりとさせたほうがいいと思って、面と向かって問い詰めた。

「わたし、そんな、つもりじゃ、ないん、です...」

と、女の子はしくしくと泣きだした。どうも嘘をついているとは思われない。

「だって、おかしいだろう。初対面の男のところに転がり込むなんて、どうみても普通じゃないだろう」

「いいんです。わたし、ゴミと一緒にまた座っていますから」

女の子はいじけて、またゴミの山積みになっているところへ行こうとする。

「判ったよ。本当に、君を信じていいんだね。なんの企みもないんだな。でも、これからぼくの狭い部屋と一緒に住むのに、何の抵抗もないの？ ぼくがどんな男か知らないじゃないか。怖くないの？」

「絶対にご迷惑はおかけしませんから、おいてください」

「困ったな。男と女と一緒に住むということはだな、それなりの覚悟というか、なんというか、愛がなければならぬんだ」

「アイ？」と、女の子は不思議な顔をした。まるで、いままで話していた言葉は理解していても、愛という概念が判らないように。

「ああ、テレビドラマでやっているあれね。わたし、あなたのために尽くします」

「おいおい」

洋輔はまだ疑っている。こうもできすぎた話にはきっと裏がありそうで、いいのかな、と半信半疑でも、とうとうアパートまで連れてきてしまった。どこかに隠しカメラがないのかと、辺りをきょろきょろ見まわしていた。よくある、男の意思を確かめるくだらないテレビ番組がある。それかもしれないと。

「ここが、ぼくの部屋だ。むさいけど、どうぞ」

「まあ、綺麗にしているわ」

洋輔は多少神経質なところもあり、綺麗好きだった。六畳一間にバストイレ付、台所も小さいが付いている。

「なんか、食べるか。おなか空いていないか」

洋輔は料理も得意だった。レストランでバイトしているから自然と覚えた。

「ううん、わたしは平気、全然おなかは空かないの」

きちんと正座している長い足の太腿からちらりと下着が見えた。洋輔は無理に笑おうとしていた。自分の頬をつねっていた。夢なんかではない。もう、今日からはひとりではないんだ。彼女ができた。しかも、同棲生活が始まろうとしている。

そのとき、ぱーんと女の子から臭ってくるものがあつた。サロンパス臭い女の子というものもあるが、これは、何の臭いだったかな。洋輔は盛んにくんくんと鼻を動かすので、女の子はバツの悪そうな顔をした。

「何か、君から臭うよな。ええと、そうだ、セメンダインの臭いだ」

すると、女の子はまたも悲しそうな顔をして、いまにも泣きだしそうだった。

「わたしのこと、嫌い？」

と、いきなりそんなことを聞くから洋輔は慌てる。

「そんな、嫌いも好きも、そんな関係じゃないだろう。たったさっき、初めて逢ったというのに」

「じゃ、わたしを好きになって。絶対に棄てないって約束して」

女の子は指きりまで迫ってくる。洋輔ははにかみながら、どぎまぎして、恋という暫くご無沙汰していた感情を思い出していた。

「うんうん、君こそ、ぼくのような男を利用するだけして棄てるなよ」

そう云って、二人はいつか抱き合っていた。

(それにしてもセメンダイン臭いな) なおも、くんくんと鼻を動かしていたから、女の子は白状するように、ポケットからセメンダインを出してきた。

「わたしを本当は嫌いなんでしょう」

「そうじゃないって、でもどうしてセメンダインなんか持っているの。これから二人で暮らしてゆくんだ。秘密はお互いに持たないことにしようよ」

「じゃ、みんな話すけど、絶対に棄てないでね」

と、女の子は自分の片方の腕を外してみせた。洋輔はぎょっとして、後ろに飛んだ。

「ほらね、腕が取れちゃったの。セメンダインでくっつけているけど、首はくっついたようだけど、前のご主人が壊れたからって棄てたのよ」

「き、君は、い、一体」

「そうら、嫌いになったんでしょう。わたしのこと好き？」

女の子が迫ってくる。洋輔は恐怖で退いていた。

「ば、バカな。何が、愛だよ。何か好きだよ。おまえは、ただのプラモデルじゃないかよ」
最近の玩具は精巧にできていて、人間との区別もつかない。

第653話 選挙と握手

選挙になると、あちこちから電話と手紙が来るだけでない、次々に立候補者の事務所から本人だけでなく、その息子や後援会長などがやってくる。特に、商店街は狙われる。

北村の古本屋みたいな従業員もいない、社長兼仕入担当兼経理部長兼掃除係みたいな小さな零細な商店にまで入ってくる。

商売をやっていれば旗色は見せられない。北村の本屋は小さいが簡易印刷もやっているの、いろんな党からビラなどの印刷もあるのだ。通販でよく本を注文してくれるお客が立候補した。わざわざ店に顔を出した。

「よろしく応援してください。頑張っているようですね」

と握手を求めてくる。その握手だ。北村は照れもあるが、何か、握手が嫌いであった。いや、北村だけでなく、日本人は握手をする習慣が普段からないから、握手というのは政治家が選挙のときにするものだという気がしていた。

「ええ、わたしも一票入れますから、是非当選してください」

と、北村は笑っていたが、腹の中では、

(商売は商売、おれの支持政党は違うんだよ。それに、握手だなんて馴れ馴れしい)

と思っても顔には出さない。

何分もしないうちに、別の対立候補がやってきた。今度は町会長が一緒だ。町内の印刷をやっているから、ここでも嫌な顔はできない。にこにこ北村はスマイルで、

「ええ、わたしは、お宅に投票しようと思っているんです。感激だなあ」などと、大袈裟なりアクション。また握手と来る。綺麗な女の人なら握手してもいいが、何でおまえと手を握らなければいけないんだよ。と、思っても顔に出さない商売人。

ハグったり、そのうちチューまでしてくると、妙な気をそそられる。北村はトイレに行って、手を洗っていないことに気がついた。もし、大腸菌からとんでもない病原菌が手から手に感染していったら。北村は思い出した。若いときに友達と麻雀をしていて、その友達からインキンをうつされたことがあった。もし、この町内で誰かがインキンだったら、そして、候補者が全世帯にインキンを配達して歩いたら、それはもう大変なことになるではないか。

北村はそんなありえない想像をしていた。

電話がひっきりなしにかかってくる。

一〇〇候補ですが、よろしくお願ひします。誰誰さんのご紹介でお電話さしあげました。

一ええ、ええ、わたしも応援しています。頑張ってください。

切ればまたかかってくる。これじゃ、営業妨害だ。休む暇もない。と、また別の候補者が店にやってくる。今度はもうひとりの候補者とかちあった。外で待っているようだ。

「いやあ、懐かしいな、古本屋さん。わたしも、よく神保町には通った口でしてね」

「ああ、そうですか」と、北村の反応は冷たくなりかけていた。

「みなさんがた、中小企業のお力になりますぞ。貸し渋り対策はわが党のマニフェストにもあります」

「ああ、そうですか」

すかさず、電話攻勢。

一いやあ、お久しぶり。ほら、忘れたの？ 小学校のときに隣のクラスにいた〇〇ちゃんの従妹の喧嘩相手の美津子よ。いま、選挙運動手伝っているの。

と、云われても、よくよく考えてみれば親しくともなんともない。赤の他人で名前も知らない。

一ああ、そうですか。

北村はだんだんと無反応になってくる。いちいちおべっかを云うのも疲れてきた。

外ではマイクで名前を連呼する。選挙カーが次々にやってくる。店の玄関で、何かもめている。

「わたしが、先に来て並んでいるんですから」

「ちゃんと、順番を守ってください」

北村が何事かと出てみれば、店の前に候補者が列をなしていた。そこで、北村、用意していた整理券を候補者たちに配った。

「さあ、順番を守ってくださいよ。喧嘩しないで」

十人以上は並んでいた。

今度の選挙は、四人選ぶのに四千人が立候補していた。千倍だ。世の中、就職が厳しくなってきたら、こんなところまで就職難のしわ寄せがきていた。

そして、朝からの握手攻め。このときはみんな外人になる。それにしてもやめてもらいたいあの握手。本当に握手をするときは、感極まったときぐらいで、よほどでない、日本人は特有の

間をおいて、触れることはしないものだ。

北村の店の向かいに商事会社があったが、本当は暴力団という噂だった。それを知らないで、候補者が事務所から出てきたスキンヘッドのヤクザと握手していた。それを誰かが、カメラに収めた。絵になっている。でも、ちょっと危ない。握手も相手を見なければ。

手から手へ、何かの菌が感染していった。その菌は欲に繁殖する。オスバン液の三パーセント溶液で手は殺菌消毒すべし。

第654話 おしおき

「おしおき」という言葉も使われなくなった。親の子供が悪さをしたときに使う言葉であったのが、最近はすぐにそれに連想して、鞭が出てきて、ハイヒールと、別の意味で使われている。

家庭では、親は子供を叩けなくなっていた。学校でも先生が生徒を叩けない。暴力は、どこまでがそう呼ばれるのか。愛の鞭でも暴力なのか。そして、暴力イコール戦争という図式が現代人の脳裡に焼き付いて、ともかくも叩くことはいけないことなのだ。

わたしたちが小さいときは、親にはよく叩かれ、先生にもコブができるほど薪で叩かれ、先輩には整列させられ、鼻血が出るほど殴られた。それでも、いまのような事件にもならなかった。いまは、先生がコブをつくと、新聞には頭部創傷、全治三日、暴力教師と書かれるのだろう。

夫婦喧嘩も、もし、奥さんが弱かったら、一方的な夫のDVと訴えられる。けれど、奥さんも対等に強かったら、夫婦喧嘩は双方が青タンに切り傷、擦過傷。その場合は喧嘩両成敗で、どちらも裁かれるのだろうか。昔から夫婦喧嘩は犬も食わなかったのが最近では社会問題にまでなる。

確かに、暴力ばかり振るう飲んだくれで、仕事もしない夫がいるものだ。そんな夫が怖くて、なかなか逃げ出せない。いつも、殴られ、耐えている妻も多い。

北村家では、世間の逆だった。妻の元子があまりにも強過ぎた。道を間違えて、北村家に嫁に来たのだが、本来は、女子プロレスに行くべきであった。

北村拓也は、いつも飲んで終電に乗り遅れると、友人の古川の家泊まった。

「困った。どうしようか。終電の時間が過ぎてしまった。殺される」

拓也は酔いがすーっと醒めていた。元子の鬼のような顔が浮かんでいた。

「おまえが、次行こうと誘うからだろう。どうしてくれるんだ」

古川は首を振って、

「斎藤だって、連れまわしたんだ。帰るといっておまえを引きとめたのはやつだ」

とか、責任の擦り合いをしていた。北村の女房が怖いのは評判だった。

「なあ、頼むよ。また、電話してくれよ」

「判った。今夜は、うちのかあちゃんにも電話に出てもらおうから」

時計は零時だ。拓也は古川と二人、へべれけになって、古川の家へとタクシーで向かった。拓

也はかなり遠いところに家があるのでタクシーでは高くつく。それで、帰りそびれたときはいつも古川の家泊めてもらうのだ。

「さあ、到着したぞ、家でまた飲み直そうぜ」

家に入るなり、拓也の携帯から電話を入れた。

「ああ、夜分すみません。古川の家内ですが、うちの人と拓也さんが、飲んで、今日はうちに泊まりますから。いいえ、大丈夫です。本当に、こちらこそ、いつもお世話になってしまって。」

と、古川の奥さんが電話をした。携帯は拓也に代わった。

「ということなんだ。別に女のところに泊まっているわけではなく、怪しくないから。」

「うるさい。もう帰ってこなくていいよ。怪我をしてもいいなら、戻っておいで。」

拓也はまたすーっと酔いが醒めていた。震えながら、やたらに酒を呷っていた。

アリバイを作るために電話しているように思われていた。古川もグルだと疑われていた。男は悪いことをするときには結託するものだ。そこで、古川の女房に間に入ってもらった。女同士なら、そうきついことも云わないだろうと拓也は考えた。

明日は怖い。拓也がぶるぶると震えていると、古川は、

「ああ、いいものがあるんだ。何か大変なことになったら、この笛を吹いたらいい」

と、拓也に奇妙なホイッスルをくれた。

「なんだ？ これ」

「それは、不思議なものなんだ。ここだけの話にしてくれよな。それを吹くと、お助けマンがやってくる。しかも政府公認のだ」

「なんだって、マンガの見過ぎじゃないのか。昔、海底人ハヤブサというのがあったよな。8823謎の人...」と、拓也はバカにしてアニメソングを歌いだした。

土曜日に飲んで泊まったら、朝帰りとなる。できるだけ、朝早く、一番の電車で帰ることにしていた。日曜日だから、きっと元子はまだ寝ている。玄関のドアをそっと開け、静かに階段を上がってゆく。いまは夫婦別々の部屋で寝ていた。廊下も足音をしのばせて、すり足でそっと歩いてゆく。そして、自分の部屋のドアを静かに開けると、そこに元子が立っていた。

「ふふふふ」

と、笑っている。指をポキポキいわせている。と、最初の一撃があった。空手チョップだった。拓也はぶっとい元子に比べたら、ひ弱な男だ。瞬く間に壁にするめのように叩きつけられていた。

「てめえ、調子に乗りやがって」

攻撃の手は緩めない。

「勘弁してくれ。頼む。許して」

咄嗟に、拓也はホイッスルを口にくわえて、吹いていた。何の音もしない。あいつに騙されたかと思った。だが、それは人間の耳には聞こえない、犬笛のようなものであった。吹いてから、三分経ったときに、窓辺に何者かが立っていた。殴られ、鼻血にまみれた拓也は必死の思いで、窓を開けた。そこから、人間大のロボットが入ってきた。

「なんだよ。こいつは。人の家に黙って入ってきて」

元子は逆上して、ますます怒り狂う。ロボットは、そんな元子に近寄ると、ひょいと元子を抱

きかかえ、徐に元子のお尻を叩きはじめた。

「いやあ、何するのよ」

聞いたこともない、元子の嬌声。どこからあんな声が出るのだと拓也はぞっとした。あの荒荒しい元子が、ロボットの手にかかると、急に女らしくなったのだ。

「き、君は一体、誰なんだ」

すると、ロボットは電子の声で云った。

「ワタシハ、オシオキロボット。セイギノミカタデス」

それからは、政府公認のおしおきロボットは、親の云うことをきかないで、家庭内暴力でてこずらせている家庭にも現れ、息子の尻を叩いた。学校でも学級崩壊して、手のつけられない生徒たちの前に現れると、尻を叩いた。人間が人間を叩くと罪になる。ロボットなら、大丈夫なのか。

ところで、そのロボットは誰が操作しているのだろうか。それが問題だ。

第655話 おへその秘密

原子鉄巳は、大学を卒業すると、輸入商社に入った。長身ですっきりしたマスクが受けて、営業に配属させられた。学卒の中では、一番の好青年と、女子社員たちが騒ぐほどだった。大学のときは、サッカーをやっていた。大学対抗リーグ戦ではポイントゲッターであった。

何故か、そんな格好のいい鉄巳なのだが、女の子たちにもてまくっていたわりには、特定の彼女をつくったことはない。彼女どころか、母ひとり息子ひとりの家庭だったから、遊んでいる余裕もなく、夜はバイトで忙しかった。

鉄巳の父親は科学者だったが、鉄巳が生まれてまもなく亡くなった。母も大学卒業間近で、病に倒れ、仕事の無理が祟って、帰らぬ人となっていた。遠い親戚はいるらしいが、普段からつきあいもなく、鉄巳は天涯孤独の身になっていた。

「原子君、成田空港に、服飾デザイナーのサンテラさんが来日するから、田畑君と一緒に迎えに出てもらえんか。どこかで食事してから、本社にお連れするように」

と、常務に指名されたのも、ホスト役にぴったりの鉄巳だからである。喜んだのは、三年入社組の鉄巳より一個上の田畑のどかだった。みんなの羨望の眼差しがのどかに集まる。

「原子君って、運転うまいのね」

助手席に座って、高速道路を走りながら、のどかは仕事とはいえ、何かデートをしているような想像にひたっていた。

「当然、彼女はいるんでしょうね」

のどかは終始、鉄巳のプライベートなことに興味をもってつついてくる。

「いません」「いままでは何人もいたんでしょう」「いままでも、ひとりもいません。そんな暇ないっすよ」

それが、社内では七不思議のひとつだった。みんな誘いたがってうずうずしていた。いつかは、酔って抱きついた女もいたが、スマートに拒否された。男性社員も、鉄巳と一緒にサウナに入ったものは皆無だった。どうやら、人に裸を見せたがらないようなところがあるらしい。

いつか、女子社員たちの間では、それが、何か肉体的欠陥を隠しているんじゃないかとか、いろんな噂が流れていた。

確かに、鉄巳には人に云えないある秘密があった。それはおへそに関することであった。生まれたときから、鉄巳のへそにはバンソウコが貼られてあった。それは、ひどく恥ずかしいものだから、絶対に人には見せてはならないと、母にも口癖のようにいつも云われて育ってきた。でも、当然、鉄巳はそっとバンソウコをはがして、自分のへそぐらひは見ていた。幼稚園に入って、みんなとお風呂に入ったときも、へそだけは隠していた。みんなが、それをからかう。すると、ますます鉄巳は隠そうとするのだ。その頃から、自分のへその形とみんなのとは全然違うということに気がついていた。

母に泣きついて、

「どうして、ぼくのおへそは、みんなのと形が違うの？」と母にかかっていったことがある。そのことはいつか本人が悩むだろうと母は知っていた。いつかは、云わなければならないと思いつつ、ついに云いそびれていた。

訊いてはならないタブーということが暗黙の了解で、大きくなるまで母との間にへそのことは口にしないというキマリができていた。それがあつたため、鉄巳は修学旅行でもみんなと風呂には入らなかったし、人前で服を脱ぐのも嫌がった。一度は先生にも呼ばれて、事情を訊かれた。

「原子君、何も、出べそなんか恥ずかしいことではないんだよ。先生だって、ほら、出べそなんだ」と、先生はシャツの下から大きな出べそを見せてくれた。

「違うんです。ぼくのは……」

鉄巳にはそれ以上のことが云えない。たとえ云ったところで、見せたところでみんなは笑うだけでとても信じてはくれないだろう。

そんな肉体の秘密を持っているから、二十三になるまで彼女のひとりもいなかった。自分は人とは違う。決定的に違うのがへそだった。

鉄巳は、恨みのへそをいつも自室でそっとバンソウコをはがして見ていた。それは、ボタンだった。プラスチックでできたボタンがついているのだった。その横にはレバーが付随している。

鉄巳の母が亡くなるときに、今わの際に鉄巳にそのことを話した。

「いいこと、お父さんがね、あなたのために、おへそを作ったのよ。何か、これからの人生で大変なことが起きたら、そうね、絶体絶命のときに、そのおへその横のレバーを引いて、それからボタンを押すのよ。判ったわね」

そこまで話して絶命した。どうして、科学者の父が、鉄巳の体に細工をしなければならなかったのか、しかも、まだ赤ん坊のときに手をかけている。きっと、自分は父の研究のための実験台にさせられたのだ。鉄巳はそう思って、顔も見たことのない父を恨んだ。

「原子君、悪いが、来週、ミラノに飛んでくれないか。サンテラが、君をひどく気に入ってね、君となら商談が進むようなことをほのめかしていたというんだ。通訳には現地の商社マンをつけ

るから、安心して行ってきたまえ」

入社早々、大きな仕事の大役を仰せつかった。自分で大丈夫だろうか。鉄巳は緊張した面持ちで、イタリア行きの旅客機に乗りこんだ。

飛行機に乗るのも生まれて初めてだった。慣れないから離陸が怖かった。海外に行くのも当然初めて。機内サービスのソフトドリンクをやたらがぶ飲みしていた。長い時間を飛行機に乗っていた。南廻りでヨーロッパへ行くのは骨が折れる。太陽を追いかけて飛ぶものだから、時間の感覚がまるでない。

飛行機がクエート上空にさしかかったときだった。突然、乱気流に巻き込まれたように、機体が大きく揺れた。シートベルト着用のランプが点いた。ところが、それから、信じがたいことが起こった。金属疲労だろうか、航空機の屋根が吹き飛んだ。それが、尾翼をもぎとり、すでに飛行機は飛行能力を失って、落下していた。乗客はパニックになり、何人かは機外に放り出され、座席ごともぎとるように急になくなったり、乗客は叫びながら、頭を低く押さえていた。絶体絶命だ。

「絶体...? そうか、そんなときは、このへそのボタンを押せと云っていた」

鉄巳はワイシャツの下のへそのバンソウコをはぐと、レバーを引いて、安全装置を解除してから、ボタンを押した。すると、次の瞬間、何が起こったのか鉄巳には覚えもないほどの展開だった。鉄巳の足の裏から、ジェット噴射が起こり、鉄巳の体は墜落してゆく飛行機から離れて飛行していた。

「そうだったのか、これは非常脱出ボタンだったのだ」

鉄巳はいつか鉄腕アトム之歌を口づさんで、空を飛んでいた。

第656話 ウサギとカメ

北村の家ではウサギを飼っていた。お客さんの家を仕事で訪問していたら、玄関に沢山のウサギがいたのを一匹貰ってきた。一羽とは書かない。何か、イギリスの肉屋で長い耳を紐で縛って、吊るして売っていたのが、鴨などと同じように見えた。やつらゲルマン民族は鳥のようにウサギを料理する。

生まれて一月の小ウサギを貰ってきたのが、騙されたように大きくなった。またよく食う。家の中で始めは飼っていたが、家人が臭いというので、玄関の前にウサギ小屋を置いた。

ウサギというのは静かな動物だ。鳴かないのは本当だ。どんな哺乳類でも鳴くのに、どうしてウサギは鳴かないのか。鳴くという意思表示がないから、要求が判らない。だが、一年半くらい飼っていると、だんだんと仕草で判ってくる。餌がないときは、餌皿を引っ繰り返す。一ご主人のバカ、餌が空っぽだろうが、早く入れやがれ。

と、云っている。檻をカリカリと掻く真似は、
一いつまでもここに入れておくな。たまに散歩に出しやがれ。

と云っているのだ。

北村拓也は、ウサギ年なので、何か、自分の分身のような気がしていた。そして、たまに、自分で鏡を見て、にっと前歯を出して笑い、ウサギのように可愛い自分をそこに発見するのだった。

女房の元子は、

「だんだんと、寒くなってくるのに、いいの？ 毎日外に出して、風邪でもひいたらどうするの？」

と、まるで過保護だ。

「いいんだよ、毛皮を着ているから」

拓也は冷たくそう云った。

「あなた、雨が強いから、中に入れましょうよ。ウサギって、水に弱いだよ」

と、またも過保護。

「何をバカなことを云っている。屋根があるんだ。それに、野生のウサギはどうしているんだ？ ええ？ レインコートを着ているのかよ」

かと思うと、直射日光が当たっているから、死んでしまうとか。

「バカな、野生のウサギは日傘をさして、野山を散歩しているのかよ」

ペットも子供もまったく同じであった。だんだんと野生から遠ざかる。文明の庇護のもとでなければ生きてゆけなくなってしまうのだ。

北村の仲間の橋本さんの家ではペットにカメを飼っていた。本人は可愛いと、デジカメで撮った写真を送ってくるのだが、どう見ても可愛いとは思わない。何という種類のカメなのか。まさかデジカメ？

カメは北村の友人の古川さんの家でも飼われていた。いまや、癒し系の人気動物なのだ。こうも、世の中がめまぐるしいと、スローライフの象徴のようなカメが人気が出てきた。

「そうよ、もうウサギさんの時代は終わったのよ」

と、橋本さんは勝ち誇ったように云うから、頭にきた拓也は、

「よし、それなら、どっちがすごい競争しようじゃないか」

とうとう、互いに可愛いと譲らない強情から、近くの公園にペットを持ち寄って、運動会をすることになった。

公園の草原で、まずはかけっこだ。それはウサギが早いに決まっている。

「ところが、なんとおっしゃるウサギさん。途中で寝るのに決まっています」

よーいどんと、スタートラインでウサギとカメを放す。ところがどうしたことだろう。どちらも前には進まない。とても人の命令をきけるほど頭がいいようには見えない。第一、真っ直ぐ前に歩かない。ウサギは、大好物のクローバーがあるから、ただ、ひたすら食べていて、その場から動こうとしない。カメときたら、じっと動かず、ついに手足を引っ込めて眠り始めた。

「何よ、あんたが寝てどうするのよ。話が逆じゃないのよ。寒くなってきたから、冬眠の体勢に入ったかな」

と、どちらもお話しにならない。

世の中、カメもウサギもいっぱいいたが、政治や経済の世界と同じで、思うように行かないも

のだ。足の速いはずのウサギも怠惰になった。地道にゆっくりと進むはずのカメも単なるなまけものになった。それで、この社会どうなるの？

第657話 夏海十六歳

北村夏海は高校一年の十六歳。中学のときまで、虐めがあって、一時、不登校になったことがある。郊外の生徒数の少ない学校だったから、一学年一クラス、三十人よりいない。

そんな狭い中で村八部にされたから、暗い三年間だった。いつも胃がきりきりと病んで、食欲がなく、いつ、何を食べて生きているのかと思うほどの少食だった。発育も悪いから生理も遅く、背だけは親譲りでひょろひょろと高いのだが、ガラガラだった。

田舎の学校は部落意識がある。親同士のいがみあいや噂、仲間外れといった悪いところをそっくり子供たちも縮図のように行っていた。狭いところだから逃げ場所がない。性格も当然暗くなる。家でもあまり喋らない。何かあっても部屋に閉じ籠って泣いていた。

そんな夏海も、街中の高校へこの春、進学したのだ。いままでは全校生徒合わせても百人もいなかった中学から、いきなり千人を越す高校へと進んだから、逃げ場所はいくらでもある。いろんな地域から来る友達も一挙に増えた。

部活は、担任の先生がコーチをしていたので、勧誘されるままにフェンシング部に入った。母の元子は、入学祝に携帯電話を買ってやった。それが、友達を増やすコミュニケーションの道具ともなった。

将来は看護師になる夢を持っていた。つい昨日までお人形さんに点滴をしたり、医療セットを自分で作ったりしていた延長なのだが、それでも夢を持つというのはいいことだ。

「高校を卒業したら、専門学校へ進んで、看護師になるの」

と、そこまではいい。

「そしてね、大きな個人病院で働いてね、そこのお医者さんと結婚して、合わせになるの」

と、動機は不純だった。まあ、いまの若い人はそんなところか。

部活の試合や合宿では、東京や仙台と、月に一度は遠征をする。勉強も介護福祉のコースを選んだから、中学のときより、さらに専門的で社会的になった。毎日、電車で通い、駅に置いてある自転車で高校まで通った。雨の日だけは駅からバスだ。

急に夏海の世界が広がった。それまでは、いじけた少女で、口数も少なく、暗かった。食が細く、いつも病気ばかりして、学校もよく欠席した。同居の祖父母も心配していた。

ところが、それから半年も経たないうちに、高校生となった夏海はがらりと変身した。

「もう、いい加減にやめなさい」と、親に注意されるほどの食欲で、丼飯を三杯だ。父親が仕事から帰ると、ジャーは空だった。もりもりと筋肉もついてきて、叔母などは、見違えるようになったので、

「ええ？ 夏海ちゃんなの？」と判らない。細い、骨皮の腕は、遅しくぶっとくなった。

「ギャハハハハ、それでさあ、彼氏がみんな怖がって、逃げるんだよね」

と、家に帰ってくると、急に家庭が騒々しくなる。こんなに喋る子だったのかと思うほどだ。中学の弟がもの静かな子だから、余計煩く見えた。

「そりゃ、丼飯三杯なら逃げるだろう」

父親とよく話をする。娘は父になつくものなのか。普通の家庭では、高校生になれば、あまり身のことは親には云わないものが、夏海はどこか子供だった。なんでも父母に話してしまう。いいことだ。

「わたしさ、彼氏できたんだ」と、いつも遅く帰る父と食事が一緒になるので、父に嬉しそうに話した。父は前にも何度か聞いていたから、またかと思う。

「高校に入ってから、いままで半年余りで、彼氏が何人できたのかな」

「そうだね、八人、かな」

「一番長いのは？」「二ヶ月だよ」「じゃ、一番短いのは？」「一日っていうか、何時間っていうか」

いまどきの若者は、めまぐるしいほど相手をとっかえひっかえする。ブロードバンド時代で速度が速くなった。

「それが本当の恋愛なのかね。お父さんはもっと真剣に悩んだよ。恋をしたら、食べ物も喉を通らなくなるほどにね。片思いだったんだね。彼女が通学電車で戻ってくるのを、駅前のコーヒショップの窓から何時間でも待ったり、彼女の家の窓を暗がり立って、何時間でも見ていたりね」

「うわあ、お父さん、それって、ストーカーよ。きもい」

いまは単刀直入。好きか嫌いか、するかしないか。あげっぴろなところはいいが、年頃の娘を持つ父親は心配だ。

今度の彼氏はどうやら本物のようだった。別の高校で、友達の友達からメルアドを交換して、貰ったという彼氏だが、それまでは、顔も見ないでメールだけで別れた相手もいた。今度は、デートもしたし、毎日逢う約束もしたという。

あの、いつも父親に起こされる寝坊の夏海が、朝早く起きて、朝シャンして、自分で弁当も詰め、きちんと身支度をしていつもより早い電車で通学するようになった。前は、ぎりぎりまで寝ていて、顔も洗わない、歯も磨かないでずぼっと起きてそのまま学校に行っていた娘が、急にしおらしく、女の子みたいになってきた。それまではズボラで部屋はぷっ散らかす、下着もその辺にぶん投げる、言動はまるで男の夏海は、そのまま母親の性格を受け継いでいた。

「おう、最近、いやに早いな。なんと、弁当まで作ってなあ。どういう心境なんだ」

父がからかう。

「彼氏と早朝デート、なんだ。三つ目の駅までね、毎朝、自転車で彼氏が来ているの。駅のホームで三十分だけデートしているんだ」

そう、恥ずかしそうに云う夏海は、いそいそと出かける。もうすっかりと娘になっていた。

「いいなあ」と、父は少し妬けた。

もうじき雪が降る時節に、息が白く見える早朝、手編みのマフラーを首に巻いた夏海が、学生

服を着た彼氏と、途中下車した駅のホームで何を話しているのだろうか。冬が来るのに、夏海だけは眩しい季節を迎えていた。

第658話 平成貧乏物語

いまの日本人を見ていると、云うことすることが贅沢で目に余る。かつて、戦争を体験して、辛苦と貧乏を潜ってきた年寄たちも、それが教訓と活かされていないように考え方が贅沢に慣らされてしまっている。

十年前の凶作の年に、米がなくなり、タイ米を買ってきて家族に食べさせたら、ものすごいブーイングが起こった。われわれの食習慣にはない食覚かもしれないが、そう食えないというほどのものではない。それが全国でそうみんなおっしゃる。タイの人はそれを常食しているのだから、実に彼らに失礼な話だと思う。まるで家畜の餌や原料米を食わせられているような言い方でした。

現在でも標準米を食べている家庭は少ないのではないだろうか。コシヒカリだ、アキタコマチだとそれがあたりまえになっているが、さて、中身の方は怪しいものが多い。それでも騙されて、美味しい美味しいと食っているから、味覚の方はたいしたことがない人が多い。

病院も老人で混んでいる。三十年前、四十年前は、こんなに患者が病院に行っただろうか。昔は、風邪をひいたぐらいでは、滅多に病院には行かなかった。医療費が高いので、自宅で氷嚢、水枕、卵酒などで寝ていて直した。いまは、子供が三十七度も熱があると、すぐに小児科に連れてゆく。

ブランド志向もすごい。何万円もするたかがズックじゃないかと思うのだが、それでなければいけないと、子供にねだられて親も買ってやる。その親も上から下までブランドもの。

そうかと思うと自動車だ。三年ごとに新車に乗り換える若者たちがいる。平気で年収ぐらいの車を買って、給料の半分もローンにあてていたりする。そして、飽きたらポイだ。それは、パソコンでも電化製品でもなんでもそうだ。流行、新型に乗せられ踊らされ、買っては棄てる。

こんな日本人は何か大きな天災でも起こって、全員を一度貧乏のどん底に叩き落さねばならない。いまは、長引く不況で、だんだんと貧乏を舐めはじめてはきているが、借金を重ねてゆくのとは、一度味わった生活水準を落すことができないで、苦しい苦しいと云っているのだ。贅沢な暮らしの一方では金の遣り繰りで大変なのだ。

貧乏は正しいとある作家が云った。金持ちは間違っている。それは、多少の僻みから云うのだが、キリストも、貧しい者は幸いである、天国は彼らのものである。富めるものは、駱駝の針の穴を通るより天国に行くのが難しいと、財の偏在が、当時から搾取であり、不公平であると、キリスト様はおっしゃっている。

この不景気で、我が家もだいぶ貧乏になってきた。それは、家族へのいい薬なのだと思う。子供にはいい勉強だ。どん底を舐めると、大概のものがよく見えてくるから、一生のうち

一度は経験してみる必要がありそうだ。

わたしの家庭も十五年前は、破産して何もかも失したときがあった。子供たちの給食費も払えず、電気、電話は明日止めますという電話で焦って掻き集め払いに行った。

たまに外食と、ささやかな贅沢が一杯のかけ蕎麦ならぬラーメンなのだが、親は我慢して子供の食べ残したものを食べた。子供は子供で、全部食べたいところが、「もう、おなかがいっぱい」と、じっと食べるところを見ている親のために、食べ残してやるといった気遣い。

いまは、おやつも美味しくない、袋を開けては残し、また次の袋に手をつけるといった勿体無いことを平気ですが、当時は、三人の子供にひと袋のスナック菓子だ。それを皿に載せて、ちゃんと長男が数えて三当分するのだ。公平に分配するという学習をすることになる。

どこにも連れて行けないので、郊外の山へと車で連れていった。その車もどうしても仕事で使うのでただみたいな車を譲ってもらったオンボロ車だ。

たまたま、どこかの公園で、忠魂碑が建っていて、その石の上に一円、五円がお賽銭のように沢山置いてあった。いまだから白状するが、わたしは、子供たちにジュースを飲ませたいために、賽銭泥棒をしたのだ。小銭を夢中で掻き集めたら、三百円はあったろう。それで、近くの食品雑貨店でジュースを三本買えた。

子供たちの健康も考えて、毎日玄米ご飯だった。それを昔のご飯とまだ小さい息子たちは云い、みんな我慢して食べていたようだ。

「よく、噛んで食べるんだよ」と、教えた。

たまに、市内の妹の家に呼ばれて、ご馳走を食べさせてもらうのだが、そのとき、子供たちが、嬉しそうに云った。

「あっ、白いご飯だ」

赤貧洗うがごとしと、何もなくなれば実にすっきりする。モノというものはいつかなくなるものだという無常観を習うと、モノに固執しなくなる。いまは、どんな生活でも甘受できるし、平気である。

隣国にも飢えた国民がいるし、アフリカにも口にするものすらない民族が無数にいるわけで、そんな下を見たらきりが無い現代で、どんなに貧乏しても、命まで持って行かない日本はまだまだ贅沢なのかもしれない。

第659話 弁当箱

先日、リサイクルセンターを覗いたら、昔の懐かしいアルマイトの弁当箱が売っていた。勿論、人のさんざん使ったお古であれば、誰も買わないのだが、どこかの問屋の倉庫の隅から出てきたり、田舎の雑貨屋を解体するときに出てきたりしたものなのか、新品同様に、ちゃんと紙箱に入っているものだった。

その弁当箱は、蓋にマンガのキャラクターが描かれてはいないオーソドックスなものだが、蓋の脇に箸入れがついていて、おかず用の容器も中に入っている。それは、汁が零れないように、蓋のぐるりにゴムパッキンがついていて、きちんと蓋が閉められるようになっている。

わたしのいたときの小学校はまだ給食はなかった。昭和39年の確か1月に学校に給食室ができた。わたしは、わずか、二ヶ月だけ食べて、卒業したから、給食も思い出は少ない。消毒液臭い脱脂粉乳のミルクが不味かったのだけは覚えている。

幼稚園から小学、中学、高校と14年間は土日以外は毎日弁当を持って行ったのだ。そのときの弁当箱がそこにあったから、つい懐かしくて買ってしまった。

幼稚園のときに、食パンにマーガリンやジャムをサンドしたパンが流行り、みんながそれを持ってきていたのに、わたしだけはいつも弁当だった。小学校のときも、近くに町のパン屋があり、おいしそうな匂いを漂わせていた。いまから思うと、直種法というイースト菌の使い方で、翌日は不味くて喰えないが、いまの日持ちするパンより実にふっくらと焼き上げられていた。レーズンの入った。頭脳パンというのがあり、食べれば頭がよくなると、友達みんな食べていたときに、わたしだけは弁当だった。

わたしが小さいときは、両親が商売で忙しく、お手伝いさんがわが家に寝泊りしていた。お三度はすべてお手伝いさんがやっていたので、わたしたち兄妹にはおふくろの味というのがない。他人が作る弁当だから、文句も云えずに毎日持っていったのだ。

その弁当というのは、毎日、一年も二年も中身が同じであった。必ず、卵焼きと、魚肉ソーセージの炒めたもの、そして何故か、裂きイカを醤油に浸したものが三種類だけ定番で入っていた。来る日も来る日も、雪が降ろうが、槍が降ろうが、弁当の中身は一部の狂いもなく同じだった。

わたしだけでなく、姉妹もまた同じで、だんだんとげんなりしてくる。たまに違ったものを詰めてもらいたかったが、遠慮して云えないでいた。

それで、祖母が食べものを粗末にすれば怒る人だったので、弁当の蓋の裏にご飯粒を付けて帰っても怒られたから、弁当はいつも綺麗に食べてこなくてはならない。姉は食べたくないときは、中身をゴミ箱に捨てたこともあったという。

わたしは、どうしたかという、友達と弁当の取り換えっこしたりした。みんなの弁当には、ウイナーソーセージという、運動会のときでも食べられない赤いものが入っていたり、緑の野菜の配色や、仕切りが入っていたり、綺麗な弁当だったのに、わが家のは、とても恥ずかしくて見せられない。それでも、珍しさで取り換えてくれるものはいたが、後で、美味しくないからと交換に応じなくなった。

うちは貧乏ではなかったが、弁当だけは貧しかった。食べる愉しみがまるでなく、お昼の時間が待ち遠しくもなんともなかった。せめて、前の日の残りものでも詰めてくれたほうが、日替わりでいい。

冬になれば、教室の前に薪ストーブが炊かれる。ストーブの横に棚があり、そこにみんなの弁当が並べられる。ホッカホッカ弁当なのだ。ただ、場所が限られているから、遅れてきたものは並べるスペースがない。ストーブの台の下に入れていたりした。

いまの仕事では昼は食べない。忙しく食べている暇がないのだ。夕方までびっしりだから、腹

が減れば、隣のコンビニまで行って、何か買ってくる。

アルマイトの弁当箱を買ってからは妙に郷愁に浸り、昔、食べたかった弁当を再現して持ってゆくようにした。ご飯を薄く敷いて、その上に納豆を敷く、そしてまたご飯をその上に敷いて、醤油をつけた海苔を上に乗せる。ご飯に醤油がしみて、納豆が隠れているから臭わないし、くっつかない。それが一番美味しい弁当だった。

我が家では中学、高校と毎日二人の子供が弁当を持ってゆく。珍しく、お父さんが弁当を持ってゆくというので、妻の元子が弁当を作ってくれた。結婚して初めてのことだった。中身が楽しみだった。

「あなた、コロッケとか搔揚げが好きだと云っていたから詰めておいたから」

わたしは、そっと空を仰いだ。雨は降っていない。でも、何か天変地異があるやもしれぬ。

人の作った弁当は何が入っているか楽しみだった。

昼に仕事場でわくわくして弁当の蓋をとった。確かにコロッケと搔揚げがご飯の上に乗っているが、くしゃくしゃにまるめた新聞紙まで詰めてある。

—おいおい、弁当のおかずのところに新聞紙がまるめて入っていたけど。

と。わたしが元子に電話したら、

—あら、ごめん。おかずがなくて、スペースが空いたのよね。

うちで飼っているウサギは新聞を食べる。わたしもウサギか。でも、最近の新聞は食えない。それほど食えない世の中になってきた。

第660話 おらおら詐欺

おれおれ詐欺が全国的に流行っている。青森では、「おら、おら」か「わだ、わだ」と電話が来る。

北村家では、昼間は耳の遠いばあさんと、人のよさそうなじいさんしかいない。それを狙って、孫に成りすました若い詐欺師から電話がかかってきた。

ーばあちゃん、わだ、わだ。

ばあさんが電話に出た。

ーわだ？ はて？ 和田さんかのう。

ーわあだつうの。

ーはあ、輪だ。話だ。和だ。環だ。はてさて、どのワだんべ。

と、全然相手にならない。

ーじいちゃんを出してくれろ。

しびれを切らした相手は、ばあさんでは埒があかないと思った。電話はじいさんに代わった。

ーじいちゃんか。おらだ、おらだ。

ーええ？ ああ、孫のサトシか。

ーうん？ ああ、そんだ、サトシだ。実は、友達のを借りて、ぶつけちゃってさ、車両保険つか、車の修理じゃ直らねえくらい大破しちゃってよ、新しい車買って弁償しろって云うんだ。おれ、いま金がねえし、じいちゃん、立て替えてくれないかな。ボーナスなんかで二年で返すからよ。

ーいくらだ。その車。

ー三百万のワゴン車なんだ。毎月の給料から返すから。

ーそれはいいんだが、こっちも家のリフォームだったかな。ああ、そうか、そのリフォームとかで預貯金全部使ったでな、いまは手持ちもねえんだ。年金が出るのも来月だしな。そんだ。確か、銀行でな、マイカーローンってのやっていたな。うちの向かいの健太がそれで車ば買ったど。いまはな、金利が安くて、なんでも2パーセントだそんだ。それを借りてから、おまえに送ってやるから。

ーいいよ、なんでも。金さえ揃えば、相手はまた悪で、チンピラみたいなやつで、脅かされてるんだ。おれはまだ未成年だから、じいちゃんがローンで借りて送金してくれるんだな。

ーそうよ。まだ、七十前だからローンも組める。ただな、自己資金っていうのが必要だ。家を購入しても、事業を起こすにしてもだな、手持ち金ゼロではどこの銀行も貸してくれねえべさ。見せ金でいいんだが、預金もゼロじゃ、信用もないんだな。おまえ、三十万くらいはなんとかならんか。それをじいちゃんの口座に入れておいて、車を買うときの自己資金だって、融資の人に頼むわな。いまは貸し渋りで、相手に少しは金のあるところを見せておきたいんだ。三百万が降りたら、その三十万も一緒に送るから、これから云う、じいちゃんの銀行口座に三十万だけ振込んでくれる。

—そうか、それぐらいなら、なんとかなりそうだ。待ってくれ、メモするからな。はるか銀行の金澤支店の普通口座の……だな。これから支度して送金するから。その相手の友達の口座も教えておくから。

—とにかく、体にだけは気をつけるだど。いいな。おまえも両親に早く死なれて、不憫な子供だったからなあ。車にはよくよく注意してなあ。

—おい、じいちゃんも、ばあちゃんも、長生きしてくれな。正月には帰るからな。

と、電話は切れた。

ばあさんはにたにた笑いながら、じいさんに訊いた。

「どうだい、感触は」

「うん、今度もいいみたいだど」

「うちには、サトシっていう孫はおらんしな」

「うまく騙したつもりが騙されて」

「まんまと三十万が転がり込む」

「伊達に年はとっておらんわい」

「いまどきの若いもんは」

「頭はよさそうだが、ちと足りん」

老獺は悪童より勝る。

第661話 本屋の引越し

何が大変かって、本屋の引越しだ。考えただけで眩暈がしてくる。

林語堂古書店もいよいよ広い店に引っ越すことになった。いまの店の五倍はある。これで、店の通路を蟹歩きしなくていいし、入店条件に体重制限がなくなる。

わたしの長い友人で、かなりふくよかな女性がいるが、その人が店にやってくると、いつも店頭で叫ぶのだ。

「わたしに入るなというのかあー」

「蟹のように横になって歩いてくるんだよ」と、教えるが、その人は、横の方が幅よりありそうだ。横でも縦でも斜めでも入れない。

毎日が本に埋もれて苛々してくる。本が好きでやった商売なのだが、最近の本が嫌いになった。

お客からメールで本の注文がくると、本の山に突入する。本の波の上を泳ぐようにして本をクロールのように掻き分け掻き分け、ようやく一冊の本を探すのだ。崩れる本をそのままにしておく、あるお客から、指摘された。

「ご主人、暗い気持ちでやられていませんか。嫌になったとか、人生に悲観しているとか」

その通りだった。本の谷間で死にたくなる。

そんなこんなもあと少しでさよならだ。さよならだけが人生だ。ばかやろう。とつとつ、こんな店、引っ越してやる。せいせいするだろう。すっきりするだろう。

だが、この先を考えるとまた暗くなる。在庫八万冊の本を引っ越すために、だいたい三十冊の単行本を縛って、一本にする。そうすると、何本の束になるのか。実に2666束なのだ。毎日、本を縛っている。縛り方がうまくなる。相手が本でなければいいのにと、思ったりしていた。

林語堂を開店してから十五年。その当初の本が売れずに出てくる。

「よくもまあ、いつまでも嫁に行かないで、この親不幸ものめが」

と、いつもハタキをかけて、出てゆけとバタバタやっているのに、なかなか出てゆかない娘の顔をじっと見ている。本というのは、棚に並べておくだけでもやつれる。背表紙がヤケたり、カバーの上端が、いつもお客が指で取ろうとするので破ける。天が埃をかぶり黒っぽくなる。どうしても痛むのは仕方がない。

そんな、引取り手のない本には可哀相だが、この際、思い切って格下げをする。棚からそんな娘たちを惜しげもなくポイポイとピックアップして、すべて五十円で、新しい店で店頭均一処分するのだ。ざまあみろ。

と、気がつくと、それは自費出版の本が多い。しかも、わたしの友人知人、文学仲間がかつて出した本ばかりだ。どうしようか。もし、それが店頭の台の上にずらりと並んで、仲間のひとりが見にきてびっくりし、すぐさまみんなに通報したら。

「北村のやつ、先生方の本をなんと店頭のゾッキ本のなかで五十円均一で売ってましたぜ」

「それはけしからん」

ということで、開店早々、諸先生方が店に押しかけて、わたしを袋叩きにしたらどうしよう。そんな心配を密かにしていたが、実際のところ十年、二十年経っても売れないものは、この先売れるという保証が何もない。そんな本ばかりが棚を占領していたら、こちとらの商売に差し障るというものだ。

わたしは、一冊ずつ、〇〇先生ごめんなさい、と謝りながら、いままで千円をつけていたエッセイ集を五十円と書き換えてポイとやる。

本棚も常に新しく、入れ替えしていなければお客の目に飽きられる。本棚も呼吸していなくてはならない。そのために、いつまでもしがみついている本は、特価台の上で再び脚光を浴びてもらうのだ。それで、買っていつてくれたら、たとえ五十円でもまたもうひとりの読者が増えるのだから、作者も喜ぶと思う。

処分に回すのは最後の最後だ。ぎりぎりまで本として置いておきたい。

と、親心を見せながら、久しぶりに手にした本を縛る前に、つい読んでいたりするから、いつまでも仕事ははかどらない。先に進まない。本屋の親父が本好きではいけない面もある。本が嫌い、まったく本を読まない人のほうが適任かもしれない。本を単なるモノとして、流通させるだけの割りきった関係で捉えているからだ。わたしのよう愛着を持ち、いつまでも未練がましく、昔の別れた女の写真のようにだらだらと取っておこうとするものに古本屋は務まらない。

こんな機会はまたとない。いまやらねばこれから先もできないだろうと、わたしは在庫の大掃除もしていた。売れば本、売れなかったら紙屑。店のラジオからは演歌が流れていた。いまは

NHKより演歌は放送しない。こんな、古本屋の作業には演歌がぴったりしていた。

何かがたまらなく哀しくなったりする。それは、すでに鬼籍に入った昔の仲間の本が次々と処分されてゆくからだ。本の最終処分場、古本屋。それは葬儀にも似た重苦しさ。亡き仲間の顔が浮かんでくる。せめて、本だけでも残ればなあと思うのだが、本も残らず、口にも上らず、忘れられる詩人たち、歌人たち。

外はやけに冷えると思ったら、初雪だった。新しい年には、もうすっかりと新しい店でやっているのだろう。このひと月が大変だ。マンマンデでゆっくりやろうや。古本屋をやって十八年。最初は五坪の小さな店からスタートした。倍倍と大きくなって、とうとう百坪を超えた。本の在庫が増える一方なので、そのたびにヤドカリのように店を引っ越した。これで六回目。今度が最後になるか。気がついたら、店主に後がない。

第662話 イラク派兵

イスラム過激派によるテロが日毎に激しくなり、世界の各地で犠牲者が続出している中、それでもイラクに自衛隊を派兵するのかと、世論も騒ぎ始めていた。政府は、戦死者が全く出ないと云っていない。それより、万が一、戦死したときは、一億円の保険を用意すると、まるで年末ジャンボのような話まで持ち出した。

テロが頻繁にあると、全世界で安全なところがない。だから、イラクに行っても同じことだと云うのか。ひとりふたりはやむをえないと思っているのか。十人二十人ならどうだ。人の犠牲が数の論理になってくる。

自衛隊の中にも動揺が出てきた。誰を派兵するのか。白羽の矢が当たった隊員は、すぐに辞表を出すものもいるのではないか。その親御さんの気持ちになり、また奥さん、子供たちの気持ちになると、いたたまれない。

年を越して一月、アメリカから催促があり、ついに世論の反対を押し切って自衛隊のイラク派兵が断行された。政府は、のらりくらりと世論を交わしてきたが、アメリカの強い要請と約束のもとに護衛艦付の輸送船を出航させた。

飛行機で空輸するより、時間稼ぎが見え見えだった。そのうちイラク情勢が好転するだろうという甘い読みもあった。だが、イラクのテロは日増しに過激になり、情勢は悪化してゆく。

国連が撤退したあと、赤十字も撤退。イタリア、韓国も撤退した。最後まで友好国として粘っていたイギリスも国内の猛烈な反対と、テロの驚異と犠牲で、撤退を始めていた。

各国の大使館、領事館も閉鎖して、雲行きが怪しくなってきた。米軍の損害と犠牲者は日を追うごとに増え続け、戦争は終結していないどころか、ゲリラ戦ですでに第二のベトナム化は誰の目にも明らかだ。

アメリカの誤算は、占領し、降伏したら、かつての日本のようにころりと親米になり、ギブミー・チョコレートと人々が群がるだろうと思っていたが、ジ・ハードはそう軟弱ではない。

米軍は都市部でも苦戦していた。形勢は不利であった。民衆の気持ちはまた反米が圧倒的になってきていた。

小島首相は、そんな中で、インド洋からペルシャ湾ではなく、間違えたふりをして、紅海に進んだ自衛艦をどうするべきかと、小田原評定を続けていた。

「これは必ず死者が出ます。わが国の自衛隊は実戦経験がまるでありません。いざというときには、教科書通りにしか動けないのです。敵が後ろから肩を叩いたら、そのあとはどうするか、ということもありません。人道的支援が名目ですから、ゲリラと民間人の区別もつかないところではどう判断してよいのか判らないんです」

国会で幕僚がそう説明していた。爆弾を隠し持ったテロは、少女でも子供でもやるのだ。小島首相は頭を抱えた。いまさら引き返せというものなら、アメリカから笑いもの、チキン扱いだ。なんとだらしがないと、世界から腰抜けニッポンのあだ名までつく。こんなことになるのなら、初めから約束などしなければよかった。小島君は、密かに幕僚と打ち合わせをしていた。

「もし、相手の攻撃があったら、すぐさま引き返すように」

「それは、歓迎のロケット弾、ミサイルは上陸と同時に飛んでくるでしょうな」

小島君の顔は窮鼠になった。

「それなら、イラクにタッチしたらすぐに戻せ。行ったという事実だけで充分じゃないか」

と、まるで及び腰。イラク派兵が海外旅行の日帰りくらいになっていた。

「でも、もともとアラブでは日本人の人気は高く、民族の感情からは嫌悪感は、欧米やキリスト教国ほどではない。ヤバニーと云って、歓迎するムードも現地にはあるようだし」

と、一部の閣僚には楽観ムードもあった。

「そうだ、始めから白旗を振らせて上陸したらいかがでしょうか。しかも隊員はすべて丸腰ということ」

「なんという情ないことを云うんじゃ。それでも君は大和魂を持っているのかね、恥を知りたまえ」

もう、ここまで来ると、紅海の航海が後悔になっていた。

そんな国内の喧々諤々とした論争を別に、任務を帯びた自衛隊は、イラクの港に着岸した。と、米軍が待ち構えていて、歓迎ムード一色になっていた。米軍の軍楽隊の演奏のもと、華やかなレセプションも行われ、それがテレビで中継される。米軍の司令官が、自衛隊の指揮官と握手をするシーンが新聞にも大きく載った。

「いやあ、ようこそおいでいただきました。ここは安全です。われわれが死守していましたから」

港は平和な雰囲気には溢れていた。ただ、やたら飛行機が飛び去ってゆく。米艦隊が沖に何隻も停泊していて、戦車や輸送車両、兵隊たちが、どんどん艦船に上陸用舟艇で戻っていた。

自衛隊の幹部は、何か様子が違うことに気がついた。

「あとは、君らに任せるから、好きなようにしてくれ」

そう、云い残して、米軍も撤退していたのだ。ぼやぼやしていたら、周りはずっと米軍が

いない。イラクの兵隊だけになっていた。

「何か、変ですよ。最後に残った米軍も撤退したようだし」

いままで、アメリカについていたイラク兵たちが、銃口を自衛隊に向けて、じわじわと包囲していた。

「これは、冗談ですよ。アメリカがわれわれを見捨てて逃げるわけがないじゃないですか」

だが、それは本当だった。いざというときには役に立たない。騙され嵌められたのだ。

みんないなくなって、日本だけがのこのことイラクに上陸してしまった。

そこへ、高級車が数台、やってきた。自衛隊はおどおどしてイラク兵に囲まれて、手も足も出せない。車から降りてきたのは、どこかで見たことのある髭面の男二人だった。指揮官は啞然とした。フセインとヴィン・ラディンの二人だった。

「ようこそ、はるばるとイラクまでお越し下さいまして。本日より、わがイラクはまた元通りの平和な国になりました。わたしがまた大統領に就任いたします。ところで、何用で、わが国にお出ででしたかな？」

「……」

第663話 初雪のころ

今年は温かい。例年より初雪が遅かった。十一月も末になろうとしているのに、古本屋では足の小さなヒーターだけで足りている。まだストーブは焚いていない。外を歩くのにも、マフラーや手袋はいらない。どうなっているのだろう。

早い年は十月の末に雪が積もったりする。雪国の秋は一晩で冬に変身する。油断ができない。

あれは、わたしたち夫婦が結婚したてで、まだ夫婦をやっていたときのことだった。天気予報ではシベリア寒気団が張りこんで、かなり冷えるだろうということだったが、まさか十月の末だから雪が降ってもちらつくだけだろうと思っていた。

その頃は、二店を経営していて、夫婦がそれぞれの店に張りついていた。

家から店までは車で三十分かかる。店の近くの駐車場を借りて、そこへ互いの車を置いていた。

やけに冷える日だった。ストーブはまだ使っていなかったが、まだ前の灯油が少しは残っているだろうと、その年、初めてのストーブを焚いた。ストーブの焚き始めの匂いが好きだ。石油くさい、なんとも冬が来たという匂いが立ちこめる。

その日の午後より、雪が降り出した。大きな綿雪で、音もなく降る。店に来る客の頭が白いので、雪だと判った。店の奥からは外が見えない。

夕方になって、わたしが外に出てみると驚いた。街は銀世界になっていた。すでに二十センチは積もっている。殆どの車はタイヤ交換をしていないので、のろのろ運転で、店の前の国道は大渋滞だった。そんなに凍るほども冷えてはいないが、雪で滑る。四輪駆動でなければ弧線橋の坂は登れない。

と、支店の女房から電話だ。

一どうする？　すごい雪だね。これじゃ、車で帰れない。

一まあ、すぐに解けるとは思うけど、今夜は電車で帰ろうよ。九時十分の電車がある。それで帰ろう。

一でも、時間が余るよ。店は七時で終わっても二時間くらいあるし。

一それなら、駅前で待ち合わせて、呑んでから帰ろうか。

一ほんとう？

と、女房は嬉しそうな声を出した。

互いの店から駅までは歩いて十分。春のように重い湿り気のある雪だった。短靴で踏んでゆくと、鳴き砂のようにキュッキュッと鳴った。七時を過ぎてもまだ道路は渋滞していた。十月に雪だ。信じられない。何か裏切られたように、コートもなく体を抱きすくめるようにして歩いていた。つい先月までは半袖だった。海で泳いだのもつい昨日のように思う。

わたしのほうが駅に早く着いた。待ち合わせ場所に立っていた。寒いので、雪を固めるように足踏みしていた。手がかじかむ。息で温かくする。こうして、誰かを待つというのも久しぶりのことだ。

どこかで、こんな雪降る中、人を待っていたことがあった。どこだろう。暗いから夕方か。市場がどこかにあったような。その電球の明りが漁り火のように点灯していた。そうした擬似体験が、若いころの思い出とダブって、わたしをどきどきさせた。待つという期待感と照れが、雪という異常な贈り物で、余計、わたしを感傷的にした。

女房が遠くから歩いてくるのが見えた。顔は確認できないくらい遠くても、つれあいの雰囲気というものは遠目でも判るから不思議だ。あいつは歩くのが遅かった。わざとゆっくりと歩いているような。

二人で駅前の一二三食堂に入った。そのひふみ食堂は、通勤客がやはり電車の時間待ちで、晩酌をやっていたり、旅行客が大きな鞆を傍に、定食を食べていたりする。よく、文学仲間と呑みに来る食堂だった。

「ここへ来ると、きまって肉鍋なんだ」

女房は実に庶民的な食堂を面白がってきょろきょろしていた。

「刺身も食うか。ここのはボリュームがあるぞ」

その辺の小料理屋でお造りなんて上品に云うのではない。盛合わせも、どっさりと来る。それこそ、イカソーメンのように、ずるずると食べる刺身もいい。海の幸が好物の女房は感激していた。それと、熱燗をもらった。車だったら、こんなにして、街で呑んで帰ることはできない。電車で通勤というのも悪くはない。

「あなたとこうして、呑むのって久しぶりだね」

「そうだね。最後に行ったのは、いつだったか」

考えないと出てこないくらい昔のような気がした。たまに、夫婦で呑むのもいいものだ。

女房は呑むと饒舌になる。目がとろんとして、危ない。だんだんと呂律が廻らなくなる。

「らりるれろって云ってごらん」と、わたしはからかう。ビールの中ビンで酔ってしまう人だ。熱燗は効いただろう。

「明日には解ける雪だけど、タイヤ交換だけはしておこう」

と、話したが、雪はそれから三日は解けなかった。わたしたちは、三日も車が使えないで電車で通うはめになろうとは夢にも思わなかった。車は店に、スタッドレスタイヤは家に置いてある。

まだ、子供も小さかったから、夫婦で吞んで、家を空けるということはできなかった。家事と子育て、仕事とその三つが女房を束縛していた。

電車の時刻になって、わたしたちはまた駅前広場に出た。女房は恋人同士のように腕を組んできた。

「雪っていいね」

女房は酔って、それだけを云った。秋の雪は嬉しい誤算だった。

第664話 貉

最近夜道が怖い。強盗が十年前の三倍になったというから、ひったくりや、理由のない行きずり殺人など、女性は狙われやすいし、子供は性犯罪に巻き込まれ、いたずら目的の誘拐というのも増えた。中年男性も安心してはいられない。オヤジ狩が行われ、殴られ蹴られた拳句、鞆ごと盗まれる被害が続出している。いまや、屈強なものでも安心して夜道は歩けない。

中里医師も、いつも自分の医院から用事で暗い住宅街を歩くことがある。医者も狙われやすい。特に、中里先生はつい先日、競輪でしこたま儲けた。ふところが豊かだったから、余計、周囲を意識して警戒していた。

住宅街というのは、人が住んでいるわりには、淋しい。ひとつひとつの家に明りが点いているうちはいいが、真夜中ともなると、街中とは思えないほど無気味になる。

中里先生が、二時過ぎに星を見ながら、ぶらぶらと散歩がてら、コンビニまで行こうとすると、通りかかった公園で、女の子の鳴き声があるのではないか。初めは風の音かなと思った。耳を澄ませば、確かに細くすすり泣く女の子の声だ。

先生は、その泣き声に誘われるままに、池の辺へと行って見た。柳の木の下に若い女の子がしゃがんで泣いているのが、外灯の光でぼんやりと見えた。

こんな夜中に女の子が独りで、これは危ないなと先生は直感した。最近、女子中学生の自殺が多い。池に身投げでもされたら大変だ。女の子は長い髪と、夜目にも赤いセーターにジーンズ姿で、先生に背を向けてしゃがんでいる。

「君、こんな夜中にどうしたの？ この辺は物騒だ。早くお家に帰りなさい」

先生はもう還暦もとうに過ぎている。自分の孫のような娘だ。優しく声をかけた。それでも、女の子は、いやいやをしながら顔に両手をあてて、ますます泣きじゃくるのだった。

「どんな訳があるか分からないが、人生はいい時もあるし悪いときもある。わたしも、おとといの競輪ではすってしまっただが、今日のではズバリの中、いままでの投資を取り返しても余りある。

そんな嬉しいこともあるのだよ。奇妙なことは考えないでね」

そうして、慰めようと女の子の肩に手を触れた。

「何か悲しいことがあったんだね。わたしでよかったら、話してごらん」

すると、女の子は立ちあがって、くるりと先生の方を向いた。先生はびっくりおったまげた。搔き分けた髪からのっぺりとした顔が出た。ゆで卵のような顔だった。目も鼻も口もない。

「年寄りをからかっちゃいけないよ。そんなお面なんか外しなさい」と、先生が女の子の顔に手を触れたとき、さらに驚いた。

「あれ、こ、これはお面じゃない。本当の皮膚だ」

と、なおも先生は観察するように、間近にじっくりと手で触れてみた。

「これじゃ、泣きたくもなるね。可哀相に、耳はあるから聞こえているんだろうが。口も目もない障害に生まれたときから苦しんできたんだろう。でも、生まれつきの奇形にしては、口がないというのは不思議だ。君は一体、どこで息をしているの？」

先生は、医者としての好奇心から、女の子の頭部を確かめていた。すると、女の子は後ろの髪をアップにした。なんと、後頭部に口がついている。

「ケケケケ」と、大きな口を空けて笑っている。舌なんかもぺろぺろとながめて、白い歯も並んでいた。

「ふむふむ、前にあるものが後ろについていて、何かと不便だろう。毎日、どうやって歯磨きしているの？ やりづらそうだね、これは。ご飯を食べるときも、後ろ手ではおかずも取りにくいしなあ」

女の子は急にしょんぼりしだした。

「そうだ。わたしと一緒に来なさい。これから、仲間の医者のところ連れて行ってやるから。腕のいい整形外科の先生がいる。いまはね、昔と違って、整形手術も進んでね、君の口を前に付けたり、義眼を入れたり、鼻なんかはすぐにできる。いい材料と技術が研究されてね。君のような特異な臨床例は少ないから、きっと、ただでやってくれると思う」

そうして、強引に女の子の手を引こうとする。女の子は行きたくないと激しく抵抗した。

「わたしは、これでも医者なんだ。君がこうして悲しむのを見過ごすわけには行かないんだ。何も、君を研究材料にしようとか、マスコミに売って、有名になろうとか、そんな魂胆はないんだ。ただ、これから恋もしなければならぬ若いみそらで、眉毛のないのは、まあ、いま流行りでいいかもしれんが、目と鼻と口ぐらいはちゃんとついていなければ格好が悪いだろう。マジックで描いてやってもいいが、ちゃんと整形すればいくらでも美人になれる」

女の子はなおもジタバタしていた。

「そう怖がることはないんだよ。麻酔の注射をすれば、寝ている間に手術なんか終わっているから」

それを聞くと、女の子は必死でもがいていた。先生が手の力を緩めた隙に、さっと暗がりにな女の子は走って消えた。

「なんだ、ずいぶんとすばしっこい子だな」

中里先生の手には何かの獣の毛が抜けて付いていた。

第665話 財政難につき

国債が国際評価がかなり下がると、売れなくなった。ついには額面割れで、買うだけ損ということになったから、政府はいまや赤字国債も発行できない。国だけでなく、県も同じだった。どこの市町村も税収が極端に減って、おまけに地方交付税もカットされたから、やりくりがつかなくなった。国も市も財源がないとどうなるのか。

子供たちが小学校から早めに帰宅していた。親はおかしいと思って子供に訊いた。

「あら、今日は午前授業かしら」

「ううん、だって、学校に行ったけど、先生も誰もいないんだもの」

おかしいと、学校に電話すると、

「ただいま、お客様のご都合により、この電話は使われておりません。」

まさかと、今度は市役所の教育委員会へと電話をしてみた。

「ただいま、お客様の都合によりこの電話は使われておりません。」

心配した父兄が学校に行ってみる。玄関は閉っていて、誰もいない。市役所に行ったら、電気も止められているようで、真っ暗だ。市役所が光熱費を滞納して、電気は止められ、電話も止められていた。まさか。

道路では車があちこちで立ち往生していた。すべての信号が止まっていた。交差点では四方向から入ってきた車で行くことも戻ることもできなくなっていた。警察に苦情のために、電話をしても、百十番も止められていた。

誰かが、近くの交番に交通整理を頼みに行くと、ちょうど警察官が制服を脱ぐところだった。

「何をやっているんですか、道路を見てみなさい。交通麻痺をおこしているじゃないですか」

「ああ、そう」

「ああ、そう、じゃないですよ。あんたらの職務でしょうが」

それでも警官は平然として私服に着替えていた。

「あんた、何を考えているんですか」

「うるさいな。さっきからぐちゃぐちゃと。もう、今日で警察官は辞めるの。こんなところにいたって、給料も貰えないし、すっかりボランティアしちゃったしな」

年寄りたちは青ざめた。年金支給もストップしていた。もらう日に口座に入っていない。

「独り暮らしの老人が明日からどうやって食ってゆけばいいんじゃ」

役所という役所が閉鎖していたから、生活保護で食べていた人々も絶望した。

毎日のように通っていた病院ではさらに驚くことがあった。診療費を請求されて、その金額にびっくりした。

「あら、知らなかったんですか。昨日からもう健康保険証は無効になったんですよ。これからはすべて患者さんの負担になるんですよ」

毎日、三万、四万と取られる。これじゃ、たまらない。死んだほうがいい。

車は危ない乗り物になっていた。道路は穴だらけ。崖崩れがあっても修復にも来ない。仕方なく、いつも通る人達が総出で土砂の撤去を始めていた。高速道路も無人だから、ただで入ることができる。料金がかからないので、どっと車が詰めかけた。ところがそこも危ない。道路のあちこちに車の落し物が散乱している。道路パトロール車が清掃してはくれないのだ。木の枝や、砂利が転がっているから、とても怖くてスピードも出せない。

街では、強盗、万引き、誘拐、スリ、殺人、放火、強姦となんでもやり放題だった。警察が不在の街は無法地帯になっていた。市民は自衛しなくてはならない。銃砲店ではライフルや散弾銃が売っていた。許可もなにもいらないので、こぞって、銃で防衛した。各地で凶悪な犯罪が増えた。荒野の七人のような市民と強盗団の撃ち合いも始まった。

地下道は蜘蛛の巣が張り、電気も通っていないので暗い。公共交通機関も全線ストップだ。

さらに困るのは毎日出るゴミだ。ゴミの集積場は溢れていた。生ゴミが腐って、ものすごい悪臭を漂わせ、蠅が群がり、カラスが食い散らかす。産業廃棄物の遺棄も後を絶たないから、道路といい、公園といいゴミの山がすぐできる。

不衛生がやがて伝染病を蔓延させた。保健所も機能していないから、それを止める手だてもない。どんどんと患者が増えて、治る病気も治療費が高いから我慢して、死に至る。家族全員が罹って、死の床に就いている家もあった。

街は腐り、臭い、あちこちで火事が相次いでいた。消防署も閉鎖していたから、燃えるに任せる。

これが日本だろうか。治安が悪く、ゴミだらけ、とても人間の住むところではない。皆さん、税金はきちんと納めましょう。

北村の持ちこんだ小説を手には役所では検討委員会を開いていた。

「これを台本に、CF化してテレビで流せば、税金滞納も減るんじゃないだろうか」

もうここまで来ていた。

第666話 青ざめた乗客

彼は、飛行機が初めてではなかった。それは、職務で月に何度となく飛行機には乗るのだが、このたびの仕事だけはどうも気が進まなかった。人間、厭々仕事をしていると、疲れるものだ。押しつけられた仕事、自分に合わない仕事、どうも悪い予感のする仕事、そんな仕事は苦痛の種として、鈍る意志の背中を押す。

「ご気分でもお悪いんですか」

と、スチュワーデスが彼のところにやってきた。

「何か、冷たいスピリッツでもお持ちいたしましょうか」

彼の額から汗が出ていた。それをハンカチで拭くと、ネクタイを緩めて、手を横に振った。

「いや、結構、ありがとう」

「でも、お顔がどうも青いようですけど」

そう云われると、ますます具合が悪くなる。

「それなら、職務中は呑まないようにしているが、アルマニヤツクを少しいただこうか。冷たい水も頼む」

還暦を過ぎて、もう老人の部類に入るのだが、彼は実に若々しく振舞っていた。多少の無理がある。本当は足腰も痛い。疲れる。それでも現役で引退するには早すぎる。いまが彼の人生で一番乗っているときなのだ。こんな時を一時も無駄にはできない。押せるときは運もついてくる。勢いというものがある。

それにしても、この度の海外出張は計算外のことだった。これほど行きたくない旅行もかつてなかった。専用機で、しかも十分リラックスできる特別室での旅行なのだ。贅の限りを尽くしている。ヘッドホンからは好きなヨシキの歌が常に流れているし、リモコンで、いつでも五十インチのスクリーンでDVDの映画や衛星放送の世界のニュースを見ることができる。食事もいいコックが腕をふるった料理が機内に持ち込まれ、味は申し分ない。新聞も週刊誌もすべてが揃っていたし、彼のブレーンが用意した報告書にも目を通す必要があった。小さな図書館のように、今月の新刊が本棚に並んでいる。たまには仕事を忘れて、ハードボイルド小説もいい。インターネットもいつでも見られるように、座席の脇のテーブルに設置しているノートパソコンを引けば、各国のニュースがリアルタイムでモニターに映し出される。

情報は常に新しく更新されていた。最新の情報でなければ彼は動けない。人々より常に一步前を歩いている必要があった。

彼の世話係のスチュワーデスも、特別の美人で頭の切れる優秀な女性があてがわれていた。スタイルも抜群で、よく気がつく。そんな快適な空の旅なのだが、昔から船なら、船板一枚下は地獄と云われていたように、機体の下はそのまま何もない空である。大海で沈没すると、どんな泳ぎ手でも助からない。漂流しても水も食糧もないと三日はもたない。まして、飛行機が墜落したら百パーセント助からない。高度一万メートル以上の上空だ。いつ、空中で爆発するか判らない。

それを思うと彼は内心ぷるぷると震えていた。震えていることを誰にも見せてはならなかった。泰然自若としているように見せなくてはならない。その余裕のあるポーズが彼を作っていた。いつも身なりも趣味も若く見せ、決して侮られることのないよう、飄々としていること、言動の一部始終が誰かに見られている。

窓の外は白い雲ばかりだった。天井から下がっている計器は、時速七百キロで高度一万二千メートルを飛行中とデジタル表示されていた。

いまは、どの辺を飛んでいるんだろう。彼は目的地が近づくに従い、手に汗もにじませていた。予定では、現地時間の午後二時に空港に到着する。彼は何度も腕時計を覗いていた。現地時間と日本時間が二つ表示してある。

「あと、三十分で到着か」

彼の秘書が座席にやってきた。

「もう、着きますよ。現地は快晴だそうです」

「それはそうだろう。滅多に雨なんか降らない気候なんだろう」

窓の下には遥か下に青い海が見えていた。雲ひとつない。日本は真冬で、山は白くなっているというのに、ここいらは気温も二十五度と夏だ。それで、彼は一応サマースーツを着てきた。

「快晴か。雲がないということは、この飛行機も下からは肉眼で見えるということなんだな」

彼は気弱そうにそう云った。

「と云うことになります。でも、大丈夫です。そろそろ、護衛のために戦闘機が現れるはずですから」

「バカな。そんな派手なことをやったら、一層目立つじゃないか。目標になったらどうするんだ」

彼は飛行機は怖くはなかった。だが、今回の旅行だけは冷や汗ものだった。エアポケットに入り、機体がずっと落ちるものなら、アームレストにしがみついたし、乱気流で揺れたりしただけで、じっと目を瞑って、恐怖に耐えた。どうして、おれは、こんなところに来なければならないんだ。すべてが、あの男のせいだ。

彼は、いまこそ、あの男を忌々しく思えたことはなかった。あいつが余計なことをするから、おれにも同じことをしろとみんなが求めてきたんだ。

本当は彼は臆病者だった。人間、誰だって死ぬのは怖い。

「総理、イラク上空です。まもなく着陸体勢に入ります」と、秘書も隣の座席に座り、シートベルトを締めた。

「敵の地対空ミサイルというのは命中率は高いのか」

首相は声を震わせてそう云った。

「まあ、民間機もよく撃ち落されていますから」

「来るんじゃないかった……」

首相はつい弱音を吐いた。

「よしてくださいよ、総理ともあろうお方が。ご自分でイラク派兵を決めたんでしょ。ブッシュ大統領だって、慰問に来たんですよ。選挙のためのパフォーマンスですから、我慢してください」

自衛隊はもっと怖いところにいるというのに、この男は少しだけ失禁もしていた。Xジャンプのロックががんがん耳元で鳴っていた。

第667話 世界の終わり

世界に始まりも終わりもあるのだろうか。ビッグバンで宇宙創生が行われたと云っても、それは物質の始まりであって、それ以前は気体はあったろうし、無限の時間は流れていたろう。

たとえ、世界がブラックホールに吸いこまれて、宇宙に浮遊する銀河や、星雲、すべての物質が、もの凄い圧力で閉じていったところで、それも物質の終わりではない。その後には何かの気体が漂い、やはり無限の時間が流れているのだろう。

しかも、それで終わりというわけでなく、また新たな宇宙が爆発で生じる。そんな何千億年という宇宙の消滅と再生のドラマに、人間なんかあまりにも小さくて、読み取れないほどだ。

久遠隆志は役所勤めの五十歳。来春の昇格が内々で噂されている辣腕家で、順風満帆、二人の息子も大学を卒業すると人も羨む会社に就職していた。

妻の美津子と、五十歳の節目に二人で正月に海外旅行に行くことになっていた。仕事もうまくいっていたし、なんの思い煩うこともなかった。

その朝から、とんでもないことが持ちあがっていた。歯磨きをしながらテレビをつけてると、誰かが亡くなったようにしんみりとした映像が出てきた。

―それでは、いままでの地球の歴史を簡単にまとめましたので、皆さんと共に見てみたいと思います。

アナウンサーが、地球の誕生から人類の歴史まで足早に資料映像を交えて解説していた。

―五十億年の長きに渡ったわれわれの世界は明日で閉じようとしています。

その一言に隆志は歯ブラシを止めた。

「何だって？ 明日で閉店だって？ いや、地球が死ぬのか？」

あちこちのチャンネルに変えてみた。どこの局もしんみりとやっている。民放でもCFはすべてやめて、コメンテーターに歴史学者や、天文学者たちが出演して、どこも特別番組を流していた。

。

―この放送も正午で終了させていただきます。視聴者の皆さん、長い間、ありがとうございます。わたしも家族と共に、郷里へ帰らねばなりません。

と、放送中にもかかわらず、すでにアナウンサーは荷物をまとめて、帰り仕度をしていた。

「一体、何が起こるんだ？」

隆志は慌てて、新聞を取りに行った。朝刊の一面に大きく、「明日で世界は終わる」と、大きな見だしが横書きで出ていた。顔を洗っているところではない。隆志は、部屋で身繕いをしている美津子のところに新聞を持っていった。

「おい、世界の終わりって、これは何なのだ？」

すると美津子はいやに落ちついて、

「あら、あなた知らなかったの？ 昨日からあれほどカウントダウンして騒いでいたのに。明日の零時で世界が終息するのよ。だから、わたしたちに残された時間は残り、四十一時間ね。でも、不思議と怖くないのよ。みんな一緒でしょう。最後の二日を何か楽しいことをしましょうよ」

「な、何が楽しいことだよ。おれは、これから役所に行ってみる」

「この後に及んで、まだ仕事をするんですか？ 行っていない人も多いと思いますけど。わたしたちにもう明後日はないのよ。仕事をしたって面白くないじゃないですか。それより、うんとおいしいもの食べて、貯金をはたいて、いままでにない贅沢をしましょうよ。そうだわ、息子たちも呼んで、家族水いらずで思いっきり楽しんじゃいましょうよ」

「おれは、おれには意味が判らない。どうして、おまえはそうノーテンキでいられるんだ？ 世界が消滅するってときに、怖くないのか。それに、誰がそんなことを予言したんだ？」

「予言なんかじゃないのよ。ちゃんと天気予報でやったんです。世界消滅警報が出ているんですから」

隆志は未だに、夢でもみているのではないかと、現実を否定するように何もかもが信じられないでいた。

「とにかく役所に顔だけは出して、様子を見てくるから。おまえはここで待っている」

隆志は背広を着て、血相を変えて家を飛び出した。外の光景は異様だった。すっ裸で走る若者がいた。半狂乱になってケタケタと笑い、通りを裸足でさまよい歩く娘がいた。車があちこちで衝突して道路は渋滞していた。どの車にも家財道具が山と積まれていた。こんなときにどこへ逃げるといえるのか。隆志は力なく笑った。街は騒然となっていた。

暴徒が商店のガラスケースを割って、平然と宝石を強奪していた。追い詰められた鼠のように走り廻っている人間たち。

バスも電車も止まっていた。隆志はゼロ半のバイクで役所まで走った。道路も混んでいたのでも、バイクが一番早い。人々は行くあてもないままに、ぞろぞろと家族で寄り添うようにどこかへ向かっていた。どこへ逃げても最後は地球、いや太陽系も銀河系も、もろとも数万度の劫火に包まれるのだ。一瞬にして、街も人間も跡形もなく蒸発する。

役所は扉がバタバタと風で開き、人っこ一人いない。

「やはり、こんなときに仕事をしているやつはいないんだ」

隆志は無償に腹が立ってきた。こんな追い詰められた状況で人間の本性が見えてくる。みんなは享楽に溺れ、あるいは凶行に走っていた。こんなときにも国会では与野党が醜い争いを続けていた。闇金は取りたてに忙しく、ここまできても尚も金に執着していた。日頃は真面目なサラリーマン氏が狼に急変して、レイプしまくっていた。もう何をしても許される。何をしても自由なんだと、悪の限りを尽くし、街のあちこちで放火のために火の手があがっていた。路上には無惨な死体が転がっていた。子供たちは酒を飲み、タバコを堂々と吸い、集団でデパートに押しこんで欲しいゲームを盗り放題。

後、三時間。そうなっても、砂漠の上では戦闘が続いていた。宗教、民族の憎しみに終わりは無い。殺戮、テロがやむことはなかった。

刻々と最終時計の長針は零時に進んでいた。そして、ついに零時の時報が鳴る。と、白い髭を蓄えた、白い衣服の人が、手をぱんぱんと叩いた。

「はい、はい、はい、もう終わり、終わり」

みんながその姿を目にしていた。どうも、ヤケクソな態度だった。その姿を見たときが最後だ

った。神はその最後の時に現れたもう。

第668話 眠れない夜のために

どうも興奮しているようだ。寝返りばかりうっていたが、どんな格好をしても眠れない。眠ろうとすればするほど余計に目が冴えた。

樋口正孝は不眠症ではなかった。ここ数日がどうも神経が休まっていない。仕事が忙しい年末だから、いつもピリピリしているのが、家に帰ってからも、床に入ってから緊張感が持続していた。

枕を抱きながら、羊が一匹、羊が二匹とやっていたが、次第に羊の姿が艶かしい女性のヌードに変わっていった。女が三千五百七十六、女が三千五百七十七、……女が一万六千九百十四……、もうここまでくると、頭の中が裸の女でいっぱいになり收拾がつかなくなる。

「いや、いかん、いかん」と、正孝は頭を振って、リセットすると、起きだした。こんなときは哲学書でも読めばいいのだと、ヒルティの著書の本棚から取り出す。いい睡眠薬になるというのは、難しい言葉の羅列と退屈に欠伸が出る人だけだ。正孝は判らない言葉が出てくると、字引を出してきて、意味を確かめたり、小難しい理論に行き当たれば、ノートに図解して、真夜中に机に向かい勉強していた。

「いかん、いかん、おれは何をしているのだ」と、急に自分のしていることに気がついて本を閉じた。

「ダメだ、酒でも呑もう」と、階下の居間に行って、ブランデーをストレートで呑んだ。こんなときは強い酒に限る。急に酔いが廻る。いいなあ、何かおつまみが欲しい。と、正孝は台所に立ち、フライパンでベーコンをカリカリに焼き始めた。そいつを酒の肴にしてのってきていた。家族は寝ていた。ひとりではつまらない。折角、いい気持ちで酔っているのに。と、カラオケの機械にスイッチを入れて、真夜中にひとりで歌いだした。

「何をやっているの、真夜中の二時過ぎよ」と、母親が起きてきて叱られた。

「いかん、いかん、こんなことをするために酒を飲んだんじゃない」

よし、こんなときは、体操をして汗をかき、疲れさせればいいんだ。と、正孝は寝室の床で腕立て伏せをやりはじめた。二十一、二十二、二十三……。百回を記録したとき、まだまだ学生時代に鍛えた筋肉が衰えていないことを確認すると、急に自信がついてきた。よし、次は腹筋だ。三十一、三十二、三十三……。それも乗りすぎて止まらない。夢中になって記録更新に挑戦していた。まだ二十代の独身の体は体力があった。

「いかん、いかん、おれは何をやっているんだ。目的は眠ることじゃないのか」

いつのまにか、目はぱっちり、ますます興奮してきて眠れない。

「ううん、そうだ。腹がいっぱいになれば眠れるというから、どれ、何か食べに行くか」

正孝は、サンダルをひっかけて、国道まで歩いて出た。郊外型のファミレスがあちこちにある。最近では地方でも二十四時間営業は珍しくなくなった。時計は三時を廻っている。

真夜中でも、若者たちを中心に、普段何をしているものたちなのか、飲んだり食ったりしてダベっているのだ。タクシーの運転手、夜勤の工事関係者など、様々な人が夜食を食べていた。

正孝は、オムライスと-halfサイズのピцца、ミネストローネスープとチキンバスケットを頼んだ。かなりのボリュームだ。三人前は優にある。もともとそんな大食らいではない。腹がくちくなるまで食べれば眠れるだろうと、食後にフルーツロワイヤルまで頼んだ。

もう、腹はぱんぱんだった。ベルトを緩めてもまだ足りないので、ズボンのホックまで外した。食べたものが口まで出そうなくらいだ。

「これでいいだろう」と、腹をセリだしながら家に戻った。

蒲団に入り、電灯を消す。ところが、今度は胃が苦しくて中々眠れない。胃薬を呑みに台所に行った。満腹すぎると眠れないどころではない。

「なんとかしなくては」と、正孝は焦ってきた。これでは明日の仕事に差し障る。とにかく疲れさせるといいのだ。

「そうだ、もうこうなったらあれしかない」

正孝は、とっておきのDVDを取り出した。海外のものを友人が土産に買ってきた。映像はすこぶる綺麗だった。終始、男と女の生態学及びアクロバットの生殖機能の試験的行為がアカデミックに映し出されている。正孝はそれを鑑賞しながら指運動に興じるのだが、果たしてそんな疲れで眠れるのか。

そして、ことが済むと、今度こそはと、蒲団の中で目を閉じる。金髪の露な胸が迫ってくる。「いかん、いかん、ますます冴えてきた。くそっ、こうなったら、もっともっと疲れさせてやるか」

正孝は、ジャージに着替えると、ランニングシューズを履いて、近くの公園を一周するジョギングをすることで、なんとか眠気を誘おうとした。ただのジョギングだけではそうたいして疲れないだろう。

よし、と、正孝は全力疾走で、公園の廻りを走った。時計は五時になっていた。まだ薄暗い。ようやく新聞配達少年たちが街を走り始めた。さすがの正孝も、ふらふらになつていた。最近、これほど走ったことはない。完全な運動不足だった。汗もびしょりとかいた。それでもまだ足りないような気がして、尚も走り続けた。自分を痛めつけ、くたくたにさせなければならない。それは成功した。正孝は、へとへとになり、もう歩けないほど疲労困憊して、家に帰ってくると、倒れこむように蒲団に入った。ああ、意識が遠くなってゆく。今度こそようやく眠れる。やった。これで、おれは眠れるんだ。

と、深い眠りに落ちてゆこうとした途端、

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリと目覚ましがけたたましく鳴った。夢か現実か、落ちてゆく正孝は、その音に首根っこをひょいと持ち上げられた。

「正孝、会社に遅れるぞ、早く起きないか」と、母親が部屋に入ってきて、思いっきり、正孝の足を蹴った。すでに七時を過ぎていた。

辺見庸さんが青森に来て、講演会をやったあと、一席設けたので、わたしは身近で呑むことができた。何か云えと云われたが、咄嗟のことで何を云っていいのか迷う。

実は、辺見さんの著書は殆ど読んでいなかった。それではいけないと、講演会の前四日で図書館で十三冊を借りてきて読んだのだ。それが図書館に置いてあるすべての本だった。

わたしが古本屋だと作家先生には教えたくない。当日も、辺見さんの芥川賞受賞の「自動起床装置」の初版、帯付の本を持参して、扉に揮毫署名してもらった。これが百円で仕入れた本なのだが、店では三千円以上つく。その前の東理夫さんのときも、沢野ひとしさんのときも、すべてそのサインで儲けた。ささやかな儲けでも嬉しい。それを欲しがるとは喜ぶのだ。

という、楽屋裏を見せてしまえば、なんだ、あいつはすべて商売かとしらけるかもしれない。

いつだったかも、呑み会に行く前に、ふらりと入った古本屋で、開高健の署名本を二百円で買ったことがある。古本屋で署名本を安く見つけたときは嬉しい。それを呑みの席で、開高のファンだった友人に勧めた。その場で即決、二千円で売れた。十倍になった。

百万円儲かったとか、三百万の利益だとか大きな商いではないが、何よりも、してやったりという小さな儲けが嬉しいのだ。

辺見さんの作品では「ゆで卵」という短編集が一番好きだ。タイトルがすべて食べ物にちなんだアレゴリーなのだが、それが女性には下品に見えるくらい面白い。十万冊売れたが、三万人の読者を失ったという。恐らく、女性の読者だろうと思う。お上品な方にはお勧めできない。思わずにやりと笑う思い当たるところが多い本に共感するのは、そこに生の人間が生きているからだ

。

署名といえば、自分で出した本に署名して持ち込む友人がいた。

「困るなあ、書き込みがあると安くなる」

著名人のサインならともかく、友人のではありがたみがない。

わたしは、商売柄、セドリをよく行う。セドリとは業界用語で、他の古本屋に行って、値打ちものを安く抜き取ってくるのだ。

特に、最近若手の人たちが店員をしている大手の古本チェーン店に行くと、自分たちに興味のあるコミックやタレント本は高くつけているのに、哲学、自然科学などは難しくて嫌だとばかり極端に安くつけるから、狙い目だった。こと専門書は安目で、処分コーナーに入っていたりするから嬉しい。

週に一度は古本屋回りをするのは、そうした目玉商品を抜いてくるのだ。もともと古本屋が好きで始めた商売だ。敵の店であっても、古本屋巡りは仕事抜きでも好きだ。

市内の古本屋のどこの棚に何があるか判ってしまい、お客から注文があると、あそこにあるなど、その夜、駆けつける。もっと酷い話が、ブックなんとかというチェーン店の棚に並ぶ全集もののバラ本をメモしてきて、それをインターネットのデータベースに登録しておく。お客からネットで注文がくると、そのとき、その古本屋にバタバタと買いにゆく。まるで、市内の古本屋が自分の店の倉庫でもあるように、そっちの在庫までうちの在庫のようにしている。

セドリで一番楽しいのは、やはり署名本をみつけたときだ。署名というのは不思議なもので、すべて活字で印刷してある本に、人間の手でしかも、作家の生の字が書かれている奇遇性がある

。「あいつに本を贈呈しないほうがいい。すぐ店に出す」

とは、わたしをよく知る友人の警告だった。いつかは、中央の出版社から出した本が、書店に出す前に、わたしのところに送られてきた。それはじっくりと読ませてもらった。読めば、いい本はすぐに店に出す。できるだけ多くの人に読んでもらいたいと、流通させるのが古本屋だ。大事に本はとっておく人ではないのを友人がよく知っていた。

で、その書店に出す前の本を、わたしは古書目録に載せてしまった。その目録を送ったのが、たまたま、そこの出版社の社員だったことから一騒動持ち上がった。新刊書店に出る前に、どうして古本屋の目録に出たのかと問題になったのだ。犯人はわたしとすぐにバレてしまった。

そんなことは、古本屋のわたしでなくてもたくさんある話だ。出版記念会の帰りに古本屋に売ってゆく客と、まるで川柳にでもなりそうな話がある。

その友人も本を出した。

「まさか、おれの本も店に出したんじゃないだろうな」

と、疑うので、わたしは云った。

「ご心配なく。あんたの本はちゃんと自分の書齋に置いてあるよ。売れそうもない本を店には出せない」

ところで、いつオムライスが出てくるのかと訝しげに思う方にはすみません。いま、これを書きながら、娘の作った夜食のオムライスを食べているのだ。卵は半熟がいい。黄色と赤のケチャップがなんとも郷愁をそそるのは何故だろうか。そして、中に隠されたケチャップライス。それは、ちょうど神出鬼没の古本屋のように鮮やかではありませんか。

第670話 雪 女

猛吹雪だった。昼でも車はヘッドライトをつけて走っていた。フォグランプもつけないと対向車に認識してもらえないほどの吹雪だった。道路がどこまでか、その境界も見えない。中央分離帯も見えないほどだ。

昼間も大変だが、夜ともなれば周りの光景も見えないからさらに運転が怖くなる。どの車もトップを走るのを嫌がる。前の車のテールランプに付いて走ったほうが楽なのだ。前を走っている車の運転手は、自分が先頭車であることを呪い、「どうして、おれだけがこんな緊張感で走らねばならないんだ」と、ボヤクことしきり。

そんなときに、寂しい郊外の道端にひとりの女が立っていた。盛んに走ってくる車に手を挙げていたようだ。みんな、女をライトで発見してもすでに過ぎてしまうから、引き返すのも面倒で、そのまま行ってしまう。

一台のタクシーが停まった。女は腰までくる長い白髪なのに若い女だった。顔も白いし、いまだき珍しく白無垢の着物を着ていた。

「ねえちゃん、どこまで行くんだ？」

「ねえちゃん？」女はむっとした顔をした。

「はい、わたくしは高岡に参りとうござります」

「はて？ 高岡？ 知らねえな」

「お城のある町でございます」

「ああ、弘前かい」

運転手は手ぶらの女の異常な身なりを見て、気違いと思ったのか、

「あんた、金は持ってるの？」と訊いた。

「いいえ、一分銀だけです」と、女は江戸時代の古銭を出した。

「そんな訳の分からないものは使えないよ。ヒッチハイクでもしな」

「ひっちはいく？」

タクシーは走り去っていった。女は無表情にまた立っていた。

すると、また一台の車が止まった。

「危ねえじゃないか」窓を開けて運転手が叫んだ。

「だいたい、こんな吹雪の夜にだよ、髪も白、服も白じゃ見えないだろう。車のライトで発光するシールでも付けてな」

「しーる？」

「おうよ、百均でも売っているよ」

「ひゃっきん？」

「百円均一の店があちこちにあるだろうが」

車は女を見捨てて走り去った。

女は吹雪の中を一軒の民家のドアを叩いた。玄関のインターホンからその家の主人の声がした。

「こんな夜更けて、何の用だい」

女はどこから声がしたのかきょろきょろしていた。声はすれども姿が見えない。摩訶不思議なカラクリだとばかり。

「はい、旅のものでござりまする。今夜一晩、泊めてくださりませぬか」

主人は驚いた。

「なんだと？ うち旅館じゃないんだ。見ず知らずの人を誰が泊めるものか。あっちへ行った」

どこの家もそうだった。第一、いまどき夜中に泊めてくれと女が来るのが怪しい。

それで、途方に暮れてまた雪の中をとぼとぼと歩いていると、ランクルが女の傍に停車した。

「へい、彼女、こんなところで何してるの？」

若いイカレタ男の二人組だった。

「どこか泊めてくれるところを探しておりました」

「だったら、うちのアパートに来ない？ 安心していいよ。連れの彼女が部屋にいるからさ」

女は深々と頭を下げて、車に乗り込んだ。

「なんか訳ありって感じだよね。寝間着のまま夜中にさまよい歩く美女か。ねえ、彼氏と喧嘩で

もして飛び出したの？ それとも、顔にファンデーションを塗ったまま、式場から逃げた花嫁ってとこかな」

二人とも下品に笑った。

「なんだか、ヒーターが切れたらしい。急に寒くなったよな」

というまにアパートに着いた。若者たちの溜まり場になっている部屋は、足の踏み場がないほど散らかっている。

「よう、女の子を拾ってきたよ。一晩泊めてやろうよ。変わった子だけど、なんとかしてやれよ」

若者たちから見れば、髪も婆さんのように白いし、化粧もしていない。そこで、仲間の彼女に頼んだ。

「あんたさあ、いい作りしてんだよね。いつもそんなスッピンなわけ？」

「すっぴん？」

何を訊いてもオウム返しで、首を傾げるばかり。

みんなして、女の髪を茶髪に染めはじめた。美白もあまりに白すぎると不気味だ。チークとマスカラで頬を染め、リップグロスで濡れた唇、アイシャドウで古風な眼差しを現代的にぱっちり描いた。死んだ人が着るような経帷子も脱がせると、なんと下着もつけていない。彼女はびっくりしたが、男たちも見たことがない。いまどき、胸に晒し、腰巻きをつけているとは。

「あんた、胸のサイズは何よ」と、彼女が訊く。

「さいず？」とまた通じない。

「Cカップのようだわね。わたしのでもいいかも」と、ブラジャーに下着一式を貸してやる。そして、ようやく、今風の女の子になったところで、鏡を女に見せた。

「どう？ いい感じでしょ」

その自分のがらりと変わった姿を見て、女は立ったり座ったりして、おろおろし始めた。とんでもない恥ずかしい自分の姿を見て、女は急に大声で泣きはじめた。泣いているうちに、次第に女は解けてゆく。小さくなって、とうとう服だけがその場にあり、辺りは水浸しになっていた。

「あららら、解けちゃった」

みんなは声を揃えてそう叫んだ。

第671話 本バカとっちゃ

北村拓也は、息子たちにそう呼ばれてきた。妻の元子からはすでに見放されていた。

「こんなに本気違いの人とは思わなかった」と、呆れているうちはまだいい。家の中では、トイレの中にも本棚があり、本を読んでいるから、トイレを占拠することになる。朝の忙しいとき、夜、寝る前など、家族がみんな使うときに、じっくりと便座に座り、本を一冊読んでしまう。

「早くしてよ、漏れる」と娘がドアを叩いていても、

「待て待て、いまいいところだから、後、少しで読み終わるから」と、人のことは考えていない。家族に犠牲者が出はじめる。

「あなた、ご飯時ぐらい、本から目を離したら？ 行儀が悪いから、子供たちの躰になりません」

お風呂の中に、ビニール袋に入れた文庫本を持ち込んだときは、さすがの拓也ものぼせた。

そんな拓也も週に二度は図書館へに行く。図書館の入口で、恍惚の形相で、うっとりとして佇んでいる拓也をみかけると、ちょっと気色悪い。まるで、恋人と待ち合わせしているときに、カフェの前で、入るのを躊躇っているときのようだ。徐にドアを開けて入ると、目を閉じて、くんと犬のように匂いをかいでいる。新刊本の印刷インクの匂い、紙の有機質の匂い、古書の黴た匂い。そういった匂いの協奏が、入口で拓也の嗅覚を刺激する。それは、もうエクスタシーと同じであった。立ち止まる拓也の口元から涎まで流れている。

日曜で、元子の嫌みから逃れるように、拓也は朝から図書館へとやってくる。そこは、朝の開館から夜の閉館まで一日いても飽きないところだ。家にいれば、雑音が多い。テレビをつけているからつつい見えてしまったりする。元子が家政婦のようにこき使う。

「あなた、本を読む時間があったら、廊下にワックスかけてよ。それが終わったら、お風呂の壁を磨く。判ったわね」

自分の自由な時間というものがなくなる。買い物に行っても、行くところは新刊書店か古本屋だったので、子供たちはもう一緒に行くと言わない。

「どうせまた古本屋巡りでしょ。行かなーい」だ。

家よりも図書館のほうが安らぐというのも、おかしな時代になってきた。図書館はそんな老若男女でいっぱいだ。行き場のない人間たちの吹き溜まりのようだった。学校へ行かない不登校の生徒も図書館に朝から出館していたり、老人たちも同じ趣味の人たちがよく集まるので、話相手にもなると、ちょっとしたサロンになっている。

拓也も本を購入する小遣いが最近の厳しい家計の財政難から、古本屋巡りも自粛していた。図書館の貸し出し件数が、全国的に増えたというのも、拓也のような不景気な読書家が増えたからだ。

拓也は、いままで定期購読していた月刊雑誌も週刊誌もやめて、新聞も二紙にするなど、新聞図書費を削りにかかっていたから、その分を図書館で補うことになる。だから、週に一度の日曜日の図書館は拓也にとって、一週間の情報取得に大切な一日となる。

新聞も業界紙まで含めて一週間分を読み、お気に入りの雑誌をゆったりとしたソファに座って、ついで、CDの新譜を借りてきて、ヘッドホンで聴きながらとながら族をする。活字に疲れたら、DVDの予約をしておき、ブースにひとり入り、やはりヘッドホンで雑音もなく、名画を見ることができる。

喉が渴いたら、自販機コーナーでジュースを呑みながら、ゆっくりとタバコを吸う。腹が減ったら、軽食コーナーもある。味はともかく、値段は安い。

午後は、持参したノートパソコンで、創作活動をする。昔は、ワープロの持ち込みは周囲の人の迷惑になるので禁じられていたが、最近は勉強にも、仕事にも必須アイテムと図書館も思ったのか、わざわざそんな部屋まで設けた。そこでは、電源も使える。ずらりとみんな並んでパソコ

ンを打っている姿はいまでは珍しくない光景だ。

そして、行き詰まったり、何か資料が必要になれば、そこは図書館、何でも資料は揃えてある。拓也は蔵書五十万冊の書齋を所有しているように、我がもの顔で使っていた。何か探し物があれば、美人の司書さんも、まるで自分の秘書のように、優しく「はい、はい」と、手伝ってくれる。元子とは偉い違いだ。

トイレも広く、清潔で快適だ。そこで本を読んでも、誰も文句は云わない。読書に疲れたら、図書館の中庭を散策してもいい。文学館で郷土作家の足跡をビデオで見てもいい。

インターネット・コーナーもあるから、そこは無料でやり放題だ。何か、ネットで検索したいことがあったり、調べものがあったら、本よりも早く、資料が容易に収集できる。

拓也は何よりも好きな本に囲まれていること自体が贅沢なことであった。

「ああ、幸せだ」と、まるで自宅のように使って、無料なのだから、こんな至福のときはない。

閉館の時間になると、拓也は持参したビニール袋に空気をポンプで入れた。やがて、電灯がすべて消される。司書嬢が、念のため確認に館内を歩いた。そして、血相を変えて、館長室に駆け込んだ。

「館長、大変です。誰かが、書架の間で蒲団を敷いて寝ています」

それを聞いて、館長は慌てて、閲覧室まで走った。拓也が、本棚に囲まれて、安心しきってすやすやと寝ていた。枕も携帯用の膨らませるやつ、掛け布団だけはスリーピングシートだ。

「君、起きなさい。何を考えとるんだ。こんな、よりによって図書館で寝ているだなんて。ここは、公共施設で、簡易宿泊施設ではないんだ」

すると、拓也は平然と答えた。

「ここは、ぼくの家なんです。ほら、見てください」

免許証を見せると、まさしく、現住所が図書館になっている。

「ほらね、住民票もここに移したんですから」

いくら本が好きでも図書館に住むことはできないのだった。

第672話　あなたまかせの年の暮

今年も無事に過ぎてゆく。カレンダーが一枚になり、何かと家族の話に年越しのことが出てくる。新聞の折り込みチラシの玩具も、もう子供たちは大きいから卒業と思いきや、「おやじ、金でいいよ、金で」と、可愛くもない。クリスマスも、子供たちが小さいときは面白いが、大きくなると、プレゼントで驚かそうという親の楽しみもなくなる。それより、当然の代償とばかり

、「今年はブランドものの財布で我慢してあげるわ」と、妻がちゃっかりと請求している。偽ブランドの廉価品でごまかそうとしても、すぐに駄目になるからバレてしまう。第一、夫婦でクリスマスのプレゼントを交換することほど寂しいことはない。

で、一応、世間並みにケーキをと思うが、二十六日にクリスマスをやって、半額に下がったクリスマスケーキを買ってこようという提案は没になり、結局、作ったほうが安いということになり、面倒くさいが、今年は手作りでケーキを作ることとなった。オードブルなんかでごまかすのも、テーブルの賑わいでいい。クラッカーの上に、竹輪の輪切りや、蟹蒲、偽コンビーフなんか載せて、カナッペにしたり、安い材料で、豪華に見せる工夫もクリスマスならではだ。

で、年越しはどうするんだ。と、北国の大晦日は、東京なんかとは違い、豪華なご馳走で送るのだが、今年は千葉に住んでいる息子たちは、仕事が忙しいと帰郷しないというから、下の子供二人とわたしら夫婦の四人だけの寂しい年越しだ。それでもそれもやはり世間並みと思うのだが、どうなることやら。

「やはり、おまえ、お節は作るんだろう」

すると、妻は皮肉っぽく笑って、

「あなた、何を時代錯誤みたいなこと云ってるの。いまどき、誰もお節なんか食べませんから」と来た。

「な、なんと、年越しはお節と古来から決まっているものを」

わたしは風潮を受け入れないように抵抗する。

「第一、子供たちが食べません。黒豆もなますもかずのこも、甘煮もね。そんな地味なものより、もっと豪華に行きましょうよ。子供たちのリクエストでは、前沢牛の分厚いステーキに越前蟹、それに大トロのお刺身ね」

だんだんと正月も洋風化というか、近代化というか、様変わりしてくる。お節には理由があるのに、ただ、豪華であればいい、日頃食べられない高価なものをこのハレの日に食べるという。スーパーやデパートに行っても、そんな売り場が繁盛していて、元来のお節コーナーは年寄りだけ。

「でも、おまえ、おれの分だけでもいいから、口取りの、鯛と海老のねりきりと雲平菓子、それに干し柿のはいったなます、ゴボウだけは付けてくれよな」

「はいはい、判りました。小さい独り暮らし用のお節を買ってきますから」

売っているお節はあまり好きではない。やたら甘く味付けがされているから、どうも家庭の味がしない。それでも、お節がなければ雰囲気が出ない。寂しいから食卓にはなければならない。

「お年玉はどうするんだ」

「二人とももう高校と中学でしょう。それなりに相場というものがあるから、ケチらないでね」

と云うが、財政難だから、物入りの年末は堪える。それでも、ひと昔前に比べれば、上の子供たちはみんな就職して社会人だからお年玉も減った。姪や甥なんかも同じ年頃でみんな大きくなったから、大金が出るということはなくなった。それが、今度は孫にかかるのだ。

関西のほうでは、衣類も上から下まで新調して正月を迎える風習があるから、それにプラス、被服費もかかるのだ。家族全員、下着までおニューとなると、これまたかかる。

正月の餅代とは云うが、蜜柑は今年は安いからいいとしても、年末になれば何でも食材は高騰するから、大枚をはたかなければ年越しはできないのだ。こんな大変な世の中でも、みんなは借金してでも年越しだけは普通にやりたいと考える。江戸の昔からそうであったように、西鶴も描

いた年末の庶民の風景は、おかしくもかなしくもあった。何がなんでも餅と蜜柑がなければ年を越せるかという悲哀みたいなものが、大変な不景気な時代にはある。

だんだんと日数かぞえて、心細くもなるが、やりくりも大変になってくる。年末の量販期を見込んで、支払いを立てている店もあるだろうが、この不況だ。年末も財布の紐は堅い。当てが外れたら大変なことになる。一種の賭だった。年末ジャンボで一攫千金を狙うのと似ていた。押せ押せと支払いが溜まりに溜まり、もう年末で一挙に売らねば返せない借金。如何に、逃げるかいつも考えているが、もう待たなし、今年はどこも大変だから、問屋も黙っていても集金にやってくる。払うまで帰らないから、レジや財布から金を掻き集めて払うこととなる。それはなげなしの金ですっからかん。銀行や税金はそうはゆかない。正月どころではない。

師走とはいうが、何も走るのは師だけとは限らない。みんなそわそわして走っている。慌ただしくなってくる。道路は渋滞し、街は人が溢れ、雪が降ってくるとそれに拍車がかかる。ますます、車は動かない。苛々しても始まらない。寒いから灯油もいるし、防寒具も買ってやらねばならない。寒さが身にしみる年末だ。

クリスマスの飾り付けを一応毎年やっている。タペストリーを窓際に下げて、小さなツリーも飾る。子供たちが大きいから誰も喜ばないが、雰囲気だけは大事にしなくてはならないと。

ところが、我が家にクリスマスも正月も来なくなった。ある日、とうとう来るべきものが来た。税金滞納で差し押さえ。それを聞いて取引先も押し掛けた。とうとう破産だ。

「あなた、これからどうするのよ」

「さあ、どうしようか」

行く宛もないし、車も使えないし、とりもなおさず旅行鞆に身の回りのものを詰めて、一家四人、吹雪の中に出された。

「とにかく、今夜一晩の宿を探そう。それから明日のことをみんなして考えよう」

越前蟹も前沢牛も吹っ飛んだ。四人の足跡だけが雪の上にどこまでも続いていた。

第673話 食物連鎖

「お父さん、この世で一番強い動物って何？」

小学生の息子が学校で課題を与えられて帰ってきた。最近の学校の宿題はなかなか面白い。毎日の新聞記事をひとつだけ発表するために、「何かない？」と、訊いてくる。あまり新聞を読まないお母さんは、

「そんなことはみんなお父さんよ」と、社会的なことは男親と相場が決まっている。まあ、最近ではテレビのワイドショーでもバラエティ番組でも、国民が総じて政治を玩具にしているから、お母さんも次第に社会的に生きていた。

「ううん、この世で一番強い動物なあー」

普段、考えたこともない。

「そうだな、人間よりもゴリラのほうが力はあるし、戦うと負けるだろう。ゴリラと熊と喧嘩したら、熊が勝つかな。熊とライオンはどうだろう。像が一番強いかなあ」

と、いろいろ考えても出てこない。

「そうだな、そんなことはおじいちゃんに訊きなさい」と、結局逃げてしまった。「おじいちゃん」と、小学生が祖父のところに行った。

「この世界で一番強い動物って何？」

おじいさんは、しばし考えていたが、

「そうだねえ、喰うか喰われるかの弱肉強食の世界だから、喰われるものは喰うものより弱いし、最後に残ったものが一番強いんだ。それを考えてみたらどうかな」

一緒に考えることとなった。

「さあて、一番小さな動物って何だろう」

「プランクトンかな」

「それを食べているのは？」

「小魚」「小魚を食べるのは？」「大きな魚」「それを食べるのは？」「人間」「後は？」「鳥も食べるし、海に住む動物だな。あざらしとか」

「でも、そんな動物たちをも食べてしまうのは？」

「人間だね」

「そうだ、人間が一番強いことになるんだな」

「だけど、力は弱いだろう。木登りも下手だし、空も飛べない。イルカみたいに早く泳げない。走るのもチーターより遅いしさ」

「それを補う頭があるんだ。人間はそんな動物たちの能力を補う道具を作ったんだな。それで、世界を征服してしまった。いまのところ、食物連鎖っていうんだが、人間を食べる強い動物がないから、食物連鎖は人間で止まってしまっている。それが問題なんだな。人間がのさばりすぎている。人間にも天敵が必要なんだ。いまのところ人間の天敵は人間なんだろうが」

おじいさんの話は、小学生には難しい。

「でもね、おじいちゃん、同じ人間でも弱い人と強い人がいるでしょ」

おじいさんも考えた。動物の世界も縄張り争いや、ボスという上下関係が存在する。負けたものは殺される。

「うちのお父さんは、サラリーマンだから、会社に行くと、ウワヤクっているんでしょう。偉い人が。いつもお母さんが云っているから」

「お父さんは課長だから、課長よりは部長が強いんだ。その部長よりは専務が強いし、専務よりは社長が強い」

「社長より強い人はいないの？」

「いるよ。会長もいるし、株主もいるし、そうだな、社長の奥さんが強いときもある」

「そんな会社より強いものはいないの？」

「お父さんの会社は役所に頭が上がらないんだ。役人が強いかな」

「その役人より強い人はいないの？」

「役人が頭が上がらない人か、ううん、それは政治家だ」

「じゃ、政治家が世界で一番強いんだね」

ちょうど、テレビで日曜政治討論をやっていた。その政治家たちが、政治評論家にこてんぱんにやっつけられていた。

「おじいちゃん、政治家より強そうな人がいるよ」

おじいさんもテレビを見て、頷いた。

「そうだな、政治家より強い人間は、政治評論家だ。あの人たちは、人を食って生きている」

第674話 壊れたテレビ

三畳一間の間借りだった。畳三枚の上にあるのは、壊れたテレビが一台きり。がらんとして、何もない部屋だ。男は独身で仕事もなく、いまは雇用保険の支給でなんとか喰いつないでいる。

なんにもないというのは、リサイクルセンターに家財道具を売ったからで、押入には蒲団と着替えよりない。テレビだけは壊れているから引き取らなかった。

何もないと三畳でも広く感ずるものだ。テレビは台もなく、畳の上に直に置かれていた。まるで、王様のように部屋の中央にでんと威張って座っている。男は何もなくなると、すぎるものがないからそのテレビが無性に可愛くなってきていた。壊れているから余計にいとoshii。

どこが壊れているのかというと、音が出ない。男は音の出ないテレビを朝から夜中まで見続けていた。最近の番組は、やたらテロップのようにどうでもいい巫山戯た会話を挿入してくれるので、音が出なくとも意味が分かる。映画にしても声がなくともだいたいのストーリーは掴める。昔の無声映画のようだ。たまに、寂しいから、男は弁士のように勝手にセリフを自分で即興で作り、「花子さん、危ない」とか「よくもおれのことをコケにしてくれたな、殺してやる」とか、独りでべらべらと喋っているのは不気味だった。

テレビは室内アンテナも、マスプロアンテナもないから、UHF一局よりかからない。あとの局は画面がざらざらで何が映っているのか判らない。仕方なく男は同じ局の番組をずっと見るよりなかった。

外に出ても金がないから面白くない。友人もいないし、親姉妹は田舎だ。地方都市に就職して、失職した。仕事を探したがいまは若者でもない。

外に出るのはコンビニに弁当を買いに行くか、たまに銭湯に行くときぐらいだ。最近は何もかも面倒くさくなり、顔も洗わない、服も一ヶ月も同じものを着ていて、臭いが本人は慣れてしまい気にもならない。部屋の掃除なんかするにも箒もないから男やもめに蛆が湧く。

寝るのは押入をベッド代わりにしていたので、殺風景な部屋に唯一のテレビだけがかろうじて男の財産として居座っていた。

男はもそもそと起きだすと、テレビのところに這ってゆき、恋人のように抱きしめる。ときにはキスをしたり、裸でペッティングまでする。そうかと思うと、それは神になり、男は崇め奉り

、テレビを様付けで呼んでいた。現代の文明病は、テレビを神格化し、新興宗教の偶像のようにしてしまった。それがなければ、人々はとても不安になり、生きてゆくよすががない。悲観して死んでしまう人間もいるのではないか。

男にとって、テレビは愛人であり、肉親であり友人であり先生であり神様でありはたまた望遠鏡であった。外に出ない男にとって外界を眺める望遠鏡だ。

その下宿は建物が隙間なく建っているので、窓を開けても、隣の家のも汚い壁が見えるだけで日当たりも悪い。外界と遮断されているから、外に出ないと、天気かどうかも判らない。何日も買ったためたカップラーメンで食いつなぎ、全く外に出ない日も続いた。

テレビが男の窓であり、世界とのわずかな繋がりを持つ通路であった。ただ、それは受動的な一方通行で、こちら側からアクセスすることはできない。

テレビはやがて、画面が縦に流れ始めた。それは微調整の画面コントロールをいじくっても直らなかった。いまどき、リモコンもないチャンネルも廻すやつなので、二十年は使ったろうか。

男は、流れる画面を首を縦に振りながら、懸命に見ようとしていたから、いい首の運動にはなったが、それが数時間に及ぶと、首が疲れ、嫌になってきた。そこで、命の次に大事なテレビだったが、ついに一緒に棲んで初めてテレビを叩いた。男にとって、時には神にもなるテレビを叩いた。叩くと、いままで精神錯乱をきたしていたテレビは、はっと我を取り戻し、また普通の画面になるのだった。音が出ないで、画面もザラザラでは、テレビの機能を完全に失っている。

テレビは女性名詞だろうか。その日の気分で、ころころ変わるのだ。男は短気な性格だったが、テレビにだけはやつあたりすることもなく、じっと堪えていた。

ところが、テレビときたら、今度は横に流れ、チラつき始めた。男はそれでも我慢して、首を画面に合わせて横に振り始めた。それも数時間経つと疲れてとてもやっつけられない。

ついに男は切れて、テレビを蹴飛ばした。テレビはごろんと横向きに倒れた。すると、なんと、いままでチラついた画面が直り、以前よりも映りがよくなったので、男は横になった画面に合わせて、自分も横にねそべって見ることになった。

お昼にカップラーメンを食べるときも、首だけは横にして、テレビを眺めていた。横にしているうちはよかった。とうとうテレビは横にしても縦にしてもチラつきが直らなくなった。

男はまた切れて、テレビを蹴飛ばした。テレビはひっくり返し逆さまになったが、するとどうしたことだろうか、その衝撃で、映りがよくなったのだ。

男は、テレビに合わせて逆立ちをして見ていた。ただ、血が頭に下がるので、その姿勢だけは長く続けられなかった。カップラーメンも逆立ちして食べることはできない。首を百八十度廻すこともできない。仕方なく、男は逆さまの画面を見ていた。慣れてくるとそれも苦にはならない。

ある日、突然、不幸がやってきた。テレビがぷつりと映らなくなった。今度は、叩いても、逆さにしても意識がないようだった。男は青ざめた。近所の医院に走って、医者を呼んできた。医者は、テレビに聴診器を当てていたが、首を横に無言で振った。男はなんとか助けてくれと懇願したが、すでに手の施しようがなく、テレビは死んでいた。

男は悲しんだ。テレビの遺骸を抱きかかえると、裏の空き地に行き、穴を掘った。テレビを穴に埋めると、土まんじゅうを作り、その上に板を立てた。板にはテレビの墓と書かれていた。

第675話 板門店の夏2003

—

家族旅行は年に一度、夏に行くのだが、仕事でそうそう休んでもいられないので、せいぜい二泊三日が限界だ。いままでは、東北、北海道と殆ど行き尽くした。それで、関東にまで足を伸ばした。初めのうちはキャンプだった。歳と共に、だんだんとテントを張ったり、飯盒炊さんをするのが億劫になってきて、温泉旅館に泊まるようになった。それでも、いつも車で行くので、遠出は疲れる。いつかは、塩原温泉に一泊して、東京の息子たちに逢いに行ったのだが、夕方まで遊んでしまい、それから東北自動車道で青森に帰ったら、真夜中の三時だった。途中、少し仮眠したりしたが、眠くて疲れて、東京往復は金もかかるし、これからは飛行機の方が安くていい。

さて、今年はどこに行こうかと、思案していたら、ネットの格安ツアーのメールが来た。その会社は、空き部屋を破格の値段で提供するのでたまに使っていた。夏休みの旅行は割高なのだが、それでもこのところの不景気で、どこの旅館も満室にはならない。空き部屋を各旅館から格安で流してもらうのだ。航空券も同じで、格安というのは、空席を埋めるために行っている。

そのメールに韓国ソウル二泊の旅行が安く出ていた。しかも青森発着だ。東京へ家族で行くより安い。早速申し込んだ。二泊だけといっても、行くとなると、下調べをしてゆくのが常だった。何か小説の一編でも書ければと、わたしは図書館へ行き、ありったけの韓国に関する本を借りてきた。

歴史からハングル語の本、韓国の現代詩から小説まで読みまくった。詩人の茨木のり子さんは、五十過ぎてハングル語を習ったとある。わたしも覚えようと、CDも買って来たのだが、いざやってみると、なかなか覚えられない。すでに暗記力が減退していた。茨木のり子さんは右脳が発達しているのだろう。会話というのは、どうも音楽などと同じで、理屈ではなく感覚で覚えるものらしい。その点、わたしは英語会話でもフランス語でも上達しないのは、文法を話そうとするからだ。頭の中で分詞構文など先に考えてしまうから咄嗟に話せない。ハングル語もそれだから、簡単な日常会話だけに留めておこうと、諦めた。

何故、韓国に行くのかと、人に云われた。あまり近いのと、とりわけ魅力を感じないのか、日本人が行くときは、多くは買い物旅行だった。せっかくいい文化がお隣にあるのに、それを認識しようもしないようだ。欧米ばかりに目がたって、旅行でも白人コンプレックスがあるようだ。

韓国について調べてゆくにつれて、非常な興味を持つことになった。、北緯三十八度線の板門店にも行ってみたい。文化、芸術にも触れてみたいと、行きたいところが山と出てきたが、時間は正味二日よりない。

八月の夏休み最後の三日だった。旅行はその醍醐味は前にある。九割の楽しみは行く前にあり、行ってしまえば、後の一割だ。高校の娘と中学の息子と女房と四人ででかける。二泊なんだからと娘に云うが、なにやら荷物が多い。着替えだけでもかなりありそうだ。わたしが以前、ヨ

一ロッパに行ったときは、できるだけ手荷物を軽くするために、着替えは破れたものを持っていった。それは向こうで捨ててくるのだ。その代わりに、現地で靴下の果てまで買って、着替えてくる。衣服だけでもお土産を着てくるので荷物にならない。トランクなんか持ってゆかないのだ。ショルダーバッグだけで十分だった。移動が楽になるよう、あれこれと余計なものは持ってゆかないのだ。

三人とも海外旅行も飛行機に乗るのも初めてだった。旅行が一番の勉強になると、あちこち連れてゆくのが楽しみでもあった。添乗員もないのが格安ツアーだ。自分でできることはしなければならない。出国の手続きも、飛行機に乗るのも、うろうろしてはいられない。つついゆっくりして、急いでくださいと空港の係員に云われて、走ることになった。うっかりとして、別の便の列に並んでいて、人数がおかしいから呼び出しにきたのだった。最初から汗をかいていた。

女房は機内におやつを持ちこんで、機内食も出るのに食べてばかりだった。女の楽しみはただひたすら食べることにあるのか。ソウルまで二時間少しで行くのだから、大阪に行くのと変わらない。そんなに近いのだから、海外という感じはしない。

空から見た仁川周辺は、浅瀬の海とどこまでも続く干潟で、砂の色ばかりが目についた。昔は、ソウル市内の金浦国際空港であった。わたしは、そこで乗り換えのために、空港に降りただけだったが、外に出ることはなかった。いまは、仁川国際空港。二年前から使用していると、近代的な立派な設備だ。

仁川に午後到着した。ツアーとは行っても九人くらいの少人数。迎えの現地案内人が旅行社の旗を持って迎えに出ていた。少人数だから、マイクロバスだ。今日の予定は、ただまっすぐにホテルへ行って終わりだ。あとは自由行動となる。

「どんなホテルだろうね」と、女房は心配していた。あまり格安なので、場末のおんぼろホテルかもしれないと思っていた。ソウル市内を車で走ると、確かに人は多い。東京に近い一千万以上の人口を有し、国民の四分の一が首都圏で暮らしているのだ。車も多く、首都高速も渋滞していて、移動はタクシーより地下鉄のほうがいいという。ガイドさんは流暢な日本語でちょっとした市内観光をしてくれる。

ソウル市内は何か、わたしが昔いた大阪の街に似ていた。歴史と近代、生活臭が混在している街。ひどく懐かしい臭いがした。商店も間口二間くらいの小さな店が軒を連ねている。それが、わりとオープンな雰囲気、外で仕事をしている人たちも見えて、あげっぴろな感じを受けた。そこは人間が呼吸し、ものすごいエネルギーを秘めて、高度成長のスラムと開発のスクラップ&ビルドを繰り返している頃の日本に似ていた。

マイクロバスはあちこちでツアー客を降ろした。分宿なのだ。空き部屋利用だから仕方がない。やがて、わたしたちのホテルへと着いた。普通のビジネスホテルで、広い風呂もついている。

さて、荷物を部屋に置くと、わたしたちはむっとする蒸し暑い夕方のソウルの街に出た。手にはガイドブックとデジカメ。ホテルの立地はやはり場末だった。そこからは地下鉄で出るより。地下鉄の駅までは歩いて五分だ。わたしは、その地下鉄の駅の切符の自動券売機の前ではたと当惑した。読めないのだ。そこは英語が書かれていない国だった。

韓国の物価は日本の半分以下のような感じがした。百ウォンが八円いくらにつくが。ソウルでは面倒だから、円で買い物をすると、百ウォンを十円と計算されて、幾分か損をしたような気がした。

地下鉄に乗ろうとしたが、青森空港で両替してきたときに大きな札よりなかった。それでは自動券売機は使えない。それで、外に出て商店を探した。市内の至る所にコンビニがある。セブンイレブンやサークルKといったお馴染みの看板がどこにでもある。そこで、ドリンクを買って両替した。三十度をいくら過ぎていたか。すでに汗かきのわたしの開襟シャツは肌がすけて見えるほどだ。地下鉄も慣れれば便利で楽だ。路線が色分けしてあるのは東京と同じで、色で覚えるといい。駅名は漢字とハングルが並べて表記してあるので、上り下りだけ隣駅の駅名を確認して間違わなければ、あとは乗り換えをいくつ目と数えながら行くだけだ。目的地までかなり乗っても六十円くらいだ。

わたしたちは、夕食を食べるために東大門市場に出た。街の通りにはどこにでも屋台があった。それが限界性を出して、何か賑やかで楽しい雰囲気を作る。街の景観だけで、おつにすましている街よりは、どこにでもある露店の市場的雰囲気は毎日お祭り気分がいい。いろんな露店を覗いて歩くと、珍しいものもあり、食習慣の一端を垣間見ることができる。多くの買い物客が通る通りの真ん中で、屋台に座って飲食するのに少し抵抗があって、女房が引いたが、わたしはいろいろと食べてみたかった。

それじゃと、場所を変えて地下鉄で明洞へと行った。銀座である。といっても庶民的なところで、江南のほうがファッションの街として新しいらしい。

露店はやはりそこでも電灯をつけて、ずらりと並んでいる。若い人たちがアクセサリーや靴、Tシャツなどをワゴンに山積みして売っている。みんな日本語で話しかけてくる。カメラを持っているからか。全く同じ顔をしていて、どうして判るのだろうか。

わたしは、CDを売っている若者に本を見ながら、ハングル語で訊くと、みんな日本語がぺらぺらでこっちが当惑してしまう。コヨーテとクローンのCDが欲しかったので、訊いてみると、彼は一瞬、わたしの質問の意味が分からないように止まった。そして、その名前が韓国で人気の若いグループだと分かったと、笑って、ここでは日本の海賊版ばかり売っているのだと説明した。見ると、日本のポピュラーは来年解禁されると聞いていたが、若者の間ではもう浜崎や平井堅のCDが平然と売られているのだ。若者に文化の壁はない。韓国のニューミュージックが日本に入ってこないし、売られてもいないのに、韓国では日本の若い人の歌が街頭でもBGMで流されている。たまたま、ラジオで紹介されたクローンの曲想に惚れ込んで、ネットでアルバムを韓国から送らせたことがあった。

彼は、新譜を売っているちゃんとした専門店を紹介してくれた。そこで、わたしは待望のCDを落手した。演歌だけは輸入されてくるが、若者たちのエネルギーはその歌にも漲っている。

わたしたちは、適当なレストランに入り、メニューを見たが、すべてハングルで書かれていて注文ができない。周りを見るとみんな同じものを食べているから、指さして同じものをと注文した。それとビールだ。石焼なんだろうが、とにかく辛い。後悔するほど辛かった。わたしはかなりの辛口でも好きで食べるほうだが、それは強烈だった。汗がだらだらと噴き出てくる。だが、子供たちと女房は美味しいと食べている。若い人たちが抵抗もなく食文化を受け入れる。種々の偏見で、文化を拒絶するのは年寄りだけで、若者たちはこれからはうまくやってゆくのではないだろうか。そんな気がした。

「B級品よ」と、売っているのはブランド商品だ。それをわざわざ求める日本の若い人が多いのだろう。二級品だと公言して売っているから逆に安心して買えるのだ。中には、「完璧な偽物よ、いかが」と、開き直って売っている若者もいて、娘は大笑いした。ガイドブックには値切れはいくらでも下がると書いてあったが、わたしは値切ることにはしない。その行為が尊大で、同じ商売をしているわたしの店で、もし、客が足下を見て値切ることがあると、むっとして反発するのだが、それだから、値切ることには非礼なやり方だと思っていた。

ようやく露店に慣れてきたから、長椅子に座り、見たこともないボイルしている貝を食べたり、珍しい揚げ物のスナックを買って食べたりした。飲んだり食べたりするのも、日本の半分ぐらいか。こんな中心地でもそうだから、一般庶民が利用する店はもっと安いのだろう。

ミリオレのような渋谷の一〇九のようなファッションビルも覗いてみた。小間割りした小さなスペースでテナントがぎっしりと入っていて、衣料品を中心に二十四時間営業しているパワーには圧倒させられた。

わたしたちは十二時過ぎまでグルメをやっていて、真夜中になっても人通りの絶えない街をあとに、タクシーを拾ってホテルへと戻った。一般タクシーなら百四十円ぐらいだ。わたしは、ホテルでさっそく買ってきた衣類と着替えて、ボロの服を捨てた。

翌朝は、家族とは別行動となる。事前にネットで韓国の旅行社に申し込んでいた板門店ツアーは戦争と平和を考えるいい勉強になるのではないかと、家族も連れてゆくつもりが、服装の規制が厳しいので、わたし一人が行くこととなった。ジーンズ、サンダル、Tシャツなどやプリントものなどのカジュアルな服装では参加できないと厳しい。観光なのだろうが、一応、国連の許可を貰って軍事境界線を越えるのだから、きちんとした身なりでなければならない。

家族は旅行社が連れてゆく、免税店巡りのショッピングだ。そして、午後に日帰りツアーから戻ったわたしと、世界遺産の昌徳宮で待ち合わせることにした。

「どうして行けばいいのよ」と、女房はいきなり異国に捨てられたように不安になって云った。わたしは、ガイドブックのそののところが切り取って手渡した。これをタクシーの運転手に見せればいい。

朝は雨だった。コンビニでビニール傘を買った。かなりの土砂降りので、傘があっても足下は濡れる。板門店行のバスが出る新羅まで地下鉄で出る。朝ご飯は、簡単に食品店で買ったパンとコーヒーで済ませる。二日目になると違和感はあるでない。文化が類似しているのので、聞く音楽も同じ、食べるものもほぼ同じ、わたしたち日本民族は、この半島を渡ってきたものという実感がこみ上げてくる。

バスは二台。殆どが日本人だ。雨の中、バスは高速道路を北上した。ソウルから北朝鮮の国境

まで六十キロだから、青森市内から弘前を過ぎて大鰐まで行くような距離だ。一時間ぐらいで着く近距離に首都がある。もし、非常時で戦闘機が飛来すると、ものの数分でやってくるのだ。少しは緊張してきた。

第677話 板門店の夏2003

三

今年は朝鮮戦争の休戦から五十年の記念すべき年である。そのせいか、日本から予約してきた参加者でバス二台になった。このツアーはもう何十年も前から行われていて、とりわけ難しい旅行ではない。誰でも参加できる。わたしの両親は二十年前に板門店に行ってきた。

バスの中でガイド嬢と呼ぶにはかなり年齢が上だが、日本語を勉強した通訳のキャリアが長い女性が、歴史から講釈して、なかなか聡明な感じの人だった。

「ソ連が不可侵条約を破棄し、満州に雪崩れ込んできたのは何日でしょうか」

と、クイズ形式で、乗客の認識度を試しているようであった。誰も答えない。知っていて面倒くさいから黙っている人もいるだろう。わたしは、熱心に話すガイドに逆に気を遣っていた。小声で、八月九日と云うと、

「そうですね、正解が出ました。もし、歴史にはこの『もし』というのは許されませんが、ソ連が攻めてくるのが一日遅かったら、それとも、その時点で日本がポツダム宣言を受諾して、終戦が十日だったら、朝鮮半島は分断されずに済んだかもしれません」

ちくりちくりとくる。民族の悲劇は日本にも勿論責任はある。わたしは、この旅行では、どこでも謙遜した態度をとっていた。それが、女房には面白いらしく、いつもと違うと嗤うのだ。

バスは雨の中、一般国道を幅の広い漢江に沿って走っていた。その河が臨津江と合流する。どちらも広い河だ。わたしは、歌にあるイムジン河を初めて見た。水は澄んではない。茶色く濁っている。ガイドは、

「歌にあるのはもっと上流でしょうね。きっと、川上なら澄んでいるんでしょう」

歌は歌としてイメージを保存しておきたい。現実には、汚れた河なのだ。

「今年で五十年になります。赤ちゃんのときに、置き去りにされたり、はぐれたりした子供がすでに五十半ばも過ぎています。離ればなれになった家族が一千万人いるといいます。中には、買い物に行ってくると出かけたまま、転勤で、南へと単身赴任したまま、また戦火を逃れるために子供の手を引いていたが、人混みで、親子離ればなれになったまま、みんな、そんな急激な戦争のために生き別れとなった人たちばかりでした。ものごころつかない幼子が、自分の名前も云えずに母親は北に娘は南にとはぐたとき、幼子は自分の親の名前も住所も云えないので、そのまま孤児院に預けられ、別の名前を付けてもらいます。そんな、子供が五十半ばになって、親をどう

して探すことができるでしょう。また、その母親は、すでに名前も違う我が娘をどうして見つけだすことができるのでしょうか。わたしたちが、敢えて、こうして危険地帯の南北分断のぎりぎりまでみなさんをお連れするにはわけがあります。戦争はとてもしけないことです。そうした無数の悲劇を生み出します。それをしっかりと見て、お国にお帰りになられましたら、この現実を家族の方やお友達に話してください」

ガイドの熱弁に寝ている人もいる。無関心に外ばかり見て、聞いていない人もいる。このツアーは単に危険を売り物にする外貨獲得のためではない。国際世論に呼びかけるプロパガンダなのだ。

「河の向こうに見える家々は北朝鮮なのですよ」

わたしは驚いた。泳いで渡れるような河が国境になっている。遠く、団地のようなコンクリート住宅が見える。道路をトラックが走るのも手にとるように見える。道路と河の間には鉄条網が張り巡らされ、ところどころに監視塔も見えた。戦車がずらりと並び、陸軍が密入国者を監視している。ものものしい雰囲気だ。バスは分厚いコンクリートのトンネルをいくつも潜った。いざ有事となると、そのトンネルは爆破され、道路は通行できなくなる。

「ここからは、絶対にカメラで外は撮らないでください。カメラを没収されたりします。これからは、撮影してもいいというところだけ、教えます。カメラはバッグなどに仕舞ってください。誤解を受けても困りますから」

雨はいつのまにか上がっていた。すると、急にゆうべのような猛暑になってきた。わたしたちのバスは、中立地帯に入るために、厳重なゲートを通過して、国連のバスに乗り換える。米軍のMPがバスにカービン銃を肩から下げて、服装検査に乗り込んできた。パスポートもチェックする。ジーンズをはいてきた若い男女は、ガイドが持っていたダブダブの黒いズボンをその上からはいて、下車を免れていた。用意周到である。

つい、二週間前にも、少し離れた非武装中立帯で、北側からの発砲があり、小競り合いがあった。常に、挑発はあり、何が突然起こるか分からない。

「みなさんに覚えておいてもらいたいのは、南は、北との休戦調停にサインはしていないということです。ですから、休戦は成立しなかったわけです。いまも、戦争状態にあるということを理解しておいてください」

休戦のテーブルについては、五十年前、北側と国連軍だった。

半世紀も前といっても、昭和二十五年のことだ。わたしが生まれたのは、朝鮮動乱で半島が夥しい屍で覆われていたその翌年だから、そう古いことでもないような気がしてくる。朝鮮半島の悲劇の歴史は、日本の統治時代から数えると一世紀以上に及ぶ。

わたしは、時間があれば、このツアーから帰ったら、戦前に柳宗悦が取り壊しから守ったといわれる光化門を見てみたいし、ハルビン駅で伊藤博文を射殺した哲学徒の安重根の記念館なども見て回りたい。まさに駆け足の慌ただしい旅行だった。

怖いもの見たさということがある。緊張状態にある危険地帯には違いないが、イデオロギー戦争の現実を見ておくことも、何か考えさせられるところがあるだろう。国連のマークのついたバスの先頭を装甲車が護衛して走った。弾薬庫もある。辺り一帯は地雷原だという。国連軍は一分以内に戦闘体勢になれるよう、常に訓練されているという。国連というのはここでも完全にアメ

リカ寄りなのだ。

わたしたちは、一カ所に集められ、命の保証はしないという文書にサインさせられた。そして、国連のバッジを胸につける。いざというときの弾よけというが、そんなバッジなんか何のおまじないにもならない。やがて、バスは北朝鮮の国境へと近づいてゆく。

第678話 板門店の夏2003

四

昼食は、米軍のキャンプの軍人用のサロンで給された。セルフサービスで大味のポークビーンズやマッシュポテト、コーンスープなどだが、不味かった。その国民がどんな食事をしているかで、国民性が判るような気がした。

サロンには大きなテレビのモニターがついていて、ロック歌手のプロモーションビデオをがらがら流していた。隣の部屋ではビリヤードを兵隊たちが興じていた。

隣の建物は売店とコーヒーショップになっていて、いろんなお土産が売られていた。鉄条網まで記念品として売られているのには驚いた。そこにいる限りは、まったく戦争の緊張感がない。もし、南北が激突したら、この辺りは数分で火の海になるだろう。わたしたちに逃げる余裕などないかもしれない。

売店から出ると、タバコは外で吸ってくれと、空き缶が置いてある喫煙所があった。わたしは、ただただ汗がひっきりなしに出てくるのを、どろどろになったハンカチで拭きながら、タバコを一本吸った。

戦車や装甲車が行き交う、異常な雰囲気の中に蝉が鳴き、テニスコートなどもあった。何事もないような、見せかけの平和が漂っていた。

テニスコートの脇には、穴が開いていた。立て札に説明書があった。北朝鮮から侵入するために、こうした穴が何本も掘られていたというのだ。国境がすぐ近くなので、穴を掘ってこられる距離なのだ。

わたしたちは、国連のバスで、帰らざる橋まで行く。いまは使われていないが、以前は捕虜の交換にも使われた北と南の道路が繋がっている唯一の橋なのだ。その橋のまんなかから色が変わっている。その変わり目が国境になっている。こんなに近くで国境を見たというのが日本にはない。四方を海に囲まれているわれわれは、肉眼で国境というものを認識することがない。

ただ、その国境は、政治的に第三国が強引に引いた軍事境界線なのだ。もともとは、無数の橋があり、道路が通っていた。そこを日常的に通過する農民もいた。同一民族、同一国家が何の罪もないのに分断されている事実が歴然とあり、国境という黄色い杭と鉄条網という人為的壁で遮蔽されているのだ。それを韓国のガイドは、わたしたちの無力さにも責任の一端があると話していた。いつの政権も大国に利用されてきたことを自嘲気味に云った。

わたしたちは、南と北が会談する会議室へと二列に整列させられて案内された。平屋の建物が二つの道路に挟まれた格好で建っていた。その建物の中央が国境になっていて、すぐに見える建

物は北朝鮮の政府の建物で、カーキ色の軍服に赤いラインが見える北朝鮮の兵士が歩哨で立っていた。

会議室にぞろぞろと入ってゆく。中は撮影許可がおりていた。大きなテーブルがあり、北側の出口には銃を手にしたMPがロボットのよう立っていた。窓の外には、北の兵士が行ったり来たりしている。一メートルもない至近距離だ。無言で立っているMPと記念写真を撮ったりして観光客たちは浮かれている。

もし、北側の出口のドアを開けて、一步踏み出せば、それで亡命になる。それがもとで必ず撃ち合いになるので、阻止するためにドアを背に保守しているのだ。

わたしたちは、会議室の建物と北側の建物が見渡せる自由の家と呼ばれている展望台に上った。北側の建物にぞろぞろと観光客の団体が来ていた。ガイドから注意を受けて、手を振ったり、カメラを向けたりしないようにとのことで、向こうもそのルールを守っているように、わざと無視したような態度である。

南だけでなく、北側もこの板門店ツアーを募集していて、全国から同じように韓国を見にくるのだ。そこにも売店があって、穴が掘られたところに立て札があり、多分、左右対称のように全く同じなのだという事を想像しておかしな気持ちになった。

遙か北側を望む監視塔で、わたしたちはしばし休憩した。なだらかな草原が続いて、ところどころにこんもりとした杜が見えた。その草原の坂を誤って転がると、亡命になるという。北のケソン市のビルや団地がすぐ傍に見えた。大きな国旗が塔の上で翻っていた。その国境にある町は無人の町ではないかとガイドは説明をする。北の謀略で、さも人が住んでいるように見せかけているのだと。その町は毎日、定まった時刻になれば一斉に電灯がともるのだという。それだけでも人工的に映画のセットのように造られた町なのだという。

韓国の人は戦争の危機感日本ほど持っていないような気がした。むしろそれを望んではいない。日本だけが、毎日のようにテレビで煽り、危機感を面白がってワイドショーでやっているのだ。一千万の家族が北と南に別れている。親戚友人を数えれば、自分の肉親が住んでいる国と戦争をすることは考えられない。

日本もドイツのように東京で北と南に分かれたら、果たしてイデオロギーだけで戦争をしたいだろうか。したいのは、国連軍の羊の毛皮をまとったアメリカである。南北統一の願いは北も南もあるのだ。太陽政策で対話を進めてゆくという姿勢は変わらないだろう。

いつも大国の論理で犠牲になるのは小国だ。半世紀も経って、まだ休戦ラインは消えない。かつての戦争を体験したことのない国民が大方を占めるようになって、なおも存在し続ける三十八度線とは何だろう。

ただ、草原の上を白い鳥が優雅に飛んでいるのが目についた。何の鳥だろうか。二羽の鳥は、国境のない空を実に自由に飛んでいるのだった。

(了)

おとといの新聞で、とうとうパソコンの本体が掌にすっぽり隠れるくらいの大きさになったという。そこまできたかという感じだ。ということは、携帯電話とパソコンが合体する日はそう遠くない。

いまでも携帯の機能には目を見張る。電話やメールだけでなく、スケジュールを書き込んだりする手帳代わりに、目覚まし、電卓、ビデオカメラ、デジカメ、ボイスメモ、インターネット、テレビ電話、ナビ、留守録音、音楽、懐中電灯、ゲーム、カレンダー、時計などなどポケットに入れてからは、手帳や少し大きいモバイルギアなどは使わなくなった。

最近では、パソコンでホームページ上にダウンロードした小説を掲載しておき、それを携帯に取り込んで読んでいる。どれくらい保存できるのか試してはいないが、いまのところ短編小説なら十四は入る。読書端末としても使える。文庫本をいつも何冊かポケットに入れていたという安心感がある。どこで突然暇ができるか判らない。暇潰しにはもってこいだ。

今度は携帯にテレビが付く。ついていないのは鉛筆削りぐらいのものだ。そのうち、折り畳みの小さなキーボードを付ければ、立派な携帯パソコンになる。

携帯は若者だけでなく、いまや幼稚園の幼児から、老人まで持っている。国民の半分が持っているのが、次第に持っている人の割合が、持っていない人を越えて、さらに増え続けていた。

携帯の普及で、街から公衆電話が消えた。ないと困る人が続出した。仕方なく、携帯を持つことになった。

それでも頑固に携帯なんか持つものかと、不携帯同盟なるものができて、絶対に持たない人たちが、全国組織を作っていたが、その会員にも脱落者が出始めた。なかなか純血を守ることは難しい。

そのひとりの頑固者に北山がいた。何がなんでも携帯に汚染されることなく、なくてもいい生活を、童貞を守り通さねばならない。そのためには、パソコンもやらない。電話も使わない。徹底していた。家から電話もはずしてしまった。

それで、用事があると、すべて葉書を書くことにした。

「前略、この前の本を貸してくれ」

と、友人に簡単な用件のみの葉書を出した。その友人もまた不携帯同盟のメンバーで、葉書を書いてきた。

「前略、本って、どんな本だったっけ」

北山はまた返事の葉書を書いた。

「前略、だから、この前話していた遙という同人誌だよ」

と、延々と葉書が続く。その間にすでにひと月は経っていた。医者に、北山の女房が具合が悪くて寝込んだとき、容態を葉書で出したこともあった。その医者も北山が電話や携帯を嫌うのを知っていて、面倒くさいが葉書で回答していた。哀れ、北山の女房は手遅れで死んだ。

それがきっかけになって、北山も携帯を持つことになった。メールアドレスを自分の名前をそ

のまま頭において登録した。別に持ったからといって嬉しくない。それもいまさら、持ったと威張れない。

ところが、三分おきにメールが来る。始めは自分のアドレスなんか誰も知らないはずなのに、不審に思ったが、どこかで期待感もあり、メールを開けた。若い女性からだった。最近、女房が亡くなってからはご無沙汰しているので、ついついメル友になりたいという名前も嘘っぽい女性のホームページにアクセスしてみた。そこには女性のヌード写真があられもない格好で映っていた。

かと思うと、いきなり携帯が鳴る。電話と思って受けるとすぐに切れた。ワン切りとは知らず、履歴から電話をかけ直した。すると、変な女性のよがり声が聞こえてくる。

受信拒否のやりかたを知らないから、真夜中でもメールは来る。ワン切りはくる。しょっちゅう、携帯が鳴るので仕事にもならない、すっかりてと睡眠不足になってしまった。

そして、さらに怖いことが起こった。知らない会社から目玉が飛び出るような請求書がきた。そうかと思うと、簡単に低利で金が借りられると、未承認広告がくる。試しに一回だけ借りてみたのが大変なことになった。毎週、申し込んでいないのに、一定額の金が通帳に振り込まれてくる。その返済が高利もいいところ。十一以上で、法定金利なんかは無視しての恐喝が始まる。

いろんな栄養食品のサンプルを無料で送るというのにも申し込むと、そのセールス電話とメールが脅迫のように毎日来る。

北山はとうとう音を上げて携帯を解約した。

「世の中にこんな恐ろしいものがあつたなんて」

そして、また以前のように葉書をしたためる。

北山が最近、気が付いたのだが、携帯をやっている人々の目つきがおかしくなっているのだった。みんな同じ目をしていて、それは、携帯に洗脳されていない北山だけが気が付いたことだった。何かがむしばまれている。携帯を全能の神として信仰する人々に、何かが送信されてくるらしかった。

世の中がすべて何者かに命じられるままに動いている。各地で不携帯同盟の会員たちが迫害を受けていたが、それが殺戮に変わりはじめていた……。

第680話 中心暗

時は平成十五年十二月十四日未明。春からすでにフセイン邸に討ち入りを果たしていた、ブッシュ以下四十七の米国支持国は、フセインの首を取るにも、いないので焦っていた。懸賞金をかけ、スパイを張り巡らせ、あの手この手で動いても、憎きフセインの姿を発見することはなかった。

すでに、フセイン邸はブッシュの手の内にあり、占領したのだが、まだ生き残っているテロにより、突然、厠の陰から斬りつけられたりしていた。

「ええい、フセインはいずこ、フセインは一」

互に見つけたときは呼子を吹く手筈になっていた。フセインがいたという情報を得て、捜索隊が馳せ参じた。いたという確かな証拠はないが、それらしい雰囲気は残っていた。フセインとおぼしき人が寝ていたというベッドはすでにもぬけの殻だった。

「うん、まだ暖かい。そう遠くには行っておるまい」

蒲団に手を当てて、隊員たちは、やっきとなってフセインを探した。

何せ、この邸宅といたら、男はみんな髭を蓄えることになっていたから、顔もみなどこか似ている。髪の色も鼻の高さもアラブの顔は彫りが深く美男子が多い。

フセインの影武者がいるという噂が流れた。事実、それぐらいの地位にあるものなら、あっても不思議ではない。フセイン邸で、捜索していたら、そっくりさんが三人も出てきた。見ればみるほどよく似ている。しかも一度に三人もみつかるというのがすごい。

アメリカは困り果てた。さてさて、本物がこの中にいるのかいないのか。そこで、テレビ番組に三人とも出場させた。題して「私の秘密」。さあ、本物は誰でしょうか。

回答者が質問した。

「一番の方ねえ、核兵器はどれぐらいの大きさなんですか」

「さあ、わたしの邸宅にはそんなおっそろしいものはありません。実際、出てこなかったでしょう。そんな、誘導質問をしても駄目ですよ」

「二番の方、ビン・ラディンさんとは一緒に隠れていたとか」

「そんな、どうして、わたしと彼とを一緒くたにするのです。彼は彼、わたしはわたし、あなたはあなたなのです」

結局、三人とも、替え玉だった。偽物のフセインが邸内をごわごわと歩いているので、側近がカムフラージュのために、そっくりさんを沢山募集したのだということが判明した。紛らわしい。

核が出てこない、フセインはいない。それで、世間はだんだんとアメリカを非難するようになった。アメリカの形勢不利になってきた。

「いいんですよ。いつものでっちあげという手を使えば」

ブッシュの補佐官はそっと囁いた。民放テレビ局が使うヤラセを政府がよくやっていた。全世界を騙すのはお手の物、アポロの月面着陸も怪しいと、最近そんな本が出ていた。

アメリカ政府は、偽物のフセインを本物と偽り、捕捉したと臨時ニュースを流した。それを市民が聞いて、大喜びする様子が全世界に中継で流された。旗を振り、手を叩いて恐怖政治から本当に解放されると喜ぶ人々は、テレビカメラの前で、エキストラとして雇われていた。その映像の後ろでは、

「ふん。またやってやがら」と、相手にしていない市民の冷たい視線があった。

ところが、頭に来たのは本物のフセインだ。そこまで、ヤラセをやらせ、黙ってやらせてたまるかと、地下の穴蔵から出てきた。出てきたところを米軍の特殊部隊に取り囲まれていた。

「ああ、見つけた」

「し、しまった。謀られたか」

見つけた部隊が呼び子を吹いた。すると、邸内でサボっていた捜索隊が、みんな中庭に集まってきた。

「わしが、何をしたのだ」

フセインは開き直って云った。

「9・11とわしと何の因果があるんだ。それに、大量破壊兵器は出てきたかね」

「うるさい、すべて石油利権の犠牲者になるのだ。そんなことはどうでもいいのだ。この戦争のバックには世界の経済界がついているのだ」

「悪くもない男を、おまえたちは、戦犯として処刑するのか。どこにそんな権利があるのだ」

フセインの首はついに取られた。

「いえいえおー」と呐喊をあげる悪口弄士たち。フセインが抹殺されても第二、第三のフセインが出てきて、この戦、終わることはない。

いつまでも戦火の消えない中東の心は暗い。

第681話 古本屋の引っ越しその後

あるはあるはあるは、店主が呆れるほど本がある。林語堂が引っ越しのため、本を縛っておくのだが、その量たるや、よくもいままで買ったものだとおもうほどだった。

本棚は三重。一列の裏にまた本があり、その本のさらに奥にも本がある。通路はようやく人ひとり通れるほど、通路にも本が平積み。通れると云っても、真っ直ぐには歩けない。みんな横歩きで蟹のように本の穴に入ってくる。それでも体重制限があり、ふくよかな人は入口でつかえるから入れない。

本棚の袋小路にも押し込めるだけ押し込めているから、本を掘っても掘ってもまだまだ出てくる。手伝いにきた北村の女房はうんざりしていた。それは、すでに売り場ではなくなっていた。店主の北村拓也は女房の元子に、

「お金が落ちていたらネコババするなよ」と、釘を刺しておいたが、

「心配いらないよ。一円も出てこない。しけた店だ」と、けらけら笑う。

元子にバカにされるほど、ケースや本棚を動かしたときに、よくお金が出てくるのが、全然出てこない。

「それより、ネズミが死んでいたりしてね」と、元子は相変わらず口が悪い。

「それだったらまだいいが、本の下敷きになっている死体が出てきたらどうする？」

古本は売れない。売れないのにやたら売りにくる。在庫は増える一方だ。店の隙間という隙間に本をつっこむので、ぎゅうぎゅう状態だ。本の漬け物ができているか、奥の奥の下にある、もう何十年も日の目を見たことがない本は、本の底で化石になっているか石炭になっているか。

店がいっぱいだから、北村の自宅も、玄関から廊下、階段まで本でびっしりだ。玄関のドアを開けたら、本の山にたいていは驚く。セールスは、「あっ、失礼しました。なんだ、ここは倉

庫だったのか」と、帰ってゆく。本の山で居間に個室ができた。その谷間に子供たちが座って、テレビを隔離された状態で見ている。拓也は本を自室に敷き詰めていたので、その本の上に蒲団を敷いて寝ていた。

生活に圧迫感がある。息苦しい。なんとかしてくれ。それでも、店がいっぱいで、もう入らないから、家族の嫌がるのを承知で本を仕入れてはせっせと家に運んだ。

「どうするんだい。こんなに本を買って」と、ばあさんも最近はうるさくなった。

もう、どこもここも限界を超えていた。

「よし、引っ越しをしよう」

そう思ったが、あの本をどうして運ぶんだ。それを考えると憂鬱になってくる。

引っ越し先が決まった。いままでの店の五倍はある大きな店舗というより倉庫に近い。元、縫製工場の跡というが、だだっ広いから誰も借りずに、そのまま七年も放置されていたようだ。不動産屋は、

「お宅が借りないと、建物を壊して駐車場にするところだった」と、拓也が借りたお陰で建物は残った。

引っ越しと決まれば、まずは、自宅の本から運ばねばならない。家族を救出することが先決だ。ワゴン車で毎日、新店に運ぶ。ワゴン満載で十日以上かかった。それほどの本の量だった。

本がなくなると、元の我が家に戻ったのだが、玄関も廊下も広々とがらんとしてきたら、何となく寂しい。逆に落ち着かない。

「こんなに家って広かったんだ」と、拓也の娘は驚く。

引っ越しの一月前から、本を運んだ。最初は格下げした本から。それから全集、雑誌、大型本とせっせと運ぶ。単行本は一週間前に紐で縛りはじめる。

そして、いよいよ引っ越しの日だ。子供二人と元子、娘の彼氏にバイトとこちらは六人、運送屋から四人、友人が飛び入りで手伝いにきて、十一人で大型トラックに本を積み込む。積むだけで二時間かかる。新店に四往復して、本棚も運んだ。みんな疲れも限界だが、広い店も足の踏み場もなくなるから、本棚に本を並べる。半分は倉庫だ。インターネット中心の在庫置き場だから、今までのジャンル別に図書館の分類では並べない。データの登録順に一番からこれから並べてゆくので、哲学本の隣に官能小説があつたりする。いままでとは違ったやり方。倉庫のため一般客は入れない。どうしても見たい人は入れるが、なんだ、このでたらめな並べ方はと怒るに決まっている。怒らない人だけ入れると拓也は決めていた。

服はどろどろ、顔も真っ黒、指は割れ、みんな憔悴しきって、飯を食いに行った。口数も少なく、ぐったりとしている。腕も痛い。運送屋も暗い顔をしていた。

拓也の友人の敦賀が陣中見舞に来た。本の山で格闘している拓也を見つけて、

「これはすごいや。ともかくも緊急避難してきたという感じだね」

「もう、これで引っ越しは終わりだよ。七年に一度の引っ越しだが、これからまた七年というとおれも六十近い。次は、店をやめるときか、破産するときか、一家心中するときだな」

インターネットのデータは全部削除した。十万冊のデータが消えた。これから、半年かけて再登録するのだ。売り切れのないよう、探求書が一分以内に探せるよう、番号順に並べるのだ。

拓也は本の山の上で、大晦日までには平常営業したいと、大きな後始末に溜息が出るのだった。だが、この話を読んで、ひょっとして、手伝いにきてくれる人がいるのではないかと、密かな期待を抱きながら。

第682話 第九交響曲

年末に第九を演奏し、新年には新世界を演奏するのは日本だけと聞いた。全国で何百という演奏会が開かれるのであろうか。

わたしは、年末になると、この第九を聞きたいと思わない。ずっとそう拒否してきた。それをまた聞くようになったのは、時間という酒が、思い出を甘く発酵させたからだ。

わたしが最後に第九の演奏会を年末に聞いたのは、二十一の歳の、十二月中旬だった。その日のために、コンサートの切符を二枚買っていた。上野の文化会館は満員の聴衆で、開演前の賑やかな雰囲気包まれていた。

開演のベルが鳴っていた。会場の外でくつろいでいた人たちも、みなホールに入ってゆく。わたしは、腕時計ばかり覗いていた。来るか。来ないか。

わたしは、学生時分より大のクラシックファンで、アルバイトをした金をすべて、レコードを買ったり、音楽雑誌を買ったり、コンサートへあしげく通う費用にあてていた。当時のLPレコードの値段は、いまのアルバムCDの値段と同じだから、如何に高い買い物をしてきたか。それは学生の身分では道楽を過ぎていた。飯も食わないで、せっせとレコードを買い集めたのだが、新譜もだんだんと買えなくなると、中古レコード店を回るようになった。新宿西口、御徒町、お茶の水、中野ブロードウェイ、有楽町と、暇さえあれば、都内のどんな小さな中古レコード店をみつけては、宝探しをするように喜んでいて。

たまに上京してくる親父が、わたしの部屋にいつのまにかずらりと並ぶレコードを見て、真っ赤な顔をして怒鳴った。

たかが音楽といっても、取り憑かれたように、わたしは音楽にのめりこんでいった。FMファンの週刊誌に赤ペンでチェックして、ラジオから毎日、留守録音して、そのカセットテープを小さなカセットデッキを持ち歩きながらイヤホンで聴いているといった、まだソニーのウォークマンの出る前で、その走りをしていて。

ベートーヴェンが好きだというわけではなく、その深刻な音色よりはモーツァルトが好きだった。ただ、年末の雑踏の中で、セコハンレコード・ショップの店頭で流れていた第九がひどく気にかかった。JBLのフルレンジの大きなウーファーから響いてくる重低音にすっかり魅せられていた。雪でも降り出しそうな寒い夜に、結構若い男女が腕を組んで歩いていた。わたしも、ある人のことを思いだしていた。よれよれのジャンパーでは寒い。またレコードを買って、帰りの電車賃も怪しくなった。手袋も欲しいし、マフラーもあればいい。第九の中古レコードだけ

がしっかりと小脇に抱えられていた。

「あら、ダッフルコートぐらい買ったらいいのに」と、彼女は云った。

「それが、そのお金でまたレコードを買ってしまったんだ」

「それだったら、寒いなんて云えないわけね」

そうすまして云う人だった。

アルバイトが忙しく、帰省しない年もあった。そんな年にひとり東京に残されていた。大晦日にふらりと日本橋の三越に入ると、一階の広いホールで、オーケストラが第九を演奏していた。わたしは、その弦の重厚な和声に追われるように外の通りへと逃げてきた。耳を塞いでいた。まだ、後遺症が続いていた。

あれから十年が経っていた。わたしも結婚して、三人の子供がいた。もうすっかりと過去は忘れ、別の生活へと入っていた。

音大に進み、この町の私立高校で音楽の先生をしていた友人から電話がきた。一人が足りないんだよ。文化会館で練習しているから、絶対に来てくれよ。おまえは、体が大きいし、バスがいいのかな。男声が不足しているのに、バスはさらに少ないんだ。

強引だった。第九を歌う市民の会というのがあって、別に声楽をやってこなくとも、全くのシロウトが集まって、年末に毎年第九をやっていた。それに参加してくれというのだ。

わたしは、渋々出かけていった。第九と聞いただけで、嫌な気分になったが、以前ほどではない。時間が薄れさせてくれるのか。

練習会場に行くと、いきなりドイツ語の楽譜を渡された。ドイツ語を選択していなかったわたしは、楽譜も読めないが、歌詞も読めない。当惑していると、友人が、鉛筆で、カナで書いていてもいいと耳打ちした。会場を見渡すと、圧倒的に女性が多い。特に年輩者が多いのに驚かされた。最高齢は九十近い。最年少で中学生というが。平均年齢は五十は超えている。

わたしは、発声練習からやらされた。そんな本格的にやるつもりはなかった。ただ、人手不足というから、頭数のつもりで参加したのだ。それが、練習を重ねるに従って、だんだんと面白くなってきた。大きな声で、腹の底から歌うということは、ストレス解消にいい。

オーケストラとの音合わせもした。いよいよ、当日、昼の部と夜の部の二回の演奏に出た。子供たちと女房も聴きにきていた。会館は満席だった。ライトを浴びて礼服に蝶ネクタイの合唱団が三楽章から入場する。緊張してきた。小学校のときから音楽は2か3で、歌なんかひどいものだったわたしが、人様の前で大勢の中とはいうが歌うというとなんでもないことをしていた。

第九を聴くたびに耳を塞いでいたわたしが、その音の中に入って、もうすっかりとあの人を忘れていたように思った。

開演時間ぎりぎりにあの人は走ってきた。

「もう、今日は忙しいのよ。遅れると思って走ってきたわ」と、怒っていた。

「わたし、これが終わると、朝霞の兄のところに行くから」

と、もう次の予定でわたしを封じ込めていた。もう、すべてが終わりだった。もし、あの人が出来なかったら、山手線に飛び込んでいたかもしれない。

第九の演奏が始まった。わたしの耳には何も聴こえていなかった。

八十分余りの演奏時間で、みんな終わらせようと決意していた。それをあの人は知らない。すでに、わたしは、手紙を書いて投函していた。明日、その手紙をあの人が読む。それを書いた日時が、この演奏会の前だと知ることになる。わたしのポケットにはもうひとつの切符があった。青森に帰る、今夜の夜行列車の切符だった。

第683話 水音

水音と書いて「みお」と読んだ。彼女との出会いは、一年前に遡る。

あれは、八月七日のことだった。青森ではねぶた祭のフィナーレで、花火大会が行われていた。ぼくは、その花火が夜空に咲く、劇的な日に水音と邂逅したのだった。

水音は箱入り娘で、世間を知らない。ぼくの周辺ではこんな初な子は久しく知らなかった。目がきらきらと光っていた。純粋な気持ちが目に表れていた。

ただ、水音は千葉に住んでいる。年に何回かしか青森にはこないのだ。長距離恋愛とはこんな気持ちなのだろう。ぼくにはこんな気のもむ日々を送るのは初めてのことだった。

日を増すに従って、ぼくの水音に対する整理のつかない気持ちは募るばかりだった。どうすることもできないでいた。逢いたくて仕方がなかった。それも電話とメールで済ませているのだが、見えない相手に意志さえも伝わらないもどかしさがあった。

電話口では、彼女は何も云わない。ぼくが必死で水音、水音と名を呼んでいるのに、つれないのか、恥ずかしいのか、終始無言であった。

それならば、メールでと、せっせとメールを打つが、返ってくるメールは、意味不明だった。

#\$%&?@○♂∞◎▼*%\$

それはユーモアなのか、何かの暗号なのか、彼女の真意を探るために、ぼくはその言語の解析をするのだった。

離れているほど好きな気持ちは増幅する。拒まれればそうするほどに逢いたくなってくる。ぼくは、年甲斐もなく、携帯電話の待ち受け画面に、水音の画像を貼り付けていた。プリクラで撮ったような写真のシールを貰ったので、自分のノートパソコンに貼ったりして、まるで女子高校生のようなはしゃぎようだった。

その水音が青森にまたやってきた。ぼくは、仕事が忙しかったが、すべてを投げ出しても、逢いたい気持ちのほうが強かった。片思いでもいい。彼女に嫌われていなければ、ただ、傍にいて見ていられるだけでいい。それはアガベの無償の愛に近かった。自然な気持ちで、水音を愛していられた。

朝からそわそわして仕事が手につかない。デジカメのバッテリーをチェックしたり、ビデオカメラのテープ残量を確認したりして、若いときのデイトの前のような気持ちだった。

その朝から雨が降っていた。この青森の空港は海拔二百メートルの山裾にあるので、天候に左右されやすい。どうして、こんな高いところに造ったのか。欠航が多い空港だった。ぼくは、心配そうに空を見上げ、視界を確認していた。雨が降っても、曇っていても、視界さえきけば飛行機は離着陸するのだ。その日の二時過ぎに水音は青森空港に到着する予定だと連絡があった。

結婚式があるからだ、この十二月の半ばに来て、五日くらい滞在してから帰るといふ。その代わりに、今年は年越しも正月も水音がない。楽しみが前倒しになったのはいいが、何か寂しい正月になりそうだ。

空港の到着出口で、そろそろとやってくる旅客の中に水音の姿を探した。もったいぶったよう

になかなかゲートに姿を見せない。ぼくは、多くの出迎えの中において、背伸びをしたりして、水音の姿をいち早く掴まえようとしていた。

来た。水音だ。向こうは気がつかない。ぼくは、素早く彼女を抱きしめると、頬をすりつけた。みんな見ているのも気にしない。実に自然な気持ちに任せて、思いっきり抱擁していた。抱くという感触で、全存在が余計はかなげで、細い体を両腕で確かめていた。

水音は元気そうだった。雨が降っているから、濡れないよう、水音をぼくのコートでガードするようにして近くの路上に停めていた車まで連れていった。

助手席に座った水音は、今度は、ぼくの方に向き直り、両手を広げて抱いてもらうようせがむのだった。多少、慣れないので気恥ずかしさはあったが、

「駄目だよ。いまは運転中だからね」と、本当はまた愛撫したいのに、それを我慢しながら、冷静を努めようとする自分がおかしかった。

それでも、彼女は、運転しているぼくをわざと挑発するように手を出して笑うのだ。そのうち、車のワイパーなどをいたずらしてわたしの気を引こうとしているらしかった。

「いつから、そううるさくなったんだ」

と云いながらも、ぼくは水音のすべてを許し、すべてを愛していた。手放しで愛せるほど、ぼくは年取ったのか。これが若いときならば、許せないこともあるだろう。水音の成すがまかにさせていた。

家に着いてからも、ぼくは水音を離さなかった。ずっと抱き合ったままだった。離れている間の寂しさの思いを一挙に取り戻そうと、ぼくは彼女の額といい、鼻といい接吻の雨を降らせた。自分の気持ちを少し落ち着かせなければ、ぼくは、水音を食べてしまったかもしれない。もっとも愛するものを食べたい欲求というのは、人間の本能に備わっているものなのかもしれない。

彼女は相変わらず、口数が少なく、ぼくに何をされても嫌がることなく受け入れていた。

「こんなに、愛しているのに、なんとか云ったらどうなんだ」

ぼくがたまらなくなると彼女に云った。すると、彼女は一言、言葉を発した。

「じじ」

「な、なんだと、爺いだと？ なんてこと云うんだ」

すると、傍で聞いていた女房の元子が笑って云う。

「もう、おじいちゃんでしょ。そろそろ観念しなさい。ほんと、孫にはでれでれなんだから」

第684話 白い世界

ぼくは、ある朝から、世界の変化に気がついた。

それは、毎朝、パソコンでメールが来ているかどうか、受信ボックスを開いたときのことだ。ぼくは、同じ職場の美紀と毎日のようにメールのやりとりをしていた。オフィスラブは色眼鏡で

見られるから、できるだけ誰にも気づかれないように、美紀と密かにメールで愛を確かめあっていた。

それが、その朝に限って、文面がなく、ただの白いメールだった。よくあることで、慌てて文面を書く前に送信ボタンをクリックしてしまうということなのかな。それだと思った。それで、返信メールを美紀に送った。

—いまのメールは真っ白だった。気になるから。もう一度、送ってくれよ。

すると、また、美紀から返信メールがきた。返信の場合は、ぼくは相手の文面を引用するようにしていたが、その返ってきたメールも、ただ真っ白だったのだ。おかしい。メールソフトが壊れたのか、パソコンのキーボードが壊れたのか。これもよくあるが、特定の文字が打っても出てこないということはある。

ところが、ついでに未承認広告と称するDMがいつものように沢山きていたので削除しないで、開いたみた。それもただ真っ白であった。完全におかしくなっている。朝の忙しいときに、パソコンをいじくっている時間はない。帰ったら、メーラーを再インストールしてみようか。そう思って、新聞受に朝刊を取りにいった。あれ？ と手にした真っ白い紙の束を見て、それが新聞紙であると認識するまでしばし時間がかかった。

「なんだ？ これは。印刷ミスじゃないのか。初めてだよ、こんなの」

確かに紙の束は新聞紙と同じ大きさで、それぐらいのページ数はありそうだ。新聞販売店に電話しても仕方がない。会社で新聞は読もうと思った。

それで、とりあえず、テレビでもつけて、トーストでも焼くか。と、テレビのスイッチを入れると、画面が真っ白だ。リモコンで、チャンネルを替えても、どの番組の画面も白だ。アンテナ線が外れているのかなと、テレビの裏を覗いてみた。正常だった。アンテナが外れていれば、ざらざらした画面になるはずだ。それが、音声もなく、まるでテレビ局の異常か、受信障害でもあったように、なんの映像も出てこない。

「こいつ、テレビまで壊れたか。去年、買ったばかりなのに」

何か朝からついていない。

「そうだ、携帯から美紀に連絡はできる」

と、ぼくは携帯からメールを送った。ところがそれも同じで、美紀から返信はきたが、それも文面がない真っ白。

頭にきた。携帯で直接、美紀に電話してやる。

—おーい。美紀。どうして黙っているの？ なんとか云ったらどうなんだ。

美紀は電話に出ているのに、声が聞こえない。ふざけているのか。圏外というなら、ちゃんとディスプレイに表示は出るし、声が途切れて聞こえにくいときも、かすかに相手の声は聞こえるのだ。

携帯も壊れているのか。電話ならどうだ。ぼくは、電話機から美紀に連絡してみた。通和音はやみ、確かに相手が出た感じはあったのに、声がまるで聞こえない。おかしいぞ。ぼくは、急に不安になった。どうにかなりそうだった。それで、背広をとると、朝食もとらずに急いでアパートを出た。

近所の人たちが、みんな外に出ていて、棒立ちとなっていた。大きな地震でもあったときのよ

うに、住民は不安な眼差しを空に向けて、道路という道路は人々でいっぱいだった。何か大変なことが起こっているのは確かだった。

地下鉄で出勤するのだが、いつもの駅の売店に並べられている週刊誌も新聞もみんなただの紙の束だった。ぼくの目がおかしいのか、頭がどうにかなったのか、売店のおばさんに訊いてみた。

「あのう、すみません。この週刊誌には印刷されていませんよね」

すると、おばさんは怪訝な顔をして、まるでぼくが気違いでもあるかのようにまるで取り合わない。

地下鉄の車内の中吊り広告も真っ白い紙だったし、各駅のホームの壁に展示してあるポスターも真っ白だ。それなのに、地下鉄はいつものように満員ラッシュで、別になんら変わったことがないような、いつもの出勤風景があり、通勤客たちは黙々と乗っている。

ただ、人間の声がしない。全員が口がきけないようだった。ぼくは、そんな状況でも平然と通勤している人たちが何か操られている人形のように思えた。

会社に行くと、みんな俯いて、暗い表情で歩いているが、会話がなかったので静かだった。電話も鳴らない。デスクに並んだパソコンも白い画面のまま何も映っていない。自分のパソコンと同じだった。部長が、書類を廻していた。それも印字がされていない、真っ白のただの紙だった。女子事務員は、その白い原稿をコピーしていた。出てくるのは、当然、ただの白い紙だ。情報という情報が完全に白紙になっている。

ぼくは美紀と廊下で出会った。

「どうしたんだ。みんな押し黙ったまま、口もきかない。おかしくないか」

すると、美紀は悲しげな顔をぼくに向けたまま、何かを云おうとして、云えないもどかしさに俯いた。そして逃げるように立ち去った。

ぼくは、ぼくだけが口がきける。頭にきて大声で叫んだ。

「一体、なんなんだよ。なんでみんな平然と仕事しているんだよ。なんとか云えよ」

ぼくの声だけがビル全体に響き渡っていた。

第685話 時計のない国

わたしがその国にやってきたのは、論文を書くためであった。その国には時計がない。時間という観念がないのだ。一時間、一分という概念もない。

というのも、いつも昼で、夜がない。太陽が空の一点に止まったまま動かないから、時間があってもいつも正午なのだ。

その国には暦がない。あっても意味がないから、作らない。だから、一週間という感覚がない。月曜日も火曜日もないのだ。いってみれば、毎日が日曜日だった。

そして、さらに一年を通して、いつも真夏と同じで、気温の変化がない。だから季節というも

のものない。春と住民に聞いても、そんな単語すらないから、四季を表す言葉だけでなく、四季の移ろいを表現する言葉が発生しなかった。

一月も二月もない。一年というくりかたが判らないから、それを十二等分するというのも理解しないだろう。

電車は、砂漠の中のその人工都市に着いた。その街はすべてから隔離されていた。駅のコンコースを歩いていて、大勢の市民が、バラバラに行動しているのが、おかしかった。

その街には通勤ラッシュというものが無いらしい。いつも電車は満員ということが無いと聞いた。

駅前にダリウス博士が迎えにきていた。博士とは心理学会で同席することがたびたびあった。

「いやあ、ようこそ」

口髭と肩までの長い髪が板についている博士が握手を求めてきた。

「すっかりと、この国の市民になられましたかな」

わたしが云うと、

「まだまだ慣れません。自分自身も検体みたいなものです」

博士の車で自宅へと案内された。

街中は普通の都会のように見える。デパートも商店街も、スーパーマーケットも建ち並び、買物客がそぞろに歩いているが、みんな一様にゆっくりと歩いているように見えた。それが、実にスローモーでおかしい。

「歩き方が緩慢ですね」

「そうですね。初めてこの国を訪問した人が目にする違和感というのは、まずそれです。ここに暮らす人々は、時間に追われることがない。学校に行くのにも、遅刻ということがないから急ぎません。会社も定刻の出勤時間がないので、慌てることがない。みんなフレックスタイムを導入しています。自分の好きなときに会社や学校に行ったらいい」

「それなら、困ることはありませんか？ 仕事も勉強も一斉にできない。みんなバラバラで噛み合わないでしょう」

「いいんです。この国はそれぞれが自分に責任を持って、取り組むことになっているんです。いわば、みんな自分の体内時計を持っていて、本能で動いているんですね。学校も会社も商店もどこも二十四時間動いています」

わたしは、外に目をやって驚いていた。この国は眠ることがないのだった。個人はそれぞれのサイクルで睡眠をとるが、器はどこも夜も昼もない。

「それで、何かとんでもない変化がありましたか？」

わたしはさっそく博士に質問攻めだった。

「そうですね、まず睡眠時間でしよう。この国は他国に比べて半分の四時間も寝ていません。睡眠が短い。それで、人生が長く感ずるほど、彼らには時間というものがたっぷり使えます。一日四時間余分に起きているということは、この国では十六年も多く人生を使えます」

「それで、平均寿命に影響があるとか」

「ええ、みんな長生きです。この国は日本を遙かに抜いて、男女ともに百歳を越えています。

まあ、まだ測定を始めてからの年月が少ないので、推定ですがね」

寝過ぎることは、逆に寿命を縮めることは知っていたが、まさにここはその実験の場だった。

わたしたちの車は博士の家に着いた。夫人が迎えに出た。リゾート地帯のように明るい雰囲気のコテージが並んでいる住宅街だった。庭には四季折々の花が一斉に咲き乱れている。その庭先のテラスの椅子について、夫人も交えて不思議な味のティーを飲んだ。

「失礼ですが、博士とお会いしたときは、確か四十歳でした。あれから二十年が経っているから、わたしより十は先輩ということになりますが、何か、わたしより若い感じがいたします」

夫人もわたしより年上なのだろうが、見た目より二十は若く見えた。

「他国より長く生きている割には若く見えるというのは、姿形だけではなく、臓器も細胞もそうなのです。非常に活性化していますから、老いることを知らないかのようです。時間が文明国ではストレスとなり、生活や仕事の桎梏となっていますね。それを取り払ったら、人間はどんな人生を送るのか。心理学的にも医学的にも研究の進められるところです」

博士の家には当然、時計がない。カレンダーもない。市民は腕時計をしていない。

「情緒面ではいかがなものですか？」

「四季の変化が人間に及ぼす感情の起伏が、文学などには影響があると思いますが、常夏の国もあるのですから、そんな南洋の国や逆に白夜の国では詩歌が発達しないかということそうではありませんね。逆に変化のない日常の中に、想像力というものが歌を作ります。もっとメンタルなものよりクリエイティブなものとして、この国では芸術もさらに独創的で面白いですよ」

わたしは、見学のために街中を案内してもらうこととなった。

「どうですか、この国に住み着いたら。人生観が変わります。あくせく動くことがなくなります。いいですよ」

わたしは、果たして、夜も昼も冬も秋も日曜も金曜も一月も十二月もない国に住めるだろうか、未だ疑問は払拭できないでいた。これは、壮大な実験都市なのだ。まるで、われわれが花卉や野菜を人工的に電照と温度管理で早く育てるように、ここは電照人間を育てるための工場のように、棲みたいとは思わなかった。

空には、人工の太陽が燃えている。イーターによって、太陽を手に入れた人間は、巨大なドームの中に、世界から隔離した別世界の国を造った。果たして、ここに生活して幸せだろうか。わたしには夜も必要だ。この国の調査は批判的立場で論文を書こうと思っている。

第686話 うらぶれた老人

酒場の入口の石段に、赤黒く薄汚れた服装に白髭の老人が寂しそうに座っていた。年老いて歩くのも困難な老人であるというだけでも哀れなのだが、さらに貧しい身なりで実に悲しげな眼差しを歩道に落としているのだった。

通りかかったロッドはたまたまパーティの帰りで、ご機嫌に酔っていた。年末になるとよくあ

るチャリティ・パーティだった。それに参加しているというだけで、少しは社会奉仕ができたと偽善的に思うようにしていた。

ただ、それは見えない相手への慈善事業なのだが、こうして、目の前で老いた乞食の老人を見ると、人のいいロッドはとても悲しくなってきた。世間が新年だクリスマスだと、浮かれ騒いで、いい服を着て、ご馳走を食べているときに、寒い夜空の下に、暖もなく孤独で、ぼつねんと座っている老人を見たとき、つい暖かい手を差し伸べたくなった。

「じいさん、そんなところに座っていたら寒いだろう。どうですか、これから一杯やりませんか。この店がいい。勿論、ぼくの奢りです」

老人は、長い眉毛の下から見上げた目が潤んでいた。

「すまんのう」

「いいんだよ。今夜はイブなのに、あまりにも寂しいよ。じいさんだって楽しむ権利があるだろうに」

老人はそれを聞いて、ほろりと涙を流した。

そこはパブだった。こんなイブに、パブなんかに来て飲んでいる連中は知れている。せいぜい行き場のない仕事にあぶれた家族のないものたちだ。家族があれば、教会に行くだろうし、夜明かししてパーティをやるだろう。彼女がいれば、二人きりの甘いイブをオールナイトで過ごすだろう。どんな事情があるにせよ、こんな特別の日にホームレスの老人とともに祝いたい。どんなチャリティパーティより、きっと救いになるのだ。ロッドはそう信じた。

「さあ、じいさん。乾杯しよう」

普通は立って飲むのだが、老人とじっくりと飲むために、椅子席についた。スコッチのバルントインを小さなグラスに注いでもらった。

「いい人生のために」

メリー・クリスマスまでまだ三時間はある。ロッドは多分、腹ペこの老人のために、フライフィッシュとオニオンパイも頼んだ。

そして、改めて、老人の顔を見て、何か、どこかで見たことがあるような気がしてきた。どこだろうか。ロッドが小さいときに見たような顔だった。

「どうだい、じいさん、最近、景気は」

少し酔ってきたロッドは身寄りも仕事もなさそうな老人に訊いた。

「まあ、よくはないな。仕事がさっぱりとなくなった。昔は、こんなイブには引っ張りだこでな、ひとりで街を回るのは大変なほどじゃった」

ロッドがよく身なりを見ると、薄汚れているとはいえ、それは赤い服に白い縁取りのまさにサンタクロースの格好だった。通りでどこかで見たことがある顔だと思った。ロッドは震えてきた。これは、本物のサンタクロースに違いない。うらぶれていても、どこかに気品が感じられる。

「それで、あなたは、どんな仕事を？」じいさんがあなたになった。

「わしは、みんなに笑顔を振りまく仕事じゃな。とくにこの時期にはおもちゃなんかで、子供たちの喜ぶ顔を見たいからな」

やはり。老人の云うことに本物である確信を持った。ロッドは老人を尊敬の眼差しで見えるようになった。

「でも、最近の子供たちは現実的で、夢をなくしたというか、その、あなたの存在を信じない子が殆どでしょう」

「わしの存在？ そうじゃな。もう、わしらは古いんじゃ。世の中はもっと進んでいるから。子供たちの要求も、その、なんだな、ケイタイだとかパソコンだとか、だんだんとおもちゃがおもちゃでなく、高額なものになってきよった。それは、かのテレビゲームなるものができた、ここ二十年のものなんだが、おもちゃもおもちゃ屋から電化製品を売る店に代わってきたからのう」

ロッドは同情した。確かに子供たちは夢をなくして、子供らしくなくなってきた。ロッドの甥にも、クリスマスプレゼントは何がいいかと訊くと、金でいいよ、金と可愛くない。親がどんなプレゼントを買ってやっても、開けると、「なんだ、こんなもの、がっかりした」と、素直に喜ばない。

まして、サンタクロースなんかいないと思っている。だから、出番もなく、最近サンタクロースも失職して、ホームレスに落ちた。

「それに、煙突もだんだんとなくなったからな」

老人は、首を傾げていた。

「暖炉というものがなくなったのは、だいぶ前からじゃよ。燃料が手に入りにくくなった。それに、電化住宅が増えた。エアコンの普及でな。ストーブの火の暖かさがだんだんとなくなってゆくのも寂しいもんじゃ」

ロッドは、時代が贅沢になり、そう貧しい子供たちもいなくなると、サンタクロースはお呼びでなくなる、と思った。

「トナカイの餌代もまた大変だろうな」

ロッドが云うと、また老人は首を傾げる。

「トナカイ？」

「まあ、浮き世の憂さを酒ではらしみましょうや。どんどん飲んでください。今日は、二人でぱあーっとやりましょう」

ロッドはぐでんぐでんに酔っぱらっていた。すると、零時を時計が打った。

「メリー・クリスマス」

クラッカーでもあれば鳴らすところだ。

「あなたもめげないで、頑張ってください。あなたを待っている人たちがいる限り、喜びを撒いてくださいよ。お願いします」

「判った。わしも年だが、年金があるわけじゃない。動けるうちは働かなけりゃならん」

二人はパブの前で別れた。老人は呟いた。

「世の中には親切な人がいるもんだ。最近サンドイッチマンの仕事もめっきりとなくなったが、こんな不景気な時代にはおもちゃ屋もわしらを雇わん。広告費から削るからなあ」

老人は、何も書いていないプラカードを手に、酔って、土管の邸宅に帰っていった。

第687話 戦い済んで日が暮れて

林語堂の引っ越しが完了した。いままでの狭い店から広い店へ、家からも本を運び、十万冊の店ができた。店というよりは倉庫に近い。立派なドアがついているが、外から中は見えない。窓もついているが、何故かクローズ状態の物販の店には不向きだ。建物の外壁が紫色と奇抜で、通りかかった客が、

「ここはホストクラブかいな」と云うものだから、店主の北村拓也は、そっちのほうに儲かりそうだなと思った。古本屋よりはいまはフーズクだ。拓也の周りにはホストに使える友人がかなりいる。本間さん、高橋さん、工藤さんといろいろと並べてみる。少しというか、いずれもかなり年上だから、恐らく客も年輩が多いだろう。六十、七十、いや百歳までOKだ。これからは、若い人たちは税金が高くなるから、婆さんたちを狙った商売だ。

あ、そんな話をしているのではない。真面目な引っ越しの話だった。それで、トラックがともかくも新店に山積みにしていった本の束を、女房の元子がパートが終わってから、手伝いにきて、なんとか二人で一週間かけて出してしまった。そんな作業の最中にも、ぽつりぽつりと客がくる。

「短歌の本がないかえ」と、歌人のばあさんがやってくる。

「いま、取り込み中で、この山のどこかにあると思いますが……」

と云うのだが、なんとか探してくれという。

そうかと思うと、京都の大学の図書館から二百円の文庫本一冊のご注文。ホームページを見た、ファックスしてきた。それで、在庫があるかないか電話をくれという。拓也はホームページから電話番号とファックス番号をわざと削除したが、相手は一〇四番で調べて電話をしてくる。その問い合わせが一番困る。相手が沖縄なら、一分電話して、どれほどの通信費がかかるだろう。

—あのですね、ホームページに明記してある通り、データは全部削除しました。どこでその本を見たんですか。

—お気に入りに入れていたんですが。どうして、削除されたんですか。

—いままで五年やってきまして、ご注文があっても売り切れが多く、だんだんとデータに信頼性がなくなりましたから、引っ越しというこの機会に、全データを消したんです。これから、売り切れがないように、また一から再登録してまいりますので、来年からまたご覧ください。

と、すべてのお客に拓也は電話で長々と説明するので、通信費はまた上がる。

世間はクリスマスだと、道路は混んで、デパートもスーパーも賑やかだ。そんな日曜に、元子と拓也は前の店舗を大家に返すために、大掃除をしていた。凄い埃だった。ゴミもまた凄い。元子は呆れて、

「あんた、よくもこんな酷いところで仕事していたわね。埃が気にならないの？」

「ああ、誇り高き男だ。仙人は霞を食べて生きている。古本屋は埃を吸って生きている動物なんだ」

とは云え、それは酷すぎる。窓という窓をすべて開けた。この店を元子と見に来たときは、広いと思った。まさか、あれから八年して、本がこんなにも集まるとは思っていなかった。

本棚と本を運んだら、後はゴミばかり。燃えるゴミと燃えないゴミに分ける。床に散らかった紙の中にメールをプリントアウトしたものが出てきた。別にヤバくないが、女性からだ。それをさっと隠すようにゴミ袋に入れる。

「あんた、いま、何か慌てたね」と、女の勘は鋭い。

何せ、八年のゴミだけではない。その前からのゴミ。店をあちこち出して、閉めるたびに、事務用品や消耗品を集めてくるから、電卓も七つあったり、ボールペンなんか売るほど出てきた。その山の中から何故かハイヒールが出てきた。

「あんたー」とくる。

「し、知らねえよ、そんなもの。おれの趣味ではないよ。そんな、人の履いたものの臭いを嗅ぐだなんて。そんな、フェチじゃないのは、おまえが一番知っているだろう」

「そうじゃなくて、誰のかって、訊いているの」

「だ、誰のって、アルバイトの女の子たちも、入れ替わり立ち替わり、入ったり辞めたりしたろう。彼女たちのものじゃないのか」

拓也はすでに汗をかいている。本当に知らないのだ。そのうち、モーターの割引券なんか出てきたら、どうしようかと、遊んでもいないのに、元子に動かぬ証拠だと突きつけられたら。

ゴミも車満載で二回分はあった。床もガラス窓も磨いて、ようやくガランとした店を明け渡すことができた。

今度は新しい店だ。本は並べ終わり、掃除も終わり、床にワックスもかけた。あまりピカピカなので、印刷の用事できた客が入口で靴を脱ぐ。

「ああ、土足でいいですよ」

床が木というのは、日本人は抵抗があるようで、土足で木の上やまして畳の上を歩くということは、勇気がいることなのか。

広い店に単行本の部屋と、全集、大型本の部屋と、格下げしたゾッキ本の部屋と、倉庫を分けて使うようにした。慌ただししい年末は終わった。体重も四キロ減量になった。拓也はこの十日、本を一冊も読んでいなかった。家に帰るとボタンキューと寝てしまう毎日だ。

「いい店だよな」

と、惚れ惚れと拓也は店頭立って見ていた。開店して四日経っていた。元子も様子を見にくる。夫婦して、店の前に立って、云った。

「いい店だよなあ。これでお客が入ればなあ」

まだ一人も客が来ていない。がらんとした店の前で拓也は泣いていた。

ひたひたと、何者かが、押し迫ってくる恐怖だけが、彼を取り巻いていた。それは、夜中だけでなく、日中、仕事で歩いている、後ろに感ずるのだった。

彼は、さっと不意に振り向く。誰もいない。いないはずがないのに、彼の咄嗟の動作を読んでいるかのように、彼の後ろには何者もないのだった。

(おれは、追われている)

そう思いこんだのは、十二月になってからだった。とにかく時間がない。男は、ただ、どこかへ隠れたかった。追われている気分はいいものではなかった。いつも、おどおどと自分の後ろを振り返る。背中に冷たいものを感じていた。それが何か、判るまでは、時間がかかった。その正体は、毎年、この時期になると、彼の背中に短刀を突きつけていた。焦る。苛立つ。だけど、どうすることもできない。

彼は、逋商会の経営者だ。社長といっても、事務員が二人だけの小さな事業所だ。仕事は、不動産屋と、保険の代理店。いまどき、なかなか不動産は動かない。それでも、動かないと、向こうからやってこない。頼まれるのは、不良債権のどうしようもない物件ばかりだ。保険も、最近、ダイレクトで、通販の保険が幅を利かせて、補償と掛け金に差が出るばかり。苦戦していた。従業員の給与も年末に出せるかどうか。賞与どころではない。

だからというわけでもなく、彼はせかせか歩いていた。いつもより足早で、何かから逃げるように歩幅も大股なら、人々と競歩をしているような歩き方。それはみんながそうだから、歩道では抜かれ、抜き返すと、みんな必死だった。彼だけではないようだ。多くの歩行者が、後ろを不安げに振り向いては、また大股で歩いていった。

「よう、天野じゃないか。何をそう急いでいるんだ」

彼、天野が腕を取られるように、立ち止まると、そこに大学の同窓の高屋がいた。大学を卒業してから三十年。その間に人生のレースには差がついていた。羽振りのよかった実業界も、いまは落ち目。逆に高屋のような公務員が民間を抜いた。まして、天野の仕事は役所抜きではできない。高屋がその部署にいたから、頭が上がらない。

「ああ、おまえは怖くないのか。何か、追ってくるんだ」

高屋は天野の振り向く先を見た。すると、通行人もつられてみんな後ろを見た。後ろを見たら、その後ろの人も、自分の後ろを見る。後ろ後ろと続いて、一番後ろの通行人が、全員の視線を感じて、どきどきしながら、そっと後ろを見た。すると、そこには、ウインドウがあり、自分の振り向いた姿が、ガラスに映っていた。ギャーと、叫んでその男は逃げ出した。次々に誘発して、人々はさっきより、早足で逃げるように立ち去るのだった。

「なんだ。何もないじゃないか。何か来るんだよ」

高屋には何も見えない。人々は何を恐れ、何から逃げようとしているのか。

「おまえには判らないんだよ。いいから、逃げるんだ。追いつかれるぞ」

天野は顔面蒼白になって、必死の形相だ。それが高屋には愉快だ。高屋の手を振り払って、天野は人混に紛れて見えなくなった。高屋は苦笑しながら、恐る恐る後ろを振り返る。そこには、ただ、クリスマスのイルミネーションと、歳末大売り出しの下げビラがあるだけだった。

道路は大渋滞していた。デパートも、銀行も郵便局も役所の窓口もみんな混んでいた。まるで

、喧嘩だった。大声で叫ぶもの、悲鳴を上げるもの、走るもの、転ぶもの。それは、競争だった。我れ先にゴールインしようとする年末の狂奏曲だった。

天野は公衆電話ボックスの陰に隠れた。そして、自分をつけてくるもの確かめようと、そっと覗いた。

「ばあ」と、サンタクロースが顔を出した。どきりとする。

「○○サラ金です。ただいま特別融資実施中」と、天野にティッシュを手渡す。

「脅かすなよ」

それは、サラ金でも闇金でも融資してくれるところがあったら、受けたいのが本音だ。どこも、もう相手にはしてくれない。景気のいいときには貸すだけ貸しておいて、不景気になると、借り換えもできず、返済だけの銀行だ。

お歳暮も今年は欠礼だ。年賀状なんか書いている暇もない。追われているんだ。天野は、だんだんと異常な精神状態に落ちてゆく。周りも異常なほど興奮しているのが熱気で判る。

多くの人々が、一攫千金を狙って、宝くじ売り場に並んでいた。だんだんと日数がなくなるのが判る。手に汗握る。年越しはどうするの？ という女房の顔が迫る。クリスマスは、半額に下がったケーキでごまかしてみても、正月はそうは行かない。世間並みにやらねばと、懐具合をちらりと見る。ないものはない。ない袖は振れない。なけりゃだんさの涙雨。

街はすべて狂っていた。みんなが追われるように、早く、来年という別世界に逃げようとしている。年が変わったところで何が助かるのか。何が変わるのか。変わるものなど何もありませんのに。戦争の危機は相変わらず迫っているし、税金が跳ね上がるのも確実。銀行はより締め付けが厳しくなり、返済を迫ってくる。逃げるんだ。

天野は、走った。歩いてはいられない。いち早く、この現実から逃げなければならない。後ろを見ろ。迫ってくるぞ。さあ、来た。ビルの上にぬっと立ちはだかる「年の瀬」だ。人々は蟻のように逃げた。

「年の瀬が来るぞー」「きゃー、年の瀬だわ」

年の瀬は、のっしのっしと人々の生活を踏みにじるようにして、迫ってきていた。

第689話 あべこべ

夏海を見ていると、婦系図ということを考えさせられる。女系家族にだけあるというのでもないが、高校一年の夏海は代々の流れ注がれてゆく女の血を感じるのであった。

夏海は男勝りの性格で、弟の冬彦が女々しい分、余計比較させられていた。

「あれ、夏海ちゃんの落としていったものを、冬彦が拾ってきたんだよ」

と、親戚の叔母たちは下品に笑う。金玉のことだ。

夏海の母の元子は、やはりすごい女だった。そのまた母の登志子も、いさば（漁商）の母ちゃんのように激しい性格で、それは、太平洋の荒海で育った南部の女の性格が親潮のように代々受け継がれたものだろうか。三代の女に共通しているのは、見た目には可愛らしい顔をして、がさ

つな、さっぱりとした気性というのが、アンバランスなところだろう。声も三人揃って、なんとも可愛い声をしている。大概の男は、まずその声に騙される。電話では、キュートな声で、「はい、はい、判りました」と、やっている、実に素直で、声美人というか、こんな人を嫁さんに貰えばいいだろうと、相手の男性に錯覚させる。わたしもその声で騙された一人だ。相手が、くどくどと電話をしてくるものなら、その声はやがて本性を現す。

「はい、はい、だから、何を云いたいのさ、男だったら、はっきり云えよな。結論から云え、こっちは忙しいんだ」と、急変する。「ええ？」と、相手の男は、今、何を云われたのか、判断するのに一分はかかるほど、ギャップがありすぎる。

登志子も、昔から近所の評判で、一度、町内で事件が起こり、住民の多くが、口を揃えて、「犯人は絶対に登志子よ。あの女ならやりかねない」と云うから、証拠もない噂だけで、刑事が乗り込んできた。二階にいた登志子は、下から、

「おい、降りてこい」と叫ぶ刑事に、「おまえが上がってこればいいだろ」と、階段の上で凄むので、さすがの刑事も怖がったという伝説まであるくらいだ。

孫の夏海にも遺伝した性格は、その辺のやわな男なら相手にならないほどの乱暴な女の子に育っていった。中学のときはそれほどでもなかったように思えたのが、高校になったら急に酷くなった。それで、せっかく彼氏ができて、みんな怖がって一日で逃げ出すやつもいた。

「わたしね、新しい彼氏できたんだ」と、嬉しそうに父親のわたしに話す。

「そうか、可哀想に何も知らないでな」

「うん？ 何か云った？」

「いや、それはよかったな。さあ、何日持つかな」

と、わたしは、また被害者が出ることに哀悼の意を込めて云った。夏海はお父さん子というか、父親に何でも話す。

「今度は、本物なんだ。可愛い子なんだよ」と、携帯電話で撮った写真を見せてくれた。見ると、ジャニーズ系の美少年だ。逆にわたしが欲しいくらいだ。

「おい、今度の夏海の彼氏なあ、可愛い顔しているよな。おれが横取りしようかな」と、元子に云うと、

「何を云ってるの、わたしが欲しいわ。夏海には勿体ない」

わたしだ、おれだと、娘の彼氏を取り合う異常な家族だった。

「今度の日曜に新しい中華料理店に行くから、連れてきなさい。食事をご馳走するから」

と、わたしは、新装開店でいただいた食事券を使おうと思っていた。娘の彼氏に興味を持つほど悪趣味な親だった。

夏海は、普通の女の子より女の子らしいことは一通りできる。彼氏のために手編みのマフラーも編んだし、二人で食べるんだと、本を見ながら、ザッハトルテのチョコレートケーキをこしらえていたりした。料理は得意だった。だが、何をしてもいいが、その後がすごい。台所ががちゃがちゃになっているのだ。作るだけ作ると、後かたづけをしない。やりっぱなしの性格だ。それをお父さんが、いつもぶうぶう云いながら山盛りの食器を洗うのだ。部屋も散らかしてすごい状態だ。それが、彼氏が遊びに来るといっているので、きちんと整理整頓され、玄関までピカピカにな

った。

「これから、毎週、彼氏を家に連れてきなさい」と、わたしは歓迎する。天皇が来ると道路がよくなるのと似ていた。

日曜日に、家族で外食だ。娘の彼氏なのに、何を勘違いしているのか、両親ともうきうきして、めかしこんでいる。夏海も珍しく超ミニスカートをはいていた。

「おい、短すぎないか。こまると下着が見えるだろう」

そんな娘でも父親にとっては晒し者にしたくはない。

「いいんだってば、がはははは」と、笑う娘に色気は微塵もない。

彼氏は父親に逢うのが少し怖いと緊張しているようだった。ラグビー部で頑張っている高校生だ。写真より実物のほうが美少年だ。ちらちらと眺める両親の視線。

「まあ、遠慮しないでどんどん食べなさい」と、わたしは若い二人を羨ましそうに眺めていた。夏海がトイレに立ったときに、わたしは彼氏にそっと訊いた。

「あんな娘だけどよろしく頼む。きついだろう」

「そうっすね、かなりきつっすね」

彼氏も困惑してそう云った。

「ビシバシと殴っていいからな。じゃじゃ馬を乗りこなすには、多少乱暴に扱わないと」と、わたしが娘を調教する方法を教えた。

と口では云ってみたものの、元子は馴らすのに失敗した。いまだに乗りこなせないでいた。風とともに去りぬの世界だった。わたしはクラーク・ゲブルにはなれなかった。

何日かして、彼氏と喧嘩したと、夏海は怒っていた。そろそろかな、とわたしは思った。いまどきの若者たちは、すぐに取り替え引っ換えするから、深刻な恋愛ではない。さよならをメールでやって終わりだ。

彼氏がわたしの云ったように殴ったという。

「おお、根性のあるやつだな」と、わたしはその勇気を褒め称えた。

「でも、夏海、倍にして殴り返してやったさ」

可哀想に、また犠牲者が一人増えた。彼氏は、ふさぎ込んだでいたという。きっと夏海の強さに屈服して泣いているのだ。怯えているのかもしれない。

「彼氏がさ、これからどうなるんだろう、ぼくたち、みたいなことをおどおどと云うから、わたし、彼氏に云ってやったよ。黙っておれについて来いよって」

「そうか」

世の中、いつからあべこべになったのだろうか。でも、今度のは長く続きそうであった。

夏海は、喧嘩の仲直りにクッキーを焼いて、リボンで包んで学校に持っていった。

第690話 クリスマスなんだ

クリスマスになって、一番騒いでいるのが、北村家ではじいさんだった。

年とってくると、子供に戻るといのが観察していればよく判る。じいさん一人はしゃいでいた。

「さあ、いよいよクリスマスだな」と云うと、孫たちは冷たく、

「それがどうしたの」と、しらけている。

「おまえたちは嬉しくないのか」じれったそうにじいさんが云うと、

「別にいい」と、いつもの若者言葉。

じいさんは、自分でクリスマスツリーのキットを買ってきたり、リースやタペストリーを買ってきたり、果てはポインセチアまで買ってきて、リビングルームに飾ろうとする。それで、孫たちに、ツリーを組み立てようと話しかけるが、みんな逃げる。

「ガキっぼいよ」と、云うが、

「おまえたちはまだそのガキではないのか。ところで、プレゼントは何がいいのかな」

「いいよ、自分で選んで買うから、金でいいから」

「そうか……」

じいさんは肩すかしをくったように寂しい。まだ、息子の代には、純粋に喜んで、一緒にツリーを飾り付けたものだった。プレゼントにしても枕元に置いておくと、その喜ぶ顔を思い出した。サンタクロースの存在だって、息子の拓也は高校生になるまで信じていた。だんだんと夢がなくなる。家族はバラバラだ。

家族全員で夕食も朝食もしなくなった。まして、家族の団欒という時間もなくなった。一緒に何かをやろうとする共同作業もなくなった。クリスマスケーキを買ってこようと、じいさんが云うと、孫たちは、

「おじいちゃん、わたし、バタークリーム嫌いだから。それに、クリスマスケーキって高くつくのよ。うちの六人家族で丸いのを切り分けて、一切れがいくらにつくか、原価計算してみれば判るから。バカにしているような値段になるのよ。それよりだったら、普通の小型ケーキをいろいろ買って来たほうが、見た目もいいし、同じ予算で一人二個は食べられるよ」とくる。

「そうか……」

非常に現実的だった。デコレーションケーキの上にサンタのろうそくや柵の葉があったり、華やかな演出はできなくなったのか。そう云えば、最近のクリスマスは、手にケーキの大きな箱を持って歩く人は少なくなった。ケーキ屋さんも、店頭でケーキを山積みして売ることもなくなった。手作りで家で作るホームメイドの材料は売れているらしい。それに、クリスマスケーキが主役ではなくなった。食卓を飾るのは、ローストビーフであったり、フライドチキンであったり、ケーキはいまや脇役になったのだ。

「世の中、変わった」と、じいさんはぼやいた。

息子は文学仲間の会合で飲みに行って、遅く帰るから飯はいらないという。嫁の元子も忘年

会だ。孫娘は部活の合宿だと東京へ行っていた。中学生の男の子は部屋でゲームをしていたほうがいいと、チキンだけ持って閉じこもる。ばあさんは、あちこち痛いと言っている。

じいさんは一人ぼつんとリビングルームにいて、寂しくクリスマスをやっていた。ワインを開け、シャンパンも開けた。もう、こうなったら自棄酒だ。テレビもくだらなくうるさいだけの特別番組だから消してしまった。それで、ラジオをかけたら、パットブーンの甘い声でクリスマスソングが流れた。

じいさんは戦前に銀座の洋菓子店で働いていた。そのときの光景があまりと浮かんできた。いまから七十年前のことだ。銀座六丁目の角に二階建のフランス菓子の本店があった。一階は菓子売り場で、二階はサロン・ド・テ。じいさんはそこでボーイをしていた。まだ十代の若者で、田舎から丁稚奉公で出てきて、いきなり銀座のど真ん中で住み込み修業だ。朝六時から仕事だ。工場に入って鉄板拭きをやらせられる。午後からは喫茶でボーイだ。一日の仕事が終わるのは夜の十二時だ。休みなんか一年に一日もなかった。いまなら、労働基準法違反もいいところ。労働時間も長く、安い月給で休みもない。

貧富の差も激しかった。月給五円しか貰っていなかった。そのときの大きなクリスマスケーキは三円だった。それを車で乗り付けたブルジョアの青年がぽんと買っていったり、同じ年頃の同郷の財閥の息子たちが、チップだと一円をくれたりしたのを見て、店から逃げたことがあった。すべてがばかばかしく思えてきた。千葉のモラロジーに走ったり、鉾山にも入った。その暗い穴の中で、貧しい家族が真っ黒な顔をして寄り添って握り飯を食っていた。そうした最低の生活を見てきて、また銀座に戻ってきた。

銀座のクリスマスには情緒があった。画家のレオナルド藤田が、店の二階のシャンデリアの下がる天井いっぱい壁面を描いていた。イブには、キャンドルサービスをして、テーブルのろうそくの灯で、パリの風景がぼんやりと浮かび上がっていた。

じいさんは、まだらボケで、最近のことはすべて忘れてしまうのだが、脳裏に克明に焼き付いているのは若いときのことだ。いい昔はすべて戦災で焼けてしまった。思い出も青春もなにもかもすべてが。

ワインで酔ったじいさんが、椅子にもたれたまま鼾をかいて寝ていた。SPレコードから流れてくるモノラルのいいクリスマスは、過去と夢の中にしかなかった。

第691話 贈り物

自分の命にかえても大事な人が、この世にいるということは幸せなことだ。

ケンとジャンは互いになによりも愛し合っていた。二人とも長引く不況で、職にあぶれて、再就職に駆け回っていたが、なかなかなかった。まだ二十代の彼らにも仕事が回ってこないほど、あらゆる事業所は業務縮小をしている時代だった。

ケンとジャンはまだ結婚式も挙げていない。同棲生活をして、小さな一間の屋根裏部屋を借りて住んでいた。台所もトイレもバスもない。天井の太い木がむき出しの、そして天井が斜めになったところに出窓がひとつあるきりの部屋だ。炊事はどうしていたかという、屋上にある水道を使い、コンロを置いてお湯を沸かしていた。

トイレは共同。シャワールームは、ケンが屋根の上にトタン板で囲いをして、ホースを取り込んでこしらえた実に簡単なものであった。

部屋の中には家具も調度品も殆どない。収納はすべてダンボール箱であったし、蒲団はコーヒー豆を輸入してきたときの麻袋を繋いで作った粗末なものだ。それが、二人の愛の巣というにはあまりにも滑稽で、貧しすぎた。

ケンは自分の絵の才能を生かして、街頭で似顔絵を描いて、少しの金を得ていた。ジャンは公衆便所の掃除をして、チップを得ていた。どちらも、収入と云ったら、微々たるもので、ようやくその日のパンとチーズが買えるといった額だった。

二人の夢は、自分たちの家を持つことだった。そして、遠い田舎に住む家族に祝福されて、挙式することだった。そのためには、貯金もなければならぬし、ちゃんとした職にも就かなければならぬ。

ケンは、毎日寒い街頭に座っているのに、外套もないのだった。それをジャンは大変気にしていた。せめてケンに暖かい外套とセーター、そしてマフラーと手袋ぐらい着せてやりたい。いつも穴の開いたジャンパーばかり着ていた。

ジャンは、前にやっていたピアノをもう一度奏いてみたいと思っていた。できることなら、好きなピアノを人々の前で演奏して収入を得る仕事に就きたい。そう思っていたが、とても、ピアノなど買う余裕がない。垂木に鍵盤を描いて、それを想像しながら奏いていた。

二人とも、相手の欲しいものがよく判っていた。欲しいとは口にも出さないが、きっとあれば喜ぶのだ。

一緒に暮らし始めて最初のクリスマスがやってきた。互いに、何かプレゼントぐらい買ってやりたいと密かに思っていたが、小銭にも事欠く毎日、とてもプレゼントを買うなどという計画は実行できそうにもなかった。

ケンが楽器店のショーウィンドウを眺めながら、大きなグランドピアノをもの欲しそうに眺めていると、ガラスに紳士が映っているのが見えた。振り向くと、そこにマントの下にタキシードを着た、これからクリスマスパーティにでも行くかのような紳士が立っていた。少し時代遅れのシルクハットをかぶっていた。

「君は、ピアノが欲しいのだね」

と、紳士は心の中を読みとるように云った。

「もっとも愛する人が、このピアノをステージで奏している姿を描いているだろう。違うかね」

「あなたは、どうして判るんですか」

「このピアノを彼女にプレゼントするいい取引があるんだが」

と、紳士は声を潜めたる

「ええ？ ピアノが買えるんですか。でも、ぼくは一セントも持っていないよ」

紳士は首を振った。

「君には珍しい肉体がある。そして、その若さだ。ピアノの代金は体で払ってくれればいい」

「体で払うって、ぼくは自分の体を売るんですか？」

「そうです。若い肉体はそれ以上の価値がある」

「でも、臓器を売るというのではないでしょうね」

「とんでもない。そんな大事な体に傷を付けたり、切り分けたりしては勿体ない。君の肉体を丸ごと、このピアノと交換したいのです」

「ぼくの体……。ぼくはどうなるんですか」

「どうにもならない。君は君として残るのです」

ケンはその理由を聞いて、紳士に肉体を売り渡すことにした。

一方、ジャンはやはり、クリスマスのディスプレイに飾られたショーウィンドウの中に、ケンに着せたい暖かそうなコートとセーターを見ていた。ただ、値段は飛び抜けて高い。マフラーにしても手が出ない。でも、彼に着せてやりたい。すると、ガラスに紳士が映っていた。振り向くと、冷徹な目をしたマントをまとった紳士が、云った。

「あなたは、愛する彼にこのコートを着せたい。そうですね。でもお金がない」

「あなたは誰？」

「わたしは、メフィストと云います。このコートだけでなく、ここに展示してあるすべてを彼にプレゼントできるのですが、いい方法があります。あなたの心をわたしに売ってくだされば、このすべてと引き替えましょう」

「心って、わたしの心臓？ 違うわね。食べたりしないのよね。わたしの靈魂のこと？」

「そうです。その代わりに、あなたの肉体は残ります。どうですか、あなたの美貌はそのまま、彼の傍にいられるのです。いい取引だとは思いませんか」

ジャンは、もう彼の喜ぶ顔しか見えていなかった。その取引に応ずることにした。

クリスマスの二十五日。二人は屋根裏部屋に帰ってきた。紳士は約束した通り、屋根裏部屋にはちゃんとプレゼントが配達されていた。グランドピアノがでんと置かれてあったし、コートとセーター、スーツにマフラーと上から下までケンの身につけるものが並んでいた。

ジャンが呆然とピアノの椅子に腰掛けていた。

「ジャン、ぼくからの贈り物だよ。どうだ、驚いたろう。君のあれほど欲しがっていたピアノだ」

と、ケンがジャンの手をとっても、ジャンは何の反応も示さない。まるで離人症にでも罹ったかのように、喜怒哀楽を忘れた人形のようにになっていた。それは、魂の抜け殻だった。ピアノが何なのかも判らない。

ケンがコートを着ようとしたが、何も手に取ることができない。気が付いたら、鏡に自分の姿が映っていないのだ。せっかくのプレゼントも袖を通すこともできないのだ。

現代は、肉体をぼろぼろになるまで社会に売り渡しているか、魂を売り渡しているかのどちらかだった。

一身上の都合により辞めさせていただきます、なんて月並みなことは書きません。そんな、三行か四行で云ってしまえるほど、仕事を辞めるということは単純なことではないんだ。いいか、耳の穴、いや、目くそをとってよく読め。

一体、わたしが何をしたというんだ。そりゃ、契約社員で、年季奉公だ。いつ契約が切れても文句が云えない立場だが、仕事も一人でこなしてきたし、一生懸命やってきた。それなのに、契約を一月で切ると云ってきたのには、他の訳がある。

来月から来なくていいよと、その一言で切る言葉に責任持っているのかい。それは、わたしはただのパートだよ。パートだって、労働者だ。いまは権利が守られている。契約を楯に持ってきたつもりだろうが、今回のわたしを切るということは、加害者が被害者を切るということだ。黙って、身を引いてたまりますか。泣き寝入りはいたしません。

今度の問題も、職員がわたしにセクハラ行為をしたのが表に出て、教授の責任問題まで発展しないように、口封じというわけだろうが、そうは行きません。逆恨みした職員が、わたしの車だけでなく、わたしを擁護した助教授の車のタイヤにまでいやがらせでパンクさせて、それがたびたびあるものだから、警察に被害届けを出したのに、世間に知れることより、わたしを辞めさせたほうが得策だと、そう単純に考えたんだ。

みんな、頭のいい人ばかりが集まっている研究所だから、まさかと思っていたら、保身術に長けているだけで、すべて穏便にすませようと、弱いものから切り捨てる。だいたい、まともに仕事をしている人はどれだけいるんだ。仕事中にマンガ本は読んでいる。ネットでアダルトサイトは見ている、時間通りに出勤しない、定刻より早く帰る、それで賞与は貰って、退職金までついて、公務員が槍玉に挙げられているときに、マジメに働いている人に申し訳ないと思わないのか。それだから、周りから税金泥棒と呼ばれるんだ。わたしは、完全に怒ったよ。元子様が怒ればどれほど怖いものか見せてやる。もう、誰にも止められないよ。

わたしは、仕事を家にまで持っていつているんだ。それはサービスだよ。残業なんかつかないし、いつも時間オーバーでも、文句云ったことはない。こんな仕事がないときだ。ぐっと我慢していなければと思ったさ。うちには、これから金のかかる子供が二人残っているんだ。亭主はしがない古本屋で稼ぎが悪いものだから、わたしは共稼ぎをして家計を助けているんだ。そんな事情はどんな家庭にだってあるさ。それなのに、はい、来月から来なくていいよとはなんて言い草だ。

いまは、あまりにも労働者を粗く使い、募集すればいくらでも来る、おまえの代わりなんか掃いて捨てるほどいると、使用者側が思いあがっているんだ。家政婦は見たというテレビがあるが、まさしくパートでもちゃんと見ているんだ。みんなサボっているのがあたりまえ、それを誰も何も云わない。団子になってみんなで甘い汁を吸い合っている。

監査が入るときだけはいそいそと仕事をしているフリをする。そして、何か問題があると、わたしを呼びつける。そんなときはパートでないのか。二十人の学生に二食作って食べさせて、部

屋も食堂も廊下もトイレに風呂場と掃除して、灯油も各部屋に運び、布団まで旅館のように用意して、皿洗いだって山積みだ。加えて、食費の原価計算をしると、家に帰ればパソコンに向い、そんな仕事はどうして一人で六時間で終わると思うんだ。

旅館を一人でやりくりしているようなものじゃないか。ストレスは溜まる、血圧は上がり、毎日へとへとに疲れて重労働の毎日。昔は二人いたっていうのに、人を増やさない。それでもわたしは文句を云ったことはない。一人でバタバタと忙しく働いているときに、みんなは遊んで給与を貰っているのが許せない。

そんなダラダラ仕事して何が楽しいの。何十年もそうしてきて、もう感じなくなっているんだ。やりがいなんかあるのかい。こんなだから、国は予算を削って、部門縮小してるのさ。きっと世の中には、こんな職場がいくらかもあるんだろう。

学生たちに少しでも美味しいものを食べさせようと思うのに、納品業者はまるでバカにしているような値段で持ってくる。昔から取引しているから替えられないと、主婦感覚では耐えられない。みんなつるんで、予算に食いついて高い米も見て見ぬフリをして、その見返りに付け届け。それは、きっと世の中の構図なんだ。だから、道路もどンドンできる。止める政治家も少ないのは、すべて金。

大きな問題も小さな問題もみんな似たような格好をしているのがよく判った。パートごときが、そんなことまで口出ししてと、辞めるいまこそ云ってやる。いまさら、引きとめようたって無駄だ。こっちから辞めてやる。ああ、せいせいするだろう。

生まれてこのかた、辞表なんて書いたことはないんだ。どうせ、書くなら、いままで誰も書いたことのない、長い長い辞表を書いてやる。悔しい、悔しい。血圧も二百は超えたらう。こんな職場はこっちから払い下げだ。辞めてやるったら辞めてやる。いますぐ辞めてやる。こんな日本もやめてやる。さよならだけが人生なのだ。ばかやろう。

平成15年12月27日

北村元子

第693話 忘年会

毎年、年末になるとあちこちで忘年会が開かれる。遥商事でも、全社員が集まったの忘年会が、いつもの会場で行われていた。金澤社長から冒頭に挨拶がある。

「今年もあまりいい年ではありませんでした。嫌なニュースばかりで、仕事もいまいちいい成績を残せなかったのが残念であります。この席では悪いことは忘れて、新しい年に向けて、また気分一新して皆さんで突き進もうではありませんか」

ご馳走と酒を前にして、挨拶は短めということで、乾杯に入る。乾杯の発声は、對馬相談役と決まっていた。

「毎度、ご指名がありますのも、わたしが一番の長老であるからとっております。ただいま、社長よりお話がありましたが、確かに今年は酷い年でありました。皆さんには忘れたいことが沢

山あることと思います。ここでは、そんな一年を振り返りながら、残すところ少しですので、すっかりと忘れてお帰りいただきたいと思います。いつまでも、過ぎたことを悔やんでもしかたがありません。新しい年が、皆さんにとっても会社にとってもいい年でありますように祈念して乾杯したいと思います。それではご唱和お願いいたします」

「乾杯!」

なごやかに会食が始まったように思ったが、みんな、何か神妙な雰囲気の中で呑んでいた。今日で最後だと思うと、悪い思い出も忘れたくないように、どこかに未練が残っていたりする。

司会進行役の総務部の前田部長から、ひとりひとりに今年の個人としての総まとめを発表してもらうことになった。トップバッターは中里課長だった。

「今年は、趣味でやっている川釣では、大物を逃がした悔しさがあります。ついで競輪でも外ればかりで、とにかくすっぱりと忘れたいものです」

笹田係長が続いた。

「わたしもですね、今年は大物狙いをいたしました。趣味で書いています小説が、なんとか認められまして、賞をいただきましたが、ですね、来年は絶対に、中央での大きな賞をいただきたいと思います。そのためには、落ちたことはみんな忘れて、新たな気分で、ですね、原稿用紙に向かいたいと思います」

北村主任が、すでに酔って、真っ赤な顔をして立った。

「今年こそ借金をゼロにすると目標を掲げておりましたが、収入が減りましたので、うちも赤字債券を発行しなければならなくなり、娘が高校、息子が中学と進学し、上の息子が結婚式を挙げ、また引越しもあって、金のかかることばかりです。もう、何もありません。すべて忘れてしまいたいことばかりです」

場が暗くなる話ばかりだった。誰か明るい、いい年であった者はいないのか。秘書の橋本が、にこにこ立ち上がった。

「わたしは、忘年会というのが本当は賛成ではないんです。悪いことを忘れて、いいことだけを覚えて、人間、この先進んでゆくとどうなるんでしょう。戦争という嫌なことも、わたしたちは忘れていないから反対できるんでしょうし、喉元過ぎると熱さ忘れるっていいですけど、愚かな人間たちは、必ず同じ歴史の轍を踏み、過ちの繰り返しをしてきたじゃありませんか」

いままで人の話を聞かないで、賑やかに呑んでいた工藤課長も、しーんとなった。

「まあ、それはそうなのだが」と、異議申し立てをするのは田村主任。

「忘却とは忘れ去ること、忘れ去ることなくして忘却はないと云います。いつまでも嫌なことをくよくよと引きずって、重い荷を背負って歩くがごとしでは人生は先に進めません。頭の切り替えも必要なことと思いますが、如何でしょうか」

杉村常務が、挙手して話に加わった。

「忘れたくても忘れられないことってあるでしょう。わたしも、今年の子供のように可愛がっていた猫ちゃんが、行方不明になったときの哀しみはすっかりと忘れたいですね。もう、二度とあんな思いはしたくありません。みつかったときの喜びだけはいつでも覚えておきたいと思います」

司会の前田課長が時計をしきりに気にしながら云った。

「まあ、いろいろと異論もありましょうが、この会に参加したということは、大なり小なり、忘れるために皆さん集まったわけで、全部忘れてしまえば大変ですが、忘れてはいけないことは、ちゃんと保存しておいて、忘れてもいいものは、この席で忘れてしまう。その選別ができるいい世の中になったのですから、全国どこでもこの忘年会は年末に行われているわけです。そろそろ時間になりましたから、この辺で中締めをして、隣の会場に移りたいと思います。ご用意はよろしいですか。それでは、中締めは、今年は大変な悔しい思いをした高橋さんをお願いいたします」

「高橋です。この悔しさまで忘れてしまいたくないので、わたしは、臥薪嘗胆ということをお大切にこれからのバネにしてゆきたいと思いますが、皆さんは是非、嫌なことはすっぱりと忘れて、この会場を出るときには、新しい年に相応しいフレッシュな人間になって、また一年をスタートしてもらいたいと思います。それでは、皆さんの今後ますますのご発展と健康を祈って、一本締めで中締めを行いたいと思います。お手を拝借」

中締めが終わると、全員が、隣の部屋に移動した。その部屋には人数分のベッドが置かれ、頭にヘッドギア、そして、無数のコードがそこから大型のスーパーコンピュータに接続されていた。白衣を着た、技師が助手とともに機械を操作している。

「さあ、ヘッドギアをかぶりましたね。皆さんの前にあるモニターに映し出されているのは、皆さんの記憶のフォルダにあるいろんな今年の思い出です。忘れたい思い出だけにマウスでチェックを入れてください。数分で、その思い出のファイルだけが脳裏から削除されます。くれぐれも大事なプログラムファイルや、個人データなどは削除対象にしないでください。取り返しのつかないことになりますから。それでは、準備が整いましたら、リセットスイッチを入れますよ」

ピピピピピピピピピピピピピピピピ

一分もしないうちに、嫌な思い出だけが削除された。みんな、すっきりとした顔でベッドから起き上がっていた。

「大変です。何か、北村くんの様子がおかしいですよ」

みんな北村のベッドに駆けつけた。

「ぼくは、誰？ ここは、どこ？」

北村は自分自身を忘れたかったのだった。

第694話 年賀状

毎年、ぎりぎりになってようやく年賀状をしたためる。うちでも年賀状の印刷を承っていて、年末まで印刷に忙しいから、紺屋の白袴である。

ただ、その印刷もだんだんと来なくなった。アンケートによれば、自分でパソコンで作成する人が半分を超えたから、印刷屋も大変だ。一昔前は年末の年賀状印刷は、印刷屋の稼ぎ時で、徹夜して作業をしたという。それが従業員の賞与になったというのが、いまは昔話になってしまった。

年賀状の作成ソフトを買い、あるいは、CD-ROM付録の雑誌を買って自分で作っても、インクジェットインクが高い。あれよあれよとなくなり、果たして一枚印刷するのにどれぐらいの経費がかかっているのか。業者に依頼したほうが安いときもある。それは時間をかけても自分で作る楽しみ代なのか。

世間が仕事納めをしてから、忘れていたのを思い出したように自分の年賀状の文面を考える。

毎年、あーでもないこーでもない凝りすぎて、結果は退屈なものに落ち着く。普通の年賀状ではつまらないと、毎年、あっと驚くものと考えすぎるのだ。

一度、味噌汁年賀を作ったことがある。葉書の裏面に、ワカメの干したのを味噌で貼り付けた。そして、ネギと高野豆腐を刻んだのも貼り付けた。ただ貼り付けるのも芸がないから、賀正という文字にした。さらに、模様のもりで、味噌を解いた濃厚な汁で絵を描き、その上に出汁の素の顆粒をまぶした。その葉書をお湯の中に入れて、一人分の味噌汁ができるというものだった。

評判はすこぶる悪く、「汚ーい」というのが一番多い声だった。がっかり。

小学生のときには、炙り出しの年賀状がはやった。温州みかんの汁を筆で書き、相手に送る。真っ白けの葉書だが、炙ると文字が焦げて出てくる。

万葉仮名のように、漢字を羅列した年賀を出したのは中学のとき。音だけで読むと何となく意味が判ってくる。後は、暗号のような年賀や、象形文字のような文章をマンガで描いたりした。とにかく巫山戯っていた。

社会に出てからも、ショートショート干支にちなんだ小説を毎年書いて送った。それは不評だった。

一番受けたのは、会社が倒産して、すぐに迎えた正月に出した年賀状に、
一閉めましてすみません

と書いた。本人は真面目に書いたつもりが、それだけ冗談が書ければ、みんな大丈夫だと思っ
たらしい。

年賀状は不思議なもので、一番親しい、毎日逢っているような人とはやりとりしないのだ。何か、出すのがよそよそしいし、しらじらしい感じがしてくる。逆に、賀状をやりとりしている人は、賀状だけの人が多い。普段は、電話も手紙もなく、ただ、一年に一度、お互いに生きているという知らせを確認のために出し合うというだけの関係だ。

仕事柄、古書目録を送っている顧客から賀状を沢山いただくが、それもだんだんと減ってくる。周囲でおつきあいいただいている人に高齢者が多いから、欠礼の葉書が何枚もくる。アドレス帳から削除する名前が、新しく登録する名前より多いから、年々賀状も少なくなってくる。

二千XX年。元旦。

元旦は宇宙時代になっても嬉しいもので、そわそわしながら、いまはあまり使われなくなった

、古びた郵便受を覗いてみる。毎年、分厚い新年の新聞も来ていたのに、何か寂しい。年賀状は一枚も配達されなかった。獅子舞も来ない。年始回りに人も来ない。親戚も集まらなくなっていた。まして、遠い他県で働いている息子夫婦や孫たちも、だんだんと田舎に帰ってこなくなった。

「仕方ないな。パソコンでも立ち上げるとするか」

メーラーを起動すると、受信ボックスに、メールが二百くらい来ていた。孫の年越しの顔がビデオメールで、「明けましておめでとう、おじいちゃん」と、可愛い。賀状も、声も出るし、映像が増えた。文字だけの年賀メールは少ない。

新聞もすべてメールで来る。味気ない。お年玉もホームバンキングで、ネットで送金だ。味気ない。昔の正月はよかった。年々遠くなる二十世紀も色褪せて見えた。

第695話 おみくじ

大晦日が過ぎ、除夜の鐘が鳴ると、町の人々はぞろぞろと夜道を歩いて、町はずれの神社へと初詣に向かった。

田舎では年越しにご馳走を食べる。たらふく食べて吞んで、酔っぱらっているから、冬の夜風が酔い醒ましにちょうどいい。ご馳走のあとに、年越し蕎麦まで食べたから、もう、おなかにはちきれんばかりだ。

神社は石段を登ってゆく上にある。近所の人たちと会うたびに、「明けましておめでとうございます」と、挨拶をする。着物を着てくる人もいた。境内でき篝火が焚かれ、甘酒、御神酒が振る舞われていた。がらがらと鈴が鳴る。

北村拓也は、日頃から占いなどは信じないが、初詣のおみくじだけは、風物詩として年に一度だけはやってみる。出たのは凶だ。読むと、仕事運は壊滅的、何をしても裏目裏目と失敗ばかり。下手をすると命取りになるという最低の運勢だ。信心を持てば難を乗り切ることができる。

それではと、拓也は引き返してさっき入れた十円のせいだと、今度は千円札をお賽銭で入れた。神様は、ちゃんと賽銭の額まで覚えていて、それで運勢を決めているに違いない。

「これで、なんとか、今年も乗り切れるようにお願いします。」

と、お願いをし直した。

一緒に行った、娘の夏海も、一円でいいやと、財布の中から一円を賽銭箱に入れた。たまたま、夏海の彼氏も来ていて、二人で仲良くおみくじを買った。

「わあ、凶だって、いままで見たことないから、きっとすっごくいい運勢なんだよ」

彼氏はがっかりしていた。

「ねえねえ、君はなんと出たの？」

見ると、彼氏も凶。

「いいじゃないの。わたしたちぴったしと合ってるね。同じ凶だなんて、最高だよね」
すると、彼氏は夏海を軽蔑したような目を見た。

「凶って、最悪の運なんだ。君は、もう一度、中学へ戻ったほうがいいみたい」

「うるせえ、人のことをぶっあかにしやがって」と、夏海はいつもの口調で彼氏を罵倒した。

「だってそうだろう、常識ってものを知らなさすぎるんだ。こっちが恥ずかしいだろ」
彼氏も応戦する。

「なんだと、別れてやる。おまえなんかとは、きっぱりと、新年に向けて別れてやる。アバヨ」
と、夏海はたんかを切ったが、それは口だけのこと。おみくじを見ると、恋愛運は、相手との間に暗雲が。ただ、信心を厚くすれば幸も得られん、とある。

一やはり、一円だったから、神様がそれなりの運勢よりくれなかったんだ。

と、思い直して、夏海は、もらったお年玉から千円を出して、賽銭箱に投げたつもりが、なんと五千円札と間違えた。

「ああ、わたしの五千円札が……。ねえ、この賽銭箱って、お釣り出ないんですかあ」

元子は欲張りだ。願い事が多すぎた。

一神様、今年は、わたしにいい仕事が見つかりますように。宝くじも当たりますように。若いツバメと出会えますように。あと五キロ痩せられますように。背があと十センチ高くなりますように。美味しいホタテが沢山食べられますように。

と、五十くらい並べ立てた。あまり長いので、後ろに並んだ人から、どつかれるほど。

一でもね、毎年、こうして願い事するんだけど、当たったためしがないのよね。

そうして、元子もおみくじを引いた。

「な、なんですって、凶ですって？」

元子は怒った。神子さんたちにくってかかっていた。

「なんで、この品行方正の元子さんが、凶でなければならぬのよ。もう一回やるわ」と、また五十円払っておみくじを引いた。すると、今度も「凶」。

一駄目だわ。これは本物だわ。今年の運勢は最悪。願い事が多いのに、五円玉ひとつというのが、ふざけんじゃないってことなのか。天網恢々ね。

そこで、元子はきびすを返して、また賽銭箱に気前よく一万円を入れに行った。

一今度は、贅沢は申しません。何もいりませんから、家内安全、交通安全、どうでもいいから、平凡でも、悪いことだけは起こりませんように。

今度は謙虚にお願いをした。

宮司は、社務所でほくほく顔だ。

「世の中、景気が悪くなると、われらは景気がよくなる。それに、今年は、おみくじをすべて凶にしてやった。売上げもいいだろう。お守りも売れるというものだ。ほほほほほほ」

今朝方、叔母が亡くなった。九十四だから長生きだった。親の姉妹が相次いで亡くなり、兄弟も三分の一だけとなった。我が家は世代交代の時期で、次は誰かと、順列をつけている。後に控えているのがまだ十人はいる。ただ、こればかりは年功序列というわけには行かない。人間生身、いつどう逝くか判らない。

わたしの祖父も年末に亡くなった。二十五年も前になる。わたしは、祖父に育てられたように、祖父が抱いている写真が一番多いのだ。中学になっても祖父と一緒に寝ていた。

祖父が、病気で入院したときも、わたしの名を呼び、連れて来いと騒いだという。

わたしが赤子のときは、毎日のように汽車が見たいとごねるので、祖父は青森駅までわたしをおんぶしてゆき、デコイチを見せて、連絡船の棧橋に行つては、船の後方から列車が入つてゆくところを見せた。そして、鈍行に乗つて、次の浦町駅まで一区间だけ乗せて、帰ってくる。

両親が共稼ぎで夜中まで商売をやっていたので、親の顔を見ない日が続いた。わたしたち姉妹は祖父母から生まれたと置いていたくらいだ。

その祖父が、わたしが社会に出て、親父の商売を手伝うようになった年の暮れに亡くなった。たまたまその年は、何かお節を作る気がしないで、準備をしていなかったとおふくろは語つた。

夜中に電話が来ると、大概、誰かが死んだときだった。明け方に死ぬ人が多いので、まだ暗いうちに起こされる。祖父は叔父の家で亡くなった。車で駆けつけると、叔父の家はどうも狭いから、仏さんを寝せておく場所もないようだ。やたら、廊下も室内もモノで溢れていた。それで、広い我が家に連れてくることにした。外は零下で、道路は雪と氷でテカテカだ。わたしの乗用車に乗せて連れてくるのだが、死後硬直が始まって、体を折り曲げることができないので、斜めに抱きかかえるようにして乗せた。他の叔父たちも我が家にやってきた。

祖父は、自分の部屋に病院や叔父の家を転々としながら、半年ぶりで帰ってきた。その仏壇のある部屋に、わたしと祖父がずっと寝ていたのだ。北枕で蒲団を敷いて、屏風も立てた。

朝になると、あちこちの親戚に電話で連絡をする声が廊下に響いていた。明日は大晦日という日だった。これから汽車の切符をとつても、正月の帰省ラッシュで、とても取れないだろう。それに焼き場は休みときている。どこもここも休みに入る。

とりあえず、葬儀屋は来た。やはり、松の内は避けてと、八日通夜、九日葬式と日程が決まった。ひどく事務的で、親父も慣れているから、てきぱきと決めてゆく。祖父は九十一で亡くなったから、長生きの家系だ。そうなれば、子供も老人だった。なんとなく、悲しむものもなく、みんな明るい。できれば百まで生きてもらいたかったと笑うくらいである。

その年の年越しも正月もつまらなかった。当然、お節も紅白もなし。テレビもうるさいから消していた。わたしなんかは、一人犠牲になって、みんな親戚たちが寝ているのに、誰か線香を絶やさないようにしなければならぬと、年越しは寒い仏さんの部屋で、防寒具を着ながら、一晩中、本を読みながら起きていなくてはならなかった。

元旦の朝も普段と変わることはなかった。納豆に生卵、焼き海苔とおしんこといった朝食で始まった。

毎年なら、元旦は年始の挨拶のお客でごった返す我が家も、弔問に来る人がまばらにいろいろいで、実に静かな正月を迎えた。

人は場所や時をわきまえることなく、どこでも、いつでも死ぬ。それと同じく、人はいつでも生まれるのだ。女房の元美が元旦に生まれたから、元美と名付けられた。いつも小説では元子になっているので、そう信じている人もいるが、少し違う。

元旦に生まれたばかりに、人からだけでなく、テレビでもラジオでもおめでとうとみんなから祝福をされているような感じがするし、カレンダーも赤丸の旗日だ。まるで、自分のために全世界がお祝いをしているような錯覚に陥るが、そうではないところが悲しい。逆に、忙しさの中で無視されて、忘れられてしまうという悲劇を毎年味わうことになるのだ。

それでは可哀想かなと、よくできた亭主は、毎年ケーキとプレゼントを買うのを忘れない。ただ、どちらかという、クリスマスと一緒にしてしまうところが、安上がりでいいのだが、やはり子供のときもそうされたい。

子供を作るなら、年末を狙うと、ごまかしがきくかもしれない。

今年も親戚の年寄りたちが何人か亡くなった。来年は、甥や姪が結婚したり、子供ができたりと、賑やかな年になるかもしれない。その子供たちの世代になると、もうわたしの祖父のことは、名前も存在そのものも知らないのだ。過去帳に名前が書かれ、仏壇の奥に仕舞われて、これから生まれてくる子供たちには無縁の存在となる。いままで、わたしがつきあってきた祖父の親戚も、従兄弟たちも、わたしの息子たちの世代では疎遠になり、全く行き来しなくなる。

人の生き死にだけでなく、時間の流れというものが、年の変わり目に関係なく、血を薄くし、人と人を遠ざけてゆく。新しい年になれば、しみじみとそれを思う。

第697話 お節はお世辞にも

正月だからと、帰省していた息子たちも、だんだんと帰省しなくなった。海外旅行をしたほうがいいとか、温泉でゆっくりしたほうがいいとか、田舎に帰って、親戚周りすると、お年玉を配らねばならず、お土産だとか、かえって費用がかかり気も遣う。それに、車は渋滞して疲れるし、飛行機、電車はなかなか切符がとれない。

そんな、混んでいるときに無理して帰省する必要もないと、田舎では年寄りたちが寂しい正月を迎えていた。それもまた可哀想と、息子夫婦は親と相談して、逆に都会に親を呼ぶことにした。年越しを息子のところでやり、正月はどこか近場の温泉にでも行くことにする。そうすれば、家族全員が移動して、旅費もかかるのが、婆さん一人分の交通費で済むわけだ。

村野武雄は、そうして今年も田舎の母を年末から呼ぶことにした。母のトシは、躊躇していたが、一人ならお節も作る必要もない。三人の息子たちがそれぞれ田舎には帰ってこないというから、仕方なく長男の武雄の住む横浜まで一週間の予定で行くことにした。

「おばあちゃん、たまにはこちらの年越しもいいですよ」

と、嫁の美緒は悦んで迎えた。孫たちも三人が、おばあちゃんが来たと、さっそく絡んでいた。何が嬉しいかって、孫たちと遊ぶのが嬉しい。

「たまに、お客さんでゆっくりしていったらいい」と、武雄も母を一人にしておけないので、安心していた。

「ところで、明日の大晦日はどうするんだい？」

トシが訊いた。

「こちらの年越しにするよ。年越しそばだけであっさりやってね、元旦にご馳走を食べよう」

田舎とは逆なのだ。何か寂しい感じがした。

「それで、美緒さん、正月のお節の用意はしているのかい」

トシは、黙ってお客さんと座っている人ではない。もう、腕まくりしていた。

「お節だなんて、売っているのは買うこともありますけど、作るのは面倒くさいでしょ。これからスーパーに材料を買いに行くんですけど、一緒に行きましょうよ」

ということで、車で家族全員が食材の買い出しに行く。

孫たちは、真っ直ぐに精肉売り場に走る。

「わたしは、このステーキがいい」「ぼくは、松坂牛のスキヤキにする」

「何云ってるの。そんな高いのは駄目よ。その下のにしなさい」

トシは驚いた。

「なにかい、お正月にステーキを食べるのかい」

「そうですよ。それと、ロブスターと越前蟹、お刺身ですね」

トシは、買い物客がそんなコーナーに群がっているのだから、都会ではそれがあたりまえなんだろうと了解した。

「お節はどうするんだい」トシは不安げに訊いた。

「お節なんか、いまどきは……」と、美緒は云いかけて口を噤んだ。トシが寂しそうな顔をしていたからだ。働き者のトシの楽しみを奪ってもいけないと、美緒は武雄と相談して、今回は、おばあちゃんの手料理のお節でやろうということになった。

「おばあちゃんにお任せします。わたしもお手伝いしますから、お節の材料を買いましょう」
急にトシは機嫌がよくなった。孫たちは不満だった。

「何云ってるの。おばあちゃんのお節は田舎風でおいしいのよ」

と、云ってみたものの、孫たちは知らない。ここのところ田舎に帰っていないからだ。

トシが材料を買い廻っていて、レンコンもゴボウも大根も高いのに驚いていた。

「おまえたち、いつもこんな泥棒みたいな野菜を買っているのかえ」

田舎じや、店頭についた野菜が山積みになって、こんなにベラボウな値段ではない。しぶしぶ買いあさった。

団地に帰ると、さつそく下ごしらえが始まる。システムキッチンと慣れない台所で、トシは腕を奮った。

年越しは簡単にすませるから、何か寂しく、みんなで近くの八幡様へお参りに行く。除夜の鐘も聞こえない。ただ、野外コンサートだとか、夜通し若い人たちが騒いでいた。

元旦に、家族全員が食卓についた。おばあちゃんの手作りのお節料理がずらりと並んだ。ごまめ、伊達巻、たたきごぼう、なます、煮しめ、黒豆と、武雄にとっては懐かしいお節が並んでいた。孫たちは、悦んでテーブルについたが、全員、その不気味で地味な料理をじっと見ていた。一瞬の沈黙があった。次の瞬間、孫たちはみんな大声で泣いた。

「こんなのいらぬや。ご馳走がいいよお」

「こんな貧乏くさい正月なんていいよ、ステーキと蟹がよかった」

その様子を見てトシが一番驚いた。啞然として何が起こったのか理解するのに時間がかかっていた。

そうなのだ。世の中が変わっていた。お節はすでにご馳走ではなくなっていた。みんなそれぞれ意味があるのに、それすらも無意味となっていた。誰もまめに働かず、よろこばない。毎日が正月のような食事をしているから、ご馳走の定義が変わった。昔からのお節は、貧乏くさい料理に落ちたのだった。お世辞にも美味しいとは云えなくなったほど、みんな贅沢になっていた。やがて、お節は古代食として、消えてしまうのか。情緒もなにもない。

、現実のようだった。手には銃を持っていた。暑いのに、ヘルメットをかぶり、迷彩服まで着ている。一体、何なのだと、慌てて立ち上がると、ガガガガと、機関銃の弾が飛んでくる。

「ばかやろう、伏せていろ」

隣で声がある。見ると、数名の自衛隊員たちが、砂の窪みに伏せていた。

「あのう、ここはどこですか」おれが訊くと、

「こいつ、頭をやられたらしい。大丈夫か」

おれは、こんなところに一時でもいたくないので、体を伏せながら逃げようとする、

「何をしているんだ。この辺りは地雷原だ。死にたいのか」

近くで迫撃砲の弾が炸裂して、砂煙が上がった。同時に、叫び声が聞こえ、おれの目の前に腕が落ちてきた。ここは、イラクなのだ。おれは自衛隊員になっている夢を見ている。こんな夢なんか早く覚めろと、目を閉じた。

すると、おれは、家内に揺り起こされていた。

「どうしたのよ。あなた。汗びっしょりで、助けてくれって、寝言を云って、それより、電話なの。会社の人からよ」

おれは、悪夢から目が覚めて、ほっと息をついた。嫌な夢を見た後味が悪い。こんな正月二日から、会社の用事で電話とは珍しいなと、電話に出た。電話口に出たのは総務の佐々木部長だった。

一部長。あけましておめでとうございます。

と、おれが寝ぼけた声で新年の挨拶をすると、部長の声は妙に押し殺したように震えていた。一君は、大変なことをしてくれたね。年末に手形が一本あったのを忘れていたんだ。銀行からそのことで、何度も電話をしたというのが、君は不在だった。会社は倒産だよ。悪い噂も立つから取引先からは商品も止まる。君のミスで従業員三百人は、この正月から路頭に迷うことになるんだ。どう始末してくれるんだ。

おれは、会社の経理を担当していた。とんでもないことをしてしまった。顔面蒼白、呼吸も苦しい。おろおろして、自分の身の置き場がなかった。

「あなた、どうしたのよ」家内は心配して、おれの顔を覗きこんでいた。

「とにかく、会社に行ってくる。ひょっとして帰らないかもしれん」

この次第によっては、死を持って償わねばならなくなるかもしれない。おれは、何か、もう、この家には戻れないような気がした。

かなり焦っていた。それで、交差点で信号が青になるのを待てないでいた。つい、横断してしまった。通行人の悲鳴が聞こえたと思った。おれは、振り向くと同時にトラックに跳ねられていた。ぐしゃりと音がした。口から大量の血を吐いていた。路面に体が叩きつけられていた。人々がおれの倒れたところに集まってきて、覗きこんでいた。おれは、意識が薄れてゆく。体がバラバラだった。おれは死ぬ。嫌だ。助けてくれ。声にならない声を絞り出していた。

すると、おれはベッドから落ちていた。家内は、隣で笑っていた。

「何よ、助けてってうなされて。何か怖い夢でも見たの？」

おれはほっとして、腕時計を見た。まだ真夜中の三時だ。ゆうべ元旦で、酒を呑みすぎたか。喉がからからに渴いていた。怖い夢だった。初夢にこんな夢を見るなんて、今年は悪いことが起

こるのではないか。おれは台所に行って、水を飲もうとした。

すると居間に、誰かいるような気配がした。懐中電灯の光がおれに向けられた。

「誰だ。誰かいるのか」

突然、目出し帽をかぶった黒づくめの男がサバイバルナイフをおれに突きつけてドスのきいた声で云った。

「金を出せ。殺されたくなかったらな」

「ど、どこから、は、入ったんだ」

見ると、ガラスが割られている。正月早々今度は強盗か。

「金なんか、あるものか。みんな通帳に入っている。あっても小銭だけだ」

と、おれが身構えると、強盗のナイフがおれの目の前で横一文字に空を切ったと思った。おれの喉に激痛が走った。と、鮮血が噴水のように天井まで赤くしていた。

「ギャー」と、声にならない。おれは首を手で押さえたまま、その場に倒れた。出血多量で死ぬのは目に見えていた。強盗は、手にしていたポリタンクのガソリンを撒いていた。証拠隠滅するために火をつけるというのか。おれは、朦朧とする意識の中で、真っ赤に燃え上がる火を見ていた。居間はあっというまに火の海となった。おれは、体が動かない。家内の名前を呼んでいた。これもどうせ夢に違いないんだ。おれは、夢なら覚めると、叫んでいた。

目が覚めた。全身が寝汗すごい。ようやく助かった。現実の世界に逃れてきた。だが、待てよ。これも夢かもしれない。いや、きっと夢だ。また何か悪いことが起きるのだ。外は明るかった。居間ではテレビが喋っていた。家内が台所に立って、朝の支度をしていた。子供たちはまだ寝ているのだろう。だが、こんな平穏な正月に突然、何かあるのだ。

おれは、起きて台所に行くと、家内に取りすがって泣いた。

「出してくれよ。この夢の中からおれを出してくれよ」

夢から覚めても覚めても、合わせ鏡の世界を迷うように、出口がない。どこまでも永遠に夢が続いていた。おれは、泣きわめき、家内は手に負えなくなり、どこかへ電話していた。

そして、長い、覚めない夢の中におれはいた。鉄格子の部屋で、バジャマを着たまま、白衣の医師に監視されながら、安全に隔離されていた。この夢なら、安心して見ていられる。それにしても、なかなか覚めない。今度のは長い。長すぎる。

第699話 日記

どうして一月一日から日記を書き始めるのか。それは、そんな日付入りの日記が書店で売っているからだ。日記なんか、元旦から書き始めなくてもいいのに、と思うのだが、どうも律儀にそれを守っている人も多い。三日坊主で、三日しか書けない日記を売っていたのには驚かされた。

日付がすでに書かれ、天気まで入れるようになってるのは、どうも型にはまっているようで、好きになれない。自由日記といって、クロス装でハードカバーの豪華本のようなものも、ただだけない。

以前は、日記にするノートに凝っていた。どこか、古びた雑貨店に入り、何十年も埃をかぶっている、いまはもう売っていないノートをみつけたときは嬉しい。どうでもいい、たかがノート一冊のために、何日もいろんな店を覗いて歩いたりする。古ければ古いほうがいい。そして、体裁はただの大学ノートなのだ。いまの新しいノートは買う気がしない。骨董品屋も覗いて歩いたことがあった。

わたしが棺と呼んでいる衣装ケースが四つある。それには、ノートがぎっしりと入っている。一番古いで高校二年のときの日記だ。十七歳のわたしが開けばいつでもいた。それ以前のノートはすべて東京にいたときに、くだらないと破りすてていた。いまから思うと、勿体ないことをしたと思った。確かにくだらないが、四十年後の自分にとっては面白いのだ。二十歳に書いた日記、そして二十五歳のときと、途中、中断しているが、三男が札幌で生まれた年から書き始めた日記から、いままで二十年間は一日も休まず続いているはずだった。

それらは育児日記であり、子供たちが読むと面白いかもしれない。そして、事業のあれこれを綴った業務日誌であり、それは読んでもつまらない。人に読ませるために書いているのではなく、自分が読み返すために書いている。

たまに、懐かしくなって、日記を出してきて読んだりしていた。整理していると、見たこともない日記が一冊出てきた。酸化した茶色のノートに、確かにわたしの筆跡で、名前が書かれていた。日付は昭和六十三年とある。それは、わたしが三十七の年だ。

わたしは、書いた記憶がまるでない。ただ、中断した記憶もなく、以前から、年代別にノートを並べてみると、昭和六十三年だけが欠落しているのだった。どうして、その一年分だけがないのか。

その年は、わたしにとっては最悪の年であった。事業が破産に追い込まれ、妻が突然行方不明になった年だ。古びたノートは、棺の中ではなく、タンスの脇に落ちていたらしい。どおりで見つからなかったわけだ。だが、わたしが書いた日記には違いないが、日記の内容はまるで覚えがないのだった。

あの年は、わたしはノイローゼになり、多少鬱病気味で病院に通っていたときだった。毎日が苛々して、ものに当たりちらしていた。生活は悲惨で、夫婦の諍いが絶えない毎日だったような気がした。子供たちはまだ小さかったから、覚えていないだろう。

ただ、その時期の記憶はどうも判然としないのだった。記憶の中からはぼっかりと落ちていた。何故だろうか。あの凄絶な事業の断末魔を見届けて、わたしは、精神状態がおかしかったのは認めるが、妻がいなくなった事情がいまひとつ判らない。

子供を置いて、消息不明になったのは、だいぶ後になって知ったのである。わたしは、警察に捜索願を出していた。親戚に電話をかけまくったという。その辺りの記憶も薄いのだった。

それで、その日記がひょいと、十六年ぶりに出てきたことで、何かが判るだろうと、わたしは、じっくりとノートを読み始めた。本当にわたしが書いたのだろうか。そうだとしたら、わたしの中の別の人格が書いたものと思えなかった。文体や、使用する言葉の癖はまさにわたしのものであった。ただ、その日々の行動をしるした一行一行に覚えがない。わたしの仕事関係、知人の名前も出てくるから、間違いはないのだろう。あの異常な精神状態のもとで、わたしは、わ

たしでなくなっていたのかもしれない。

妻との口論が書かれていて、すでに夫婦生活は家庭内別居状態にあった。殴ったことも克明に書かれていた。わたしは、妻を殴ったことはなかった。結婚して手を出したことはない。それは、信じがたい叙述だった。わたしは、血液型はA B型で、双子座だから、複雑な人格ということになっているが、それにしても、そこに書かれている内容は、わたしではない。文章の中に狂気が走っていた。

いよいよ、妻が行方不明となった辺りの年末の場面に近づいてきた。

十二月二十一日

一日雪である。おれは、弁護士に呼ばれる毎日で、罪人のように引き吊り廻されていて、明日の米代もなく、叔父が空き家となっていた別宅を貸してくれなければ、住む家もない追いつめられた毎日だった。そんなときに、妻は、またあいつのところに行っていた。許せるものではない。おれは、初めて殺意を抱いた。

十二月二十二日

何日も帰ってこなかった妻が、ひょっこりと私物を取りに戻ってくるのを、おれは納屋に隠れて密かに待っていた。今日こそ決着をつけてやろうと狙っていた。のこのことやってきたところを、おれは飛び出して、殴る蹴ると、手にしていた棒でしたたかに打擲した。妻はぐったりとなっていた。おれは、息を切らして、倒れたままの妻の様子を見ていた。微塵だにも動かない。おかしいなと思い、妻の体を揺り動かしたが、すでに事切れていた。

おれは、大変なことをしたと思った。なんとかしなければならないと、妻の遺体を納屋の中に運んだ。そこには、たまたま古い壁を壊して、新しくするためにしっくいを用意していたのだ。おれは、妻の死体を落とした壁にくくりつけ、壁を塗り始めた。これで、おれの気がかりがひとつなくなる。

その下りを読んで、まさかとわたしは納屋に走っていた。わたしが、妻を殺した。それはありえないことだった。

納屋には、壁が、そこだけが他の壁と違う色をしているところがあった。わたしは、工具を出してきて、壁を崩しにかかった。日記が創作であればいいと願いつつ。

やがて、壊された壁の下から骸骨が現れた……。

第700話 福袋

福袋は売れる店と売れない店がある。それは、最初に問題があった。こことばかり、残品処分をした店はお客の期待を裏切ることになる。誰も買わないセンスの悪い柄ものの洋服や、型落ちの袋物、すでに流行遅れになった服飾雑貨などを福袋に詰めこんで、買った人は新年からがっかりして、二度と買わなくなる。

デパートでは、売れ残りもやるが、そのためにわざわざ海外から仕入れして集めてくるという

。絶対お得と買った人を裏切らない店は、毎年、元旦の朝から人が並ぶ。そして、朝のうちに完売ということになる。

田村幸典も、家族で元旦からやっているデパートの初売りに出かけた。奥さんは、食品の福袋を買った。お歳暮の残り物でも、高級なものが半額以下で買える。食べるものなら失敗はないだろう。いままで、衣料品では失敗した。サイズと柄が合わない。結局、一回も袖を通さずに、人にあげた。貰った人も迷惑だ。好みがあるから、持てあます。

中学の娘は、キャラクターものの文具コーナーの福袋。キティちゃんのボールペンやノートなら欲しいのだ。小学生の息子は、真っ直ぐに玩具売場に走った。プラモの沢山入った袋は、作る楽しみがあるから、何が入っていてもいい。それに、バケツに入っているのだから、それが欲しい。

幸典も、売場をうろうろしていた。別に欲しいものはない。まだ、日用雑貨の福袋なら、トイレットペーパーに洗剤と、使うものばかりが詰めてあり、外れはないだろう。家の中はすべて電化製品も揃っているし、別段欲しいものはないのだ。実用的なもの、家庭日用品なら、使うからなくなる。家には車もあるし、液晶薄型のプラズマテレビもある。DVDレコーダーからパソコン、デジカメ、ステレオから電磁調理器、少し古い自宅にはすべて揃っていて、いまさら欲しいものはない。何が当たるといってもそう嬉しくないし、欲しくもない。世の中も家の中もモノで溢れているのだ。

それでも、お買い得品を覗いて歩くだけでも楽しい。昔は、三が日はどこも休んだものが、元旦からどこも営業だ。働いている人たちも大変だろうな。それに、家でゆっくりしていればいいものを、元旦からわやわやと買い物客が詰めかける。幸典は、静かな正月を過ごしたかった。

それで、あまりうるさいので、デパートの裏口から外の冷気を吸うために出た。裏口は人通りもなく、表の賑やかさの対比で、より淋しい感じがした。そこの裏通りで、福袋を売っている人がいる。こんなところで売れるものかと、幸典は笑っていた。

腰の曲がった婆さんが、中国人のような片言の日本語で、

「いいものあるよ。一万円あるよ。中身、驚く、これ安いね」

と幸典に呼びかけた。見ると、大きな福袋に、何が入っているか判らない。

「お婆さん、これ、中に何が入っているんだよ」

あまり怪しいから、幸典が訊いた。

「これは、幸せね、欲しいモノ何でも手に入るね」

何か、お婆さんが可哀想に思えてきて、幸典はつい同情して買ってしまった。寒空の下に、ボロをまとって、手はあかぎれ、ストーブもなく立っているのは哀れであった。みんな、正月だと、この不景気にもかかわらず、大枚を払って、十万、五十万、百万コースの福袋を買ってゆく。中には三千万の福袋が売れたと聞いた。そんな狂乱の裏には、貧しい異邦人がひっそりと露店で物売りをしている。

「ありがと、ありがとね、あなた幸せなるよ」

お婆さんは涙を流して悦んでいた。

幸典は、すぐに開けない。家に持って行って、一人こっそりと開けるのだ。何が入っているのか、せめて、楽しみだけは後に伸ばしておきたかった。その場で開けて、がっかりするよりは、うきうきした気持ちが大事なのだ。

「お父さんは何を買ったの？」と、奥さんが聞くが、なかなか見せない。いつも失敗して、奥さんにバカにされるからだ。

それで、自分の書斎に持ってゆき、こっそりと開けようとした。すると、中から声が聞こえる。いま流行りの声の出る玩具かなと思ったが、その声がなかなかリアルなものだった。耳をそばだてると、

「早く、開けてくれ。ここから出してくれよ」と、叫んでいる。

奥さんと呼んできた。

「おまえ、この中に誰がいるんだ」

「あなた、何を寝ぼけたこと云っているのよ」と、奥さんは取り合わない。そこで、幸典は、奥さんの前で、福袋を開けた。と、二人とも少し引いた。

「ああ、狭苦しかったわい」と、袋から白髭のじいさんが出てきた。背丈は三十センチよりない。どこかで見たことのある服装をしている。恵比寿様か。

「あ、あなた様は、ひょっとして...」

「ああ、わしか、わしは福の神じゃよ。あんたがたが、買ってくれたからには、願い事は何でも叶えよう」

奥さんは不気味に眺めていたが、強欲なほうで、

「ああ、そうだわ、あなた、年末ジャンボは当たっているかしら」

と、忘れていたのを思い出した。すると、福の神は、

「そんなのは、お安いご用で、見てごらんなさい」

早速、新聞で当選番号と照合したら、なんと、なんと三億円が当たっていた。「あなた、大変よ。嘘じゃないのよね。わたしを叩いて」

日頃、奥さんから叩かれても、叩き返すなどという大それたことができなかった幸典は、こんなチャンスはないと、思いっきり、日頃の恨みをこめて叩いた。

「あっ、痛っ、本当なのね」

それだけではなかった。

「あのう、田村さん、おられますか」と、元旦から建築会社の偉いさんが来た。

「ここが、都市計画のニュータウン用地に入りまして、一番重要な土地なので、どうですか、時価の二倍で買いたいと思いますが。建物はそのまま評価して買わせていただきますし、引っ越し費用、代換地もお安く斡旋いたします。そうですね、お宅の土地であれば、十億は堅いでしょう」

正月からそんな美味しい話が転がり込んできた。親父の代からの家で、築三十年。そろそろ立て替えかなと思っていた矢先だ。願ってもないことだった。

そこへ、息子が走ってきた。

「大変だよ、パパ、ぼくね、お年玉で、商店街のくじ引きやったら、家族で海外旅行というの当たったよ」

と、当選目録を手を持ってきていた。

それからの田村家は、やることなすことが大当たりだ。幸典は欲がないが、奥さんがすっかり

と載ってしまった。株で大儲けするわ、商品先物買いで当たるわ、土地転がしでも、安く買って高く売れた。短期で、資金が数十倍になり、部屋中が万札で溢れた。廊下から玄関まで、札束で歩くスペースもない。

「どうすんだよ、おまえ、こんなに金を集めて、もう沢山だよ」

その後も幸運は続いた。ピンポンと、玄関のチャイムが鳴ると、家族全員がどきりとする。

「パパ、また当選したって、賞品が送られてきたよ」

「またか、おまえ、もう、懸賞なんか出すなよ」

幸典は奥さんに注意していた。

「どうしてくれるんだ、こんなに」

玄関から外に、ゴルフバッグから羽根蒲団、車三台、パソコン五台、テレビ六台、自転車四台、食品いろいろ一年分、応接セットにバイク、スキー、絨毯に棺桶。足の踏み場もない。幸典は、福の神に頼んだ。

「お願いだ。普通の生活をさせてくれ。平凡でいいんだ。これ以上、お金はいらないんだ」そうして、泣きながら拝んだ。

ふくのかみはトイレットペーパーだけでいい。

第701話 行先のない切符

シクラメンのかほり

バカなことをしていた。時間がないというのに、ラジオで紅白なんか聞いていた。仕事が終わったのが九時。それから、社員食堂でテレビを見ている仲間を横目にばたばたと堺から大阪住吉の下宿へと戻った。

暮れに呉服売場の売上協力と、買わせられた着物を着ていた。着方が判らないで、角帯はパスし、三尺を締めた。帯の結び方をもう少し講義を受けておけばよかった。四畳半の部屋で、紅白がラジオから流れていた。録音機の用意はいいか。バッテリー込みで、肩から下げたデンスケは十キロはあった。重いものを着物を着て、局のアナウンサーのように集音マイクを手にしての初詣だ。録音マニアの二十四歳のわたしが、職場の仲間と伊勢へ初詣に行く約束をしていた。

市電で天王寺へと向かった。そこから乗り換えだ。ステレオヘッドホンでずっと歌を聴いていた。レコード大賞をとった「シクラメンのかほり」が流れていたとき、わたしは、ようやく近鉄の駅へと駆け込んでいた。自分で自分を怒っていた。どうして、ゆっくりとしていたのだ。時間をよく考えて行動しろ。

伊勢行の特急の出発時間まであと一分。切符を自販機で買った。草履だから走りにくい。まして、着物だから、大股で走るわけにはゆかない。階段も転びそうだ。帯が解けて、ずるずると引きずっていた。着物の裾がみっともなく開いていた。その格好で、出発のベルが鳴る、特急に飛び乗った。女子社員たちは、

「こっち、こっち」と手を振っていた。すさまじい格好であったろう。みんなの視線がわたしに集まっていた。零時丁度の初詣電車が、わたしが乗った途端にドアを閉じた。男たちは、まるでわたしと無関係であるように、わざと横を向いていた。

「北村君、帯、帯」と、女の子たちが笑っていた。恥ずかしかった。ヘッドホンで聴いていたラジオからは除夜の鐘が鳴っていた。

初詣のために、電車はどこも夜通し走っていた。着物を着てきたのはわたしだけだった。あとはラフな格好だが、きちんと寒くないように着込んできていた。

同じ職場の仲のいい男女が、十人ほどで、伊勢神宮へ行く電車に乗っていた。わたしは、早速、車内のものすごいお喋りから録音を始めた。職場は、関西だけでなく、九州、四国から働きにきている若い人が多かったので、言葉は様々で面白い。東北から来ていたわたしは珍しがられた。

その五人の女の子の中に友子がいた。わたしの妹と同じ名前なので最初から親しみがもてた。わたしよりひとつ上の姉さんだった。鹿児島おごじょで、性格が男まさりできつかった。可愛い顔をして、近づこうものなら、やわな男からはり倒された。そんなところが好きで、その前の年に、わたしは、その人に求婚した。勿論、一発で笑い飛ばされて、終わったように思ったが、周りの女子は、「あんたの押しが足らんの。女はもうひと押しを待っておるんやから」と、わたしが、たった一回の拒絶で、引いたのをだらしないと背中を押した。

「あんたが、引き留めんと、彼女、二月には国に帰るんよ」

友子は、会社を七年勤めて、年末に辞表を出していた。鹿児島に帰るというのだ。

そのことがあってからは、わたしたちは気まずい関係になっていた。どこかに遠慮があった。時折、ちらちらと恨みがましい視線をわたしに向けてよこすのは、どんな意味があったのだろうか。

電車は、まだ未明の伊勢に到着した。わたしは、着物で来たことに後悔し始めていた。こんなにも寒いものとはしらなかった。ひとりぶるぶる震えてみなにまたからかわれていた。

伊勢神宮は、参道がびっしりと初詣客でいっぱいだった。関西だけでなく中部からも押し掛けてきていた。

どこをどう歩いていたのか判らない。人に押されながら、自動的に流されていた。参拝が終わると、わたしたちは、特別に用意された栈敷席に上がりこんで、暖を取るため何か熱いもの、おでんなどと酒を貰った。栈敷と云っても、仮設なので外と同じだ。ストーブなんかきかない。

わたしは凍死しそうなくらいがたがたと震えていた。酒なんかいくら呑んでも、暖まるものじゃない。そこで、喫茶店を探した。どこも満員だった。ようやく、離れたところにぽつんとあった茶店をみつけて入った。すべての店が稼ぎ時なのでオールナイトでやっていた。ところが、コーヒーの値段が三倍だ。お祭り料金、深夜料金なのだろう。

ようやく、わたしは、体の震えを止めることができた。

「昔の人は寒かったんだろうな」

とわたしが云うと、いつも傍にいた友子は、

「自分だって、昔の人ちゃうの？」と、皮肉るから、

「そうだな、古本、古道具、骨董品が好きだからな。ついで、婚期の過ぎた女も好きだしな」

こっちも負けてはいなかった。妙な意地だけが二人にあった。

ようやく朝になった。空が紅をさしてきたとき、わたしたちはバスで二見浦まで行った。そこも正月にはうってつけの岩と岩の間に太い縄が張ってある有名な夫婦岩がある。夫婦岩の間から初日の出というシチュエーションには無理があるように思えた。絵葉書は合成写真なのだろう。日の出の方角が違う。

わたしたちは、そこで初日の出を見た。静かな海だった。

興玉神社でおみくじを買った。わたしは凶と出た。友子も凶だった。待ち人は来ない。結婚は破綻。仲良くそうだった。友子は木の枝におみくじを結んでいた。

「どうしても帰るのか」と、わたしが云おう云おうとしていたことをようやく云ったのだが、「うん、そう」と、友子は意外にも明るく答えた。なんのわだかまりもなく、あっさりと別れた。

「うちな、お別れにネクタイ作ったんよ。貰ってくれる？」

後で、友子から貰った手作りのネクタイは、バイアスがおかしく、腰もなく、少し曲がっていたが、シクラメンの柄で、何か匂いそうな爽やかさが漂っていた。

あれから、三十年近くが経っていた。わたしは、ネクタイのことを思い出して、探したが、どこかへ行ったようで見つからなかった。その代わりに、カセットテープは保管してあった。誰もカメラを持って行かなかったので、記念写真は残っていないが、時空を越えて、若い頃の声だけが、波の音と共に、再現されたとき、わたしは、いつまでも年取らない女の顔をそれに重ねていた。

第702話 申の惑星

光は一秒間に三十万キロのスピードで、それがわれわれの時間になっている。光速は一秒間で地球を七周り半する速さなのだ。人類は、時速十キロの人力車から、百キロの車を発明し、二百キロの鉄道から、五百キロのプロペラ飛行機、三千キロのジェット機、時速四万キロのロケットと、スピードに挑戦してきた。だが、時速十億キロの光速まではまだまだ到達するには程遠い。

未来は光速を超える乗り物を開発するに、新しい動力、燃料の研究にしのぎを削ってきていた。ただ、物理的な速度だけでは光速の壁を超えることはできない。時間を超えるためには、空間移動を瞬時に行える装置の発明が急がれた。光速を超えると、人類は時間を自由に操ることができる。

二千XX年。時間をワープするスペースシャトルが完成して、その試験飛行がなされていた。マック船長に、エドワード飛行士、それに日系二世のニック・ササダ飛行士の三人が乗り込んでいた。

飛行船は、加速して太陽系の外に出ていた。さらにブラックホールの吸収する引力を利用して、光速を超えた。すると、宇宙船の姿は消えていた。光速を超えたものは、肉眼で見ることではできない。

青森県百石町。八戸に近い小さな町である。その杜に火の玉が落下するのを見たものはいなかった。隕石が落下したものと思う天文マニアもいたが、正月早々の真夜中は、寝静まっていた。宇宙船は杜の中に墜落したのだ。緊急脱出用のパラシュートで、三人の飛行士は百石町の河原へとゆっくりと降りてきた。

「おい、ここは何という惑星なんだ」

船長がエドワードに訊いた。

「銀河系HARUKA州RINGODO区までは記録していたのですが、その先が衝撃で失神しましたので、位置は不確かです」

「そうか、ニック、現在時刻は判るか」

ニックは、まだ失神からすっかりと醒めていないように、呆然として答えた。

「はあ、二千五年まで過去へタイムワープしたのだけは判っていましたが、やはり、気を失って、定かではありません」

「ということは、ここは緑があり、酸素もある地球と似た環境の星なのだが、われわれの時代から五百年は遡ったようだ」

三人は、白々と夜が明けてゆく、雪野原を歩いていた。

「この惑星は実に地球と似ているようです」

ニックが、小型計器で空気の成分を測定していた。放射能や、人間に有害なガスはないようだ。

「水もあるし、雪も降る。それにこの樹木も、地球のものとそっくりだ」

船長も、惑星を調査しながら、驚いていた。宇宙船は、光速を超えて、銀河系の果てへと飛んだ。そこに奇跡の星があったのだ。

神社があった。申の絵に願い事が書かれて、沢山下げられていた。

「船長、見てください。これは猿の絵です」

また、調べると、大きなポスターが境内の掲示板に貼ってあった。そこにも、猿の絵が描かれてあった。みんな日本語は読めない。

「どうやらここは、神を祀る場所のようだ。しかも、その神と猿は関係があるらしい」

そこへ、中学生の一群がぞろぞろとやってきた。船長たちはさっと木立の陰に隠れた。

「あれは、人間の子供ではないか。似た年格好の少年たちだ。着ている服装は、まるで五十年前のものと同じだ」

中学生の一人が船長たちの姿を見つけた。

「ハロー」と、少年は声をかけた。近くに三沢市の米軍基地があり、この辺りに米軍の家族たちはよく買い物に来るから、少年たちは外人慣れしている。いつものように平然と声をかけた。

「船長、この少年たちは英語を話すようです」

危害を加えない、友好的な態度に安心して、三人は姿を現した。

「この猿の絵だが、どういう意味なのか」

と、エドワードが少年たちに訊いてみた。すると、みんな、自分たちが、申歳だと云った。「ぼくも申だ」「ぼくも申」と、口々に云うので、船長はようやく納得した。みんなは人間そっくりの姿をしているが、きっと猿なのだ。

「ここは、猿の惑星なのだ」

三人は、公園のようなところに出てきた。そこは、百石町の名所、いちよう公園だった。公園のシンボルに本物そっくりの自由の女神が建てられていたが、老朽化が激しく、作り替えることになっていた。それで、像は壊されて、その上半身だけが、雪の中に斜めに姿を見せていた。

「見ろ、あれは、自由の女神じゃないか。ここは、地球だったんだ」

「とうとう、やってしまったんだ。くそ」

二千四年の地球は、流行という物真似をし、朝三暮四の政策に騙されて、政治家は滑稽な猿回し。ここは、やはり猿の惑星なのだ。

第703話 初日の出

南総勝浦に綾小路家の別荘があった。大晦日に、一族が別荘に集まってきていた。海を見渡せる高台にプール付の豪邸だ。毎年、比較的温暖な勝浦で正月を過ごすために、年末年始はゆっくりと温泉付の別荘で過ごすというのが、昔からの習わしのようにになっていた。

銀行を経営する父と、華族出の母、その子会社を任されている長男、大学生の次男、そして女子大を出てから、お茶、お花と習い事をしている娘の眞美がいた。運転手とお手伝いさん二人も引き連れての保養だ。

今年は、それに眞美のフィアンセの高階コンツェルンの御曹司の高階雅人が同行していた。すでに、結婚の日取りは決まっていて、いまは、家族同様のつきあいまでしていた。

眞美は明日の元旦は着物を着るために、今朝は美容院に行ってめかしこんでいた。大晦日は、逆に胸の谷間と背中が見えるパーティドレスで決めていた。

ディナーが始まった。この別荘ではテレビはうるさいから消していた。その代わりにオラトリオなどの宗教音楽を流していた。この夜のために地下室のワイナリーからビンテージもの高価なワインが供された。

「雅人君は、結構呑むほうなのだろう」

父親はアペリティフもディジェスティフにも、いいコニャックなどを用意していた。ボトルを自慢するのも彼の趣味のひとつで、専らグルマンを自認していた。

「いいえ、食事のときぐらいです。外で呑むのは稀ですね」

だらしく酔うほど呑むのははしたないのだ。いつも気品よく、自分を崩すことなく毅然として呑まなければならない。

みんなの視線が自然と雅人に注がれる。雅人の母親は女優だった。母親に似て美しく整った顔

立ちをしていた。二世として芸能界からもお誘いがあったが、実業界のほうがどうやら好きなようで、青年実業家としても周囲から、その辣腕ぶりが買われていた。

「こんな、何も知らない子ですが、雅人さん、よろしく願いいたしますわ」

母親が、改めて雅人に頼んだ。

「とんでもございません。眞美は、いや、眞美さんは料理はお上手ですし、ピアノも天賦の才能がおあります。それに、ぼくには勿体ないくらい綺麗な人で……」

雅人は純情で、すぐに顔が赤くなる。

「まあ、どうもご馳走様でした」母親が云うと、全員が笑った。

雅人はゴルフはシングルで、クルーザーも所有する海の男という逞しい面もあり、スポーツ万能、それで名門の大学を卒業して、さらにエール大学にも留学していた。叔父は大臣経験の政治家で、親族には大学教授や、医者など家系は申し分のない血筋である。

静かな年越しであった。音楽と酒と料理と洒落た会話が合った。そうして、上品にディナーが終わる頃に、十二時の鐘が鳴った。年は新しい幕を開いた。すると、いままで静かにデザートを食べていた家族は、隠していたクラッカーを一斉に引いた。パンパンパンと、急に賑やかになった。音楽も、軽快なダンス音楽になり、雅人と眞美も踊っていた。

「ア・ハッピー・ニューイヤー」

この瞬間を待っていたというふうに、運転手もお手伝いさんまで一緒になって、新年のお祝いをしていた。父親は、シャンパンを景気よく何本も開けた。ポンポンと栓が飛ぶ。

これは欧米のやり方だ。夜通し、踊り、歌い騒ぐのだ。ただ、年寄りたちは、疲れて眠く、若い人にはとてもついてゆけない。二時過ぎにはベッドルームへと上がっていった。大学生の次男も気を利かせて自分の部屋へと帰ってゆく。広い部屋に、雅人と眞美だけとなった。

「どうも踊り疲れたね。君は、音感がいいから、踊りもうまい。どこで覚えたの？」

二人は疲れて、ソファに座り込んでいた。

「アメリカのお友達のところにおホームステイしたとき、覚えたわ」

と、学生時代の話をしよとしたら、何かおなかが張ってきた。ごろごろと鳴っているのだ。眞美は、その音が彼に聞かれるのではないかと、どぎまぎした。

(あら、何か変な食い合わせしたのかしら。調子がよくないわね)

それで、音楽でごまかそうとした。

「いいCDがあるのよ。チェロのヨーヨーマが二胡とデュオするシルクロードのイメージを歌ったのよ」

眞美は、わざとステレオのボリュームをあげて、おなかが鳴るのを聞こえないようにしていた。美人は、そんな音もたててはいけない。

「ずっと、ぼくの傍にいてくれるね。朝までぼくから離れないでね」

そうして、二人は新年のキスをした。電灯を暗くしていた。東の空が次第に明るくなってくる。朝が近いのだ。眞美は、額に油汗までかいていた。腰をもぞもぞさせていた。トイレに駆け込みたい。でも、雅人がきつく、眞美の腰を抱き寄せて離さない。

雅人は眞美に神聖なくらい美しさを求めていた。それが痛いくらい眞美には判る。美人だって

、トイレにも行くのに、雅人は美人はうんこもしないと信じていた。眞美はそう演じなければならなかった。眞美のおなかはますますぐるぐると鳴り続けた。

内心、叫び続けていた。（助けて、お願い）。もう窮地に追い込まれていた。絶体絶命だった。

「眞美、ぼくたちの新しい太陽がもうじき昇ってくるよ」

雅人は、眞美の体を抱き寄せたまま、海が見晴らせるベランダからテラスに出た。冷たい空気が二人の熱い体をさました。水平線からまさに朝日が顔を見せるところであった。そのとき、耐えきれなくなった眞美は、つい、「ぷー」と、やってしまった。同時に朝日が昇る。

「ああ、初屁の出だ」

雅人が云うと、眞美は顔を真っ赤にして俯いていた。我慢しきれずについでにちびったのだ。今年は「うん」がつく。

第704話 時代は変わったんです

祖父母とその孫はかたや大正生まれ、かたや平成生まれと、全く生活に対する考え方が違う。ゼネレーション・ギャップはありすぎた。三世代が暮らしている北村家では、毎日が、じいさんと孫のバトルが繰り広げられていた。

「朝ご飯を食べないで学校へ行くとは何事だ。食生活がなっていない」

と、毎日、首を傾げて怒るのだ。いつも間に入る父親の拓也は、同じことの繰り返しで、憤慨するじいさんに、何度も同じように云ってなだめた。

「全国の子供たちの半分以上が朝ご飯を食べないと新聞に出ていたよ。時代は変わったんだよ」

そうかと思うと、

「夜中に電灯が点いていたら、子供たちが起きて深夜のテレビ番組を見ているんだ。どうなっているんだ。子供は八時には寝たもんだ。全く、夜昼を取り違えとる。赤ん坊と同じだ」

じいさんがまた「考えられない」を連発していた。

「いまは、コンビニもスーパーも二十四時間営業で、夜も昼もないんですよ。夜食を食べるから、朝ご飯が胃がもたれて食べられない。夜中まで起きているから、ぎりぎりまで寝ている。それもあたりまえなんだ。時代が変わったんだよ」

「電気は点けっぱなし、水道は出しっぱなし」

じいさんはぶつくさ云いながら、孫の後ろをついて歩くように、チェックしていた。電気代の無駄という意識もない。

食事のスタイルも変わってきた。じいさんは苛々して孫の食べ方を見ていた。

「どうして、ご飯を食べないでおかずばかり食べるのだ。ご飯、おかず、ご飯おかずと食べるものだろう。栄養のバランスが悪い。これじゃ、米が余るわけだ」

「おやつばかり食べて、おなかがいっぱいだと？ それでご飯を食べないんだ。ばあさん、ポテ

トチップスとかやたら買ってくるんじゃない！」

孫が可愛いから、いつもおやつばかり買ってくるばあさんを、じいさんは注意していた。「糖分も油分も塩分も摂りすぎはよくないんだ。まして、育ち盛りの子供が、水代わりにペットボトルのジュースをがぶ呑みしているのは、よくない」

じいさんの老翁心は、毎日、テレビを見ていて、現代の食生活についての警告をあちこちでやっているから、自然頭に入っていた。

「いいですよ。そんな気にしないで。時代が変わったんだから」

「よく変わればいいが、悪く変わっているんだ。よくない。よくないよ」

じいさんは、新聞見ても、テレビを見ても憤慨することばかりだ。

「仕事のない若者から年金を徴収するとはなんだ。先に雇用促進をするべきじゃないか」

じいさんの矛先は家庭内から社会へも向けられる。

「年寄りから税金を搾り取る。自分たちの失策と、聖域を擁護しておきながら、弱いところから盗ろうとする。全く、何を考えているんだ、政府も」

「いちいち怒ると血圧が上がりますよ。時代が変わったんだから。気にしないで」

拓也は、世の中がおかしくなっているのは、政府だけでなく、国民にも問題があると思っていた。みんなでそうした政治を選んでいるから選んだ人は文句は云えない。

孫の夏海が化粧しているのも驚いていた。

「高校生の分際で化粧をするとはな。正月には、爪に黒豆を付けてと思って不思議だと眺めていたら、爪を黒く塗っているんだ。それに、何かネイルとかなんとか、絵を描いている」

「いいんですよ。いまや中学生も平気で化粧する時代だよ。そんな子供向けの化粧セットも売っているんだから。いちいち発憤していたらきりがいいよ。時代が変わったんだから」

それでもじいさんは納得がゆかない。

「いいことと、悪いことは時代に関係なくあるだろう。それも容認する世の中は間違っどる。子供たちが悪いんじゃない。携帯電話にしても、小学生から持たせる無神経な親が悪い、それを売って莫大な利益を出しているメーカーも悪い」

拓也もそう思うが、それが世の中の仕組みなのだ。利潤追求のためなら、子供がどうなろうが知ったことじゃない。規制することなく、野放しで、子供たちをどんどん悪くしている。

「この先の町内で放火があって、捕まえたら子供だったというじゃないか。どうなっているんだ」

また、じいさんのぶつくさが始まった。

「いいんですよ、そんな時代なんだから」

「毎日、毎日、怪しい電話がくる。孫の居場所を訊いてくるんだ。どちらさんですかと訊くと一方的に切ってしまいよる。それに、先生のような顔をして、教材を売りにくる、健康食品だ、リフォームだと？ バカにするな、ここは去年建てた新築だ。年寄り騙すセールスも毎日やってくる」

「おやじ、血圧上がるから、あまり興奮しないで。時代が変わったんだから」

と、ミサイルが上空を飛んでゆく。

「おお、あれは何だ？ どこの国のものだ」

じいさんは空を仰いでわなわなと震えていた。

「いいんですよ、時代が変わったんだから」

拓也は平然と笑っていた。今の世の中、何が起こっても驚くに足りない。

すぐ近くで爆弾が爆発した。

「おおおお、なななな、何が始まったんだ」

じいさんは口から泡を吹いて卒倒寸前だった。

「いいんですよ、時代が変わったんだから」